

Arishima, Takeo
Arishima Takeo zenshū



有島武郎全集

第二巻



ロンドン・ケンシングトン野球スケッチ

第二卷目次

有島武郎全集

第二卷

"Not till the sun excludes you, do I exclude you;
Not till the waters refuse to glisten for you, and the leaves to rustle for you, do my words refuse to glisten and rustle for you,"

—— Walt Whitman ——

或る女

一

新橋を渡る時、發車を知らせる二番目の鈴が、霧とまではいへない九月の朝の、煙つた空氣に包まれて聞こえて來た。葉子は平氣でそれを聞いたが、車夫は宙を飛んだ。而して車が、鶴屋といふ町の角の宿屋を曲つて、いつでも人馬の群がるあの共同井戸のあたりを駈けぬける時、停車場の入口の大戸を閉めようとする驛夫と爭ひながら、八分がた閉りかゝつた戸の所に突つ立つてこつちを見戍つてゐる青年の姿を見た。

「まあおそくなつて濟みませんでした事……まだ間に合ひますか知ら」

と葉子が云ひながら階段を昇ると、青年は粗末な麥稈帽子を一寸脱いで、默つたまゝ青い切符を渡した。

「おや何故一等になさらなかつたの。さうしないといけない譯があるから代へて下さいましな」

と云はうとしたけれども、火がつくばかりに驛夫がせき立てるので、葉子は默つたまゝ青年とならんで小刻みな足どりで、たつた一つだけ開いてゐる改札口へと急いだ。改札はこの二人の乘客を苦々しげに見やりながら、左手を延して待つてゐた。二人がてん〴〵に切符を出さうとする時、

「若奥樣、これをお忘れになりました」

と云ひながら、羽被の紺の香の高くするさつきの車夫が、薄い大柄なセルの膝掛を肩にかけたまゝ慌てたやうに追ひ駈けて來て、オリーヴ色の絹ハンケチに包んだ小さな物を渡さうとした。

「早く〳〵、早くしないと出つちまひますよ」改札が堪らなくなつて癇癪聲をふり立てた。

　青年の前で「若奥樣」と呼ばれたのと、改札ががみ〳〵怒鳴り立てたので、針のやうに鋭い神經はすぐ彼女をあまのじやくにした。葉子は今まで急ぎ氣味であつた步みをぴつたり止めてしまつて、落ち付いた顏付で、車夫の方に向きなほつた。

「さう御苦勞ね。家に歸つたらね、今日は歸りが遲くなるかも知れませんから、お孃さんたちだけで校友會にいらつしやいつてさう云つておくれ。それから橫濱の近江屋――西洋小間物屋の近江屋が來たら、今日こつちから出かけたからつて云ふやうにつてね」

　車夫はきよと〳〵と改札と葉子とをかたみがはりに見やりながら、自分が汽車にでも乘りおくれるやうに慌ててゐた。改札の顏は段々險しくなつて、あはや通路を閉めてしまはうとした時、葉子はする〳〵とその方に近よつて、

「どうも濟みませんでした事」

　といつて切符をさし出しながら、改札の眼の先きで花が咲いたやうに微笑んで見せた。改札は馬鹿になつたやうな顏付をしながら、それでもおめ〳〵と切符に孔を入れた。

　プラットフォームでは、驛員も見送人も、立つてゐる限りの人々は二人の方に眼を向けてゐた。それを全く氣付きもしないやうな物腰で、葉子は親しげに青年と肩を竝べて、しづ〳〵と步きながら、車夫の屆けた包物の中には何があるか中てゝみろとか、橫濱のやうに自分の心を牽く町はないとか、切符を一緒にしまつておいてくれろとか云つて、音樂者のやうにデリケートなその指先きで、わざとらしく幾度か青年の手に觸れる機會を求めた。列車の中からはある限りの顏が二人を見迎へ見送るので、青年が物慣れない處女のやうに羞かんで、而かも自分な

から自分を怒つてゐるのが葉子には面白く眺めやられた。

一番近い二等車の昇降口の所に立つてゐた車掌は右の手をポッケットに突つ込んで、靴の爪先きで待ち遠しさうに敷石を敲いてゐたが、葉子がデッキに足を踏み入れると、いきなり耳を劈くばかりに呼子を鳴らした。而して青年(青年は名を古藤といつた)が葉子に續いて飛び乘つた時には、機關車の應笛が前方で朝の町の賑やかなさゞめきを破つて響き渡つた。

葉子は四角なガラスを篏めた入口の繰戸を古藤が勢よく開けるのを待つて、中に這入らうとして、八分通りつまつた兩側の乘客に稻妻のやうに鋭く眼を走らしたが、左側の中央近く新聞を見入つた、瘦せた中年の男に視線がとまると、はつと立ちすくむ程驚いた。然しその驚きは瞬く暇もない中に、顏からも脚からも消え失せて、葉子は惡びれもせず、取りすましもせず、自信ある女優が喜劇の舞臺にでも現はれるやうに、輕い微笑を右の頰だけに浮べながら、古藤に續いて入口に近い右側の空席に腰を下ろすと、あでやかに青年を見返りながら、小指を何んとも云へない好い形に折り曲げた左手で、鬢の後毛をかき撫でる序に、地味に裝つて來た黑のリボンに觸つて見た。青年の前に座を取つてゐた四十三四の脂ぎつた商人體の男は、あたふたと立ち上つて自分の後ろのシエードを下ろして、折ふし横ざしに葉子に照りつける朝の光線を遮つた。

紺の飛白に書生下駄をつゝかけた青年に對して、素性が知れぬほど顏にも姿にも複雜な表情を湛へたこの女性の對照は、幼い少女の注意をすら牽かずにはおかなかつた。乘客一同の視線は綾をなして二人の上に亂れ飛んだ。葉子は自分が青年の不思議な對照になつてゐるといふ感じを快く迎へてゞもゐるやうに、青年に對して殊更親しげな態度を見せた。

品川を過ぎて短いトンネルを汽車が出ようとする時、葉子はきびしく自分を見据ゑる眼を眉のあたりに感じて

徐ろにその方を見かへつた。それは葉子が思つた通り、新聞に見入つてゐるかの痩せた男だつた。男の名は木部孤筇と云つた。葉子が車内に足を踏み入れた時、誰よりも先きに葉子に眼をつけたのはこの男であつたが、誰よりも先きに眼を外らしたのもこの男で、すぐ新聞を目八分にさし上げて、それに讀み入つて素知らぬふりをしたのに葉子は氣がついてゐた。而して葉子に對する乘客の好奇心が衰へ始めた頃になつて、彼は本氣に葉子を見詰め始めたのだ。葉子は豫めこの刹那に對する態度を決めてゐたから慌ても騷ぎもしなかつた。眼を鈴のやうに大きく張つて、親しい媚びの色を浮べながら、默つたまゝで輕く點頭かうと、少し肩と顔とをそつちにひねつて、心持ち上向き加減になつた時、稻妻のやうに彼女の心に響いたのは、男がその好意に應じて微笑みかはす樣子のないと云ふ事だつた。實際男の一文字眉は深くひそんで、その兩眼は一際鋭さを增して見えた。それを見て取ると葉子の心の中はかつとなつたが、笑みかまけた眸はそのまゝで、する／＼と男の顔を通り越して、左側の古藤の血氣のいゝ頰のあたりに落ちた。古藤は繰戶のガラス越しに、切割りの崖を眺めてつくねんとしてゐた。

「又何か考へていらつしやるのね」

葉子は痩せた木部にこれ見よがしと云ふ物腰で華やかに云つた。

古藤はあまりはずんだ葉子の聲にひかされて、まんじりとその顔を見守つた。その青年の單純な明らさまな心に、自分の笑顔の奥の苦い澁い色が見拔かれはしないかと、葉子は思はずたじろいだ程だつた。

「何んにも考へてゐやしないが、蔭になつた崖の色が、餘り綺麗だもんで……紫に見えるでせう。もう秋がゝつて來たんですよ」

青年は何も思つてゐはしなかつたのだ。

「本當にね」

葉子は單純に應じて、もう一度ちらつと木部を見た。瘦せた木部の眼は前と同じに鋭く輝いてゐた。葉子は正面に向き直ると共に、その男の眸の下で、悒鬱な險しい色を引きしめた口のあたりに漲らした。木部はそれを見て自分の態度を後悔すべき筈である。

二

葉子は木部が魂を打ちこんだ初戀の的だつた。それは丁度日清戰爭が終局を告げて、國民一般は誰れ彼れの差別なく、この戰爭に關係のあつた事柄や人物やに事實以上の好奇心をそゝられてゐた頃であつたが、木部は二十五といふ若い齡で、或る大新聞社の從軍記者になつて支那に渡り、月並みな通信文の多い中に、際立つて觀察の飛び離れた心力のゆらいだ文章を發表して、天才記者といふ名を博して目出度く凱旋したのであつた。その頃女流基督教徒の先覺者として、基督教婦人同盟の副會長をしてゐた葉子の母は、木部の屬してゐた新聞社の社長と親しい交際のあつた關係から、或る日その社の從軍記者を自宅に招いて慰勞の會食を催した。その席で、小柄で白皙で、詩吟の聲の悲壯な、感情の熱烈なこの少壯從軍記者は始めて葉子を見たのだつた。

葉子はその時十九だつたが、既に幾人もの男に戀をし向けられて、その圍みを手際よく繰りぬけながら、自分の若い心を樂しませて行くタクトは十分に持つてゐた。十五の時に、袴を紐で締める代りに尾錠で締める工夫をして、一時女學生界の流行を風靡したのも彼女である。その紅い唇を吸はして首席を占めたんだと、嚴格で通つてゐる米國人の老校長に、思ひもよらぬ浮名を負はせたのも彼女である。上野の音樂學校に這入つてヴァイオリンの稽古を始めてから二ケ月程の間にめき／＼上達して、教師や生徒の舌を捲かした時、ケーベル博士一人は澁い顏をした。而して或る日「お前の樂器は才で鳴るのだ。天才で鳴るのではない」と無愛想に云つて退けた。そ

れを聞くと「さうで御座いますか」と無造作に云ひながら、ヴァイオリンを窓の外に抛りなげて、そのまゝ學校を退學してしまつたのも彼女である。基督教婦人同盟の事業に奔走し、社會では男勝りのしつかり者といふ評判を取り、家内では趣味の高い而して意志の弱い良人を全く無視して振舞つたその母の最も深い隱れた弱點を、拇指と食指との間にちやんと押へて、一歩もひけを取らなかつたのも彼女である。葉子の眼には總ての人が、殊に男が底の底まで見すかせるやうだつた。葉子はそれまで多くの男を可なり近くまで潜り込ませて置いて、もう一歩といふ所で突つ放した。戀の始めにはいつでも女性が祭り上げられてゐて、或る機會を絶頂に男性が突然女性を踏み躪るといふ事を直覺のやうに知つてゐた葉子は、どの男に對しても、自分との關係の絶頂が何處にあるかを見ぬいてゐて、そこに來かゝると情容赦もなくその男を振り捨てゝしまつた。さうして捨てられた多くの男は、葉子を恨むよりも自分達の獸性を恥ぢるやうに見えた。而して彼等は等しく葉子を見誤つてゐた事を悔いるやうに見えた。何故といふと、彼等は一人として葉子に對して怨恨を抱いたり、憤怒を漏したりするものはなかつたから。而して少しひがんだ者達は自分の愚を認めるよりも葉子を年不相當にませた女と見る方が勝手だつたから。

　それは戀によろしい若葉の六月の或る夕方だつた。日本橋の釘店にある葉子の家には七八人の若い從軍記者がまだ戰塵の拔けきらないやうな風をして集まつて來た。十九でゐながら十七にも十六にも見れば見られるやうな華奢な可憐な姿をした葉子が、愼しみの中にも才走つた面影を見せて、二人の妹と共に給仕に立つた。而して強ひられるまゝに、ケーベル博士から罵られたヴァイオリンの一手も奏でたりした。木部の全靈はたゞ一目でこの美しい才氣の漲り溢れた葉子の容姿に吸ひ込まれてしまつた。葉子も不思議にこの小柄な青年に興味を感じた。而して運命は不思議な惡戲をするものだ。木部はその性格ばかりでなく、容貌――骨細な、顏の造作の整つた、天才風に蒼白い滑らかな皮膚の、よく見ると他の部分の纖麗な割合に下顎骨の發達した――まで何處か葉子のそれ

に似てゐたから、自意識の極度に强い葉子は、自分の姿を木部に見付け出したやうに思つて、一種の好奇心を挑發せられずにはゐなかつた。木部は燃え易い心に葉子を燒くやうにかき抱いて、葉子は又才走つた頭に木部の面影を輕く宿して、その一夜の饗宴はさりげなく終りを告げた。

木部の記者としての評判は破天荒といつてもよかつた。苟も文學を解するものは木部を知らないものはなかつた。人々は木部が成熟した思想を提げて世の中に出て來る時の華々しさを噂し合つた。殊に日清戰役といふ、その當時の日本にしては絶大な背景を背負つてゐるので、この年少記者は或る人々からは英雄の一人とさへして崇拜された。この木部が度々葉子の家を訪れるやうになつた。その感傷的な、同時に何處か大望に燃え立つたやうなこの靑年の活氣は、家中の人々の心を捕へないでは置かなかつた。殊に葉子の母が前から木部を知つてゐて、非常に有爲多望な靑年だと讃めそやしたり、公衆の前で自分の子とも弟ともつかぬ態度で木部をもてあつかつたりするのを見ると、葉子は胸の中でせゝら笑つた。而して心を許して木部に好意を見せ始めた。木部の熱意が見る見る抑へがたく募り出したのは勿論の事である。

かの六月の夜が過ぎてから程もなく木部と葉子とは戀といふ言葉で見られねばならぬやうな間柄になつてゐた。かう云ふ場合葉子がどれ程戀の場面を技巧化し藝術化するに巧みであつたかは云ふに及ばない。木部は寢ても起きても夢の中にあるやうに見えた。二十五といふその頃まで、熱心な信者で、淸敎徒風の誇りを唯一の立場としてゐた木部がこの初戀に於てどれ程眞劍になつてゐたかは想像する事が出來る。葉子は思ひもかけず木部の火のやうな情熱に燒かれようとする自分を見出す事が屢々だつた。

その中に二人の間柄はすぐ葉子の母に感づかれた。葉子に對して豫てから或る事では一種の敵意を持つてさへゐるやうに見えるその母が、この事件に對して嫉妬とも思はれる程嚴重な故障を持ち出したのは、不思議でない

と云ふべき境を通り越してゐた。世故に慣れ切つて、落ち付き拂つた中年の婦人が、心の底の動搖に刺戟されてたくらみ出すと見える殘虐な譎計は、年若い二人の急所をそろ〳〵と窺ひよつて、腸も通れと突き刺してくる。それを拂ひかねて木部が命限りに藻搔くのを見ると、葉子の心に純粹な同情と、男に對する無條件的な捨身な態度が生れ始めた。葉子は自分で造り出した自分の穽に他愛もなく醉ひ始めた。葉子はこんな眼もくらむやうな晴れ〳〵しいものを見た事がなかつた。女の本能が生れて始めて芽をふき始めた。而して解剖刀のやうな日頃の批判力は鉛のやうに鈍つてしまつた。葉子の母が暴力では及ばないのを悟つて、すかしつなだめつ、良人までを道具につかつたり、木部の尊信する牧師を方便にしたりして、あらん限りの智力を搾つた懷柔策も、何んの甲斐もなく、冷靜な思慮深い作戰計畫を根氣よく續ければ續ける程、葉子は木部を後ろにかばひながら、健氣にもか弱い女の手一つで戰つた。而して木部の全身全靈を爪の先き想ひの果てまで自分のものにしなければ、死んでも死ねない樣子が見えたので、母もとう〳〵我を折つた。而して五ケ月の恐ろしい試練の後に、兩親の立ち會はない小さな結婚の式が、秋の或る午後、木部の下宿の一間で執り行はれた。而して母に對する勝利の分捕品として、木部は葉子一人のものとなつた。

　木部はすぐ葉山に小さな隱れ家を見付け出して、二人は睦まじくそこに移り住む事になつた。葉子の戀は然しながらそろ〳〵と冷え始めるのに二週間以上を要しなかつた。彼女は競爭すべからぬ關係の競爭者に對して見事に勝利を得てしまつた。日清戰爭といふものゝ光も太陽が西に沈む度毎に減じて行つた。それ等はそれとして一番葉子を失望させたのは同棲後始めて男といふものゝ裏を返して見た事だつた。葉子を確實に占領したといふ意識に裏書きされた木部は、今までおくびにも葉子に見せなかつた女々しい弱點を露骨に現はし始めた。後ろから見た木部は葉子には取り所のない平凡な氣の弱い精力の足りない男に過ぎなかつた。筆一本握る事もせ

ずに朝から晩まで葉子に膠着し、感傷的な癖に恐ろしく我儘で、今日々々の生活にさへ事缺きながら、萬事を葉子の肩になげかけてそれが當然な事でもあるやうな鈍感なお坊ちやん染みた生活のしかたが葉子の鋭い神經をいら〳〵させ出した。始めの中は葉子もそれを木部の詩人らしい無邪氣さからだと思つて見た。而してせつせ〳〵と世話女房らしく切り廻す事に興味をつないで見た。然し心の底の恐ろしく物質的な葉子にどうしてこんな辛棒がいつまでも續かうぞ。結婚前までは葉子の方から迫つて見たにも係はらず、崇高と見えるまでに極端な潔癖屋だつた彼であつたのに、思ひもかけぬ貪婪な陋劣な情慾の持主で、而かもその欲求を貧弱な體質で表はさうとするのに出喰はすと、葉子は今まで自分でも氣が附かずにゐた自分を鏡で見せつけられたやうな不快を感ぜずにはゐられなかつた。夕食を濟ますと葉子はいつでも不滿と失望とでいら〳〵しながら夜を迎へねばならなかつた。木部の葉子に對する愛着が募れば募る程、葉子は一生が暗くなりまさるやうに思つた。かうして死ぬために生れて來たのではない筈だ。さう葉子はくさ〳〵しながら思ひ始めた。その心持が又木部に響いた。木部は段々監視の眼を以て葉子の一擧一動を注意するやうになつて來た。同棲してから半ケ月もたゝない中に、木部はやゝもすると高壓的に葉子の自由を束縛するやうな態度を取るやうになつた。木部の愛情は骨に沁みる程知り抜きながら、鈍つてゐた葉子の批判力は又磨きをかけられた。その鋭くなつた批判力で見ると、自分と似寄つた姿なり性格なりを木部に見出すといふ事は、自然が巧妙な皮肉をやつてゐるやうなものだつた。自分もあんな事を想ひ、あんな事を云ふのかと思ふと、葉子の自尊心は思ひ存分に傷けられた。

外の原因もある。然しこれだけで十分だつた。二人が一緒になつてから二ケ月目に、葉子は突然失踪して、父の親友で、所謂物事のよく解る高山といふ醫者の病室に閉ぢ籠らしてもらつて、三日ばかりは食ふ物も食はずに、淺ましくも男の爲めに眼のくらんだ自分の不覺を泣き悔んだ。木部が狂氣のやうになつて、やうやく葉子の隠れ

場所を見つけて會ひに來た時は、葉子は冷靜な態度でしら〳〵しく面會した。而して「あなたの將來のお爲めに屹度なりませんから」と何氣なげに云つて退けた。木部がその言葉に骨を刺すやうな諷刺を見出しかねてゐるのを見ると、葉子は白く揃つた美しい齒を見せて聲を出して笑つた。

葉子と木部との間柄はこんな他愛もない場面を區切りにしてはかなくも破れてしまつた。木部はあらんかぎりの手段を用ゐて、なだめたり、すかしたり、强迫までして見たが、總ては全く無益だつた。一旦木部から離れた葉子の心は、何者も觸れた事のない處女のそれのやうにさへ見えた。

それから普通の期間を過ぎて葉子は木部の子を分娩したが、固よりその事を木部に知らせなかつたばかりでなく、母にさへ或る他の男によつて生んだ子だと告白した。實際葉子はその後、母にその告白を信じさす程の生活を敢てしてゐたのだつた。然し母は眼敏くもその赤坊に木部の面影を探り出して、基督信徒にあるまじき惡意をこの憐れな赤坊に加へようとした。赤坊は女中部屋に運ばれたまゝ、祖母の膝には一度も乘らなかつた。意地の弱い葉子の父だけは孫の可愛さからそつと赤坊を葉子の乳母の家に引き取るやうにしてやつた。而してそのみじめな赤坊は乳母の手一つに育てられて定子といふ六歲の童女になつた。

その後葉子の父は死んだ。母も死んだ。木部は葉子と別れてから、狂瀾のやうな生活に身を任せた。衆議院議員の候補に立つても見たり、純文學に指を染めても見たり、旅僧のやうな放浪生活も送つたり、妻を持ち子を成し、酒に耽り、雜誌の發行も企てた。而してその總てに一々不滿を感ずるばかりだつた。而して葉子が久し振りで汽車の中で出遇つた今は、妻子を里に返してしまつて、或る由緒ある堂上華族の寄食者となつて、これと云つてする仕事もなく、胸の中だけには色々な空想を浮べたり消したりして、兎角回想に耽り易い日送りをしてゐる時だつた。

三

その木部の眼は執念くもつきまつはつた。然し葉子はそつちを見向かうともしなかつた。而して二等の切符でもかまはないから何故一等に乘らなかつたのだらう。かう云ふ事が屹度あると思つたからこそ、乘り込む時もさう云はうとしたのだのに、氣が利かないつちやないと思ふと、近頃になく起きぬけから冴え〴〵してゐた氣分が、沈みかけた秋の日のやうに陰つたり滅入つたりし出して、冷たい血がポンプにでもかけられたやうに腦の透間といふ透間をかたく閉ざした。たまらなくなつて向ひの窓から景色でも見ようとすると、そこにはシェードが下ろしてあつて、例の四十三四の男が厚い唇をゆるく開けたまゝで、馬鹿な顏をしながらまじ〳〵と葉子を見やつてゐた。葉子はむつとしてその男の額から鼻にかけたあたりを、遠慮もなく發矢と眼で鞭つた。商人は、本當に鞭たれた人が泣き出す前にするやうに、笑ふやうな、はにかんだやうな、不思議な顏のゆがめ方をして、さすがに顏を背けてしまつた。その意氣地のない樣子がまた葉子の心をいら〳〵させた。右に眼を移せば三四人先きに木部がゐた。その鋭い小さな眼は依然として葉子を見守つてゐた。葉子は震へを覺えるばかりに激昂した神經を兩手に集めて、その兩手を握り合せて膝の上のハンケチの包みを抑へながら、下駄の先きをぢつと見入つてしまつた。今は車内の人が申し合せて侮辱でもしてゐるやうに葉子には思へた。古藤が隣座にゐるのさへ、一種の苦痛だつた。その瞑想的な無邪氣な態度が、葉子の內部的經驗や苦悶と少しも緣が續いてゐないで、二人の間には金輪際理解が成り立ち得ないと思ふと、彼女は特別に毛色の變つた自分の境涯に、そつと窺ひ寄らうとする探偵をこの青年に見出すやうに思つて、その五分刈りにした地藏頭までが顧みるにも足りない木の屑か何んぞのやうに見えた。

瘦せた木部の小さな輝いた眼は、依然として葉子を見詰めてゐた。

何故木部はかほどまで自分を侮辱するのだらう。彼は今でも自分を女とあなどつてゐる。小ぽけな才力を今でも賴んでゐる。女よりも淺ましい熱情を鼻にかけて、今でも自分の運命に差出がましく立ち入らうとしてゐる。あの自信のない臆病な男に自分はさつき媚を見せようとしたのだ。而して彼は自分がこれ程まで誇りを捨てゝ與へようとした特別の好意を眦を反へして退けたのだ。

瘦せた木部の小さな眼は依然として葉子を見つめてゐた。

この時突然けたゝましい笑ひ聲が、何か熱心に話し合つてゐた二人の中年の紳士の口から起つた。その笑ひ聲と葉子と何んの關係もない事は葉子にも分り切つてゐた。然し彼女はそれを聞くと、もう慾にも我慢がし切れなくなつた。而して右の手を深々と帶の間にさし込んだまゝ立ち上りざま、

「汽車に醉つたんでせうかしらん、頭痛がするの」

と捨てるやうに古藤に云ひ殘して、いきなり繰戸を開けてデッキに出た。

大分高くなつた日の光がぱつと大森田圃に照り渡つて、海が笑ひながら光るのが、並木の向うに廣過ぎる位一どきに眼に這入るので、輕い眩暈をさへ覺える程だつた。鐵の手欄にすがつて振り向くと、古藤が續いて出て來たのを知つた。その顏には心配さうな驚きの色が明らさまに現はれてゐた。

「ひどく痛むんですか」

「えゝ可なりひどく」

と答へたが面倒だと思つて、

「いゝから這入つてゐて下さい。大袈裟に見えるといやですから……大丈夫危なかありませんとも……」

と云ひ足した。古藤は強ひてとめようとはしなかつた。而して、

「それぢや這入つてゐるが本當に危なう御座んすよ……用があつたら呼んで下さいよ」

とだけ云つて素直に這入つて行つた。

「Simpleton !」

葉子は心の中でかうつぶやくと、燒き捨てたやうに古藤の事なんぞは忘れてしまつて、手欄に臂をついたまゝ放心して、晩夏の景色をつゝむ引き締つた空氣に顔をなぶらした。木部の事も思はない。綠や藍や黄色の外、これと云つて輪廓のはつきりした自然の姿も眼に映らない。唯凉しい風が習々と鬢の毛をそよがして通るのを快いと思つてゐた。汽車は目まぐるしい程の快速力で走つてゐた。葉子の心は唯渾沌と暗く固まつた物の周りを飽きる事もなく幾度も〳〵左から右に、右から左に廻つてゐた。かうして葉子に取つては永い時間が過ぎ去つたと思はれる頃、突然頭の中を引つ掻きまはすやうな激しい音を立てゝ、汽車は六鄕川の鐵橋を渡り始めた。葉子は思はずぎよつとして夢からさめたやうに前を見ると、釣橋の鐵材が蜘手になつて上を下へと飛び跳るので、葉子は思はずデッキのパンネルに身を退いて、兩袖で顔を抑へて物を念じるやうにした。

さうやつて氣を靜めようと眼をつぶつてゐる中に、睫を通し袖を通して木部の顔と殊にその輝く小さな兩眼とがまざ〳〵と想像に浮び上つて來た。葉子の神經は磁石に吸ひ寄せられた砂鐵のやうに、堅くこの一つの幻像の上に集注して、車内にあつた時と同樣な緊張した恐ろしい狀態に返つた。停車場に近づいた汽車は段々と歩度をゆるめてゐた。田圃のこゝかしこに、俗惡な色で塗り立てた大きな廣告看板が連ねて建てゝあつた。葉子は袖を顔から放して、氣持の悪い幻像を拂ひのけるやうに、一つ〳〵その看板を見迎へ見送つてゐた。處々に火が燃えるやうにその看板は眼に映つて木部の姿はまたおぼろになつて行つた。その看板の一つに、長い黑髮を下げた姫

が經卷を持つてゐるのがあつた。その胸に書かれた「中將湯」といふ文字を、何氣なしに一字づゝ讀み下すと、彼女は突然私生兒の定子の事を思ひ出した。而してその父なる木部の姿は、かゝる亂雜な聯想の中心となつて、又まざ／＼と燒きつくやうに現はれ出た。

その現はれ出た木部の顏を、謂はゞ心の中の眼で見つめてゐる中に、段々とその鼻の下から鬚が消え失せて行つて、輝く眸の色は優しい肉感的な潤みを持ち出して來た。汽車は徐々に進行をゆるめてゐた。稍ゝ荒れ始めた三十男の皮膚の光澤は、神經的な青年の蒼白い膚の色となつて、黑く光つた軟かい頭の毛が際立つて白い額を撫でゝゐる。それさへがはつきり見え始めた。列車は既に川崎停車場のプラットフォームに這入つて來た。葉子の頭の中では、汽車が止り切る前に仕事をし遂さねばならぬといふ風に、今見たばかりの木部の姿がどん／＼若やいで行つた。而して列車が動かなくなつた時、葉子はその人の傍にでもゐるやうに恍惚とした顏付で、思はず識らず左手を上げて――小指をやさしく折り曲げて――軟かい鬢の後れ毛をかき上げてゐた。これは葉子が人の注意を牽かうとする時にはいつでもする姿態である。

この時、繰戸がけたゝましく開いたと思ふと、中から二三人の乘客がどや／＼と現はれ出て來た。

而かもその最後から、涼しい色合のインバネスを羽織つた木部が續くのを感付いて、葉子の心臟は思はずはつと處女の血を盛つたやうに時めいた。木部が葉子の前まで來てすれ／＼にその側を通り拔けようとした時、二人の眼はもう一度しみ／＼と出遇つた。木部の眼は好意を込めた微笑に浸されて、葉子の出やうによつては、直ぐにも物を云ひ出しさうに唇さへ震へてゐた。葉子も今まで續けてゐた回想の惰力に引かされて、思はず微笑みかけたのであつたが、その瞬間燕返しに、見も知りもせぬ路傍の人に與へるやうな、冷刻な驕慢な光をその眸から射出したので、木部の微笑は哀れにも枝を離れた枯葉のやうに、二人の間を空しくひらめいて消えてしまつた。

葉子は木部のあわて方を見ると、車内で彼から受けた侮辱に可なり小氣味よく酬い得たといふ誇りを感じて、胸の中がやゝすが〳〵しくなつた。木部は瘦せたその右肩を癖のやうに怒らしながら、急ぎ足に濶歩して改札口の所に近づいたが、切符を懷中から出す爲めに立ち止つた時、深い悲しみの色を眉の間に漲らしながら、振り返つてぢつと葉子の橫顏に眼を注いだ。葉子はそれを知りながら固より侮蔑の一瞥をも與へなかつた。

木部が改札口を出て姿が隱れようとした時、今度は葉子の眼がぢつとその後姿を逐ひかけた。木部が見えなくなつた後も、葉子の視線はそこを離れようとはしなかつた。而してその眼には淋しく淚がたまつてゐた。

「又會ふ事があるだらうか」

葉子はそゞろに不思議な悲哀を覺えながら心の中でさう云つてゐたのだつた。

四

列車が川崎驛を發すると、葉子はまた手欄に倚りかゝりながら木部の事を色々と思ひめぐらした。稍ゝ色づいた田圃の先きに松並木が見えて、その間から低く海の光る、平凡な五十三次風な景色が、電柱で句讀を打ちながら、空洞のやうな葉子の眼の前で閉ぢたり開いたりした。赤蜻蛉も飛びかはす時節で、その群れが、燧石から打ち出される火花のやうに、赤い印象を眼の底に殘して亂れあつた。何時見ても新開地じみて見える神奈川を過ぎて、汽車が橫濱の停車場に近づいた頃には、八時を過ぎた太陽の光が、紅葉坂の櫻並木を黃色く見せる程に暑く照らしてゐた。

煤煙で眞黑にすゝけた煉瓦壁の蔭に汽車が停ると、中から一番先きに出て來たのは、右手にかのオリーヴ色の包物を持つた古藤だつた。葉子はパラソルを杖に弱々しくデッキを降りて、古藤に助けられながら改札口を出た

が、ゆる／＼歩いてゐる間に乘客は先きを越してしまつて、二人は一番あとになつてゐた。客を取りおくれた十四五人の停車場附きの車夫が、待合部屋の前にかたまりながら、やつれて見える葉子に眼をつけて何かと噂し合ふのが二人の耳にも這入つた。「むすめ」「らしやめん」といふやうな言葉さへそのはしたない言葉の中には交つてゐた。開港場のがさつな卑しい調子は、すぐ葉子の神經にびり／＼と感じて來た。

何しろ葉子は早く落ち付く所を見付け出したかつた。古藤は停車場の前方の川添ひにある休憩所まで走つて行つて見たが、歸つて來るとぶり／＼して、驛夫あがりらしい茶店の主人は古藤の書生つぽ姿をいかにも馬鹿にしたやうな斷り方をしたといつた。二人は仕方なくうるさく附き纏はる車夫を追ひ拂ひながら、潮の香の漂つた濁つた小さな運河を渡つて、或る狹い穢い町の中程にある一軒の小さな旅人宿に這入つて行つた。橫濱といふ所には似もつかぬやうな古風な外構へで、美濃紙のくすぶり返つた置行燈には太い筆付で相模屋と書いてあつた。葉子は何んとなくその行燈に興味を牽かれてしまつてゐた。惡戯好きなその心は、嘉永頃の浦賀にでもあればありさうなこの旅籠屋に足を休めるのを恐ろしく面白く思つた。店にしやがんで、番頭と何か話してゐるあばずれたやうな女中までが眼に留つた。而して葉子が體よく物を言はうとしてゐると、古藤がいきなり取りかまはない調子で、

「何處か靜かな部屋に案內して下さい」

と無愛想に先きを越してしまつた。

「へい／＼、どうぞこちらへ」

女中は二人をまじ／＼と見やりながら、客の前もかまはず、番頭と眼を見合せて、蔑んだらしい笑ひを漏らして案內に立つた。

ぎしぎしと板ぎしみのする眞黑な狹い階子段を上つて、西に突き當つた六疊程の狹い部屋に案內して、突つ立つたまゝで荒つぽく二人を不思議さうに女中は見比べるのだつた。油じみた襟元を思ひ出させるやうな、西に出窓のある薄汚い部屋の中を女中をひつくるめて睨み廻しながら古藤は、

「外部よりひどい……何處か他所にしませうか」

と葉子を見返つた。葉子はそれには耳も假さずに、思慮深い貴女のやうな物腰で女中の方に向いて云つた。

「隣室も明いてゐますか……さう。夜までは何處も明いてゐる……さう。お前さんがこゝの世話をしておいで？……なら餘の部屋も序に見せておもらひしませうか知らん」

女中はもう葉子には輕蔑の色は見せなかつた。而して心得顏に次ぎの部屋との間の襖を開ける間に、葉子は手早く大きな銀貨を紙に包んで、

「少し加減が悪いし、又色々お世話になるだらうから」

と云ひながら、それを女中に渡した。而してずつと並んだ五つの部屋を一つ一つ見て廻つて、掛軸、花瓶、團扇さし、小屛風、机と云ふやうなものを、自分の好みに任せてあてがはれた部屋のとすつかり取りかへて、隅から隅まで綺麗に掃除をさせた。而して古藤を正座に据ゑて小ざつぱりした座布團に坐ると、につこり微笑みながら、

「是れなら半日位我慢が出來ませう」

と云つた。

「僕はどんな所でも平氣なんですがね」

古藤はかう答へて、葉子の微笑を追ひながら安心したらしく、

「氣分はもうなほりましたね」

と附け加へた。

と葉子は何げなく微笑を續けようとしたが、その瞬間につと思ひ返して眉をひそめた。葉子には假病を續ける必要があつたのをつひ忘れようとしたのだつた。それで、

「えゝ」

「ですけれどもまだこんななんですの。こら動悸が」

と云ひながら、地味な風通の單衣物の中にかくれた華やかな襦袢の袖をひらめかして、右手を力なげに前に出した。而してそれと同時に呼吸をぐつとつめて、心臓と覺しいあたりに烈しく力をこめた。古藤はすき通るやうに白い手頸を暫く撫で廻してゐたが、脈所に探りあてると急に驚いて眼を見張つた。

「如何したんです、え、ひどく不規則ぢやありませんか……痛むのは頭ばかりですか」

「いゝえお腹も痛みはじめたんですの」

「どんな風に」

「ぎゆつと錐でゞももむやうに……よくこれがあるんで困つてしまふんですのよ」

古藤は靜かに葉子の手を離して、大きな眼で深々と葉子をみつめた。

「醫者を呼ばなくつても我慢が出來ますか」

葉子は苦しげに微笑んで見せた。

「あなたゞつたら屹度出來ないでせうよ。……慣れつこですから堪へて見ますわ。その代りあなた永田さん……永田さん、ね、郵船會社の支店長の…あすこに行つて船の切符の事を相談して來ていたゞけないでせうか。御

迷惑ですわね、それでもそんな事まで御厭ひしちやあ……宜う御座んす、私、車でそろ〳〵行きますから」

古藤は、女といふものはこれ程の健康の變調をよくもかうまで我慢をするものだと云ふやうな顔をして、勿論自分が行つて見ると云ひ張つた。

實はその日、葉子は身のまはりの小道具や化粧品を調へかた〴〵、米國行きの船の切符を貰ふ爲めに古藤を連れてこゝに來たのだつた。葉子はその頃既に米國にゐる或る若い學士と許嫁の間柄になつてゐた。新橋で車夫が若奥樣と呼んだのも、この事が出入りのものゝ間に公然と知れわたつてゐたからの事だつた。

それは葉子が私生子を設けてから暫く後の事だつた。或る冬の夜、葉子の母の親佐が何かの用でその良人の書齋に行かうと階子段を昇りかけると、上から小間使がまつしぐらに駈け下りて來て、危く親佐に打つ突からうとしてその側をすりぬけながら、何か意味の分らない事を早口に云つて走り去つた。その島田髷や帶の亂れた後姿が、嘲弄の言葉のやうに眼を打つと、親佐は唇を嚙みしめたが、足音だけはしとやかに階子段を上つて、いつもに似ず書齋の戸の前に立ち止つて、しはぶきを一つして、それから規則正しく間をおいて三度戸をノックした。

から云ふ事があつてから五日とたゝぬ中に、葉子の家庭卽ち早月家は砂の上の塔のやうに脆くも崩れてしまつた。親佐は殊に冷靜な底氣味惡い態度で夫婦の別居を主張した。而して日頃の柔和に似ず、傷ついた牡牛のやうに元通りの生活を恢復しようとひしめく良人や、中に這入つて色々云ひなさうとした親類達の言葉を、きつぱりと却けてしまつて、良人を釘店のだゞつ廣い住宅にたつた一人殘したまゝ、葉子ともに三人の娘を連れて、親佐は仙臺に立ち退いてしまつた。木部の友人等が葉子の不人情を怒つて、木部のとめるのも聽かずに、社會から葬つてしまへとひしめいてゐるのを葉子は聞き知つてゐたから、普段ならば一も二もなく父を庇つて母に楯をつくべき所を、素直に母のする通りになつて、葉子は母と共に仙臺に埋もれに行つた。母は母で、自分の家庭から葉

子のやうな娘の出た事を、出來るだけ世間に知られまいとした。女子教育とか、家庭の薫陶とかいふ事を折ある毎に口にしてゐた親佐は、その言葉に對して虚僞と云ふ利子を拂はねばならなかつた。一方を揉み消す爲めには一方にどんと火の手を擧げる必要がある。早月母子が東京を去ると間もなく、或る新聞は早月ドクトルの女性に關するふしだらを書き立てゝ、それにつけての親佐の苦心と貞操とを吹聽した序に、親佐が東京を去るやうになつたのは、熱烈な信仰から來る義憤と、愛兒を父の惡感化から救はうとする母らしい努力に基くものだ。その爲めに彼女は基督教婦人同盟の副會長といふ顯要な位置さへ投げ棄てたのだと書き添へた。

　仙臺に於ける早月親佐は暫くの間は深く沈默を守つてゐたが、見る〳〵周圍に人を集めて華々しく活動をし始めた。その客間は若い信者や、慈善家や、藝術家達のサロンとなつて、そこからリバイバルや、慈善市や、音樂會といふやうなものが形を取つて生れ出た。殊に親佐が仙臺支部長として働き出した基督教婦人同盟の運動は、その當時野火のやうな勢で全國に擴がり始めた赤十字社の勢力にもをさ〳〵劣らない程の盛況を呈した。知事令夫人も、名だゝる素封家の奧さん達もその集會には列席した。而して三ケ年の月日は早月親佐を仙臺には無くてはならぬ名物の一つにしてしまつた。性質が母親と何處か似過ぎてゐる爲めか、似たやうに見えて一調子違つてゐる爲めか、それとも自分を愼しむ爲めであつたか、はたの人には判らなかつたが、兎に角葉子はそんな華かな氣圍氣に包まれながら、不思議な程沈默を守つて、碌々晴れの座などには姿を現はさないでゐた。それにも拘らず親佐の客間に吸ひ寄せられる若い人々の多數は葉子に吸ひ寄せられてゐるのだつた。葉子の控目なしをらしい樣子がいやが上にも人の噂を引く種となつて、葉子といふ名は、多才で、情緒の細やかな、美しい薄命兒を誰にでも思ひ起させた。彼女の立ちすぐれた眉目形は花柳の人達をさへ羨しがらせた。而して色々な風聞が、清教徒風に質素な早月の侘住居の周圍を霞のやうに取り捲き始めた。

突然小さな仙臺市は雷にでも打たれたやうに或る朝の新聞記事に注意を向けた。それはその新聞の商賣敵である或る新聞の社主であり主筆である某が、親佐と葉子との二人に同時に慇懃を通じてゐるといふ、全紙に亙つた不倫極まる記事だつた。誰も意外なやうな顏をしながら心の中ではそれを信じようとした。

この日髮の毛の濃い、口の大きい、色白な一人の青年を乘せた人力車が、仙臺の町中を忙しく駈け廻つたのを注意した人は恐らくなかつたらうが、その青年は名を木村といつて、日頃から快活な活動好きな人として知られた男で、その熱心な奔走の結果、翌日の新聞紙の廣告欄には、二段抜きで、知事令夫人以下十四五名の貴婦人の連名で、早月親佐の寃罪が雪がれる事になつた。この稀有な大袈裟な廣告が又小さな仙臺の市中をどよめき渡らした。然し木村の熱心も口辯も葉子の名を廣告の中に入れる事は出來なかつた。

こんな騷ぎが持ち上つてから早月親佐の仙臺に於ける今までの聲望は急に無くなつてしまつた。その頃丁度東京に居殘つてゐた早月が病氣に罹つて藥に親しむ身となつたので、それをしほに親佐は子供を連れて仙臺を切り上げる事になつた。

木村はその後すぐ早月母子を追つて東京に出て來た。而して毎日入りびたるやうに早月家に出入して、殊に親佐の氣に入るやうになつた。親佐が病氣になつて危篤に陷つた時、木村は一生の願ひとして葉子との結婚を申し出た。親佐はやはり母だつた。死期を前に控へて、一番氣にせずにゐられないものは、葉子の將來だつた。木村ならばあの我儘な、男を男とも思はぬ葉子に仕へるやうにして行く事が出來ると思つた。而して基督教婦人同盟の會長をしてゐる五十川女史に後事を託して死んだ。この五十川女史のまあ〳〵と云ふやうな不思議な曖昧な切盛りで、木村は、何處か不確實ではあるが、兎も角葉子を妻とし得る保障を握つたのだつた。

五

郵船會社の永田は夕方でなければ會社から退けまいと云ふので、葉子は宿屋に西洋物店のものを呼んで、必要な買物をする事になつた。古藤はそんなら其處らをほツつき歩いて來ると云つて、例の麥稈帽子を帽子掛から取つて立ち上つた。葉子は思ひ出したやうに肩越しに振り返つて、

「あなた先刻パラソルは骨が五本のがいゝと仰有つてね」

と云つた。古藤は冷淡な調子で、

「さういつたやうでしたね」

と答へながら、何か他の事でも考へてゐるらしかつた。

「まあそんなにとぼけて……何故五本のがお好き？」

「僕が好きと云ふんぢやないけれども、あなたは何んでも人と違つたものが好きなんだと思つたんですよ」

「何處までも人をおからかひなさる……ひどい事……行つていらつしやいまし」

と情を迎へるやうに云つて向き直つてしまつた。古藤が縁側に出ると又突然呼びとめた。障子にはつきり立姿をうつしたまゝ、

「何んです」

と云つて古藤は立ち戻る樣子がなかつた。葉子は悪戯者らしい笑ひを口のあたりに浮べてゐた。

「あなたは木村と學校が同じでいらしつたのね」

「さうですよ、級は木村の……木村君の方が二つも上でしたがね」

「あなたはあの人を如何お思ひになつて」

丸で少女のやうな無邪氣な調子だつた。古藤は微笑んだらしい語氣で、

「そんな事はもうあなたの方が委しい筈ぢやありませんか……心のいゝ活動家ですよ」

「あなたは？」

葉子はぽんと高飛車に出た。而してにやりとしながらがつくりと顏を上向きにはねて、床の間の一蝶のひどい僞物を見やつてゐた。古藤が咄嗟の返事に窮して、少しむつとした樣子で答へ澁つてゐるのを見て取ると、葉子は今度は聲の調子を落して、如何にも賴りないといふ風に、

「日盛りは暑いから何處ぞでお休みなさいましね。……なるたけ早く歸つて來て下さいまし。もしかして、病氣でも惡くなると、こんな所で心細う御座んすから……よくつて」

古藤は何か平凡な返事をして、縁板を踏みならしながら出て行つてしまつた。

朝の中だけからつと破つたやうに晴れ渡つてゐた空は、午後から曇り始めて、眞白な雲が太陽の面を撫でゝ通る度每に暑氣は薄れて、空一面が灰色にかき曇る頃には、膚寒く思ふほどに初秋の氣候は激變してゐた。時雨らしく照つたり降つたりしてゐた雨の脚も、やがてじめ〳〵と降り續いて、煮しめたやうな穢い部屋の中は、殊更濕が強く來るやうに思へた。葉子は居留地の方にある外國人相手の洋服屋や小間物屋などを呼び寄せて、思ひ切つた贅澤な買物をした。買物をして見ると葉子は自分の財布のすぐ貧しくなつて行くのを怖れないではゐられなかつた。葉子の父は日本橋では一かどの門戶を張つた醫師で、收入も相當にはあつたけれども、理財の道に全く暗いのと、妻の親佐が婦人同盟の事業にばかり奔走してゐて、その並々ならぬ才能を、少しも家の事に用ゐなかつた爲め、その死後には借金こそ殘れ、遺產と云つては憐れな程しかなかつた。葉子は二人の妹を抱へながら

この苦しい境遇を切り拔けて來た。それは葉子であればこそし遂せて來たやうなものだつた。誰にも貧乏らしい氣色は露ほども見せないでゐながら、葉子は始終貨幣一枚々々の重さを計つて支拂ひするやうな注意をしてゐた。それだのに眼の前に異國情調の豐かな贅澤品を見ると、彼女の貪慾は甘いものを見た子供のやうになつて、前後も忘れて懷中にありつたけの買物をしてしまつたのだ。使をやつて正金銀行で換へた金貨は今鑄出されたやうな光を放つて懷中の底にころがつてゐたが、それを如何する事も出來なかつた。葉子の心は急に暗くなつた。戸外の天氣もその心持に合槌を打つやうに見えた。古藤はうまく永田から切符を貰ふ事が出來るだらうか。葉子自身が行き得ない程葉子に對して反感を持つてゐる永田が、あの單純なタクトのない古藤をどんな風に扱つたらう。永田の口から古藤は色々な葉子の過去を聞かされはしなかつたらうか。そんな事を思ふと葉子は悒鬱が生み出す反抗的な氣分になつて、湯をわかさせて入浴し、寢床をしかせ、最上等の三鞭酒を取りよせて、したゝかそれを飲むと前後も知らず眠つてしまつた。

　夜になつたら泊客があるかも知れないと女中の云つた五つの部屋は矢張り空のまゝで、日がとつぷりと暮れてしまつた。女中がランプを持つて來た物音に葉子はやうやく眼を覺まして、仰向いたまゝ、煤けた天井に描かれたランプの丸い光輪をぼんやりと眺めてゐた。

　その時じたツ／＼と濡れた足で階子段を昇つて來る古藤の足音が聞こえた。古藤は何かに腹を立てゝゐるらしい足どりでづか／＼と緣側を傳つて來たが、ふと立ち止ると大きな聲で帳場の方に怒鳴つた。

「早く雨戸を閉めないか……病人がゐるんぢやないか。……」

「この寒いのに何んだつてあなたも言ひ付けないんです」

今度はかう葉子に云ひながら、建付けの惡い障子を開けていきなり中に這入らうとしたが、その瞬間にはつと

驚いたやうな顏をして立ちすくんでしまつた。

香水や、化粧品や、酒の香をごつちやにした暖かいいきれがいきなり古藤に迫つたらしかつた。ランプがほの暗いので、部屋の隅々までは見えないが、光りの照り渡る限りは、雜多に置きならべられたなまめかしい女の服地や、帽子や、造花や、鳥の羽根や、小道具などで、足の踏みたて場もないまでになつてゐた。その一方に床の間を背にして、郡內の布團の上に搔卷を脇の下から羽織つた、今起きかへつたばかりの葉子が、派手な長襦袢一つで、東歐羅巴の嬪宮の人のやうに、片臂をついたまゝ橫になつてゐた。而して入浴と酒とでほんのりほてつた顏を仰向けて、大きな眼を夢のやうに見開いてぢつと古藤を見た。その枕許には三鞭酒の瓶が本式に氷の中につけてあつて、飮みさしのコップや、華奢な紙入れや、かのオリーヴ色の包物を、しごきの赤が火の蛇のやうに取り卷いて、その端が指輪の二つ箝つた大理石のやうな葉子の手に弄ばれてゐた。

「お遲う御座んした事。お待たされなすつたんでせう。……さ、お這入りなさいまし。そんなもの足でどもどけて頂戴、散らかしちまつて」

この音樂のやうなすべ〳〵した調子の聲を聞くと、古藤は始めて illusion から目覺めた風で這入つて來た。葉子は左手を二の腕がのぞき出るまでずつと延して、そこにあるものを一拂ひに拂ひのけると、花壇の土を掘り起したやうに汚い疊が半疊ばかり現はれ出た。古藤は自分の帽子を部屋の隅にぶちなげて置いて、拂ひ殘された細形の金鎖を片付けると、どつかと胡坐をかいて正面から葉子を見すゑながら、

「行つて來ました。船の切符もたしかに受け取つて來ました」

と云つて懷ろの中を探りにかゝつた。葉子は一寸改まつて、

「ほんとに難有う御座いました」

と頭を下げたが、忽ち rougish な眼付をして、
「まあそんな事は何れあとで、ね、……何しろお寒かつたでせう、さ、」
と云ひながら飲み殘りの酒を盆の上に無造作に捨てゝ、二三度左手をふつて滴を切つてから、コップを古藤にさしつけた。古藤の眼は何かに激昂してゐるやうに輝いてゐた。
「僕は飲みません」
「おや何故」
「飲みたくないから飲まないんです」
この角ばつた返答は男を手もなくあやし慣れてゐる葉子にも意外だつた。それでその後の言葉を如何繼がうかと、一寸躊つて古藤の顏を見やつてゐると、古藤はたゝみかけて口を切つた。
「永田つてのはあれはあなたの知人ですか。思ひ切つて尊大な人間ですね。君のやうな人間から金を受け取る理由はないが、兎に角あづかつて置いて、いづれ直接あなたに手紙で云つてあげるから、早く歸れつて云ふんです、頭から。失敬な奴だ」
葉子はこの言葉に乘じて氣まづい心持を變へようと思つた。而して驀地に何か云ひ出さうとすると、古藤はおつかぶせるやうに言葉を續けて、
「あなたは一體まだ腹が痛むんですか」
ときつぱり云つて堅く坐り直した。然しその時に葉子の陣立ては既に出來上つてゐた。始めの微笑みをそのままに、
「えゝ、少しはよくなりましてよ」

と云つた。古藤は短兵急に、

「それにしても中々元氣ですね」

とたゝみかけた。

「それはお藥にこれを少しいたゞいたからでせうよ」

と三鞭酒を指した。

正面からはね返されて古藤は默つてしまつて。然し葉子も勢に乘つて追ひ迫るやうな事はしなかつた。矢頃を計つてから語氣をかへてずつと下手になつて、

「妙にお思ひになつたでせうね。惡う御座いましたね。こんな所に來てゐて、お酒なんか飲むのは本當に惡いと思つたんですけれども、氣分がふさいで來ると、私にはこれより外にお藥はないんですもの。先刻のやうに苦しくなつて來ると私はいつでも湯を熱めにして浴つてから、お酒を飲み過ぎる位飲んで寢るんですの。さうすると」

と云つて、一寸云ひよどんで見せて、

「十分か二十分ぐつすり寢入るんですのよ……痛みも何も忘れてしまつていゝ心持に……。それから急に頭がかつと痛んで來ますの。そしてそれと一緒に氣が滅入り出して、もう〳〵如何していゝか分らなくなつて、子供のやうに泣きつゞけると、その中に又眠たくなつて一寢入りしますのよ。さうするとその後はいくらかさつぱりするんです。……父や母が死んでしまつてから、頼みもしないのに親類達から餘計な世話をやかれたり、他人力なんぞを的にせずに妹二人を育てゝ行かなければならないと思つたりすると、私のやうな、他人樣と違つて風變りな、……そら、五本の骨でせう」

と淋しく笑つた。

「それですものどうぞ堪忍して頂戴。思ひきり泣きたい時でも知らん顏をして笑つて通してゐると、こんな私見たいな氣まぐれ者になるんです。氣まぐれでもしなければ生きて行けなくなるんです。男の方にはこの心持はお分りにはならないかも知れないけれども」

かう云つてる中に葉子は、ふと木部との戀が果敢なく破れた時の、我れにもなく身に沁み渡る淋しみや、死ぬまで日蔭者であらねばならぬ私生子の定子の事や、計らずも今日まのあたり見た木部の、心からやつれた面影などを思ひ起した。而して更に、母の死んだ夜、日頃は見向きもしなかつた親類達が寄り集まつて來て、早月家には毛の末程も同情のない心で、早月家の善後策について、さも重大らしく勝手氣儘な事を親切ごかしにしやべり散らすのを聞かされた時、如何にでもなれと云ふ氣になつて、暴れ抜いた事が、自分にさへ悲しい思ひ出となつて、葉子の頭の中を矢のやうに早くひらめき通つた。葉子の顏には人に讓つてはゐない自信の色が現はれ始めた。

「母の初七日の時もね、私はたて續けにビールを何杯飲みましたらう。何んでも瓶がそこいらにごろ／＼轉がりました。そして仕舞ひには何が何んだか夢中になつて、宅に出入するお醫者さんの膝を枕に、泣寢入りに寢入つて、夜中をあなた二時間の餘も寢續けてしまひましたわ。親類の人達はそれを見ると一人歸り二人歸りして相談も何も目茶苦茶になつたんですつて。母の寫眞を前に置いといて、私はそんな事までする人間ですの。お呆れになつたでせうね。いやな奴でせう。あなたのやうな方から御覽になつたら、さぞいやな氣がなさいませうねえ」

「えゝ」

と古藤は眼も動かさずにぶつきらぼうに答へた。

「それでもあなた」

と葉子は切なさゝうに半ば起き上つて、

「外面だけで人のする事を何んとか仰有るのは少し殘酷ですわ。……いゝえね」

と古藤の何か云ひ出さうとするのを遮つて、今度はきつと坐り直つた。

「私は泣き言を云つて他人樣にも泣いて頂かうなんて、そんな事はこれんばかりも思やしませんとも……なるなら何處かに大砲のやうな大きな力の强い人がゐて、その人が眞劒に怒つて、葉子のやうな人非人はかうしてやるぞと云つて、私を押へつけて心臟でも頭でも摧けて飛んでしまふ程折檻をしてくれたらと思ふんですの。どの人もどの人もちやんと自分を忘れないで、いゝ加減に怒つたり、いゝ加減に泣いたりしてゐるんですからねえ。何んだつてかう生溫いんでせう。

義一さん（葉子が古藤をかう名で呼んだのはこの時が始めてだつた）あなたが今朝、心の正直な何んとかだと仰有つた木村に緣づくやうになつたのも、その晩の事です。五十川が親類中に贊成さして、晴れがましくも私を皆んなの前に引き出しておいて、罪人にでも云ふやうに宣告してしまつたのです。私が一口でも云はうとすれば、五十川の云ふには母の遺言ですつて。死人に口なし。ほんとに木村はあなたが仰有つたやうな人間ね。仙臺であんな事があつたでせう。あの時知事の奧さんはじめ母の方は何んとかしようが娘の方は保證が出來ないと仰有つたんですとさ」

云ひ知らぬ侮蔑の色が葉子の顏に漲つた。

「ところが木村は自分の考へを押し通しもしないで、おめ〳〵と新聞には母だけの名を出してあの廣告をしたんですの。

母だけがいゝ人になれば誰だつて私を……さうでせう。その擧句に木村はしやあ〳〵と私を妻にしたいんですつて、義一さん、男つてそれでいゝものなんですか。まあね物の譬へがですわ。それとも言葉では何んと云つて

も無駄だから、實行的に私の潔白を立てゝやらうとでも云ふんでせうか」
さう云つて激昂し切つた葉子は嚙み捨てるやうに甲高くほゝゝと笑つた。
「一體私は一寸した事で好き嫌ひの出來る惡い質なんですからね。と云つて私はあなたのやうな生一本でもありませんのよ。
母の遺言だから木村と夫婦になれ。早く身を堅めて地道に暮さなければ母の名譽を汚す事になる。妹だつて裸かでお嫁入りも出來まいといはれゝば、私立派に木村の妻になつて御覽に入れます。その代り木村が少しつらいだけ。
こんな事をあなたの前で云つては嘸氣を惡るくなさるでせうが、眞直なあなただと思ひますから、私もその氣で何もかも打ち明けて申してしまひますのよ。私の性質や境遇はよく御存じですわね。こんな性質でこんな境遇にゐる私がかう考へるのに若し間違ひがあつたら、どうか遠慮なく仰有つて下さい。
あゝいやだつた事。義一さん、私こんな事はおくびにも出さずに今の今までしつかり胸にしまつて我慢してゐたのですけれども、今日は如何したんでせう、何んだか遠い旅にでも出たやうな淋しい氣になつてしまつて……」
弓弦を切つて放したやうに言葉を消して葉子は俯向いてしまつた。日は何時の間にかとつぷりと暮れてゐた。じめ〳〵と降り續く秋雨に濕つた夜風が細々と通つて來て、濕氣でたるんだ障子紙をそつと煽つて通つた。古藤は葉子の顏を見るのを避けるやうに、そこらに散らばつた服地や帽子などを眺め廻して、何んと返答をしていゝのか、云ふべき事は腹にあるけれども言葉には現はせない風だつた。部屋は息苦しい程しいんとなつた。
葉子は自分の言葉から、その時の有樣から、妙にやる瀨ない淋しい氣分になつてゐた。强い男の手で思ひ存分兩肩でも抱きすくめて欲しいやうな賴りなさを感じた。而して橫腹に深々と手をやつて、さし込む痛みを堪へる

らしい姿をしてゐた。古藤はやゝ暫くしてから何か決心したらしくまともに葉子を見ようとしたが、葉子の切なさゝうな哀れな樣子を見ると、驚いた顏付をして我れ知らず葉子の方にゐざり寄つた。葉子はすかさず豹のやうに滑らかに身を起して逸早くもしつかり古藤のさし出す手を握つてゐた。而して、

「義一さん」

と震へを帶びて云つた聲は存分に涙に濡れてゐるやうに響いた。古藤は聲をわなゝかして、

「木村はそんな人間ぢやありませんよ」

とだけ云つて默つてしまつた。

駄目だつたと葉子はその途端に思つた。葉子の心持と古藤の心持とはちぐはぐになつてゐるのだ。何んといふ響きの惡い心だらうと葉子はそれをさげすんだ。然し樣子にはそんな心持は少しも見せないで、頭から肩へかけてのなよやかな線を風の前のてつせんの蔓のやうに震はせながら、二三度深々とうなづいて見せた。

暫くしてから葉子は顏を上げたが、涙は少しも眼に溜つてはゐなかつた。而していとしい弟でもいたはるやうに布團から立ち上りざま、

「濟みませんでした事、義一さん、あなた御飯はまだでしたのね」

と云ひながら、腹の痛むのを堪へるやうな姿で古藤の前を通りぬけた。湯でほんのりと赤らんだ素足に古藤の眼が鋭くちらつと宿つたのを感じながら、障子を細目に開けて手をならした。

葉子はその晩不思議に惡魔じみた誘惑を古藤に感じた。童貞で無經驗で戀の戲れには何んの面白味もなさゝうな古藤、木村に對してと云はず、友達に對して堅苦しい義務觀念の强い古藤、さう云ふ男に對して葉子は今まで何んの興味をも感じなかつたばかりか、働きのない沒情漢と見限つて、口先きばかりで人間並みのあしらひをして

ゐたのだ。然しその晩葉子はこの少年のやうな心を持つて肉の熟した古藤に罪を犯させて見たくつて堪らなくなつた。一夜の中に木村とは顏も合はせる事の出來ない人間にして見たくつて堪らなくなつた。古藤の童貞を破る手を他の女に任せるのが妬ましくて堪らなくなつた。幾枚も皮を被つた古藤の心のどん底に隱れてゐる欲念を葉子の蠱惑力で掘り起して見たくつて堪らなくなつた。

氣取られない範圍で葉子があらん限りの謎を與へたにも拘らず、古藤が堅くなつてしまつてそれに應ずる氣色のないのを見ると葉子は益〻いらだつた。而してその晩は腹が痛んで如何しても東京に歸れないから、いやでも横濱に宿つてくれと云ひ出した。然し古藤は頑として聽かなかつた。而して自分で出かけて行つて、品もあらう事か眞赤な毛布を一枚買つて歸つて來た。葉子はとう〳〵我を折つて最終列車で東京に歸る事にした。

一等の客車には二人の外に乘客はなかつた。葉子はふとした出來心から古藤を陥れようとした目論見に失敗して、自分の征服力に對するかすかな失望と、存分の不快とを感じてゐた。客車の中では又色々と話さうといつて置きながら、汽車が動き出すとすぐ、古藤の膝の側で毛布にくるまつたまゝ新橋まで寢通してしまつた。

新橋に着いてから古藤が船の切符を葉子に渡して人力車を二臺傭つて、その一つに乘ると、葉子はそれにかけよつて懷中から取り出した紙入れを古藤の膝に放り出して、左の鬢をやさしくかき上げながら、

「今日のお立替へをどうぞその中から……明日は屹度入らしつて下さいましね……お待ち申しますことよ……左樣なら」

と云つて自分ももう一つの車に乘つた。葉子の紙入れの中には正金銀行から受け取つた五十圓金貨八枚が這入つてゐる。而して葉子は古藤がそれをくづして立替を取る氣遣ひのないのを承知してゐた。

六

葉子が米國に出發する九月二十五日は明日に迫つた。二百二十日の荒れそこねたその年の天氣は、何時(いつ)までたつても定まらないで、氣違日和(きちがひびより)とも云ふべき照り降りの亂雜な空合(そらあひ)が續き通してゐた。

葉子はその朝暗い中に床を離れて、藏の蔭になつた自分の小部屋に這入つて、前々から片付けかけてゐた衣類の始末をし始めた。模様や縞の派手なのは片端からほどいて丸めて、次ぎの妹の愛子にやるようにと片隅に重ねたが、その中には十三になる末の妹の貞世(さだよ)に着せても似合はしさうな大柄なものもあつた。葉子は手早くそれをえり分けて見た。而して今度は船に持ち込む四季の晴衣(はれぎ)を、床の間の前にある眞黑に古ぼけたトランクの處まで持つて行つて、蓋(ふた)を開けようとしたが、不圖その蓋の眞中に書いてあるY・Kといふ白文字を見て忙しく手を控へた。是れは昨日古藤が油繪具と畫筆とを持つて來て書いてくれたので、乾き切らないテレビンの香がまだかすかに殘つてゐた。古藤は、葉子・早月の頭文字Y・Sと書いてくれと折入つて葉子の頼んだのを笑ひながら退けて、葉子・木村の頭文字Y・Kと書く前に、S・Kとある字をナイフの先きで丁寧に刮つたのだつた。S・Kとは木村貞一のイニシャルで、そのトランクは木村の父が歐米を漫遊した時使つたものなのだ。その古い色を見ると、木村の父の太腹(ふとつぱら)な鋭い性格と、波瀾の多い生涯の極印(ごくいん)がすわつてゐるやうに見えた。木村はそれを葉子の用にと殘して行つたのだつた。木村の面影はふと葉子の頭の中を拔けて通つた。空想で木村を描く事は、木村と顏を見合はす時程の厭はしい思ひを葉子に起させなかつた。黑い髮の毛をぴつたりと綺麗に分けて、恰(さ)かしい中高の細面(ほそおもて)に、健康らしい薔薇色を帶びた容貌や、甘過ぎる位人情に溺れ易い殉情的な性格は、葉子に一種のなつかしさをさへ感ぜしめた。然し實際顏と顏とを向ひ合せると、二人は妙に會話さへはずまなくなるのだつた。その恰(さ)かしいの

が厭やだつた。柔和なのが氣に障つた。殉情的な辯に恐ろしく勘定高いのがたまらなかつた。青年らしく土俵際まで踏み込んで事業を樂しむといふ父に似た性格さへ小ましやくれて見えた。殊に東京生れと云つてもいゝ位都慣れた言葉や身のこなしの間に、ふと東北の鄕土の香を嗅ぎ出した時には噛んで捨てたいやうな反感に襲はれた。葉子の心は今、おぼろげな回想から、實際膝つき合せた時に厭やだと思つた印象に移つて行つた。而して手に持つた晴衣をトランクに入れるのを控へてしまつた。長くなり始めた夜もその頃には漸く白み始めて、蠟燭の黃色い焰が光の亡骸のやうに、ゆるぎもせずに點つてゐた。夜の間靜まつてゐた西風が思ひ出したやうに障子にぶつかつて、釘店の狹い通りを、河岸で仕出しをした若い者が、大きな掛聲でがら／＼と車を牽きながら通るのが聞こえ出した。葉子は今日一日に眼まぐるしい程ある澤山の用事を一寸胸の中で數へて見て、大急ぎで其處らを片付けて、錠を下ろすものには錠を下ろし切つて、雨戸を一枚繰つて、そこから射し込む光で大きな手文庫からぎつしりつまつた男文字の手紙を引き出すと風呂敷に包み込んだ。而してそれを抱へて、手燭を吹き消しながら部屋を出ようとすると、廊下に叔母が突つ立つてゐた。

「もう起きたんですね……片付いたかい」

と挨拶してまた何か云ひたさうであつた。兩親を失つてからこの叔母夫婦と、六歲になる白痴の一人息子とが移つて來て同居する事になつたのだ。葉子の母が、どこか重々しくつて男々しい風采をしてゐたのに引きかへ、叔母は髮の毛の薄い、何處までも貧相に見える女だつた。葉子の眼はその帶しろ裸かな、肉の薄い胸のあたりをちらつとかすめた。

「おやお早う御座います……あらかた片付きました」

と云つてそのまゝ二階に行かうとすると、叔母は爪に一杯垢のたまつた兩手をもや／＼と胸の所でふりながら、

遮るやうに立ちはだかつて、

「あのお前さんが片付ける時にと思つてゐたんだがね、明日のお見送りに私は着て行くものが無いんだよ。お母さんのもので間に合ふのは無いだらうか知らん。明日だけ借りれば後はちやんと始末をして置くんだから一寸見ておくれでないか」

　葉子は又かと思つた。働きのない良人に連れ添つて、十五年の間丸帶一つ買つて貰へなかつた叔母の訓練のない弱い性格が、かうさもしくなるのを憐れまないでもなかつたが、物怯ぢしながら、それでゐて、慾にかゝると圖々しい、人の隙ばかりつけねらふ仕打ちを見ると、蟲唾が走る程憎かつた。然しこんな思ひをするのも今日だけだと思つて部屋の中に案内した。叔母は空々しく氣の毒だとか濟まないとか云ひ續けながら錠を下ろした簞笥を一々開けさせて、色々と勝手に好みを云つた末に、りうとした一揃へを借る事にして、それから葉子の衣類までを兎や角云ひながら去りがてにいぢくり廻した。臺所からは、味噌汁の香がして、白痴の子がだらしなく泣き續ける聲と、叔父が叔母を呼び立てる聲とが、すが〳〵しい朝の空氣を濁すやうに聞こえて來た。葉子は叔母にいゝ加減な返事をしながらその聲に耳を傾けてゐた。而して早月家の最後の離散といふ事をしみ〴〵と感じたのであつた。電話は或る銀行の重役をしてゐる親類がいゝ加減な口實を作つて只持つて行つてしまつた。父の書齋道具や骨董品は藏書と一緒に羅賣をされたが、賣上げ代はとう〳〵葉子の手には這入らなかつた。住居は住居で、葉子の洋行後には、兩親の死後何かに盡力したといふ親類の某が、二束三文で讓り受ける事に親族會議で決つてしまつた。少しばかりある株券と地所とは愛子と貞世との教育費に充てる名義で某々が保管する事になつた。そんな勝手放題なまねをされるのを葉子は見向きもしないで默つてゐた。若し葉子が素直な女だつたら、却つて食ひ殘しといふ程の遺産はあてがはれてゐたに違ひない。然し親族會議では葉子を手におへない女だとして、他所に

嫁入つて行くのをいゝ事に、遺産の事には一切關係させない相談をした位は葉子は疾うに感付いてゐた。自分の財產となればなるべきものを一部分だけあてがはれて、默つて引つ込んでゐる葉子ではなかつた。それかと云つて長女ではあるが、女の身として全財產に對する要求をする事の無益なのも知つてゐた。で「犬にやる積りでゐよう」と臍を堅めてかゝつたのだつた。今、後に殘つたものは何がある。切り廻しよく見かけを派手にしてゐる割合に、不足勝ちな三人の姉妹の衣類諸道具が少しばかりあるだけだ。それを叔母は容赦もなくそこまで切り込んで來てゐるのだ。白紙のやうなはかない寂しさと、「裸かになるなら綺麗さつぱり裸かになつて見せよう」といふ火のやうな反抗心とが、無茶苦茶に葉子の胸を冷やしたり燒いたりした。葉子はこんな心持になつて、先程の手紙の包を抱へて立ち上りながら、俯向いて手ざはりのいゝ絹物を撫で廻してゐる叔母を見下ろした。

「それぢや私まだ外に用がありますしゝますから錠を下ろさずにおきますよ。御緩り御覽なさいまし。そこにかためてあるのは私が持つて行くんですし、こゝにあるのは愛と貞にやるのですから別になすつておいて下さい」

と云ひ捨てゝ、ずん〳〵部屋を出た。往來には砂埃が立つらしく風が吹き始めてゐた。

二階に上つて見ると、父の書齋であつた十六疊の隣りの六疊に、愛子と貞世とが抱き合つて眠つてゐた。葉子は自分の寢床を手早くたゝみながら愛子を呼び起した。愛子は驚いたやうに大きな美しい眼を開くと半分夢中で飛び起きた。葉子はいきなり嚴重な調子で、

「あなたは明日から私の代りをしないぢやならないんですよ。朝寢坊なんぞしてゐて如何するの。あなたがぐづぐづしてゐると貞ちやんが可哀さうですよ。早く身じまひをして下のお掃除でもなさいまし」

と睨みつけた。愛子は羊のやうに柔和な眼を眩ゆさうにして、姉を竊み見ながら、衣物を着かへて下に降りて行つた。葉子は何んとなく性の合はないこの妹が、階子段を降り切つたのを聞きすまして、そつと貞世の方に近づ

いた。面ざしの葉子によく似た十三の少女は、汗じみた顔には下げ髪がねばり附いて、頰は熱でもあるやうに上氣してゐる。それを見ると葉子は骨肉のいとしさに思はず微笑ませられて、その寢床にゐざり寄つて、その童女を羽がひに輕く抱きすくめた。而してしみ／＼とその寢顔に眺め入つた。貞世の輕い呼吸は輕く葉子の胸に傳はつて來た。その呼吸が一つ傳はる度に、葉子の心は妙に滅入つて行つた。同じ胎を借りてこの世に生れ出た二人の胸には、ひたと共鳴する不思議な響が潛んでゐた。葉子は吸ひ取られるやうにその響に心を集めてゐたが、果ては寂しい、唯寂しい涙がほろ／＼と留度なく流れ出るのだつた。

一家の離散を知らぬ顔で、女の身空を唯獨り米國の果てまでさすらつて行くのを葉子は格別何んとも思つてゐなかつた。振分髮の時分から、飽くまで意地の强い眼はしの利く性質を思ふまゝに增長さして、ぐん／＼と世の中を傍眼もふらず押し通して二十五になつた今、こんな時にふと過去を振り返つて見ると、いつの間にかあたり前の女の生活をすりぬけて、たつた一人見も知らぬ野末に立つてゐるやうな思ひをせずにはゐられなかつた。女學校や音樂學校で、葉子の强い個性に引きつけられて、理想の人でゞもあるやうに近寄つて來た少女達は、葉子におど／＼しい同性の戀を捧げながら、葉子に inspire されて、我れ知らず大膽な奔放な振舞ひをするやうになつた。その頃「國民文學」や「文學界」に旗擧げをして、新しい思想運動を興さうとした血氣なロマンティックな青年達に、歌の心を授けた女の多くは、大方葉子から血脈を引いた少女等であつた。倫理學者や、敎育家や、家庭の主權者などもその頃から猜疑の眼を見張つて少女國を監視し出した。葉子の多感な心は、自分でも知らない革命的とも云ふべき衝動の爲に的もなく搖ぎ始めた。葉子は他人を笑ひながら、而して自分をさげすみながら、眞暗な大きな力に引きずられて、不思議な道に自覺なく迷ひ入つて、仕舞には驀地に走り出した。誰も葉子の行く道のしるべをする人もなく、他の正しい道を敎へてくれる人もなかつた。偶ゝ大きな聲で呼び留める人がある

かと思へば、裏表の見えすいたぺてんにかけて、昔のまゝの女であらせようとするものばかりだつた。葉子はその頃から何處か外國に生れてゐればよかつたと思ふやうになつた。あの自由らしく見える女の生活、男と立ち竝んで自分を立てゝ行く事の出來る女の生活……古い良心が自分の心をさいなむたびに、葉子は外國人の良心といふものを見たく思つた。葉子は心の奧底でひそかに藝者を羨みもした。日本で女が女らしく生きてゐるのは藝者だけではないかとさへ思つた。こんな心持で年を取つて行く間に葉子は勿論何度も蹉いてころんだ。而して獨りで膝の塵を拂はなければならなかつた。こんな生活を續けて二十五になつた今、ふと今まで歩いて來た道を振り返つて見ると、一所に葉子と走つてゐた少女達は、疾うの昔に尋常な女になり濟してゐて、小さく見える程遠くの方から憐れむやうな、さげすむやうな顏付をして、葉子の姿を眺めてゐた。葉子はもと來た道に引き返す事はもう出來なかつた。出來たところで引き返さうとする氣は微塵もなかつた。「勝手にするがいゝ」さう思つて葉子は又譯もなく不思議な暗い力に引つ張られた。かう云ふはめになつた今、米國にゐようが日本にゐようが少しばかりの財産があらうが無からうが、そんな事は些細な話だつた。境遇でも變つたら何か起るかも知れない。元のまゝかも知れない。勝手になれ。葉子を心の底から動かしさうなものは一つも身近には見當らなかつた。

然し一つあつた。葉子の涙は唯譯もなくほろ〳〵と流れた。貞世は何事も知らずに罪なく眠りつゞけてゐた。同じ胎を借りてこの世に生れ出た二人の胸には、ひたと共鳴する不思議な響が潜んでゐた。葉子は吸ひ取られるやうにその響に心を集めてゐたが、この子もやがては自分が通つて來たやうな道を歩くのかと思ふと、自分を憐れむとも妹を憐れむとも知れない切ない心に先き立たれて、思はずぎゆつと貞世を抱きしめながら物を云はうとした。然し何を云ひ得ようぞ。喉もふさがつてしまつてゐた。貞世は抱きしめられたので始めて大きく眼を開いた。而して暫くの間、涙に濡れた姉の顏をまじ〳〵と眺めてゐたが、やがて默つたまゝ小さい袖でその涙を拭ひ

始めた。葉子の涙は新しく湧き返つた。貞世は痛ましさうに姉の涙を拭ひつゞけた。而して仕舞にはその袖を自分の顔に押しあてゝ何か云ひ〳〵しやくり上げながら泣き出してしまつた。

七

葉子はその朝横濱の郵船會社の永田から手紙を受け取つた。漢學者らしい風格の、上手な字で唐紙牋に書かれた文句には、自分は故早月氏には格別の交誼を受けてゐたが、貴女に對しても同様の交際を續ける必要のないのを遺憾に思ふ。明晩(卽ちその夜)のお招きにも出席しかねる、と劍もほろゝに書き連ねて、追伸に、先日貴女から一言の紹介もなく訪問して來た素性の知れぬ青年の持參した金は要らないからお返しする。良人の定まつた女の行動は、申すまでもないが愼しむが上にも愼しむべきものだと私共は聞き及んでゐる。ときつぱり書いて、その金額だけの爲替が同封してあつた。葉子が古藤を連れて横濱に行つたのも、假病をつかつて宿屋に引き籠つたのも、實を云ふと船商賣をする人には珍らしい嚴格なこの永田に會ふ面倒を避ける爲めだつた。葉子は小さく舌打ちして、爲替ごと手紙を引き裂かうとしたが、ふと思ひ返して、丹念に墨をすりおろして一字々々考へて書いたやうな手紙だけずた〳〵に破いて屑籠に突つ込んだ。

葉子は地味な晴行衣に寢衣を着かへて二階を降りた。朝食は喰べる氣がなかつた。妹達の顔を見るのも氣づまりだつた。

姉妹三人のゐる二階の、隅から隅まできちんと小綺麗に片付いてゐるのに引きかへて、叔母一家の住まふ下座敷は變に油ぎつて汚れてゐた。白痴の兒が赤坊同様なので、東の縁に干してある襁褓から立つ鹽臭い匂ひや、疊の上に踏みにじられたまゝこびりついてゐる飯粒などが、すぐ葉子の神經をいら〳〵させた。玄關に出て見ると、

そこには叔父が、襟の眞黑に汗じんだ白い飛白を薄寒さうに着て、白痴の子を膝の上に乘せながら、朝つぱらから柿をむいてあてがつてゐた。その柿の皮があか〳〵と紙屑とごつたになつて敷石の上に散つてゐた。葉子は叔父に一寸挨拶をして草履を探しながら、

「愛さん一寸こゝにお出で。玄關が御覽、あんなに汚れてゐるからね、綺麗に掃除しておいて頂戴よ。——今夜はお客樣もあるんだのに……」

と駈けて來た愛子にわざとつんけんいふと、叔父は神經の遠くの方であてこすられたのを感じた風で、

「おゝ、それはわしがしたんぢやて、わしが掃除しとく。構うて下さるな、おいお俊——お俊といふに、何しとるぞい」

とのろまらしく呼び立てた。帶しろ裸かの叔母がそこにやつて來て、又くだらぬ口論をするのだと思ふと、泥の中でいがみ合ふ豚か何んぞを思ひ出して、葉子は踵の塵を拂はんばかりにそこ〳〵家を出た。細い釘店の往來は場所柄だけに門並綺麗に掃除されて、打水をした上を、氣のきいた風體の男女が忙しさうに往き來してゐた。葉子は拔け毛の丸めたのや、卷煙草の袋の千切れたのが散らばつて箒の目一つない自分の家の前を眼をつぶつて驅けぬけたい程の思ひをして、ついそばの日本銀行に這入つてありつたけの預金を引き出した。而してその前の車屋で始終乘りつけの一番立派な人力車を仕立てさして、その足で買物に出かけた。妹達に買ひ殘しておくべき衣服地や、外國人向きの土産品や、新しいどつしりしたトランクなどを買ひ入れると、引き出した金はいくらも殘つてはゐなかつた。而して午後の日がやゝ傾きかゝつた頃、大塚窪町に住む内田といふ母の友人を訪れた。内田は熱心な基督敎の傳道者として、憎む人からは蛇蝎のやうに憎まれるし、好きな人からは豫言者のやうに崇拜されてゐる天才肌の人だつた。葉子は五つ六つの頃、母に連れられて、よく其の家に出入りしたが、人を恐れずにぐんぐ

ん思つた事を可愛らしい口許から云ひ出す葉子の様子が、始終人から距てをおかれつけた内田を喜ばしたので、葉子が來ると内田は、何か心のこだはつた時でも機嫌を直して、窄つた眉根を少しは開きながら、「又子猿が來たな」といつて、そのつや〳〵したおかつぱを撫で廻したりなぞした。その中母が基督教婦人同盟の事業に關係して、忽ちの中にその牛耳を握り、外國宣教師だとか、貴婦人だとかを引き入れて、政略がましく事業の擴張に奔走するやうになると、内田はすぐ機嫌を損じて、早月親佐を責めて、基督の精神を無視した俗惡な態度だと息捲いたが、親佐が一向それに取り合ふ様子がないので、兩家の間は見る〳〵疎々しいものになつてしまつた。それでも内田は葉子だけには不思議に愛着を持つてゐたと見えて、よく葉子の噂をして、「子猿」だけは引き取つて子供同様に育てゝやつてもいゝなぞと云つたりした。内田は離縁した最初の妻が連れて行つてしまつたたつた一人の娘にいつまでも未練を持つてゐるらしかつた。どこでもいゝその娘に似たらしい所のある少女を見ると、内田は日頃の自分を忘れたやうに甘々しい顔付をした。人が恐れる割合に、葉子には内田が恐ろしく思へなかつたばかりか、その峻烈な性格の奥にとぢこめられて小さく澱んだ愛情に觸れると、ありきたりの人間からは得られないやうななつかしみを感ずる事があつた。葉子は母に默つて時々内田を訪れた。内田は葉子が來るとどんな忙しい時でも自分の部屋に通して笑ひ話などをした。時には二人だけで郊外の靜かな並木道などを散歩したりした。或る時内田はもう娘らしく生長した葉子の手を堅く握つて、「お前は神様以外の私の唯一人の道伴れだ」などゝ云つた。葉子は不思議な甘い心持でその言葉を聞いた。その記憶は永く忘れ得なかつた。

　それがあの木部との結婚問題が持ち上ると、内田は否應なしに或る日葉子を自分の家に呼びつけた。而して戀人の變心を詰り責める嫉妬深い男のやうに、火と涙とを眼から迸らせて、打ちもすゑかねぬまでに狂ひ怒つた。その時ばかりは葉子も心から激昂させられた。「誰がもうこんな我儘な人の所に來てやるものか」さう思ひながら、

生垣の多い、家並の疎らな、轍の跡の減入りこんだ小石川の往來を歩き〳〵、憤怒の齒ぎしりを止めかねた。それは夕闇の催した晩秋だつた。然しそれと同時に何んだか大切なものを取り落したやうな、自分をこの世につり上げてる絲の一つがぷつんと切れたやうな不思議な淋しさの胸に逼るのを如何する事も出來なかつた。

「基督に水をやつたサマリヤの女の事も思ふから、この上お前には何も云ふまい――他人の失望も神の失望もちつとは考へて見るがいゝ、……罪だぞ、恐ろしい罪だぞ」

　そんな事があつてから五年を過ぎた今日、郵便局に行つて、永田から來た爲替を引き出して、定子を預つてくれてゐる乳母の家に持つて行かうと思つた時、葉子は紙幣の束を算へながら、不圖內田の最後の言葉を思ひ出したのだつた。物のない所に物を探るやうな心持で葉子は人力車を大塚の方に走らした。

　五年經つても昔のまゝの構へで、まばらにさし代へた屋根板と、めつきり延びた垣添ひの桐の木とが目立つばかりだつた。砂きしみのする格子戶を開けて、帶前を整へながら出て來た柔和な細君と顏を合せた時は、さすがに懷舊の情が二人の胸を騷がせた。細君は思はず知らず「まあどうぞ」と云つたが、その瞬間にはつと躊つたやうな樣子になつて、急いで內田の書齋に這入つて行つた。暫くすると嘆息しながら物を云ふやうな內田の聲が途切れ〳〵に聞こえた。「上げるのは勝手だが俺は會ふ事はないぢやないか」と云つたかと思ふと、はげしい音を立てゝ讀みさしの書物をぱたんと閉ぢる音がした。葉子は自分の爪先を見詰めながら下唇をかんでゐた。

　やがて細君がおど〳〵しながら立ち現はれて、先づと葉子を茶の間に招じ入れた。それと入れ代りに、書齋では內田が椅子を離れた音がして、やがて內田はづか〳〵と格子戶を開けて出て行つてしまつた。

　葉子は思はずふら〳〵ッと立ち上らうとするのを、何氣ない顏でぢつと堪へた。せめては雷のやうな激しいその怒りの聲に打たれたかつた。あはよくば自分も思ひ切り云ひたい事を云つて退けたかつた。何處に行つても取り

あひもせず、鼻であしらひ、鼻であしらはれ慣れた葉子には、何か眞味な力で打ち摧かれるなり、打ち摧くなりして見たかつた。それだつたのに思ひ入つて內田の所に來て見れば、內田は世の常の人々よりも一層冷やかに酷く思はれた。

「こんな事を云つては失禮ですけれどもね葉子さん、あなたの事を色々に云つて來る人があるもんですからね、あの通りの性質でせう。どうも私には何んとも云ひなだめやうがないのですよ。內田があなたをお上げ申したのが不思議な程だと私思ひますの。この頃は殊更誰に云はれないやうなごた〳〵が家の內にあるもんですから、餘計むしやくしやしてゐて、本當に私如何したらいゝかと思ふ事がありますの」

意地も生地も內田の强烈な性格の爲めに存分に打ち碎かれた細君は、上品な顏立てに中世紀の尼にでも見るやうな思ひ諦めた表情を浮べて、捨身の生活のどん底にひそむ寂しい不足をほのめかした。自分より年下で、而かも良人から散々惡評を投げられてゐる筈の葉子に對してまで、すぐ心が碎けてしまつて、張りのない言葉で同情を求めるかと思ふと、葉子は自分の事のやうに齒痒かつた。眉と口とのあたりに酷らしい輕蔑の影が、まざ〳〵と浮び上るのを感じながら、それを如何する事も出來なかつた。葉子は急に靑味を增した顏で細君を見やつたが、その顏は世故に慣れ切つた三十女のやうだつた。(葉子は思ふまゝに自分の年を五つも上にしたり下にしたりする不思議な力を持つてゐた。感情次第でその表情は役者の技巧のやうに變つた)

「齒痒くはいらつしやらなくつて」

と切り返すやうに內田の細君の言葉をひつたくつて、

「私だつたら如何でせう。すぐをぢさんと喧嘩して出てしまひますわ。それは私、をぢさんを偉い方だとは思つてゐますが、私こんなに生れついたんですから如何しようもありませんわ。一から十まで仰有る事をはい〳〵と

聞いてゐられませんわ。をぢさんもあんまりでいらつしやいますのね。あなた見たいな方に、さう笠にかゝらずとも、私でもお相手になされぱいゝのに……でもあなたがいらつしやればこそをぢさんもあゝやつてお仕事がお出來になるんですのね。私だけは除け物ですけれども、世の中は中々よくいつてゐますわ。……あ、それでも私はもう見放されてしまつたんですものね、いふ事はありやしません。本當にあなたがいらつしやるのでをぢさんはお仕合せですわ。あなたは辛棒なさる方。をぢさんは我儘でお通しになる方。尤もをぢさんにはそれが神樣のお思召しなんでせうけれどもね。……私も神樣のお思召しか何んかで我儘で通す女なんですからをぢさんとは如何しても茶碗と茶碗ですわ。それでも男は良う御座んすのね、我儘が通るんですもの。女の我儘は通すより仕方がないんですから本當に情けなくなりますのね。何も前世の約束なんでせうよ……」

　內田の細君は自分より遙か年下の葉子の言葉をしみ〴〵と聞いてゐるらしかつた。葉子は葉子でしみ〴〵と細君の身なりを見ないではゐられなかつた。一昨日あたり結つたまゝの束髮だつた。癖のない濃い髮には薪の灰らしい灰がたかつてゐた。糊氣のぬけ切つた單衣も物寂しかつた。その柄の細かい所には里の母の着古しといふやうな香ひがした。由緒ある京都の士族に生れたその人の皮膚は美しかつた。それが尙更その人を憐れにして見せた。

「他人の事なぞ考へてゐられやしない」暫くすると葉子は捨鉢にこんな事を思つた。而して急にはずんだ調子になつて、

「私明日亞米利加に發ちますの、獨りで」

と突拍子もなく云つた。餘りの不意に細君は眼を見張つて顏を擧げた。

「まあ本當に」

「はあ本當に……而かも木村の所に行くやうになりましたの。木村、御存じでせう」
細君がうなづいてなほ仔細を聞かうとすると、葉子は事もなげに遮つて、
「だから今日はお暇乞ひの積りでしたの。それでもそんな事は如何でも好う御座いますわ。をぢさんがお歸りになつたら宜しく仰有つて下さいまし、葉子はどんな人間になり下るかも知れませんつて……あなたどうぞお體をお大事に。太郎さんはまだ學校で御座いますか。大きくおなりでせうね。何んぞ持つて上がればよかつたのに、用がこんなものですから」
と云ひながら兩手で大きな輪を作つて見せて、若々しくほゝゑみながら立ち上つた。
玄關に送つて出た細君の眼には涙がたまつてゐた。それを見ると、人はよく無意味な涙を流すものだと葉子は思つた。けれどもあの涙も内田が無理無體にしぼり出させるやうなものだと思ひ直すと、心臓の鼓動が止る程葉子の心はかつとなつた。而して唇を震はしながら、
「もう一言をぢさんに仰有つて下さいまし、七度を七十倍はなさらずとも、せめて三度位は人の尤も許して上げて下さいましつて。……尤もこれは、あなたのお爲めに申しますの。私は誰にあやまつていたゞくのもいやですし、誰にあやまるのもいやな性分なんですから、をぢさんに許して頂かうとは頭から思つてなどゐはしませんの。それも序でに仰有つて下さいまし」
口のはたに戲談らしく微笑を見せながら、さう云つてゐる中に、大濤がどすん／＼と横隔膜につきあたるやうな心地がして、鼻血でも出さうに鼻の孔が塞がつた。門を出る時も唇はなほ口惜しさうに震へてゐた。日は植物園の森の上に舂いて、暮方近い空氣の中に、今朝から吹き出してゐた風はなぎた。葉子は今の心と、今朝早く風の吹き始めた頃に、土藏わきの小部屋で荷造りをした時の心とを較べて見て、自分ながら同じ心とは思ひ得なか

つた。而して門を出て左に曲らうとして不圖道傍の捨石にけつまづいて、はつと眼が覺めたやうにあたりを見廻した。矢張り二十五の葉子である。いゝえ昔たしかに一度けつまづいた事があつた。さう思つて葉子は迷信家のやうにもう一度振り返つて捨石を見た。その時に日は……矢張り植物園の森のあの邊にあつた。而して道の暗さもこの位だつた。自分はその時、内田の奥さんに内田の惡口をいつて、ペテロと基督との間に取り交はされた寛恕に對する問答を例に引いた。いゝえ、それは今日した事だつた。今日意味のない涙を奥さんがこぼしたやうに、その時も奥さんは意味のない涙をこぼした。その時にも自分は二十五……そんな事はない。そんな事のあらう筈がない……變な……。それにしてもあの捨石には覺えがある。あれは昔からあすこにちやんとあつた。かう思ひ續けて來ると、葉子は、いつか母と遊びに來た時、何か怒つてその捨石に噛り付いて動かなかつた事をまざ〳〵と心に浮べた。その時は大きな石だと思つてゐたのにこれんぼつちの石なのか。母が當惑して立つた姿がはつきり眼先きに現はれた。と思ふとやがてその輪廓が輝き出して、眼も向けられない程耀いたが、すつと惜氣もなく消えてしまつて、葉子は自分の體が中有からどつしり大地に下り立つたやうな感じを受けた。同時に鼻血がどくどく口から顎を傳つて胸の合せ目をよごした。驚いてハンケチを袂から探り出さうとした時、

「どうかなさいましたか」

といふ聲に驚かされて、葉子は始めて自分の後に人力車がついて來てゐたのに氣が付いた。見ると捨石のある所はもう八九町後ろになつてゐた。

「鼻血なの」

と應へながら葉子は始めてのやうにあたりを見た。そこには紺暖簾を所せまくかけ渡した紙屋の小店があつた。葉子は取りあへずそこに這入つて、人目を避けながら顏を洗はして貰はうとした。

四十恰好の克明らしい内儀さんがわが事のやうに金盥に水を移して持つて來てくれた。葉子はそれで白粉氣のない顔を思ひ存分に冷やした。而して少し人心地がついたので、帶の間から懷中鏡を取り出して顔を直さうとすると、鏡がいつの間にか眞二つに破れてゐた。先刻けつまづいた拍子に破れたのか知らんと思つて見たが、それ位で破れる筈はない。怒りに任せて胸がかつとなつた時、破れたのだらうか。何んだかさうらしくも思へた。それとも明日の船出の不吉を告げる何かの業かも知れない。木村との行末の破滅を知らせる惡い辻占かも知れない。又さう思ふと葉子は襟元に凍つた針でも刺されるやうに、ぞく／＼とわけの分らない身慄ひをした。一體自分は如何なつて行くのだらう。葉子はこれまでの見窮められない不思議な自分の運命を思ふにつけ、これから先きの運命が空恐ろしく心に描かれた。葉子は不安な悒鬱な眼付をして店を見廻した。帳場に坐り込んだ内儀さんの膝に凭れて、七つほどの少女が、ぢつと葉子の眼を迎へて葉子を見詰めてゐた。痩せぎすで、痛々しいほど眼の大きな、その癖黑眼の小さな、青白い顔が、薄暗い店の奥から、香料や石鹼の香につゝまれて、ぼんやり浮き出たやうに見えるのが、何か鏡の破れたのと緣でもあるらしく眺められた。葉子の心は全く普段の落ち付きを失つてしまつたやうにわく／＼して、立つても坐つてもゐられないやうになつた。馬鹿なと思ひながら怖いものにでも追ひすがられるやうだつた。

暫くの間葉子はこの奇怪な心の動搖の爲めに店を立ち去る事もしないで佇んでゐたが、ふと如何にでもなれといふ捨鉢な氣になつて元氣を取り直しながら、いくらかの禮をしてそこを出た。出るには出たが、もう車に乘る氣にもなれなかつた。これから定子に會ひに行つてよそながら別れを惜しまうと思つてゐた其の心組みさへ物憂かつた。定子に會つた所が如何なるものか。自分の事すら次ぎの瞬間には取りとめもないものを、他人の事――それはよし自分の血を分けた大切な獨子であらうとも――などを考へるだけが馬鹿な事だと思つた。而してもう一度

そこの店から卷紙を買つて、硯箱を借りて、男恥かしい筆跡で、出發前にもう一度乳母を訪れる積りだつたが、それが出來なくなつたから、この後とも定子を宜しく頼む。當座の費用として金を少し送つておくといふ意味を簡單に認めて、永田から送つてよこした爲替の金を封入して、その店を出た。而していきなりそこに待ち合はしてゐた人力車の上の膝掛をはぐつて、蹴込みに打ち付けてある鑑札にしつかり眼を通しておいて、

「私はこれから歩いて行くから、この手紙をこゝへ屆けておくれ、返事はいらないのだから……お金ですよ、少しどつさりあるから大事にしてね」

と車夫に云ひつけた。車夫は碌に見知りもないものに大金を渡して平氣でゐる女の顏を今更のやうにきよときよとと見やりながら空俥を引いて立ち去つた。大八車が續けさまに田舍に向いて歸つて行く小石川の夕暮の中を、葉子は傘を杖にしながら思ひに耽つて歩いて行つた。

　こもつた哀愁が、發しない酒のやうに、葉子の顳顬をちか／＼と痛めた。葉子は人力車の行方を見失つてゐた。而して自分では眞直に釘店の方に急ぐつもりでゐた。ところが實際は眼に見えぬ力で人力車に結び付けられでもしたやうに、知らず／＼人力車の通つたとほりの道を歩いて、はつと氣がついた時には何時の間にか、乳母が住む下谷池の端の或る曲角に來て立つてゐた。

　そこで葉子はぎよつとして立ち停つてしまつた。短くなりまさつた日は本郷の高臺に隱れて、往來には厨の煙とも夕靄ともつかぬ薄い霧がたゞよつて、街頭のランプの灯が殊に赤くちらほら／＼と點つてゐた。通り慣れたこの界隈の空氣は特別な親しみを以て葉子の皮膚を撫でた。心よりも肉體の方が餘計に定子のゐる所に牽き付けられるやうにさへ思へた。葉子の唇は暖かい桃の皮のやうな定子の頬の膚ざはりにあこがれた。葉子の手はもうめれんすの彈力のある軟かい觸感を感じてゐた。葉子の膝はふうわりとした輕い重みを覺えてゐた。耳には子供

のアクセントが焼き付いた。眼には、曲角の朽ちかゝつた黒板塀を透して、木部から稟けた笑窪の出來る笑顏が否應なしに吸ひ付いて來た。……乳房はくすむつたかつた。葉子は思はず片頰に微笑を浮べてあたりを偸むやうに見廻した。と丁度そこを通りかゝつた内儀さんが、何かを前掛の下に隱しながらぢつと葉子の立ち姿を振り返つてまで見て通るのに氣がついた。

葉子は惡事でも働いてゐた人のやうに、急に笑顏を引つ込めてしまつた。而してこそ〳〵とそこを立ち退いて不忍の池に出た。而して過去も未來も持たない人のやうに、池の端につくねんと突つ立つたまゝ、池の中の蓮の實の一つに眼を定めて、身動きもせずに小半時立ち盡してゐた。

八

日の光がとつぷりと隱れてしまつて、往來の灯ばかりが足許の便りとなる頃、葉子は熱病患者のやうに濁り切つた頭をもてあまして、車に搖られる度毎に眉を痛々しく顰めながら、釘店に歸つて來た。

玄關には色々の足駄や靴が列べてあつたが、流行を作らう、少くとも流行に遲れまいといふ華やかな心を誇るらしい履物と云つては一つも見當らなかつた。自分の草履を始末しながら、葉子はすぐに二階の客間の模樣を想像して、自分の爲めに親戚や知人が寄つて別れを惜しむといふその席に顏を出すのが、自分自身を馬鹿にし切つたことのやうにしか思はれなかつた。こんな位なら定子の所にでもゐる方が餘程增しだつた。こんな事のある筈だつたのを如何して又忘れてゐたものだらう。何處にゐるのもいやだ。木部の家を出て、二度とは歸るまいと決心した時のやうな心持で、拾ひかけた草履をたゝきに戻さうとしたその途端に、

「姉さんもういや……いや」

と云ひながら、身を震はして矢庭に胸に抱きついて來て、乳の間の窪みに顏を埋めながら、成人のするやうな泣きじやくりをして、

「もう行つちやいやですと云ふのに」

とからく言葉を續けたのは貞世だつた。葉子は石のやうに立ちすくんでしまつた。貞世は朝から不機嫌になつて誰の云ふ事も耳には入れずに、自分の歸るのばかりを待ちこがれてゐたに違ひないのだ。葉子は機械的に貞世に引つ張られて階子段を昇つて行つた。

階子段を昇り切つて見ると客間はしんとしてゐて、五十川女史の祈禱の聲だけがおごそかに聞こえてゐた。葉子と貞世とは戀人のやうに抱き合ひながら、アーメンと云ふ聲の一座の人々から擧げられるのを待つて室に這入つた。列座の人々はまだ殊勝らしく頭を首垂れてゐる中に、正座近くすゑられた古藤だけは昂然と眼を見開いて、襖を開けた葉子がしとやかに這入つて來るのを見戍つてゐた。

葉子は古藤に一寸眼で挨拶をして置いて、貞世を抱いたまゝ末座に膝をついて、一同に遲刻の詫びをしようとしてゐると、主人座に坐り込んでゐる叔父が、我が子でもたしなめるやうに威儀を作つて、

「何んたら遲い事ぢや。今日はお前の送別會ぢやぞい。……皆さんにいかうお待たせするが濟まんから、今五十川さんに祈禱をお頼み申して、箸を取つて頂かうと思つた所であつた……一體何處を……」

面と向つては、葉子に口小言一つ云ひ切らぬ器量なしの叔父が、場所も折もあらうにこんな場合に見せびらかしをしようとする。葉子はそつちに見向きもせず、叔父の言葉を全く無視した態度で急に晴やかな色を顏に浮べながら、

「ようこそ皆樣……遲くなりまして。つい行かなければならない所が二つ三つありましたもんですから……」

と誰にともなく云つておいて、するする〳〵と立ち上つて、釘店の往來に向いた大きな窓を後ろにした自分の席に着いて、妹の愛子と自分との間に割り込んで來る貞世の頭を撫でながら、自分の上にばかり注がれる滿座の視線を小うるさゝうに拂ひ除けた。而して片方の手で大分亂れた鬢のほつれをかき上げて、葉子の視線は人もなげに古藤の方に走つた。

「暫くでしたのね……とう〳〵明朝になりましてよ。木村に持つて行くものは一緒にお持ちになつて？……さう」

と輕い調子で云つたので、五十川女史と叔父とが切り出さうとした言葉は、物の見事に遮られてしまつた。葉子は古藤にそれだけの事を云ふと、今度は當の敵とも云ふべき五十川女史に振り向いて、

「小母さま、今日途中でそれはをかしな事がありましたのよ。かうなんですの」

と云ひながら男女を併せて八人程居列んだ親類達にずつと眼を配つて、

「車で駈け通つたんですから前も後もよくは解らないんですけれども、大時計の角の所を廣小路に出ようとしたら、その角に大變な人だかりですの。何んだと思つて見て見ますとね、禁酒會の大道演說で、大きな旗が二三本立つてゐて、急拵へのテーブルに突つ立つて、夢中になつて演說してゐる人があるんですの。それだけなら何も別に珍らしいといふ事はないんですけれども、その演說をしてゐる人が……誰だとお思ひになつて……山脇さんですの」

一同の顏には思はず知らず驚きの色が現はれて、葉子の言葉に耳を欹てゝゐた。先刻しかつめらしい顏をした叔父はもう白痴のやうに口を開けたまゝで薄笑ひを漏しながら葉子を見つめてゐた。

「それが又ね、いつもの通りに金時のやうに頸筋まで眞赤ですの。『諸君』とか何んとか云つて大手を振り立てて饒舌つてゐるのを、肝心の禁酒會員達は呆氣に取られて、默つたまゝ引きさがつて見てゐるんですから、見物人

がわい〳〵と面白がつてたかつてゐるのも全く尤もですわ。その中に、あ、叔父さん、箸をおつけになるやうに皆様に仰有つて下さいまし」

　叔父が慌てゝ口の締りをして佛頂面に立ち返つて、何か云はうとすると、葉子は又それには頓着なく五十川女史の方に向いて、

「あのお肩の凝りはすつかりお治りになりまして」

　と云つたので、五十川女史の答へようとする言葉と、叔父の云ひ出さうとする言葉は氣まづくも鉢合せになつて、二人は所在なげに默つてしまつた。座敷は、底の方に氣持の惡い暗流を潜めながら造り笑ひをし合つてゐるやうな不快な氣分に滿たされた。葉子は「さあ來い」と胸の中で身構へをしてゐた。五十川女史の側に坐つて、神經質らしく眉をきらめかす中老の官吏は、射るやうないま〳〵しげな眼光を時々葉子に浴せかけてゐたが、ゐたゝまれない樣子で一寸居住ひをなほすと、ぎくしやくした調子で口を切つた。

「葉子さん、あなたもいよ〳〵身の堅まる瀬戸際まで漕ぎ付けたんだが……」

　葉子は隙を見せたら切り返すからと云はんばかりな緊張した、同時に物を物ともしない風でその男の眼を迎へた。

「何しろ私共早月家の親類に取つてはこんな目出度い事は先づない。無いには無いがこれからがあなたに頼み所だ。どうぞ一つ私共の顔を立てゝ、今度こそは立派な奧さんになつておもらひしたいが如何です。木村君は私もよく知つとるが、信仰も堅いし、仕事も珍らしくはき〳〵出來るし、若いに似合はぬ物の分つた仁だ。こんなことまで比較に持ち出すのは如何か知らないが、木部氏のやうな實行力の伴はない夢想家は、私などは始めから不贊成だつた。今度のはぢたい段が違ふ。葉子さんが木部氏の所から逃げ歸つて來た時には、私もけしからんと云

つた實は一人だが、今になつて見ると葉子さんはさすがに眼が高かつた。出て來ておいて誠によかつた。いまに見なさい木村といふ仁なりや、立派に成功して、第一流の實業家に成り上るにきまつてゐる。是れからは何んと云つても信用と金だ。官界に出ないのなら、如何しても實業界に行かなければうそだ。擲身報國は官吏たるもの丶一特權だが、木村さんのやうな眞面目な信者にしこたま金を造つて貰はんぢや、神の道を日本に傳へ擴げるにしてからが容易な事ぢやありませんよ。あなたも小さい時から米國に渡つて新聞記者の修業をすると口癖のやうに妙な事を云つたもんだが（こ丶で一座の人は何んの意味もなく高く笑つた。恐らくは餘りしかつめらしい空氣を打ち破つて、何んとかそこに餘裕をつける積りが、皆んなに起つたのだらうけれども、葉子に取つてはそれがさうは響かなかつた。その心持は解つても、そんな事で葉子の心をはぐらかさうとする彼等の淺はかさがぐつと癪に障つた）新聞記者は兎も角も……ぢやない、そんなものになられては困り切るが（こ丶で一座はまた譯もなく馬鹿らしく笑つた）米國行の願はたしかに叶つたのだ。葉子さんも御滿足に違ひなからう。後の事は私共がたしかに引き受けたから心配は無用にして、身をしめて妹さんの方のしめしになる程の奮發を頼みます……え丶と、財產の方の處分は私と田中さんとで間違ひなく固めるし、愛子さんと貞世さんのお世話は、五十川さん、あなたにお願ひしようぢやありませんか、御迷惑ですが。如何でせう皆さん（さう云つて彼は一座を見渡した。豫め申し合せが出來てゐたらしく一同は待ち設けたやうに點頭いて見せた）如何ぢやらう葉子さん」

　葉子は乞食の嘆願を聞く女王のやうな心持で、○○局長と云はれるこの男の云ふ事を聞いてゐたが、財產の事などは如何でもい丶として、妹達の事が話題に上ると共に、五十川女史を向うに廻して詰問のやうな對話を始めた。何んと云つても五十川女史はその晩そこに集まつた人々の中では一番年配でもあつたし、一番憚られてゐるのを葉子は知つてゐた。五十川女史が四角を思ひ出させるやうな頑丈な骨組みで、がつしりと正座に居直つて、

葉子を子供あしらひにしようとするのを見て取ると、葉子の心は逸り熱した。

「いゝえ、我儘だとばかりお思ひになつては困ります。私は御承知のやうな生れで御座いますし、是れまでも度度御心配をかけて來て居りますから、人樣同樣に見ていたゞかうとは是れつぽかりも思つては居りません」

と云つて葉子は指の間になぶつてゐた楊枝を老女史の前にふいと投げた。

「然し愛子も貞世も妹で御座います。現在私の妹で御座います。口幅つたいと思召すかも知れませんが、此の二人だけは私縱令米國に居りましても立派に手鹽にかけて御覽に入れますから、どうかお構ひなさらずに下さいまし。それは赤坂學院も立派な學校には違ひ御座いますまい。現在私も小母さまのお世話であすこで育てゝいたゞいたのですから、惡くは申したくは御座いませんが、私のやうな人間が、皆樣のお氣に入らないとすれば……それは生れつきも御座いませうとも、御座いませうけれども、私を育て上げたのはあの學校で御座いますからねえ。何しろ現在居て見た上で、私この二人をあすこに入れる氣にはなれません。女といふものをあの學校では一體何んと見てゐるので御座んすか知らん……」

かう云つてゐる中に葉子の心には火のやうな回想の憤怒が燃え上つた。葉子は其の學校の寄宿舍で一箇の中性動物として取り扱はれたのを忘れる事が出來ない。やさしく、愛らしく、しをらしく、生れたまゝの美しい好意と欲念との命ずるまゝに、おぼろげながら神といふものを戀しかけた十二三歲頃の葉子に、學校は祈禱と、節慾と、殺情とを强制的にたゝき込まうとした。十四の夏が秋に移らうとした頃、葉子は不圖思ひ立つて、美しい四寸幅程の角帶のやうなものを絹絲で編みはじめた。藍の地に白で十字架と日月とをあしらつた模樣だつた。物事に耽り易い葉子は身も魂も打ち込んでその仕事に夢中になつた。それを造り上げた上で如何して神樣の御手に屆けようう、と云ふやうな事は固より考へもせずに、早く造り上げてお喜ばせ申さうとのみあせつて、仕舞には夜の目も

碌々合はさなくなつた。二週間に餘る苦心の末にそれはあらかた出來上つた。藍の地に簡單に白で模樣を拔くだけならさしたる事でもないが、葉子は他人のまだしなかつた試みを加へようとして、模樣の周圍に藍と白とを組み合せにした小さな笹縁のやうなものを浮き上げて編み込んだり、ひどく伸び縮みがして模樣が歪形にならないやうに、目立たないやうにカタン絲を編み込んで見たりした。出來上りが近づくと葉子は片時も編針を休めてはゐられなかつた。或る時聖書の講義の講座でそつと机の下で仕事を續けてゐると、運惡くも教師に見付けられた。教師は頻りにその用途を問ひたゞしたが、恥ぢ易い乙女心にどうしてこの夢よりも果敢ない目論見を白狀する事が出來よう。教師はその帶の色合から推して、それは男向きの品物に違ひないと決めてしまつた。而して葉子の心は早熟の戀を追ふものだと斷定した。而して戀といふものを生來知らぬげな四十五六の醜い容貌の舍監は、葉子を監禁同樣にして置いて、暇さへあればその帶の持主たるべき人の名を迫り問うた。

葉子はふと心の眼を開いた。而してその心はそれ以來峰から峰を飛んだ。十五の春には葉子はもう十も年上な立派な戀人を持つてゐた。葉子はその青年を思ふさま飜弄した。青年は間もなく自殺同樣な死方をした。一度生血の味をしめた虎の子のやうな渴慾が葉子の心を打ちのめすやうになつたのはそれからの事である。

「古藤さん愛と貞とはあなたに願ひますわ。誰がどんな事を云はうと、赤坂學院には入れないで下さいまし。私昨日田島さんの塾に行つて、田島さんにお會ひ申してよくお頼みして來ましたから、少し片付いたら憚り樣ですがあなた御自身で二人を連れていらしつて下さい。愛さんも貞ちやんも分りましたらう。田島さんの塾に這入るとね、姉さんと一緒にゐた時のやうな譯には行きませんよ……」

「姉さんてば……自分でばかり物を仰有つて」

といきなり恨めしさうに、貞世は姉の膝を搖りながらその言葉を遮つた。

「さつきから何度書いたか分らないのに平氣でほんとにひどいわ」

一座の人々から妙な子だといふ風に眺められてゐるのにも頓着なく、貞世は姉の方に向ひて膝の上にしなだれかゝりながら、姉の左手を長い袖の下に入れて、その掌に食指で假名を一字づゝ書いて手の平で拭き消すやうにした。葉子は默つて、書いては消し書いては消しする字を辿つて見ると、

「ネーサマハイイコダカラ『アメリカ』ニイツテハイケマセンヨヨヨ」

と讀まれた。葉子の胸は我れ知らず熱くなつたが、强ひて笑ひにまぎらしながら、

「まあ聞きわけのない兒だこと、仕方がない。今になつてそんな事を云つたつて仕方がないぢやないの」

とたしなめ諭すやうに云ふと、

「仕方があるわ」

と貞世は大きな眼で姉を見上げながら、

「お嫁に行かなければよろしいぢやないの」

と云つて、くるりと首を廻して一同を見渡した。貞世の可愛いゝ眼は「さうでせう」と訴へてゐるやうに見えた。それを見ると一同は唯何んと云ふ事もなく思ひ遣りのない笑ひ方をした。叔父は殊に大きなとんきよな聲で高々と笑つた。先刻から默つたまゝで俯向いて淋しく坐つてゐた愛子は、沈んだ恨めしさうな眼でぢつと叔父を睨めたと思ふと、忽ち湧くやうに涙をほろ／＼と流して、それを兩袖で拭ひもやらず立ち上つてその部屋をかけ出した。階子段の處で丁度下から上つて來た叔母と行き遇つたけはひがして、二人が何か云ひ爭ふらしい聲が聞こえて來た。

一座は又白け亙つた。

「叔父さんにも申し上げておきます」

と沈默を破つた葉子の聲が妙に殺氣を帶びて響いた。

「是れまで何かとお世話樣になつて有難う御座いましたけれども、この家もたゝんでしまふ事になれば、妹たちも今申した通り塾に入れてしまひますし、この後はこれと云つて大して御厄介はかけない積りで御座います。赤の他人の古藤さんにこんな事を願つてはほんとに濟みませんけれども、木村の親友でいらつしやるのですから、近い他人ですわね。古藤さん、あなた貧乏籤を背負ひ込んだと思召して、どうか二人を見てやつて下さいましな。いゝでせう。かう親類の前ではつきり申しておきますから、ちつとも御遠慮なさらずに、いゝとお思ひになつたやうになさつて下さいまし。あちらへ着いたら私又屹度どうとも致しますから。屹度そんなに長い間御迷惑はかけませんから。いかゞ、引き受けて下さいまして？」

古藤は少し躊躇する風で五十川女史を見やりながら、

「あなたは先刻から赤坂學院の方がいゝと仰有るやうに伺つてゐますが、葉子さんの云はれる通りにして差支へないのですか。念の爲めに伺つておきたいのですが」

と尋ねた。葉子は又あんな餘計な事を云ふと思ひながらいら〳〵した。五十川女史は日頃の圓滑な人ずれのした調子に似ず、何かにひどく激昂した樣子で、

「私は亡くなつた親佐さんのお考へはかうもあらうかと思つた所を申したまでゞすから、それを葉子さんが惡いと仰有るなら、その上兎や角云ひともないのですが、親佐さんは堅い昔風な信仰を持つた方ですから、田島さんの塾は前から嫌ひでね……宜しう御座いませう、さうなされば。私は兎に角赤坂學院が一番だと何處までも思つとるだけです」

と云ひながら、見下げるやうに葉子の胸のあたりをまじ／＼と眺めた。葉子は貞世を抱いたまゝしやんと胸をそらして眼の前の壁の方に顏を向けてゐた、例へばばら／＼と投げられるつぶてを避けようともせずに突つ立つ人のやうに。

古藤は何か自分一人で合點したと思ふと、堅く腕組みをしてこれも自分の前の眼八分の所をぢつと見詰めた。一座の氣分はほと／＼動きが取れなくなつた。その間で一番早く機嫌を直して相好を變へたのは五十川女史だつた。子供を相手にして腹を立てた、それを年甲斐ないとでも思つたやうに、氣を變へてきさくに立ち支度をしながら、

「皆さんいかゞ、もうお暇に致しましたら……お別れする前にもう一度お祈りをして」

「お祈りを私のやうなものゝ爲めになさつて下さるのは御無用に願ひます」

葉子は和らぎかけた人々の氣分には更に頓着なく、壁に向けてゐた眼を貞世に落して、いつの間にか寢入つたその人の艷々しい顏を撫でさすりながらきつぱりと云ひ放つた。

人々は思ひ／＼な別れを告げて歸つて行つた。葉子は貞世がいつの間にか膝の上に寢てしまつたのを口實にして人々を見送りには立たなかつた。

最後の客が歸つて行つた後でも、叔父叔母は二階を片付けには上つて來なかつた。挨拶一つしようともしなかつた。葉子は窓の方に頭を向けて、煉瓦の通りの上にぽうつと立つ灯の照り返しを見やりながら、夜風にほてつた顏を冷やさせて、貞世を抱いたまゝ默つて坐り續けてゐた。間遠に日本橋を渡る鐵道馬車の音が聞こえるばかりで、釘店の人通りは寂しい程疎らになつてゐた。

姿は見せずに、何處かの隅で愛子がまだ泣き續けて鼻をかんだりする音が聞こえてゐた。

「愛さん……貞ちゃんが寝ましたからね、一寸お床を敷いてやつて頂戴な」

我れながら驚く程やさしく愛子に口をきく自分を葉子は見出した。性が合はないと云ふのか、氣が合はないといふのか、普段愛子の顔さへ見れば葉子の氣分は崩されてしまふのだつた。愛子が何事につけても猫のやうに從順で少しも情といふものを見せないのが殊更憎かつた。然しその夜だけは不思議にもやさしい口をきいた。葉子はそれを意外に思つた。愛子がいつものやうに素直に立ち上つて、鼻をすゝりながら默つて床を取つてゐる間に、葉子は折々往來の方から振り返つて、愛子のしとやかな足音や、綿を薄く入れた夏布團の疊に觸れるさゝやかな音を見入りでもするやうにその方に眼を定めた。さうかと思ふと又今更のやうに、食ひ荒らされた食物や、敷いたまゝになつてゐる座布團のきたならしく散らかつた客間をまじ〳〵と見渡した。父の書棚のあつた部分の壁だけが四角に濃い色をしてゐた。そのすぐ側に西洋暦が昔のまゝにかけてあつた。七月十六日から先きは剝がされずに殘つてゐた。

「姉さま敷けました」

暫くしてから、愛子がかうかすかに隣りで云つた。葉子は、

「さう御苦勞さまよ」

と又しとやかに應へながら、貞世を抱きかゝへて立ち上らうとすると、又頭がぐら〳〵ツとして、夥しい鼻血が貞世の胸の合せ目に流れ落ちた。

九

底光りのする雲母色の雨雲が縫目なしにどんよりと重く空一杯にはだかつて、本牧の沖合まで東京灣の海は物

凄いやうな草色に、小さく波の立ち騒ぐ九月二十五日の午後であつた。昨日の風が凪いでから、氣温は急に夏らしい蒸暑さに返つて、横濱の市街は、疫病にかゝつて弱り切つた勞働者が、そぼふる雨の中にぐつたりと喘いでゐるやうに見えた。

靴の先きで甲板をこつ〳〵と敲いて、俯向いてそれを眺めながら、帶の間に手をさし込んで、木村への傳言を古藤は獨語のやうに葉子に云つた。葉子はそれに耳を傾けるやうな樣子はしてゐたけれども、本當はさして注意もせずに、丁度自分の眼の前に、澤山の見送人に圍まれて、應接に暇もなげな田川法學博士の眼尻の下つた顔と、その夫人の痩せぎすな肩との描く微細な感情の表現を、批評家のやうな心で鋭く眺めやつてゐた。可なり廣いプロメネード・デッキは田川家の家族と見送人とで緣日のやうに賑つてゐた。葉子の見送りに來た筈の五十川女史は先刻から田川夫人の側に附き切つて、世話好きな、人の好い叔母さんといふやうな態度で、見送りの半分がたを自身で引き受けて挨拶してゐた。葉子の方へは見向かうとする模樣もなかつた。葉子の叔母は葉子から二三間離れた所に、蜘蛛のやうな白痴の兒を小婢に背負はして、自分は葉子から預かつた手鞄と袱紗包みとを取り落さんばかりにぶら下げたまゝ、花々しい田川家の家族や見送人の群を見て呆氣に取られてゐた。葉子の乳母は、どんな大きな船でも船は船だといふやうにひどく臆病さうな青い顔付をして、サルンの入口の戸の蔭に佇みながら、四角に疊んだ手拭を眞赤になつた眼の所に絶えず押しあてゝは、偸み見るやうに葉子を見やつてゐた。その他の人人はぢみな一團になつて、田川家の威光に壓せられたやうに隅の方にかたまつてゐた。

葉子はかねて五十川女史から、田川夫婦が同船するから船の中で紹介してやると云ひ聞かせられてゐた。田川と云へば、法曹界では可なり名の聞こえた割合に、何處と云つて取りとめた特色もない政客ではあるが、その人の名は寧ろ夫人の噂の爲めに世人の記憶に鮮かであつた。感受力の鋭敏な而して何等かの意味で自分の敵に廻さな

ければならない人に對して殊に注意深い葉子の頭には、その夫人の面影は永い事宿題として考へられてゐた。葉子の頭に描かれた夫人は我の強い、情の恣まな、野心の深い割合に手練の露骨な、良人を輕く見てやゝともすると笠にかゝりながら、それでゐて良人から獨立する事の到底出來ない、謂はゞ心の弱い强がり家ではないか知らんと云ふのだつた。葉子は今後ろ向きになつた田川夫人の肩の様子を一目見たばかりで、辭書でも繰り當てたやうに、自分の想像の裏書きをされたのを胸の中で微笑まずにはゐられなかつた。

「何んだか話が混雜したやうだけれどもそれだけ云つて置いて下さい」

ふと葉子は幻想から破れて、古藤の云ふこれだけの言葉を捕へた。而して今まで古藤の口から出た傳言の文句は大抵聞き漏らしてゐた辯に、空々しげにもなくしんみりとした様子で、

「確かに……けれどもあなた後から手紙ででも詳しく書いてやつて下さいましね。間違ひでもしてゐると大變ですから」

と古藤を覗き込むやうにして云つた。古藤は思はず笑ひを漏らしながら、「間違ふと大變ですから」と云ふ言葉を、時折り葉子の口から聞くチャームに滿ちた子供らしい言葉の一つとでも思つてゐるらしかつた。而して、

「何、間違つたつて大事はないけれども……だが手紙は書いて、あなたの寢床の枕の下に置いときましたから、部屋に行つたら何處にでもしまつておいて下さい。それから、それと一緒にもう一つ……」

と云ひかけたが、

「何しろ忘れずに枕の下を見て下さい」

この時突然「田川法學博士萬歲」といふ大きな聲が、棧橋からデッキまでどよみ渡つて聞こえて來た。葉子と古藤とは話の腰を折られて互に不快な顏をしながら、手欄から下の方を覗いて見ると、すぐ眼の下に、その頃人

の少し集まる所には何處にでも顏を出す轟といふ劍舞の師匠だか擊劍の師匠だかする頑丈な男が、大きな五つ紋の黑羽織に白つぽい鰹魚縞の袴をはいて、棧橋の板を朴の木下駄で踏み鳴らしながら、こゝを先途と喚いてゐた。その聲に應じて、デッキまでは昇つて來ない壯士體の政客や某私立政治學校の生徒が一齊に萬歲を繰り返した。デッキの上の外國船客は物珍らしさに逸早く、葉子が倚り掛つてゐる手欄の方に押し寄せて來たので、葉子は古藤を促して、急いで手欄の折れ曲つた角に身を引いた。田川夫婦も微笑みながらサルンから挨拶の爲めに近づいて來た。葉子はそれを見ると、古藤の側に寄り添つたまゝ、左手をやさしく上げて、鬢のほつれをかき上げながら、頭を心持ち左にかしげてぢつと田川の眼を見やつた。田川は棧橋の方に氣を取られて急ぎ足で手欄の方に歩いてゐたが、突然見えぬ力にぐつと引きつけられたやうに、葉子の方に振り向いた。

田川夫人も思はず良人の向く方に頭を向けた。田川の威嚴に乏しい眼にも鋭い光がきらめいては消え、更にきらめいて消えたのを見すまして、葉子は始めて田川夫人の眼を迎へた。額の狹い、顎の固い夫人の顏は、輕蔑と猜疑の色を漲らして葉子に向つた。葉子は、名前だけを豫てから聞き知つて慕つてゐた人を、今眼の前に見たやうに、恭しさと親しみとの交り合つた表情で之に應じた。而してすぐそのそばから、夫人の前にも頓着なく、誘惑の眸を凝らしてその良人の横顏をぢつと見やるのだつた。

「田川法學博士夫人萬歲」「萬歲」「萬歲」

田川その人に對してよりも更に聲高な大歡呼が、棧橋にゐて傘を振り帽子を動かす人々の群れから起つた。田川夫人は忙しく葉子から眼を移して、群集に取つときの笑顏を見せながら、レースで笹縁を取つたハンケチを振らねばならなかつた。田川のすぐ側に立つて、胸に何か赤い花をさして型のいゝフロック・コートを着て、ほゝゑんでゐた風流な若紳士は、棧橋の歡呼を引き取つて、田川夫人の面前で帽子を高く擧げて萬歲を叫んだ。デッキの

上は又一しきりどよめき渡つた。

やがて甲板の上は、こんな騒ぎの外に何んとなく忙しくなつて來た。事務員や水夫達が、物せはしさうに人中を縫うてあちこちする間に、手を取り合はんばかりに近よつて別れを惜しむ人々の群れがこゝにも彼處にも見え始めた。サルン・デッキから見ると、三等客の見送人がボーイ長にせき立てられて、續々舷門から降り始めた。それと入れ代りに、帽子、上衣、ズボン、襟飾、靴などの調和の少しも取れてゐない癖に、無闇に氣取つた洋裝をした非番の下級船員達が、濡れた傘を光らしながら駈けこんで來た。その騒ぎの間に、一種生臭いやうな暖かい蒸氣が甲板の人を取り捲いて、フォクスルの方で、今までやかましく荷物をまき上げてゐた扛重機の音が突然やむと、かーんとする程人々の耳は却つて遠くなつた。隔つた所から互に呼び交す水夫等の高い聲は、この船にどんな大危險でも起つたかと思はせるやうな不安を播き散らした。親しい間の人達は別れの切なさに心がわく／＼して碌に口もきかず、義理一遍の見送人は、動ともするとまはりに氣が取られて見送るべき人を見失ふ。そんな慌だしい拔錨の間際になつた。葉子の前にも、急に色々な人が寄り集まつて來て、思ひ／＼に別れの言葉を殘して船を降り始めた。葉子はこんな混雜な間にも田川の眸が時々自分に向けられるのを意識して、その眸を驚かすやうななまめいた姿體や、賴りなげな表情を見せるのを忘れないで、言葉少なにそれらの人に挨拶した。叔父と叔母とは墓の穴まで無事に棺を運んだ人夫のやうに、通り一遍の事を云ふと、預り物を葉子に渡して、手の塵をはたかんばかりにすげなく、眞先きに舷梯を降りて行つた。葉子はちらつと叔母の後姿を見送つて驚いた、今の今まで何處とて似通ふ所の見えなかつた叔母も、その姉なる葉子の母の衣物を帶まで借りて着込んでゐるのを見ると、はつと思ふ程その姉にそつくりだつた。葉子は何んと云ふ事なしにいやな心持がした。而してこんな緊張した場合にこんなちよつとした事にまでこだはる自分を妙に思つた。さう思ふ間もあらせず、今度は親類の人達が五六人

づゝ、口々に小やかましく何か云つて、憐れむやうな妬むやうな眼つきを投げ與へながら、幻影のやうに葉子の眼と記憶とから消えて行つた。丸髷に結つたり教師らしい地味な束髮に上げたりしてゐる四人の學校友達も、今は葉子とはかけ隔つた境涯の言葉づかひをして、昔葉子に誓つた言葉などは忘れてしまつた裏切り者の空々しい涙を見せたりして、雨に濡らすまいと袂を大事にかばひながら、傘にかくれてこれも舷梯を消えて行つてしまつた。最後に物怯ぢする樣子の乳母が葉子の前に來て腰をかゞめた。葉子はとう〳〵行き詰まる所まで來たやうな思ひをしながら、振り返つて古藤を見ると、古藤は依然として手欄に身を寄せたまゝ、氣拔けでもしたやうに、眼を据ゑて自分の二三間先きをぼんやり眺めてゐた。

「義一さん、船の出るのも間が無さゝうですからどうか此女……私の乳母ですの……の手を引いて下ろしてやつて下さいましな。辷りでもすると怖うござんすから」

と葉子に云はれて古藤は始めて我れに返つた。而して獨語のやうに、

「この船で僕も亞米利加に行つて見たいなあ」

と呑氣な事を云つた。

「どうか棧橋まで見てやつて下さいましね。あなたもその中是非いらつしやいましな……義一さんそれでは是れでお別れ。本當に、本當に」

と云ひながら葉子は何んとなく親しみを一番深くこの青年に感じて、大きな眼で古藤をぢつと見た。古藤も今更のやうに葉子をぢつと見た。

「お禮の申しやうもありません。この上のお願ひです、どうぞ妹達を見てやつて下さいまし。あんな人達にはどうしたつて賴んではおけませんから。……左樣なら」

「左様なら」

古藤は鸚鵡返しに沒義道にこれだけ云つて、ふいと手欄を離れて、麥稈帽子を眼深に被りながら、乳母に附き添つた。

葉子は階子の上り口まで行つて二人に傘をかざしてやつて、一段々々遠ざかつて行く二人の姿を見送つた。東京で別れを告げた愛子や貞世の姿が、雨に濡れた傘の邊を幻影となつて見えたり隱れたりしたやうに思つた。葉子は不思議な心の執着から定子にはとう／＼會はないでしまつた。愛子と貞世とは是非見送りがしたいと云ふのを、葉子は叱りつけるやうに云つてとめてしまつた。葉子が人力車で家を出ようとすると、何んの氣なしに愛子が前髮から抜いて鬢を掻かうとした櫛が、脆くもぽきりと折れた。それを見ると愛子は堪へ／＼てゐた涙の堰を切つて聲を立てゝ泣き出した。貞世は始めから腹でも立てたやうに、燃えるやうな眼から止度なく涙を流して、ぢつと葉子を見詰めてばかりゐた。そんな痛々しい様子がその時まざ／＼と葉子の眼の前にちらついたのだ。一人ぼつちで遠い旅に鹿島立つて行く自分といふものがあぢきなくも思ひやられた。そんな心持になると忙しい間にも葉子はふと田川の方を振り向いて見た。中學校の制服を着た二人の少年と、髮をお下げにして、帶をおはさみにしめた少女とが、田川と夫人との間にからまつて丁度告別をしてゐる所だつた。附き添ひの守の女が少女を抱き上げて、田川夫人の脣をその額に受けさしてゐた。葉子はそんな場面を見せつけられると、他人事ながら自分が皮肉で鞭うたれるやうに思つた。龍をも化して牝豚にするのは母となる事だ。今の今まで燒くやうに定子の事を思つてゐた葉子は、田川夫人に對してすつかり反對の事を考へた。葉子はそのいま／＼しい光景から眼を移して舷梯の方を見た。然しそこにはもう乳母の姿も古藤の影もなかつた。

忽ち船首の方からけたゝましい銅鑼の音が響き始めた。船の上下は最後のどよめきに搖ぐやうに見えた。長い

綱を引きずつて行く水夫が帽子の落ちさうになるのを右の手で支へながら、あたりの空氣に激しい動搖を起す程の勢で急いで葉子の傍を通りぬけた。見送人は一齊に帽子を脫いで舷梯の方に集まつて行つた。その際になつて五十川女史ははたと葉子の事を思ひ出したらしく、田川夫人に何か云つておいて葉子のゐる所にやつて來た。

「いよ〳〵お別れになつたが、いつぞやお話した田川の奧さんにおひきあはせしようから一寸」

葉子は五十川女史の親切振りの犧牲になるのを承知しつゝ、一種の好奇心に牽かされて、その後について行かうとした。葉子に初めて物をいふ田川の態度を見てやりたかつた。その時、

「葉子さん」

と突然云つて、葉子の肩に手をかけたものがあつた。振り返ると麥酒の醉の匂ひがむせかへるやうに葉子の鼻を打つて、眼の心まで紅くなつた知らない若者の顏が、近々と鼻先にあらはれてゐた。はつと身を引く暇もなく、葉子の肩はびしよ濡れになつた醉どれの腕でがつしりと捲かれてゐた。

「葉子さん、覺えてゐますか私を……あなたは私の命なんだ。命なんです」

といふ中にも、その眼からはほろ〳〵と煮えるやうな淚が流れて、まだうら若い滑かな頰を傳つた。膝から下がふらつくのを葉子にすがつて危く支へながら、

「結婚をなさるんですか……お目出度う……お目出度う……だがあなたが日本にゐなくなると思ふと……ゐたゝまれない程心細いんだ……私は……」

もう聲さへ續かなかつた。而して深々と氣息をひいてしやくり上げながら、葉子の肩に顏を伏せてさめ〴〵と男泣きに泣き出した。

この不意な出來事はさすがに葉子を驚かしもし、きまりも惡くさせた。誰だとも、何時何處で遇つたとも思ひ

出す由がない、木部孤節と別れてから、何と云ふ事なしに捨鉢な心地になつて、誰れ彼れの差別もなく近寄つて來る男達に對して勝手氣儘を振舞つたその間に、偶然に出遇つて偶然に別れた人の中の一人でもあらうか。淺い心で弄んで行つた心の中にこの男の心もあつたであらうか。兎に角葉子には少しも思ひ當る節がなかつた。葉子は其の男から離れたい一心に、手に持つた手鞄と包物とを甲板の上に抛りなげて、若者の手をやさしく振りほどかうとして見たが無益だつた。親類や朋輩達の事あれがしな眼が等しく葉子に注がれてゐるのを葉子は痛い程身に感じてゐた。と同時に、男の涙が薄い單衣の目を透して、葉子の膚に沁みこんで來るのを感じた。亂れたつやつやしい髮の匂ひもつい鼻の先きで葉子の心を動かさうとした。恥も外聞も忘れ果てゝ、大空の下ですゝり泣く男の姿を見てゐると、そこには微かな誇りのやうな氣持が湧いて來た。不思議な憎しみといとしさがこんがらがつて葉子の心の中で渦卷いた。葉子は、

「さ、もう放して下さいまし、船が出ますから」

ときびしく云つて置いて、噛んで含めるやうに、

「誰でも生きてる間は心細く暮すんですのよ」

とその耳許にさゝやいて見た。若者はよく解つたといふ風に深々とうなづいた。然し葉子を抱く手はきびしく震へこそすれ、ゆるみさうな様子は少しも見えなかつた。

物々しい銅鑼の響は左舷から右舷に廻つて、又船首の方に聞こえて行かうとしてゐた。船員も乘客も申し合したやうに葉子の方を見守つてゐた。先刻から手持無沙汰さうに唯立つて成り行きを見てゐた五十川女史は思ひ切つて近寄つて來て、若者を葉子から引き離さうとしたが、若者はむづかる子供のやうに地だんだを踏んでますます葉子に寄り添ふばかりだつた。船首の方に群がつて仕事をしながら、此の様子を見守つてゐた水夫達は一齊に高く

笑ひ聲を立てた。而してその中の一人はわざと船中に聞こえ渡るやうな嚏をした。拔錨の時刻は一秒々々に逼つてゐた。物笑ひの的になつてゐる、さう思ふと葉子の心はいとしさから激しいいとはしさに變つて行つた。

「さ、お放し下さい、さ、」

と極めて冷刻に云つて、葉子は助けを求めるやうにあたりを見廻した。

田川博士の側にゐて何か話をしてゐた一人の大兵な船員がゐたが、葉子の當惑し切つた樣子を見ると、いきなり大胯に近づいて來て、

「どれ私が下までお連れしませう」

と云ふや否や、葉子の返事も待たずに若者を事もなく抱きすくめた。若者はこの亂暴にかつとなつて怒り狂つたが、その船員は小さな荷物でも扱ふやうに、若者の胴のあたりを右脇にかいこんで、易々と舷梯を降りて行つた。五十川女史はあたふたと葉子に挨拶もせずにその後に續いた。暫くすると若者は棧橋の群集の間に船員の手から下ろされた。

けたゝましい汽笛が突然鳴りはためいた。田川夫妻の見送人たちはこの聲で活を入れられたやうになつて、どよめき渡りながら、田川夫妻の萬歲をもう一度繰り返した。若者を棧橋に連れて行つた、かの巨大な船員は、大きな體軀を猿のやうに輕くもてあつかつて、音も立てずに棧橋からしづ／＼と離れて行く船の上に唯一條の綱を傳つて上つて來た。人々は又その早業に驚いて眼を見張つた。

葉子の眼は怒氣を含んで手欄から暫くの間かの若者を見据ゑてゐた。若者は狂氣のやうに兩手を擴げて船に駈け寄らうとするのを、近所に居合せた三四人の人が慌てゝ引き留める、それを又すり拔けようとして組み伏せられてしまつた。若者は組み伏せられたまゝ右の腕を口にあてがつて思ひ切り噛みしばりながら泣き沈んだ。その

牛の叫き聲のやうな泣き聲が氣疎く船の上まで聞こえて來た。見送人は思はず鳴りを靜めてこの狂暴な若者に眼を注いだ。葉子も葉子で、姿も隱さず手欄に片手をかけたまゝ突つ立つて、同じくこの若者を見据ゑてゐた。と云つて葉子はその若者の上ばかりを思つてゐるのではなかつた。自分でも不思議だと思ふやうな、虛ろな餘裕がそこにはあつた。古藤が若者の方には眼もくれずにぢいつと足許を見詰めてゐるのにも氣が付いてゐた。死んだ姉の晴着を借着してゐゝ心地になつてゐるやうな叔母の姿も眼に映つてゐた。船の方に後ろを向けて（恐らくそれは悲しみからばかりではなかつたらう。その若者の擧動が老いた心をひしいだに違ひない）手拭をしいつかりと兩眼にあてゝゐる乳母も見逃してはゐなかつた。

何時の間に動いたともなく船は棧橋から遠ざかつてゐた。人の群れが黑蟻のやうに集まつたそこの光景は、葉子の眼の前に展けて行く大きな港の景色の中景になるまでに小さくなつて行つた。葉子の眼は葉子自身にも疑はれるやうな事をしてゐた。その眼は小さくなつた人影の中から乳母の姿を探り出さうとせず、一種のなつかしみを持つ橫濱の市街を見納めに眺めようとせず、凝然として小さく蹲る若者のゝらしい黑點を見詰めてゐた。若者の叫ぶ聲が、棧橋の上で打ち振るハンケチの時々ぎらぎらと光る每に、葉子の頭の上に張り渡された雨よけの帆布の端から餘滴がぽついりぽつりと葉子の顏を打つ度に、斷續して聞こえて來るやうに思はれた。「葉子さん、あなたは私を見殺しにするんですか……見殺しにするん……」

一〇

始めての旅客も物慣れた旅客も、拔錨したばかりの船の甲板に立つては、落ち付いた心でゐる事が出來ないやうだつた。跡始末の爲めに忙しく右往左往する船員の邪魔になりながら、何がなしの昂奮にぢいつとしてはゐられな

いやうな顔付をして、乘客は一人殘らず甲板に集まつて、今まで自分達が側近く見てゐた棧橋の方に眼を向けてゐた。葉子もその樣子だけでいふと、他の乘客と同じやうに見えた。葉子は他の乘客と同じやうに、手欄に倚りかゝつて、靜かな春雨のやうに降つてゐる雨の滴に顔をなぶらせながら、波止場の方を眺めてゐたが、けれどもその眸には何んにも映つてはゐなかつた。其の代り眼と腦との間と覺しいあたりを、親しい人や疎い人が、何か譯もなくせはしさうに現はれ出て、銘々一番深い印象を與へるやうな動作をしては消えて行つた。葉子の知覺は半分眠つたやうにぼんやりして注意するともなくその姿に注意してゐた。而してこの半睡の狀態が破れでもしたら大變な事になると、心の何處かの隅では考へてゐた。その癖、それを物々しく恐れるでもなかつた。身體までが感覺的にしびれるやうな物うさを覺えた。

若者が現はれた。(どうしてあの男はそれ程の因縁もないのに執念く附きまつはるのだらうと葉子は他人事のやうに思つた)その亂れた美しい髮の毛が、夕日とかゞやく眩しい光の中で、ブロンドのやうにきらめいた。嚙みしめたその左の腕から血がぽたぽたと滴つてゐた。その滴りが腕から離れて宙に飛ぶ每に、虹色にきら〳〵と巴を描いて飛び跳つた。

「……私を見捨てるん……」

葉子はその聲をまざ〳〵と聞いたと思つた時、眼が覺めたやうにふつと更めて港を見渡した。而して、何んの感じも起さない中に、熟睡から一寸驚かされた赤兒が、又他愛なく眠りに落ちて行くやうに、再び夢とも現ともない心に返つて行つた。港の景色は何時の間にか消えてしまつて、自分で自分の腕にしがみ附いた若者の姿が、まざ〳〵と現はれ出た。葉子はそれを見ながら如何してこんな變な心持になるのだらう。血の故とでも云ふのだらうか。事によるとヒステリーに罹つてゐるのではないか知らんなどゝ呑氣に自分の身の上を考へてゐた。云は

ば悠々閑々と澄み渡つた水の隣りに、薄紙一重の界も置かず、たぎり返つて渦巻き流れる水がある。葉子の心はその靜かな方の水に浮びながら、瀧川の中にもまれ〳〵て落ちて行く自分といふものを他人事のやうに眺めやつてゐるやうなものだつた。葉子は自分の冷淡さに呆れながら、それでもやつぱり驚きもせず、手欄によりかゝつてぢつと立つてゐた。

「田川法學博士」

葉子は又ふと惡戯者らしくこんなことを思つてゐた。が、田川夫妻が自分と反對の舷の籐椅子に腰をかけて、世辭々々しく近寄つて來る同船者と何か戯談口でもきいてゐると獨りで決めると、安心でもしたやうに幻想は又かの若者に還つて行つた。葉子はふと右の肩に暖みを覺えるやうに思つた。そこには若者の熱い涙が浸み込んでゐるのだ。葉子は夢遊病者のやうな眼付をして、やゝ頭を後ろに引きながら肩の所を見ようとすると、その瞬間、若者を船から棧橋に連れ出した船員の事がはつと思ひ出されて、今まで盲ひてゐたやうな眼に、まざ〳〵とその大きな黑い顏が映つた。葉子はなほ夢みるやうな眼を見開いたまゝ、船員の濃い眉から黑い口髭のあたりを見守つてゐた。

船はもう可なり速力を早めて、霧のやうに降るともなく降る雨の中を走つてゐた。舷側から吐き出される捨水の音がざあ〳〵と聞こえ出したので、遠い幻想の國から一足飛びに取つて返した葉子は、夢ではなく、まがひもなく眼の前に立つてゐる船員を見て、何んといふ事なしにぎよつと本當に驚いて立ちすくんだ。始めてアダムを見たイヴのやうに葉子はまじ〳〵と珍らしくもない筈の一人の男を見やつた。

「隨分長い旅ですが、何、もうこれだけ日本が遠くなりましたんだ」

と云つてその船員は右手を延べて居留地の鼻を指した。がつしりした肩をゆすつて、勢よく水平に延ばしたそ

の腕からは、强く烈しく海上に生きる男の力が迸つた。葉子は默つたまゝ輕くうなづいた、胸の下の所に不思議な肉體的な衝動をかすかに感じながら。

「お一人ですな」

鹽がれた强い聲がまたかう響いた。葉子は又默つたまゝ輕くうなづいた。

船はやがて乘りたての船客の足許にかすかな不安を與へる程に速力を早めて走り出した。葉子は船員から眼を移して海の方を見渡して見たが、自分の側に一人の男が立つてゐるといふ、强い意識から起つて來る不安はどうしても消す事が出來なかつた。葉子にしてはそれは不思議な經驗だつた。こつちから何か物を云ひかけて、この苦しい壓迫を打ち破らうと思つてもそれが出來なかつた。今何か物を云つたら屹度ひどい不自然な物の云ひ方になるに決つてゐる。さうかと云つてその船員には無頓着にもう一度前のやうな幻想に身を任せようとしても駄目だつた。神經が急にざわ〳〵と騷ぎ立つて、ぼうつと煙つた霧雨の彼方さへ見透せさうに眼がはつきりして、先程のおつかぶさるやうな暗愁は、いつの間にか果敢ない出來心の仕業としか考へられなかつた。その船員は傍若無人に衣囊の中から何か書いた物を取り出して、それを鉛筆でチェックしながら、時々思ひ出したやうに顏を引いて眉を顰めながら、襟の折り返しについた汚點を、拇指の爪でごし〳〵と削つては彈いてゐた。

葉子の神經はそこにゐたゝまれない程ちか〳〵と激しく動き出した。自分と自分との間にのそ〳〵と遠慮もなく大胯で這入り込んで來る邪魔者でも避けるやうに、その船員から遠ざからうとして、つと手欄から離れて自分の船室の方に階子段を降りて行かうとした。

「何處にお出でゞす」

後ろから、葉子の頭から爪先きまでを小さなものでゞもあるやうに、一目に籠めて見やりながら、その船員はか

う尋ねた。葉子は、

「船室まで參りますの」

と答へない譯には行かなかつた。その聲は葉子の目論見に反して恐ろしくしとやかな響を立てゝゐた。するとその男は大股で葉子とすれ〴〵になるまで近づいて來て、

「船室ならば永田さんからのお話もありましたし、お獨旅のやうでしたから、醫務室の傍に移しておきました。御覽になつた前の部屋より少し窮屈かも知れませんが、何かに便利ですよ。御案內しませう」

と云ひながら葉子をすり拔けて先きに立つた。何か芳醇な酒のしみと葉卷煙草との匂ひが、この男個有の膚の匂ひでゞもあるやうに強く葉子の鼻をかすめた。葉子は、どしん〳〵と狹い階子段を踏みしめながら降りて行くその男の太い頸から廣い肩のあたりをぢつと見やりながらその後に續いた。

二十四五脚の椅子が食卓に背を向けてずらつと列べてある食堂の中程から、橫丁のやうな暗い廊下を一寸這入ると、右の戶に「醫務室」と書いた頑丈な眞鍮の札がかゝつてゐて、その向ひの左の戶には「No. 12 早月葉子殿」と白墨で書いた漆塗りの札が下つてゐた。船員はつか〳〵とそこに這入つて、いきなり勢よく醫務室の戶をノックすると、高いダブル・カラーの前だけを外して、上衣を脫ぎ捨てた船醫らしい男が、あたふたと細長いなま白い顏を突き出したが、そこに葉子が立つてゐるのを目ざとく見て取つて、慌てゝ首を引つ込めてしまつた。船員は大きな憚りのない聲で、

「おい十二番はすつかり掃除が出來たらうね」

と云ふと、醫務室の中からは女のやうな聲で、

「さしておきましたよ。綺麗になつてる筈ですが、御覽なすつて下さい。私は今一寸」

と船醫は姿を見せずに答へた。

「こりや一體船醫の私室なんですが、あなたの爲めにお明け申すつて云つてくれたもんですから、ボーイに掃除するやうに云ひつけておきましたんです。ど、綺麗になつとるか知らん」

船員はさうつぶやきながら戸を開けて一わたり中を見廻した。

「むゝ、いゝやうです」

而して道を開いて、衣囊から「日本郵船會社繪島丸事務長勳六等倉地三吉」と書いた大きな名刺を出して葉子に渡しながら、

「私が事務長をしとります。御用があつたら何んでもどうか」

葉子は又默つたまゝうなづいてその大きな名刺を手に受けた。而して自分の部屋ときめられたその部屋の高い閾を越えようとすると、

「事務長さんはそこでしたか」

と尋ねながら田川博士がその夫人と打ち連れて廊下の中に立ち現はれた。事務長が帽子を取つて挨拶しようとしてゐる間に、洋裝の田川夫人は葉子を目指して、スカーツの絹ずれの音を立てながらつか〳〵と寄つて來て眼鏡の奧から小さく光る眼でじろりと見やりながら、

「五十川さんが噂していらしつた方はあなたね。何んとか仰有いましたねお名は」

と云つた。この「何んとか仰有いましたね」といふ言葉が、名もないものを憐れんで見てやるといふ腹を十分に見せてゐた。今まで事務長の前で、珍らしく受身になつてゐた葉子は、この言葉を聞くと、強い衝動を受けたやうになつて我れに返つた。如何云ふ態度で返事をしてやらうかといふ事が、一番に頭の中で二十日鼠のやうに烈

しく働いたが、葉子はすぐ腹を決めてひどく下手に尋常に出た。「あ」と驚いたやうな言葉を投げておいて、叮嚀に低くつむりを下げながら、

「こんな所まで……恐れ入ります。私早月葉と申しますが、旅には不慣れで居りますのに獨旅で御座いますから……」

と云つて、眸を稻妻のやうに田川に移して、

「御迷惑では御座いませうが何分宜しく願ひます」

と又つむりを下げた。田川はその言葉の終るのを待ち兼ねたやうに引き取つて、

「何不慣れは私の妻も同樣ですよ。何しろこの船の中には女は二人ぎりだからお互です」

と餘り滑らかに云つて退けたので、妻の前でも憚るやうに今度は態度を改めながら事務長に向つて、

「チャイニース・ステアレーヂには何人程ゐますか日本の女は」

と問ひかけた。事務長は例の鹽から聲で、

「さあ、まだ帳簿も碌々整理して見ませんから、しつかりとは判り兼ねますが、何しろこの頃は大分殖えました。三四十人も居ますか。奥さんこゝが醫務室です。何しろ九月と云へば舊の二八月の八月ですから、太平洋の方は暴ける事もありますんだ。偶にはこゝにも御用が出來ますぞ。一寸船醫も御紹介しておきますで」

「まあそんなに荒れますか」

と田川夫人は實際恐れたらしく、葉子を顧みながら少し色をかへた。事務長は事もなげに、

「暴けますんだ隨分」

と今度は葉子の方をまともに見やつて微笑みながら、折から部屋を出て來た興錄といふ船醫を三人に引き合は

せた。

田川夫妻を見送つてから葉子は自分の部屋に這入つた。さらぬだに何處かじめ〳〵するやうな船室には、今日の雨の爲めに蒸すやうな空氣がこもつてゐて、汽船特有な西洋臭い匂ひが殊に強く鼻についた。帶の下になつた葉子の胸から背にかけたあたりは汗がじんわり滲み出たらしく、むし〳〵するやうな不愉快を感ずるので、狹苦しい寢臺を取りつけたり、洗面臺を据ゑたりしてあるその間に、窮屈に積み重ねられた小荷物を見廻しながら、帶を解き始めた。化粧鏡の附いた簞笥の上には、果物の籠が一つと花束が二つ載せてあつた。葉子は襟前をくつろげながら、誰からよこしたものかとその花束の一つを取り上げると、その側から厚い紙切れのやうなものが出て來た。手に取つて見ると、それは手札形の寫眞だつた。まだ女學校に通つてゐるらしい、髮を束髮にした娘の半身像で、その裏には「興錄さま。取り殘されたる千代より」としてあつた。そんなものを興錄が仕舞ひ忘れる筈がない。わざと忘れた風に見せて、葉子の心に好奇心なり輕い嫉妬なりを煽り立てようとする、あまり手許の見え透いたからくりだと思ふと、葉子はさげすんだ心持で、犬にでもやるやうにぽいとそれを床の上に抛りなげた。一人の旅の婦人に對して船の中の男の心が如何云ふ風に動いてゐるかをその寫眞一枚が語り貌だつた。葉子は何んと云ふ事なしに小さな皮肉な笑ひを唇の所に浮べてゐた。

寢臺の下に押し込んである平べつたいトランクを引き出して、其の中から浴衣を取り出してゐると、ノックもせずに突然戶を開けたものがあつた。葉子は思はず羞恥から顏を赤らめて、引き出した派手な浴衣を楯に、しだらなく脫ぎかけた長襦袢の姿をかくまひながら立ち上つて振り返つて見ると、それは船醫だつた。華やかな下着を浴衣の所々からのぞかせて、帶もなくほつそりと途方に暮れたやうに身を斜にして立つた葉子の姿は、男の眼にはほしいまゝな刺戟だつた。懇意づくらしく戶もたゝかなかつた興錄もさすがにどぎまぎして、這入らうにも

出ようにも所在に窮して、閾に片足を踏み入れたまゝ當惑さうに立つてゐた。
「飛んだ風をしてゐまして御免下さいまし。さ、お這入り遊ばせ。何んぞ御用でもいらつしやいましたの」
と葉子は笑ひかまけたやうに云つた。興錄はいよ〳〵度を失ひながら、
「いゝえ何、今でなくつてもいゝのですが、元のお部屋のお枕の下にこの手紙が殘つてゐましたのを、ボーイが屆けて來ましたんで、早くさし上げておかうと思つて實は何したんでしたが……」
と云ひながら衣囊から二通の手紙を取り出した。手早く受け取つて見ると、一つは古藤が木村に宛てたもの、一つは葉子にあてたものだつた。興錄はそれを手渡すと、一種の意味ありげな笑ひを眼だけに浮べて、顏だけはいかにも尤もらしく葉子を見やつてゐた。自分のした事を葉子もしたと興錄は思つてゐるに違ひない。葉子はさう推量すると、かの娘の寫眞を床の上から拾ひ上げた。而してわざと裏を向けながら見向きもしないで、
「こんなものがこゝにも落ちて居りましたの。お妹さんでいらつしやいますか。お綺麗ですこと」
と云ひながらそれをつき出した。
興錄は何か云ひ譯のやうな事を云つて部屋を出て行つた。と思ふと暫くして醫務室の方から事務長のらしい大きな笑ひ聲が聞こえて來た。それを聞くと、事務長はまだそこにゐたかと、葉子は我れにもなくはつとなつて思はず着かへかけた衣紋に左手をかけたまゝ、俯向き加減になつて横眼をつかひながら耳をそばだてた。破裂するやうな事務長の笑ひ聲がまた聞こえて來た。而して醫務室の戸をさつと開けたらしく、聲が急に一倍大きくなつて、
「Devil take it! No tame creature then, eh?」と亂暴に云ふ聲が聞こえたが、それと共にマッチを擦る音がして、やがて葉卷をくはへたまゝの口籠りのする言葉で、

通つて來た。かすかな匂ひが葉子の部屋にも
「もうぢき檢疫船だ。準備はいゝだらうな」
と云ひ殘したまゝ事務長は船醫の返事も待たずに行つてしまつたらしかつた。
葉子は聞耳をたてながらうなだれてゐた顏を上げると、正面をきつて何と云ふ事なしに微笑を漏らした。而してすぐぎよつとしてあたりを見廻したが、我れに返つて自分一人きりなのに安堵して、いそ〳〵と衣物を着かへ始めた。

一二

繪島丸が横濱を拔錨してからもう三日たつた。東京灣を出拔けると、黑潮に乘つて、金華山沖あたりからは航路を東北に向けて、眞直に緯度を上つて行くので、氣溫は二日目あたりから目立つて凉しくなつて行つた。陸の影は何時の間にか船のどの舷からも眺める事は出來なくなつてゐた。背羽根の灰色な腹の白い海鳥が、時々思ひ出したやうに寂しい聲で啼きながら、船の周圍を群れ飛ぶ外には、生き物の影とては見る事も出來ないやうになつてゐた。重い冷たい潮霧が野火の煙のやうに濛々と南に走つて、それが秋らしい狹霧となつて、船體を包むかと思ふと、忽ちからつと晴れた青空を船に殘して消えて行つたりした。格別の風もないのに海面は色濃く波打ち騷いだ。三日目からは船の中に盛んにスティームが通り始めた。
葉子はこの三日といふもの、一度も食堂に出ずに船室にばかり閉ぢ籠つてゐた。船に醉つたからではない。始めて遠い航海を試みる葉子にしては、それが不思議な位にやすい旅だつた。普段以上に食慾さへ增してゐた。神經に强い刺戟が與へられて、兎角鬱結し易かつた血液も濃く重たいなりに滑らかに血管の中を循環し、海から來

る一種の力が體の隅々まで行き亙つて、うづ〳〵する程な活力を感じさせた。漏らし所のないその活氣が運動もせずにゐる葉子の體から心に傳はつて、一種の悒鬱に變るやうにさへ思へた。

葉子はそれでも船室を出ようとはしなかつた。生れてから始めて孤獨に身を置いたやうな彼女は、子供のやうにそれが樂しみたかつたし、又船中で顏見知りの誰れ彼れが出來る前に、是れまでの事、是れからの事を心にしめて考へても見たいとも思つた。然し葉子が三日の間船室に引き籠り續けた心持には、もう少し違つたものもあつた。葉子は自分が船客達から激しい好奇の眼で見られようとしてゐるのを知つてゐた。立役は幕明きから舞臺に出てゐるものではない。觀客が待ちに待つて、待ち草臥れさうになつた時分に、しづ〳〵と乘り出して、舞臺の空氣を思ふさま動かさねばならぬのだ。葉子の胸の中にはこんな狡猾いいたづらな心も潛んでゐたのだ。

三日目の朝電燈が百合の花の萎むやうに消える頃葉子はふと深い眠りから蒸し暑さを覺えて眼を覺ました。スティームの通つて來るラディエターから、眞空になつた管の中に蒸汽の冷えた滴りが落ちて立てる激しい響が聞こえて、部屋の中は輕く汗ばむ程暖まつてゐた。三日の間狹い部屋の中ばかりにゐて坐り疲れ寢疲れのした葉子は、狹苦しい寢臺の中に窮屈に寢ちゞまつた自分を見出すと、下になつた半身に輕い痺れを覺えて、體を仰向けにした。而して一度開いた眼を閉ぢて、美しく圓味を持つた兩の腕を頭の上に伸して、寢亂れた髮を弄びながら、覺め際の快い眠りに又靜かに落ちて行つた。が、程もなく本當に眼をさますと、大きく眼を見開いて、慌てたやうに腰から上を起して、丁度眼通りのところにある一面に水氣で曇つた眼窓を長い袖で押し拭つて、ほてつた頰をひや〳〵するその窓ガラスに擦りつけながら外を見た。夜は本當には明け離れてゐないで、窓の向うには光のない濃い灰色がどんよりと擴がつてゐるばかりだつた。而して自分の體がずつと高まつてやがて又落ちて行くなと思はしい頃に、窓に近い舷にざあつとあたつて碎けて行く波濤が、單調な底力のある震動を船室に與へて、船は幽

かに横にかしいだ。葉子は身動きもせずに眼にその灰色を眺めながら、嚙みしめるやうに船の動搖を味はつて見た。遠く／＼來たと云ふ旅情が、さすがにしみ／″＼と感ぜられた。然し葉子の眼には女らしい涙は浮ばなかつた。活氣のずん／＼恢復しつゝあつた彼女には何かパセティックな夢でも見てゐるやうな思ひをさせた。

葉子はさうしたまゝで、過ぐる二日の間暇にまかせて思ひ續けた自分の過去を夢のやうに繰り返してゐた。聯絡のない終りのない繪卷が次ぎ／＼に擴げられたり捲かれたりした。基督を戀ひ戀うて、夜も晝もやみがたく、十字架を編み込んだ美しい帶を作つて獻げようといふ一心に、日課も何もそつちのけにして、指の先きがさゝくれるまで編針を動かした可憐な少女も、その幻想の中に現はれ出た。寄宿舍の二階の窓近く大きな花を豐かに開いた木蘭の香までがそこいらに漂つてゐるやうだつた。國分寺跡の、武藏野の一角らしい櫟の林も現はれた。すつかり少女のやうな無邪氣な素直な心になつてしまつて、孤笻の膝に身も魂も投げかけながら、涙と共にさゝやかれる孤笻の耳うちのやうに震へた細い言葉を、唯「はい／＼」と夢心地にうなづいて呑み込んだ甘い場面は、今の葉子とは違つた人のやうだつた。さうかと思ふと左岸の崕の上から廣瀨川を越えて靑葉山を一面に見渡した仙臺の景色がする／＼と開け渡つた。夏の日は北國の空にもあふれ輝いて、白い礫の河原の間を眞靑に流れる川の中には、赤裸な少年の群が赤々とした印象を眼に與へた。草を敷かんばかりに低くうづくまつて、華やかな色合のパラソルに日をよけながら、默つて思ひに耽ける一人の女――その時には彼女はどの意味からも女だつた――何處までも滿足の得られない心で、段々と世間から埋もれて行かねばならないやうな境遇に押し込められようとする運命。確かに道を踏みちがへたとも思ひ、踏みちがへたのは、誰がさした事だと神をすら詰つて見たいやうな思ひ。暗い產室も隱れてはゐなかつた。そこの恐ろしい沈默の中から起る强い快い赤兒の產聲――やみがたい母性の意識――「我れ既に世に勝てり」とでも云つて見たい不思議な誇り――同時に重く胸を押へつける生の暗い

急變。かゝる時思ひも設けず力強く迫つて來る振り捨てた男の執着。明日をも頼み難い命の夕闇にさまよひながら、切れ〴〵な言葉で葉子と最後の妥協を結ぼうとする病床の母――その顔は葉子の幻想を斷ち切る程の强さで現はれ出た。思ひ入つた決心を眉に集めて、日頃の樂天的な性情にも似ず、運命と取り組むやうな眞劍な顔付で大事の結着を待つ木村の顔。母の死を憐れむとも悲しむとも知れない涙を眼には湛へながら、氷のやうに冷え切つた心で、俯向いたまゝ、口一つきかない葉子自身の姿……そんな幻像が或はつぎ〴〵に、或は折り重つて、灰色の霧の中に動き現はれた。而して記憶は段々と過去から現在の方に近づいて來た。と、事務長の倉地の淺黒く日に燒けた顔と、その廣い肩とが思ひ出された。葉子は思ひもかけないものを見出したやうにはつとなると、その幻像は他愛もなく消えて、記憶は又遠い過去に歸つて行つた。それが又段々現在の方に近づいて來たと思ふと、最後には屹度倉地の姿が現はれ出た。

それが葉子をいら〳〵させて、葉子は始めて夢現の境から本當に眼ざめて、うるさいものでも拂ひのけるやうに、眼窓から眼をそむけて寢臺を離れた。葉子の神經は朝からひどく昻奮してゐた。スティームで存分に暖まつて來た船室の中の空氣は息苦しい程だつた。

船に乘つてから碌々運動もせずに、野菜氣の尠ない物ばかりを貪り食べたので、身內の血には激しい熱がこもつて、毛の尖へまでも通ふやうだつた。寢臺から立ち上つた葉子は瞑眩を感ずる程に上氣して、氷のやうな冷たいものでもひしと抱きしめたい氣持になつた。で、ふら〳〵と洗面臺の方に行つて、ピッチャーの水をなみ〳〵と陶器製の洗面盤にあけて、ずつぷり浸した手拭をゆるく絞つて、ひやつとするのを構はず、胸をあけて、それを乳房と乳房との間にぐつとあてがつて見た。强い烈しい動悸が押へてゐる手の平へ突き返して來た。葉子はさうしたまゝで前の鏡に自分の顔を近付けて見た。まだ夜の氣が薄暗くさまよつてゐる中に、頰をほてらしながら深

い呼吸をしてゐる葉子の顔が、自分にすら物凄い程なまめかしく映つてゐた。葉子は物好きらしく自分の顔に譯のわからない微笑を湛へて見た。

それでもその中に葉子の不思議な心のどよめきは鎭まつて行つた。鎭まつて行くにつれ、葉子は今までの引き續きで又冥想的な氣分に引き入れられてゐた。然しその時はもう夢想家ではなかつた。極く實際的な鋭い頭が針のやうに光つて尖つてゐた。葉子は濡手拭を洗面盤に抛りなげておいて、靜かに長椅子に腰をおろした。

笑ひ事ではない。一體自分は如何する積りでゐるんだらう。さう葉子は出發以來の問ひをもう一度自分に投げかけて見た。小さい時からまはりの人達に憚られる程才はじけて、同じ年頃の女の子とはいつでも一調子違つた行き方を、するでもなくして來なければならなかつた自分は、生れる前から運命にでも呪はれてゐるのだらうか。それかと云つて葉子はなべての女の順々に通つて行く道を通る事は如何しても出來なかつた。通つて見ようとした事は幾度あつたか解らない。かうさへ行けばいゝのだらうと通つて來て見ると、いつでも飛んでもなく違つた道を歩いてゐる自分を見出してしまつてゐた。而して躓いては倒れた。まはりの人達は手を取つて葉子を起してやる仕方も知らないやうな顔をして唯馬鹿らしく侮笑つてゐる。そんな風にしか葉子には思へなかつた。幾度ものそんな苦い經驗が葉子を片意地な、少しも人を頼らうとしない女にしてしまつた。而して葉子は謂はゞ本能の向せるやうに向いてどん／＼歩くより仕方がなかつた。葉子は今更のやうに自分のまはりを見廻して見た。何時の間にか葉子は一番近しい筈の人達からもかけ離れて、たつた一人で崖の際に立つてゐた。そこで唯一つ葉子を崖の上に繫いでゐる綱には木村との婚約といふ事があるだけだ。そこに踏みとゞまればよし、さもなければ、世の中との緣はたちどころに切れてしまふのだ。世の中に活きながら世の中との緣が切れてしまふのだ。木村との婚約で世の中は葉子に對して最後の和睦を示さうとしてゐるのだ。葉子に取つて、この最後の機會をも破り捨てよ

ちといふのはさすがに容易ではなかつた。木村といふ首桎を受けないでは生活の保障が絶え果てなければならないのだから。葉子の懷中には百五十弗の米貨があるばかりだつた。定子の養育費だけでも、米國に足を下すや否や、すぐに木村にたよらなければならないのは眼の前に分つてゐた。後詰となつてくれる親類の一人もないのは勿論の事、やゝともすれば親切ごかしに無いものまでせびり取らうとする手合ひが多いのだ。たま／＼葉子の姉妹の內實を知つて氣の毒だと思つても、葉子ではと云ふやうに手出しを控へるものばかりだつた。木村――葉子には義理にも愛も戀も起り得ない木村ばかりが、葉子に對する唯一人の戰士なのだ。あはれな木村は葉子の蠱惑に陷つたばかりで、早月家の人々から否應なしにこの重い荷を背負はされてしまつてゐるのだ。

如何してやらう。

葉子は思ひ餘つたその場遁れから、簞笥の上に興錄から受け取つたまゝ投げ捨てゝ置いた古藤の手紙を取り上げて、白い西洋封筒の一端を美しい指の爪で丹念に細く破り取つて、手筋は立派ながらまだ何處かたど／＼しい手跡でペンで走り書きした文句を讀み下して見た。

「あなたはおさんどんになるといふ事を想像して見る事が出來ますか。おさんどんといふ仕事が女にあるといふ事を想像して見る事が出來ますか。僕はあなたを見る時は何時でもさう思つて不思議な心持になつてしまひます。一體世の中には人を使つて、人から使はれると云ふ事を全くしないでいゝといふ人があるものでせうか。そんな事が出來得るものでせうか。僕はそれをあなたに考へていたゞきたいのです。

あなたは奇體な感じを與へる人です。あなたのなさる事はどんな危險な事でも危險らしく見えません。行きづまつた末にはかうといふ覺悟がちやんと出來てゐるやうに思はれるからでせうか。

僕があなたに始めてお目に懸つたのは、この夏あなたが木村君と一緒に八幡に避暑をして居られた時ですか

ら、あなたに就いては僕は何んにも知らないと云つていゝ位です。僕は第一一般的に女と云ふものについて何んにも知りません。然し少しでもあなたを知つたゞけの心持から云ふと、女の人と云ふものは僕に取つては不思議な謎です。あなたは何處まで行つたら行きつまると思つてゐるんです。あなたは旣に木村君で行きつまつてゐる人なんだと僕には思はれるのです。結婚を承諾した以上はその良人に行きづまるのが女の人の當然な道ではないでせうか。木村君で行きづまつて下さい。木村君にあなたを全部與へて下さい。木村君の親友として是れが僕の願ひです。

全體同じ年齡でありながら、あなたからは僕などは子供に見えるのでせうから、僕の云ふ事などは頓着なさらないかと思ひますが、子供にも一つの直覺はあります。そして子供はきつぱりした物の姿が見たいのです。あなたが木村君の妻になると約束した以上は、僕の云ふ事にも權威がある筈だと思ひます。

僕はさうは云ひながら一面にはあなたが羨しいやうにも、憎いやうにも、可哀さうなやうにも思ひます。あなたのなさる事が僕の理性を裏切つて奇怪な同情を喚び起すやうにも思ひます。僕は心の底に起るこんな働きをも强ひて押しつぶして理窟一方に固まらうとは思ひません。それほど僕は道學者ではない積りです。それだからと云つて、今のまゝのあなたでは、僕にはあなたを敬親する氣は起りません。木村君の妻としてあなたを敬親したいから、僕は敢てこんな事を書きました。さういふ時が來るやうにしてほしいのです。

木村君の事を――あなたを熱愛してあなたのみに希望をかけてゐる木村君の事を考へると僕はこれだけの事を書かずにはゐられなくなります。

古藤義一

木村葉子樣」

それは葉子に取つては本當に子供つぽい言葉としか響かなかつた。然し古藤は妙に葉子には苦手だつた。今も古藤の手紙を讀んで見ると、馬鹿々々しい事が云はれてゐるとは思ひながらも、一番大事な急所を偶然のやうにしつかり捕へてゐるやうにも感じられた。本當にこんな事をしてゐると、子供と見くびつてゐる古藤にも憐れまれるはめになりさうな氣がしてならなかつた。葉子は何んと云ふ事なく悒鬱になつて古藤の手紙を卷きをさめもせず膝の上に置いたまゝ眼をすゑて、ぢつと考へるともなく考へた。

それにしても、新しい教育を受け、新しい思想を好み、世事に疎いだけに、世の中の習俗からも飛び離れて自由でありげに見える古藤さへが、葉子が今立つてゐる蜓の際から先きには、葉子が足を踏み出すのを憚み恐れる樣子を明かに見せてゐるのだ。結婚といふものが一人の女に取つて、どれ程生活といふ實際問題と結び付き、女がどれ程その束縛の下に惱んでゐるかを考へて見る事さへしようとはしないのだ。さう葉子は思つても見た。

是れから行かうとする米國といふ土地の生活も葉子はひとりでに色々と想像しないではゐられなかつた。米國の人達はどんな風に自分を迎へ入れようとはするだらう。兎に角今までの狹い惱ましい過去と緣を切つて、何の關りもない社會の中に乘り込むのは面白い。和服よりも遙かに洋服に適した葉子は、そこの交際社會でも風俗では米國人を笑はせない事が出來る。歡樂でも哀傷でもしつくりと實生活の中に織り込まれてゐるやうな生活がそこにはあるに違ひない。女のチャームといふものが、習慣的な絆から解き放されて、その力だけに働く事の出來る生活がそこにはあるに違ひない。才能と力量さへあれば女でも男の手を借りずに自分を周りの人に認めさす事の出來る生活がそこにはあるに違ひない。女でも胸を張つて存分呼吸の出來る生活がそこにはあるに違ひない。少くとも交際社會のどこかではそんな生活が女に許されてゐるに違ひない。葉子はそんな事を空想するとむずむずする程快活になつた。そんな心持で古藤の言葉などを考へて見ると、丸で老人の繰言のやうにしか見えなかつた。

葉子は長い默想の中から活々と立ち上つた。而して化粧をすます爲めに鏡の方に近付いた。

木村を良人とするのに何んの屈託があらう。木村が自分の良人であるのは、自分が木村の妻であるといふ程に輕い事だ。木村といふ假面……葉子は鏡を見ながらさう思つて微笑んだ。而して亂れかゝる額際の髮を、振り仰いで後ろに撫でつけたり、兩方の鬢を器用にかき上げたりして、良工が細工物でもするやうに樂しみながら元氣よく朝化粧を終へた。濡れた手拭で、鏡に近づけた眼のまはりの白粉を拭ひ終ると、唇を開いて美しく揃つた齒並みを眺め、兩方の手の指を壺の口のやうに一所に集めて爪の掃除が行き屆いてゐるか確めた。見返ると船に乘る時着て來た單衣のぢみな衣物は、世捨人のやうにだらりと寂しく部屋の隅の帽子かけにかゝつたまゝになつてゐた。葉子は派手な袷をトランクの中から取り出して寢衣と着かへながら、それに眼をやると、肩にしつかりとしがみ附いて、泣きをめいた彼の狂氣じみた若者の事を思つた。と、すぐその側から若者を小脇に抱へた事務長の姿が思ひ出された。小雨の中を、外套も着ずに、小荷物でも運んで行つたやうに若者を棧橋の上に下して、ちよつと五十川女史に挨拶して船から投げた綱にすがるや否や、靜かに岸から離れて行く船の甲板の上に輕々と上つて來たその姿が、葉子の心をくすぐるやうに樂しませて思ひ出された。

夜はいつの間にか明け離れてゐた。眼窓の外は元のまゝに灰色はしてゐるが、活々とした光が添ひ加はつて、甲板の上を毎朝規則正しく散歩する白髮の米人とその娘との跫音がこつ〳〵快活らしく聞こえてゐた。化粧をすました葉子は長椅子にゆつくり腰をかけて、兩脚を眞直に揃へて長々と延ばしたまゝうつとりと思ふともなく事務長の事を思つてゐた。

その時突然ノックをしてボーイが珈琲を持つて這入つて來た。葉子は何か惡い所でも見附けられたやうに一寸ぎよつとして、延ばしてゐた脚の膝を立てた。ボーイは何時ものやうに薄笑ひをして一寸頭を下げて銀色の盆を

疊椅子(たゝみいす)の上においた。而して今日も食事は矢張り船室に運ばうかと尋ねた。

「今晩からは食堂にして下さい」

葉子は嬉しい事でも云つて聞かせるやうにかう云つた。ボーイは眞面目臭(くさ)つて「はい」と云つたが、ちらりと葉子を上眼で見て、急ぐやうに部屋を出た。葉子はボーイが部屋を出てどんな風をしてゐるかゞはつきり見えるやうだつた。ボーイはすぐにこ〱と不思議な笑ひを漏しながら、ケーク・ウォークの足つきで食堂の方に歸つて行つたに違ひない。程もなく、

「え、いよ〱御來迎(らいかう)？」

「來たね」

と云ふやうな野卑な言葉が、ボーイらしい輕薄な調子で聲高(こわだか)に取り交はされるのを葉子は聞いた。

葉子はそんな事を耳にしながら矢張り事務長の事を思つてゐた。「三日も食堂に出ないで閉ぢ籠(こも)つてゐるのに、何んといふ事務長だらう、一遍も見舞ひに來ないとはあんまりひどい」こんな事を思つてゐた。而してその一方では緣もゆかりもない馬のやうに唯頑丈な一人の男が何んでかう思ひ出されるのだらうとも思つてゐた。

葉子は輕い溜息(ためいき)をついて何氣なく立ち上つた。而して又長椅子に腰かける時には棚の上から事務長の名刺を持つて來て眺めてゐた。「日本郵船會社繪島丸事務長勳六等倉地三吉」と明朝(ミンテウ)ではつきり書いてある。葉子は片手で珈琲をすゝりながら、名刺を裏返してその裏を眺めた。而して眞白なその裏に何か長い文句でも書いてあるかのやうに、二重になる豐かな顎を襟の間に落して、少し眉をひそめながら、永い間まじろぎもせず見詰めてゐた。

一二

その日の夕方、葉子は船に來てから始めて食堂に出た。衣物は思ひ切つて地味なくすんだのを選んだけれども、顏だけは存分に若くつくつてゐた。二十を越すや越さずに見える、眼の大きな、沈んだ表情の彼女の襟の藍鼠は、何んとなく見る人の心を痛くさせた。細長い食卓の一端に、カップ・ボードを後ろにして座を占めた事務長の右手には田川夫人がゐて、その向ひが田川博士、葉子の席は博士のすぐ隣りに取つてあつた。その外の船客も大概は既に卓に向つてゐた。葉子の跫音が聞こえると、逸早く眼くばせをし合つたのはボーイ仲間で、その次にひどく落ち付かぬ樣子をし出したのは、事務長と向ひ合つて食卓の他の一端にゐた鬚の白い亞米利加人の船長であつた。慌てゝ席を立つて、右手にナプキンを下げながら、自分の前を葉子に通らせて、顏を眞赤にして座に返つた。葉子はしとやかに人々の物數奇らしい視線を受け流しながら、ぐるつと食卓を廻つて自分の席まで行くと、田川博士は竊むやうに夫人の顏を一寸窺つておいて、肥つた體をよけるやうにして葉子を自分の隣りに坐らせた。

坐り仕ひをたゞしてゐる間、澤山の注視の中にも、葉子は田川夫人の冷たい眸の光を浴びてゐるのを心地惡い程に感じた。やがてきちんと愼ましく正面を向いて腰かけて、ナプキンを取り上げながら、先づ第一に田川夫人の方に眼をやつてそつと挨拶すると、今までの角々しい眼にもさすがに申譯程の笑みを見せて、夫人が何か云はうとした瞬間、その時までぎごちなく話を途切らしてゐた田川博士も事務長の方を向いて何か云はうとした所であつたので、兩方の言葉が氣まづくぶつかりあつて、夫婦は思はず同時に顏を見合せた。一座の人々も、日本人と云はず外國人と云はず、葉子に集めてゐた眸を田川夫妻の方に向けた。「失禮」と云つてひかへた博士に夫人は一寸頭を下げておいて、皆んなに聞こえる程はつきり澄んだ聲で、

「とんと食堂にお出でがなかつたので、お案じ申しましたの。船にはお困りですか」

と云つた。さすがに世慣れて才走つたその言葉は、人の上に立ちつけた重みを見せた。葉子はにこやかに默つ

てうなづきながら、位を一段落して會釋するのをさう不快には思はぬ位だつた。二人の間の挨拶はそれなりで途切れてしまつたので、田川博士は徐ろに事務長に向つてし續けてゐた話の緒目をつながうとした。

「それから……その……」

然し話の緒口は思ふやうに出て來なかつた。事もなげに落ち付いた様子に見える博士の心の中に、輕い混亂が起つてゐるのを、葉子はすぐ見て取つた。思ひ通りに一座の氣分を動搖させる事が出來るといふ自信が裏書きされたやうに葉子は思つてそつと滿足を感じてゐた。而してボーイ長の指圖でボーイ等が手器用に運んで來たポタージュを啜りながら、田川博士の方の話に耳を立てた。

葉子が食堂に現はれて自分の視界に這入つて來ると、臆面もなくぢつと眼を定めてその顏を見やつた後に、無頓着に食匙を動かしながら、時々食卓の客を見廻して氣を配つてゐた事務長は、下唇を返して鬚の先きを吸ひながら、鹽さびのした太い聲で、

「それからモンロー主義の本體は」

と話の緒目を引つ張り出しておいて、まともに博士を打ち見やつた。博士は少し面伏せな様子で、

「さう、その話でしたな。モンロー主義もその主張は始めの中は、北米の獨立諸州に對して歐羅巴の干渉を拒むと云ふだけのものであつたのです。處が其の政策の內容は年と共に段々變つてゐる。モンローの宣言は立派に文字になつて殘つてゐるけれども、法律と云ふ譯ではなし、文章も融通がきくやうに出來てゐるので、取りやうによつては、どうにでも伸縮する事が出來るのです。マッキンレー氏などは隨分極端にその意味を擴張してゐるらしい。尤も之れにはクリーブランドといふ人の先例もあるし、マッキンレー氏の下にはもう一人有力な黒幕がある筈だ。どうです齋藤君」

と二三人おいた斜向ひの若い男を顧みた。齋藤と呼ばれた、ワシントン公使館赴任の外交官補は、眞赤になつて、今まで葉子に向けてゐた眼を大急ぎで博士の方に外らして見たが、質問の要領をはつきり捕へそこねて、更に赤くなつて術ない身振りをした。これ程な席にさへ嘗て臨んで習慣のないらしいその人の素性がその慌て方に十分に見え透いてゐた。博士は見下したやうな態度で暫時その青年のどぎまぎした樣子を見てゐたが、返事を待ちかねて、事務長の方を向かうとした時、突然遙か遠い食卓の一端から、船長が顏を眞赤にして、

「You mean Teddy the roughrider?」

と云ひながら子供のやうな笑顏を人々に見せた。船長の日本語の理解力をそれ程に思ひ設けてゐなかつたらしい博士は、この不意打ちに今度は自分がまごついて、一寸返事をしかねてゐると、田川夫人がさそくにそれを引き取つて、

「Good hit for you, Mr. Captain!」

と癖のない發音で云つて退けた。これを聞いた一座は、殊に外國人達は、椅子から乘り出すやうにして夫人を見た。夫人はその時人の眼にはつきかねるほどの敏捷さで葉子の方を窺つた。葉子は眉一つ動かさずに、下を向いたまゝでスープを啜つてゐた。

愼しみ深く大匙を持ちあつかひながら、葉子は自分に何か際立つた印象を與へようとして、色々な眞似を競ひ合つてゐるやうな人々の樣を心の中で笑つてゐた。實際葉子が姿を見せてから、食堂の空氣は調子を變へてゐた。殊に若い人達の間には一種の重苦しい波動が傳はつたらしく、物を云ふ時、彼等は知らず〳〵激昂したやうな高い調子になつてゐた。殊に一番年若く見える一人の上品な青年――船長の隣座にゐるので葉子は家柄の高い生れに違ひないと思つた――などは、葉子と一眼顏を見合はしたが最後、震へんばかりに興奮して、顏を得上げない

でゐた。それだのに事務長だけは、一向動かされた様子が見えぬばかりか、どうかした拍子に顔を合せた時でも、その臆面のない、人を人とも思はぬやうな熟視は、却つて葉子の視線をたじろがした。人間を眺めあきたやうな氣倦るげなその眼は、濃い睫毛の間から insolent な光を放つて人を射た。葉子はかうして思はず眸をたじろがす度毎に事務長に對して不思議な憎しみを覺えると共に、もう一度その憎むべき眼を見すゑてその中に潜む不思議を存分に見窮めてやりたい心になつた。葉子はさうした氣分に促されて時々事務長の方に牽き附けられるやうに視線を送つたが、その度毎に葉子の眸は脆くも手きびしく追ひ退けられた。

かうして妙な氣分が食卓の上に織りなされながらやがて食事は終つた。一同が座を立つ時、物慣らされた物腰で、椅子を引いてくれた田川博士にやさしく微笑を見せて禮をしながらも、葉子は矢張り事務長の擧動を仔細に見る事に半ば氣を奪はれてゐた。

「少し甲板に出て御覧になりましな。寒くとも氣分は晴々しますから。私も一寸部屋に歸つてショールを取つて出て見ます」

かう葉子に云つて田川夫人は良人と共に自分の部屋の方に去つて行つた。

葉子も部屋に歸つて見たが、今まで閉ぢ籠つてばかりゐると左程にも思はなかつたけれども、食堂程の廣さの所からでもそこに來て見ると、息づまりがしさうに狹苦しかつた。で、葉子は長椅子の下から、木村の父が使ひ慣れた古トランク――その上に古藤が油繪具でY・Kと書いてくれた古トランクを引き出して、その中から黒い駝鳥の羽のボアを取り出して、西洋臭いその匂ひを快く鼻に感じながら、深々と頸を捲いて、甲板に出て行つて見た。窮屈な階子段をやゝよろ〳〵しながら昇つて、重い戸を開けようとすると外氣の抵抗が中々激しくつて押しもどされようとした。きりつと搾り上げたやうな寒さが、戸の隙から縦に細長く葉子を襲つた。

甲板には外國人が五六人厚い外套にくるまつて、堅いティークの床をかつ〳〵と踏みならしながら、押し默つて勢よく右往左往に散歩してゐた。田川夫人の姿はその邊にはまだ見出されなかつた。鹽氣を含んだ冷たい空氣は、室内にのみ閉ぢ籠つてゐた葉子の肺を押し擴げて、頰には血液がちく〳〵と輕く針をさすやうに皮膚に近く突き進んで來るのが感ぜられた。葉子は散歩客には構はずに甲板を横ぎつて船べりの手欄によりかゝりながら、波又波と果てしもなく連なる水の堆積をはる〳〵と眺めやつた。折り重つた鈍色の雲の彼方に夕日の影は跡形もなく消え失せて、闇は重い不思議な瓦斯のやうに力強く總ての物を押しひしやげてゐた。雪をたつぷり含んだ空だけが、その闇と僅かに爭つて、南方には見られぬ暗い、燐のやうな、寂しい光を殘してゐた。一種のテンポを取つて高くなり低くなりする黑い波濤の彼方には、更に黑ずんだ波の穗が果てしもなく連なつてゐた。船は思つたより激しく動搖してゐた。赤いガラスを篏めた檣燈が空高く、右から左、左から右へと廣い角度を取つて閃いた。閃く度に船が横かしぎになつて、重い水の抵抗を受けながら進んで行くのが、葉子の足から體に傳はつて感ぜられた。

葉子はふら〳〵と船にゆり上げゆり下げられながら、まんじりともせずに、黑い波の峰と波の谷とか交る〳〵眼の前に現はれるのを見つめてゐた。豐かな髮の毛を透して寒さがしん〳〵と頭の中に滲みこむのが、始めの中は珍らしくいゝ氣持だつたが、やがて痺れるやうな頭痛に變つて行つた。……と、急に、何處をどう潛んで來たとも知れない、いやな淋しさが盜風のやうに葉子を襲つた。船に乘つてから春の草のやうに萠え出した元氣はぽつきりと心を留められてしまつた。顳顬がじん〳〵と痛み出して、泣きつかれの後に似た不愉快な睡氣の中に、胸をついて嘔氣さへ催して來た。葉子は慌てゝあたりを見廻したが、もうそこいらには散歩の人足も絶えてゐた。けれども葉子は船室に歸る氣力もなく、右手でしつかりと額を押へて、手欄に顏を伏せながら念じるやうに眼をつ

ぶつて見たが、云ひやうのない寂しさはいや增すばかりだつた。葉子はふと定子を懷姙してゐた時の烈しい惡阻の苦痛を思ひ出した。それは折から痛ましい回想だつた。……定子……葉子はもうその笞には堪へないと云ふやうに頭を振つて、氣を紛らす爲めに眼を開いて、留度なく動く波の戲れを見ようとしたが、一眼見るやぐら〳〵と眩暈を感じて一たまりもなく又突つ伏してしまつた。深い悲しい溜息が思はず出るのを留めようとしても甲斐がなかつた。「船に醉つたのだ」と思つた時にはもう體中は不快な嘔感の爲めにわな〳〵と震へてゐた。

「嘔けばいゝ」

さう思つて手欄から身を乘り出す瞬間、體中の力は腹から胸元に集まつて、背は思はずも激しく波打つた。その後はもう夢のやうだつた。

暫くしてから葉子は力が拔けたやうになつて、ハンケチで口許を拭ひながら、賴りなくあたりを見廻した。甲板の上も波の上のやうに荒涼として人氣がなかつた。明るく灯の光の漏れてゐた眼窓は殘らずカーテンで蔽はれて暗くなつてゐた。右にも左にも人はゐない。さう思つた心のゆるみにつけ込んだのか、胸の苦しみは又急によせ返して來た。葉子はもう一度手欄に乘り出してほろ〳〵と熱い淚をこぼした。例へば高くつるした大石を切つて落したやうに、過去といふものが大きな一つの暗い悲しみとなつて胸を打つた。物心を覺えてから二十五の今日まで、張りつめ通した心の絲が、今こそ思ひ存分ゆるんだかと思はれるその悲しい快さ。葉子はその空しい哀感にひたりながら、重ねた兩手の上に額を乘せて手欄によりかゝつたまゝ重い呼吸をしながらほろ〳〵と泣き續けた。一時性貧血を起した額は死人のやうに冷え切つて、泣きながらも葉子はどうかするとふつと引き入れられるやうに、假睡に陷らうとした。而してははつと何かに驚かされたやうに眼を開くと、また底の知れぬ哀感が何處からともなく襲ひ入つた。悲しい快さ。葉子は小學校に通つてゐる時分でも、泣きたい時には、人前では齒を喰

ひしばつてゐて、人のゐない所まで行つて隱れて泣いた。淚を人に見せるといふのは卑しい事にしか思へなかつた。乞食が哀れみを求めたり、老人が愚痴を云ふのと同樣に、葉子には穢らはしく思へてゐた。然しその夜に限つては、葉子は誰の前でも素直な心で泣けるやうな氣がした。誰かの前でさめ〴〵と泣いて見たいやうな氣分にさへなつてゐた。しみ〴〵と憐れんでくれる人もありさうに思へた。さうした氣持で葉子は小娘のやうに他愛もなく泣きつゞけてゐた。

その時甲板のかなたから靴の音が聞こえて來た。二人らしい跫音だつた。その瞬間までは誰の胸にでも抱きついてしみ〴〵泣けると思つてゐた葉子は、その音を聞きつけるとはつといふ間もなく、張りつめたいつものやうな心になつてしまつて、大急ぎで淚を押し拭ひながら、踵を返して自分の部屋に戾らうとした。が、その時はもう遲かつた。洋服姿の田川夫妻がはつきりと見分けがつく程の距離に進みよつてゐたので、さすがに葉子もそれを見て見ぬふりでやり過ごす事は得しなかつた。淚を拭ひ切ると、左手を擧げて髮のほつれをしなをしながらかき上げた時、二人はもうすぐ傍に近寄つてゐた。

「あらあなたでしたの。私共は少し用事が出來ておくれましたが、こんなにおそくまで室外にいらしつてお寒くはありませんでしたか。氣分はいかゞです」

田川夫人は例の目下の者に云ひ慣れた言葉を器用に使ひながら、はつきりとから云つて覗き込む樣にした。夫妻はすぐ葉子が何をしてゐたかを感付いたらしい。葉子はそれをひどく不快に思つた。

「急に寒い所に出ました故ですかしら、何んだか頭がぐら〳〵致しまして」

「お嘔しなさつた……それはいけない」

田川博士は夫人の言葉を聞くと尤もと云ふ風に、二三度こつくりとうなづいた。厚外套にくるまつた肥つた博

士と、暖かさうなスコッチの裾長の服に、露西亞帽を眉際まで被つた夫人との前に立つと、やさ形の葉子は背丈けこそ高いが、二人の娘ほどに眺められた。

「どうだ一緒に少し歩いて見ちや」

と田川博士が云ふと、夫人は、

「好う御座いませうよ、血液がよく循環して」と應じて葉子に散歩を促した。葉子は已むを得ず、かつ〳〵と鳴る二人の靴の音と、自分の上草履の音とを淋しく聞きながら、夫人の側にひき添つて甲板の上を歩き始めた。ギーイときしみながら船が大きくかしぐのにうまく中心を取りながら歩かうとすると、また不快な氣持が胸先にこみ上げて來るのを葉子は強く押し靜めて事もなげに振舞はうとした。

博士は夫人との會話の途切れ目を捕へては、話を葉子に向けて慰め顏にあしらはうとしたが、いつでも夫人が葉子のすべき返事をひつたくつて物を云ふので、折角の話は腰を折られた。葉子は然し結句それをいゝ事にして、自分の思ひに耽りながら二人に續いた。暫く歩きなれて見ると、運動が出來た爲めか、段々嘔氣は感ぜぬやうになつた。田川夫妻は自然に葉子を會話からのけものにして、二人の間で四方山の噂話を取り交はし始めた。不思議な程に緊張した葉子の心は、それらの世間話には些かの興味も持ち得ないで、寧ろその無意味に近い言葉の數々を、自分の冥想を妨げる騒音のやうにうるさく思つてゐた。と、不圖田川夫人が事務長と云つたのを小耳にはさんで、思はず針でも踏みつけたやうにぎよつとして、默想から取つて返して聞耳を立てた。自分でも驚く程神經が騒ぎ立つのを如何する事も出來なかつた。

「隨分したゝか者らしう御座いますわね」

さう夫人の云ふ聲がした。

「さうらしいね」

博士の聲には笑ひがまじつてゐた。

「賭博が大の上手ですつて」

「さうかねえ」

事務長の話はそれぎりで絶えてしまつた。葉子は何んとなく物足らなくなつて、又何か云ひ出すだらうと心待ちにしてゐたが、その先きを續ける樣子がないので、心殘りを覺えながら、また自分の心に歸つて行つた。

暫くすると夫人がまた事務長の噂をし始めた

「事務長の側に坐つて食事をするのはどうも厭やでなりませんの」

「そんなら早月さんに席を代つて貰つたらいゝでせう」

葉子は闇の中で鋭く眼をかゞやかしながら夫人の樣子を窺つた。

「でも夫婦がテーブルに列ぶつて法はありませんわ……ねえ早月さん」

かう戲談らしく夫人は云つて、一寸葉子の方を振り向いて笑つたが、別にその返事を待つといふでもなく、始めて葉子の存在に氣付きでもしたやうに、色々と身の上などを探りを入れるらしく聞き始めた。田川博士も時々親切らしい言葉を添へた。葉子は始めの中こそ愼ましやかに事實にさ程遠くない返事をしてゐたものゝ、話が段段深入りして行くにつれて、田川夫人と云ふ人は上流の貴夫人だと自分でも思つてゐるらしいに似合はない思ひやりのない人だと思ひ出した。それはあり内の質問だつたかも知れない。けれども葉子にはさう思へた。緣もゆかりもない人の前で思ふまゝな侮辱を加へられるとむつとせずにはゐられなかつた。知つた所が何んにもならない話を、木村の事まで根ほり葉ほり問ひたゞして一體如何しようといふ氣なのだらう。老人でもあるならば、過

ぎ去つた昔を他人にくど〳〵と話して聞かせて、せめて慰むといふ事もあらう。「老人には過去を、若い人には未來を」といふ交際術の初歩すら心得ないがさつな人だ。自分ですらそつと手もつけないで濟ませたい血なまぐさい身の上を……自分は老人ではない。葉子は田川夫人が意地にかゝつてこんな惡戲をするのだと思ふと激しい敵意から唇をかんだ。

　然しその時田川博士が、サルンから漏れて來る灯の光で時計を見て、八時十分前だから部屋に歸らうと云ひ出したので、葉子は別に何も云はずにしまつた。三人が階子段を降りかけた時、夫人は、葉子の氣分には一向氣付かぬらしく、――若しさうでなければ氣付きながらわざと氣付かぬらしく振舞つて、

「事務長はあなたのお部屋にも遊びに見えますか」

と突拍子もなくいきなり問ひかけた。それを聞くと葉子の心は何んと云ふ事なしに理不盡な怒りに捕へられた。得意な皮肉でも思ひ存分に浴びせかけてやらうかと思つたが、胸をさすり下してわざと落ち付いた調子で、

「いゝえちつともお見えになりませんが……」

と空々しく聞こえるやうに答へた。夫人はまだ葉子の心持には少しも氣付かぬ風で、

「おやさう。私の方へは度々いらして困りますのよ」

と小聲で囁いた。「何を生意氣な」葉子は前後なしにかう心の中に叫んだが一言も口には出さなかつた。敵意――嫉妬とも云ひ代へられさうな――敵意がその瞬間からすつかり根を張つた。その時夫人が振り返つて葉子の顏を見たならば、思はず博士を楯に取つて恐れながら身をかはさずにはゐられなかつたらう、――そんな場合には葉子は固よりその瞬間に稻妻のやうにすばしこく隔意のない顏を見せたには違ひなからうけれども。葉子は一言も云はずに默禮したまゝ二人に別れて自分の部屋に歸つた。

室内はむつとする程暑かつたが、胸元が妙にしめつけられたやうに苦しいので、急いでボアをかいやつて床の上に捨てたまゝ、投げるやうに長椅子に倒れかゝつた。

それは不思議だつた。葉子の神經は時には自分でも持て餘す程鋭く働いて、誰も氣のつかない匂ひがたまらない程氣になつたり、人の着てゐる衣物の色合が見てゐられない程不調和で不愉快であつたり、周圍の人が腑抜けな木偶のやうに甲斐なく思はれたり、靜かに空を渡つて行く雲の脚が瞑眩がする程めまぐるしく見えたりして、我慢にもぢつとしてゐられない事は絶えずあつたけれども、その夜のやうに鋭く神經の尖つて來た事は覺えがなかつた。神經の末梢がまるで大風に遇つた梢のやうにざわ／＼と音がするかとさへ思はれた。葉子は脚と脚とをぎゆつとからみ合せてそれに力をこめながら、右手の指先きを四本揃へてその爪先きを、水晶のやうに固い美しい齒で一思ひに激しく嚙んで見たりした。惡寒のやうな小刻みな身ぶるひが絶えず足の方から頭へと波動のやうに傳はつた。寒いためにさうなるのか、暑い爲めにさうなるのかよく分らなかつた。さうしていら／＼しながらトランクを開いたまゝで取り散らした部屋の中をぼんやり見やつてゐた。眼はうるさく霞んでゐた。ふと落ち散つたものゝ中に葉子は事務長の名刺があるのに眼をつけて、身をかゞめてそれを拾ひ上げた。それを拾ひ上げると眞二つに引き裂いてまた床になげた。それはあまりに手答へなく裂けてしまつた。葉子はまた何かもつとうんと手答へのあるものを尋ねるやうに熱して輝く眼でまじ／＼とあたりを見廻してゐた。と、カーテンを引き忘れてゐた。恥かしい樣子を見られはしなかつたと思ふと胸がどきんとしていきなり立ち上らうとした拍子に、葉子は窓の外に人の顏を認めたやうに思つた。田川博士のやうでもあつた。田川夫人のやうでもあつた。然しそんな筈はない、二人はもう部屋に歸つてゐる。事務長……

葉子は思はず裸體を見られた女のやうに固くなつて立ちすくんだ。激しい戰きが襲つて來た。而して何の思慮

もなく床の上のボアを取つて胸にあてがつたが、次ぎの瞬間にはトランクの中からショールを取り出してボアと一緒にそれを抱へて、逃げる人のやうに、あたふたと部屋を出た。

船のゆらぐ毎に木と木との擦れあふ不快な音は、大方船客の寢しづまつた夜の寂寞の中に際立つて響いた。自動平衡器の中にともされた蠟燭は壁板に奇怪な角度を取つて、ゆるぎもせずにぼんやりと光つてゐた。

戸を開けて甲板に出ると、甲板のあなたは先刻のまゝの波又波の堆積だつた。大煙筒から吐き出される煤煙は眞黑い天の河のやうに無月の空を立ち割つて水に近く斜めに流れてゐた。

一三

そこだけは星が光つてゐないので、雲のある所がやうやく知れる位思ひ切つて暗い夜だつた。おつかぶさつて來るかと見上ぐれば、眼のまはる程遠のいて見え、遠いと思つて見れば、今にも頭を包みさうに近く逼つてる鋼色の沈默した大空が、際限もない羽を垂れたやうに、同じ暗色の海原に續く所から波が湧いて、闇の中をのたうちまろびながら、見渡す限り喚き騷いでゐる。耳を澄して聞いてゐると、水と水とが激しくぶつかり合ふ底の方に、

「おーい、おい、おい、おーい」

と云ふかと思はれる聲ともつかない一種の奇怪な響が、舷をめぐつて叫ばれてゐた。葉子は前後左右に大きく傾く甲板の上を、傾くまゝに身を斜めにして辛く重心を取りながら、よろけ／＼ブリッヂに近いハッチの物蔭まで辿りついて、ショールで深々と頸から下を卷いて、白ペンキで塗つた板圍に身を寄せかけて立つた。佇んだ所は風下になつてゐるが、頭の上では、檣から垂れ下つた索綱の類が風にしなつてうなりを立て、アリウシヤン

群島近い高緯度の空氣は、九月の末とは思はれぬ程寒く霜を含んでゐた。氣負ひに氣負つた葉子の肉體は然しさして寒いとは思はなかつた。寒いとしても寧ろ快い寒さだつた。もうどん〳〵と冷えて行く衣物の裏に、心臟のはげしい皷動につれて、乳房が冷たく觸れたり離れたりするのが、なやましい氣分を誘ひ出したりした。それに佇んでゐるのに脚が爪先きから段々に冷えて行つて、やがて膝から下は知覺を失ひ始めたので、氣分は妙に上ずつて來て、葉子の幼ない時からの癖である夢とも現とも知れない音樂的な錯覺に陷つて行つた。五體も心も不思議な熱を覺えながら、一種のリズムの中に搖り動かされるやうになつて行つた。何を見るともなく凝然と見定めた眼の前に、無數の星が船の動搖につれて光のまたゝきをしながら、ゆるいテンポを調へてゆらり〳〵と靜かにをどると、帆綱の呻りが張り切つたバスの聲となり、その間を「おーい、おい、おい、おーい……」と心の聲とも波のうめきとも分らぬトレモロが流れ、盛り上り、くづれこむ波又波がテノルの役目を勤めた。聲が形となり、形が聲となり、それから一緒にもつれ合ふ姿を葉子は眼で聞いたり耳で見たりしてゐた。何んの爲めに夜寒を甲板に出て來たか葉子は忘れてゐた。夢遊病者のやうに葉子は驀地にこの不思議な世界に落ちこんで行つた。それでゐて、葉子の心の一部分はいたましい程醒めきつてゐた。葉子は燕のやうにその音樂的な夢幻界を翔け上り潛りぬけて樣々な事を考へてゐた。

屈辱、屈辱……屈辱――思索の壁は屈辱といふちか〳〵と寒く光る色で一面に塗りつぶされてゐた。その表面に田川夫人や事務長や田川博士の姿が目まぐるしく音律に乘つて動いた。葉子はうるさゝうに頭の中にある手のやうなもので無性に拂ひ除けようと試みたが無駄だつた。皮肉な横目をつかつて青味を帶びた田川夫人の顏が、攪き亂された水の中を、小さな泡が逃げてゞも行くやうに、ふら〳〵とゆらめきながら上の方に遠ざかつて行つた。先づよかつたと思ふと、事務長の insolent な眼付が低い調子の伴音となつて、ぢつと動かない中にも力ある震動

をしながら、葉子の眼睛の奥を網膜まで見透す程ぎゆつと見据ゑてゐた。「何んで事務長や田川夫人なんぞがこんなに自分を煩はすだらう。憎らしい。何んの因緣で……」葉子は自分をかう卑しみながらも、男の眼を迎へ慣れた媚びの色を知らず〳〵上瞼に集めて、それに應じようとする途端、日に向つて眼を閉ぢた時に綾をなして亂れ飛ぶあの不思議な種々な色の光體、それに似たものが繚亂として心を取り圍んだ。星はゆるいテンポでゆらり〳〵と靜かにをどつてゐる。「おーい、おい、おい、おーい」……葉子は思はずかつと腹を立てた。その憤りの膜の中に總ての幻影はすーつと吸ひ取られてしまつた。と思ふとその憤りすらが見る〳〵ぼやけて、後には感激の更にない死のやうな世界が果てしなくもどんよりと澱んだ。葉子は暫くは氣が遠くなつて何事も辨へないでゐた。

やがて葉子はまた徐ろに意識の閾に近づいて來てゐた。

煙突の中の黑い煤の間を、橫すぢかひに休らひながら飛びながら、上つて行く火の子のやうに、葉子の幻想は暗い記憶の洞穴の中を右左によろめきながら奥深く辿つて行くのだつた。自分でさへ驚くばかり底の底に又底のある迷路を恐る〳〵傳つて行くと、果てしもなく現はれ出る人の顏の一番奥に、赤い衣物を裾長に着て、眩い程に輝き渡つた男の姿が見え出した。葉子の心の周圍にそれまで響いてゐた音樂は、その瞬間ぱつたり靜まつてしまつて、耳の底がかーんとする程空恐ろしい寂寞の中に、船の舳の方で氷をたゝき破るやうな寒い時鐘の音が聞こえた。「カンカン、カンカン、カーン」……。葉子は何時の鐘だと考へて見る事もしないで、そこに現はれた男の顏を見分けようとしたが、木村に似た容貌がおぼろに浮んで來るだけで、どう見直して見てもはつきりした事はもどかしい程分らなかつた。木村である筈はないんだがと葉子はいら〳〵しながら思つた。「木村は私の良人ではないか。その木村が赤い衣物を着てゐるといふ法があるものか。……可哀さうに、木村はサン・フランシスコから今頃はシヤトルの方に來て、私の着くのを一日千秋の思ひで待つてゐるだらうに、私はこんな事をしてこゝで

赤い衣物を着た男なんぞを見詰めてゐる。千秋の思ひで待つ？　それはさうだらう。けれども私が木村の妻になつてしまつたが最後、千秋の思ひで私を待つたりした木村がどんな良人に變るかは知れ切つてゐる。憎いのは男だ……木村でも倉地でも……又事務長なんぞを思ひ出してゐる。さうだ、米國に着いたらもう少し落ち着いて考へた生き方をしよう。木村だつて打てば響く位はする男だ。……彼地に行つて纏まつた金が出來たら、何んと云つてもかまはない定子を呼び寄せてやる。あ、定子の事なら木村は承知の上だつたのに。それにしても木村が赤い衣物などを着てゐるのはあんまりをかしい……」ふと葉子はもう一度赤い衣物の男を見た。事務長の顔が赤い衣物の上に似合はしく乘つてゐた。葉子はぎよつとした。而してその顔をもつとはつきり見詰めたい爲めに重い／＼瞼を強ひて押し開く努力をした。

見ると葉子の前にはまさしく、角燈を持つて焦茶色のマントを着た事務長が立つてゐた。而して、

「どうなさつたんだ今頃こんな所に、……今夜はどうかしてゐる……岡さん、あなたの仲間がもう一人こゝにゐますよ」

と云ひながら事務長は魂を得たやうに動き始めて、後ろの方を振り返つた。事務長の後ろには、食堂で葉子と一目顔を見合はすと、震へんばかりに昂奮して顔を得上げないでゐた上品な彼の青年が、眞靑な顔をして物に怯ぢたやうに愼ましく立つてゐた。

眼はまだ／＼と開いてゐたけれども葉子はまだ夢心地だつた。事務長のゐるのに氣付いた瞬間からまた聞こえ出した波濤の音は、前のやうに音樂的な所は少しもなく、唯物狂しい騷音となつて船に迫つてゐた。然し葉子は今の境界が本當に現實の境界なのか、先刻不思議な音樂的の錯覺にひたつてゐた境界が夢幻の中の境界なのか、自分ながら少しも見界がつかない位ぼんやりしてゐた。而してあの荒唐な奇怪な心の adventure を却つてまだ／＼

とした現實の出來事でもあるかのやうに思ひなして、眼の前に見る酒に赤らんだ事務長の顏は妙に蠱惑的な氣味の惡い幻像となつて葉子を脅かさうとした。

「少し飮み過ぎた處に溜めといた仕事を詰めてやつたんで眠れん。で散歩の積りで甲板の見廻りに出ると岡さん」

と云ひながらもう一度後ろに振り返つて、

「この岡さんがこの寒いに手欄から體を乘り出してぽかんと海を見とるんです。取り押へてケビンに連れて行かうと思ふとると、今度はあなたに出喰はす。物好きもあつたもんですねえ。海を眺めて何が面白いかな。お寒かありませんか、ショールなんぞも落ちてしまつた」

何處の國訛とも判らぬ一種の調子が鹽さびた聲で操られるのが、事務長の人と爲りによくそぐつて聞こえる。葉子はそんな事を思ひながら事務長の言葉を聞き終ると、始めてはつきり眼がさめたやうに思つた。而して簡單に、

「いゝえ」

と答へながら上眼づかひに、夢の中からでも人を見るやうにうつとりと事務長のしぶとさうな顏を見やつた。而してそのまゝ默つてゐた。

事務長は例の insolent な眼付で葉子を一目に見くるめながら、

「若い方は世話が燒ける……さあ行きませう」

と強い語調で云つて、から〳〵と傍若無人に笑ひながら葉子をせき立てた。海の波の荒涼たるをめきの中に聞くこの笑ひ聲は diabolic なものだつた。「若い方」……老成ぶつた事を云ふと葉子は思つたけれども、然し事務長にはそんな事を云ふ權利でもあるかのやうに葉子は皮肉な竹篦返しもせずに、おとなしくショールを拾ひ上げて

事務長の云ふまゝにその後に續かうとして驚いた。處が長い間そこに佇んでゐたものと見えて、磁石で吸ひ付けられたやうに、兩脚は固く重くなつて一寸も動きさうにはなかつた。寒氣の爲めに感覺の痲痺しかゝつた膝の關節は强ひて曲げようとすると、筋を絕つ程の痛みを覺えた。不用意に步き出さうとした葉子は、思はずのめり出さした上體を辛く後ろに支へて、情なげに立ちすくみながら、

「ま、一寸」

と呼びかけた。事務長の後ろに續かうとした岡と呼ばれた青年はこれを聞くと逸早く足を止めて葉子の方を振り向いた。

「始めてお知り合ひになつたばかりですのに、すぐお心安だてをして本當に何んで御座いますが、一寸お肩を貸していたゞけませんでせうか。何んですか足の先きが凍つたやうになつてしまつて……」

と葉子は美しく顏をしかめて見せた。岡はそれらの言葉が拳となつて續けさまに胸を打つとでも云つたやうに、暫くの間どきまぎ躊躇してゐたが、やがて思ひ切つた風で、默つたまゝ引き返して來た。身の丈けも肩幅も葉子とさう違はない程な華車な體をわなわなと震はせてゐるのが、肩に手をかけない中からよく知れた。事務長は振り向きもしないで靴の踵をこつこつと鳴らしながら早二三間のかなたに遠ざかつてゐた。

銳敏な馬の皮膚のやうにだちだちと震へる青年の肩におぶひかゝりながら、葉子は黑い大きな事務長の後姿を仇かたきでもあるかのやうに銳く見詰めてそろそろと步いた。西洋酒の芳醇な甘い酒の香が、まだ醉から醒めきらない事務長の身のまはりを毒々しい靄となつて取り捲いてゐた。放縱といふ事務長の心の藏は、今無用心に開かれてゐる。あの無頓着さうな肩のゆすりの蔭にすさまじい desire の火が激しく燃えてゐる筈である。葉子は禁斷の木の實を始めて喰ひかいだ原人のやうな渴慾を我れにもなく煽りたてゝ、事務長の心の裏を引つ繰り返して縫目

を見窮めようとばかりしてゐた。おまけに青年の肩に置いた葉子の手は、華車とは云ひながら、男性的な強い彈力を持つ筋肉の震へをまざ〳〵と感ずるので、これら二人の男が與へる奇怪な刺戟はほしいまゝに絡りあつて、恐ろしい心を葉子に起させた。木村……何をうるさい、餘計な事を云はずと默つて見てゐるがいゝ。心の中を閃き過ぎる斷片的な影を葉子は枯葉のやうに拂ひのけながら、眼の前に見る蠱惑に溺れて行かうとのみした。口から喉は喘ぎたい程に干からびて、岡の肩に乘せた手は、生理的な作用から冷たく堅くなつてゐた。而して熱をこめて濕んだ眼を見張つて、事務長の後姿ばかりを見詰めながら、五體はふら〳〵と他愛もなく岡の方に倚りそつた。吐き出す氣息は燃え立つて岡の横顔を撫でた。事務長は油斷なく角燈で左右を照らしながら甲板の整頓に氣を配つて歩いてゐる。

　葉子はいたはるやうに岡の耳に口をよせて、

「あなたはどちらまで」

　と聞いて見た。その聲はいつものやうに澄んではゐなかつた。而して氣を許した女からばかり聞かれるやうな甘たるい親しさが籠つてゐた。岡の肩は感激の爲めに一入震へた。頓には返事もし得ないでゐるやうだつたが、やがて臆病さうに、

「あなたは」

　とだけ聞き返して熱心に葉子の返事を待つらしかつた。

「シカゴまで參るつもりですの」

「僕も……私もさうです」

岡は待ち設けたやうに聲を震はしながらきつぱりと答へた。

「シカゴの大學にでもいらつしやいますの」

岡は非常に慌てたやうだつた。何んと返事をしたものか恐ろしく躊ふ風だつたが、やがて曖昧に口の中で、

「えゝ」

とだけつぶやいて默つてしまつた。そのおぼこさ……葉子は闇の中で眼をかゞやかして微笑んだ。而して岡を憐れんだ。

然し青年を憐れむと同時に葉子の眼は稲妻のやうに事務長の後姿を斜めにかすめた。青年を憐れむ自分は事務長に憐れまれてゐるのではないか。始終一歩づゝ上手を行くやうな事務長が一種の憎しみを以て眺めやられた。嘗て味はつた事のないこの憎しみの心を葉子はどうする事も出來なかつた。

二人に別れて自分の船室に歸つた葉子は殆んど delirium の狀態にあつた。眼睛は大きく開いたまゝで、盲目同様に部屋の中の物を見る事をしなかつた。冷え切つた手先きはおど／＼と兩の袂を掴んだり離したりしてゐた。葉子は夢中でショールとボアとをかなぐり捨て、もどかしげに帶だけほどくと、髮も解かずに寢臺の上に倒れかゝつて、横になつたまゝ羽根枕を兩手でひしと抱いて顔を伏せた。何故と知らぬ涙がその時堰を切つたやうに流れ出した。而して涙は後から／＼漲るやうにシーツを濕しながら、充血した唇は恐ろしい笑ひを湛へてわな／＼と震へてゐた。

一時間程さうしてゐる中に泣き疲れに疲れて、葉子はかけるものもかけずにそのまゝ深い眠りに陷つて行つた。けば／＼しい電燈の光はその翌日の朝までこの媚かしくもふしだらな葉子の丸寢姿を畫いたやうに照してゐた。

一四

何といつても船旅は單調だつた。縱令日々夜々に一瞬もやむ事なく姿を變へる海の波と空の雲とはあつても、詩人でもないすべての船客は、それらに對して途方に暮れた倦怠の視線を投げるばかりだつた。地上の生活からすつかり遮斷された船の中には、極く小さな事でも眼新しい事件の起る事のみが待ち設けられてゐた。さうした生活では葉子が自然に船客の注意の焦點となり、話題の提供者となつたのは不思議もない。每日々々凍りつくやうな濃霧の間を、東へ／＼と心細く走り續ける小さな汽船の中の社會は、あらはには知れないながら、何か淋しい過去を持つらしい、妖艶な、若い葉子の一擧一動を、絕えず興味深くぢつと見守るやうに見えた。

かの奇怪な心の動亂の一夜を過ごすと、その翌日から葉子はまた普段の通りに、如何にも足許があやふく見えながら少しも破綻を示さず、動もすれば他人の勝手になりさうでゐて、よそからは決して動かされない女になつてゐた。始めて食堂に出た時の愼しやかさに引きかへて、時には快活な少女のやうに晴れやかな顏付をして船客等と言葉を交はしたりした。食堂に現はれる時の葉子の服裝だけでも、退屈に倦じ果てた人々には、物好きな期待を與へた。或る時は葉子は愼しみ深い深窓の婦人らしく上品に、或る時は素養の深い若いディレッタントのやうに高尙に、又或る時は習俗から解放された adventuress とも思はれる放膽を示した。その極端な變化が、一日の中に起つて來ても、人々はさして怪しく思はなかつた。それ程葉子の性格には複雜なものが潜んでゐるのを感じさせた。繪島丸が橫濱の棧橋に繫がれてゐる間から、人々の注意の中心となつてゐた田川夫人を、海氣にあつて氣息をふき返した人魚のやうな葉子の傍において見ると、身分、閱歷、學殖、年齡などといふいかめしい資格が、却つて夫人を固い古ぼけた輪廓にはめこんで見せる結果になつて、唯神體のない空虛な宮殿のやうな空いかめしい興なさを感じさせるばかりだつた。女の本能の銳さから田川夫人はすぐそれを感付いたらしかつた。夫人の耳許に響いて來るのは葉子の噂ばかりで、夫人自身の評判は見る／＼薄れて行つた。ともすると田川博士までが、

夫人の存在を忘れたやうな振舞をする、さう夫人を思はせる事があるらしかつた。食堂の卓を挾んで向ひ合ふ夫妻が他人同志のやうな顔をして互々に窃み見をするのを葉子がすばやく見て取つた事などもあつた。と云つて今まで自分の子供でもあしらふやうに振舞つてゐた葉子に對して、今更夫人は改まつた態度も取りかねてゐた。よくも假面を被つて人を陥れたといふ女らしいひねくれた妬みひがみが、明かに夫人の表情に讀まれ出した。然し實際の處置としては、口惜しくても蟲を殺して、自分を葉子まで引き下げるか、葉子を自分まで引き上げるより仕方がなかつた。夫人の葉子に對する仕打ちは戸板を反へすやうに違つて來た。葉子は知らん顔をして、夫人のするがまゝに任せてゐた。葉子は固より夫人の慌てたこの處置が夫人には致命的な不利益であり、自分には都合のいゝ仕合せであるのを知つてゐたからだ。案の定、田川夫人のこの讓歩は、夫人に何等かの同情なり尊敬なりが加へられる結果とならなかつたばかりでなく、その勢力はます／＼下り坂になつて、葉子は何時の間にか田川夫人と對等で物を云ひ合つても少しも不思議とは思はせない程の高みに自分を持ち上げてしまつてゐた。落目になつた夫人は年甲斐もなくしどろもどろになつてゐた。恐ろしいほどやさしく親切に葉子をあしらふかと思へば、皮肉らしく馬鹿叮嚀に物を云ひかけたり、或は突然路傍の人に對するやうなよそ／＼しさを裝つて見せたりした。死にかけた蛇ののたうち廻るのを見やる蛇使ひのやうに、葉子は冷やかにあざ笑ひながら、夫人の心の葛藤を見やつてゐた。

　單調な船旅に倦き果てゝ、したゝか刺戟に餓ゑた男の群れは、この二人の女性を中心にして知らず／＼渦卷のやうにめぐつてゐた。田川夫人と葉子との暗鬪は表面には少しも目に立たないで戰はれてゐたのだけれども、それが男達に自然に刺戟を與へないではおかなかつた。平らな水に偶然落ちて來た微風のひき起す小さな波紋ほどの變化でも、船の中では一かどの事件だつた。男達は何故ともなく一種の緊張と興味とを感ずるやうに見えた。

田川夫人は微妙な女の本能と直覺とで、じり〳〵と葉子の心の隅々を探り廻してゐるやうだつたが、遂にこゝぞと云ふ急所を摑んだらしく見えた。それまで事務長に對して見下したやうな叮嚀さを見せてゐた夫人は、見る見る態度を變へて、食卓でも二人は、席が隣り合つてゐるからといふ以上な親しげな會話を取り交はすやうになつた。田川博士までが夫人の意を迎へて、何かにつけて事務長の室に繁く出入りするばかりか、事務長は大抵の夜は田川夫妻の部屋に呼び迎へられた。田川博士は固より船の正客である。それを外らすやうな事務長ではない。倉地は船醫の興録までを手傳はせて、田川夫妻の旅情を慰めるやうに振舞つた。田川博士の船室には夜おそくまで灯がかゞやいて、夫人の興ありげに高く笑ふ聲が室外まで聞こえる事が珍らしくなかつた。

葉子は田川夫人のこんな仕打ちを受けても、心の中で冷笑つてゐるのみだつた。既に自分が勝味になつてゐるといふ自覺は、葉子に反動的な寛大な心を與へて、夫人が事務長を擒にしようとしてゐる事などはてんで問題にはしまいとした。夫人は餘計な見當違ひをして、痛くもない腹を探つてゐる。事務長が如何したと云ふのだ。母の胎を出るとそのまゝ何んの訓練も受けずに育ち上つたやうなぶしつけな、動物性の勝つた、どんな事をして來たのか、どんな事をするのか分らないやうな高が事務長に何んの興味があるものか。あんな人間に氣を引かれる位なら、自分は疾うに喜んで木村の愛になづいてゐるのだ。見當違ひもいゝ加減にするがいゝ。さう齒がみをしたい位な氣分で思つた。

或る夕方葉子はいつもの通り散歩しようと甲板に出て見ると、遙か遠い手欄の所に岡がたつた一人しよんぼりと倚りかゝつて、海を見入つてゐた。葉子はいたづら者らしくそつと足音を盜んで、忍び〳〵近付いて、いきなり岡と肩をすり合せるやうにして立つた。岡は不意に人が現はれたので非常に驚いた風で、顏をそむけてその場を立ち去らうとするのを、葉子は否應なしに手を握つて引き留めた。岡が逃げ隱れようとするのも道理、その顏に

は涙のあとがまざ〳〵と殘つてゐた。少年から青年になつたばかりのやうな、內氣らしい、小柄な岡の姿は、何もかも荒々しい船の中では殊更デリケートな可憐なものに見えた。葉子はいたづらばかりでなく、この青年に一種の淡々しい愛を覺えた。

「何を泣いてらしつたの」

小首を存分傾けて、少女が少女に物を尋ねるやうに、肩に手を置きそへながら聞いて見た。

「僕……泣いてゐやしません」

岡は兩方の頰を紅く彩つて、かう云ひながらくるりと體をそつぽうに向け換へようとした。それがどうしても少女のやうな仕草だつた。抱きしめてやりたいやうなその肉體と、肉體につゝまれた心。葉子は更にすり寄つた。

「いゝえ〳〵泣いてらつしやいましたわ」

岡は途方に暮れたやうに眼の下の海を眺めてゐたが、遁れる術のないのを覺つて、大びらにハンケチをズボンのポケットから出して眼を拭つた。而して少し恨むやうな眼付をして、始めてまともに葉子を見た。唇までが苺のやうに紅くなつてゐた。青白い皮膚に箝め込まれたその紅さを、色彩に敏感な葉子は見逃す事が出來なかつた。岡は何かしら非常に昂奮してゐた。その昂奮してぶる〳〵震へるしなやかな手を葉子は手欄ごとぢつと押へた。

「さ、これでお拭き遊ばせ」

葉子の袂からは美しい香のこもつた小さなリンネルのハンケチが取り出された。

「持つてるんですから」

岡は恐縮したやうに自分のハンケチを顧みた。

「何をお泣きになつて……まあ私つたら餘計な事まで伺つて」
「何いゝんです……唯海を見たら何んとなく涙ぐんでしまつたんです。體が弱いもんですから下らない事にまで感傷的になつて困ります。……何んでもない……」

　葉子はいかにも同情するやうに合點々々した。岡が葉子とかうして一緒にゐるのをひどく嬉しがつてゐるのが葉子にはよく知れた。葉子はやがて自分のハンケチを手欄の上においたまゝ、

「私の部屋へもよろしかつたらいらつしやいまし。又ゆつくりお話しませうね」

　となつこく云つてそこを去つた。

　岡は決して葉子の部屋を訪れる事はしなかつたけれども、この事のあつて後は、二人はよく親しく話し合つた。岡は人なじみの惡い、話の種のない、極く初心な世慣れない青年だつたけれども、葉子は僅かなタクトですぐ隔てを取り去つてしまつた。而して打ち解けて見ると彼は上品な、どこまでも純粹な、而して慧かしい青年だつた。若い女性にはそのはにかみやな所から今まで絶えて接してゐなかつたので、葉子にはすがり附くやうに親しんで來た。葉子も同性の戀をするやうな氣持で岡を可愛がつた。

　その頃からだ、事務長が岡に近づくやうになつたのは。岡は葉子と話をしない時はいつでも事務長と散歩などをしてゐた。然し事務長の親友とも思はれる二三の船客に對しては口もきかうとはしなかつた。岡は時々葉子に事務長の噂をして聞かした。而して表面はあれ程粗暴のやうに見えながら、考への變つた、年齡や位置などに隔てをおかない、親切な人だと云つたりした。もつと交際して見るといゝとも云つた。その度毎に葉子は激しく反對した。あんな人間を岡が話相手にするのは實際不思議な位だ。あの人の何處に岡と共通するやうな優れた所があらうなど〻からかつた。

葉子に引き付けられたのは岡ばかりではなかつた。午餐が濟んで人々がサルンに集まる時などは團欒が大抵三つ位に分れて出來た。田川夫妻の周圍には一番多數の人が集まつた。外國人だけの團體から田川の方に來る人もあり、日本の政治家實業家連は勿論我れ先きにそこに馳せ參じた。そこから段々細く絲のやうにつながれて若い留學生とか學者とかいふ連中が陣を取り、それから又段々太くつながれて、葉子と少年少女等の群れがゐた。食堂で不意の質問に辟易した外交官補などは第一の連絡の綱となつた。衆人の前では岡は遠慮するやうにあまり葉子に親しむ樣子は見せずに不卽不離の態度を保つてゐた。遠慮會釋なくそんな所で葉子に狎れ親しむのは子供達だつた。眞白なモスリンの衣物を着て赤い大きなリボンを裝つた少女達や、水兵服で身輕に裝つた少年達は葉子の周圍に花輪のやうに集まつた。葉子がさういふ人達をかたみがはりに抱いたりかゝへたりして、お伽話などして聞かせてゐる樣子は、船中の見ものだつた。どうかするとサルンの人達は自分等の間の話題などは捨てゝおいてこの可憐な光景をうつとり見やつてゐるやうな事もあつた。

たゞ一つこれらの群れからは全く沒交渉な一團があつた。それは事務長を中心にした三四人の群れだつた。いつでも部屋の一隅の小さな卓を圍んで、その卓の上にはウヰスキー用の小さなコップと水とが備へられてゐた。一番いゝ香の煙草の烟もそこから漂つて來た。彼等は何かひそ〳〵と語り合つては、時々傍若無人な高い笑ひ聲を立てた。さうかと思ふとぢつと田川の群れの會話に耳を傾けてゐて、遠くの方から突然皮肉の茶々を入れる事もあつた。誰云ふとなく人々はその一團を犬儒派と呼びなした。彼等がどんな種類の人でどんな職業に從事してゐるかを知る者はなかつた。岡などは本能的にその人達を忌み嫌つてゐた。葉子も何かしら氣のおける連中だと思つた。而して表面は一向無頓着に見えながら、自分に對して十分の觀察と注意とを怠つてゐないのを感じてゐた。

如何しても然し葉子には、船にゐる總ての人の中で事務長が一番氣になつた。そんな筈、理由のある筈はないと自分をたしなめて見ても何んの甲斐もなかつた。サルンで子供達と戯れてゐる時でも、葉子は自分のして見せる蠱惑的な姿態が何時でも暗々裡に事務長の爲めにされてゐるのを意識しない譯には行かなかつた。事務長がその場にゐない時は、子供達をあやし樂しませる熱意さへ薄らぐのを覺えた。そんな時に小さい人達はきまつてつまらなさうな顔をしたり欠伸をしたりした。葉子はさうした樣子を見ると更に興味を失つた。而してそのまゝ立つて自分の部屋に歸つてしまふやうな事をした。それにも係らず事務長は嘗て葉子に特別な注意を拂ふやうな事はないらしく見えた。それが葉子を益々不快にした。夜など甲板の上を漫歩きしてゐる葉子が、田川博士の部屋の中から例の無遠慮な事務長の高笑ひの聲を漏れ聞いたりなぞすると、思はずかつとなつて、鐵の壁すら射通しさうな鋭い瞳を聲のする方に送らずにはゐられなかつた。

　或る日の午後、それは雲行きの荒い寒い日だつた。船客達は船の動搖に辟易して自分の船室に閉ぢこもるものが多かつたので、サルンががら明きになつてゐるのを幸ひ、葉子は岡を誘ひ出して、部屋の角になつた所に折れ曲つて据ゑてあるモロッコ皮のディワンに膝と膝を觸れ合さんばかり寄り添つて腰をかけて、トランプを弄つて遊んだ。岡は日頃さういふ遊戯には少しも興味を持つてゐなかつたが、葉子と二人きりでゐられるのを非常に幸福に思ふらしく、いつになく快活に札をひねくつた。その細いしなやかな手からぶきつちやうに札が捨てられたり取られたりするのを葉子は面白いものに見やりながら、繼續的に言葉を取り交はした。

「あなたもシカゴにいらつしやると仰有つてね、あの晩」

「えゝ云ひました。……これで切つてもいゝでせう」

「あらそんなもので勿體ない……もつと低いものはおありなさらない？……シカゴではシカゴ大學にいらつしや

るの？」
「これでいゝでせうか……よく分らないんです」
「よく分らないつて、そりやをかしう御座んすわね、そんな事お決めなさらずに米國にいらつしやるつて」
「僕は……」
「これでいたゞきますよ……僕は……何」
「僕はねえ」
「えゝ」
葉子はトランプを弄るのをやめて顏を上げた。岡は懺悔でもする人のやうに、面を伏せて紅くなりながら札をいぢくつてゐた。
「僕の本當に行く所はボストンだつたのです。そこに僕の家で學資をやつてる書生がゐて僕の監督をしてくれる事になつてゐたんですけれど……」
葉子は珍らしい事を聞くやうに岡に眼をすゑた。岡は益々云ひ惱さうに、
「あなたにお逢ひ申してから僕もシカゴに行きたくなつてしまつたんです」
と段々語尾を消してしまつた。何んといふ可憐さ……葉子はさらに岡にすり寄つた。岡は眞劍になつて顏まで青ざめて來た。
「お氣に障つたら許して下さい……僕は唯……あなたのいらつしやる所にゐたいんです、如何いふ譯だか……」
もう岡は涙ぐんでゐた。葉子は思はず岡の手を取つてやらうとした。
その瞬間にいきなり事務長が激しい勢でそこに這入つて來た。而して葉子には眼もくれずに激しく岡を引つ立

てるやうにして散歩に連れ出してしまつた。岡は唯々としてその後に隨つた。

葉子はかつとなつて思はず座から立ち上つた。而して思ひ存分事務長の無禮を責めようと身構へした。その時不意に一つの考へが葉子の頭をひらめき通つた。「事務長は何處かで自分達を見守つてゐたに違ひない」突つ立つたまゝの葉子の顏に、乳房を見せつけられた子供のやうな微笑みがほのかに浮び上つた。

一五

葉子は或る朝思ひがけなく早起きをした。米國に近づくにつれて緯度は段々下つて行つたので、寒氣も薄らいでゐたけれども、何んと云つても秋立つた空氣は朝毎に冷え〳〵と引きしまつてゐた。葉子は溫室のやうな船室からこのきりつとした空氣に觸れようとして甲板に出て見た。右舷を廻つて左舷に出ると計らずも眼の前に陸影を見つけ出して、思はず足を止めた。そこには十日ほど念頭から絕え果てゝゐたやうなものが海面から淺くもれ上つて續いてゐた。葉子は好奇な眼をかゞやかしながら、思はず一旦停めた足を動かして手欄に近づいてそれを見渡した。オレゴン松がすく〳〵と白波の激しく嚙みよせる岸邊まで密生したバンクーバー島の低い山波がそこにあつた。物凄く底光りのする眞青な遠洋の色は、いつの間にか亂れた波の物狂はしく立ち騷ぐ沿海の青灰色に變つて、その先きに見える暗綠の樹林はどんよりとした雨空の下に荒涼として橫はつてゐた。それは慘めな姿だつた。距りの遠い故か船がいくら進んでも景色にはいさゝかの變化も起らないで、荒涼たるその景色は何時までも眼の前に立ち續いてゐた。古綿に似た薄雲を漏れる朝日の光が力弱くそれを照す度毎に、煮え切らない影と光の變化がかすかに山と海とをなでゝ通る計りだ。長い〳〵海洋の生活に慣れた葉子の眼には陸地の印象は寧ろ汚ないものでも見るやうに不愉快だつた。もう三日程すると船はいやでもシヤトルの棧橋に繫がれるのだ。向うに見え

るあの陸地の續きにシヤトルはある。あの松の林が切り倒されて少しばかりの平地となつた所に、こゝに一つ彼處に一つと云ふやうに小屋が建てゝあるが、その小屋の數が東に行くにつれて段々多くなつて、仕舞ひには一かたまりの家屋が出來る。それがシヤトルであるに違ひない。うら淋しく秋風の吹きわたるその小さな港町の棧橋に、野獸のやうな諸國の勞働者が群がる處に、この小さな繪島丸が疲れ切つた船體を横へる時、あの木村が例の眩るしい機敏さで、亞米利加風になり濟したらしい物腰で、まはりの景色に釣り合はない景氣のいゝ顏をして船梯子を上つて來る樣子までが、葉子には見るやうに想像された。

「いやだ〳〵。如何しても木村と一緒になるのはいやだ。私は東京に歸つてしまはう」

葉子はだゝつ子らしく今更そんな事を本氣に考へて見たりしてゐた。

水夫長と一人のボーイとが押し並んで、靴と草履との音をたてながらやつて來た。而して葉子の側まで來ると、葉子が振り返つたので二人ながら慇懃に、

「お早う御座います」

と挨拶した。その樣子がいかにも親しい目上に對するやうな態度で、殊に水夫長は、

「御退屈で御座いましたらう。それでもこれであと三日になりました。今度の航海には然しお蔭樣で大助かりをしまして、昨夕から際だつてよくなりましてね」

と附け加へた。

葉子は一等船客の間の話題の的であつたばかりでなく、上級船員の間の噂の種であつたばかりでなく、この長い航海中に、何時の間にか下級船員の間にも不思議な勢力になつてゐた。航海の八日目かに、或る老年の水夫がフオクスルで仕事をしてゐた時、錨の鎖に足先きを挾まれて骨を挫いた。プロメネード・デッキで偶然それを見つけた

葉子は、船醫より早くその場に驅けつけた。結びつこぶのやうに丸まつて、痛みの爲めに藻搔き苦しむその老人の後に引きそつて、水夫部屋の入口までは澤山の船員や船客が物珍らしさうについて來たが、そこまで行くと船員ですらが中に這入るのを躊躇した。どんな祕密が潜んでゐるか誰も知る人のないその內部は、船中では機關室よりも危險な一區域と見做されてゐたゞけに、その入口さへが一種人を脅かすやうな薄氣味惡さを持つてゐた。葉子は然しその老人の苦しみ藻搔く姿を見るとそんな事は手もなく忘れてしまつてゐた。ひよつとすると邪魔物扱ひにされてあの老人は殺されて了ふかも知れない。あんな齢までこの海上の荒々しい勞働に縛られてゐるこの人には賴りになる緣者もゐないのだらう。こんな思ひやりが留度もなく葉子の心を襲ひ立てるので、葉子はその老人に引きずられてゞも行くやうにどん〱水夫部屋の中に降りて行つた。薄暗い腐敗した空氣は蒸れ上るやうに人を襲つて、蔭の中にうよ〱と蠢く群れの中からは太く錆びた聲が投げかはされた。闇に慣れた水夫達の眼は矢庭に葉子の姿を引つ捕へたらしい。見る〱一種の昂奮が部屋の隅々にまで充ち溢れて、それが奇怪な罵りの聲となつて物凄く葉子に逼つた。だぶ〱のズボン一つで、筋くれ立つた厚みの有る毛胸に一絲もつけない大男は、やをら人中から立ち上ると、づか〱葉子に突きあたらんばかりにすれ違つて、すれ違ひざまに葉子の顏を孔の開くほど睨みつけて、聞くにたへない雜言を高々と罵つて、自分の群れを笑はした。然し葉子は死にかけた子にかしづく母のやうに、そんな事には眼もくれずに老人の傍に引き添つて、臥安いやうに寢床を取りなほしてやつたり、枕をあてがつてやつたりして、なほもその場を去らなかつた。そんなむさ苦しい汚ない處にゐて老人がほつたらかしておかれるのを見ると、葉子は何んと云ふ事なしに涙が後から〱流れてたまらなかつた。葉子はそこを出て無理に船醫の興錄をそこに引つ張つて來た。而して權威を持つた人のやうに水夫長にはつきりした指圖をして、始めて安心して悠々とその部屋を出た。葉子の顏には自分のした事に對して子供のやうな喜びの色が浮

んでゐた。水夫達は暗い中にもそれを見遁さなかつたと見える。葉子が出て行く時には一人として葉子に雜言を抛げつけるものがゐなかつた。それから水夫等は誰云ふとなしに葉子の事を「姉御々々」と呼んで噂するやうになつた。その時の事を水夫長は葉子に感謝したのだ。

　葉子はしんみに色々と病人の事を水夫長に聞きたゞした。實際水夫長に話しかけられるまでは、葉子はそんな事は思ひ出しもしてゐなかつたのだ。而して水夫長に思ひ出させられて見ると、急にその老水夫の事が心配になり出したのだつた。足はとう／＼不具になつたらしいが痛みは大抵なくなつたと水夫長がいふと葉子は始めて安心して、又陸の方に眼をやつた。水夫長とボーイとの跫音は廊下の彼方に遠ざかつて消えてしまつた。葉子の足許にはたゞかすかなエンヂンの音と波が舷を打つ音とが聞こえるばかりだつた。

　葉子は又自分一人の心に歸らうとして暫くぢつと單調な陸地に眼をやつてゐた。その時突然岡が立派な西洋絹の寢衣の上に厚い外套を着て葉子の方に近づいて來たのを、葉子は視角の一端にちらりと捕へた。夜でも朝でも葉子が獨りでゐると、何處で如何してそれを知るのか、何時の間にか岡が屹度身近かに現はれるのが常なので、葉子は待ち設けてゐたやうに振り返つて、朝の新しいやさしい微笑を與へてやつた。

「朝はまだ隨分冷えますね」

　と云ひながら、岡は少し人に馴れた少女のやうに顏を赤くしながら葉子の傍に身を寄せた。葉子は默つてほゝ笑みながらその手を取つて引き寄せて、互に小さな聲で輕い親しい會話を取り交はし始めた。

　と、突然岡は大きな事でも思ひ出した樣子で葉子の手をふりほどきながら、

「倉地さんがね、今日あなたに是非願ひたい用があるつて云つてましたよ」

と云つた。葉子は、

「さう？」

と極く輕く受ける積りだつたが、それが思はず氣息苦しい程の調子になつてゐるのに氣がついた。

「何んでせう、私になんぞ用つて」

「何んだか私ちつとも知りませんが、話をして御覽なさい。あんなに見えてゐるけれども親切な人ですよ」

「まだあなた瞞されていらつしやるのね。あんな高慢ちきな亂暴な人私嫌ひですわ。……でも先方で會ひたいと云ふのなら會つて上げてもいゝから、こゝにいらつしやいつて、あなた今すぐいらしつて呼んで來て下さいましな。會ひたいなら會ひたいやうにするが好う御座んすわ」

葉子は實際激しい言葉になつてゐた。

「まだ寢てゐますよ」

「いゝから構はないから起しておやりになればよござんすわ」

岡は自分に親しい人を親しい人に近づける機會が到來したのを誇り喜ぶ樣子を見せて、いそ〳〵と駈けて行つた。その後姿を見ると葉子は胸に時ならぬときめきを覺えて、眉の上の所にさつと熱い血の寄つて來るのを感じた。それがまた憤ろしかつた。

見上げると朝の空を今まで蔽うてゐた綿のやうな初秋の雲は所々ほころびて、洗ひすました青空が眩ゆく切れ目〳〵に輝き出してゐた。青灰色に汚れてゐた雲そのものすらが見違へるやうに白く輕くなつて美しい笹縁をつけてゐた。海は眼も綾な明暗をなして、單調な島影もさすがに頑固な沈默ばかりを守りつゞけてはゐなかつた。葉子の心は抑へよう〳〵としても輕く華やかにばかりなつて行つた。決戰……と葉子はその勇み立つ心の底で叫んだ。木村の事などは遠の昔に頭の中からこそぎ取るやうに消えてしまつて、その後にはたゞ何とはなしに、子

供らしい浮き〳〵した冒險の念ばかりが働いてゐた。自分でも知らずにゐたやうな weird な激しい力が、想像も及ばぬ所にぐん〳〵と葉子を引きずつて行くのを、葉子は恐れながらも何處までも跟いて行かうとした。どんな事があつても自分がその中心になつてゐて、先方を牽き付けてやらう。自分をはぐらかすやうな事はしまいといふ始終張り切つてばかりゐた是れまでの心持と、この時湧くが如く持ち上つて來た心持とは比べものにならなかつた。あらん限りの重荷を洗ひざらひ思ひ切りよく投げ棄てゝしまつて、身も心も何か大きな力に任し切るその快さ心安さは葉子をすつかり夢心地にした。そんな心持の相違を比べて見る事さへ出來ない位だつた。葉子は子供らしい期待に眼を輝かして岡の歸つて來るのを待つてゐた。

「駄目ですよ。床の中にゐて戸も明けてくれずに、寢言見たいな事をいつてるんですもの」

と云ひながら岡は當惑顏で葉子の側に現はれた。

「あなたこそ駄目ね。ようござんすわ、私が自分で行つて見てやるから」

葉子にはそこにゐる岡さへなかつた。少し怪訝さうに葉子のいつになくそは〳〵した様子を見守る青年をそこに捨ておいたまゝ葉子は險しく細い階子段を降りた。

事務長の部屋は機關室と狹い暗い廊下一つを隔てた所にあつて、日の目を見てゐた葉子には手さぐりをして歩かねばならぬ程勝手がちがつてゐた。地震のやうに機械の震動が廊下の鐵壁に傳はつて來て、むせ返りさうな生暖かい蒸汽の匂ひと共に人を不愉快にした。葉子は鋸屑を塗りこめてざら〳〵と手觸りのいやな壁を撫でゝ進みながらやうやく事務室の戸の前に來て、あたりを見廻して見て、ノックもせずにいきなりハンドルをひねつた。ノックをする隙もないやうなせか〳〵した氣分になつてゐた。戸は音も立てずに易々と開いた。「戸も開けてくれずに……」との岡の言葉から、てつきり鍵がかゝつてゐると思つてゐた葉子にはそれが意外でもあり、當り前にも

思へた。然しその瞬間には葉子は我れ知らずはつとなつた。たゞ通りすがりの人にでも見付けられまいとする心が先きに立つて、葉子は前後の辨へもなく、殆んど無意識に部屋に這入ると、同時にぱたんと音をさせて戸を閉めてしまつた。

もう總ては後悔にはおそすぎた。岡の聲で今寢床から起き上つたらしい事務長は、荒い棒縞のネルの筒袖一枚を着たまゝで、眼のはれぼつたい顔をして、小山のやうな大きな五體を寢床にくねらして、突然這入つて來た葉子をぎつと見守つてゐた。遠の昔に心の中は見透し切つてゐるやうな、それでゐて言葉も碌々交はさない程に無頓着に見える男の前に立つて、葉子はさすがに暫くは云ひ出づべき言葉もなかつた。あせる氣を押し鎭め押し鎭め、顔色を動かさないだけの沈着を持ち續けようと勉めたが、今までに覺えない惑亂の爲めに、頭はぐら／＼となつて、無意味だと自分でさへ思はれるやうな微笑を漏らす愚かさをどうする事も出來なかつた。倉地は葉子がその朝その部屋に來るのを前からちやんと知り抜いてゞもゐたやうに落ち付き拂つて、朝の挨拶もせずに、

「さ、おかけなさい。こゝが樂だ」

といつもの通り少し見下ろした親しみのある言葉をかけて、晝間は長椅子代りに使ふ寢臺の座を少し讓つて待つてゐる。葉子は敵意を含んでさへ見える樣子で立つたまゝ、

「何か御用がおありになるさうで御座いますが……」

固くなりながら云つて、あゝ又見え透く事を云つてしまつたとすぐ後悔した。事務長は葉子の言葉を追ひかけるやうに、

「用は後で云ひます。まあおかけなさい」

と云つてすましてゐた。その言葉を聞くと、葉子はその云ひなり放題になるより仕方がなかつた。「お前は結局

はこゝに坐るやうになるんだよ」と事務長は言葉の裏に未來を豫知し切つてゐるのが葉子の心を一種捨鉢なものにした。「坐つてやるものか」といふ習慣的な男に對する反抗心は唯譯もなくひしがれてゐた。葉子はつか／＼と進みよつて事務長と押し竝んで寢臺に腰かけてしまつた。

　この一つの擧動が――この何んでもない一つの擧動が急に葉子の心を輕くしてくれた。葉子はその瞬間に大急ぎで今まで失ひかけてゐたものを自分の方にたぐり戻した。而して事務長を流し眼に見やつて、一寸ほゝゑんだその微笑には、先刻の微笑の愚しさが潛んでゐないのを信ずる事が出來た。葉子の性格の深みから湧き出る怖ろしい自然さがまとまつた姿を現はし始めた。

「何御用でいらつしやいます」

　そのわざとらしい造り聲の中にかすかな親しみをこめて見せた言葉も、肉感的に厚みを帶びた、それでゐて賢しげに締りのいゝ二つの唇にふさはしいものとなつてゐた。

「今日船が檢疫所に着くんです、今日の午後に。處が檢疫醫がこれなんだ」

　事務長は朋輩にでも打ち明けるやうに、大きな食指を鍵形にまげて、たぐるやうな恰好をして見せた。葉子が一寸判じかねた顏付をしてゐると、

「だから飮ましてやらんならんのですよ。それからポーカーにも負けてやらんならん。美人がゐれば拜ましてもやらんならん」

　となほ手まねを續けながら、事務長は枕許においてある頑固なパイプを取り上げて、指の先きで灰を押しつけて、吸ひ殘りの煙草に火をつけた。

「船をさへ見ればさうした惡戲をしをるんだから、海坊主を見るやうな奴です。さういふと頭のつるりとした水

母じみた入道らしいが、實際は元氣のいゝ意氣な若い醫者でね。面白い奴だ一つ會つて御覽。私でからがあんな所に年中置かれゝばあゝなるわさ」

と云つて、右手に持つたパイプを膝頭に置き添へて、向き直つてまともに葉子を見た。然しその時葉子は倉地の言葉にはそれほど注意を拂つてはゐない樣子を見せてゐた。丁度葉子の向側に在る事務卓の上に飾られた何枚かの寫眞を物珍らしさうに眺めやつて、右手の指先きを輕く器用に動かしながら、煙草の煙が紫色に顏をかすめるのを拂つてゐた。自分を囮にまで使はうとする無禮もあなたなればこそ何んとも云はずにゐるのだといふ心を事務長もさすがに推したらしい。然しそれにも係らず事務長は言ひ譯一つ云はず、一向平氣なもので、綺麗な飾紙のついた金口煙草の小箱を手を延ばして棚から取り上げながら、

「どうです一本」

と葉子の前にさし出した。葉子は自分が煙草をのむかのまぬかの問題を彈き飛ばすやうに、

「あれはどなた？」

と寫眞の一つに眼を定めた。

「どれ」

「あれ」

「どれ」

葉子はさういつたまゝで指さしはしない。

と事務長はもう一度云つて、葉子の大きな眼をまじ〳〵と見入つてからその視線を辿つて、暫く寫眞を見分けてゐたが、

「はあれか。あれはね私の妻子ですんだ。荊妻と豚兒共ですよ」

と云つて高々と笑ひかけたが、ふと笑ひやんで、險しい眼で葉子をちらつと見た。

「まあさう。ちやんと御寫眞をお飾りなすつて、おやさしう御座んすわね」

葉子はしんなりと立ち上つてその寫眞の前に行つた。物珍らしいものを見るといふ樣子をしてはゐたけれども、心の中には自分の敵がどんな獸物であるかを見極めてやるぞといふ激しい敵愾心が急に燃えあがつてゐた。前には藝者でゞもあつたのか、それとも良人の心を迎へる爲めにさう造つたのか、何處が玄人じみた綺麗な丸髷の女が着飾つて、三人の少女を膝に抱いたり側に立たせたりして寫つてゐた。葉子はそれを取り上げて孔の開くほどぢつと見やりながら卓の前に立つてゐた。ぎごちない沈默が暫くそこに續いた。

「お葉さん」

（事務長は始めて葉子をその姓で呼ばずにかう呼びかけた）突然震へを帶びた、低い、重い聲が燒きつくやうに耳近く聞こえたと思ふと、葉子は倉地の大きな胸と太い腕とで身動きも出來ないやうに抱きすくめられてゐた。固より葉子はその朝倉地が野獸のやうな assault に出る事を直覺的に覺悟して、寧ろそれを期待して、その assault を、心ばかりでなく、肉體的な好奇心を以て待ち受けてゐたのだつたが、かくまで突然、何んの前觸れもなく起つて來ようとは思ひも設けなかつたので、女の本然の羞恥から起る貞操の防衛に驅られて、熱し切つたやうな冷え切つたやうな血を一時に體內に感じながら、抱へられたまゝ、侮蔑を極めた表情を二つの眼に集めて、倉地の顏を斜めに見返した。その冷やかな眼の光は假初めな男の心をたじろがす筈だつた。事務長の顏は振り返つた葉子の顏に氣息のかゝる程の近さで、葉子を見入つてゐたが、葉子が與へた冷刻な眸には眼もくれぬまで狂はしく熱してゐた。（葉子の感情を最も強く煽り立てるものは寢床を離れた朝の男の顏だつた。一夜の休息に總ての精氣を

十分に回復した健康な男の容貌の中には、女の持つ總てのものを投げ入れても惜しくないと思ふ程の力が籠つてゐると葉子は始終感ずるのだつた）葉子は倉地に存分な輕侮の心持を見せつけながらも、その顏を鼻の先きに見ると、男性といふものゝ强烈な牽引の力を打ち込まれるやうに感ぜずにはゐられなかつた。氣息せはしく吐く男の溜息は霰のやうに葉子の顏を打つた。火と燃え上らんばかりに男の體からは desire の焰がぐん／＼葉子の血脈にまで擴がつて行つた。葉子は我れにもなく異常な興奮にがた／＼震へ始めた。

＊　＊　＊

ふと倉地の手がゆるんだので葉子は切つて落されたやうにふら／＼とよろけながら、危く踏み止つて眼を開くと、倉地が部屋の戸に鍵をかけようとしてゐる所だつた。鍵が合はないので、

「糞つ」

と後向きになつてつぶやく倉地の聲が最後の宣告のやうに絶望的に低く部屋の中に響いた。

倉地から離れた葉子は宛ら母から離れた赤子のやうに、總ての力が急に何所かに消えてしまふのを感じた。後に殘るものとては底のない、賴りない悲哀ばかりだつた。今まで味つて來たすべての悲哀よりも更に殘酷な悲哀が、葉子の胸をかきむしつて襲つて來た。それは倉地のそこにゐるのすら忘れさす位だつた。葉子はいきなり寢床の上に丸まつて倒れた。而して俯伏しになつたまゝ痙攣的に激しく泣き出した。倉地がその泣き聲に一寸躊つて立つたまゝ見てゐる間に、葉子は心の中で叫びに叫んだ。

「殺すなら殺すがいゝ。殺されたつていゝ。殺されたつて憎みつゞけてやるからいゝ。私は勝つた。何んと云つても勝つた。こんなに悲しいのを何故早く殺してはくれないのだ。この哀しみにいつまでも浸つてゐたい。早く死んでしまひたい。……」

一六

葉子は本當に死の間を彷ひ歩いたやうな不思議な、混亂した感情の狂ひに泥醉して、事務長の部屋から足許も定まらずに自分の船室に戻つて來たが、精も根も盡き果てゝそのまゝソファの上に打つ倒れた。眼の周りに薄黑い暈の出來たその顏は鈍い鉛色をして、瞳孔は光に對して調節の力を失つてゐた。輕く開いたまゝの唇から漏れる齒並みまでが、光なく、唯白く見やられて、死を聯想させるやうな醜い美しさが耳の附根まで漲つてゐた。雪解時の泉のやうに、あらん限りの感情が目まぐるしく湧き上つてゐたその胸には、底の方に暗い悲哀がこちんと澱んでゐるばかりだつた。

葉子はこんな不思議な心の狀態から遁れ出ようと、思ひ出したやうに頭を働かして見たが、その努力は心にもなく微かな果敢ないものだつた。そしてその不思議に混亂した心の狀態も謂はゞ堪へ切れぬ程の切なさは持つてゐなかつた。葉子はそんなにしてぼんやりと眼を覺ましさうになつたり、意識の假睡に陷つたりした。猛烈な胃痙攣を起した患者が、モルヒネの注射を受けて、間歇的に起る痛みの爲めに無意識に顏をしかめながら、魔藥の恐ろしい力の下に、唯昏々と奇怪な假睡に陷り込むやうに、葉子の心は無理無體な努力で時々驚いたやうに亂れさわぎながら、忽ち物凄い沈滯の淵深く落ちて行くのだつた。葉子の意志は如何に手を延しても、もう心の落ち行く深みには屆きかねた。頭の中は熱を持つて、唯ぼーと黃色く煙つてゐた。その黃色い煙の中を時々紅い火や青い火がちか〳〵と神經をうづかして驅け通つた。氣息づまるやうな今朝の光景や、過去のあらゆる回想が、入り亂れて現はれて來ても、葉子はそれに對して毛の末程も心を動かされはしなかつた。それは遠い〳〵木魂のやうに虛ろにかすかに響いては消えて行くばかりだつた。過去の自分と今の自分とのこれほどな恐ろしい距りを、

葉子は恐れげもなく、成るがまゝに任せて置いて、重く澱んだ絶望的な悲哀に唯譯もなく何處までも引つ張られて行つた。その先きには暗い忘却が待ち設けてゐた。涙で重つた瞼は段々打ち開いたまゝの瞳を蔽つて行つた。少し開いた脣の間からは、うめくやうな輕い鼾が漏れ始めた。それを葉子はかすかに意識しながら、ソファの上に俯向きになつたまゝ、何時とはなしに夢もない深い眠りに陷つてゐた。

どの位眠つてゐたか分らない。突然葉子は心臟でも破裂しさうな驚きに打たれて、はつと眼を開いて頭を擡げた。づき／＼／＼と頭の心が痛んで、部屋の中は火のやうに輝いて面も向けられなかつた。もう晝頃だなと氣が付く中にも、雷とも思はれる叫喚が船を震はして響き渡つてゐた。葉子はこの瞬間の不思議に胸をどきつかせながら聞耳を立てた。船のをのゝきとも自分のをのゝきとも知れぬ震動が、葉子の五體を木の葉のやうに弄んだ。暫くしてその叫喚がやゝ鎭まつたので、葉子はやうやく、横濱を出て以來絶えて用ゐられなかつた汽笛の聲である事を悟つた。檢疫所が近づいたのだなと思つて、襟元をかき合せながら、靜かにソファの上に膝を立てゝ、眼窓から外面を覗いて見た。今朝までは雨雲に閉ぢられてゐた空も見違へるやうにからつと晴れ渡つて、紺青の色は日の光の爲めに奧深く輝いてゐた。松が自然に美しく配置されて生え茂つた岩がゝつた岸がすぐ眼の先きに見えて、海はいかにも入江らしく可憐な漣をつらね、その上を繪島丸は機關の動悸を打ちながら徐かに走つてゐた。幾日の荒々しい海路からこゝに來て見ると、さすがにそこには人間の隱れ場らしい靜かさがあつた。

岸の奧まつた所に白い壁の小さな家屋が見られた。その傍には英國の國旗が微風に煽られて青空の中に動いてゐた。「あれが檢疫官のゐる所なのだ」さう思つた意識の活動が始まるや否や、葉子の頭は始めて生れ代つたやうにはつきりとなつて行つた。而して頭がはつきりして來ると共に、今迄切り放されてゐた總ての過去があるべき姿を取つて、明瞭に現在の葉子と結び付いた。葉子は過去の囘想が今見たばかりの景色からでも來たやうに驚い

て、急いで眼窓から顏を引つ込めて、强敵に襲ひかゝられた孤軍のやうに、たじろぎながら又ソファの上に臥倒れた。頭の中は急に叢がり集まる考へを整理する爲めに激しく働き出した。葉子はひとりでに兩手で髮の毛の上から顳顬の所を押へた。而して少し上眼をつかつて鏡の方を見やりながら、今まで閉止してゐた亂想の寄せ來るまゝに機敏にそれを送り迎へようと身構へた。

葉子は兎に角恐ろしい崕の際まで來てしまつた事を、而して殆んど無反省で、本能に引きずられるやうにして、その中に飛び込んだ事を思はない譯には行かなかつた。親類緣者に促されて、心にもない渡米を餘儀なくされた時に自分で選んだ道――兎も角木村と一緒にならう。而して生れ代つた積りで米國の社會に這入りこんで、自分が見付けあぐねてゐた自分といふものを、探り出して見よう。女といふものが日本とは違つて考へられてゐるらしい米國で、女としての自分がどんな位置に坐る事が出來るか試して見よう。自分は如何しても生るべきでない時代に、生るべきでない處に生れて來たのだ。自分の生るべき時代と處とはどこか別にある。そこでは自分は女王の座になほつても恥かしくない程の力を持つ事が出來る筈なのだ。生きてゐる中にそこを探し出したい。自分の周圍にまつはつて來ながらいつの間にか自分を裏切つて、何時どんな處にでも平氣で生きてゐられるやうになり果てた女達の鼻をあかさしてやらう。若い命を持つた中にそれだけの事を是非してやらう。木村は自分のこの心の企みを助ける事の出來る男ではないが、自分の後に跟いて來られない程の男でもあるまい。葉子はそんな事も思つてゐた。日淸戰爭が起つた頃から葉子位の年配の女が等しく感じ出した一種の不安、一種の幻滅――それを激しく感じた葉子は、謀叛人のやうに知らず識らず自分の周りの少女達に或る感情的な敎唆を與へてゐたのだが、自分自身ですらがどうしてこの大事な瀨戸際を乗り拔けるのかは少しも解らなかつた。その頃の葉子は事每に自分の境遇が氣に喰はないでたゞいら〳〵してゐた。その結果は唯思ふ儘を振舞つて行くより仕方がなかつた。

自分はどんな物からも本當に訓練されてはゐないんだ。而して自分にはどうにでも働く鋭い才能と、女の强味（弱味とも云はゞ云へ）になるべき優れた肉體と激しい情緒とがあるのだ。さう葉子は知らず〳〵自分を見てゐた。そこから盲滅法に動いて行つた。殊に時代の不思議な目覺めを經驗した葉子に取つては恐ろしい敵は男だつた。葉子はその爲めに何度蹉いたか知れない。然し世の中には本當に葉子を扶け起してくれる人がなかつた。「私が惡ければ直すだけの事をして見せて御覽」葉子は世の中に向いてから云ひ放つてやりたかつた。女を全く奴隷の境界に沈め果てた男はもう昔のアダムのやうに正直ではないんだ。女がぢつとしてゐる間は慇懃にして見せるが、女が少しでも自分で立ち上らうとすると、打つて變つて恐ろしい暴王になり上るのだ。女までがおめ〳〵と男の手傳ひをしてゐる。葉子は女學校時代にしたゝかその苦い杯を嘗めさせられた。而して十八の時木部孤笻に對して最初の戀愛らしい戀愛の情を傾けた時、葉子の心はもう處女の心ではなくなつてゐた。外界の壓迫に反抗するばかりに、一時火のやうに何物をも燒き盡して燃え上つた假初めの熱情は、壓迫のゆるむと共に脆くも萎えてしまつて、葉子は冷靜な批評家らしく自分の戀と戀の相手とを見た。如何して失望しないでゐられよう。自分の一生がこの人に縛りつけられて萎びて行くのかと思ふ時、又色々な男に弄ばれかけて、却つて男の心といふものを裏返してとつくりと見極めたその心が、木部といふ、空想の上でこそ勇氣も生彩もあれ、實生活に於ては見下げ果てた程貧弱で簡單な一書生の心と强ひて結びつかねばならぬと思つた時、葉子は身震ひする程失望して木部と別れてしまつたのだ。

葉子の嘗めた總ての經驗は、男に束縛を受ける危險を思はせるものばかりだつた。然し何んといふ自然の惡戲だらう。それと共に葉子は、男といふものなしには一刻も過されないものとなつてゐた。砒石の用法を謬つた患者が、その毒の恐ろしさを知りぬきながら、その力を借りなければ生きて行けないやうに、葉子は生の喜びの源

を、まかり違へば、生そのものを蝕むべき男といふものに、求めずにはゐられないディレンマに陷つてしまつたのだ。

肉慾の牙を鳴らして集まつて來る男達に對して、（さう云ふ男達が集まつて來るのは本當は葉子自身がふり撒く香の爲めだとは氣付いてゐて）葉子は冷笑しながら蜘蛛のやうに網を張つた。近づくものは一人殘らずその美しい四手網にからめ取つた。葉子の心は知らず〳〵殘忍になつてゐた。唯あの妖力ある女郎蜘蛛のやうに、生きてゐたい要求から每日その美しい網を四つ手に張つた。而してそれに近づきもし得ないで罵り騷ぐ人達を、自分の生活とは關係のない木か石でゞもあるやうに冷然と尻目にかけた。

葉子は本當を云ふと、必要に從ふといふ外に何をすればいゝのか分らなかつた。

葉子に取つては、葉子の心持を少しも理解してゐない社會ほど愚かしげな醜いものはなかつた。葉子の眼から見た親類といふ一群れは唯貪慾な賤民としか思へなかつた。父は憐れむべく影の薄い一人の男性に過ぎなかつた。母は――母は一番葉子の身近かにゐたと云つていゝ。それだけ葉子は母と兩立し得ない仇敵のやうな感じを持つた。母は新しい型にわが子を取り入れることを心得てはゐたが、それを取り扱ふ術は知らなかつた。葉子の性格が母の備へた型の中で驚くほどする〳〵と生長した時に、母は自分以上の法力を憎む魔女のやうに葉子の行く道に立ちはだかつた。その結果二人の間には第三者から想像も出來ないやうな反目と衝突とが續いたのだつた。葉子の性格はこの暗鬪のお蔭で曲折の面白さと醜さとを加へた。然し何んと云つても母は母だつた。正面からは葉子のする事爲す事に批點を打ちながらも、心の底で一番よく葉子を理解してくれたに違ひないと思ふと、葉子は母に對して不思議ななつかしみを覺えるのだつた。

母が死んでからは、葉子は全く孤獨である事を深く感じた。而して始終張りつめた心持と、失望から湧き出る

快活さとで、鳥が木から木に果實を探るやうに、人から人に歡樂を求めて歩いたが、何處からともなく不意に襲つて來る不安は葉子を底知れぬ悒鬱の沼に蹴落した。自分は荒磯に一本流れよつた流木ではない。然しその流木よりも自分は孤獨だ。自分は一ひら風に散つて行く枯葉ではない。然しその枯葉より自分はうら寂しい。こんな生活より外にする生活はないのか知らん。一體何處に自分の生活をぢつと見てゐてくれる人があるのだらう。さう葉子はしみ〴〵思ふ事がないでもなかつた。けれどもその結果はいつでも失敗だつた。葉子はかうした淋しさに促されて、乳母の家を尋ねたり突然大塚の内田に遇ひに行つたりして見るが、そこを出て來る時には唯一人の心の空しさが殘るばかりだつた。葉子は思ひ餘つて又淫らな滿足を求める爲めに男の中に割つて這入るのだつた。然し男が葉子の眼の前で弱味を見せた瞬間に、葉子は驕慢な女王のやうに、その捕虜から面を背けて、その出來事を惡夢のやうに忌み嫌つた。冒險の獲物はきまりきつて取るにも足らないやくざものである事を葉子はしみ〴〵思はされた。

　こんな絶望的な不安に攻めさいなめられながらも、その不安に驅り立てられて葉子は木村といふ降參人を兎も角その良人に選んで見た。葉子は自分が何んとかして木村にそりを合せる努力をしたならば、一生涯木村と連れ添つて、普通の夫婦のやうな生活が出來ないものでもないと一時思ふまでになつてゐた。然しそんなつぎはぎな考へ方が、どうしていつまでも葉子の心の底を蝕む不安を醫す事が出來よう。葉子が氣を落ち付けて、米國に着いてからの生活を考へて見ると、かうあつてこそと思ひ込むやうな生活には、木村は除け物になるか、邪魔者になる外はないやうにも思へた。木村と暮さう、さう決心して船に乗つたのではあつたけれども、葉子の氣分は始終ぐらつき通しにぐらついてゐたのだ。手足のちぎれた人形を玩具箱に仕舞つたものか、いつそ捨てゝしまつたものかと躊躇する少女の心に似たぞんざいな躊ひを葉子はいつまでも持ち續けてゐた。

さういふ時突然葉子の前に現はれたのが倉地事務長だつた。横濱の棧橋に繋がれた繪島丸の甲板の上で、始めて猛獸のやうなこの男を見た時から、稻妻のやうに鋭く葉子はこの男の優越を感受した。世が世ならば、倉地は小さな汽船の事務長なんぞをしてゐる男ではない。自分と同樣に間違つて境遇づけられて生れて來た人間なのだ。葉子は自分の身につまされて倉地を憐れみもし畏れもした。今まで誰の前に出ても平氣で自分の思ひ存分を振舞つてゐた葉子は、この男の前では思はず知らず心にもない矯飾を自分の性格の上にまで加へた。事務長の前では、葉子は不思議にも自分の思つてゐるのと丁度反對の動作をしてゐた。無條件的な服從といふ事も事務長に對してだけは唯望ましい事にばかり思へた。この人に思ひ存分打ちのめされたら、自分の命は始めて本當に燃え上るのだ。こんな不思議な、葉子にはあり得ない欲望すらが少しも不思議でなく受け入れられた。その癖表面では事務長の存在をすら氣が附かないやうに振舞つた。殊に葉子の心を深く傷けたのは、事務長の物憫げな無關心な態度だつた。葉子がどれ程人の心を牽きつける事を云つた時でも、した時でも、事務長は冷然として見向かうともしなかつた事だ。さういふ態度に出られると、葉子は、自分の事は棚に上げておいて、激しく事務長を憎んだ。この憎しみの心が日一日と募つて行くのを非常に恐れたけれども、どうしようもなかつたのだ。

然し葉子はとう／＼今朝の出來事に打つ突かつてしまつた。葉子は恐ろしい啀の際から目茶苦茶に飛び込んでしまつた。葉子の眼の前で今まで住んでゐた世界はがらつと變つてしまつた。木村がどうした。米國がどうした。養つて行かなければならない妹や定子がどうした。今まで葉子を襲ひ續けてゐた不安はどうした。人に犯されまいと身構へてゐたその自尊心はどうした。そんなものは木葉微塵に無くなつてしまつてゐた。倉地を得たらばどんな事でもする。どんな屈辱でも蜜と思はう。倉地を自分獨りに得さへすれば……。今まで知らなかつた、捕虜の受くる蜜より甘い屈辱！

葉子の心はこんなに順序立つてゐた譯ではない。然し葉子は兩手で頭を押へて鏡を見入りながらこんな心持を果てしもなく嚙みしめた。而して追想は多くの迷路を辿りぬいた末に、不思議な假睡狀態に陷る前まで進んで來た。葉子はソファを牝鹿のやうに立ち上つて、過去と未來とを斷ち切つた現在刹那の眩むばかりな變身に打ちふるひながら微笑んだ。

その時𥿻々ノックもせずに事務長が這入つて來た。葉子のたゞならぬ姿には頓着なく、

「もうすぐ檢疫官がやつて來るから、さつきの約束を賴みますよ。資本入らずで大役が勤まるんだ。女といふものはいゝものだな。や、然しあなたのは大分資本がかゝつとるでせうね。……賴みますよ」

と戲談らしく云つた。

「はあ」

葉子は何んの苦もなく親しみの限りをこめた返事をした。その一聲の中には、自分でも驚く程な蠱惑の力が籠められてゐた。

事務長が出て行くと、葉子は子供のやうに足なみ輕く小さな船室の中を小跳りして飛び廻つた。而して飛び廻りながら、髮をほごしにかゝつて、時々鏡に映る自分の顏を見やりながら堪へ切れないやうに窃み笑ひをした。

一七

事務長のさしがねはうまい坪にはまつた。檢疫官は繪島丸の檢疫事務をすつかり年老つた次位の醫官に任せてしまつて、自分は船長室で船長、事務長、葉子を相手に、話に花を咲かせながらトランプを弄り通した。あたり前ならば、何んとか彼とか必ず苦情の持ち上るべき英國風の小やかましい檢疫もあつさり濟んで放蕩者らしい血

氣盛りな檢疫官は、船に來てから二時間そこ〳〵で機嫌よく歸つて行く事になつた。

停るともなく進行を止めてゐた繪島丸は風のまに〳〵少しづゝ方向を變へながら、二人の醫官を乘せて行くモーター・ボートが舷側を離れるのを待つてゐた。折目正しい長めな紺の背廣を着た檢疫官は、ボートの舵座に立ち上つて、手欄から葉子と一緒に胸から上を乘り出した船長となほ戲談を取り交はした。船梯子の下まで醫官を見送つた事務長は物慣れた樣子でポッケットからいくらかを水夫の手に掴ませておいて、上を向いて合圖をすると、船梯子はきり〳〵と水平に捲き上げられて行く、それを事もなげに身輕く駈け上つて來た。檢疫官の眼は事務長への挨拶もそこ〳〵に、思ひ切り派手な裝ひを凝らした葉子の方に吸ひ付けられるらしかつた。葉子はその眼を迎へて情をこめた流眄を送り返した。檢疫官がその忙しい間にも何かしきりに物を云はうとした時、けたゝましい汽笛が一抹の白煙を青空に揚げて鳴りはためき、船尾からは凄まじい推進機の震動が起り始めた。この慌しい船の別れを惜しむやうに、檢疫官は帽子を取つて振り動かしながら、噪音にもみ消される言葉を續けてゐたが、固より葉子にはそれは聞こえなかつた。葉子はたゞにこ〳〵と微笑みながら點頭いて見せた。而して唯一時の惡戲心から髮に挿してゐた小さな造花を投げてやると、それがあはよく檢疫官の肩に中つて足許に辷り落ちた。檢疫官が片手に舵綱を操りながら、有頂天になつてそれを拾はうとするのを見ると、船舷に立ちならんで物珍らしげに陸地を見物してゐたステヤレーヂの男女の客は一齊に手をたゝいてどよめいた。葉子はあたりを見廻した。西洋の婦人達は等しく葉子を見やつてその花々しい服裝から輕率らしい擧動を苦々しく思ふらしい顏付をしてゐた。それらの外國人の中には田川夫人も交つてゐた。

檢疫官は繪島丸が殘して行つた白沫の中で、腰をふらつかせながら、笑ひ興ずる群集にまで幾度も頭を下げた。群集は又思ひ出したやうに漫罵を放つて笑ひどよめいた。それを聞くと日本語のよく解る白髮の船長は、いつも

のやうに顏を赤くして、氣の毒さうに恥かしげな眼を葉子に送つたが、葉子がはしたない群集の言葉にも、苦々しげな船客の顏色にも、少しも頓着しない風で、微笑み續けながらモーター・ボートの方を見守つてゐるのを見ると、未通女らしく更に眞赤になつてその場を外してしまつた。

　葉子は何事も屈託なく唯面白かつた。體中を擽るやうな生の歡びから、やゝもすると何んでもなく微笑が自然に浮び出ようとした。「今朝から私はこんなに生れ代りました御覽なさい」といつて誰にでも自分の喜びを披露したいやうな氣分になつてゐた。檢疫官の官舍の白い壁も、その方に向つて走つて行くモーター・ボートも見る〳〵遠ざかつて小さな箱庭のやうになつた時、葉子は船長室での今日の思出笑ひをしながら、手欄を離れて心あてに事務長を眼で尋ねた。と、事務長は、遙か離れた船艙の出口に田川夫妻と鼎になつて、何かむづかしい顏をしながら立話をしてゐた。いつもの葉子ならば三人の樣子で何事が語られてゐるか位はすぐ見て取るのだが、その日は唯浮々した無邪氣な心ばかりが先きに立つて、誰にでも好意のある言葉をかけて、同じ言葉で酬いられたい衝動に驅られながら、何んの氣なしにそつちに足を向けようとして、ふと氣がつくと、事務長が「來てはいけない」と激しく眼に物を言はせてゐるのが覺れた。氣が付いてよく見ると田川夫人の顏にはまがふかたなき惡意がひらめいてゐた。

「又おせつかいだな」

　一秒の躊躇もなく男のやうな口調で葉子はかう小さくつぶやいた。「構ふものか」、さう思ひながら葉子は事務長の眼使ひにも無頓着に、快活な足どりでいそ〳〵と田川夫妻の方に近づいて行つた。それを事務長もどうすることも出來なかつた。葉子は三人の前に來ると輕く腰をまげて後れ毛をかき上げながら顏中を蠱惑的な微笑みにして挨拶した。田川博士の頰には逸早くそれに應ずる物やさしい表情が浮ばうとしてゐた。

「あなたは隨分な亂暴をなさる方ですのね」

いきなり震へを帶びた冷やかな言葉が田川夫人から葉子に容赦もなく投げつけられた。それは底意地の惡い挑戰的な調子で震へてゐた。田川博士はこの咄嗟の氣まづい場面を繕ふ爲め何か言葉を入れてその不愉快な緊張をゆるめようとするらしかつたが、夫人の惡意はせき立つて募るばかりだつた。然し夫人は口に出してはもう何んにも云はなかつた。

女の間に起る不思議な心と心との交渉から、葉子は何んといふ事なく、事務長と自分との間に今朝起つたばかりの出來事を、輪廓だけではあるとしても田川夫人が感付いてゐるなと直覺した。唯一言ではあつたけれども、それは檢疫官とトランプを弄つた事を責めるだけにしては、激し過ぎ、惡意が罩められ過ぎてゐることを直覺した。今の激しい言葉は、その事を深く根に持ちながら、檢疫醫に對する不謹愼な態度をたしなめる言葉のやうにして使はれてゐるのを直覺した。葉子の心の隅から隅までを、溜飲の下るやうな小氣味よさが小躍りしつゝ走せめぐつた。葉子は何をそんなに事々しくたしなめられる事があるのだらうといふやうな少しゝやあ〳〵した無邪氣な顔付で、首をかしげながら夫人を見守つた。

「航海中は兎に角私葉子さんのお世話をお頼まれ申してゐるんですからね」

初めはしとやかに落ち付いて云ふ積りらしかつたが、それが段々激して途切れ勝ちな言葉になつて、夫人は仕舞には激動から氣息をさへはずましてゐた。その瞬間に火のやうな夫人の瞳と、皮肉に落ち付き拂つた葉子の瞳とが、ぱつたり出つ喰して小ぜり合ひをしたが、又同時に蹴返すやうに離れて事務長の方に振り向けられた。

「御尤もです」

事務長は虻に當惑した熊のやうな顔付で、柄にもない謹愼を裝ひながらから受け答へた。それから突然本氣な

表情に返つて、

「私も事務長であつて見れば、どのお客様に對しても責任があるのだで、御迷惑になるやうな事はせん積りですが」

こゝで彼は急に假面を取り去つたやうにこ〳〵し出した。

「さう無氣になる程の事でもないぢやありませんか。高が早月さんに一度か二度愛嬌を云うていたゞいて、それで檢疫の時間が二時間から違ふのですもの。いつでもこゝで四時間の以上も無駄をせにやならんのですて」

田川夫人が益々せき込んで、矢繼早にまくしかけようとするのを、事務長は事もなげに輕々とおつかぶせて、

「それにしてからがお話は如何です部屋で伺ひませうか。外のお客様の手前もいかゞです。博士、例の通り狹つこい所ですが、甲板ではゆつくりも出來ませんで、あそこでお茶でも入れませう。早月さんあなたも如何です」

と笑ひ〳〵云つてからくるりツと葉子の方に向き直つて、田川夫妻には氣が付かないやうに頓狂な顔を一寸して見せた。

横濱で倉地の後に續いて船室への階子段を下る時始めて嗅ぎ覺えたウヰスキーと葉卷とのまじり合つたやうな甘たるい一種の香が、この時幽かに葉子の鼻をかすめたと思つた。それを嗅ぐと葉子は情熱のほむらが一時に煽り立てられて、人前では考へられもせぬやうな思ひが、旋風の如く頭の中をこそいで通るのを覺えた。男にはそれがどんな印象を與へたかを顧みる暇もなく、田川夫妻の前といふことも憚らずに、自分では醜いに違ひないと思ふやうな微笑が、覺えず葉子の眉の間に浮び上つた。事務長は又小むづかしい顔になつて振り返りながら、

「いかゞです」

ともう一度田川夫妻を促した。然し田川博士は自分の妻の大人げないのを憐れむ物わかりのいゝ紳士といふ態

度を見せて、態よく事務長にことわりを云つて、夫人と一緒にそこを立ち去つた。

「一寸いらつしやい」

田川夫妻の姿が見えなくなると、事務長は碌々葉子を見むきもしないでかう云ひながら先きに立つた。葉子は小娘のやうにいそ〳〵とその後について、薄暗い階子段にかゝると男におぶひかゝるやうにして小世話しく降りて行つた。而して機關室と船員室との間に在る例の暗い廊下を通つて、事務長が自分の部屋の戸を開けた時、ぱつと明るくなつた白い光の中に、nonchalant な diabolic な男の姿を今更のやうに一種の畏れとなつかしさとを罩めて打ち眺めた。

部屋に這入ると事務長は、田川夫人の言葉でも思ひ出したらしく面倒臭さゝうに吐息一つして、帳簿を事務卓の上に放りなげておいて、又戸から頭だけつき出して、「ボーイ」と大きな聲で呼び立てた。而して戸を閉めきると、始めてまともに葉子に向きなほつた。而して腹をゆすり上げて續けさまに思ひ存分笑つてから、

「え」

と大きな聲で、半分は物でも尋ねるやうに、半分は「どうだい」と云つたやうな調子で云つて、脚を開いて akimbo をして突つ立ちながら、ちよいと無邪氣に首をかしげて見せた。

そこにボーイが戸の後ろから顏だけ出した。

「シャンペンだ。船長の所にバーから持つて來さしたのが二三本殘つてるよ。十の字三つぞ（大至急といふ軍隊用語）。……何がをかしいかい」

事務長は葉子の方を向いたまゝかう云つたのであるが、實際その時ボーイは意味ありげににや〳〵薄笑ひをしてゐた。

餘りに事もなげな倉地の様子を見てゐると葉子は自分の心の切なさに比べて、男の心を恨めしいものに思はずにゐられなくなつた。今朝の記憶のまだ生々しい部屋の中を見るにつけても、激しく嵩ぶつて來る情熱が妙にこじれて、ゐても立つてもゐられないもどかしさが苦しく胸に逼るのだつた。今までは丸きり眼中になかつた田川夫人も、三等の女客の中で、處女とも妻ともつかぬ二人の二十女も、果ては事務長にまつはりつくあの小娘のやうな岡までが、寫眞で見た事務長の細君と一緒になつて、苦しい敵意を葉子の心に煽り立てた。ボーイにまで笑ひものにされて、男の皮を着たこの好色の野獸のなぶりものにされてゐるのではないか。自分の身も心も唯一息にひしぎ潰すかと見えるあの恐ろしい力は、自分を征服すると共に總ての女に對しても同じ力で働くのではないか。その澤山の女の中の影の薄い一人の女として彼は自分を扱つてゐるのではないか。自分には何物にも代へ難く思はれる今朝の出來事があつた後でも、あゝ平氣でゐられるその呑氣さはどうしたものだらう。葉子は物心がついてから始終自分でも言ひ現はす事の出來ない何物かを逐ひ求めてゐた。その何物かは葉子のすぐ手近にありながら、しつかりと摑む事は如何しても出來ず、その癖いつでもその力の下に傀儡のやうに的もなく動かされてゐた。葉子は今朝の出來事以來何んとなく思ひ昂つてゐたのだ。それはその何物かゞ朧ろげながら形を取つて手に觸れたやうに思つたからだ。然しそれも今から思へば幻影に過ぎないらしくもある。自分に特別な注意も拂つてゐなかつたこの男の出來心に對して、こつちから進んで情をそゝるやうな事をした自分は何んといふ事をしたのだらう。どうしたらこの取り返しのつかない自分の破滅を救ふ事が出來るのだらうと思つて來ると、一秒でもこのいまはしい記憶のさまよふ部屋の中にはゐたゝまれないやうに思へ出した。然し同時に事務長は斷ちがたい執着となつて葉子の胸の底にこびりついてゐた。この部屋をこのまゝで出て行くのは死ぬよりもつらい事だつた。如何してもはつきりと事務長の心を握るまでは……葉子は自分の心の矛盾に業を煮やしながら、自分を蔑み果て

たやうな絶望的な怒りの色を唇のあたりに宿して、默つたまゝ陰鬱に立つてゐた。今まではそは〳〵と小魔のやうに葉子の心を廻り躍つてゐた華やかな喜び――それは何處に行つてしまつたのだらう。

事務長はそれに氣附いたのか氣が附かないのか、やがて倚りかゝりのない圓い事務椅に尻をすゑて、子供のやうな罪のない顏をしながら、葉子を見て輕く笑つてゐた。葉子はその顏を見て、恐ろしい大膽な惡事を赤兒同樣の無邪氣さで犯し得る質の男だと思つた。葉子はこんな無自覺な狀態にはとてもなつてゐられなかつた。一足づつ先きを越されてゐるのか知らんといふ不安までが心の平衡をさらに狂はした

「田川博士は馬鹿々々で、田川の奥さんは悧口馬鹿と云ふんだ。はゝゝゝゝ」

さう云つて笑つて、事務長は膝頭をはつしと打つた手をかへして、机の上にある葉卷をつまんだ。

葉子は笑ふよりも腹立たしく、腹立たしいよりも泣きたい位になつてゐた。唇をぶる〳〵と震はしながら涙でも溜つたやうに輝く眼は劍を持つて、恨みをこめて事務長を見入つたが、事務長は無頓着に下を向いたまゝ、一心に葉卷に火をつけてゐる。葉子は胸に抑へあまる恨みつらみを云ひ出すには、心があまりに震へて喉が乾き切つてゐるので、下唇を噛みしめたまゝ默つてゐた。

倉地はそれを感付いてゐるのだのにと葉子は置きざりにされたやうなやり所のない淋しさを感じてゐた。

ボーイがシャンペンと酒盃とを持つて這入つて來た。而して丁寧にそれを事務卓の上に置いて、先刻のやうに意味ありげな微笑を漏しながら、そつと葉子を窃み見た。待ち構へてゐた葉子の眼は然しボーイを笑はしてはおかなかつた。ボーイはぎよつとして飛んでもない事をしたといふ風に、すぐ愼み深い給仕らしく、そこ〳〵に部屋を出て行つた。

事務長は葉卷の煙に顏をしがめながら、シャンペンをついで盆を葉子の方にさし出した。葉子は默つて立つた

まゝ手を延した。何をするにも心にもない作り事をしてゐるやうだつた。この短い瞬間に、今までの出來事でいゝ加減亂れてゐた心は、身の破滅がとう／＼來てしまつたのだといふ懼ろしい豫想に押しひしがれて、頭は氷で捲かれたやうに冷たく氣うとくなつた。胸から喉許につきあげて來る冷たい而して熱い球のやうなものを雄々しく飲み込んでも飲み込んでも涙が動ともすると眼頭を熱く潤して來た。薄手の酒盃に泡を立てゝ盛られた黄金の酒は葉子の手の中で細かい漣を立てた。葉子はそれを氣取られまいと、強ひて左の手を輕くあげて鬢の毛をかき上げながら、洋盃を事務長のと打ち合せたが、それをきつかけに願でもほどけたやうに今まで辛く持ちこたへてゐた自制は根こそぎ崩れてしまつた。

　事務長が洋盃を器用に唇にあてゝ、仰向き加減に飲みほす間、葉子は盃を手に持つたまゝ、ぐびり／＼と動く男の喉を見つめてゐたが、いきなり自分の盃を飲まないまゝ盆の上にかへして、

「よくもあなたはそんなに平氣でいらつしやるのね」

と力を罩めるつもりで云つたその聲はいくぢなくも泣かんばかりに震へてゐた。而して堰を切つたやうに涙が流れ出ようとするのを絲切齒で噛みきるばかりに強ひて喰ひとめた。

　事務長は驚いたらしかつた。眼を大きくして何か云はうとする中に、葉子の舌は自分でも思ひ設けなかつた情熱を帶びて震へながら動いてゐた。

「知つてゐます、知つてゐますとも……。あなたはほんとに……ひどい方ですのね。私何んにも知らないと思つてらつしやるの。えゝ、私は存じません、存じません、ほんとに……」

　何を云ふ積りなのか自分でも分らなかつた。唯激しい嫉妬が頭をぐら／＼させるばかりに嵩じて來るのを知つてゐた。男が或る機會には手傷も負はないで自分から離れて行く……さういふ忌々しい豫想で取り亂されてゐ

た。葉子は生來こんな慘めな眞暗な思ひに捕へられた事がなかつた。それは生命が見す〳〵自分から離れて行くのを見守る程慘めで眞暗だつた。この人を自分から離れさす位なら殺して見せる、さう葉子は咄嗟に思ひつめて見たりした。

葉子はもう我慢にもそこに立つてゐられなくなつた。事務長に倒れかゝりたい衝動を強ひてぢつと堪へながら綺麗に整へられた寢臺にやうやく腰を下ろした。美妙な曲線を長く描いて長閑に開いた眉根は痛ましく眉間に集まつて、急に痩せたかと思ふ程細つた鼻筋は恐ろしく感傷的な痛々しさをその顏に與へた。いつになく若々しく裝つた服裝までが、皮肉な反語のやうに小股の切れあがつた痩せ形なその肉を痛ましく虐げた。長い袖の下で兩手の指を折れよとばかり組み合せて、何もかも裂いて捨てたいヒステリックな衝動を懸命に抑へながら、葉子は唾も飲みこめない程狂ほしくなつてしまつてゐた。

事務長は偶然に不思議を見つけた子供のやうな好奇な呆れた顏付をして、葉子の姿を見やつてゐたが、片方のスリッパを脫ぎ落したその白足袋の足許から、やゝ亂れた束髮までをしげ〳〵と見上げながら、

「如何したんです」

と訝る如く聞いた。葉子はひつたくるやうにさそくに返事をしようとしたけれども、如何してもそれが出來なかつた。倉地はその樣子を見ると今度は眞面目になつた。而して口の端まで持つて行つた葉卷をそのまゝトレイの上に置いて立ち上りながら、

「どうしたんです」

ともう一度聞きなほした。それと同時に、葉子も思ひきり冷刻に、

「どうもしやしません」

といふ事が出來た。二人の言葉がもつれ返つたやうに、二人の不思議な感情ももつれ合つた。もうこんな所にはゐない、葉子はこの上の壓迫には堪へられなくなつて、華やかな裾を蹴亂しながら、驀地に戸口の方に走り出ようとした。事務長はその瞬間に葉子のなよやかな肩を遮りとめた。葉子は遮られて是非なく事務卓の側に立ちすくんだが、誇りも恥も弱さも忘れてしまつてゐた。どうにでもなれ、殺すか死ぬかするのだ。そんな事を思ふばかりだつた。こらへにこらへてゐた涙を流れるに任せながら、事務長の大きな手を肩に感じたまゝで、しやくり上げて恨めしさうに立つてゐたが、手近かに飾つてある事務長の家族の寫眞を見ると、かつと氣がのぼせて前後の辨へもなく、それを引つたくると共に兩手にあらん限りの力を罩めて、人殺しでもするやうな氣負ひでずた〳〵に引き裂いた。而して揉みくたになつた寫眞の屑を男の胸も透れと投げつけると、寫眞の中つたその所に噛みつきもしかねまじき狂亂の姿となつて捨て身に武者ぶりついた。事務長は思はず身を退いて兩手を伸ばして走りよる葉子をせき止めようとしたが葉子は我れにもなく我武者にすり入つて、男の胸に顔を伏せた。而して兩手で肩の服地を爪も立てよと掴みながら、暫く齒を喰ひしばつて震へてゐる中に、それが段々すゝり泣きに變つて行つて、仕舞にはさめ〴〵と聲を立てゝ泣きはじめた。而して暫くは葉子の絶望的な泣き聲ばかりが部屋の中の靜かさをかき亂して響いてゐた。

突然葉子は倉地の手を自分の背中に感じて、電氣にでも觸れたやうに驚いて飛び退いた。倉地に泣きながらすがり付いた葉子が倉地からどんなものを受け取らねばならぬかは知れ切つてゐたのに、優しい言葉でもかけて貰へるかの如く振舞つた自分の矛盾に呆れて、恐ろしさに兩手で顔を蔽ひながら部屋の隅に退つて行つた。倉地はすぐ近寄つて來た。葉子は猫に見込まれた金絲雀のやうに身悶えしながら部屋の中を逃げにかゝつたが、事務長は手もなく追ひすがつて、葉子の二の腕を捕へて力まかせに引き寄せた。葉子も本氣に有らん限りの力を出してさか

らつた。然しその時の倉地はもう普段の倉地ではなくなつてゐた。今朝寫眞を見てゐた時、後ろから葉子を抱きしめたその倉地が目ざめてゐた。怒つた野獸に見る狂暴な、防ぎやうのない力が嵐のやうに男の五體をさいなむらしく倉地はその力の下に呻きもがきながら、葉子に驀地に摑みかゝつた。

「又俺を馬鹿にしやがるな」

といふ言葉が喰ひしばつた齒の間から雷のやうに葉子の耳を打つた。

あゝこの言葉――このむき出しな有頂天な昂奮した言葉こそ葉子が男の口から確かに聞かうと待ち設けた言葉だつたのだ。葉子は亂暴な抱擁の中にそれを聞くと共に、心の隅に輕い餘裕の出來たのを感じて自分といふものが何處かの隅に頭を擡げかけたのを覺えた。倉地の取つた態度に對して作爲のある應對が出來さうにさへなつた。葉子は前通りにすゝり泣きを續けてはゐたが、その涙の中にはもう僞りの滴すら交つてゐた。

「いやです放して」

かう云つた言葉も葉子にはどこか戲曲的な不自然な言葉だつた。然し倉地は反對に葉子の一語々々に醉ひしれて見えた。

「誰が離すか」

事務長の言葉はみじめにもかすれ戰いてゐた。葉子はどん／＼失つた所を取り返して行くやうに思つた。その癖その態度は反對に益〻賴りなげなやる瀨ないものになつてゐた。倉地の廣い胸と太い腕との間に羽がひに抱きしめられながら、小鳥のやうにぶる／＼と震へて、

「本當に離して下さいまし」

「いやだよ」

葉子は倉地の接吻を右に左によけながら、更に激しく啜り泣いた。倉地は致命傷を受けた獸のやうに呻いた。その腕には惡魔のやうな血の流れるのが葉子にも感ぜられた。葉子は程を見計つてゐた。而して男の張りつめた情慾の絲が絕ち切れんばかりに緊張した時、葉子はふと泣きやんできつと倉地の顏を振り仰いだ。その眼からは倉地が思ひもかけなかつた鋭い强い光が放たれた。

「本當に放していたゞきます」

ときつぱり云つて、葉子は機敏に一寸ゆるんだ倉地の手をすりぬけた。而して逸早く部屋を横筋かひに戸口まで逃げのびて、ハンドルに手をかけながら、

「あなたは今朝この戸に鍵をおかけになつて、……それは手籠めです……私……」

と云つて少し情に激して俯向いて又何か云ひ續けようともするらしかつたが、突然戸を開けて出て行つてしまつた。

取り殘された倉地は呆れて暫く立つてゐるやうだつたが、やがて英語で亂暴な呪咀を口走りながら、いきなり部屋を出て葉子の後を追つて來た。而して間もなく葉子の部屋の戸の所に來てノックした。葉子は鍵をかけたまゝ默つて答へないでゐた。事務長はなほ二三度ノックを續けてゐたが、いきなり何か大聲で物を云ひながら船醫の興錄の部屋に這入るのが聞こえた。

葉子は興錄が事務長のさしがねで何んとか云ひに來るだらうと竊かに心待ちにしてゐた。處が何んとも云つて來ないばかりか、船醫室からは時々あたりを憚らない高笑ひさへ聞こえて、事務長は容易にその部屋を出て行きさうな氣配もなかつた。葉子は昻奮に燃え立つゝいらいらした心でそこにゐる事務長の姿を色々に想像してゐた。外の事は一つも頭の中には這入つて來なかつた。而してつくづく自分の心の變りかたの激しさに驚かずにはゐら

れなかつた。「定子！　定子！」葉子は隣りにゐる人を呼び出すやうな氣で小さな聲を出して見た。その最愛の名を聲にまで出して見ても、その響の中には忘れてゐた夢を思ひ出した程の反應もなかつた。どうすれば人の心といふものはこんなにまで變り果てるものだらう。葉子は定子を憐れむよりも、自分の心を憐れむ爲めに涙ぐんでしまつた。而して何んの氣なしに小卓の前に腰をかけて、大切なものゝ中にしまつておいた、その頃日本では珍らしいファウンテン・ペンを取り出して、筆の動くまゝにそこにあつた紙きれに字を書いて見た。

「女の弱き心につけ入り給ふはあまりに酷き御心と唯恨めしく存〱妾の運命はこの船に結ばれたる奇しきえにしや候ひけん心がらとは申せ今は過去の總て未來の總てを打ち捨てゝ唯眼の前の恥かしき思ひに漂ふばかりなる根なし草の身となり果て〱を事もなげに見やり給ふが恨めしく〱死」

と何んの工夫もなく、よく意味も解らないで一瀉千里に書き流して來たが、「死」といふ字に來ると葉子はペンも折れよといら〱しくその上を塗り消した。思ひのまゝを事務長に云つてやるのは、思ひ存分自分を弄べと云つてやるのと同じ事だつた。葉子は怒りに任せて餘白を亂暴に徒ら書きで汚してゐた。

と、突然船醫の部屋から高々と倉地の笑ひ聲が聞こえて來た。葉子は我れにもなく頭を上げて、暫く聞耳を立てゝから、そつと戸口に歩み寄つたが、後はそれなり又靜かになつた。

葉子は恥かしげに座に戻つた。而して紙の上に思ひ出すまゝに勝手な字を書いたり、形の知れない形を書いて見たりしながら、づきん〱と痛む額をぎゆつと肘をついた片手で押へて何んと云ふ事もなく考へつゞけた。

念が届けば木村にも定子にも何んの用があらう。倉地の心さへ摑めば後は自分の意地一つだ。さうだ。念が届かなければ……念が届かなければ……届かなければ有らゆるものに用が無くなるのだ。さうしたら美しく死なうねえ。……どうして……私はどうして……けれども……葉子はいつの間にか純粹に感傷的になつてゐた。自分に

もこんなおぼこな思ひが潛んでゐたかと思ふと、抱いて撫でさすつてやりたい程自分が可愛ゆくもあつた。而して木部と別れて以來絶えて味はなかつたこの甘い情緒に自分からほだされ溺れて、心中でもする人のやうな、戀に身をまかせる心安さにひたりながら小机に突つ伏してしまつた。

やがて醉ひつぶれた人のやうに頭を擡(もた)げた時は、疾(とう)に日がかげつて部屋の中には華やかな電燈がともつてゐた。

いきなり船醫の部屋の戸が亂暴に開かれる音がした。葉子ははつと思つた。その時葉子の部屋の戸にどたりと突きあたつた人の氣配(けはひ)がして、「早月さん」と濁(にご)つた鹽がれた事務長の聲がした。葉子は身のすくむやうな衝動を受けて、思はず立ち上つてたじろぎながら部屋の隅に逃げかくれた。而して體中を耳のやうにしてゐた。

「早月さんお願ひだ。一寸開けて下さい」

葉子は手早く小机の上の紙を屑籠になげ棄てゝ、ファウンテン・ペンを物蔭に放(はふ)りこんだ。而してせか〳〵とあたりを見廻したが、慌てながら眼窓のカーテンを閉(し)め切つた。而して又立ちすくんだ、自分の心の恐ろしさにまどひながら。

外部では握拳(にぎりこぶし)で續けさまに戸を敲(たゝ)いてゐる。葉子はそは〳〵と裾前をかき合せて、肩越しに鏡を見やりながら涙を拭(ふ)いて眉を撫でつけた。

「早月さん!!」

葉子はやゝ暫しとつおいつ躊躇してゐたが、とう〳〵決心して、何か慌てくさつて、鍵をがち〳〵やりながら戸を開(あ)けた。

事務長はひどく醉つて這入つて來た。どんなに飲んでも顏色もかへない程の强酒(がうしゆ)な倉地が、こんなに醉ふのは珍らしい事だつた。締め切つた戸に仁王(にわう)立ちによりかゝつて、冷然とした樣子で離れて立つ葉子をまじ〳〵と見

すゑながら、

「葉子さん、葉子さんが惡ければ早月さんだ。早月さん……僕のする事はするだけの覺悟があつてするんですよ。僕はね、横濱以來あなたに惚れてゐたんだ。それが分らないあなたぢやないでせう。暴力？　暴力が何んだ。暴力は愚かな事つた。殺したくなれば殺しても進んぜるよ」

葉子はその最後の言葉を聞くと眩惑を感ずる程有頂天になつた。

「あなたに木村さんといふのが附いてる位は、横濱の支店長から聞かされとるんだが、どんな人だか僕は勿論知りませんさ。知らんが僕の方があなたに深惚れしとる事だけは、この胸三寸でちやんと知つとるんだ。それ、それが分らん？　僕は恥も何もさらけ出して云つとるんですよ。これでも分らんですか」

葉子は眼をかゞやかしながら、その言葉を貪つた。噛みしめた。而して呑み込んだ。

かうして葉子に取つて運命的な一日は過ぎた。

一八

その夜船はビクトリヤに着いた。倉庫の立ちならんだ長い棧橋に "Car to the Town. Fare 15 ￠" と大きな白い看板に書いてあるのが夜目にもしるく葉子の眼窓から見やられた。米國への上陸が禁ぜられてゐる支那の苦力がこゝから上陸するのと、相當の荷役とで、船の内外は急に騷々しくなつた。事務長は忙しいと見えてその夜は遂に葉子の部屋に顏を見せなかつた。そこいらが騷々しくなればなる程葉子は例へやうのない平和を感じた。生れて以來、葉子は生に固着した不安からこれ程まで綺麗に遠ざかり得るものとは思ひも設けてゐなかつた。而かもそれが空疎な平和ではない。飛び立つて踊りたい程の ecstasy を苦もなく抑へ得る強い力の潛んだ平和だつた。

總ての事に飽き足つた人のやうに、又二十五年に亙る長い苦しい戰に始めて勝つて兜を脫いだ人のやうに、心にも肉にも快い疲勞を覺えて、謂はゞその疲れを夢のやうに味ひながら、なよ〳〵とソファに身を寄せて燈火を見つめてゐた。倉地がそこにゐないのが淺い心殘りだつた。けれども何んと云つても心安かつた。ともすれば微笑が唇の上を漣のやうにひらめき過ぎた。

けれどもその翌日から一等船客の葉子に對する態度は掌を返へしたやうに變つてしまつた。一夜の間にこれほどの變化を惹起す事の出來る力を、葉子は田川夫人の外に想像し得なかつた。田川夫人が世に時めく良人を持つて、人の眼に立つ交際をして、女盛りと云ひ條、もういくらか降り坂であるのに引きかへて どんな人の配偶にして見ても恥かしくない才能と容貌とを持つた若々しい葉子の便りなげな身の上とが、二人に近づく男達に同情の輕重を起させるのは勿論だつた。然し道德はいつでも田川夫人のやうな立場にある人の利器で、夫人はまたそれを有利に使ふ事を忘れない種類の人であつた。而して船客達の葉子に對する同情の底に潛む野心――はかない、野心とも云へない程の野心――もう一つ云ひ換へれば、葉子の記憶に親切な男として、勇悍な男として、美貌な男として殘りたいと云ふ程な野心――に絕望の斷定を與へる事によつて、その同情を引つ込めさせる事の出來るのも夫人は心得てゐた。事務長が自己の勢力範圍から離れてしまつた事も不快の一つだつた。こんな事から事務長と葉子との關係は巧妙な手段で逸早く船中に傳へられたに違ひない。その結果として葉子は忽ち船中の社交から葬られてしまつた。少くとも田川夫人の前では、船客の大部分は葉子に對して疎々しい態度をして見せるやうになつた。中にも一番憐れなのは岡だつた。誰が何んと告げ口したのか知らないが、葉子が朝おそく眼を覺して甲板に出て見ると、毎時ものやうに手欄に倚りかゝつて、もう內海になつた波の色を眺めてゐた彼は、葉子の姿を認めるや否や、ふいとその場を外して、何處へか影を隱してしまつた。それからといふもの、岡はまるで幽靈

のやうだつた。船の中にゐる事だけは確かだが、葉子が如何かしてその姿を見つけたと思ふと、次ぎの瞬間にはもう見えなくなつてゐた。その癖葉子は思はぬ時に、岡が何處かで自分を見守つてゐるのを確かに感ずる事が度度だつた。葉子はその岡を憐れむ事すらもう忘れてゐた。

結句船の中の人達から度外視されるのを氣安い事とまでは思はないでも、葉子はかゝる結果には一向無頓着だつた。もう船は今日シヤトルに着くのだ。田川夫人やその外の船客達の所謂「監視」の下に苦々しい思ひをするのも今日限りだ。さう葉子は平氣で考へてゐた。

然し船がシヤトルに着くといふ事は、葉子に外の不安を持ち來さずにはおかなかつた。シカゴに行つて半年か一年木村と連れ添ふ外はあるまいとも思つた。然し木部の時でも二ケ月とは同棲してゐなかつたとも思つた。倉地と離れては一日でもゐられさうにはなかつた。然しこんな事を考へるには船がシヤトルに着いてからでも三日や四日の餘裕はある。倉地はその事は第一に考へてくれてゐるに違ひない。葉子は今の平和を强ひてこんな問題でかき亂す事を欲しなかつたばかりでなく迚も出來なかつた。

葉子はその癖、船客と顏を見合せるのが不快でならなかつたので、事務長に賴んで船橋に上げてもらつた。船は今瀨戸内のやうな狹い内海を動搖もなく進んでゐた。船長はビクトリヤで傭ひ入れた水先案内と二人併んで立つてゐたが、葉子を見るといつもの通り顏を眞赤にしながら帽子を取つて挨拶した。ビスマークのやうな顏をして、船長より一がけも二がけも大きい白髮の水先案内はふと振り返つてぢつと葉子を見たが、そのまゝ向き直つて、

「Charmin' little lassie! wha'is that?」

とスコットランド風な强い發音で船長に尋ねた。葉子には解らない積りで云つたのだ。船長が慌てゝ何かさゝやくと、老人はから〳〵と笑つて一寸首を引つ込ませながら、もう一度振り返つて葉子を見た。

その毒氣なくから〲と笑ふ聲が、恐ろしく氣に入つたばかりでなく、乾いて晴れ渡つた秋の朝の空と何んとも云へない調和をしてゐると思ひながら葉子は聞いた。而してその老人の背中でも撫でゝやりたいやうな氣になつた。船は小動ぎもせずに亞米利加松の生え茂つた大島小島の間を縫つて、舷側に來てぶつかる漣の音も長閑だつた。而して晝近くなつて一寸した岬をくるりと船がかはすと、やがてポート・タウンセンドに着いだ。そこでは米國官憲の檢査が型ばかりあるのだ。崩した崕の土で埋め立てをして造つた、棧橋まで小さな漁村で、四角な箱に窓を明けたやうな、生々しい一色のペンキで塗り立てた二三階建ての家並みが、嶮しい斜面に沿うて、高く低く立ち連なつて、岡の上には水上げの風車が、青空に白い羽根をゆる〲動かしながら、かつたんこつとんと呑氣らしく音を立てゝ廻つてゐた。鷗が群をなして猫に似た聲で啼きながら、船の周りを水に近く長閑に飛び廻るのを見るのも、葉子には絶えて久しい物珍らしさだつた。飴屋の呼び賣りのやうな聲さへ町の方から聞こえて來た。葉子はチャート・ルームの壁に凭れたかゝつて、ぽか〲と射す秋の日の光を頭から浴びながら、靜かな惠み深い心で、この小さな町の小さな生活の姿を眺めやつた。而して十四日の航海の間に、いつの間にか海の心を心としてゐたのに氣が付いた。放埓な、移り氣な、想像も及ばぬパッションにのたうち廻つて呻き惱むあの大海原――葉子は失はれた樂園を慕ひ望むイヴのやうに、靜かに小さくうねる水の皺を見やりながら、遙かな海の上の旅路を思ひやつた。

「早月さん、一寸そこからでいゝ、顏を貸して下ない」

直ぐ下で事務長のかう云ふ聲が聞こえた。葉子は母に呼び立てられた少女のやうに、嬉しさに心をときめかせながら、船橋の手欄から下を見下ろした。そこに事務長が立つてゐた。

「One more over there, look!」

かう云ひながら、米國の稅關吏らしい人に葉子を指さして見せた。官吏は點頭きながら手帳に何か書き入れた。船は間もなくこの漁村を出發したが、出發すると間もなく事務長は船橋に昇つて來た。

「Here we are! Seatle is as good as reached now.」

船長にともなく葉子にともなく云つて置いて、水先案內と握手しながら、

「Thanks to you.」

と附け足した。而して三人で暫く快活に四方山の話をしてゐたが、不圖思ひ出したやうに葉子を顧みて、

「これから又當分は眼が廻る程忙しくなるで、その前に一寸御相談があるんだが、下に來てくれませんか」

と云つた。葉子は船長に一寸挨拶を殘して、すぐ事務長の後に續いた。階子段を降りる時でも、眼の先きに見える頑丈な廣い肩から一種の不安が拔け出て來て葉子に逼る事はもうなかつた。自分の部屋の前まで來ると、事務長は葉子の肩に手をかけて戶を開けた。部屋の中には三四人の男が濃く立ち罩めた煙草の煙の中に處狹く立つたり腰をかけたりしてゐた。そこには興錄の顏も見えた。事務長は平氣で葉子の肩に手をかけたまゝ這入つて行つた。

それは始終事務長や船醫と一かたまりのグループを作つて、サルンの小さな卓を圍んでウヰスキーを傾けながら、時々他の船客の會話に無遠慮な皮肉や茶々を入れたりする連中だつた。日本人が着るといかにも嫌味に見える亞米利加風の背廣も、さして取つてつけたやうには見えない程、太平洋を幾度も往來したらしい人達で、どんな職業に從事してゐるのか、さういふ見分けには人一倍鋭敏な觀察力を持つてゐる葉子にすら見當がつかなかつた。葉子が這入つて行つても、彼等は格別自分達の名前を名乘るでもなく、一番安樂な椅子に腰かけてゐた男が、それを葉子に讓つて、自分は二つに折れるやうに小さくなつて、既に一人腰かけてゐる寢臺に曲りこむと、一同

はその樣子に聲を立てゝ笑つたが、すぐ又前通り平氣な顏をして勝手な口をきゝ始あた。それでも一座は事務長には一目置いてゐるらしく、又事務長と葉子との關係も、事務長から殘らず聞かされてゐる樣子だつた。葉子はさう云ふ人達の間にあるのを結句氣安く思つた。彼等は葉子を下級船員の所謂「姉御」扱ひにしてゐた。

「向うに着いたらこれで悶着ものだぜ。田川の嚊め、あいつ、一味噌擦らずにおくまいて」

「因業な生れだなあ」

「何んでも正面から打つ突かつて、いさくさ云はせず決めてしまふ外はないよ」

などゝ彼等は戲談ぶつた口調で親身な心持を云ひ現はした。事務長は眉も動かさずに、机に倚りかゝつて默つてゐた。葉子はこれらの言葉からそこに居合はす人々の性質や傾向を讀み取らうとしてゐた。興錄の外に三人ゐた。その中の一人は甲斐絹のどてらを着てゐた。

「このまゝこの船でお歸りなさるがいゝね」

とそのどてらを着た中年の世渡り巧者らしいのが葉子の顏を窺ひ〳〵云ふと、事務長は少し屈託らしい顏をして物憂げに葉子を見やりながら、

「私もさう思ふんだがどうだ」

と訊ねた。葉子は

「さあ……」

と生返事をする外なかつた。始めて口をきく幾人もの男の前で、とつかは物を云ふのがさすがに億劫だつた。興錄は事務長の意向を讀んで取ると、分別ぶつた顏をさし出して、

「それに限りますよ。あなた一つ病氣におなりなさりや世話なしですさ。上陸した處が急に動くやうにはなれな

い。又さういふ體では檢疫が兎や角やかましいに違ひないし、この間のやうに檢疫所で眞裸にされるやうな事でも起れば、國際問題だの何んだのつて始末におへなくなる。それよりは出帆まで船に寢ていらつしやる方がいゝと、そこは私が大丈夫やりますよ。而しておいて船の出際になつて矢張り如何してもいけないと云へばそれつ限りのもんでさあ」

「なに、田川の奧さんが、木村つて云ふのに、味噌さへしこたま擦つてくれゝば一番えゝのだが」

と事務長は船醫の言葉を無視した樣子で、自分の思ふ通りをぶつきらぼうに云つてのけた。

木村はその位な事で葉子から手を引くやうなはき〳〵した氣象の男ではない。これまでも隨分色々な噂が耳に這入つた筈なのに「僕はあの女の缺陷も弱點も皆んな承知してゐる。私生兒のあるのも固より知つてゐる。唯僕はクリスチヤンである以上、何んとでもして葉子を救ひ上げる。救はれた葉子を想像して見給へ。僕はその時一番理想的な better half を持ち得ると信じてゐる」と云つた事を聞いてゐる。東北人のねんぢりむつつりしたその氣象が、葉子には第一我慢のし切れない嫌惡の種だつたのだ。

葉子は默つて皆んなの云ふ事を聞いてゐる中に、興錄の軍略が一番實際的だと考へた。而して狃れ〳〵しい調子で興錄を見やりながら、

「興錄さん、さう仰有れば私假病ぢやないんですの。この間中から診ていたゞかうか知らと幾度か思つたんですけれども、あんまり大袈裟らしいんで我慢してゐたんですが、如何いふもんでせう……少しは船に乘る前からでしたけれども……お腹のこゝが妙に時々痛むんですのよ」

と云ふと、寢臺に坐りこんだ男はそれを聞きながらにやり〳〵笑ひ始めた。葉子は一寸その男を睨むやうにして一緒に笑つた。

「まあ機の惡い時にこんな事を云ふもんですから、痛い腹まで探られますわね……ぢや興錄さん後程診ていたゞけて？」

事務長の相談といふのはこんな他愛もない事で濟んでしまつた。

二人きりになつてから、

「では私これから本當の病人になりますからね」

葉子は一寸倉地の顏をつゝいて、其の唇に觸れた。而してシヤトルの市街から起る煤煙が遠くにぼんやり望まれるやうになつたので、葉子は自分の部屋に歸つた。而して洋風の白い寢衣に着かへて、髮を長い編下げにして寢床に這入つた。戲談のやうにして興錄に病氣の話をしたものゝ、葉子は實際可なり長い以前から子宮を害してゐるらしかつた。腰を冷やしたり、感情が激昂したりした後では、きつと收縮するやうな痛みを下腹部に感じてゐた。船に乘つた當座は、暫くの間は忘れるやうにこの不快な痛みから遠ざかる事が出來て、幾年ぶりかで申し所のない健康のよろこびを味つたのだつたが、近頃は又段々痛みが激しくなるやうになつて來てゐた。半身が痲痺したり、頭が急にぼーつと遠くなる事も珍らしくなかつた。葉子は寢床に這入つてから、輕い疼みのある所をそつと平手で擦りながら、船がシヤトルの波止場に着く時の有樣を想像して見た。しておかなければならない事が數かぎりなくあるらしかつたけれども、何をしておくといふ事もなかつた。唯何んでもいゝせつせと手當り次第支度をしておかなければ、それだけの心盡しを見せて置かなければ、目論見通り首尾が運ばないやうに思つたので、一遍横になつたものを又むく〳〵と起き上つた。

先づ昨日着た派手な衣類がそのまゝ散らかつてゐるのを疊んでトランクの中に仕舞ひこんだ。臥る時まで着てゐた着物は、わざと華やかな長襦袢や裏地が見えるやうに衣紋竹に通して壁にかけた。事務長の置き忘れて行つ

たパイプや帳簿のやうなものは叮嚀に抽出に隱した。古藤が木村と自分とに宛てゝ書いた二通の手紙を取り出して、古藤がしておいたやうに、枕の下に差しこんだ。鏡の前には二人の妹と木村との寫眞を飾つた。それから大事な事を忘れてゐたのに氣が付いて、廊下越しに興錄を呼び出して藥瓶や病床日記を調へるやうに賴んだ。興錄の持つて來た藥瓶から藥を半分がた痰壺に捨てた。日本から木村に持つて行くやうに託された品々をトランクから取り分けた。その中からは故鄕を思ひ出させるやうな色々な物が出て來た。香ひまでが日本といふものをほのかに心に觸れさせた。

葉子は忙しく働かしてゐた手を休めて、部屋の眞中に立つてあたりを見廻して見た。萎んだ花束が取り除けられて無くなつてゐるばかりで、あとは橫濱を出た時の通りの部屋の姿になつてゐた。舊い記憶が香のやうに染みこんだそれらの物を見ると、葉子の心は我れにもなくふとぐらつきかけたが、淚もさそはずに淡く消えて行つた。

フォクスルで起重機の音がかすかに響いて來るだけで、葉子の部屋は妙に靜かだつた。葉子の心は風のない池か沼の面のやうに唯どんよりと澱んでゐた。體は何んの譯もなくだるく物憂かつた。

食堂の時計が引きしまつた音で三時を打つた。それを合圖のやうに汽笛がすさまじく鳴り響いた。港に這入つた合圖をしてゐるのだなと思つた。と思ふと今まで鈍く脈打つやうに見えてゐた胸が急に激しく騷ぎ動き出した。それが葉子の思ひも設けぬ方向に動き出した。もうこの長い船旅も終つたのだ。十四五の時から新聞記者になる修業の爲めに來たい〳〵と思つてゐた米國に着いたのだ。來たいとは思ひながら本當に來ようとは夢にも思はなかつた米國に着いたのだ。それだけの事で葉子の心はもうしみ〳〵としたものになつてゐた。木村は狂ふやうな心を强ひて押し鎭めながら、船の着くのを埠頭に立つて淚ぐみつゝ待つてゐるだらう。さう思ひながら葉子の眼は木村や二人の妹の寫眞の方にさまよつて行つた。それと倂べて寫眞を飾つておく事も出來ない定子の事までが、哀

れ深く思ひやられた。生活の保障をしてくれる父親もなく、膝に抱き上げて愛撫してやる母親にもはぐれたあの子は今あの池の端の淋しい小家で何をしてゐるのだらう。笑つてゐるかと想像して見るのも悲しかつた。泣いてゐるかと想像して見るのも憐れだつた。而して胸の中が急にわく／＼とふさがつて來て、堰きとめる暇もなく涙がはら／＼と流れ出た。葉子は大急ぎで寢臺の側に駈けよつて、枕許においといたハンケチを拾ひ上げて眼頭に押しあてた。素直な感傷的な涙が唯譯もなく後から／＼流れた。この不意の感情の裏切りには然し引き入れられるやうな誘惑があつた。段々底深く沈んで哀しくなつて行くその思ひ、何んの思ひとも定めかねた深い、佗しい、悲しい思ひ。恨みや怒りを綺麗に拭ひ去つて、諦めきつたやうに總てのものを唯しみ／＼となつかしく見せるその思ひ。いとしい定子、いとしい妹、いとしい父母、……何故こんななつかしい世に自分の心だけがかう哀しく一人坊ちなのだらう。何故世の中は自分のやうなものを憐れむ仕方を知らないのだらう。そんな感じの零細な斷片がつぎ／＼に涙に濡れて胸を引きしめながら通り過ぎた。葉子は知らず／＼それらの感じにしつかりすがり附かうとしたけれども無益だつた。感じと感じとの間には、星のない夜のやうな、波のない海のやうな、暗い深い際涯のない悲哀が、愛憎の總てを唯一色に染めなして、どんよりと擴がつてゐた。生を呪ふよりも死が願はれるやうな思ひが、逼るでもなく離れるでもなく、葉子の心にまつはり附いた。葉子は果ては枕に顔を伏せて、本當に自分の爲めにさめ／＼と泣き續けた。

　かうして小半晌もたつた時、船は棧橋に繋がれたと見えて、二度目の汽笛が鳴りはためいた。葉子は物憂げに頭を擡げて見た。ハンケチは涙の爲めにしぼる程濡れて丸まつてゐた。水夫等が繋綱を受けたりやつたりする音と、鋲釘を打ちつけた靴で甲板を歩き廻る音とが入り亂れて、頭の上は宛ら火事場のやうな騷ぎだつた。泣いて泣いて泣き盡した子供のやうなぼんやりした取りとめのない心持で、葉子は何を思ふともなくそれを聞いてゐた。

と突然戸外で事務長の、

「こゝがお部屋です」

といふ聲がした。それが丸で雷か何かのやうに恐ろしく聞こえた。葉子は思はずぎよつとなつた。準備をしておく積りでゐながら何んの準備も出來てゐない事も思つた。今の心持は平氣で木村に會へる心持ではなかつた。おろ〳〵しながら立ちは上つたが、立ち上つても如何する事も出來ないのだと思ふと、追ひつめられた罪人のやうに、頭の毛を兩手で押へて、髮の毛をむしりながら、寢臺の上にがばと伏さつてしまつた。

戸が開いた。

「戸が開いた」、葉子は自分自身に救ひを求めるやうに、かう心の中で呻いた。而して氣息もとまる程身内がしやちこばつてしまつてゐた。

「早月さん、木村さんが見えましたよ」

事務長の聲だ。あゝ事務長の聲だ。事務長の聲だ。葉子は身を震はせて壁の方に顏を向けた。……事務長の聲だ……。

「葉子さん」

木村の聲だ。今度は感情に震へた木村の聲が聞こえて來た。葉子は氣が狂ひさうだつた。兎に角二人の顏を見る事は如何しても出來ない。葉子は二人に背ろを向け益〻壁の方に藻掻きよりながら、涙の暇から狂人のやうに叫んだ。忽ち高く忽ち低いその震へ聲は笑つてゐるやうにさへ聞こえた。

「出て……お二人ともどうか出て……この部屋を……後生ですから今この部屋を……出て下さいまし……」

木村はひどく不安げに葉子に倚りそつてその肩に手をかけた。木村の手を感ずると恐怖と嫌惡との爲めに身を

ちゞめて壁に獅嚙みついた。

「痛い……いけません……お腹が……早く出て……早く……」

事務長は木村を呼び寄せて何か暫くひそ〳〵話し合つてゐるやうだつたが、二人ながら跫音を盜んでそつと部屋を出て行つた。葉子はなほも氣息も絶え〴〵に、

「どうぞ出て……あつちに行つて ……」

と云ひながら、いつまでも泣き續けた。

一九

暫くの間食堂で事務長と通り一遍の話でもしてゐるらしい木村が、頃を見計つて再度葉子の部屋の戸を敲いた時にも、葉子はまだ枕に顏を伏せて、不思議な感情の渦卷の中に心を浸してゐたが、木村が一人で這入つて來たのに氣付くと、始めて弱々しく横向きに寢なほつて、二の腕まで袖口のまくれた眞白な手をさし延べて、默つたまゝ木村と握手した。木村は葉子の激しく泣いたのを見てから、堪へ〳〵てゐた感情が更に嵩じたものか、涙をあふれんばかり眼頭にためて、厚ぼつたい唇を震はせながら、痛々しげに葉子の顏付を見入つて突立つた。

葉子は、今まで續けてゐた沈默の惰性で第一口をきくのが物憂かつたし、木村は何んと云ひ出したものか迷ふ樣子で、二人の間には握手のまゝ意味深げな沈默が取りかはされた。その沈默は然し感傷的といふ程度であるには餘りに長く續き過ぎたので、外界の刺戟に應じて過敏なまでに滿干の出來る葉子の感情は今まで浸つてゐた痛烈な動亂から一皮々々平調に還つて、果てはその底に、かう嵩じては厭はしいと自分ですらが思ふやうな冷やかな皮肉が、そろ〳〵頭を持ち上げて來るのを感じた。握り合せたむづかゆいやうな手を引つ込めて、眼元まで布團

心の切なさを表はす適當の言葉を案じ求めてゐるらしかつたが、とう〳〵涙に潤つた低い聲で、もう一度、

「葉子さん」

と愛するものゝ名を呼んだ。それは先程呼ばれた時のそれに比べると、聞き違へる程美しい聲だつた。葉子は、今まで、これ程切な情を籠めて自分の名を呼ばれた事はないやうにさへ思つた。「葉子」といふ名に際立つて傳奇的な色彩が添へられたやうにも聞こえた。で、葉子はわざと木村と握り合せた手に力をこめて、更に何んとか言葉をつがせて見たくなつた。その眼も木村の唇に勵ましを與へてゐた。木村は急に辯力を回復して、

「一日千秋の思ひとはこの事です」

とすら〳〵と滑らかに云つて退けた。それを聞くと葉子は見事期待に背負投げを喰はされて、その場の滑稽に思はず噴き出さうとしたが、如何に事務長に對する戀に溺れ切つた女心の殘虐さからも、さすがに木村の他意ない誠實を笑ひ切る事は得しないで、葉子は唯心の中で失望したやうに「あれだから嫌やになつちまう」とくさくさしながら喞つた。

然しこの場合、木村と同樣、葉子も恰好な空氣を部屋の中に作る事に當惑せずにはゐられなかつた。事務長と別れて自分の部屋に閉ぢ籠つてから、心靜かに考へて置かうとした木村に對する善後策も、思ひよらぬ感情の狂ひからそのまゝになつてしまつて、今になつて見ると、葉子は如何木村をもてあつかつて好いのか、はつきりした目論見は出來てゐなかつた。然し考へて見ると、木部孤笻と別れた時でも、葉子には格別これといふ謀略があつた譯ではなく、唯その時々に我儘を振舞つたに過ぎなかつたのだけれども、その結果は葉子が何か恐ろしく深

い企みと手練を示したかのやうに人に取られてゐた事も思つた。何んとかして漕ぎ拔けられない事はあるまい。さう思つて、先づ落ち付き拂つて木村に椅子をすゝめた。木村が手近かにある疊椅子を取り上げて寢臺の側に來て坐ると、葉子は又しなやかな手を木村の膝の上において、男の顏をしげ〳〵と見やりながら、

「本當に暫くでしたわね。少しおやつれになつたやうですわ」

と云つて見た。木村は自分の感情に打ち負かされて身を震はしてゐた。而してわく〳〵と流れ出る涙が見る見る眼から溢れて、顏を傳つて幾筋となく流れ落ちた。葉子は、その涙の一雫が氣まぐれにも、俯向いた男の鼻の先きに宿つて、落ちないのを見やつてゐた。

「隨分色々と苦勞なすつたらうと思つて、氣が氣ではなかつたんですけれども、私の方も御承知の通りでせう。今度こつちに來るにつけても、それは困つて、有りつたけのものを拂つたりして、漸く間に合せた位だつたもんですから……」

なほ云はうとするのを木村は忙しく打ち消すやうに遮つて、

「それは十分分つてゐます」

と顏を上げた拍子に涙の雫がぽたりと鼻の先きからズボンの上に落ちたのを見た。葉子は、泣いた爲めに妙に腫れぼつたく赤くなつて、てら〳〵と光る木村の鼻の先きが急に氣になり出した。惡いとは知りながら、兎もするとそこへばかり眼が行つた。

木村は何から如何話し出していゝか分らない樣子だつた。

「私の電報をビクトリヤで受取つたでせうね」

などゝもてれ隱しのやうに云つた。葉子は受取つた覺えもない辯にいゝ加減に、

「えゝ、難有う御座いました」

と答へておいた。而して一時も早くこんな氣息づまるやうに壓迫して來る二人の間の心のもつれから逃れる術はないかと思案してゐた。

「今始めて事務長から聞いたんですが、あなたが病氣だつたと云つてましたが、一體何處が惡かつたんです。嘸困つたでせうね。そん事とはちつとも知らずに、今が今まで、祝福された、輝くやうなあなたを迎へられるとばかり思つてゐたんです。あなたは本當に試練の受けつゞけと云ふもんですね。何處でした惡いのは」

葉子は、不用意にも女を捕へてぢかづけに病氣の種類を聞きたゞす男の心の粗雜さを忌みながら、當らずさはらず、前からあつた胃病が、船の中で食物と氣候との變つた爲めに、段々嵩じて來て起きられなくなつたやうに云ひ繕つた。木村は痛ましさうに眉を寄せながら聞いてゐた。

葉子はもうこんな程々な會話には堪へ切れなくなつて來た。木村の顏を見るにつけて思ひ出される仙臺時代や、母の死といふやうな事にも可なり惱まされるのをつらく思つた。で、話の調子を變へる爲めに强ひていくらか快活を裝つて、

「それはさうとこちらの御事業はいかゞ」

と仕事とか樣子とか云ふ代りに、わざと事業といふ言葉をつかつてから尋ねた。

木村の顏付は見る〳〵變つた。而して胸のポッケットに覗かせてあつた大きなリンネルのハンケチを取り出して、器用に片手でそれをふわりと丸めておいて、ちんと鼻をかんでから、又器用にそれをポッケットに戻すと、

「駄目です」

といかにも絕望的な調子で云つたが、その眼は旣に笑つてゐた。桑港の領事が在留日本人の企業に對して全

然冷淡で盲目であるといふ事、日本人間に嫉視が激しいので、桑港での事業の目論見は豫期以上の故障に遇つて大體失敗に終つた事、思ひ切つた發展は矢張り想像通り米國の西部よりも中央、殊にシカゴを中心として計畫されなければならぬといふ事、幸に、桑港で自分の話に乘つてくれる或る手堅い獨逸人に取次ぎを頼んだといふ事、シャトルでも相當の店を見出しかけてゐるといふ事、シカゴに行つたら、そこで日本の名譽領事をしてゐる可なりの鐵物商の店に先づ住み込んで米國に於ける取引きの手心を呑み込むと同時に、その人の資本の一部を動かして、日本との直取引を始める算段であるといふ事、シカゴの住ひはもう決つて、借りるべきフラットの圖面まで取り寄せてあるといふ事、フラットは不經濟のやうだけれども部屋の明いた部分を又貸しをすれば、大して高いものにもつかず、住ひ便利は非常にいゝといふ事……さう云ふ點にかけては、中々綿密に行き屆いたもので、それをいかにも企業家らしい說服的な口調で順序よく述べて行つた。會話の流れがかう變つて來ると、葉子は始めて泥の中から足を拔き上げたやうな氣輕な心持になつて、ずつと木村を見つめながら、聞くともなしにその話に聞耳を立てゝゐた。木村の容貌は暫くの間に見違へる程 refine されて、元から白かつたその皮膚は何か特殊な洗料で底光りのする程磨きがかけられて、日本人とは思へぬまで滑らかなのに、油で綺麗に分けた濃い黑髮は、西洋人の金髮には又見られぬやうな趣きのある對照をその白皙の皮膚に與へて、カラーとネクタイの關係にも人に氣のつかぬ凝り方を見せてゐた。

「會ひたてからこんな事を云ふのは恥かしいですけれども、實際今度といふ今度は苦鬪しました。こゝまで迎へに來るにも碌々旅費がない騷ぎでせう」

と云つてさすがに苦しげに笑ひにまぎらさうとした。その癖木村の胸にはどつしりと重さうな金鎖がかゝつて、兩手の指には四つまで寶石入りの指輪がきらめいてゐた。葉子は木村の云ふ事を聞きながらその指に眼をつけて

ゐたが、四つの指輪の中に婚約の時取交した純金の指輪もまじつてゐるのに氣がつくと、自分の指にはそれを篏めてゐなかつたのを思ひ出して、何喰はぬ樣子で木村の膝の上から手を引込めて顎まで布團を被つてしまつた。

木村は引込められた手に追ひすがるやうに椅子を乘り出して、葉子の顏に近く自分の顏をさし出した。

「葉子さん」

「何？」

又 Love-Scene か。さう思つて葉子はうんざりしたけれども、すげなく顏を背ける譯にも行かず、やゝ當惑してゐると、折よく事務長が型ばかりのノックをして這入つて來た。葉子は寢たまゝ、眼でいそ〳〵と事務長を迎へながら、

「まあ好うこそ……先程は失禮。何んだか下らない事を考へ出してゐたもんですから、つい我儘をしてしまつて濟みません……お忙しいでせう」

と云ふと、事務長はからかひ半分の冗談をきつかけに、

「木村さんの顏を見るとえらい事を忘れてゐたに氣がついたで。木村さんからあなたに電報が來とつたのを、私やビクトリヤのどさくさでころり忘れとつたんだ。濟まん事でした。こんな皺になりくさつた」

と云ひながら、左のポッケットから折目に煙草の粉がはさまつて揉みくちやになつた電報を取出した。木村は先刻葉子がそれを見たと確かに云つたその言葉に對して、怪訝な顏付をしながら葉子を見た。些細な事ではあるが、それが事務長にも關係を持つ事だと思ふと、葉子も一寸どぎまぎせずにはゐられなかつた。然しそれは唯一瞬間だつた。

「倉地さんあなたは今日少し如何かなすつていらつしやるわ。それはその時ちやんと拜見したぢやありませんか」

と云ひながらすばやく眼くばせすると、事務長はすぐ何か譯があるのを氣取つたらしく、巧みに葉子にばつを合せた。

「何？　あなた見た？……おゝさう〳〵……これは寢呆け返つとるぞ、はゝゝ」

而して互に顔を見合はせながら二人はしたゝか笑つた。木村は暫く二人をかたみがはりに見較べてゐたが、これもやがて聲を立てゝ笑ひ出した。木村の笑ひ出すのを見た二人は無性に可笑しくなつてもう一度新しく笑ひこけた。木村といふ大きな邪魔者を眼の前に据ゑておきながら、互の感情が水のやうに苦もなく流れ通ふのを二人は子供らしく樂しんだ。

然しこんな惡戲めいた事の爲めに話は一寸途切れてしまつた。下らない事に二人から湧き出た少し仰山過ぎた笑ひは、かすかながら木村の感情を害ねたらしかつた。葉子は、この場合、なほ居殘らうとする事務長を遠ざけて、木村とさし向ひになるのが得策だと思つたので、程もなく生眞面目な顔付に返つて、枕の下を探つて、そこに入れて置いた古藤の手紙を取り出して木村に渡しながら、

「これをあなたに古藤さんから。古藤さんには随分お世話になりましてよ。でもあの方のぶまさ加減つたら、それはじれつたい程ね。愛や貞の學校の事もお頼みして來たんですけれども心許ないもんよ。きつと今頃は喧嘩腰になつて皆んなと談判でもしていらつしやるでせうよ。見えるやうですわね」

と水を向けると、木村は始めて話の領分が自分の方に移つて來たやうに、顔色をなほしながら、事務長をそつちのけにした態度で、葉子に對しては自分が第一の發言權を持つてゐると云はんばかりに、色々と話し出した。事務長は暫く風向きを見計つて立つてゐたが突然部屋を出て行つた。葉子はすばやくその顔色を窺ふと妙にけはしくなつてゐた。

「一寸失禮」

木村の癖で、こんな時まで妙によそ〳〵しく斷つて、古藤の手紙の封を切つた。西洋罫紙にペンで細かく書いた幾枚かの可なり厚いもので、それを木村が讀み終るまでには暇がかゝつた。その間、葉子は仰向けになつて、甲板で盛んに荷揚げしてゐる人足等の騷ぎを聞きながら、やゝ暗くなりかけた光で木村の顏を見やつてゐた。少し眉根を寄せながら、手紙に讀み耽ける木村の表情には、時々苦痛や疑惑やの色が往つたり來たりした。讀み終つてからほつとした溜息と共に木村は手紙を葉子に渡して、

「こんな事を云つてよこしてゐるんです。あなたに見せても構はないとあるから御覽なさい」

と云つた。葉子は別に讀みたくもなかつたが、多少の好奇心も手傳ふので兎に角眼を通して見た。

「僕は今度位不思議な經驗を嘗めた事はない。兄が去つて後の葉子さんの一身に關して、責任を持つ事なんか、僕はしたいと思つても出來はしないが、若し明白に云はせてくれるなら、兄はまだ葉子さんの心を全然占領したものとは思はれない」

「僕は女の心には全く觸れた事がないと云つていゝ程の人間だが、若し僕の事實だと思ふ事が不幸にして事實だとすると、葉子さんの戀には――若しそんなのが戀と云へるなら――大分餘裕があると思ふね」

「これが女の tact といふものかと思つたやうな事があつた。然し僕には解らん」

「僕は若い女の前に行くと變にどぎまぎしてしまつて碌々物も云へなくなる。處が葉子さんの前では全く違つた感じで物が云へる。これは考へものだ」

「葉子さんといふ人は兄が云ふ通りに優れた天賦を持つた人のやうにも實際思へる。然しあの人は何所か片輪ぢやないかい」

「明白に云ふと僕はあゝ云ふ人は一番嫌ひだけれども、同時に又一番牽き附けられる、僕はこの矛盾を解きほごして見たくなつて堪らない。僕の單純を許してくれ給へ。葉子さんは今までの何處かで道を間違へたのぢやないか知らん。けれどもそれにしては餘り平氣だね。」

「神は惡魔に何一つ與へなかつたが Attraction だけは與へたのだ。こんな事も思ふ。……葉子さんの Attraction は何處から來るんだらう。失敬々々。僕は亂暴を云ひ過ぎてるやうだ」

「時々は憎むべき人間だと思ふが、時々は何んだか可哀さうで堪らなくなる時がある。葉子さんがこゝを讀んだら、恐らく唾でも吐きかけたくなるだらう。あの人は可哀さうな人の癖に、可哀さうがられるのが嫌ひらしいから」

「僕には結局葉子さんが何が何んだかちつとも分らない。僕は兄が彼女を選んだ自信に驚く。然しかうなつた以上は、兄は全力を盡して彼女を理解してやらなければいけないと思ふ。どうか兄等の生活が最後の榮冠に至らん事を神に祈る」

こんな文句が斷片的に葉子の心に沁みて行つた。葉子は激しい侮蔑を小鼻に見せて、手紙を木村に戻した。木村の顏にはその手紙を讀み終へた葉子の心の中を見透さうとあせるやうな表情が現はれてゐた。

「こんな事を書かれてあなた如何思ひます。」

葉子は事もなげにせゝら笑つた。

「如何も思ひはしませんわ。でも古藤さんも手紙の上では一枚がた男を上げてゐますわね」

木村の意氣込みは然しそんな事ではごまかされさうにはなかつたので、葉子は面倒くさくなつて少し險しい顏になつた。

「古藤さんの仰有る事は古藤さんの仰有る事。あなたは私と約束なさつた時から私を信じ私を理解して下さつていらつしやるんでせうね」

木村は恐ろしい力をこめて、

「それはさうですとも。」

と答へた。

「そんならそれで何も云ふ事はないぢやありませんか。古藤さんなどの云ふ事――古藤さんなんぞに分られたら人間も末ですわ――でもあなたはやつぱり何處か私を疑つていらつしやるのね」

「さうぢやない……」

「さうぢやない事があるもんですか。私は一旦かうと決めたら何處までもそれで通すのが好き。それは生きてる人間ですもの、こつちの隅あつちの隅と小さな事を捕へて尤めだてを始めたら際限はありませんさ。そんな馬鹿な事つたらありませんわ。私見たいな氣隨な我儘者はそんな風にされたら窮屈で窮屈で死んでしまふでせうよ。私がこんなになつたのも、つまり、皆んなで寄つてたかつて私を疑ひ抜いたからです。あなたゞつてやつぱりその一人かと思ふと心細いもんですのね」

木村の眼は輝いた。

「葉子さん、それは疑ひ過ぎといふもんです」

而して自分が米國に來てから嘗め盡した奮鬪生活もつまりは葉子といふものがあればこそ出來たので、若し葉子がそれに同情と鼓舞とを與へてくれなかつたら、その瞬間に精も根も枯れ果てゝしまふに違ひないといふ事を繰り返し〳〵熱心に說いた。葉子はよそ〳〵しく聞いてゐたが、

「うまく仰有るわ」
と留めをさしておいて、暫くしてから思ひ出したやうに、
「あなた田川の奥さんにお遇ひなさつて」
と尋ねた。木村はまだ遇はなかつたと答へた。葉子は皮肉な表情をして、
「いまに屹度お遇ひになつてよ。一緒にこの船でいらしつたんですもの。而して五十川の小母さんが私の監督をお頼みになつたんですもの。一度お遇ひになつたらあなたは屹度私なんぞ見向きもなさらなくなりますわ。」
「如何してゞす」
「まあお遇ひなさつて御覧なさいまし」
「何かあなた批難を受けるやうな事でもしたんですか」
「えゝ〳〵澤山しましたとも」
「田川夫人に？　あの賢夫人の批難を受けるとは、一體どんな事をしたんです」
葉子はさも愛想が盡きたといふ風に、
「あの賢夫人！」
と云ひながら高々と笑つた。二人の感情の絲は又も糾れてしまつた。
「そんなにあの奥さんにあなたの御信用があるのなら、私から申しておく方が早手廻しですわね」
と葉子は半分皮肉な半分眞面目な態度で、横濱出航以來夫人から葉子が受けた暗々裡の壓迫に尾鰭をつけて語つて來て、事務長と自分との間に何か當り前でない關係でもあるやうな疑ひを持つてゐるらしいと云ふ事を、他人事でも話すやうに冷靜に述べて行つた。その言葉の裏には、然し葉子に特有な火のやうな情熱が閃いて、その

眼は鋭く輝いたり涙ぐんだりしてゐた。木村は電火にでも打たれたやうに判斷力を失つて、一部始終をぼんやりと聞いてゐた。言葉だけにも何處までも冷靜な調子を持たせ續けて葉子は總てを語り終つてから、

「同じ親切にも眞底からのと、通り一遍のと二つありますわね。その二つが如何かしてぶつかり合ふと、毎時でも本當の親切の方が惡者扱ひにされたり、邪魔者に見られるんだから面白う御座んすわ。横濱を出てから三日ばかり船に醉つてしまつて、如何しませうと思つた時にも、御親切な奥さんは、わざと御遠慮なさつてゞせうね、三度々々食堂にはお出になるのに、一度も私の方へはいらしつて下さらないのに、事務長つたら幾度もお醫者さんを連れて來るんですもの、奥さんのお疑ひも尤もと云へば尤もですの。それに私が胃病で寢込むやうになつてからは、船中のお客樣がそれは同情して下さつて、色々として下さるのが、奥さんには大のお氣に入らなかつたんですの。奥さんだけが私を親切にして下さつて、外の方は皆んな寄つてたかつて、奥さんを親切にして上げて下さる段取りにさへなれば、何もかも無事だつたんですけれどもね、中でも事務長の親切にして上げ方が一番足りなかつたんでせうよ」

と言葉を結んだ。木村は唇を噛むやうにして聞いてゐたが、いま〳〵しげに、

「判りました〳〵」

合點しながらつぶやいた。

葉子は額の生え際の短い毛を引張つては指に卷いて上眼で眺めながら、皮肉な微笑を唇のあたりに浮ばして、

「おわかりになつた？　ふん、如何ですかね」

と空嘯いた。

木村は何を思つたかひどく感傷的な態度になつてゐた。

「私が悪かつた。私は何處までもあなたを信ずる積りでゐながら、他人の言葉に多少とも信用をかけようとしてゐたのが悪かつたのです。……考へて下さい、私は親類や友人の總ての反對を犯して此處まで來てゐるのです。もうあなたなしには私の生涯は無意味です。私を信じて下さい。屹度十年を期して男になつて見せますから……若しあなたの愛から私が離れなければならんやうな事があつたら……私はそんな事を思ふに堪へない……葉子さん」

木村はかう云ひながら眼を輝してすり寄つて來た。葉子はその思ひつめたらしい態度に一種の恐怖を感ずる程だつた。男の誇りも何も忘れ果て、捨て果てゝ、葉子の前に誓を立てゝゐる木村を、うまうま偽つてゐるのだと思ふと、葉子はさすがに針で突くやうな痛みを鋭く深く良心の一隅に感ぜずにはゐられなかつた。然しそれよりもその瞬間に葉子の胸を押しひしぐやうに狹めたものは、底のない物凄い不安だつた。木村とは如何しても連れ添ふ心はない。その木村に……葉子は溺れた人が岸邊を望むやうに事務長を思ひ浮べた。男といふものゝ女に與へる力を今更に強く感じた。こゝに事務長がゐてくれたらどんなに自分の勇氣は加はつたらう。然し……如何にでもなれ、如何かしてこの大事な瀬戸を漕ぎぬけなければ浮ぶ瀬はない。葉子は大それた謀反人の心で木村の caress を受くべき身構へ心構へを案じてゐた。

二〇

船の着いたその晩、田川夫妻は見舞の言葉も別れの言葉も殘さずに、大勢の出迎人に圍まれて堂々と威儀を整へて上陸してしまつた。その餘の人々の中にはわざわざ葉子の部屋を訪づれて來たものが數人はあつたけれども、葉子は如何にも親しみをこめた別れの言葉を與へはしたが、後まで心に殘る人とては一人もゐなかつた。その晩

事務長が來て、狹つこい boudoir のやうな船室で晩くまでしめ〴〵と打ち語つた間に、葉子はふと二度程岡の事を思つてゐた。あんなに自分を慕つてゐはしたが岡も上陸してしまへば、詮方なくボストンの方に旅立つ用意をするだらう。而して軈て自分の事もいつとはなしに忘れてしまふだらう。それにしても何んといふ上品な美しい靑年だつたらう。こんな事をふと思つたのも然し束の間で、その追憶は心の戶を敲いたと思ふと果敢なくも何處かに消えてしまつた。今は唯木村といふ邪魔な考へが、もや〳〵と胸の中に立ち迷ふばかりで、その奧には事務長の打ち勝ちがたい暗い力が、魔王のやうに小動ぎもせず蹲つてゐるのみだつた。

荷役の目まぐるしい騷ぎが二日續いた後の繪島丸は、泣きわめく遺族に取り圍まれた虛ろな死骸のやうに、がらんと靜まり返つて、騷々しい棧橋の雜閙の間に寂しく橫つてゐる。水夫が、輪切りにした椰子の實で汚れた甲板を單調にごし〳〵ごし〳〵と擦る音が、時といふものをゆる〳〵磨り減らすやすりのやうに日がな日ねもす聞こえてゐた。

葉子は早く〳〵こゝを切り上げて日本に歸りたいといふ子供染みた考への外には、をかしい程その外の興味を失つてしまつて、他鄕の風景に一瞥を與へる事も厭はしく、自分の部屋の中に篭り切つて、ひたすら發船の日を待ち侘びた。尤も木村が每日米國といふ香を鼻をつくばかり身の廻りに漂はせて、葉子を訪づれて來るので、葉子はうつかり寢床を離れる事も出來なかつた。

木村は來る度每に是非米國の醫者に健康診斷を賴んで、大事なければ思ひ切つて檢疫官の檢疫を受けて、兎も角も上陸するやうにと勸めて見たが、葉子は何處までもいやを云ひ通すので、二人の間には時々危險な沈默が續く事も珍らしくなかつた。葉子は然し何時でも手際よくその場合々々を操つて、それから甘い歡語を引き出すだけの機才を持ち合してゐたので、この一ケ月程見知らぬ人の間に立ち交つて、貧乏の屈辱を存分に嘗め盡した木村

は、見る／＼温柔な葉子の言葉や表情に醉ひしれるのだつた。カリフォルニヤから來る水々しい葡萄やバナナを器用な經木の小籃に盛つたり、美しい花束を携へたりして、葉子の朝化粧がしまつたかと思ふ頃には木村が缺かさず尋ねて來た。而して毎日くど／＼と興錄に葉子の容態を聞き糺した。興錄はいゝ加減な事を云つて一日延ばしに延ばしてゐるので堪らなくなつて木村が事務長に相談すると、事務長は興錄よりも更に要領を得ない受け答へをした、仕方なしに木村は途方に暮れて、又葉子に歸つて來て泣きつくやうに上陸を迫るのであつた。その毎日のいきさつを夜になると葉子は事務長と話しあつて笑ひの種にした。

　葉子は何んと云ふ事なしに、木村を困らして見たい、いぢめて見たいといふやうな不思議な殘酷な心を、木村に對して感ずるやうになつて行つた。事務長と木村とを目の前に置いて、何も知らない木村を、事務長が一流のきび／＼した惡辣な手で思ふさま飜弄して見せるのを眺めて樂しむのが一種の痼疾のやうになつた。而して葉子は木村を通じて自分の過去の總てに血の滴る復讐を敢へてしようとするのだつた。そんな場合に、葉子はよく何處かでうろ覺えにしたクレオパトラの挿話を思ひ出してゐた。クレオパトラが自分の運命の窮迫したのを知つて自殺を思ひ立つた時、幾人も奴隷を目の前に引き出さして、それを毒蛇の餌食にして、その幾人もの無辜の人々が悶えながら絶命するのを、眉も動かさずに見てゐたといふ挿話を思ひ出してゐた。葉子には過去の總ての呪咀が木村の一身に集まつてゐるやうにも思ひなされた。母の虐げ、五十川女史の術數、近親の壓迫、社會の環視、女に對する男の覬覦、女の苟合などゝいふ葉子の敵を木村の一身におつかぶせて、それに女の心が企み出す殘虐な仕打ちのあらん限りを濺ぎかけようとするのであつた。

「あなたは丑の刻參りの藁人形よ」

　こんな事を如何かした拍子に面と向つて木村に云つて、木村が怪訝な顏でその意味を酙みかねてゐるのを見る

と、葉子は自分にも譯の分らない涙を眼に一杯溜めながらヒステリカルに笑ひ出すやうな事もあつた。木村を拂ひ捨てる事によつて、蛇が殼を拔け出ると同じに、自分の總ての過去を葬つてしまふ事が出來るやうにも思ひなして見た。

葉子は又事務長に、どれ程木村が自分の思ふまゝになつてゐるかを見せつけようとする誘惑も感じてゐた。事務長の眼の前では隨分亂暴な事を木村に云つたりさせたりした。時には事務長の方が見兼ねて二人の間をなだめにかゝる事さへある位だつた。

或る時木村の來てゐる葉子の部屋に事務長が來合せた事があつた。葉子は枕許の椅子に木村を腰かけさせて、東京を發つた時の樣子を委しく話して聞かせてゐる所だつたが、事務長を見るといきなり樣子をかへて、さもさも木村を疎んじた風で、

「あなたは向うにいらしつて頂戴」

と木村を向うのソファに行くやうに眼で指圖して、事務長をその跡に坐らせた。

「さ、あなたこちらへ」

と云つて仰向けに寢たまゝ上眼をつかつて見やりながら、

「いゝお天氣のやうですことね。…あの時々ごーつと雷のやうな音のするのは何？……私うるさい」

「トロですよ」

「さう……お客樣がたんとおありですつてね」

「さあ少しは知つとるものがあるもんだで」

「昨夕もその美しいお客がいらしつたの？　とうとうお話にお見えにならなかつたのね」

木村を前に置きながら、この無謀とさへ見える言葉を遠慮會釋もなく云ひ出すのには、さすがの事務長もぎよつとしたらしく、返事も碌々しないで木村の方に向いて、

「どうですマッキンレーは。驚いた事が持ち上りをつたもんですね」

と話題を轉じようとした。この船の航海中シヤトルに近くなつた或る日、當時の大統領マッキンレーは兇徒の短銃に斃れたので、この事件は米國での噂の中心になつてゐるのだつた。木村はその當時の模様を委しく新聞紙や人の噂で知り合せてゐたので、乘り氣になつてその話に身を入れようとするのを、葉子は膠もなく遮つて、

「何んですねあなたは貴夫人の話の腰を折つたりして。そんなごまかし位ではだまされてはゐませんよ。倉地さん、どんな美しい方です。亞米利加生粋の人つてどんなゝんでせうね。私、見たい。遇はして下さいましな今度來たら。こゝに連れて來て下さるんですよ。他のものなんぞ何んにも見たくはないけれども、是ればかりは是非見たう御座んすわ。そこに行くとね、木村なんぞはそりやあ野暮なもんですことよ」

と云つて木村のゐる方を遥かに下眼で見やりながら、

「木村さんどう？ こつちにいらしつてからちつとは女のお友達がお出來になつて？ Lady Friend といふのが？」

「それが出來んで堪るか」

と事務長は木村の内行を見抜いて裏書きするやうに大きな聲で云つた。

「所が出來てゐたらお慰み、さうでせう？ 倉地さんまあかうなの。木村が私を貰ひに來た時にはね。石のやうに堅く坐りこんでしまつて、まるで命の取りやりでもし兼ねない談判の仕方ですのよ。その頃母は大病で臥つてゐましたの。何んとか母に仰有つてね、母に。私、忘れちやならない言葉がありましたわ。えゝと……さう〳〵(木村の口調を上手に眞似ながら)『私、若し外の人に心を動かすやうな事がありましたら神様の前に罪人です』

ですつて……さういふ調子ですもの」

木村は少し怒氣をほのめかす顏付をして、遠くから葉子を見詰めたまゝ口もきかないでゐた。事務長はからからと笑ひながら、

「それぢや木村さん今頃は神樣の前にいゝくら加減罪人になつとるでせう」

と木村を見返したので、木村も已むなく苦り切つた笑ひを浮べながら、

「已れを以て人を計る筆法ですね」

と答へはしたが、葉子の言葉を皮肉と解して、人前でたしなめるにしては稍ゝ輕過ぎるし、冗談と見て笑つてしまふにしては確かに强過ぎるので、木村の顏色は妙にぎごちなくこだはつてしまつて何時までも晴れなかつた。葉子は唇だけに輕い笑ひを浮べながら、膽汁の漲つたやうなその顏を下眼で快げにまじ〳〵と眺めやつた。而して苦い淸涼劑でも飮んだやうに胸のつかへを透かしてゐた。

やがて事務長が座を立つと、葉子は、眉をひそめて快からぬ顏をした木村を、强ひて又舊のやうに自分の側近く坐らせた。

「いやな奴つちやないの。あんな話でもしてゐないと、外に何んにも話の種のない人ですの……あなたさぞ御迷惑でしたらうね」

と云ひながら、事務長にしたやうに上眼に媚を集めてぢつと木村を見た。然し木村の感情はひどくほつれて容易に解ける樣子はなかつた。葉子は故意に威壓しようと企らむわざとな改まり方も見えた。葉子は惡戲者らしく腹の中でくす〳〵笑ひながら、木村の顏を好意をこめた眼付で眺め續けた。木村の心の奥には何か云ひ出して見たい癖に、何んとなく腹の中が見透かされさうで、云ひ出しかねてゐる物があるらしかつたが、途切れ勝ちな

がら話が小半晌も進んだ時、とてつもなく、
「事務長は、何んですか、夜になつてまであなたの部屋に話しに來る事があるんですか」
　とさりげなく尋ねようとするらしかつたが、その語尾は我れにもなく震へてゐた。葉子は陷穽にかゝつた無智な獸を憫み笑ふやうな微笑を唇に浮べながら、
「そんな事がされますものかこの小さな船の中で。考へても御覽なさいまし。さき程私が云つたのは、この頃は毎晩夜になると暇なので、あの人達が食堂に集まつて來て、酒を飲みながら大きな聲で色んな下らない話をするんですの。それがよくこゝまで聞こえるんです。それに昨夜あの人が來なかつたからからかつてやつただけなんですのよ。この頃は質の惡い女までが隊を組むやうにしてどつさり船に來て、それは騷々しいんですの。……ほほゝゝあなたの苦勞性つたらない」
　木村は取りつく島を見失つて二の句がつげないでゐた。それを葉子は可愛いゝ眼を上げて、無邪氣な顏をして見やりながら笑つてゐた。而して事務長が這入つて來た時途切らした話の緒口を見事に忘れずに拾ひ上げて、東京を發つ時の模樣を又仔細に話しつゞけた。
　かうした風で葛藤は葉子の手一つで勝手に紛らされたりほごされたりした。
　葉子は一人の男をしつかりと自分の把持の中に置いて、それを猫が鼠でも弄ぶるやうに、勝手に弄ぶつて樂しむのをやめる事が出來なかつたと同時に、時々は木村の顏を一眼見たばかりで、蟲唾が走る程厭惡の情に驅り立てられて、我れながら如何していゝか分らない事もあつた。そんな時には唯一圖に腹痛を口實にして、一人になつて、腹立ち紛れに有り合せたものを取つて床の上に抛つたりした、もう何もかも云つてしまはう。弄ぶにも足らない木村を近づけておくには當らない事だ。何もかも明かにして氣分だけでもさつぱりしたいとさう思ふ事も

あつた。然し同時に葉子は戰術家の冷靜さを以て、實際問題を勘定に入れる事も忘れはしなかつた。事務長をしつかり自分の手の中に握るまでは、早計に木村を逃がしてはならない。「宿屋きめずに草鞋を脫ぐ」……母がこんな事を葉子の小さい時に敎へてくれたのを思ひ出したりして、葉子は一人で苦笑ひもした。

さうだ、まだ木村を逃がしてはならぬ。葉子は心の中に書き記してゞも置くやうに、上眼を使ひながらこんな事を思つた。

また或る時葉子の手許に米國の切手の貼られた手紙が屆いた事があつた。葉子は船へなぞ宛てゝ手紙をよこす人はない筈だがと思つて開いて見ようとしたが、又例の惡戲な心が動いて、わざと木村に開封させた。その內容がどんなものであるかの想像もつかないので、それを木村に讀ませるのは、武器を相手に渡して置いて、自分は素手で格鬪するやうなものだつた。葉子はそこに興味を持つた。而してどんな不意な難題が持ち上がるだらうかと、心をときめかせながら結果を待つた。その手紙は葉子に簡單な挨拶を殘したまゝ上陸した岡から來たものだつた。如何にも人柄に不似合ひな下手な字體で、葉子がひよつとすると上陸を見合せてそのまゝ歸るといふ事を聞いたが、若しさうなつたら自分も斷然歸朝する。氣違ひじみた仕業とお笑ひになるかも知れないが、自分には如何考へて見てもそれより外に道はない。葉子に離れて路傍の人の間に伍したらそれこそ狂氣になるばかりだらう。今まで打ち明けなかつたが、自分は日本でも屈指な豪商の身內に一人子と生れながら、體が弱いのと母が繼母である爲めに、父の慈悲から洋行する事になつたが、自分には故國が慕はれるばかりでなく、葉子のやうに親しみを覺えさしてくれた人はないので、葉子なしには一刻も外國の土に足を止めてゐる事は出來ぬ。兄弟のない自分には葉子が前世からの姉とより思はれぬ。自分を憐れんで弟と思つてくれ。せめては葉子の聲の聞こえる所顏の見える所にゐるのを許してくれ。自分はそれだけの憐れみを得たいばかりに、家族や後見人の譏りも何んとも

思はずに歸國するのだ。事務長にもそれを許してくれるやうに賴んで貰ひたい。といふ事が、少し甘い、然し眞率な熱情をこめた文體で長々と書いてあつたのだつた。

葉子は木村が問ふまゝに包まず岡との關係を話して聞かせた。自分より一段若いと見ると、かくばかり寛大になる木村を見て葉子は不快に思つた。よし、それでは岡を通して倉地との關係を木村に知らせてやらう。而して木村が嫉妬と憤怒とで眞黑になつて歸つて來た時、それを思ふまゝ操つて又元の鞘に納めて見せよう。さう思つて葉子は木村の云ふまゝに任せて置いた。

次の朝、木村は深い感激の色を湛へて船に來た。而して岡と會見した時の樣子を委しく物語つた。岡はオリエンタル・ホテルの立派な一室にたつた一人でゐたが、そのホテルには田川夫妻も同宿なので、日本人の出入りがうるさいと云つて困つてゐた。木村の訪問したといふのを聞いて、ひどくなつかしさうな樣子で出迎へて、兄でも敬ふやうにもてなして、稍々落ち付いてから隱し立てなく眞率に葉子に對する自分の憧憬の程を打ち明けたので、木村は自分の云はうとする告白を、他人の口からまざ〳〵と聞くやうな切な情にほだされて、貰ひ泣きまでしてしまつた。二人は互に相憐れむといふやうななつかしみを感じた。是れを緣に木村は何處までも岡を弟とも思つて親しむ積りだ。が、日本に歸る決心だけは思ひ止るやうに勸めて置いたと云つた。岡はさすがに育ちだけに事務長と葉子との間のいきさつを想像に任せて、はしたなく木村に語る事はしなかつたらしい。木村はその事に就いては何んとも云はなかつた。葉子の期待は全く外れてしまつた。役者下手な爲めに、折角の芝居が芝居にならずにしまつた事を物足らなく思つた。然しこの事があつてから岡の事が時々葉子の頭に浮ぶやうになつた。女にしてもみまほしいかの華車な青春の姿がどうかするといとしい思ひ出となつて葉子の心の隅に潛むやうになつた。

船がシヤトルに着いてから五六日經つて、木村は田川夫妻にも面會する機會を造つたらしかつた。その頃から木村は突然傍目にもそれと氣が附く程考へ深くなつて、ともすると葉子の言葉すら聞き落して慌てたりする事があつた。而して或る時とう／＼一人胸の中には納めてゐられなくなつたと見えて、

「私にやあなたが何故あんな人と近しくするか分りませんがね」

と事務長の事を噂のやうに云つた。葉子は少し腹部に痛みを覺えるのを殊更誇張して脇腹を左手で押へて、眉をひそめながら聞いてゐたが、尤もらしく幾度も點頭いて、

「それは本當に仰有る通りですから何も好んで近づきたいとは思はないんですけれども、これまで隨分世話になつてゐますしね、それにあゝ見えてゐて思ひの外親切氣のある人ですから、ボーイでも水夫でも怖がりながらなついてゐますわ。おまけに私お金まで借りてゐますもの」

とさも當惑したらしく云ふと、

「あなたお金は無しですか」

木村は葉子の當惑さを自分の顏にも現はしてゐた。

「それはお話したぢやありませんか」

「困つたなあ」

木村は餘程困り切つたらしく握つた手を鼻の下にあてがつて、下を向いたまゝ暫く思案に暮れてゐたが、

「いくら程借りになつてゐるんです」

「さあ診察料や滋養品で百圓近くにもなつてゐますか知らん」

「あなたは金は全く無しですね」

木村は更に繰返して云つて溜息をついた。

葉子は物慣れぬ弟を教へいたはるやうに、

「それに萬一私の病氣がよくならないで、一先づ日本へでも歸るやうになれば、なほ〳〵歸りの船の中では世話にならなければならないでせう。……でも大丈夫そんな事はないとは思ひますけれども、先き〴〵までの考へをつけておくのが旅にあれば一番大事ですもの」

木村はなほも握つた手を鼻の下に置いたなり、何んにも云はず、身動きもせず考へ込んでゐた。葉子は術なさゝうに木村のその顔を面白く思ひながらまじ〳〵と見やつてゐた。

木村はふと顔を上げてしげ〳〵と葉子を見た。何かそこに字でも書いてありはしないかとそれを讀むやうに。而して默つたまゝ深々と歎息した。

「葉子さん。私は何から何まであなたを信じてゐるのがいゝ事なのでせうか。あなたの身の爲めばかり思つても云ふ方がいゝかとも思ふんですが……」

「では仰有つて下さいましな何んでも」

葉子の口は少し親しみを籠めて冗談らしく答へてゐたが、その眼からは木村を默らせるだけの光が射られてゐた。輕はずみた事を苟くも云つて見るがいゝ、頭を下げさせないでは置かないから。さうその眼はたしかに云つてゐた。

木村は思はず自分の眼をたじろがして默つてしまつた。葉子は片意地にも眼で續けざまに木村の顔を鞭うつた。木村はその答の一つ〳〵を感ずるやうにどぎまぎした。

「さ、仰有つて下さいまし……さ」

葉子はその言葉には何處までも好意と信頼とを罩めて見せた。木村は矢張り躊躇してゐた。葉子はいきなり手を延ばして木村を寢臺に引きよせた。而して半分起き上つてその耳に近く口を寄せながら、

「あなた見たいに水臭い物の仰有り方をなさる方もないもんね。何んとでも思つていらしつやる事を仰有つて下さればいゝぢやありませんか。……あ、痛い……いゝえさして痛くもないの。何を思つていらつしやるんだか仰有つて下さいまし、ね、さ。何んでせうねえ。伺ひたい事ね。そんな他人行儀は……あ、あ、痛い、おゝ痛い……一寸此處のところを押へて下さいまし。……さし込んで來たやうで……あ、あ」

と云ひながら、眼をつぶつて、床の上に寢倒れると、木村の手を持ち添へて自分の脾腹を押へさして、つらさうに齒を噛ひしばつてシーツに顔を埋めた、肩でつく氣息がかすかに雪白のシーツを震はした。

木村はあたふたしながら、今までの言葉などはそつちのけにして介抱にかゝつた。

二

繪島丸はシヤトルに着いてから十二日目に纜を解いて歸航する筈になつてゐた。その出發があと三日になつた十月十五日に、木村は、船醫の興録から、葉子は如何しても一先づ歸國させる方が安全だといふ最後の宣告を下されてしまつた。木村はその時にはもう大體覺悟を決めてゐた。歸らうと思つてゐる葉子の下心を朧ろげながら見て取つて、それを飜へす事は出來ないと諦めてゐた。運命に從順な羊のやうに、然し執念く將來の希望を命にして、現在の不滿に服從しようとしてゐた。

緯度の高いシヤトルに冬の襲ひかゝつて來る樣はすさまじいものだつた。海岸線に沿うて遙か遠くまで連續して見渡されるロッキーの山々はもうたつぷりと雪がかゝつて、穩やかな夕空に現はれ慣れた雲の峰も、古綿のや

うに形の崩れた色の寒い霰雲に變つて、人をおびやかす白いものが、今にも地を拂つて降りおろして來るかと思はれた。海沿ひに生え揃つた亞米利加松の翠ばかりが毒々しい程黒ずんで、眼に立つばかりで、濶葉樹の類は、何時の間にか、葉を拂ひ落した枝先きを針のやうに鋭く空に向けてゐた。シャトルの町並みがあると思はれる邊からは——船の繋がれてゐる處から市街は見えなかつた——急に煤煙が立ち增さつて、忙はしく冬支度を整へながら、やがて北半球を包んで攻め寄せて來る眞白な寒氣に對して覺束ない抵抗を用意するやうに見えた。ポケットに兩手をさし入れて、頭を縮め氣味に、波止場の石疊を歩き廻る人々の姿にも、不安と焦燥との窺はれる忙はしい自然の移り變りの中に、繪島丸は慌だしい發航の準備をし始めた。絞盤の齒車のきしむ音が船首と船尾とからやかましく冴え返つて聞こえ始めた。

木村はその日も朝から葉子を訪づれて來た。殊に青白く見える顏付は、何かわく／＼と胸の中に煮え返る想ひをまざ／＼と裏切つて、見る人の憐れを誘ふ程だつた。背水の陣と自分でも云つてゐるやうに、亡父の財產をありつたけ金に代へて、手つ拂ひに日本の雜貨を買ひ入れて、こちらから通知書一つ出せば、何時でも日本から送つてよこすばかりにしてあるもの丶、手許には些かの錢も殘つてはゐなかつた。葉子が來たならばと金の上にも心の上にもあてにしてゐたのが見事に外れてしまつて、葉子が歸るにつけては、無けなしの所から又々何んとかしなければならないはめに立つた木村は、二三日の中に、糠喜びも一時の間で、孤獨と冬とに圍まれなければならなかつたのだ。

葉子は木村が結局事務長にすがり寄つて來る外に道のない事を察してゐた。

木村は果して事務長を葉子の部屋に呼び寄せてもらつた。事務長はすぐやつて來たが、服なども仕事着のまゝで何か餘程せはしさうに見えた。木村はまあと云つて倉地に椅子を與へて、今日は毎時のすげない態度に似ず、

折入つて色々と葉子の身の上を賴んだ。事務長は始めの忙しさうだつた樣子に引きかへて、どつしりと腰を据ゑて正面から例の大きく木村を見やりながら、親身に耳を傾けた。木村の樣子の方が却つてそは〳〵しく眺めやられた。

　木村は大きな紙入れを取り出して、五十弗の切手を葉子に手渡しゝた。

「何もかも御承知だから倉地さんの前で云ふ方が世話なしだと思ひますが、何んと云つてもこれだけしか出來ないんです。こ、これです」

　と云つて淋しく笑ひながら、兩手を出して擴げて見せてから、チヨッキをたゝいた。胸にかゝつてゐた重さうな金鎖も、四つまで篏められてゐた指輪の三つまでも失くなつてゐて、たつた一つ婚約の指輪だけが貧乏臭く左の指にはまつてゐるばかりだつた。葉子はさすがに「まあ」と云つた。

「葉子さん、私はどうにでもします。男一匹なりや何處にころがり込んだからつて、――そんな經驗も面白い位のものですが、これんばかりぢやあなたが足りなからうと思ふと、面目もないんです。倉地さん、あなたにはこれまでゞさへいゝ加減世話をしていたゞいて何んとも濟みませんですが私共二人はお打ち明け申した處、かう云ふていたらくなんです。橫濱へさへおとゞけ下さればその先きは又如何にでもしますから、若し旅費にでも不足しますやうでしたら、御迷惑序に何んとかしてやつて頂く事は出來ないでせうか」

　事務長は腕組みをしたまゝまじ〳〵と木村の顏を見やりながら聞いてゐたが、

「あなたはちつとも持つとらんのですか」

　と聞いた。木村はわざと快活に强ひて聲高く笑ひながら、

「綺麗なもんです」

と又チョッキをたゝくと、

「そりやいかん。何、船賃なんぞ入りますものか。東京で本店にお拂ひになればいゝんぢやし、横濱の支店長も萬事心得とられるんだで、御心配入りませんわ。そりやあなたお持ちになるがいゝ。外國にゐて文なしでは心細いもんですよ」

と例の鹽辛聲でやゝ不機嫌らしく云つた。その言葉には不思議に重々しい力か罩つてゐて、木村は暫く彼是れと押問答をしてゐたが、結局事務長の親切を無にする事の氣の毒さに、直な心からなほ色々と旅中の世話を頼みながら、又大きな紙入れを取り出して切手をたゝみ込んでしまつた。

「よし〳〵それで何も云ふ事はなし。早月さんはわしが引き受けた」

と不敵な微笑を浮べながら、事務長は始めて葉子の方を見返つた。

葉子は二人を眼の前に置いて、いつものやうに見比べながら二人の會話を聞いてゐた。當り前なら、葉子は大抵の場合、弱いものゝ味方をして見るのが常だつた。如何な時でも、強いものがその強味を振りかざして弱い者を壓迫するのを見ると、葉子はかつとなつて、理が非でも弱いものを勝たしてやりたかつた。今の場合木村は單に弱者であるばかりでなく、その境遇も慘めな程便りない苦しいものである事は存分に知り拔いてゐながら、木村に對しての同情は不思議にも湧いて來なかつた。齡の若さ、姿のしなやかさ、境遇のゆたかさ、才能の華やかさといふやうなものを便りにする男達の蠱惑の力は、事務長の前では吹けば飛ぶ塵の如く對照された。この男の前には、弱いものゝ哀れよりも醜さがさらけ出された。

何んといふ不幸な青年だらう。若い時に父親に死に別れてから、萬事思ひのまゝだつた生活からいきなり不自由な浮世のどん底に放り出されながら、めげもせずにせつせと働いて、後指をさゝれないだけの世渡りをして、

誰からも働きのある行末頼母しい人と思はれながら、それでも心の中の淋しさを打ち消す爲めに思ひ入つた戀人は仇し男に反いてしまつてゐる。それを又さうとも知らずに、その男の情けにすがつて、消えるに決つた約束をのがすまいとしてゐる。……葉子は强ひて自分を說服するやうにかう考へて見たが、少しも身にしみた感じは起つて來ないで、動もすると笑ひ出したいやうな氣にすらなつてゐた。

「よし〱それで何も云ふ事はなし。早月さんはわしが引き受けた」

といふ聲と不敵な微笑とがどやすやうに葉子の心の戶を打つた時、葉子も思はず微笑を浮べてそれに應じようとした。が、その瞬間、眼ざとく木村の見てゐるのに氣がついて、顏には笑ひの影は微塵も現はさなかつた。

「わしへの用はそれだけでせう。ぢや忙しいで行きますよ」

とぶつきらぼうに云つて事務長が部屋を出て行つてしまふと、殘つた二人は妙にてれて、暫くは互に顏を見合はすのも憚つて默つたまゝでゐた。

事務長が行つてしまふと葉子は急に力が落ちたやうに思つた。今までの事が丸で芝居でも見て樂しんでゐたやうだつた。木村のやる瀨ない心の中が急に葉子に逼つて來た。葉子の眼には木村を憐れむとも自分を憐れむとも知れない涙がいつの間にか宿つてゐた。

木村は痛ましげに默つたまゝで暫く葉子を見やつてゐたが、

「葉子さん今になつてさう泣いて貰つちや私が堪りませんよ。機嫌を直して下さい。又いゝ日も廻つて來るでせうから。神を信ずるもの――さう云ふ信仰が今あなたにあるか如何か知らないが――お母さんがあゝいふ堅い信者でありなさつたし、あなたも仙臺時分には確かに信仰を持つてゐられたと思ひますが、こんな場合には尙更同じ神樣から來る信仰と希望とを持つて進んで行きたいものだと思ひますよ。何事も神樣は知つてゐられる……そこ

に私は撓まない希望をつないで行きます」

決心した所があるらしく力強い言葉でかう云つた。何の希望！　葉子は木村の事については、木村の所謂神様以上に木村の未來を知りぬいてゐるのだ。木村の希望といふのはやがて失望に而して絶望に終るだけのものだ。何の信仰！　何の希望！　木村は葉子が据ゑた道を――行きどまりの袋小路を――天使の昇り降りする雲の梯のやうに思つてゐる。あゝ何の信仰！

葉子はふと同じ眼を自分に向けて見た。木村を勝手氣儘にこづき廻す威力を備へた自分は又誰に何者に勝手にされるのだらう。何處かで大きな手が情けもなく容赦もなく冷然と自分の運命を操つてゐる。木村の希望が果敢なく斷ち切れる前、自分の希望が逸早く斷たれてしまはないとどうして保障する事が出來よう。木村は善人だ。自分は悪人だ。葉子はいつの間にか純な感情に捕へられてゐた。

「木村さん。あなたは屹度、仕舞には屹度祝福をお受けになります……どんな事があつても失望なさつちやいやですよ。あなたのやうな善い方が不幸にばかりお遇ひになる譯がありませんわ。……私は生れるとから呪はれた女なんですもの。神、本當は神様を信ずるより……信ずるより憎む方が似合つてゐるんです……ま、聞いて……でも、私卑怯よいやだから信じます……神様は私見たいなものを如何なさるか、しつかり眼を明いて最後まで見てゐます」

と云つてゐる中に誰にともなく口惜しさが胸一杯にこみ上げて來るのだつた。

「あなたはそんな信仰はないと仰有るでせうけれども……でも私にはこれが信仰です。立派な信仰ですもの」

と云つてきつぱり思ひ切つたやうに、火のやうに熱く眼に溜つたまゝで流れずにゐる涙を、ハンケチでぎゆつと押拭ひながら、黯然と頭を垂れた木村に、

「もうやめませうこんなお話。こんな事を云つてると、云へば云ふ程先きが暗くなるばかりです。ほんとに思ひ切つて不仕合せな人はこんな事をつべこべと口になんぞ出しはしませんわ。ね、いや、あなたは自分の方から滅入つてしまつて、私の云つた事位で何んですねえ、男の癖に」

　木村は返事もせずに眞靑になつて俯向いてゐた。

　そこに「御免なさい」と云ふかと思ふといきなり戸を開けて這入つて來たものがあつた。木村も葉子も不意を打たれて氣先きをくじかれながら、見ると、何日ぞや錨綱で足を怪我した時、葉子の世話になつた老水夫だつた。彼はとう／＼跛脚になつてゐた。而して水夫のやうな仕事には迚も役に立たないから、幸ひオークランドに小農地を持つて兎に角暮しを立てゝゐる甥を尋ねて厄介になる事になつたので、禮かた／″＼暇乞ひに來たといふのだつた。葉子は紅くなつた眼を少し恥かしげにまたゝかせながら、色々と慰めた。

「何ねから老いぼれちや、こんな稼業をやつてるがてんでうそなれど、事務長さんとボンスン（水夫長）とが可哀さうだと云つて使つてくれるで、いゝ氣になつたが罰あたつたんだね」

　と云つて臆病に笑つた。葉子がこの老人を憐れみいたはる樣は傍目もいぢらしかつた。日本には傳言を頼むやうな近親さへない身だといふやうな事を聞く度に、葉子は泣き出しさうな顔をして合點々々してゐたが、仕舞には木村の止めるのも聞かず寢床から起き上つて、木村の持つて來た果物をありつたけ籃につめて、

「陸に上ればいくらもあるんだらうけれども、これを持つてお出で。而してその中に果物でなく這入つてゐるものがあつたら、それもお前さんに上げたんだからね、人に取られたりしちやいけませんよ」

　と云つてそれを渡してやつた。

　老人が來てから葉子は夜が明けたやうに始めて晴れやかな普段の氣分になつた。而して例の惡戯らしいにこに

こした愛嬌を顔一面に湛へて、
「何んといふ氣さくなんでせう。私、あんなお爺さんのお内儀さんになつて見たい……だからね、いゝものを遣つちまつた」
きよとりとしてまじ〳〵木村のむつゝりとした顔を見やる樣子は大きな子供とより思へなかつた。
「あなたから頂いたエンゲージ・リングね、あれをやりましてよ。だつて何んにも無いんですもの」
何んとも云へない媚をつゝむおとがひが二重になつて、綺麗な齒並みが笑ひの漣のやうに唇の汀に寄せたり返したりした。
木村は、葉子といふ女は如何してかうむら氣で上すべりがしてしまふのだらう、情けないと云ふやうな表情を顔一面に漲らして、何か云ふべき言葉を胸の中で整へてゐるやうだつたが、急に思ひ捨てたといふ風で、默つたまゝでほつと深い溜息をついた。
それを見ると今まで珍らしく押へつけられてゐた反抗心が、又もや旋風のやうに葉子の心に起つた。「ねち〳〵さつたらない」と胸の中をいら〳〵させながら、序での事に少しいぢめてやらうといふ企みが頭を擡げた。然し顔は何處までも前のまゝの無邪氣さで、
「木村さんお土産を買つて頂戴な。愛も貞もですけれども、親類達や古藤さんなんぞにも何かしないぢや顔が向けられませんもの。今頃は田川の奧さんの手紙が五十川の小母さんの所に着いて、東京では屹度大騷ぎをしてゐるに違ひありませんわ。發つ時には世話を燒かせ、留守は留守で心配させ、ぽかんとしてお土產一つ持たずに歸つて來るなんて、木村も一體木村ぢやないかと云はれるのが、私、死ぬよりつらいから、少しは驚く程のものを買つて頂戴。先程のお金で相當のものが買れるでせう」

木村は駄々兒をなだめるやうにわざとおとなしく、
「それは宜しい、買へとなら買ひもしますが、私はあなたがあれを纏つたまゝ持つて歸つたらと思つてゐるんです。大抵の人は横濱に着いてから土產を買ふんですよ。その方が實際恰好ですからね。持ち合せもなしに東京に着きなさる事を思へば、土產なんかどうでもいゝと思ふんですがね」
「東京に着きさへすればお金はどうにでもしますけれども、お土產は……あなた横濱の仕入れものはすぐ知れますわ……御覽なさいあれを」
　と云つて棚の上に帽子入れのボール箱に眼をやつた。
「古藤さんに連れて行つて頂いてあれを買つた時は、隨分吟味した積りでしたけれども、船に來てから見てゐる中にすぐ倦きてしまひましたの。それに田川の奥さんの洋服姿を見たら、我慢にも日本で買つたものを被つたり着たりする氣にはなれませんわ」
　さう云つてる中に木村は棚から箱をおろして中を覗いてゐたが、
「成程型はちつと古いやうですね。だが品はこれならこつちでも上の部ですぜ」
「だからいやですわ。流行おくれとなると値段の張つたものほど見つともないんですもの」
　暫くしてから、
「でもあのお金はあなた御入用ですわね」
　木村は慌てゝ辯解的に、
「いゝえあれはどの道あなたに上げる積りでゐたんですから……」
　と云ふのを葉子は耳にも入れない風で、

「ほんとに馬鹿ね私は…… 思ひやりも何んにもない事を申上げてしまつて、如何しませうねえ。……もう私どんな事があつてもそのお金だけは頂きません事よ。かう云つたら誰が何んと云つたつて駄目よ」

ときつぱり云ひ切つてしまつた。木村は固より一度云ひ出したら後へは引かない葉子の日頃の性分を知り拔いてゐた。で、云はず語らずの中に、その金は品物にして持つて歸らすより外に道のない事を觀念したらしかつた。

*　*　*

その晩事務長が仕事を終へてから葉子の部屋に來ると、葉子は何か氣に障へた風をして碌々持成もしなかつた。

「とう〳〵形がついた。十九日の朝の十時だよ出航は」

と云ふ事務長の快活な言葉に返事もしなかつた。男は怪訝な顏付で見やつてゐる。

「惡黨」

と暫くしてから、葉子は一言これだけ云つて事務長を睨めた。

「何んだ？」

と尻上りに云つて事務長は笑つてゐた。

「あなた見たいな殘酷な人間は私始めて見た。木村を御覽なさい可哀さうに。あんなに手ひどくしなくつたつて…… 恐ろしい人つてあなたの事ね」

「何？」

と又事務長は尻上りに大きな聲で云つて寢床に近づいて來た。

「知りません」

と葉子はなほ怒つて見せようとしたが、いかにも刻みの荒い、單純な、他意のない男の顏を見ると、體の何處

かゞ揺られる氣がして來て、わざと引き締めて見せた唇の邊から思はずも笑ひの影が潜み出た。

それを見ると事務長は苦い顔と笑つた顔とを一緒にして、

「何んだい下らん」

と云つて、電燈の近所に椅子をよせて、大きな長い脚を投げ出して、夕刊新聞を大きく開いて眼を通し始めた。木村とは引きかへて事務長がこの部屋に來ると、部屋が小さく見える程だつた。上向けた靴の大きさには葉子は吹き出したい位だつた。葉子は眼で撫でたりさすつたりするやうにして、この大きな子供見たやうな暴君の頭から足の先きまでを見やつてゐた。ごわつ／＼と時々新聞を折り返す音だけが聞こえて、積荷があらかた片付いた船室の夜は靜かに更けて行つた。

葉子はさうしたまゝでふと木村を思ひやつた。

木村は銀行に寄つて切手を現金に換へて、店の締らない中にいくらか買物をしてそれを小脇に抱へながら、夕食もしたゝめずに、チャクソン街にあるといふ日本人の旅店に歸り着く頃には、町々に燈がともつて、寒い霧と煙との間を勞働者達が疲れた五體を引きずりながら歩いて行くのに澤山出遇つてゐるだらう。小さなストーブに煙の多い石炭がぶし／＼燃えて、けば／＼しい電燈の光だけが、鞭うつやうにがらんとした部屋の薄穢さを煌々と照してゐるだらう。その光の下で、ぐら／＼する椅子に腰かけて、ストーブの火を見つめながら木村が考へてゐる。暫く考へてから淋しさうに見るともなく部屋の中を見廻して、又ストーブの火に眺め入るだらう。その中にあの涙の出易い眼からは涙がほろ／＼と留度もなく流れ出るに違ひない。

事務長が音をたてゝ新聞を折り返した。

木村は膝頭に手を置いて、その手の中に顔を埋めて泣いてゐる。祈つてゐる。葉子は倉地から眼を放して、上

眼を使ひながら木村の祈（いのり）の聲に耳を傾けようとした。途切れ〳〵な切ない祈の聲が涙にしめつて確かに……確かに聞こえて來る。葉子は眉を寄せて注意力を集注しながら、木村が本當にどう葉子を思つてゐるかをはつきり見窮めようとしたが、どうしても思ひ浮べて見る事が出來なかつた。

　事務長がまた新聞を折り返す音を立てた。

　葉子ははつとして淀（よど）みに支へられた木の葉が又流れ始めたやうにすら〳〵と木村の所作を想像した。それが段段岡の上に移つて行つた。哀れな岡！　岡もまだ寢ないでゐるだらう。木村なのか岡なのかいつまでも〳〵寢ないで火の消えかゝつたストーヴの前に蹲（うづくま）つてゐるのは……更けるまゝにしみ込む寒さはそつと床を傳はつて足の先きから這上つて來る。男はそれにも氣が付かぬ風で椅子の上にうなだれてゐる。總ての人は眠つてゐる時に、木村の葉子も事務長に抱かれて安々と眠つてゐる時に……。

　こゝまで想像して來ると小說に讀み耽つてゐた人が、ほつと溜息をしてばたんと書物をふせるやうに、葉子も何とはなく深い溜息をしてはつきりと事務長を見た。葉子の心は小說を讀んだ時の通り無關心の Pathos をかすかに感じてゐるばかりだつた。

「おやすみにならないの？」

　と葉子は鈴のやうに涼しい小さい聲で倉地に云つて見た。大きな聲をするのも憚（はゞか）られる程あたりはしんと靜まつてゐた。

「う」

　と返事はしたが事務長は煙草をくゆらしたまゝ新聞を見續けてゐた。葉子も默つてしまつた。

　やゝ暫くしてから事務長もほつと溜息をして、

「どれ寢るかな」

と云ひながら椅子から立つて寢床に這入つた。葉子は事務長の廣い胸に巣喰ふやうに丸まつて少し震へてゐた。

やがて子供のやうにすや／＼と安らかな小さな鼾が葉子の唇から漏れて來た。

倉地は暗闇の中で長い間まんじりともせず大きな眼を開いてゐたが、やがて、

「おい惡黨」

と小さな聲で呼びかけて見た。

然し葉子の規則正しく樂しげな寢息は露ほども亂れなかつた。

眞夜中に、恐ろしい夢を葉子は見た。よくは覺えてゐないが、葉子は殺してはいけないいけない／＼と思ひながら人殺しをしたのだつた。一方の眼は尋常に眉の下にあるが、一方のは不思議にも眉の上にある、その男の額から黑血がどく／＼と流れた。男は死んでも物凄くにやり／＼と笑ひ續けてゐた。その笑ひ聲が木村々々と聞こえた。始めの中は聲が小さかつたが段々大きくなつて數も殖えて來た。その「木村々々」といふ數限りもない聲がうざ／＼と葉子を取り捲き始めた。葉子は一心に手を振つてそこから遁れようとしたが手も足も動かなかつた。

木
村
木　木
村　村
木　木　木
村　村　村
木　木　木　木
村　村　村　村
木　木　木　木　木
村……　村……　村……　村……　村……

ぞつとして寒氣を覺えながら、葉子は闇の中に眼をさました。恐ろしい凶夢の名殘りは、ど、ど、ど……と激しく高くうつ心臟に殘つてゐた。葉子は恐怖におびえながら一心に暗い中をおど〳〵と手探りに探ると事務長の胸に觸れた。

「あなた」

と小さい震へ聲で呼んで見たが男は深い眠りの中にあつた。何んとも云へない氣味惡さがこみ上げて來て、葉子は思ひ切り男の胸をゆすぶつて見た。

然し男は材木のやうに感じなく熟睡してゐた。

二二

何處かから菊の香がかすかに通つて來たやうに思つて葉子は快い眠りから眼を覺ました。自分の側には、倉地が頭からすつぽりと布團を被つて、鼾も立てずに熟睡してゐた。料理屋を兼ねた旅館のに似合はしい派手な縮緬の夜具の上にはもう大分高くなつたらしい秋の日の光が障子越しに射してゐた。葉子は往復一ケ月の餘を船に乘り續けてゐたので、船脚の搖めきの名殘りが殘つてゐて、體がふらり〳〵と搖れるやうな感じを失つてはゐなかつたが、廣い疊の間に大きな軟い夜具をのべて、五體を思ふまゝ延ばして、一晩ゆつくりと眠り通したその心地よさは格別だつた。仰向けになつて、寒からぬ程度に暖まつた空氣の中に兩手を二の腕までむき出しにして、軟かい髮の毛に快い觸覺を感じながら、何を思ふともなく天井の木目を見やつてゐるのも、珍らしい事のやうに快かつた。

稍ゝ小半時もさうしたまゝでゐると、帳場でぼん〳〵時計が九時を打つた。三階にゐるのだけれどもその音は

ほがらかに乾いた空氣を傳つて葉子の部屋まで響いて來た。と、倉地がいきなり夜具をはね除けて床の上に上體を立てゝ眼をこすつた。

「九時だな今打つたのは」

と陸で聞くとをかしい程大きな鹽がれ聲で云つた。どれ程熟睡してゐても、時間には鋭敏な船員らしい倉地の樣子が何んの事はなく葉子を微笑ました。

倉地が立つと、葉子も床を出た。そしてその邊を片付けたり、煙草を吸つたりしてゐる間に（葉子は船の中で煙草を吸ふ事を覺えてしまつたのだつた）倉地は手早く顏を洗つて部屋に歸つて來た。而して制服に着かへ始めた。葉子はいそ／＼とそれを手傳つた。倉地特有な西洋風に甘つたるいやうな一種の匂ひがその體にも服にもまつはつてゐた。それが不思議に何時でも葉子の心をときめかした。

「もう飯を喰つとる暇はない。又暫く忙しいで木つ葉微塵だ。今夜は晩いかも知れんよ。俺達には天長節も何もあつたもんぢやない」

さう云はれて見ると葉子は今日が天長節なのを思ひ出した。葉子の心はなほ／＼寛濶になつた。

倉地が部屋を出ると葉子は縁側に出て手欄から下を覗いて見た。兩側に櫻並木のずつとならんだ紅葉坂は急勾配をなして海岸の方に傾いてゐる、そこを倉地の紺羅紗の姿が勢よく歩いて行くのが見えた。半分がた散り盡した櫻の葉は眞紅に紅葉して、軒並みに揭げられた日章旗が、風のない空氣の中に鮮やかに列んでゐた。その間に英國の國旗が一本交つて眺められるのも開港場らしい風情を添へてゐた。

遠く海の方を見ると稅關の棧橋に繫はれた四艘程の汽船の中に、葉子が乘つて歸つた繪島丸もまじつてゐた。眞靑に澄み渡つた海に對して今日の祭日を祝賀する爲めに檣から檣にかけわたされた小旗が玩具のやうに眺めら

れた。

葉子は長い航海の始終を一場の夢のやうに思ひやつた。その長旅の間に、自分の一身に起つた大きな變化も自分の事のやうではなかつた。葉子は何がなしに希望に燃えた活々した心で手欄を離れた。部屋には小ざつぱりと身支度をした女中が來て寢床を擧げてゐた。一間半の大床の間に飾られた大花活けには、菊の花が一抱へ分も活けられてゐて、空氣が動く度毎に仙人じみた香を漂はした。その香を嗅ぐと、ともするとまだ外國にゐるのではないかと思はれるやうな旅心が一氣にくだけて、自分はもう確かに日本の土の上にゐるのだと云ふ事がしつかり思はされた。

「いゝお日和ね。今夜あたりは忙しんでせう」

と葉子は朝飯の膳に向ひながら女中に云つて見た。

「はい今夜は御宴會が二つばかり御座いましてね。でも濱の方でも外務省の夜會に入らつしやる方も御座いますから、たんと込み合ひは致しますまいけれども」

さう應へながら女中は、昨晩遲く着いて來た、一寸得體の知れないこの美しい婦人の素性を探らうとするやうに注意深い眼をやつた。葉子は葉子で「濱」と云ふ言葉などから、横濱と云ふ土地を形にして見るやうな氣持がした。

短くなつてはゐても、何んにもする事なしに一日を暮らすかと思へば、その秋の一日の長さが葉子にはひどく氣になり出した。明後日東京に歸るまでの間に、買物でも見て歩きたいのだけれども、土產物は木村が例の銀行切手を崩して有り餘る程買つて持たしてよこしたし、手許には哀れな程より金は殘つてゐなかつた。一寸でもぢつとしてゐられない葉子は、日本で着ようとは思はなかつたので、西洋向きに註文した派手過ぎるやうな綿入れ

に手を通しながら、とつおいつ考へた。

「さうだ古藤に電話でもかけて見てやらう」

葉子はこれはいゝ思案だと思つた。東京の方で親類達がどんな心持で自分を迎へようとしてゐるか、古藤のやうな男に今度の事がどう響いてゐるだらうか、これは單に慰みばかりではない、知つておかなければならない大事な事だつた。さう葉子は思つた。そして女中を呼んで東京に電話を繋ぐやうに頼んだ。

祭日であつた故か電話は思ひの外早く繋がつた。葉子は少し惡戲らしい微笑を笑窪の入るその美しい顔に輕く浮べながら、階段を足早に降りて行つた。今頃になつて漸く床を離れたらしい男女の客がしどけない風をして廊下の此處彼處で葉子とすれ違つた。葉子はそれらの人々には眼もくれずに帳場に行つて電話室に飛び込むとぴつしりと戸をしめてしまつた。而して受話器を手に取るが早いか、電話に口を寄せて、

「あなた義一さん？　あゝさう。義一さんそれは滑稽なのよ」

とひとりでにすら／＼と云つてしまつて我れながら葉子ははつと思つた。その時の浮々した輕い心持から云ふと、葉子にはさう云ふより以上に自然な言葉はなかつたのだけれども、それでは餘りに自分といふものを明白にさらけ出してゐたのに氣が付いたのだ。古藤は案の定答へ澁つてゐるらしかつた。頓には返事もしないで、ちやんと聞こえてゐるらしいのに、唯「何んです？」と聞き返して來た。葉子はすぐ東京の様子を呑み込んだやうに思つた。

「そんな事如何でもよござんすわ。あなたお丈夫でしたの」

と云つて見ると「えゝ」とだけすげない返事が、機械を通してゞあるだけに殊更すげなく響いて來た。而して今度は古藤の方から、

「木村……木村君はどうしてゐます。あなた會つたんですか」

とはつきり聞こえて來た。葉子はすかさず、

「はあ會ひましてよ。相變らず丈夫でゐます。難有う。けれども本當に可哀相でしたの。義一さん……聞こえますか。明後日私東京に歸りますわ。もう叔母の所には行けませんからね、あすこには行きたくありませんから……あのね、透矢町のね、雙鶴館……つがひの鶴……さう、お分りになつて？……雙鶴館に行きますから……あなた來て下される？……でも是非聞いていたゞかなければならない事があるんですから……よくつて？……さう是非どうぞ。明々後日の朝？　難有うきつとお待ち申してゐますから是非ですのよ」

葉子がさう云つてゐる間、古藤の言葉は仕舞まで奥齒に物のはさまつたやうに重かつた。そして動ともすると葉子との會見を拒まうとする樣子が見えた。若し葉子の銀のやうに澄んだ涼しい聲が、古藤を選んで哀訴するらしく響かなかつたら、古藤は葉子の云ふ事を聞いてはゐなかつたかも知れないと思はれる程だつた。

朝から何事も忘れたやうに快かつた葉子の氣持は、この電話一つの爲めに妙にこぢれてしまつた。東京に歸れば、今度こそはなか〳〵容易ならざる反抗が待ちうけてゐるとは十二分に覺悟して、その備へをしておいた積りではゐたけれども、古藤の口うらから考へて見ると、面とぶつかつた實際は、空想してゐたよりも重大であるのを思はずにはゐられなかつた。葉子は電話室を出ると、今朝始めて顏を合はした內儀に帳場格子の中から挨拶されて、部屋にも伺ひに來ないで、狃々しく言葉をかけるその仕打ちにまで不快を感じながら、匆々三階に引き上げた。

それからはもう本當に何んにもする事がなかつた。唯倉地の歸つて來るのばかりいら〳〵する程待ちに待たれた。品川臺場沖あたりで打ち出す祝砲が幽かに腹にこたへるやうに響いて、子供等は往來でその頃頻りにはやつ

た南京花火をぱち／＼と鳴らしてゐた。天氣がいゝので女中達ははしやぎ切つた冗談などを云ひ／＼あらゆる部屋を明け放して、仰山らしくはたきや箒の音を立てた。そして唯一人この旅館では居殘つてゐるらしい葉子の部屋を掃除せずに、いきなり緣側に雜巾をかけたりした。それが出て行けがしの仕打ちのやうに葉子には思へば思はれた。

「何處か掃除の濟んだ部屋があるんでせう。暫くそこを貸して下さいな。而してこゝも綺麗にして頂戴。部屋の掃除もしないで雜巾がけなぞしたつて何んにもなりはしないわ」

と少し劍を持たせて云つてやると、今朝來たのとは違ふ、横濱生れらしい、惡ずれのした中年の女中は、始めて緣側から立ち上つて小面倒さうに葉子を疊廊下一つを隔てた隣りの部屋に案內した。

今朝まで客がゐたらしく、掃除は濟んでゐたけれども、火鉢だの、炭取りだの、古い新聞だのが、部屋の隅にはまだ置いたまゝになつてゐた。開け放した障子から乾いた暖い光線が疊の表三分ほどまで射しこんでゐる、そこに膝を横崩しに坐りながら、葉子は眼を細めて眩しい光線を避けつゝ、自分の部屋を片付けてゐる女中の氣配に用心の氣を配つた。どんな所にゐても大事な金目なものをくだらないものと一緒に放り出しておくのが葉子の癖だつた。葉子はそこにいかにも伊達で寬濶な心を見せてゐるやうだつたが、同時に下らない女中づれが出來心でも起しはしないかと思ふと、細心に監視するのも忘れはしなかつた。かうして隣りの部屋に氣を配つてゐながらも、葉子は部屋の隅に几帳面に折りたゝんである新聞を見ると、日本に歸つてから、まだ新聞と云ふものに眼を通さなかつたのを思ひ出して、手に取り上げて見た。テレビン油のやうな香がぷん／＼するのでそれが今日の新聞である事がすぐ察せられた。果して第一面には「聖壽萬歲」と肉太に書かれた見出しの下に貴顯の肖像が揭げられてあつた。葉子は一ケ月の餘も遠退いてゐた新聞紙を物珍らしいものに思つてざつと眼をとほし始めた。

一面にはその年の六月に伊藤内閣と交迭して出來た桂内閣に對して色々な註文を提出した論文が掲げられて、海外通信には支那領土内に於ける日露の經濟的關係を說いたチリコフ伯の演說の梗概などが見えてゐた。二面には富口といふ文學博士が「最近日本に於ける所謂婦人の覺醒」と云ふ續き物の論文を載せてゐた。福田と云ふ女の社會主義者の事や、歌人として知られた與謝野晶子女史の事などの名が現はれてゐるのを葉子は注意した。然し今の葉子にはそれが不思議に自分とはかけ離れた事のやうに見えた。

三面に來ると四號活字で書かれた木部孤笻と云ふ字が眼に着いたので思はずそこを讀んで見る葉子はあつと驚かされてしまつた。

○某大汽船會社船中の大怪事

事務長と婦人船客との道ならぬ戀――

船客は木部孤笻の先妻

かう云ふ大業な標題が先づ葉子の眼を小痛く射つけた。

「本邦にて最も重要なる位置にある某汽船會社の所有船○○丸の事務長は、先頃米國航路に勤務中、嘗て木部孤笻に嫁して程もなく姿を晦ましたる莫連女某が一等船客として乘込みゐたるをそゝのかし、その女を米國に上陸せしめず竊かに連れ歸りたる怪事實あり。而かも某女と云へるは米國に先行せる婚約の夫まである身分のものなり。船客に對して最も重き責任を擔ふべき事務長にかゝる不埒の擧動ありしは、事務長一個の失態のみならず、其汽船會社の體面にも影響する由々しき大事なり。事の仔細は漏れなく本紙の探知したる所なれども、改悛の餘地を與へん爲め、暫く發表を見合せおくべし。若しある期間を過ぎても、兩人の醜行改まる模樣なき時は、本紙は容赦なく詳細の記事を掲げて畜生道に陷りたる二人を懲戒し、併せて汽船會社の責任を問ふ

事とすべし。讀者請ふ刮目してその時を待て」

葉子は下唇を噛みしめながらこの記事を讀んだ。一體何新聞だらうと、その時まで氣にも留めないでゐた第一面を繰り戻して見ると、麗々と「報正新報」と書してあつた。それを知ると葉子の全身は怒りの爲めに爪の先きまで青白くなつて、抑へつけても〳〵ぶる〳〵と震へ出した。「報正新報」と云へば田川法學博士の機關新聞だ。その新聞にこんな記事が現はれるのは意外でもあり當然でもあつた。田川夫人と云ふ女は何處まで執念く卑しい女なのだらう。田川夫人からの通信に違ひないのだ。報正新報はこの通信を受けると、報道の先鞭をつけておく爲めと、讀者の好奇心を煽る爲めとに、逸早くあれだけの記事を載せて、田川夫人から更に委しい消息の來るのを待つてゐるのだらう。葉子は鋭くもかう推した。若しこれが外の新聞であつたら、倉地の一身上の危機でもあるのだから、葉子はどんな祕密な運動をしても、この上の記事の發表は揉み消さなければならないと胸を定めたに相違なかつたけれども、田川夫人が惡意を籠めてさせてゐる仕事だとして見ると、どの道書かずにはおくまいと思はれた。郵船會社の方で高壓的な交渉でもすれば兎に角、その外には道がない。くれ〳〵も憎い女は田川夫人だ……かう一圖に思ひめぐらすと葉子は船の中での屈辱を今更にまざ〳〵と心に浮べた。

「お掃除が出來ました」

さう襖越しに云ひながら先刻の女中は顏も見せずにさつさと階下に降りて行つてしまつた。葉子は結句それを氣安い事にして、その新聞を持つたまゝ、自分の部屋に歸つた。何處を掃除したのだと思はれるやうな掃除の仕方で、はたきまでが違ひ棚の下におき忘れられてゐた。過敏に几帳面で綺麗好きな葉子はもう堪らなかつた。自分でてきぱきとそこいらを片付けて置いて、パラソルと手提げを取り上げるが否やその宿を出た。

往來に出るとその旅館の女中が四五人早仕舞をして晝間の中を野毛山の大神宮の方にでも散歩に行くらしい後

姿を見た。そゝくさと朝の掃除を急いだ女中達の心も葉子には讀めた。葉子はその女達を見送ると何んといふ事なしに淋しく思つた。

帶の間に挾んだまゝにしておいた新聞の切抜きが胸を燒くやうだつた。葉子は歩き〳〵それを引き出して手提げに仕舞ひかへた。旅館は出たが何處に行かうと云ふあてもなかつた葉子は俯向いて紅葉坂を下りながら、さしもしないパラソルの石突きで霜解になつた土を一足々々突きさして歩いて行つた。何時の間にかじめ〳〵した薄汚ない狹い通りに來たと思ふと、端なくもいつか古藤と一緒に上つた相模屋の前を通つてゐるのだつた。「相模屋」と古めかしい字體で書いた置行燈の紙までがその時のまゝで煤けてゐた。葉子は見覺えられてゐるのを恐れるやうに足早にその前を通りぬけた。

停車場前はすぐそこだつた。もう十二時近い秋の日は華やかに照り滿ちて、思つたより數多い群衆が運河にかけ渡したいくつかの橋を賑やかに往來してゐた。葉子は自分一人が皆んなから振り向いて見られるやうに思ひなした。それが當り前の時ならば、どれ程多くの人にじろ〳〵と見られようとも度を失ふやうな葉子ではなかつたけれども、たつた今忌々しい新聞の記事を見た葉子ではあり、いかにも西洋じみた野暮臭い綿入れを着てゐる葉子であつた。服裝に塵ほどでも批點の打ちどころがあると氣がひけてならない葉子としては、旅館を出て來たのが悲しい程後悔された。

葉子はとう〳〵税關波止場の入口まで來てしまつた。その入口の小さな煉瓦造りの事務所には、年の若い監視補達が二重金釦の背廣に、海軍帽を被つて事務を取つてゐたが、そこに近づく葉子の樣子を見ると、昨日上陸した時から葉子を見知つてゐるかのやうに、その飛び放れて派手造りな姿に眼を定めるらしかつた。物好きなその人達は早くも新聞の記事を見て問題となつてゐる女が自分に違ひないと目星をつけてゐるのではあるまいかと葉

子は何事につけても愚痴つぽくひけ目になる自分を見出した。葉子は然しさうした風に見つめられながらもそこを立ち去る事が出來なかつた。若しや倉地が晝飯でも喰べにあの大きな五體を重々しく動かしながら船の方から出て來はしないかと心待ちがされたからだ。

葉子はそろ〳〵と海岸通りをグランド・ホテルの方に歩いて見た。倉地が出て來れば、倉地の方でも自分を見つけるだらうし、自分の方でも後ろに眼はないながら、出て來たのを感付いて見せるといふ自信を持ちながら、後ろも振り向かずに段々波止場から遠ざかつた。海沿ひに立て連ねた石杭を繋ぐ頑丈な鐵鎖には、西洋人の子供達が犢程な洋犬やあまに附き添はれて事もなげに遊び戯れてゐた。而して葉子を見ると心安立てに無邪氣に微笑んで見せたりした。小さな可愛いゝ子供を見るとどんな時どんな場合でも、葉子は定子を思ひ出して、胸がしめつけられるやうになつて、すぐ涙ぐむのだつた。この場合は殊更さうだつた。見てゐられない程それらの子供達は悲しい姿に葉子の眼に映つた。葉子はそこから避けるやうに足を返へして又税關の方に歩み近づいた。監視課の事務所の前を來たり往つたりする人數は絡繹として絶えなかつたが、その中に事務長らしい姿は更に見えなかつた。葉子は繪島丸まで行つて見る勇氣もなく、そこを幾度もあちこちして監視補達の眼にかゝるのもうるさかつたので、すご〳〵と税關の表門を縣廳の方に引き返した。

二三

その夕方倉地が埃にまぶれ汗にまびれて紅葉坂をすた〳〵と登つて歸つて來るまでも葉子は旅館の閾を跨がずに櫻の並木の下などを徘徊して待つてゐた。さすがに十一月となると夕暮れを催した空は見る〳〵薄寒くなつて風さへ吹き出してゐる。一日の行樂に遊び疲れたらしい人の群れに交つて不機嫌さうに顔をしかめた倉地は眞向

に坂の頂上を見つめながら近づいて來た。それを見やると葉子は一時に力を恢復したやうになつて、すぐ躍り出して來る惡戲心のまゝに、一本の櫻の木を楯に倉地をやり過ごしておいて、後ろから靜かに近づいて手と手とが觸れ合はんばかりに押し列んだ。倉地はさすがに不意を喰つてまじ〳〵と寒さの爲めに少し涙ぐんで見える大きな涼しい葉子の眼を見やりながら、「何處から湧いて出たんだ」と云はんばかりの顔付をした。一つ船の中に朝となく夜となく一緒になつて寢起きしてゐたものを、今日始めて半日の餘も顔を見合はさずに過して來たのが思つた以上に物寂しく、同時にこんな所で思ひもかけず出遇つたが豫想の外に滿足であつたらしい倉地の顔付を見て取ると、葉子は何もかも忘れて唯嬉しかつた。その眞黑に汚れた手をいきなり引掴んで熱い脣で嚙みしめて勞つてやりたい程だつた。然し思ひのまゝに寄り添ふ事すら出來ない大道であるのを如何しよう。葉子はその切ない心を拗ねて見せるより外なかつた。

「私もうあの宿屋には泊りませんわ。人を馬鹿にしてゐるんですもの。あなたお歸りになるなら勝手に獨りで行らつしやい」

「如何して……」

と云ひながら倉地は當惑したやうに往來に立ち止つてしげ〳〵と葉子を見なほすやうにした。

「これぢや（と云つて埃に塗れた兩手を擴げ襟頸を拔き出すやうに延ばして見せて澁い顔をしながら）何處にも行けやせんわな」

「だからあなたはお歸りなさいましと云つてるぢやありませんか」

さう冒頭をして葉子は倉地と押し並んでそろ〳〵歩きながら、女將の仕打ちから、女中のふしだらまで尾鰭をつけて讒訴けて、早く雙鶴館に移つて行きたいとせがみにせがんだ。倉地は何か思案するらしくそつぽを見い〳〵

耳を傾けてゐたが、やがて旅館に近くなつた頃もう一度立ち止つて、

「今日雙鶴館から電話で部屋の都合を知らしてよこす事になつてゐたがお前聞いたか……（葉子はさう吩咐けられながら今まですつかり忘れてゐたのを思ひ出して、少しくてれたやうに首を振つた）……えゝわ、ぢや電報を打つてから先きに行くがいゝ。わしは荷物をして今夜後から行くで」

さう云はれて見ると葉子は又一人だけ先きに行くのがいやでもあつた。と云つて荷物の始末には二人の中どちらか一人居殘らねばならない。

「どうせ二人一緒に汽車に乘る譯にも行くまい」

倉地がかう云ひ足した時葉子は危く、では今日の報正新報を見たかと云はうとする所だつたが、はつと思ひ返して喉の所で抑へてしまつた。

「何んだ」

倉地は見かけの割りに恐ろしい程敏捷に働く心で、顏にも現はさない葉子の躊躇を見て取つたらしくかう詰るやうに尋ねたが、葉子が何んでもないと應へると、少しも拘泥せずに、それ以上を問ひ詰めようとはしなかつた。如何しても旅館に歸るのがいやだつたので、非常な物足らなさを感じながら、葉子はそのまゝそこから倉地に別れる事にした。倉地は力の籠つた眼で葉子をぢつと見て一寸點頭くと後をも見ないでどん／＼と旅館の方に濶歩して行つた。葉子は殘り惜しくその後姿を見送つてゐたが、それに何んと云ふ事もない輕い誇りを感じて微かに微笑みながら、倉地が登つて來た坂道を一人で降つて行つた。

停車場に着いた頃にはもう瓦斯の灯がそこらに點つてゐた。葉子は知つた人に遇ふのを極端に恐れ避けながら、汽車の出るすぐ前まで停車場前の茶店の一間に隱れてゐて一等室に飛び乘つた。だゞつ廣いその客車には外務省

の夜會に行くらしい三人の外國人が銘々、デコルテーを着飾つた婦人を介抱して乘つてゐるだけだつた。いつもの通りその人達は不思議に人を牽き付ける葉子の姿に眼を聳てた。けれども葉子はもう左手の小指を器用に折り曲げて、左の鬢のほつれ毛を美しくかき上げるあの嬌態をして見せる氣は無くなつてゐた。室の隅に腰かけて、手提げとパラソルとを膝に引きつけながら、たつた一人その部屋の中にゐるものゝやうに鷹揚に構へてゐた。偶然顏を見合せても、葉子は張りのあるその眼を無邪氣に（本當にそれは罪を知らない十六七の少女の眼のやうに無邪氣だつた）大きく見開いて相手の視線をはにかみもせず迎へるばかりだつた。先方の人達の年齡がどの位で容貌がどんな風だなどゝいふ事も葉子は少しも注意してはゐなかつた。その心の中には唯倉地の姿ばかりが色々に描かれたり消されたりしてゐた。

列車が新橋に着くと葉子はしとやかに車を出たが、丁度そこに、唐棧に角帶を締めた、箱丁とでも云へば云へさうな、氣の利いた若い者が電報を片手に持つて、眼ざとく葉子に近づいた。それが雙鶴館からの出迎へだつた。

横濱にも增して見るものにつけて聯想の群がり起る光景、それから來る强い刺戟……葉子は宿から廻された人力車の上から銀座通りの夜の有樣を見やりながら、危く幾度も泣き出さうとした。定子の住む同じ土地に歸つて來たと思ふだけでももう胸はわくわくした。愛子も貞世もどんな恐ろしい期待に震へながら自分の歸るのを待ち佗びてゐるだらう。あの叔父叔母がどんな激しい言葉で自分をこの二人の妹に描いて見せてゐるか。構ふものか。何んとでも云ふがいゝ。自分は如何あつても二人を自分の手に取り戻して見せる。かうと思ひ定めた上は指もささせはしないから見てゐるがいゝ。……ふと人力車が尾張町の角を左に曲ると暗い細い通りになつた。葉子は目指す旅館が近づいたのを知つた。その旅館といふのは、倉地が色沙汰でなく贔屓にしてゐた藝者が或る財産家に落籍されて開いた店だと云ふので、倉地から豫め懸け合つておいたのだつた。人力車がその店に近づくに從つて

葉子はその女將といふのにふとした懸念を持ち始めた。未知の女同志が出遇ふ前に感ずる一種の輕い敵愾心が葉子の心を暫くは餘の事柄から切り放した。葉子は車の中で衣紋を氣にしたり、束髮の形を直したりした。

昔の煉瓦建てをそのまゝ改造したと思はれる漆喰塗りの頑丈な、角地面の一構へに來て、煌々と明るい入口の前に車夫が梶棒を下ろすと、そこにはもう二三人の女の人達が走り出て待ち構へてゐた。葉子は裾前をかばひながら車から降りて、そこに立ち列んだ人達の中からすぐ女將を見分ける事が出來た。背丈けが思ひ切つて低く、顏形も整つてはゐないが、三十女らしく分別の備はつた、きかん氣らしい、垢ぬけのした人がそれに違ひないと思つた。葉子は思ひ設けた以上の好意をすぐその人に對して持つ事が出來たので、殊更快い親しみを持ち前の愛嬌に添へながら、挨拶をしようとすると、その人は事もなげにそれを遮つて、

「いづれ御挨拶は後ほど、嘸お寒う御座いましてせう。お二階へどうぞ」

と云つて自分から先きに立つた。居合せた女中達は眼はしを利かして色々と世話に立つた。入口の突當りの壁には大きなぼんぼん時計が一つかゝつてゐるだけで何んにもなかつた。その右手の頑丈な踏み心地のいゝ階子段を上りつめると、他の部屋から廊下で切り放されて、十六疊と八疊と六疊との部屋が鍵形に續いてゐた。塵一つすゑずにきちんと掃除が屆いてゐて、三ケ所に置かれた鐵瓶から立つ湯氣で部屋の中は軟かく暖まつてゐた。

「お座敷へと申す所ですが、御氣散苦にこちらでおくつろぎ下さいまし……三間ともとつては御座いますが」

さう云ひながら女將は長火鉢の置いてある六疊の間へと案内した。

そこに坐つて一通りの挨拶を言葉少なに濟ますと、女將は葉子の心を知り拔いてゐるやうに、女中を連れて階下に降りて行つてしまつた。葉子は本當に暫くなりとも一人になつて見たかつたのだつた。輕い暖かさを感ずるまゝに重い縮緬の羽織を脫ぎ捨てゝ、ありたけの懷中物を帶の間から取り出して見ると、凝りがちな肩も、重苦し

く感じた胸もすが／＼しくなつて、可なり强い疲れを一時に感じながら、猫板の上に肘を持たせて居住ひを崩して凭れかゝつた。古びを帶びた蘆屋釜から鳴りを立てゝ白く湯氣の立つのも、綺麗にかきならされた灰の中に、堅さうな櫻炭の火が白い被衣の下でほんのりと赤らんでゐるのも、精巧な用箪笥の嵌め込まれた一間の壁に續いた器用な三尺床に、白菊を挿した唐津燒きの釣花活けがあるのも、幽かにたきこめられた沈香の匂ひも、目のつんだ杉柾の天井板も、細つそりと磨きのかゝつた皮付きの柱も、葉子に取つては――重い、硬い、堅い船室から漸く解放されて來た葉子に取つてはなつかしくばかり眺められた。こゝこそは屈强の避難所だと云ふやうに葉子はつく／＼とあたりを見廻した。而して部屋の隅にある生漆を塗つた桑の廣蓋を引き寄せて、それに手提げや懷中物を入れ終ると、飽く事もなくその緣から底にかけての圓味を持つた微妙な手觸りを愛で慈しんだ。

　場所柄とてそこゝからこの界隈に特有な樂器の聲が聞こえて來た。天長節であるだけに今日は殊更それが賑やかなのかも知れない。戶外にはぽくりやあづま下駄の音が少し冴えて絕えずしてゐた。着飾つた藝者達が磨き上げた顏をぴり／＼するやうな夜寒に惜しげもなく傳法に曝して、さすがに寒氣に足を早めながら、招ばれた所に繰り出して行くその樣子が、まざ／＼と履物の音を聞いたばかりで葉子の想像には描かれるのだつた。合乘りらしい人力車の轍の音も威勢よく響いて來た。葉子はもう一度、これは屈强な避難所に來たものだと思つた。この界隈では葉子は眦を反して人から見られる事はあるまい。

　珍らしくあつさりした、魚の鮮しい夕食を濟ますと葉子は風呂をつかつて、思ひ存分髮を洗つた。足しない船の中の淡水では洗つても／＼ねち／＼と垢の取り切れなかつたものが、觸れば手が切れる程さば／＼と油が拔けて、葉子は頭の中まで輕くなるやうに思つた。そこに女將も食事を終へて話相手になりに來た。

「大變お遲う御座いますこと、今夜の中にお歸りになるでせうか」

さう女將は葉子の思つてゐる事を魁けに云つた。「さあ」と葉子もはつきりしない返事をしたが、小寒くなつて來たので浴衣を着かへようとすると、そこに袖だゝみにしてある自分の衣物につく〴〵愛想が盡きてしまつた。この邊の女中に對してもそんなしつゝこいけば〳〵しい柄の衣物は二度と着る氣にはなれなかつた。さうなると葉子は遮二無二それが堪らなくなつて來るのだ。葉子はうんざりした樣子をして自分の衣物から女將に眼をやりながら、

「見て下さいこれを。この冬は米國にゐるのだとばかり決めてゐたので、あんなものを作つて見たんですけれども、我慢にももう着てゐられなくなりましたわ。後生。あなたの所に何か普段着の明いたのでもないでせうか」

「どうしてあなた。私はこれで御座んすもの」

と女將は剽輕にも氣輕くちやんと立ち上つて自分の背丈けの低さを見せた。而して立つたまゝで暫く考へてゐたが、踊りで仕込み拔いたやうな手つきではたと膝の上をたゝいて、

「ようございます。私一つ倉地さんをびつくらさして上げますわ。私の妹分に當るのに柄と云ひ年恰好といひ、失禮ながらあなた樣とそつくりなのがゐますから、それのを取り寄せて見ませう。あなた樣は洗ひ髮でゐらつしやるなり……いかゞ、私がすつかり仕立てゝ差し上げますわ」

この思ひ付は葉子には强い誘惑だつた。葉子は一も二もなく勇み立つて承知した。

その晩十一時を過ぎた頃に、纒めた荷物を人力車四臺に積み乘せて、倉地が雙鶴館について來た。葉子は女將の入れ智慧でわざと玄關には出迎へなかつた。葉子は惡戲者らしく獨笑ひをしながら立膝をして見たが、それには自分ながら氣がひけたので、右足を左の腿の上に積み乘せるやうにしてその足先をとんびにして坐つて見た。丁度そこに可なり醉つたらしい樣子で、倉地が女將の案內も待たずにずしん〳〵といふ足どりで這入つて來た。

葉子と顔を見合はした瞬間には部屋を間違へたと思つたらしく、少し慌てゝ身を引かうとしたが、直ぐ櫛巻きにして黒襟をかけたその女が葉子だつたのに氣が付くと、いつもの澁いやうに顔を崩して笑ひながら、

「何んだ馬鹿をしくさつて」

とほざくやうに云つて、長火鉢の向座にどつかと胡坐をかいた。跟いて來た女將は立つたまゝ暫く二人を見較べてゐたが、

「よう〱……變てこなお内裏雛様」

と陽氣にかけ聲をして笑ひこけるやうにぺちやんとそこに坐り込んだ。三人は聲を立てゝ笑つた。

と、女將は急に眞面目に返つて倉地に向ひ、

「こちらは今日の報正新報を……」

と云ひかけるのを、葉子はすばやく眼で遮つた。女將は危い土端場で踏み止つた。倉地は醉眼を女將に向けながら、

「何」

と尻上りに問ひ返した。

「さう早耳を走らすと聾と間違へられますとさ」

と女將は事もなげに受け流した。三人は又聲を立てゝ笑つた。

倉地と女將との間に一別以來の噂話が暫くの間取り交はされてから、今度は倉地が眞面目になつた。而して葉子に向つてぶつきらぼうに、

「お前もう寢ろ」

と云つた。葉子は倉地と女將とを併べて一眼見たばかりで、二人の間の潔白なのを見て取つてゐたし、自分が寢て後の相談と云うても、今度の事件を上手に纏めようといふについての相談だと云ふ事が呑み込めてゐたので、素直に立つてその座を外した。

中の十疊を隔てた十六疊に二人の寢床は取つてあつたが、二人の會話は折々可なりはつきり漏れて來た。葉子は別に疑ひをかけると云ふのではなかつたが、矢張りぢつと耳を傾けないではゐられなかつた。

何かの話の序に入用な事が起つたのだらう、倉地は頻りに身のまはりを探つて、何かを取り出さうとしてゐる樣子だつたが、「あいつの手提げに入れたか知らん」といふ聲がしたので葉子ははつと思つた。あれには報正新報の切り拔きが入れてあるのだ。もう飛び出して行つても遲いと思つて葉子は斷念してゐた。やがて果して二人は切り拔きを見つけ出した樣子だつた。

「何んだ、あいつも知つとつたのか」

思はず少し高くなつた倉地の聲がかう聞こえた。

「道理でさつき私がこの事を云ひかけるとあの方が眼で留めたんですよ。矢張り先方でもあなたに知らせまいとして。いぢらしいぢやありませんか」

さう云ふ女將の聲もした。而して二人は暫く默つてゐた。

葉子は寢床を出てその場に行かうかとも思つた。然し今夜は二人に任せておく方がいゝと思ひ返して蒲團を耳まで被つた。そして大分夜が更けてから倉地が寢に來るまで快い安眠に前後を忘れてゐた。

その次ぎの朝女將と話をしたり、吳服屋を呼んだりしたので、日が可なり高くなるまで宿にゐた葉子は、いやいやながら例のけばけばしい綿入れを着て、羽織だけは女將が借りてくれた、妹分といふ人の鳥羽黑の縮緬の紋付にして旅館を出た。倉地は昨夜の夜更しにも係はらずその朝早く横濱の方に出懸けた後だつた。今日も空は菊日和とでも云ふ美しい晴れ方をしてゐた。

葉子はわざと宿で車を頼んで貰はずに、煉瓦通りに出てから綺麗さうな辻待ちを傭つてそれに乘つた。而して池の端の方に車を急がせた。定子を眼の前に置いて、その小さな手を撫でたり、絹絲のやうな髮の毛を弄ぶ事を思ふと葉子の胸は我れにもなく唯わくわくとせき込んで來た。眼鏡橋を渡つてから突當りの大時計は見えながら中々そこまで車が行かないのをもどかしく思つた。膝の上に乘せた土產の玩具や小さな帽子などをやきもきしながらひねり廻したり、膝掛けの厚い地をぎゆつと握り締めたりして、逸る心を押し鎭めようとして見るけれどもそれを如何する事も出來なかつた。車が漸く池の端に出ると葉子は右、左、と細い道筋の角々で指圖した。而して岩崎の屋敷裏にあたる小さな横町の曲り角で車を乘り捨てた。

一ケ月の間來ないだけなのだけれども、葉子にはそれが一年にも二年にも思はれたので、その界隈が少しも變化しないで元の通りなのが却つて不思議なやうだつた。じめじめした小溝に沿うて根際の腐れた黑板塀の立つてる小さな寺の境内を突つ切つて裏に廻ると、寺の貸地面にぽつゝり立つた一戶建ての小家が乳母の住む所だ。沒義道に頭を切り取られた高野槇が二本舊の姿で臺所前に立つてゐる、その二本に干竿を渡して小さな襦袢や、丸洗ひにした胴着が暖かい日の光を受けてぶら下つてゐるのを見ると葉子はもう堪らなくなつた。涙がぽろぽろと他愛もなく流れ落ちた。家の中では定子の聲がしなかつた。葉子は氣を落着ける爲めに案內を求めずに入口に立つたまゝ、そつと垣根から庭を覗いて見ると、日あたりのいゝ緣側に定子がたつた一人、葉子にはしごき帶を長く

結んだ後姿を見せて、一心不亂にせつせと少しばかりの壞れ玩具をいぢくり廻してゐた。何事にまれ眞劍な樣子を見せつけられると、——傍目もふらず畑を耕す農夫、踏切りに立つて子を背負つたまゝ旗をかざす女房、汗をしとゞに垂らしながら坂道に荷車を押す共稼ぎの夫婦……譯もなく涙につまされる葉子は、定子のさうした姿を一眼見たばかりで、人間力ではどうする事も出來ない悲しい出來事にでも出遇つたやうに、しみ〴〵と淋しい心持になつてしまつた。

「定ちやん」

涙を聲にしたやうに葉子は思はず呼んだ。定子が喫驚して後ろを振り向いた時には、葉子は戶を開けて入口を駈け上つて定子の側にすり寄つてゐた。父に似たのだらう痛々しい程華車作りな定子は、何處にどうしてしまつたのか、聲も姿も消え果てた自分の母が突然側近くに現はれたのに氣を奪はれた樣子で、頓には聲も出さずに驚いて葉子を見守つた。

「定ちやんママだよ。よく丈夫でしたね。而してよく一人でおとなにして……」

もう聲が續かなかつた。

「ママちやん」

さう突然大きな聲で云つて定子は立ち上りざま臺所の方に駈けて行つた。

「婆やママちやんが來たのよ」

と云ふ聲がした。

「え！」

と驚くらしい婆やの聲が裏庭から聞こえた。と、慌てたやうに臺所を上つて、定子を横抱きにした婆やが、被

つてゐた手拭を頭から外しながら轉がり込むやうにして座敷に這入つて來た。二人は向き合つて坐ると兩方とも涙ぐみながら無言で頭を下げた。

「ちよつと定ちやんをこつちにお貸し」

暫くしてから葉子は定子を婆やの膝から受け取つて自分の懷ろに抱きしめた。

「お孃さま……私にはもう何が何んだかちつとも分りませんが、私は唯もう口惜しう御座います。……どうしてかう早くお歸りになつたんで御座いますか……皆樣の仰有る事を伺つてゐるとあんまり業腹で御座いますから……もう私は耳をふさいで居ります。あなたから伺つた所がどうせかう年を取りますと腑に落ちる氣遣ひは御座いません。でもまあお體がどうかと思つてお案じ申して居りましたが、御丈夫で何よりで御座いました……何しろ定子樣がお可哀さうで……」

葉子に溺れ切つた婆やの口からさも口惜しさうにかうした言葉がつぶやかれるのを、葉子は淋しい心持で聞かねばならなかつた。耄碌したと自分では云ひながら、若い時に亭主に死別れて立派に後家を通して後指一本指されなかつた昔氣質のしつかり者だけに、親類達の蔭口や噂で聞いた葉子の亂行には呆れ果てゝゐながら、この世での唯一人の祕藏物として葉子の頭から足の先きまでも自分の誇りにしてゐる婆やの切ない心持は、ひし〳〵と葉子にも通じるのだつた。婆やと定子……こんな純粹な愛情の中に取り圍まれて、落着いた、しとやかな、そして安穩な一生を過ごすのも、葉子は望ましいと思はないではなかつた。殊に婆やと定子とを眼の前に置いて、つつましやかな過不足のない生活を眺めると、葉子の心は知らず〳〵なじんで行くのを覺えた。

然し同時に倉地の事を一寸でも思ふと葉子の血は一時に湧き立つた。平穩な、その代り死んだも同然な一生が何んだ。純粹な、その代り冷えもせず熱しもしない愛情が何んだ。生きる以上は生きてるらしく生きないで如何

しよう。愛する以上は命と取り代へつこをする位に愛せずにはゐられない。さうした衝動が自分でも如何する事も出來ない強い感情になつて、葉子の心を本能的に煽ぎ立てるのだつた。この奇怪な二つの矛盾が葉子の心の中には平氣で兩立しようとしてゐた。葉子は眼前の境界でその二つの矛盾を割合に困難もなく使ひ分ける不思議な心の廣さを持つてゐた。ある時には極端に涙脆く、ある時には極端に殘虐だつた。まるで二人の人が一つの肉體に宿つてゐるかと自分ながら疑ふやうな事もあつた。それが時には忌々しかつた、時には誇らしくもあつた。

「定ちやま。よう御座いましたね、ママちやんが早くお歸りになつて。お立ちになつてからでもお聞き分けよくマ、のマの字も仰有らなかつたんですけれども、どうかするとかうぼんやり考へてゞもゐらつしやるやうなのがお可哀さうで、一時はお體でも惡くなりはしないかと思ふ程でした。こんなでも中々心は働いてゐらつしやるんですからねえ」

　と婆やは、葉子の膝の上に巣喰ふやうに抱かれて、默つたまゝ、澄んだ瞳で母の顏を下から覗くやうにしてゐる定子と葉子とを見較べながら、述懷めいた事を云つた。葉子は自分の頬を、暖かい桃の膚のやうに生毛の生えた定子の頬にすりつけながら、それを聞いた。

「お前のその氣象で分らないとお云ひなら、くど〳〵云つた處が無駄かも知れないから、今度の事については私何んにも話すまいが、家の親類達の云ふ事なんぞは屹と氣にしないでおくれよ。今度の船には飛んでもない一人の奧さんが乘り合はしてゐてね、その人が一寸した氣まぐれから有る事無い事取りまぜてこつちに云つてよこしたので、事あれがしと待ち構へてゐた人達の耳に這入つたんだから、これから先きだつてどんなひどい事を云はれるか知れたもんぢやないんだよ。お前も知つての通り私は生れ落ちるとから旋毛曲りぢやあつたけれども、あんなに周圍からこづき廻されさへしなければこんなになりはしなかつたのだよ。それは誰よりもお前が知つてゝ

お哭れだわね。これからだつて私は私なりに押し通すよ。誰が何んと云つたつて構ふもんですか。その積りでお前も私を見てゐておくれ。廣い世の中に私がどんな失策をしでかしても、心から思ひやつてくれるのは本當にお前だけだわ。……今度からは私もちよい〳〵來るだらうけれども、この上ともこの子を頼みますよ。ね、定ちやん。よく婆やの云ふ事を聞いてい丶子になつて頂戴よ。マ、ちやんは此處にゐる時でもゐない時でも、いつでもあなたを大事に〳〵思つてるんだからね。……さ、もうこんなむづかしいお話はよしてお晝のお支度でもしませうね。今日はマ、ちやんがおいしい御馳走を作らへて上げるから、定ちやんもお手傳ひして頂戴ね」

さう云つて葉子は氣輕さうに立ち上つて臺所の方に定子と連れだつた。婆やも立ち上りはしたがその顏は妙に冴えなかつた。そして臺所で働きながらも動ともすると內所で鼻をすゝつてゐた。

そこには葉山で木部孤笻と同棲してゐた時に使つた調度が今だに古びを帶びて保存されたりしてゐた。定子を側においてそんなものを見るにつけ、少し感傷的になつた葉子の心は涙に動かうとした。けれどもその日は何んと云つても近頃覺えない程しみ〴〵とした樂しさだつた。何事にでも器用な葉子は不足勝ちな臺所道具を巧みに利用して、西洋風な料理と菓子とを三品ほど作つた。定子はすつかり喜んでしまつて、小さな手足をまめ〳〵しく働かしながら、「はい〳〵」と云つて庖丁をあつちに運んだり、皿をこつちに運んだりした。三人は樂しく晝飯の卓に就いた。そして夕方まで水入らずにゆつくり暮した。

その夜は妹達が學校から來る筈になつてゐたので葉子は婆やの勸める晩飯も斷つて夕方その家を出た。入口の所につくねんと立つて婆やに兩肩を支へられながら姿の消えるまで葉子を見送つた定子の姿がいつまでも〳〵葉子の心から離れなかつた。夕闇にまぎれた幌の中で葉子は幾度かハンケチを眼にあてた。

宿に着く頃には葉子の心持は變つてゐた。玄關に這入つて見ると、女學校でなければ履かれないやうな安下駄

の汚なくなつたのが、お客や女中達の氣取つた履物の中に交つて脫いであるのを見て、もう妹達が來て待つたゐるのを知つた。早速に出迎へに出た女將に、今夜は倉地が歸つて來たら他所の部屋で寢るやうに用意をしておいて貰ひたいと賴んで、靜々と二階に上つて行つた。

襖を開けて見ると二人の姉妹はぴつたりとくつゝき合つて泣いてゐた。人の足音を姉のそれだとは十分に知りながら、愛子の方は泣き顏を見せるのが氣まりが惡い風で、振り向きもせずに一入首垂れてしまつたが、貞世の方は葉子の姿を一眼見るなり、跳るやうに立ち上つて激しく泣きながら葉子の懷ろに飛びこんで來た。葉子も思はず飛び立つやうに貞世を迎へて、長火鉢の傍の自分の座に坐ると、貞世はその膝に突つ伏してすゝり上げ〳〵可憐な背中に波を打たした。これ程までに自分の歸りを待ち侘びてもゐ、喜んでもくれるのかと思ふと、骨肉の愛着からも、妹だけは少くとも自分の掌握の中にあるとの滿足からも、葉子はこの上なく嬉しかつた。然し火鉢から遙か離れた向う側に、恭しく居住ひを正して、愛子がひそ〳〵と泣きながら、規則正しくお辭儀をするのを見ると葉子はすぐ癪に障つた。如何して自分はこの妹に對して優しくする事が出來ないのだらうとは思ひつゝも、葉子は愛子の所作を見ると一々氣に障らないではゐられないのだ。葉子の眼は意地惡く劍を持つて冷やかに小柄で堅肥りな愛子を激しく見据ゑた。

「會ひたてからつけ〳〵云ふのも何んだけれども、何んですねえそのお辭儀のしかたは、他人行儀らしい。もつと打ち解けてくれたつていゝぢやないの「

と云ふと愛子は當惑したやうに默つたまゝ眼を上げて葉子を見た。その眼は然し恐れても恨んでもゐるらしくはなかつた。小羊のやうな、睫毛の長い、形のいゝ大きな眼が、淚に美しく濡れて夕月のやうにぽつかりと列んでゐた。悲しい眼付のやうだけれども、悲しいと云ふのでもない。多恨な眼だ。多情な眼でさへあるかも知れな

い。さう皮肉な批評家らしく葉子は愛子の眼を見て不快に思つた。大多數の男はあんな眼で見られると、この上なく詩的な靈的な一瞥を受け取つたやうにも思ふのだらう。そんな事さへ素早く考への中に附け加へた。貞世が廣い帶をして來てゐるのに、愛子が少し古びた袴をはいてゐるのさへ蔑まれた。
「そんな事はどうでもよう御座んすわ。さ、お夕飯にしませうね」
葉子はやがて自分の妄念をかき拂ふやうにかう云つて、女中を呼んだ。
貞世は寵兒らしくすつかりはしやぎ切つてゐた。二人が古藤に伴れられて始めて田島の塾に行つた時の樣子から、田島先生が非常に二人を可愛がつてくれる事から、部屋の事、食物の事、さすがに女の子らしく細かい事まで自分一人の興に乘じて談り續けた。愛子も言葉少なに要領を得た口をきいた。
「古藤さんが時々は來て下さるの？」
と聞いて見ると、貞世は不平らしく、
「いゝえ、ちつとも」
「ではお手紙は？」
「來てよ、ねえ愛姉さま。二人の所に同じ位づゝ來ますわ」
と、愛子は控へ目らしく微笑みながら上目越しに貞世を見て、
「貞ちやんの方に餘計來る癖に」
と何んでもない事で爭つたりした。愛子は姉に向つて、
「塾に入れて下さると古藤さんが私達に、もうこれ以上私のして上げる事はないと思ふから、用がなければ來ません。その代り用があつたら何時でもさう云つておよこしなさいと仰有つたきりいらつしやいませんのよ。而し

てこちらでも古藤さんにお願ひするやうな用は何んにもないんですもの」

と云つた。葉子はそれを聞いて微笑みながら古藤が二人を塾に伴れて行つた時の樣子を想像して見た。例のやうに何處の玄關番かと思はれる風體をして、髮を刈る時の外剃らない顎鬚を一二分程も延ばして、頑丈な容貌や體格に不似合な羞かんだ口辯で、田島といふ、男のやうな女學者と話をしてゐる樣子が見えるやうだつた。

暫くそんな表面的な噂話などに時を過してゐたが、いつまでもさうはしてゐられない事を葉子は知つてゐた。この年齡ハ違つた二人の妹に、どつちにも堪念の行くやうに今の自分の立場を話して聞かせて、惡い結果をその幼い心に殘さないやうに仕向けるのはさすがに容易な事ではなかつた。葉子は先刻から頻りにそれを案じてゐたのだ。

「これでも召し上れ」

食事が濟んでから葉子は米國から持つて來たキャンデイーを二人の前に置いて、自分は煙草を吸つた。貞世は眼を丸くして姉のする事を見やつてゐた。

「姉さまそんなもの吸つていゝの？」

と會釋なく尋ねた。愛子も不思議さうな顏をしてゐた。

「えゝこんな惡い癖がついてしまつたの。けれども姉さんにはあなた方の考へても見られないやうな心配な事や困る事があるものだから、つい憂さ晴らしにこんな事も覺えてしまつたの。今夜はあなた方に判るやうに姉さんが話して上げて見るから、よく聞いて頂戴よ」

倉地の胸に抱かれながら、醉ひしれたやうにその頑丈な、日に燒けた、男性的な顏を見やる葉子の、少女と云ふよりももつと子供らしい樣子は、二人の妹を前に置いてきちんと居住ひを正した葉子の何處にも見出されなか

つた。その姿は三十前後の、十分分別のある、しつかりした一人の女性を思はせた。貞世もさう云ふ時の姉に對する手心を心得てゐて、葉子から離れて眞面目に坐り直した。こんな時うつかりその威厳を冒すやうな事でもすると、貞世にでも誰にでも葉子は少しの容赦もしなかつた。然し見た所はいかにも慇懃に口を開いた。

「私が木村さんの所にお嫁に行くやうになつたのはよく知つてますね。米國に出懸けるやうになつたのもその爲めだつたのだけれどもね、もと〳〵木村さんは私のやうに一度先にお嫁入りした人を貰ふやうな方ではなかつたんだしするから、本當は私如何しても心は進まなかつたんですよ。でも約束だからちやんと守つて行くには行つたの。けれどもね先方に着いて見ると私の體の具合が如何もよくなくつて上陸は迚も出來なかつたから仕方なしに又同じ船で歸るやうになつたの。木村さんは何處までも私をお嫁にして下さる積りだから、私もその氣ではゐるのだけれども、病氣では仕方がないでせう。それに恥かしい事を打ち明けるやうだけれども、木村さんにも私にも有り餘るやうなお金がないものだから、行きも歸りもその船の事務長といふ大切な役目の方にお世話にならなければならなかつたのよ。その方が御親切にも私をこゝまで連れて歸つて下さつたばかりで、もう一度あなた方にも遇ふ事が出來たんだから、私はその倉地と云ふ方――倉はお倉の倉で、地は地球の地と書くの。三吉といふお名前は貞ちやんにも分るでせう――その倉地さんには本當にお禮の申しやうもない位なんですよ。愛さんなんかはその方の事で叔母さんなんぞから色々な事を聞かされて、姉さんを疑つてゐやしないかと思ふけれども、それには又それで面倒な譯のある事なのだから、夢にも人のいふ事なんぞをそのまゝ受け取つて貰つちや困りますよ。姉さんを信じてお呉れ、ね、よござんすか。私はお嫁なんぞに行かないでもいゝ、あなた方とかうしてゐる程嬉しい事はないと思ひますよ。木村さんの方にお金でも出來て、私の病氣が治りさへすれば結婚するやうになるかも知れないけれども、それは何時の事とも分らないし、それまでは私はかうしたまゝで、あなた方と一緒に何處か

にお家を持つて樂しく暮しませうね。いゝだらう貞ちやん。もう寄宿なんぞにゐなくつてもよう御座んすよ」
「お姉さま、私寄宿では夜になると本當に泣いてばかりゐたのよ。愛姉さんはよくお寢になつても私は小さいから悲しかつたんですもの」
さう貞世は白狀するやうに云つた。先刻まではいかにも樂しさうに云つてゐたその可憐な同じ唇から、こんな哀れな告白を聞くと葉子は一入しんみりした心持になつた。
「私だつてもよ。貞ちやんは宵の口だけくすく泣いても後はよく寢てゐたわ。姉様、私は今まで貞ちやんにも云はないでゐましたけれども……皆んなが聞こえよがしに姉様の事を彼是云ひますのに、偶に惡いと思つて貞ちやんと叔母さんの所に行つたりなんぞすると、それは本當にひどい……ひどい事を仰有るので、どつちに行つても口惜しう御座いましたわ。古藤さんだつてこの頃はお手紙さへ下さらないし……田島先生だけは私達二人を可哀相がつて下さいましたけれども……」
葉子の思ひは胸の中で煮え返るやうだつた。
「もういゝ堪忍して下さいよ。姉さんが矢張り至らなかつたんだから。お父さんがゐらつしやればお互にこんないやな目には遇はないんだらうけれども（かう云ふ場合葉子はおくびにも母の名は出さなかつた）親のない私達は肩身が狹いわね。まああなた方はそんなに泣いちや駄目。愛さん何んですね、あなたから先きに立つて。姉さんが歸つた以上は姉さんに何んでも任して安心して勉强して下さいよ。而して世間の人を見返しておやり」
葉子は自分の心持を憤ろしく云ひ張つてゐるのに氣が付いた。何時の間にか自分までが激しく昂奮してゐた。
火鉢の火は何時か灰になつて、夜寒が祕やかに三人の姉妹に這ひよつてゐた。もう少し睡氣を催して來た貞世は、泣いた後の澁い眼を手の甲でこすりながら、不思議さうに昂奮した靑白い姉の顏を見やつてゐた。愛子は瓦

斯の燈に顔を背けながらしく〲と泣き始めた。

葉子はもうそれを止めようとはしなかつた。自分ですら聲を出して泣いて見たいやうな衝動をつき返し〲水落の所に感じながら、火鉢の中を見入つたまゝ細かく震へてゐた。

生れかはらなければ恢復しやうのないやうな自分の越し方行く末が絶望的にはつきりと葉子の心を寒く引き締めてゐた。

それでも三人が十六疊に床を敷いて寢て大分たつてから、横濱から歸つて來た倉地が廊下を隔てた隣りの部屋に行くのを聞き知ると、葉子はすぐ起きかへつて暫く妹達の寢息を窺つてゐたが、二人がいかにも無心に赤々とした頬をしてよく寢入つてゐるのを見窮めると、そつとどてらを引つかけながらその部屋を脱け出した。

二五

それから一日置いて次ぎの日に古藤から九時頃に來るがいゝかと電話がかゝつて來た。葉子は十時過ぎにしてくれと返事をさせた。古藤に會ふには倉地が横濱に行つた後がいゝと思つたからだ。

東京に歸つてから叔母と五十川女史の所へは歸つた事だけを知らせては置いたが、どつちからも訪問は元よりの事一言半句の挨拶もなかつた。責めて來るなり、慰めて來るなり、何んとかしさうなものだ。餘りと云へば人を踏みつけにした仕業だとは思つたけれども、葉子としては結句それが面倒がなくつていゝとも思つた。そんな人達に會つていさくさ口をきくよりも、古藤と話しさへすればその口裏から東京の人達の心持も大體は判る。積極的な自分の態度はその上で決めても遲くはないと思案した。

雙鶴館の女將は本當に眼から鼻に抜けるやうに落度なく、葉子の影身になつて葉子の爲めに盡してくれた。そ

の後ろには倉地がゐて、あの如何にも疎大らしく見えながら、人の氣もつかないやうな綿密な所にまで氣を配つて、采配を振つてゐるのは判つてゐた。新聞記者などが何處を如何して探り出したか、始めの中は押強く葉子に面會を求めて來たのを、女將が手際よく追ひ拂つたので、近付きこそはしなかつたが遠卷きにして葉子の擧動に注意してゐる事などを、女將は眉をひそめながら話して聞かせたりした。木部の戀人であつたといふ事がひどく記者達の興味を牽いたやうに見えた。葉子は新聞記者と聞くと、震へ上る程いやな感じを受けた。小さい時分に女記者にならうなど〻人にも口外した覺えがある癖に、探訪などに來る人達の事を考へると一番賤しい種類の人間のやうに思はないではゐられなかつた。仙臺で、新聞社の社長と親佐と葉子との間に起つた事として不倫な捏造記事（葉子はその記事の中、母に關してはどの邊までが捏造であるか知らなかつた。少くとも葉子に關しては捏造だつた）が掲載されたばかりでなく、母の所謂寃罪は堂々と新聞紙上で雪がれたが、自分のはとう〳〵そのまゝになつてしまつた。あの苦い經驗などが益々葉子の考へを頑なにした。葉子が報正新報の記事を見た時も、それほど田川夫人が自分を迫害しようとするなら、こちらも何處かの新聞を手に入れて田川夫人に致命傷を與へてやらうかと云ふ（道德を米の飯と同樣に見て生きてゐるやうな田川夫人に、その點に傷を與へて顔出しが出來ないやうにするのは容易な事だと葉子は思つた）企みを自分獨りで考へた時でも、あの記者といふものを手なづけるまでに自分を墮落させたくないばかりにその目論見を思ひ止つた程だつた。

　その朝も倉地と葉子とは女將を話相手に朝飯を食ひながら新聞に出たあの奇怪な記事の話をして、葉子が疾にそれをちやんと知つてゐた事などを談り合ひながら笑つたりした。

「忙しいにかまけて、あれはあのまゝにして居つたが……一つは餘り短兵急にこつちから出しやばると足許を見やがるで、……あれは何んとかせんと面倒だて」

と倉地はがらつと箸を膳に捨てながら、葉子から女將に眼をやつた。

「さうですともさ。下らない、あなた、あれであなたの御職掌にでもけちが附いたら本當に馬鹿々々しう御座んすわ。報正新報社になら私御懇意の方も二人や三人はいらつしやるから、何んなら私からそれとなくお話して見てもよう御座いますわ。私は又お二人とも今まであんまり平氣でいらつしやるんで、もう何んとかお話がついたのだとばかり思つてましたの」

と女將は怜しさうな眼に眞味な色を見せてかう云つた。倉地は無頓着に「さうさな」と云つたきりだつたが、葉子は二人の意見が略一致したらしいのを見ると、いくら女將が巧みに立ち廻つてもそれを揉み消す事は出來ないと云ひ出した。何故と云へばそれは田川夫人が何か葉子を深く意趣に思つてさせた事で、報正新報にそれが現はれた譯は、その新聞が田川博士の機關新聞だからだと說明した。倉地は田川と新聞との關係を始めて知つたらしい樣子で意外な顏付をした。

「俺は又興錄の奴……あいつはべら〳〵した奴で、右左のはつきりしない油斷のならぬ男だから、あいつの仕事かとも思つて見たが、成程それにしては記事の出かたが少し早過ぎるて」

さう云つてやをら立ち上りながら次の間に着かへに行つた。

女中が膳部を片付け終らぬ中に古藤が來たと云ふ案內があつた。

葉子は一寸當惑した。誂へておいた衣類がまだ出來ないのと、着具合がよくつて、倉地からもしつくり似合ふと讃められるので、その朝も藝者のちよい〳〵着らしい、黑繻子の襟の着いた、傳法な棒縞の身幅の狹い着物に、黑繻子と水色匹田の晝夜帶をしめて、どてらを引つかけてゐたばかりでなく、髮まで矢張り櫛卷きにしてゐたのだつた。えゝ、いゝ構ふものか、どうせ鼻をあかせるならのつけからあかさせてやらう。さう思つて葉子はその

まゝの姿で古藤を待ち構へた。

昔のまゝの姿で、古藤は旅館といふよりも料理屋と云つた風の家の樣子に少し鼻じろみながら這入つて來た。而して飛び離れて風體の變つた葉子を見ると、倘更勝手が違つて、これがあの葉子なのかと云ふやうに、驚きの色を隱し立てもせずに顏に現はしながら、ぢつとその姿を見た。

「まあ義一さん暫く。お寒いのね。どうぞ火鉢によつて下さいまし な。一寸御免下さいよ」

さう云つて、葉子はあでやかに上體だけを後ろにひねつて、廣蓋から紋付の羽織を引き出して、坐つたまゝどてらと着直した。なまめかしい匂ひが、その動作につれて密やかに部屋の中に動いた。葉子は自分の服裝がどう古藤に印象してゐるかなどを考へても見ないやうだつた。十年も着慣れた普段着で昨日も會つたばかりの弟のやうに親しい人に向ふやうなとりなしをした。古藤は頓には口もきけないやうに思ひ惑つてゐるらしかつた。多少垢になつた薩摩絣の衣物を着て、觀世撚の羽織紐にも、きちんとはいた袴にもその人の氣質が明かに書き記してあるやうだつた。

「こんなで大變變な所ですけれどもどうか氣樂になさつて下さいまし。それでないと何んだか改まつてしまつてお話がし悄くつていけませんから」

心置きない、而して古藤を信賴してゐる樣子を巧みにもそれとなく氣取らせるやうな葉子の態度は段々古藤の心を靜めて行くらしかつた。古藤は自分の長所も短所も無自覺でゐるやうな、その癖何處かに鋭い光のある眼を擧げてまじ〳〵と葉子を見始めた。

「何より先きにお禮。難有う御座いました妹達を。一昨日二人でこゝに來て大變喜んでゐましたわ」

「何んにもしやしない、唯塾に連れて行つて上げたゞけです。御丈夫ですか」

古藤はありのまゝをありのまゝに云つた。そんな序曲的な會話を少し續けてから葉子は徐ろに探り知つておかなければならないやうな事柄に話題を向けて行つた。

「今度こんなひよんな事で私亞米利加に上陸もせずに歸つて來る事になつたんですが、本當を仰有つて下さいよ、あなたは一體私を如何お思ひになつて」

葉子は火鉢の縁に兩肘をついて、兩手の指先きを鼻の先きに集めて組んだりほどいたりしながら、古藤の顔に浮び出る總ての意味を讀まうとした。

「えゝ、本當を云ひませう」

さう決心するものゝやうに古藤は云つてから一膝乘り出した。

「この十二月に兵隊に行かなければならないものだから、それまでに研究室の仕事を片付くものだけは片づけて置かうと思つたので、何もかも打ち捨てゝゐましたから、この間横濱からあなたの電話を受けるまでは、あなたの歸つて來られたのを知らないでゐたんです、尤も歸つて來られるやうな話は何處かで聞いたやうでしたが。而して何かそれには重大な譯があるに違ひないとは思つてゐましたが。所があなたの電話を切ると間もなく木村君の手紙が屆いて來たんです。それは多分繪島丸より一日か二日早く大北汽船會社の船が着いた筈だから、それが持つて來たんでせう。こゝに持つて來ましたが、それを見て僕は驚いてしまつたんです。隨分長い手紙だから後で御覽になるなら置いて行きませう。簡單に云ふと（さう云つて古藤はその手紙の必要な要點を心の中で整頓するらしく暫く默つてゐたが）木村君はあなたが歸るやうになつたのを非常に悲しんでゐるやうです。而してあなた程不幸な運命に弄ばれる人はない。又あなた程誤解を受ける人はない。誰もあなたの複雜な性格を見窮めて、その底に在る尊い點を拾ひ上げる人がないから、色々な風にあなたは誤解されてゐる。あなたが歸るについては日

本でも種々さま／＼な風說が起る事だらうけれども、君だけはそれを信じてくれちや困る。それから……あなたは今でも僕の妻だ……病氣に苦しめられながら、世の中の迫害を存分に受けなければならない憐れむべき女だ。他人が何んと云はうと君だけは僕を信じて……若しあなたを信ずる事が出來なければ僕を信じて、あなたを妹だと思つてあなたの爲めに戰つてくれ……本當はもつと最大級の言葉が使つてあるのだけれども大體そんな事が書いてあつたんです。それで……」

「それで？」

　葉子は眼の前で、こんがらがつた絲が靜かにほごれて行くのを見つめるやうに、不思議な興味を感じながら、顏だけは打ち沈んでから促した。

「それでゞすね。僕はその手紙に書いてある事とあなたの電話の『滑稽だつた』と云ふ言葉とをどう結び付けて見たらいゝか分らなくなつてしまつたんです。木村の手紙を見ない前でもあなたのあの電話の口調には……電話だつた故か丸で呑氣な冗談口のやうにしか聞こえなかつたものだから……本當を云ふと可なり不快を感じてゐた所だつたのです。思つた通りを云ひますから怒らないで聞いて下さい」

「何を怒りませう。ようこそはつきり仰有つて下さるわね。あれは私も後で本當に濟まなかつたと思ひましたのよ。木村が思ふやうに私は他人の誤解なんぞ、そんなに氣にしてはゐないの。小さい時から慣れつこになつてるんですもの。だから皆さんが勝手なあて推量なぞをしてゐるのが少しは癪にさはつたけれども、滑稽に見えて仕方がなかつたんですのよ。そこに以て來て電話であなたのお聲が聞こえたもんだから、飛び立つやうに嬉しくつて思はずしらずあんな輕はずみな事を云つてしまひましたの。木村から賴まれて私の世話を見て下さつた倉地といふ事務長の方もそれはきさくな親切な人ぢやありますけれども、船で始めて知り合ひになつた方だから、お心

安立てなんぞは出來ないでせう。あなたのお聲がした時には本當に敵の中から救ひ出されたやうに思つたんですもの……まあ然しそんな事は辯解するには及びませんわ。それから如何なさつて？」

古藤は例の厚い理想の被の下から、深く隱された感情が時々きら〳〵とひらめくやうな眼を、少し物惰げに大きく見開いて葉子の顏をつれ〴〵と見やつた。初對面の時には人並み外づれて遠慮勝ちだつた癖に、少し慣れて來ると人を見徹さうとするやうに凝視するその眼は、いつでも葉子に一種の不安を與へた。古藤の凝視にはづうづうしいと云ふ所は少しもなかつた。又故意にさうするらしい樣子も見えなかつた。少し鈍と思はれる程世事に疎く、事物の本當の姿を見て取る方法に暗いながら、眞正直に惡意なくそれをなし遂げようとするらしい眼付だつた。古藤なんぞに自分の祕密が何んで發かれてたまるものかと多寡をくゝりつゝも、その物軟らかながらどん〳〵人の心の中に這入り込まうとするやうな眼付に遇ふと、何時か祕密のどん底を過たず摑まれさうな氣がしてならなかつた。さうなるにしても然しそれまでには古藤は長い間忍耐して待たなければならないだらう。さう思つて葉子は一面小氣味よくも思つた。

こんな眼で古藤は、明かな疑ひを示しつゝ葉子を見ながら、更に語り續けた所によれば、古藤は木村の手紙を讀んでから思案に餘つて、その足ですぐ、まだ釘店の家の留守番をしてゐた葉子の叔母の所を尋ねてその考へを尋ねて見ようとした所が、叔母は古藤の立場がどちらに同情を持つてゐるか知れないので、うつかりした事は云はれないと思つたか、何事も打ち明けずに、五十川女史に尋ねて貰ひたいと逃げを張つたらしい。古藤は已むなく又五十川女史を訪問した。女史とは築地の或る敎會堂の執事の部屋で會つた。女史の云ふ所によると、十日程前に田川夫人の所から船中に於ける葉子の不埒を詳細に知らしてよこした手紙が來て、自分としては葉子の獨旅を保護し監督する事は迚も力に及ばないから、船から上陸する時も何んの挨拶もせずに別れてしまつた。何んでも

噂で聞くと病氣だと云つてまだ船に殘つてゐるさうだが、萬一そのまゝ歸國するやうにでもなつたら、葉子と事務長との關係は自分達が想像する以上に深くなつてゐると斷定しても差支へない。折角依賴を受けてその責を果さなかつたのは誠に濟まないが、自分達の力では手に餘るのだから推恕していたゞきたいと書いてあつた。で、五十川女史は田川夫人がいゝ加減な捏造などする人でないのをよく知つてゐるから、その手紙を重立つた親類達に示して相談した結果、若し葉子が繪島丸で歸つて來たら、回復の出來ない罪を犯したものとして、木村に手紙をやつて破約を斷行させ、一面には葉子に對して親類一同は絕緣する申合せをしたといふ事を聞かされた。さう古藤は語つた。

「僕はこんな事を聞かされて途方に暮れてしまひました。あなたは先刻から倉地といふその事務長の事を平氣で口にしてゐるが、こつちではその人が問題になつてゐるんです。今日でも僕はあなたにお會ひするのがいゝのか惡いのか散々迷ひました。然し約束ではあるし、あなたから聞いたらもつと事柄もはつきりするかと思つて思ひ切つて伺ふ事にしたんです。……あつちにたつた一人ゐて五十川さんから恐ろしい手紙を受取らなければならない木村君を僕は心から氣の毒に思ふんです。若しあなたが誤解の中にゐるんなら聞かせて下さい。僕はこんな重大な事を一方口で判斷したくはありませんから」

と話を結んで古藤は悲しいやうな表情をして葉子を見つめた。小癪な事を云ふもんだと葉子は心の中で思つたけれども、指先きで弄びながら少し振仰いだ顏はそのまゝに、憐れむやうな、からかふやうな色を微かに浮べて、

「えゝ、それはお聞き下さればどんなにでもお話はしませうとも。けれども天から私を信じて下さらないんならどれ程口を酸くしてお話をしたつて無駄ね」

「お話を伺つてから信じられるものなら信じようとしてゐるのです僕は」

「それはあなた方のなさる學問ならそれでよう御座んせうよ。けれども人情づくの事はそんなものぢやありませんわ。木村に對して疚しいことは致しませんと云つたつて、あなたが私を信じてゐて下さらなければ、それまでのものですし、倉地さんとはお友達といふだけですと誓つた所が、あなたが疑つていらつしやれば何んの役にも立ちはしませんからね。……さうしたもんぢやなくつて？」

「それぢや五十川さんの言葉だけで僕にあなたを判斷しろと仰有るんですか」

「さうね。……それでもよう御座いませうよ。兎に角それは私が御相談を受ける事柄ぢやありませんわ」

さう云つてる葉子の顏は、言葉に似合はず何處までも優しく親しげだつた。古藤はさすがに怜しく、から纏れて來た言葉を何處までも追はうとせずに默つてしまつた。そして「何事も明らさまにしてしまふ方が本當はいゝのだがな」と云ひたげな眼付で、格別虐げようとするでもなく、葉子が鼻の先きで組んだりほどいたりする手先きを見入つた。さうしたまゝでやゝ暫くの時が過ぎた。

十一時近いこの邊の町並みは一番靜かだつた。葉子はふと雨樋を傳ふ雨垂れの音を聞いた。日本に歸つてから始めて空は時雨れてゐたのだ。部屋の中は盛んな鐵瓶の湯氣でさう寒くはないけれども、戸外は薄ら寒い日和になつてゐるらしかつた。葉子はぎごちない二人の間の沈默を破りたいばかりに、ひよつと首を擡げて腰窓の方を見やりながら、

「おや何時の間にか雨になりましたのね」

と云つて見た。古藤はそれには答へもせずに、五分刈りの地藏頭を俯垂れて深々と溜息をした。

「僕はあなたを信じ切る事が出來ればどれ程幸だか知れないと思ふんです。五十川さんなぞより僕はあなたと話してゐる方がずつと氣持がいゝんです。それはあなたが同じ年頃で、……大變美しいといふ爲めばかりぢやない

と（その時古藤はおぼこらしく顏を赤らめてゐた）思つてゐます。五十川さんなぞは何んでも物を僻目で見るから僕はいやなんです。けれどもあなたは……如何してあなたはそんな氣象でゐながらもつと大膽に物を打ち明けて下さらないんです。僕は何んと云つてもあなたを信ずる事が出來ません。こんな冷淡な事を云ふのを許して下さい。然しこれにはあなたにも責があると僕は思ひますよ。……仕方がない僕は木村君に今日あなたと會つたこのまゝを云つてやります。僕には如何判斷のしようもありませんもの……然しお願ひしますがねえ。木村君があなたから離れなければならないものなら、一刻でも早くそれを知るやうにしてやつて下さい。僕は木村君の心持を思ふと苦しくなります」

「でも木村は、あなたに來たお手紙によると私を信じ切つてくれてゐるのではないんですか」

さう葉子に云はれて、古藤は又返す言葉もなく默つてしまつた。葉子は見る〳〵非常に昂奮して來たやうだつた。抑へ〳〵てゐる葉子の氣持が抑へ切れなくなつて激しく動き出して來ると、それは何時でも惻々として人に迫り人を壓した。顏色一つ變へないで元のまゝに親しみを込めて相手を見やりながら、胸の奧底の心持を傳へて來るその聲は、不思議な力を電氣のやうに感じて震へてゐた。

「それで結構。五十川の小母さん始めからいやだ〳〵と云ふ私を無理に木村に添はせようとして置きながら、今になつて私の口から一言の辯解も聞かずに、木村に離縁を勸めようと云ふ人なんですから、そりや私恨みもしま す。腹も立てます。えゝ、私はそんな事をされて默つて引つ込んでゐるやうな女ぢやない積りですわ。けれども あなたは初手から私に疑ひをお持ちになつて、木村にも色々御忠告なさつた方ですもの、木村にどんな事を云つて おやりにならうとも私にはねつから不服はありませんことよ。……けれどもね、あなたが木村の一番大切な親友でいらつしやると思へばこそ、私は人一倍あなたを頼りにして今日もわざ〳〵こんな所まで御迷惑を願つたりし

て、……でもをかしいものね、木村はあなたも信じ私は信じ、私は木村も信じあなたも信じ、あなたは木村は信ずるけれども私を疑つて……そ、まあ待つて……疑つてはいらつしやりません。さうです。けれども信ずる事が出來ないでいらつしやるんですわね……かうなると私は倉地さんにでもおすがりして相談相手になつていたゞく外仕樣がありません。いくら私娘の時から周圍から責められ通しに責められてゐても、今だに女手一つで二人の妹まで背負つて立つ事は出來ませんからね。……ゝ」

古藤は二重に折つてゐたやうな腰を立てゝ、少しせきこんで、

「それはあなたに不似合な言葉だと僕は思ひますよ。若し倉地と云ふ人の爲めにあなたが誤解を受けてゐるのなら……」

さう云つてまだ言葉を切らない中に、もうとうに横濱に行つたと思はれてゐた倉地が、和服のまゝで突然六疊の間に這入つて來た。これは葉子にも意外だつたので、葉子は鋭く倉地に眼くばせしたが、倉地は無頓着だつた。そして古藤のゐるのなどは度外視した傍若無人さで、火鉢の向座にどつかと胡坐をかいた。

古藤は倉地を一眼見るとすぐ倉地と悟つたらしかつた。いつもの癖で古藤はすぐ極度に固くなつた。中斷された話の續きを持ち出しもしないで、默つたまゝ少し伏眼になつてひかへてゐた。倉地は古藤から顏の見えないのをいゝ事に、早く古藤を返してしまへと云ふやうな顏付を葉子にして見せた。葉子は譯は分らないまゝにその注意に從はうとした。で、古藤の默つてしまつたのをいゝ事に、倉地と古藤とを引き合せる事もせずに、自分も默つたまゝ靜かに鐵瓶の湯を土瓶に移して、茶を二人に勸めて自分も悠々と飮んだりしてゐた。

突然古藤は居住ひをなほして、

「もう僕は歸ります。お話は中途ですけれども何んだか僕は今日はこれでお暇がしたくなりました。あとは必要

があつたら手紙で書きます」

さう云つて葉子にだけ挨拶して座を立つた。葉子は例の藝者のやうな姿のまゝで古藤を玄關まで送り出した。

「失禮しましてね、本當に今日は。もう一度でよう御座いますから是非お會ひになつて下さいましな。一生の御願ひですから、ね」

と耳打ちするやうに囁いたが古藤は何んとも答へず、雨の降り出したのに傘も借りずに出て行つた。

「あなたつたらまづいぢやありませんか、何んだつてあんな幕に顏をお出しなさるの」

かう詰るやうに云つて葉子が座につくと、倉地は飲み終つた茶碗を猫板の上にとんと音をたてゝ伏せながら、

「あの男はお前、馬鹿にしてかゝつてゐるが、話を聞いてゐると妙に粘り強い所があるぞ。馬鹿もあの位眞直に馬鹿だと油斷の出來ないものだ。も少し話を續けてゐて見ろ、お前の遣繰りでは間に合はなくなるから。一體何んでお前はあんな男をかまひつける必要があるんか、解らないぢやないか。木村にでも未練があれば知らない事」

かう云つて不敵に笑ひながら押付けるやうに葉子を見た。葉子はぎくりと釘を打たれたやうに思つた。倉地をしつかり握るまでは木村を離してはいけないと思つてゐる胸算用を倉地に偶然に云ひ當てられたやうに思つたからだ。然し倉地が本當に葉子を安心させる爲めには、しなければならない大事な事が少くとも一つ殘つてゐる。それは倉地が葉子と表向き結婚の出來るだけの始末をして見せる事だ。手取り早く云へばその妻を離緣する事だ。それまでは如何しても木村をのがしてはならない。それればかりではない、若し新聞の記事などが問題になつて、倉地が事務長の位置を失ふやうな事にでもなれば、少し氣の毒だけれども木村を自分の鎖から解き放さずにおくのが何かにつけて便宜でもある。葉子は然し前の理由はおくびにも出さずに後の理由を巧みに倉地に告げようと思つた。

「今日は雨になつたで出かけるのが大儀だ。晝には湯豆腐でもやつて寢てくれようか」
さう云つて早くも倉地がそこに横にならうとするのを葉子は强ひて起き返らした。

二六

「水戸とかでお座敷に出てゐた人ださうですが、倉地さんに落籍されてからもう七八年にもなりませうか、それは穩當ないゝ奥さんで、迚も商賣をしてゐた人のやうではありません。尤も水戸の士族のお娘御で出るが早いか倉地さんの所にいらつしやるやうになつたんださうですからその筈でもありますが、ちつとも擦れていらつしやらないでゐて、氣もお附きになるし、しとやかでもあり、……」

ある晩雙鶴館の女將が話に來て四方山の噂の序に倉地の妻の樣子を語つたその言葉は、はつきりと葉子の心に燒きついてゐた。葉子はそれが優れた人であると聞かされゝば聞かされる程妬ましさを增すのだつた。自分の眼の前には大きな障碍物が眞暗に立ちふさがつてゐるのを感じた。嫌惡の情にかきむしられて前後の事も考へずに別れてしまつたのではあつたけれども、假にも戀らしいものを感じた木部に對して葉子が抱く不思議な情緒、―普段は何事もなかつたやうに忘れ果てゝはゐるものゝ、思ひも寄らないきつかけに不圖胸を引き締めて捲き起つて來る不思議な情緒、――一種の絕望的なノスタルヂア――それを葉子は倉地にも倉地の妻にも寄せて考へて見る事の出來る不幸を持つてゐた。又自分の生んだ子供に對する執着。それを男も女も同じ程度に嚴しく感ずるものか如何かは知らない。然しながら葉子自身の實感から云ふと、何んと云つても例へやうもなくその愛着は深かつた。葉子は定子を見ると、知らぬ間に木部に對して戀に等しいやうな强い感情を動かしてゐるのに氣が附く事が屢〻だつた。木部との愛着の結果定子が生れるやうになつたのではなく、定子といふものがこの世に生れ出

る爲めに、木部と葉子とは愛着の羈に繋がれたのだとさへ考へられもした。葉子は又自分の父がどれ程葉子を溺愛してくれたかをも思つて見た。葉子の經驗から云ふと、兩親共ゐなくなつてしまつた今、慕はしさなつかしさを餘計感じさせるものは、格別是れと云つて情愛の徴を見せはしなかつたが、始終軟かい眼色で自分達を見守つてくれてゐた父の方だつた。それから思ふと男と云ふものも自分の生ませた子供に對しては女に讓らぬ執着を持ち得るものに相違ない。こんな過去の甘い回想までが今は葉子の心を鞭うつ笞となつた。而かも倉地の妻と子とはこの東京にちやんと住んでゐる。倉地は毎日のやうにその人達に遇つてゐるのに相違ないのだ。

　思ふ男を何處から何處まで自分のものにして、自分のものにしたと云ふ證據を握るまでは、心が責めて〳〵責めぬかれるやうな戀愛の殘虐な力に葉子は晝となく夜となく打ちのめされた。船の中での何事も打ち任せ切つたやうな心易い氣分は他人事のやうに、遠い昔の事のやうに悲しく思ひやられるばかりだつた。如何してこれほどまでに自分といふものゝ落付き所を見失つてしまつたのだらう。さう思ふ下から、かうしては一刻もゐられない。早く〳〵する事だけをして仕舞はなければ、取り返しがつかなくなる。何處から如何手をつければいゝのだ。敵を斃さなければ、敵は自分を斃すのだ。何んの躊躇。何んの思案。倉地が去つた人達に未練を殘すやうならば自分の戀は石や瓦と同樣だ。自分の心で何もかも過去は一切燒き盡して見せる。木部もない、定子もない。まして木村もない。皆んな捨てる、皆んな忘れる。その代り倉地にも過去といふ過去を悉皆忘れさせずにおくものか。それ程の蠱惑の力と情熱の炎とが自分にあるかないか見てゐるがいゝ。さうした一圖な熱意が身をこがすやうに燃え立つた。葉子は新聞記者の來襲を恐れて宿にとぢ籠つたまゝ、火鉢の前に坐つて、倉地の不在の時はこんな妄想に身も心もかきむしられてゐた。段々募つて來るやうな腰の痛み、肩の凝り。そんなものさへ葉子の心をます〳〵焦立たせた。

殊に倉地の歸りのおそい晩などは、葉子は座にも居たゝまれなかつた。倉地の居間になつてゐる十疊の間に行つて、そこに倉地の面影を少しでも忍ばうとした。船の中での倉地との樂しい思ひ出は少しも浮んで來ずに、どんな構へとも想像は出來ないが、兎に角倉地の住居の或る部屋に、三人の娘達に取り捲かれて、美しい妻にかしづかれて杯を干してゐる倉地ばかりが想像に浮んだ。そこに脫ぎ捨てゝある倉地の普段着は益々葉子の想像を擅まにさせた。いつでも葉子の情熱を引つ摑んでゆすぶり立てるやうな、倉地特有な膚の香、芳醇な酒や煙草から香ひ出るやうなその香を葉子は衣類をかき寄せて、それに顏を埋めながら、痲痺して行くやうな氣持で嗅ぎに嗅いだ。その香の一番奥に中年の男に特有なふけのやうな不快な香、他人のゝであつたなら葉子は一たまりもなく鼻を掩ふやうな不快な香を嗅ぎつけると、葉子は肉體的にも一種の陶醉を感じて來るのだつた。その倉地が妻や娘達に取り捲かれて樂しく一夕を過ごしてゐる。さう思ふと有り合せるものを取つて打毀すか、摑んで引き裂きたいやうな衝動が譯もなく嵩じて來るのだつた。

それでも倉地が歸つて來ると、それは夜おそくなつてからであつても葉子は唯子供のやうに幸福だつた。それまでの不安や焦燥は何處にか行つてしまつて、惡夢から幸福な世界に目覺めたやうに幸福だつた。葉子はすぐ走つて行つて倉地の胸に他愛なく抱かれた。倉地も葉子を自分の胸に引き締めた。葉子は廣い厚い胸に抱かれながら、單調な宿屋の生活の一日中に起つた些細な事までを、その表情の裕かな、鈴のやうな涼しい聲で、自分を樂しませてゐるものゝ如く語つた。倉地は倉地でその聲に醉ひしれて見えた。二人の幸福は何處に絕頂があるのか判らなかつた。二人だけで世界は完全だつた。葉子のする事は一つ／＼倉地の心がするやうに見えた。倉地のかうあり度いと思ふ事は葉子が豫めさうあらせてゐた。倉地のしたいと思ふ事は、葉子がちやんと仕遂げてゐた。茶碗の置き場所まで、着物の仕舞所まで、倉地は自分の手でした通りを葉子がしてゐるのを見出してゐるやうだつた。

「然し倉地は妻や娘達を如何するのだらう」

こんな事をそんな幸福の最中にも葉子は考へない事もなかつた。然し倉地の顏を見ると、そんな事は思ふも恥かしいやうな些細な事に思はれた。葉子は倉地の中にすつかり融け込んだ自分を見出すのみだつた。定子までも犠牲にして倉地をその妻子から切り放さうなど云ふたくらみは餘りに馬鹿らしい取越苦勞であるのを思はせられた。

「さうだ、生れてからこのかた私が求めてゐたものはとう／＼來ようとしてゐる。然しこんな事がかう手近にあらうとは本當に思ひもよらなかつた。私見たいな馬鹿はない。この幸福の頂上が今だと誰か教へてくれる人があつたら、私はその瞬間に喜んで死ぬ。こんな幸福を見てから下り坂にまで生きてゐるのはいやだ。それにしてもこんな幸福でさへが何時かは下り坂になる時があるのだらうか」

そんな事を葉子は幸福に浸り切つた夢心地の中に考へた。

葉子が東京に着いてから一週間目に、宿の女將の周旋で、芝の紅葉館と道一つ隔てた苔香園といふ薔薇專門の植木屋の裏にあたる二階建の家を借りる事になつた。それは元紅葉館の女中だつた人が或る豪商の妾になつたについて、その豪商といふ人が建てゝあてがつた一構へだつた。雙鶴館の女將はその女と懇意の間だつたが、女に子供が幾人か出來て少し手狹過ぎるので他に移轉しようかと云つてゐたのを聞き知つてゐたので、女將の方で適當な家を探し出してその女を移らせ、その跡を葉子が借りる事に取計らつてくれたのだつた。倉地が先きに行つて中の樣子を見て來て、杉林の爲めに少し日當りはよくないが、當分の隱れ家としては屈强だと云つたので、直ぐさまそこに移る事に決めたのだつた。誰にも知れないやうに引つ越さねばならぬといふので、荷物を小別けして持ち出すのにも、女將は自分の女中達にまで、それが倉地の本宅に運ばれるものだと云つて知らせた。運搬人は

總て芝の方から賴んで來た。そして荷物があらかた片付いた所で、ある夜遲く、而かもびしよ〳〵と吹き降りのする寒い雨風の折を選んで葉子は幌車に乘つた。葉子としてはそれ程の警戒をするには當らないと思つたけれども、女將が如何しても聽かなかつた。安全な所に送り込むまでは一旦お引き受けした手前、氣が濟まないと云ひ張つた。

葉子が誂へておいた仕立おろしの衣類を着かへてゐるとそこに女將も來合せて脫ぎ返しの世話を見た。襟の合せ目をピンで留めながら葉子が着がへを終へて座につくのを見て、女將は嬉しさうに揉み手をしながら、

「これであすこに大丈夫着いて下さりさへすれば私は重荷が一つ降りると申すものです。然しこれからがあなたは御大抵ぢや御座いませんね。あちらの奧樣の事など思ひますと、どちらに如何お仕向けをしていゝやら私には判らなくなります。あなたのお心持も私は身にしみてお察し申しますが、何處から見ても批點の打ち所のない奧樣のお身の上も私には御不憫で淚がこぼれてしまふんで御座いますよ。でね、これからの事についちや私はかう決めました。何んでも出來ます事ならと申上げたいんで御座いますけれども、私には心底をお打ち明け申しました所、どちら樣にも義理が立ちませんから、薄情でも今日かぎりこのお話には手をひかせていたゞきます。……どうか惡くお取りになりませんやうにね……如何も私はこんなでゐながら甲斐性が御座いませんで……」

さう云ひながら女將は口を切つた時の嬉しげな樣子にも似ず、襦袢の袖を引き出す隙もなく眼に淚を一杯ためてしまつてゐた。葉子にはそれが恨めしくも憎くもなかつた。唯何んとなく親身な切なさが自分の胸にもこみ上げて來た。

「惡く取るどころですか。世の中の人か一人でもあなたのやうな心持で見てくれたら、私はその前に泣きながら頭を下げて難有う御座いますと云ふ事でせうよ。これまでのあなたのお心盡しで私はもう十分。又いつか御恩返

しの出來る事もありませう。……それではこれで御免下さいまし。お妹御にもどうか衣物のお禮をくれぐれもよろしく」

少し泣き聲になつてさう云ひながら、葉子は女將とその妹分にあたるといふ人に禮心に置いて行かうとする米國製の二つの手提げをしまひこんだ違ひ棚を一寸見やつてそのまゝ座を立つた。

雨風の爲めに夜は賑やかな往來もさすがに人通りが絶えぐだつた。車に乘らうとして空を見上げると、雲はさう濃くはかゝつてゐないと見えて、新月の光が朧ろに空を明るくしてゐる中を嵐模樣の雲が恐ろしい勢で走つてゐた。部屋の中の暖かさに引きかへて、濕氣を十分に含んだ風は裾前を煽つてぞくぞくと膚に逼つた。ばたばたと風に弄られる前幌を車夫がかけようとしてゐる隙から、女將がみづみづしい丸髮を雨にも風にも思ふまゝ打たせながら、女中のさしかざさうとする雨傘の蔭に隱れようともせず、何か車夫に云ひ聞かせてゐるのが大事らしく見やられた。車夫が梶棒を擧げようとする時女將が祝儀袋をその手に渡すのが見えた。

「左樣なら」

「お大事に」

憚るやうに車の内外から聲が交はされた。幌にのしかゝつて來る風に抵抗しながら車は闇の中を動き出した。

向ひ風がうなりを立てゝ吹きつけて來ると、車夫は思はず車を煽らせて足を止める程だつた。この四五日火鉢の前ばかりにゐた葉子に取つては身を切るかと思はれるやうな寒さが、厚い膝かけの目まで通して襲つて來た。葉子は先程女將の言葉を聞いた時には左程とも思つてゐなかつたが、少し程立つた今になつて見ると、それがひしひしと身に應へるのを感じ出した。自分はひよつとするとあざむかれてゐる、弄びものにされてゐる。倉地は矢張り何處までもあの妻子と別れる氣はないのだ。唯長い航海中の氣まぐれから、出來心に自分を征服して見よ

うと企てたばかりなのだ。この戀のいきさつが葉子から持ち出されたものであるだけに、こんな心持になつて來ると、葉子は矢も楯もたまらず自分にひけ目を覺えた。幸福――自分が夢想してゐた幸福がとう〳〵來たと誇りがに喜んだその喜びはさもしい糠喜びに過ぎなかつたらしい。倉地は船の中でと同様の喜びでまだ葉子を喜んではゐる。それに疑ひを入れよう餘地はない。けれども美しい貞節な妻と可憐な娘を三人まで持つてゐる倉地の心がいつまで葉子に牽かされてゐるか、それを誰が語り得よう。葉子の心は幌の中に吹きこむ風の寒さと共に冷えて行つた。世の中から綺麗に離れてしまつた孤獨な魂がたつた一つそこには見出されるやうにも思へた。何處に嬉しさがある、樂しさがある。自分は又一つの今までに味はなかつたやうな苦惱の中に身を投げ込まうとしてゐるのだ。又うま〳〵と惡戯者の運命にしてやられたのだ。それにしてももうこの瀬戸際から引く事は出來ない。死ぬまで……さうだ死んでもこの苦しみに浸り切らずに置くものか。葉子には樂しさが苦しさなのか、苦しさが樂しさなのか、全く見界がつかなくなつてしまつてゐた。魂を締木にかけてその油でも搾りあげるやうな悶えの中に已むに已まれぬ執着を見出して我れながら驚くばかりだつた。

　ふと車が停つて梶棒が卸されたので葉子はほつと夢心地から我れに返つた。恐ろしい吹き降りになつてゐた。車夫が片足で梶棒を踏まへて、風で車のよろめくのを防ぎながら、前幌をはづしにかゝると、眞暗だつた前方から幽かに光が漏れて來た。頭の上ではざあ〳〵と降りしきる雨の中に、荒海の潮騒のやうな物凄い響が何か變事でも湧いて起りさうに聞こえてゐた。葉子は車を出ると風に吹き飛ばされさうになりながら、髪や新調の衣物の濡れるのもかまはず空を仰いで見た。漆を流したやうな雲で固く鎖された雲の中に、漆よりも色濃くむら〳〵と立ち騒いでゐるのは古い杉の木立だつた。花壇らしい竹垣の中の灌木の類は枝先を地につけんばかりに吹き靡いて、枯葉が渦のやうにばら〳〵と飛び廻つてゐた。葉子は我れにもなくそこにべつたり坐り込んでしまひたくな

つた。

「おい早く這入らんかよ、濡れてしまうぢやないか」

倉地がランプの燈をかばひつゝ家の中から怒鳴るのが風に吹きちぎられながら聞こえて來た。倉地がそこにゐると云ふ事さへ葉子には意外のやうだつた。大分離れた所でどたんと戸か何か外れたやうな音がしたと思ふと、風はまた一しきりうなりを立てゝ杉叢をこそいで通りぬけた。車夫は葉子を助けようにも梶棒を離れゝば車をけし飛ばされるので、提灯の尻を風上の方に斜に向けて眼八分に上げながら何か大聲に後ろから聲をかけてゐた。

葉子はすご〱として玄關口に近づいた。一杯機嫌で待ちあぐんだらしい倉地の顏の酒ほてりに似ず、葉子の顏は透き通る程青ざめてゐた。なよ〱と先づ敷臺に腰を下して、十歩ばかり歩くだけで泥になつてしまつた下駄を、足先で手傳ひながら脫ぎ捨てゝ、やうやく板の間に立ち上つてから、虛ろな眼で倉地の顏をぢつと見入つた。

「如何だつた寒かつたらう。まあこつちにお上り」

さう倉地は云つて、そこに出合はしてゐた女中らしい人に手ランプを渡すと華車な少し急な階子段を昇つて行つた。葉子は吾妻コートも脫がずにいゝ加減濡れたまゝで默つてその後から跟いて行つた。

二階の間は電燈で晝間より明るく葉子には思はれた。戸といふ戸ががたぴしと鳴りはためいてゐた。板葺きらしい屋根に一寸釘でも敲きつけるやうに雨が降りつけてゐた。座敷の中は暖かくいきれて、飲み食ひする物が散らかつてゐるやうだつた。葉子の注意の中にはそれだけの事が辛じて入つて來た。そこに立つたまゝの倉地に葉子は吸ひつけられるやうに身を投げかけて行つた。倉地も迎へ取るやうに葉子を抱いたと思ふとそのまゝそこにどつかと胡坐をかいた。そして自分の火照つた頰を葉子のにすり附けるとさすがに驚いたやうに、

「こりやどうだ冷えたにも氷のやうだ」

と云ひながらその顏を見入らうとした。然し葉子は無性に自分の顏を倉地の廣い暖かい胸に埋めてしまつた。なつかしみと憎しみとのもつれ合つた。嘗て經驗しない激しい情緒がすぐに葉子の涙を誘ひ出した。ヒステリーのやうに間歇的に牽き起る啜り泣きの聲を噛みしめても噛みしめても止める事が出來なかつた。葉子はさうしたまゝ倉地の胸で氣息を引き取る事が出來たらと思つた。それとも自分の嘗めてゐるやうな魂の悶えの中に倉地を捲き込む事が出來たらばとも思つた。

いそ〳〵と世話女房らしく喜び勇んで二階に上つて來る葉子を見出すだらうとばかり思つてゐたらしい倉地は、この理由も知れぬ葉子の狂態に驚いたらしかつた。

「どうしたと云ふんだな、え」

と低く力を罩めて云ひながら、葉子を自分の胸から引き離さうとするけれども、葉子は唯無性にかぶりを振るばかりで、駄々兒のやうに、倉地の胸にしがみついた。出來るならその肉の厚い男らしい胸を噛み破つて、血みどろになりながらその胸の中に顏を埋めこみたい――さう云ふやうに葉子は倉地の着物を噛んだ。

徐かにではあるけれども倉地の心は段々葉子の心持に染められて行くやうだつた。葉子をかき抱く倉地の腕の力は靜かに加はつて行つた。その氣息づかひは荒くなつて來た。葉子は氣が遠くなるやうに思ひながら、締め殺すほど引きしめてくれと念じてゐた。そして顏を伏せたまゝ涙の隙から切れ〴〵に叫ぶやうに聲を放つた。

「捨てないで頂戴とは云ひません……捨てるなら捨てゝ下さつてもよう御座んす……その代り……その代り……はつきり仰有つて下さい、ね……私は唯引きずられて行くのがいやなんです……」

「何を云つてるんだお前は……」

倉地の噛んでふくめるやうな聲が耳許近く葉子にかうさゝやいた。

「それだけは……それだけは誓つて下さい……ごまかすのは私はいや……いやです」
「何を……何をごまかすかい」
「そんな言葉が私は嫌ひです」
「葉子！」
　倉地はもう熱情に燃えてゐた。然しそれは何時でも葉子を抱いた時に倉地に起る野獸のやうな熱情とは少し違つてゐた。そこにはやさしく女の心をいたはるやうな影が見えた。葉子はそれを嬉しくも思ひ、物足らなくも思つた。

　葉子の心の中は倉地の妻の事を云ひ出さうとする熱意で一杯になつてゐた。その妻が貞淑な美しい女であると思へば思ふ程、その人が二人の間に挾まつてゐるのが呪はしかつた。縱令捨てられるまでも一度は倉地の心をその女から根こそぎ奪ひ取らなければ堪念が出來ないやうなひた向きに狂暴な欲念が胸の中ではち切れさうに煮えくり返つてゐた。けれども葉子はどうしてもそれを口の端に上せる事は出來なかつた。その瞬間に自分に對する誇りが塵芥のやうに踏み躙られるのを感じたからだ。葉子は自分ながら自分の心がじれつたかつた。倉地の方から一言もそれを云はないのが恨めしかつた。倉地はそんな事は云ふにも足らないと思つてゐるのかも知れないが……いゝえそんな事はない、そんな事のあらう筈はない。倉地は矢張り二股かけて自分を愛してゐるのだ。男の心にはそんな淫らな未練がある筈だ。男の心とは云ふまい、自分も倉地に出遇ふまでは、異性に對する自分の愛を勝手に三つにも四つにも裂いて見る事が出來たのだ。……葉子はこゝにも自分の暗い過去の經驗の爲めに責めさいなまれた。進んで戀の虜となつたものが當然陷らなければならない例へやうのない程暗く深い疑惑は後から〳〵口實を作つて葉子を襲ふのだつた。葉子の胸は言葉通りに張り裂けようとしてゐた。

然し葉子の心が傷めば傷むほど倉地の心は熱して見えた。倉地は如何して葉子がこんなに機嫌を悪くしてゐるのかを思ひ迷つてゐる樣子だつた。倉地はやがて强ひて葉子を自分の胸から引き放してその顏を强く見守つた。

「何をさう理窟もなく泣いてゐるのだ……お前は俺を疑ぐつてゐるな」

葉子は「疑はないでゐられますか」と答へようとしたが、如何してもそれは自分の面目にかけて口には出せなかつた。葉子は涙に解けて漂ふやうな眼を恨めしげに大きく開いて默つて倉地を見返した。

「今日俺はとう〳〵本店から呼び出されたんだつた。船の中での事をそれとなく聞き糺さうとしをつたから、俺は殘らず云つて退けたよ。新聞に俺達の事が出た時でもが、慌てるがものはないと思つとつたんだ。どうせ何時かは知れる事だ。知れる程なら、大つぴらで早いがいゝ位のものだ。近い中に會社の方は首にならうが、俺は、葉子、それが滿足なんだぞ。自分で自分の面に泥を塗つて喜んでる俺が馬鹿に見えような」

さう云つてから倉地は激しい力で再び葉子を自分の胸に引き寄せようとした。

葉子は然しさうはさせなかつた。素早く倉地の膝から飛び退いて疊の上に頰を伏せた。倉地の言葉をそのまゝ信じて、素直に嬉しがつて、心を涙に溶いて泣きたかつた。然し萬一倉地の言葉がその場遁れの勝手な造り事だつたら……何故倉地は自分の妻や子供達の事を云つては聞かせてくれないのだ。葉子は譯の解らない涙を泣くより術がなかつた。葉子は突伏したまゝでさめ〴〵と泣き出した。

戶外の嵐は氣勢を加へて、物凄まじく更けて行く夜を荒れ狂つた。

「俺の云うた事が解らんならまあ見とるがいゝさ。俺はくどい事は好かんからな」

さう云ひながら倉地は自分を抑制しようとするやうに强ひて落ち着いて、葉卷を取り上げて煙草盆を引き寄せた。

葉子は心の中で、自分の態度が倉地の氣をまづくしてゐるのをはら〳〵しながら思ひやつた。氣をまづくする

だけでもそれだけ倉地から離れさうなのがこの上なくつらかつた。然し自分で自分を如何する事も出來なかつた。

　葉子は嵐の中に我れと我が身をさいなみながらさめ〲と泣き續けた。

二七

　葉子はその夜倉地と部屋を別にして床に就いた。倉地は階上に、葉子は階下に。繪島丸以來二人が離れて寢たのはその夜が始めてだつた。倉地が眞心をこめた樣子で彼れ是れ云ふのを、葉子はすげなく跳ねつけて、折角とつてあつた二階の寢床を、女中に下に運ばしてしまつた。横になりはしたが何時までも寢付かれないで二時近くまで言葉通りに轉輾反側しつゝ、繰返し〲倉地の夫婦關係を種々に妄想したり、自分にまくしかゝつて來る將來の運命をひたすらに黑く塗つて見たりしてゐた。それでも果ては頭も體も疲れ果てゝ夢ばかりな眠りに陷つてしまつた。

　うつら〲とした眠りから、突然例へやうのない淋しさにひし〲と襲はれて――それはその時見た夢がそんな暗示になつたのか、それとも感覺的な不滿が眼を覺ましたのか分らなかつた――葉子は暗闇の中に眼を開いた。嵐の爲めに電線に故障が出來たと見えて、眠る時には點け放しにしておいた灯が何處も此處も消えてゐるらしかつた。嵐は然し何時の間にか凪ぎてしまつて、嵐の後の晩秋の夜は殊更靜かだつた。山内一面の杉森からは深山のやうな鬼氣がしん〲と吐き出されるやうに思へた。蟋蟀が隣りの部屋の隅でかすれ〲に聲を立てゝゐた。葉子は僅かな而かも淺い睡眠には過ぎなかつたけれども葉子の頭は曉前の冷えを感じて冴え〲と澄んでゐた。葉子は先づ自分がたつた一人で寢てゐた事を思つた。倉地と關係がなかつた頃はいつでも一人で寢てゐたのだが、好くもそんな事が永年に亙つて出來たものだつたと自分ながら不思議に思はれる位、それは今の葉子を物足らなく心

淋しくさせてゐた。かうして靜かな心になつて考へると倉地の葉子に對する愛情が誠實であるのを疑ふべき餘地は更になかつた。日本に歸つてから幾日にもならないけれども、今までは兎に角倉地の熱意に少しも變りが起つた所は見えなかつた。如何に戀に眼がふさがつても、葉子はそれを見極める位の冷靜な眼力は持つてゐた。そんな事は十分に知り拔いてゐる癖に、おぞましくも昨夜のやうな馬鹿な眞似をしてしまつた自分が自分ながら不思議な位だつた。どんなに情に激した時でも大抵は自分を見失ふやうな事はしないで通して來た葉子にはそれがひどく恥かしかつた。船の中にゐる時にヒステリーになつたのではないかと疑つた事が二三度ある——それが本當だつたのではないか知らんとも思はれた。而して夜着にかけた洗ひ立てのキャリコの裏の冷え／＼するのをふくよかな頤に感じながら心の中で獨語ちた。

「何を私は考へてゐたんだらう。如何かして心が狂つてしまつたんだ。こんな事はつひぞない事だのに」

さう云ひながら葉子は肩だけ起き直つて、枕頭の水を手さぐりでしたゝか飮みほした。氷のやうに冷え切つた水が喉許を靜かに流れ下つて、胃の腑に擴がるまではつきりと感じられた。酒も飮まないのだけれども、醉後の水と同樣に、胃の腑に味覺が出來て舌の知らない味を味ひ得たと思ふ程快く感じた。それほど胸の中は熱を持つてゐたに違ひない。けれども脚の方は反對に恐ろしく冷えを感じた。少しその位置を動かすと白さをそのまゝな寒い感じがシーツから逼つて來るのだつた。葉子は又きびしく倉地の胸を思つた。それは寒さと愛着とから葉子を追ひ立てゝ二階に走らせようとする程だつた。然し葉子は既にそれをぢつと耐へるだけの冷靜さを恢復してゐた。倉地の妻に對する處置は昨夜のやうであつては手際よくは成し遂げられぬ。もつと冷めたい智慧に力を借りなければならぬ——かう思ひ定めながら曉の白むのを知らずに又眠りに誘はれて行つた。

翌日葉子はそれでも倉地より先きに眼を覺まして手早く着がへをした。自分で板戸を繰り開けて見ると、緣先

きには、枯れた花壇の草や灌木が風の爲めに吹き亂された小庭があつて、その先きは、杉、松、その他の喬木の茂みを隔てゝ苔香園の手廣い庭が見やられてゐた。昨日までゐた雙鶴館の周圍とは全く違つた、同じ東京の内とは思はれないやうな靜かな鄙びた自然の姿が葉子の眼の前には見渡された。まだ晴れ切らない狹霧を罩めた空氣を通して、杉の葉越しに射しこむ朝の日の光が、雨にしつとりと潤つた庭の黒土の上に、眞直な杉の幹を棒縞のやうな影にして落してゐた。色さまぐ\な櫻の落葉が、日向では黄に紅に、日蔭では樺に紫に庭を彩つてゐた。彩つてゐると云へば菊の花もあちこちにしつけられてゐた。然し一帶の趣味は葉子の喜ぶやうなものではなかつた。塵一つさへない程、貧しく見える瀟洒な趣味か、何處にでも金銀がそのまゝ捨てゝあるやうな驕奢な趣味でなければ滿足が出來なかつた。殘つたのを捨てるのが惜しいとか勿體ないとか云ふやうな心持で、餘計な石や植木などを入れ込んだらしい庭の造り方を見たりすると、すぐさまむしり取つて眼にかゝらない所に投げ捨てたく思ふのだつた。その小庭を見ると葉子の心の中にはそれを自分の思ふやうに造り變へる計畫がうづ〲する程湧き上つて來た。

それから葉子は家の中を隅から隅まで見て廻つた。昨日玄關口に葉子を出迎へた女中が、戸を繰る音を聞きつけて、逸早く葉子の所に飛んで來たのを案内に立てた。十八九の小綺麗な娘で、きび〲した氣象らしいのに、如何にも蓮葉でない、主人を持てば主人思ひに違ひないのを葉子は一目で見貫いて、是れはいゝ人だと思つた。それは矢張り雙鶴館の女將が周旋してよこした、宿に出入りの豆腐屋の娘だつた。つや（彼女の名はつやと云つた）は階子段下の玄關に續く六疊の茶の間から始めて、その隣りの床の間附きの十二疊、それから十二疊と廊下を隔てゝ玄關と併ぶ茶席風の六疊を案内し、廊下を通つた突き當りに在る思ひの外手廣い臺所、風呂場を經て張り出しになつてゐる六疊と四疊半（そこがこの家を建てた主人の居間となつてゐたらしく、總ての造作に特別な

數寄が凝らしてあつた）に行つて、その雨戸を繰り明けて庭を見せた。そこの前栽は割合に荒れずにゐて、眺めが美しかつたが、葉子は垣根越しに苔香園の母屋の下の便所らしい汚ない建物の屋根を見附けて、困つたものがあると思つた。その外には臺所の側につやの四疊半の部屋が西向きについてゐた。女中部屋を除いた五つの部屋はいづれもなげし附きになつて、三つまでは床の間さへあるのに、如何して集めたものか兎に角掛物なり置物なりがちやんと飾られてゐた。家の造りや庭の樣子などには可なりの註文も相當の眼識も持つてはゐたが、繪畫や書の事になると葉子はおぞましくも鑑識の力がなかつた。生れつき機敏に働く才氣のお蔭で、見たり聞いたりした所から、美術を愛好する人々と膝を併べても、兎に角餘りぼろらしいぼろは出さなかつたが、若い美術家などが讃める作品を見ても何處が優れて何處に美しさがあるのか葉子には少しも見當のつかない事があつた。繪と云はず字と云はず、文學的の作物などに對しても葉子の頭は憐れな程通俗的であるのを葉子は自分で知つてゐた。然し葉子は自分の負けじ魂から、自分の見方が凡俗だとは思ひたくなかつた。藝術家など云ふ連中には、骨董などをいぢくつて古味と云ふやうなものを難有がる風流人と共通したやうな氣取りがある。その似而非氣取りを葉子は幸にも、持ち合はしてゐないのだと決めてゐた。葉子はこの家に持ち込まれてゐる幅物を見て廻つても、本當の値打ちがどれ程のものだか、更に見當がつかなかつた。唯あるべき所に、さういふ物のあることを滿足に思つた。

つやの部屋のきちんと手際よく片付いてゐるのや、二三日空家になつてゐたのにも係はらず、臺所が綺麗に拭き掃除がされてゐて、布巾などが清々しくから〳〵に乾かして懸けてあつたりするのは一々葉子の眼を快く刺戟した。思つたより住まひ勝手のいゝ家と、はき〳〵した淸潔好きな女中とを得た事が先づ葉子の寢起きの心持をすが〳〵しくさせた。

葉子はつやの汲んで出した丁度いゝ加減の湯で顔を洗つて、輕く化粧をした。昨夜の事などは氣にもかゝらない程心は輕かつた。葉子はその輕い心を抱きながら靜かに二階に上つて行つた。何とはなしに倉地に甘えたいやうな、詫びたいやうな氣持でそつと襖を明けて見ると、あの强烈な倉地の膚の香が暖かい空氣に滿たされて鼻をかすめて來た。葉子は我れにもなく駈けよつて、仰向けに熟睡してゐる倉地の上に羽がひにのしかゝつた。

暗い中で倉地は眼覺めたらしかつた。そして默つたまゝ葉子の髮や着物から花瓣のやうにこぼれ落ちるなまめかしい香りを夢心地で嗅いでゐるやうだつたが、やがて物惰げに、

「もう起きたんか。何時だな」

と云つた。丸で大きな子供のやうなその無邪氣さ。葉子は思はず自分の頰を倉地のにすり附けると、寢起きの倉地の頰は火のやうに熱く感ぜられた。

「もう八時。……お起きにならないと橫濱の方がおそくなるわ」

倉地は矢張り物惰げに、袖口からによきんと現はれ出た太い腕を延べて、短い散切頭をごし／＼と搔き廻しながら、

「橫濱？……橫濱にはもう用はないわい。何時首になるか知れない俺がこの上の御奉公をしてたまるか。是れも皆んなお前のお蔭だぞ。業つくばり奴」

と云つていきなり葉子の頸筋を腕にまいて自分の胸に押しつけた。

暫くして倉地は寢床を出たが、昨夜の事などはけろりと忘れてしまつたやうに平氣でゐた。二人が始めて離れ離れに寢たのにも一言も云はないのがかすかに葉子を物足らなく思はせたけれども、葉子は胸が廣々として何んと云ふ事もなく喜ばしくつて堪らなかつた。で、倉地を殘して臺所に下りた。自分で自分の食べるものを料理す

るといふ事にも嘗てない珍らしさと嬉しさとを感じた。
疊一疊がた日の射しこむ茶の間の六疊で二人は朝餉の膳に向つた。嘗ては葉子で木部と二人でかうした樂しい膳に向つた事もあつたが、その時の心持と今の心持とを比較する事も出來ないと葉子は思つた。木部は自分でのこ／＼と臺所まで出かけて來て、長い自炊の經驗などを得意げに話して聞かせながら、自分で米を磨いだり、火を燃きつけたりした。その當座は葉子もそれを樂しいと思はないではなかつた。然し暫くの中にそんな事をする木部の心持がさもしくも思はれて來た。おまけに木部は一日々々と物臭さになつて、自分では手を下しもせずに、邪魔になる所に突つ立つたまゝ指圖がましい事を云つたり、葉子には何等の感興も起させない長詩を例の御自慢の美しい聲で朗々と吟じたりした。葉子はそんな眼に遇ふと輕蔑し切つた冷やかな眸でじろりと見かへしてやりたいやうな氣になつた。倉地は始めからそんな事はてんでしなかつた。大きな駄々兒のやうに、顏を洗ふといきなり膳の前に胡坐をかいて、葉子が作つて出したものを片端からむしや／＼と綺麗に片付けて行つた。これが木部だつたら、出す物の一つ／＼に知つたか振りの講釋をつけて、葉子の腕前を感傷的に賞めちぎつて、可なり澤山を喰はずに殘してしまうだらう。さう思ひながら葉子は眼で撫でさするやうにして倉地が一心に箸を動かすのを見守らずにはゐられなかつた。
やがて箸と茶碗とをからりと投げ捨てると、倉地は所在無さゝうに葉卷をふかして暫くそこらを眺め廻してゐたが、いきなり立ち上つて尻つぱしよりをしながら裸足のまゝ庭に飛んで降りた。さうしてハーキュニースが針仕事でもするやうなぶきつちやうな樣子で、狹い庭を歩き廻りながら片隅から片付け出した。まだびしや／＼するやうな土の上に大きな足跡が縱横に印された。また枯れ果てない菊や萩などが雜草と一緒くたに情けも容赦もなく根こぎにされるのを見るとさすがの葉子もはら／＼した。そして縁際にしやがんで柱に凭れながら、時には

餘りのをかしさに高く聲を擧げて笑ひこけずにはゐられなかつた。

倉地は少し働き疲れると苔香園の方を窺つたり、臺所の方に氣を配つたりしておいて、大急ぎで葉子のゐる所に寄つて來た。而して泥になつた手を後ろに廻して、上體を前に折り曲げて、葉子の鼻の先きに自分の顏を突き出してお壺口をした。葉子も惡戲らしく周圍に眼を配つてその顏を兩手に挾みながら自分の唇を與へてやつた。倉地は勇み立つやうにして又土の上にしやがみこんだ。

倉地はかうして一日働き續けた。日がかげる頃になつて葉子も一緒に庭に出て見た。唯亂暴な、せう事なしの惡戲仕事とのみ思はれたものが、片付いて見ると何處から何處まで要領を得てゐるのを發見するのだつた。葉子が氣にしてゐた便所の屋根の前には、庭の隅にあつた椎の木が移してあつたりした。玄關前の兩側の花壇の牡丹には、藁で器用に霜圍ひさへしつらへてあつた。

こんな淋しい杉森の中の家にも、時々紅葉館の方から音曲の音がくゞもるやうに聞こえて來たり、苔香園から薔薇の香りが風の具合でほんのりと香つて來たりした。こゝにかうして倉地と住み續ける喜ばしい期待はひと向きに葉子の心を奪つてしまつた。

平凡な人妻となり、子を生み、葉子の姿を魔物か何かのやうに冷笑はうとする、葉子の舊友達に對して、嘗て葉子が抱いてゐた火のやうな憤りの心、腐つても死んでもあんな眞似はして見せるものかと誓ふやうに心であざけつたその葉子は、洋行前の自分といふものを何處かに置き忘れたやうに、そんな事は思ひも出さないで、舊友達の通つて來た道筋にひた走りに走り込まうとしてゐた。

こんな夢のやうな樂しさが他愛もなく一週間程は何んの故障も牽き起さずに續いた。歡樂に耽溺し易い、從つて何時でも現在を一番樂しく過ごすのを生れながら本能としてゐる葉子は、こんな有頂天な境界から一歩でも踏み出す事を極端に憎んだ。葉子が歸つてから一度しか會ふ事の出來ない妹達が、休日にかけて頻りに遊びに來たいと訴へ來るのを、病氣だとか、家の中が片附かないとか、口實を設けて拒んでしまつた。木村からも古藤の所か五十川女史の所かに宛てゝ便りが來てゐるには相違ないと思つたけれども、五十川女史は固より古藤の所にさへ住所が知らしてないので、それを廻送してよこす事も出來ないのを葉子は知つてゐた。定子――この名は時々葉子の心を未練がましくさせないではなかつた。然し葉子は何時でも思ひ捨てるやうにその名を心の中から振り落さうと努めた。倉地の妻の事は何かの拍子につけて心を打つた。この瞬間だけは葉子の胸は呼吸も出來ない位引き締められた。それでも葉子は現在目前の歡樂をそんな心痛で破らせまいとした。而してその爲めには倉地にあらん限りの媚びと親切とを捧げて、倉地から同じ程度の愛撫を貪らうとした。さうする事が自然にこの難題に解決をつける導火線にもなると思つた。

　倉地も葉子に讓らない程の執着を以て葉子が捧げる杯から歡樂を飲み飽きようとするらしかつた。不休の活動を命としてゐるやうな倉地ではあつたけれども、この家に移つて來てから、家を明けるやうな事は一度もなかつた。それは倉地自身が告白するやうに破天荒な事だつたらしい。二人は、初めて戀を知つた少年少女が世間も義理も忘れ果てゝ、生命さへ忘れ果てゝ肉體を破つてまでも魂を一つに溶かし度いとあせる、それと同じ熱情を捧げ合つて互々を樂しんだ。樂しんだと云ふよりも苦しんだ。その苦しみを樂しんだ。倉地はこの家に移つて以來新聞も配達させなかつた。郵便だけは移轉通知をして置いたので倉地の手許に屆いたけれども、倉地はその表書きさへ眼を通さうとはしなかつた。毎日の郵便はつやの手によつて束にされて、葉子が自分の部屋に定めた玄關

側の六疊の違ひ棚に空しく積み重ねられた。葉子の手許には妹達からの外には一枚の葉書さへ來なかつた。それほど世間から自分達を切り放してゐるのを二人とも苦痛とは思はなかつた。苦痛どころではない、それが幸ひであり誇りであつた。門には「木村」とだけ書いた小さい門札が出してあつた。木村と云ふ平凡な姓は二人の樂しい巣を世間に發くやうな事はないと倉地が云ひ出したのだつた。

然しこんな生活を倉地に永い間要求するのは無理だと云ふ事を葉子は遂に感付かねばならなかつた。ある夕食の後倉地は二階の一間で葉子を力強く膝の上に抱き取つて、甘い私語を取り交はしてゐた時、葉子が情に激して倉地に與へた熱い接吻の後にすぐ、倉地が思はず出た欠伸をぢつと嚙み殺したのを、逸早く見て取ると、葉子はこの種の歡樂が既に峠を越した事を知つた。その夜は葉子には不幸な一夜だつた。辛うじて築き上げた永遠の城塞が、果敢なくも瞬時の蜃氣樓のやうに見る／＼崩れて行くのを感じて、倉地の胸に抱かれながら殆んど一夜を眠らずに通してしまつた。

それでも翌日になると葉子は快活になつてゐた。殊更快活に振舞はうとしてゐたには違ひないけれども、葉子の倉地に對する溺愛は葉子をして殆んど自然に近い容易さを以てそれをさせるに十分だつた。

「今日は私の部屋で面白い事して遊びませう。いらつしやいな」

さう云つて少女が少女を誘ふやうに牡牛のやうに大きな倉地を誘つた。倉地は煙つたい顏をしながら、それでもその後から跟いて來た。

部屋はさすがに葉子のものであるだけ、何處となく女性的な軟味を持つてゐた。東向きの腰高窓には、もう冬といつていゝ十一月末の日が熱のない強い光を射つけて、亞米利加から買つて歸つた上等の香水をふりかけた匂ひ玉から幽かながら極めて上品な芳芬を靜かに部屋の中にまき散らしゐた。葉子はその匂ひ玉の下つてゐる壁際

の柱の下に、自分にあてがはれたきらびやかな縮緬の座布團を移して、それに倉地を坐らせておいて、違ひ棚から郵便の束をいくつとなく取り下ろして來た。

「さあ今朝は岩戸の隙から世の中を覗いて見るのよ。それも面白いでせう」

と云ひながら倉地に寄り添つた。倉地は幾十通とある郵便物を見たばかりでいゝ加減げんなりした様子だつたが、段々と興味を催して來たらしく、日の順に一つの束からほどき始めた。

如何につまらない事務用の通信でも、交通遮斷の孤島か、障壁で高く圍まれた美しい牢獄に閉ぢこもつてゐたやうな二人に取つては豫想以上の氣散じだつた。倉地も葉子もあり觸れた文句にまで思ひ存分の批評を加へた。かう云ふ時の葉子はその迸るやうな畯かい才氣の爲めに世にすぐれて面白味の多い女になつた。口を衝いて出る言葉々々がどれもこれも絢爛な色彩に包まれてゐた。二日目の所には岡から來た手紙が現はれ出た。船の中での禮を述べて、とう／＼葉子と同じ船で歸つて來てしまつた爲めに、家元では相變らずの薄志弱行と人毎に思はれるのが彼を深く責める事や、葉子に手紙を出したいと思つてあらゆる手がゝりを尋ねたけれども、如何しても解らないので會社で聞き合せて事務長の住所を知り得たからこの手紙を出すと云ふ事や、自分は唯々葉子を姉と思つて尊敬もし慕ひもしてゐるのだから、せめてその心を通はすだけの自由が與へて貰ひたいと云ふ事だのが、思ひ入つた調子で、下手な字體で書いてあつた。葉子は忘却の廢址の中から、生々とした少年の大理石像を掘りあてた人のやうに面白がつた。

「私が愛子の年頃だつたらこの人と心中位してゐるかも知れませんね。あんな心を持つた人でも少し齢を取ると男はあなた見たいになつちまふのね」

「あなたとは何んだ」

「あなた見たいな惡黨に」

「それはお門が違ふだらう」

「違ひませんとも……御同樣にと云ふ方がいゝわ。私は心だけあなたに來て、體はあの人に遣るとほんとはよかつたんだが……」

「馬鹿！　俺は心なんぞに用はないわい」

「ぢや心の方をあの人にやらうか知らん」

「さうしてくれ。お前にはいくつも心がある筈だから、有りつたけくれてしまへ」

「でも可哀さうだから一番小ささうなのを一つだけあなたの分に殘して置きませうよ」

さう云つて二人は笑つた。倉地は返事を出す方に岡のその手紙を仕分けた。葉子はそれを見て輕い好奇心が湧くのを覺えた。

澤山の中からは古藤のも出て來た。宛名は倉地だつたけれども、その中からは木村から葉子に送られた分厚な手紙だけが封じられてゐた。それと同時な木村の手紙が後から二本まで現はれ出た。葉子は倉地の見てゐる前で、その總てを讀まない中にずた〳〵に引き裂いてしまつた。

「馬鹿な事をするぢやない。讀んで見ると面白かつたに」

葉子を占領し切つた自信を誇りがな微笑に見せながら倉地はかう云つた。

「讀むと折角の晝御飯がおいしくなくなりますもの」

さう云つて葉子は胸糞の惡いやうな顏付をして見せた。二人は又他愛なく笑つた。

報正新報社からのもあつた。それを見ると倉地は、一時は揉消しをしようと思つてわたりを附けたりしたので

こんなものが來てゐるのだがもう用はなくなつたので見るには及ばないと云つて、今度は倉地が封のまゝに引き裂いてしまつた。葉子はふと自分が木村の手紙を裂いた心持を倉地のそれにあてはめて見たりした。然しその疑問もすぐ過ぎ去つてしまつた。

やがて郵船會社から宛てられた江戸川紙の大きな封書が現はれ出た。倉地は一寸眉に皺をよせて少し躊躇した風だつたが、それを葉子の手に渡して葉子に開封させようとした。何の氣なしにそれを受け取つた葉子は魔がさしたやうにはつと思つた。とう〳〵倉地は自分の爲めに……葉子は少し顏色を變へながら封を切つて中から卒業證書のやうな紙を二枚と、書記が丁寧に書いたらしい書簡一封とを探り出した。

果してそれは免職と、退職慰勞との會社の辭令だつた。手紙には退職慰勞金の受け取り方に關する注意が事々しい行書で書いてあるのだつた。葉子は何んと云つていゝか分らなかつた。こんな戀の戲れの中から斯程な打擊を受けようとは夢にも思つてはゐなかつたのだ。倉地がこゝに着いた翌日葉子に云つて聞かせた言葉は本當の事だつたのか。これ程までに倉地は親身になつてくれてゐたのか。葉子は辭令を膝の上に置いたまゝ下を向いて默つてしまつた。眼がしらの所が非常に熱い感じを得たと思つた、鼻の奥が暖かく塞がつて來た。泣いてゐる場合ではないと思ひながらも、葉子は泣かずにはゐられないのを知り拔いてゐた。

「本當に私が惡う御座いました……許して下さいまし……(さう云ふ中に葉子はもう泣き始めてゐた)……私はもう日蔭の妾としてゞもそれで十分に滿足します。えゝ、それで本當によう御座んす。私は嬉しい……」

倉地は今更何を云ふと言ふやうな平氣な顏で葉子の泣くのを見守つてゐたが、

「妾も圍ひ者もあるかな、俺には女はお前一人より無いんだからな。離緣狀は横濱の土を踏むと一緒に嬶に向け

てぶつ飛ばしてあるんだ」

と云つて胡坐の膝で貧乏ゆすりをし始めた。さすがの葉子も氣息をつめて、泣きやんで、呆れて倉地の顏を見た。

「葉子、俺が木村以上にお前に深惚れしてゐるといつか船の中で云つて聞かせた事があつたな。俺はこれでいざとなると心にもない事は云はない積りだよ。雙鶴館にゐる間も俺は幾日も濱には行きはしなんだのだ。大抵は家内の親類達との談判で頭を惱ませられてゐたんだ。だが大抵梟がついたから、俺は少しばかり手廻りの荷物だけ持つて一足先きにこゝに越して來たのだ。……もうこれでえゝや。氣がすつぱりしたわ。これには雙鶴館のお内儀も驚きくさるだらうて……」

會社の辭令ですつかり倉地の心持をどん底から感じ得た葉子は、この上倉地の妻の事を疑ふべき力は消え果ててゐた。葉子の顏は涙に濡れひたりながらそれを拭き取りもせず、倉地にすり寄つて、その兩肩に手をかけて、ぴつたりと横顏を胸にあてた。夜となく晝となく思ひ惱みぬいた事が既に解決されたので、葉子は喜んでも喜んでも喜び足りないやうに思つた。自分も倉地と同樣に胸の中がすつきりすべき筈だつた。けれどもさうは行かなかつた。葉子はいつの間にか去られた倉地の妻その人のやうな淋しい悲しい自分になつてゐるのを發見した。

倉地はいとしくつてならぬやうにエボニー色の雲のやうに眞黑にふつくりと亂れた葉子の髮の毛をやさしく撫で廻した。さうして毎時もに似ずしんみりした調子になつて、

「とう〳〵俺も埋れ木になつてしまつた。これから地面の下で濕氣を喰ひながら生きて行くより外にはない。……俺は負け惜みを云ふは嫌ひだ。かうしてゐる今でも俺は家内や娘達の事を思ふと不憫に思ふさ。それがない事なら俺は人間ぢやないからな。……だが俺はこれでいゝ。滿足この上なしだ。……自分ながら俺は馬鹿になり腐

つたらしいて」

さう云つて葉子の首を固くかき抱いた。葉子は倉地の言葉を酒のやうに酔ひ心地に呑み込みながら「あなたゞけにさうはさせておきませんよ。私だつて定子を見事に捨てゝ見せますからね」と心の中で頭を下げつゝ幾度も詫びるやうに繰り返してゐた。それが又自分で自分を泣かせる暗示となつた。倉地の胸に横たへられた葉子の顔は、綿入れと襦袢とを通して倉地の胸を暖かく侵す程熱してゐた。倉地の眼も珍らしく曇つてゐた。而して泣き入る葉子を大事さうにかゝへたまゝ、倉地は上體を前後に搖ぶつて、赤子でも寢かしつけるやうにした。戸外では、又東京の初冬に特有な風が吹き出たらしく、杉森がごう〳〵と鳴りを立てゝ、枯葉が明るい障子に飛鳥のやうな影を見せながら、から〳〵と音を立てゝ乾いた紙にぶつかつた。それは埃立つた、寒い東京の街路を思はせた。けれども部屋の中は暖かだつた。葉子は部屋の中が暖かなのか寒いのかさへ解らなかつた。唯自分の心が幸福に淋しさに燃え爛れてゐるのを知つてゐた。唯このまゝで永遠は過ぎよかし。唯このまゝで眠りのやうな死の淵に陷れよかし。とう〳〵倉地の心と全く融け合つた自分の心を見出した時、葉子の魂の願ひは生きようといふ事よりも死なうと云ふ事だつた。葉子はその悲しい願ひの中に勇み甘んじて溺れて行つた。

二九

この事があつてから又暫くの間、倉地は葉子と唯二人の孤獨に沒頭する興味を新しくしたやうに見えた。而して葉子が家の中をいやが上にも整頓して、倉地の爲めに住み心地のいゝ巣を造る間に、倉地は天氣さへよければ庭に出て、葉子の逍遙を樂しませる爲めに精魂を盡した。何時苔香園との話をつけたものか、庭の隅に小さな木戸を作つて、その花園の母屋からずつと離れた小逕に通ひ得る仕掛けをしたりした。二人は時々その木戸をぬけ

て目立たないやうに、廣々とした苔香園の庭の中をさまよつた。店の人達は二人の心を察するやうに、成るべく二人から遠ざかるやうに勉めてくれた。十二月の薔薇の花園は淋しい廢園の姿を目の前に擴げてゐた。可憐な花を開いて可憐な匂ひを放つ癖にこの灌木は何處か强い執着を持つ植木だつた。寒さにも霜にもめげず、その枝の先きにはまだ裏咲きの小さな花を咲かせようと藻掻いてゐるらしかつた。種々な色の蕾が大方葉の散り盡した梢にまで殘つてゐた。然しその花瓣は存分に霜に虐げられて、黄色に變色して互に膠着して、惠み深い日の目に遇つても開きやうがなくなつてゐた。そんな間を二人は靜かな豐かな心でさまよつた。風のない夕暮れなどには苔香園の表門を拔けて、紅葉館前のだら／＼坂を東照宮の方まで散歩するやうな事もあつた。冬の夕方の事とて人通りは稀れで二人が彷ふ道としてはこの上もなかつた。葉子はたま／＼行き遇ふ女の人達の衣裳を物珍らしく眺めやつた。それがどんなに粗末な不恰好な、いでたちであらうとも、女は自分以外の女の服裝を眺めなければ滿足出來ないものだと葉子は思ひながらそれを倉地に云つて見たりした。つやの髮から衣服までを毎日のやうに變へて裝はしてゐた自分の心持にも葉子は新しい發見をしたやうに思つた。本當は二人だけの孤獨に苦しみ始めたのは倉地だけではなかつたのか。或る時にはその淋しい坂道の上下から、立派な馬車や抱へ車が續々坂の中段を目ざして集まるのに遇ふ事があつた。坂の中段から紅葉館の下に當る邊に導かれた廣い道の奥からは、能樂のはやしの音が床しげに漏れて來た。二人は能樂堂での能の催しが終りに近づいてゐるのを知つた。同時にそんな事を見たのでその日が日曜日である事にも氣が付いた位二人の生活は世間からかけ離れてゐた。

かうした樂しい孤獨も然しながら永遠には續き得ない事を、續かしてゐてはならない事を鋭い葉子の神經は眼ざとく覺つて行つた。或る日倉地が例のやうに庭に出て土いぢりに精を出してゐる間に、葉子は惡事でも働くやうな心持で、つやに云ひつけて反古紙を集めた箱を自分の部屋に持つて來さして、いつか讀みもしないで破つて

しまつた木村からの手紙を選り出さうとする自分を見出してゐた。色々な形に寸斷された厚い西洋紙の斷片が木村の書いた文句の斷片をいくつも〳〵葉子の眼に曝し出した。暫くの間葉子は引きつけられるやうにさう云ふ紙片を手當り次第に手に取り上げて讀み耽つた。半成の畫が美しいやうに、斷簡には云ひ知れぬ情緒が見出された。その中に正しく織り込まれた葉子の過去が多少の力を集めて葉子に逼つて來るやうにさへ思へ出した。葉子は我れにもなくその思ひ出に浸つて行つた。然しそれは長い時が過ぎる前に壞れてしまつた。葉子はすぐ現實に取つて返してゐた。そして總ての過去に嘔氣のやうな不快を感じて箱ごと臺所に持つて行くと、つやに命じて裏庭でその全部を燒き捨てさせてしまつた。

然しこの時も葉子は自分の心で倉地の心を思ひやつた。而してそれが如何してもいゝ徵候でない事を知つた。それればかりではない。二人は霞を喰つて生きる仙人のやうにしては生きてゐられないのだ。職業を失つた倉地には、口にこそ出さないが、この問題は遠からず大きな問題として胸に忍ばせてあるのに違ひない。事務長位の給料で餘財が出來てゐるとは考へられない。まして倉地のやうに身分不相應な金遣ひをしてゐた男にはなほのことだ。その點だけから見てもこの孤獨は破られなければならぬ。而してそれは結局二人の爲めにいゝ事であるに相違ない。葉子はさう思つた。

或る晚それは倉地の方から切り出された。長い夜を所在なさゝうに讀みもしない書物などをいぢくつてゐたが、ふと思ひ出したやうに、

「葉子。一つお前の妹達を家に呼ばうぢやないか……それからお前の子供つて云ふのも是非こゝで育てたいもんだな。俺も急に三人まで子を失くしたら寂しくつてならんから……」

飛び立つやうな思ひを葉子は逸早くも見事に胸の中で押し鎭めてしまつた。而して、

「さうですね」

と如何にも興味なげに云つてゆつくりと倉地の顔を見た。

「それよりあなたのお子さんを一人なり二人なり來て貰つたらいかゞ。……私奥さんの事を思ふといつでも泣きます（葉子はさう云ひながらもう涙を一杯に眼にためてゐた）。けれど私は生きてる間は奥さんを呼び戻して上げて下さいなんて……そんな僞善者じみた事は云ひません。私にはそんな心持は微塵もありませんもの。お氣の毒なといふ事と、二人がかうなつてしまつたといふ事とは別物ですものねえ。せめては奥さんが私を呪ひ殺さうとでもして下されば少しは氣持がいゝんだけれども、しとやかにしてお里に歸つていらつしやると思ふとつひ身につまされてしまひます。だからと云つて私は自分が命を放げ出して築き上げた幸福を人に上げる氣にはなれません。あなたが私をお捨てになるまではね、喜んで私は私を通すんです。……けれどもお子さんなら私本當にちつとも構ひはしない事よ。どう、お呼び寄せになつては？」

「馬鹿な。今更そんなことが出來てたまるか」倉地は噛んで捨てるやうにさう云つて横を向いてしまつた。本當を云ふと倉地の妻の事を云つた時には葉子は心の中をそのまゝ云つてゐたのだ。その娘達の事を云つた時にはまざ／＼とした虚言をついてゐたのだ。葉子の熱意は倉地の妻を香はせるものは總て憎かつた。倉地の家の方から持ち運ばれた調度すら憎かつた。況してその子が呪はしくなくつて如何しよう。葉子は單に倉地の心を引いて見たいばかりに怖々ながら心にもない事を云つて見たのだつた。倉地の噛んで捨てるやうな言葉は葉子を滿足させた。同時に少し强過ぎるやうな語調が懸念でもあつた。倉地の心底をすつかり見て取つたといふ自信を得た積りでゐながら、葉子の心は何かの機につけてかうぐらついた。

「私が是非といふんだから構はないぢやありませんか」

「そんな負け惜みを云はんで、妹達なり定子なりを呼び寄せようや」

さう云つて倉地は葉子の心を隅々まで見抜いてるやうに、大きく葉子を包みこむやうに見やりながら、いつもの少し澁いやうな顏をして微笑んだ。

葉子はいゝ潮時を見計つて巧みにも不承々々さうに倉地の言葉に折れた。而して田島の塾からいよ〳〵妹達二人を呼び寄せる事にした。同時に倉地はその近所に下宿するのを餘儀なくされた。それは葉子が倉地との關係をまだ妹達に打ち明けてなかつたからだ。それはもう少し先きに、適當な時機を見計つて知らせる方がいゝといふ葉子の意見だつた。倉地にもそれに不服はなかつた。而して朝から晩まで一緒に寢起きをするよりは、離れた所に住んでゐて、氣の向いた時に遇ふ方がどれ程二人の間の戲れの心を滿足させるか知れないのを、二人は暫くの間の言葉通りの同棲の結果として認めてゐた。倉地は生活を支へて行く上にも必要であるし、不休の活動力を放射するにも必要なので、解職になつて以來何か事業の事を時々思ひ耽つてゐるやうだつたが、いよ〳〵計畫が立つたのでそれに着手する爲めには、當座の所、人々の出入りに葉子の顏を見られない所で事務を取るのを便宜としたらしかつた。その爲めにも倉地が暫くなりとも別居する必要があつた。

葉子の立場は段々と固まつて來た。十二月の末に試驗が濟むと、妹達は田島の塾から少しばかりの荷物を持つて歸つて來た。殊に貞世の喜びと云つてはなかつた。二人は葉子の部屋だつた六疊の腰窓の前に小さな二つの机を並べた。今まで何んとなく遠慮勝ちだつたつやも生れ代つたやうに快活なはき〳〵した少女になつた。唯愛子だけは少しも嬉しさを見せないで、唯愼しみ深く素直だつた。

「愛姉さん嬉しいわねえ」

貞世は勝ち誇るものゝ如く、縁側の柱に倚りかゝつて凝と冬枯れの庭を見詰めてゐる姉の肩に手をかけながら

倚り添つた。愛子は一所を瞬きもしないで見詰めながら、
「えゝ」
と齒切れ惡く答へるのだつた。貞世はぢれつたさうに愛子の肩をゆすりながら、
「でもちつとも嬉しさうぢやないわ」
と責めるやうに云つた。
「でも嬉しいんですもの」
愛子の答へは冷然としてゐた。十疊の座敷に持ち込まれた行李を明けて、汚れ物などを選り分けてゐた葉子はその樣子をちらと見たばかりで腹が立つた。然し來たばかりのものをたしなめるでもないと思つて蟲を殺した。
「何んて靜かな所でせう。塾よりも屹度靜かよ。でもこんなに森があつちや夜になつたら淋しいわねえ。私ひとりでお便所に行けるか知らん。……愛姉さん、そら、あすこに木戸があるわ。屹度隣りのお庭に行けるのよ。あの庭に行つてもいゝのお姉樣。誰のお家むかうは？……」
貞世は眼に這入るものはどれも珍らしいと云ふやうに獨りでしやべつては、葉子にとも愛子にともなく質問を連發した。そこが薔薇の花園であるのを葉子から聞かされると、貞世は愛子を誘つて庭下駄をつゝかけた。愛子も貞世に續いてそつちの方に出かける樣子だつた。
その物音を聞くと葉子はもう我慢が出來なかつた。
「愛さんお待ち。お前さん方のものがまだ片附いてはゐませんよ。遊び廻るのは始末をしてからになさいな」
愛子は從順に姉の言葉に從つて、その美しい眼を伏せながら座敷の中に這入つて來た。
それでもその夜の夕食は珍らしく賑やかだつた。貞世がはしやぎ切つて、胸一杯のものを前後も連絡もなくし

やべり立てるので愛子さへも思はずにやりと笑つたり、自分の事を容赦なく云はれたりすると恥かしさうに顔を赤らめたりした。

貞世は嬉しさに疲れ果てゝ夜の淺い中に寢床に這入つた。明るい電燈の下に葉子と愛子と向ひ合ふと、久しく遇はないでゐた骨肉の人々の間にのみ感ぜられる淡い心置きを感じた。葉子は愛子にだけは倉地の事を少し具體的に知らしておく方がいゝと思つて、話のきつかけに少し言葉を改めた。

「まだあなた方にお引き合せがしてないけれども倉地つて云ふ方ね、繪島丸の事務長の……（愛子は從順に落付いてうなづいて見せた）……あの方が今木村さんに成り代つて私の世話を見てゐて下さるのよ。木村さんからお頼まれなさつたものだから、迷惑さうにもなく、こんないゝ家まで見付けて下さつたの。木村さんは米國で色色事業を企てゝいらつしやるんだけれども、どうもお仕事がうまく行かないで、お金が注ぎ込みにばかりなつてゐて、迚もこつちには送つて下されないの、私の家はあなたも知つての通りでせう。どうしても暫くの間は御迷惑でも倉地さんに萬事を見ていたゞかなければならないのだから、あなたもその積りでゐて頂戴よ。ちよくちよくこゝにも來て下さるからね。それにつけて世間では何かくだらない噂をしてゐるに違ひないが、愛さんの塾なんかでは何んにもお聞きではなかつたかい」

「いゝえ、私達に面と向つて何か仰有る方は一人もありませんわ。でも」

と愛子は例の多恨らしい美しい眼を上眼に使つて葉子を窃み見るやうにしながら、

「でも何しろあんな新聞が出たもんですから」

「どんな新聞？」

「あらお姉様御存じなしなの。報正新報に續き物でお姉様とその倉地といふ方の事が長く出てゐましたのよ」

「へーえ」

葉子は自分の無智に呆れるやうな聲を出してしまつた。それは實際思ひもかけぬと云ふよりは、ありさうな事ではあるが今の今まで知らずにゐた。それに葉子は呆れたのだつた。然しそれは愛子の眼に自分を非常に無辜らしく見せたゞけの利益はあつた。さすがの愛子も驚いたらしい眼をして姉の驚いた顏を見やつた。

「何時？」

「今月の始め頃でしたか知らん。だもんですから皆さん方の間では大變な評判らしいんですの。今度も塾を出て來年から姉の所から通ひますと田島先生に申上げたら、先生も家の親類達に手紙や何んかで大分お聞き合せになつたやうですのよ。而して今日私達を自分のお部屋にお呼びになつて『私はお前さん方を塾から出したくはないけれども、塾に居續ける氣はないか』と仰有るのよ。でも私達は何んだか塾にゐるのが肩身が……どうしてもいやになつたもんですから、無理にお願ひして歸つて來てしまひましたの」

愛子は普段の無口に似ずかう云ふ事を話す時にはちやんと筋目が立つてゐた。葉子には愛子の沈んだやうな態度がすつかり讀めた。葉子の憤怒は見る〳〵その血相を變へさせた。田川夫人といふ人は何處まで自分に對して執念を寄せようとするのだらう。それにしても夫人の友達には五十川と云ふ人もある筈だ。若し五十川の小母さんが、本當に自身の改悛を望んでゐてくれるなら、その記事の中止なり訂正なりを夫田川の手を經てさせる事は出來る筈なのだ。田島さんも何んとかしてくれやうがありさうなものだ。そんな事を妹達に云ふ位なら何故自分に一言忠告でもしてはくれないのだ（こゝで葉子は歸朝以來妹達を預つてもらつた禮をしに行つてゐなかつた自分を顧みた。然し事情がそれを許さないのだらう位は察してくれてもよさゝうなものだと思つた）それほど自分はもう世間から見くびられ除け者にされてゐるのだ。葉子は何かたゝき附けるものでもあれば、そして世間と云

ふものが何か形を備へたものであれば、力の限り得物をたゝきつけてやりたかつた。葉子は小刻みに震へながら、言葉だけはしとやかに、

「古藤さんは」

「たまにお便りを下さいます」

「あなた方も上げるの」

「えゝたまに」

「新聞の事を何か云つて來たかい」

「何んにも」

「こゝの番地は知らせて上げて」

「いゝえ」

「何故」

「お姉様の御迷惑になりはしないかと思つて」

この小娘はもう皆んな知つてゐる、と葉子は一種の怖れと警戒とを以て考へた。何事も心得ながら白々しく無邪氣を裝つてゐるらしいこの妹が敵の間諜のやうにも思へた。

「今夜はもうお休み。疲れたでせう」

葉子は冷然として、燈の下に俯向いてきちんと坐つてゐる妹を尻眼にかけた。愛子はしとやかに頭を下げて從順に座を立つて行つた。

その夜十一時頃倉地が下宿の方から通つて來た。裏庭をぐるつと廻つて、毎夜戸じまりをせずにおく張出しの

六疊の間から上つて來る音が、ぢれながら鐵瓶の湯氣を見てゐる葉子の神經にすぐ通じた。葉子はすぐ立ち上つて猫のやうに足音を盜みながら急いでそつちに行つた。丁度敷居を上らうとしてゐた倉地は暗い中に葉子の近づく氣配を知つて、いつもの通り、立ち上りざまに葉子を抱擁しようとした。然し葉子はさうはさせなかつた。而して急いで戸を締め切つてから、電燈のスヰッチをひねつた。火の氣のない部屋の中は急に明るくなつたけれども身を刺すやうに寒かつた。倉地の顏は酒に醉つてゐるやうに赤かつた。

「どうした、顏色がよくないぞ」

倉地は訝るやうに葉子の顏をまじ〳〵と見やりながらさう云つた。

「待つて下さい、今私こゝに火鉢を持つて來ますから、妹達が寢ばなだから、あすこでは起こすといけませんから」

さう云ひながら葉子は手あぶりに火をついで持つて來た。而して酒肴もそこにとゝのへた。

「色が惡い筈……今夜はまたすつかり向腹が立つたんですもの。私達の事が報正新報に皆んな出てしまつたのを御存じ？」

「知つとるとも」

倉地は不思議でもないといふ顏をして眼をしばだゝいた。

「田川の奥さんといふ人は本當にひどい人ね」

葉子は齒を噛みくだくやうに鳴らしながら云つた。

「全くあれは放圖のない悧巧馬鹿だ」

さう吐き捨てるやうに云ひながら倉地の語る所によると、倉地は葉子に、屹度その中掲載される報正新報の記

事を見せまい爲めに引越して來た當座わざと新聞はどれも購讀しなかつたが、倉地だけの耳へは或る男（それは繪島丸の中で葉子の身の上を相談した時、甲斐絹のどてらを着て寢床の中に二つに折れ込んでゐたその男であるのが後で知れた。その男は名を正井と云つた）からつやの取次ぎで內祕に知らされてゐたのださうだ。郵船會社はこの記事が出る前から倉地の爲めに又會社自身の爲めに、極力揉み消しをしたのだけれども、新聞社では一向應ずる色がなかつた。それから考へるとそれは當時新聞社の慣用手段の懷金を貪らうといふ目論見ばかりから來たのでない事だけは明かになつた。あんな記事が現はれてはもう會社としても默つてはゐられなくなつて、大急ぎで詮議をした結果、倉地と船醫の興錄とが處分される事になつたと云ふのだ。

「田川の嚊の惡戲に決つとる。馬鹿に口惜しかつたと見えるて。……が、かうなりや結局パッとなつた方がいゝわい。皆んな知つとるだけ一々申し譯を云はずと濟む。お前は又まだそれしきの事にくよ〳〵しとるんか。馬鹿な。……それより妹達は來とるんか。寢顏にでもお目に懸つておかうよ。寫眞――船の中にあつたね――で見ても可愛らしい子達だつたが……」

二人はやをらその部屋を出た。そして十疊と茶の間との隔の襖をそつと明けると、二人の姉妹は向ひ合つて別別の寢床にすや〳〵と眠つてゐた。綠色の笠のかゝつた、電燈の光は海の底のやうに部屋の中を思はせた。

「あつちは」

「愛子」

「こつちは」

「貞世」

葉子は心窃かに、世にも艶やかなこの少女二人を妹に持つ事に誇りを感じて暖かい心になつてゐた。而して靜

かに膝をついて、切り下げにした貞世の前髮をそつと撫であげて倉地に見せた。倉地は聲を殺すのに少からず難儀な風で、

「さうやるとこつちは、貞世は、お前によく似とるわい。……愛子は、ふむ、これは又素的な美人ぢやないか。俺はこんなのは見た事がない……お前の二の舞でもせにや結構だが……」

さう云ひながら倉地は愛子の顏ほどもあるやうな大きな手をさし出して、さうしたい誘惑を退けかねるやうに、紅椿のやうな紅いその唇に觸れて見た。

その瞬間に葉子はぎよつとした。倉地の手が愛子の唇に觸れた時の樣子から、葉子は明らかに愛子がまだ目覺めてゐて、寢たふりをしてゐるのを感付いたと思つたからだ。葉子は大急ぎで倉地に目くばせしてそつとその部屋を出た。

三〇

「僕が每日――每日とは云はず每時間貴女に筆を執らないのは執りたくないから執らないのではありません。僕は一日貴女に書き續けてゐてもなほ飽き足らないのです。それは今の僕の境界では許されない事です。僕は朝から晚まで機械の如く働かねばなりませんから。

貴女が米國を離れてからこの手紙は多分七回目の手紙として貴女に受け取られると思ひます。然し僕の手紙はいつまでも暇を窃んで少しづゝ書いてゐるのですから、僕から云ふと日に二度も三度も貴女にあてゝ書いてる譯になるのです。然し貴女はあの後一回の音信も惠んでは下さらない。

僕は繰り返し〳〵云ひます。縱令貴女にどんな過失どんな誤謬があらうとも、それを耐へ忍び、それを許す

事に於ては主基督以上の忍耐力を持つてゐるのを僕は自ら信じてゐます。誤解しては困ります。僕が如何なる人に對してもかゝる力を持つてゐると云ふのではないのです。唯貴女に對してゞす。貴女は何時でも僕の品性を尊く導いてくれます。僕は貴女によつて人がどれ程愛し得るかを學びました。貴女によつて世間で云ふ墮落とか罪惡とか云ふ者がどれ程まで寛容の餘裕があるかを學びました。而してその寛容によつて、寛容する人自身がどれ程品性を陶冶されるかを學びました。僕は又自分の愛を成就する爲めにはどれ程の勇者になり得るかを學びました。これほどまでに僕を神の眼に高めて下さつた貴女が、僕から萬一にも失はれると云ふのは想像が出來ません。神がそんな試練を人の子に下される殘虐はなさらないのを僕は信じてゐます。そんな試練に堪へるのは人力以上ですから。今の僕から貴女が奪はれると云ふのは神が奪はれるのと同じ事です。貴女は神だとは云ひますまい。然し貴女を通してのみ僕は神を拜む事が出來るのです。

時々僕は自分で自分を憐れんでしまふ事があります。自分自身だけの力と信仰とで凡てのものを見る事が出來たらどれ程幸福で自由だらうと考へると、貴女を煩はさなければ一歩を踏み出す力をも感じ得ない自分の束縛を呪ひたくもなります。同時にそれ程慕はしい束縛は他にない事を知るのです。束縛のない所に自由はないと云つた意味で貴方の束縛は僕の自由です。

貴女は――一旦僕に手を與へて下さると約束なさつた貴女は、遂に僕を見捨てようとして居られるのですか。如何して一回の音信も恵んでは下さらないのです。然し僕は信じて疑ひません。世に若し眞理があるならば、而して眞理が最後の勝利者ならば貴女は必ず僕に還つて下さるに違ひないと。何故なれば、僕は誓ひます。――主よこの僕を見守り給へ――僕は貴女を愛して以來斷じて他の異性に心を動かさなかつた事を。この誠意が貴女によつて認められない譯はないと思ひます。

貴女は從來暗いいくつかの過去を持つてゐます。それが知らず識らず貴女の向上心を躊躇させ、貴女を稍々絕望的にしてゐるのではないのですか、若しさうなら貴女は全然誤謬に陷つてゐると思ひます。凡ての救ひは思ひ切つてその中から飛び出す外にはないのでせう。そこに停滯してゐるのはそれだけ貴女の暗い過去を暗くするばかりです。貴女は僕に信賴を置いて下さる事は出來ないのでせうか。人類の中に少くも一人、貴女の凡ての罪を喜んで忘れようと兩手を擴げて待ち設けてゐるものゝあるのを信じて下さる事は出來ないでせうか。

こんな下らない理窟はもうやめませう。

昨夜書いた手紙に續けて書きます。今朝ハミルトン氏の所から至急に來いといふ電話がかゝりました。シカゴの冬は豫期以上に寒いのです。仙臺どころの比ではありません。雪は少しもないけれども、イリー湖を多湖地方から渡つて來る風は身を切るやうでした。僕は外套の上に又大外套を重ね着してゐながら、風に向いた皮膚に沁み透る風の寒さを感じました。ハミルトン氏の用と云ふのは來年聖ルイスに開催される大規模な博覽會の協議の爲め急にそこに赴くやうになつたから同行しろと云ふのでした。僕は旅行の用意は何等してゐなかつたが、こゝにアメリカニズムがあるのだと思つて、そのまゝ同行する事にしました。自分の部屋の戶に鍵もかけずに飛び出したのですから、バビコック博士の奧さんは驚いてゐるでせう。然しさすがに米國です。着のみ着のまゝでこゝまで來ても何一つ不自由を感じません。鎌倉あたりまで行くのにも膝かけから旅カバンまで用意しなければならないのですから、日本の文明はまだ中々のものです。僕達はこの地に着くと、停車場內の化粧室で髭を剃り、靴を磨かせ、夜會に出ても恥かしくない支度が出來てしまひました。而してすぐ協議會に出席しました。貴女も知つて居らるゝ通り獨逸人のあの邊に於ける勢力は偉いものです。博覽會が開けたら、我々は米國に對してよりも寧ろこれらの獨逸人に對して緊褌一番する必要があります。ランチの時僕はハミルトン氏に

例の日本に買ひ占めてあるキモノその他の話をもう一度しました。博覽會を前に控へてゐるのでハミルトン氏も今度は乘氣になつてくれまして、高島屋と連絡をつけておく爲めに兎に角品物を取り寄せて自分の店で捌かして見ようと云つてくれました、之で僕の財政は非常に餘裕が出來る譯です。今まで店がなかつたばかりに、取り寄せても荷厄介だつたものですが、ハミルトン氏の店で取り扱つてくれゝば相當に賣れるのは分つてゐます。さうなつたら今までと違つて貴女の方にも足りないながら仕送りをして上げる事が出來ませう。早速電報を打つて一番早い船便で取り寄せる事にしましたから不日着荷する事と思つてゐます。

今は夜も大分更けました。ハミルトン氏は今夜も饗應に呼ばれて出かけました。大嫌ひなテーブル・スピーチになやまされてゐるのでせう。ハミルトン氏は實にシャープなビジネスマンライキな人です。而して熱心な正統派の信仰を持つた慈善家です。僕は殊の外信頼され重寶がられてゐます。そこから僕のライフ・キヤリヤアを踏み出すのは大なる利益です。僕の前途には確かに光明が見え出して來ました。

貴女に書く事は底止なく書く事です。然し明日の奮闘的生活（これは大統領ルーズベルトの著書の "Strenuous Life" を譯して見た言葉です、今この言葉は當地の流行語になつてゐます）に備へる爲めに筆を止めねばなりません。この手紙は貴女にも喜びを分けていたゞく事が出來るかと思ひます。

昨日聖ルイスから歸つて來たら、手紙が可なり多數屆いてゐました。郵便局の前を通るにつけ、郵便函を見るにつけ、脚夫に行き遇ふにつけ、僕は貴女を聯想しない事はありません。自分の机の上に來信を見出した時は猶更の事です。僕は手紙の束の間をかき分けて、貴女の手蹟を見出さうと勉めました。然し僕は又絶望に近い失望に打たれなければなりませんでした。僕は失望はしませう。然し絶望はしません。出來ません葉子さん、信じて下さい。僕はロングフェローのエヴァンジェリンの忍耐と謙遜とを以て貴女が僕の心を本當に汲み取つ

て下さる時を待つてゐます。然し手紙の束の中からは僅かに僕を失望から救ふ爲めに古藤君と岡君との手紙が見出されました。古藤君の手紙は兵營に行く五日前に書かれたものでした。未だに貴女の居所を知る事が出來ないので、僕の手紙は矢張り倉地氏にあてゝ廻送してゐると書いてあります。古藤君はさうした手續きを取るのを甚しく不快に思つてゐるやうです。岡君は人に漏らし得ない家庭內の紛擾や周圍から受ける誤解を、岡君らしく過敏に考へ過ぎて弱い體質を益々弱くしてゐるやうです。書いてある事には所々僕の持つ常識では判斷しかねるやうな所があります。貴女から何時か必ず消息が來るのを信じ切つて、その時を唯一つの救ひとして待つてゐます。その時の感謝と喜悅とを想像で描き出して、小說でも讀むやうに書いてあります。僕は岡君の手紙を讀むと、每時でも僕自身の心がそのまゝ書き現はされてゐるやうに思つて淚を感じます。

何故貴女は自分をそれ程まで韜晦して居られるのか、それには深い譯がある事と思ひますけれども、僕にはどちらの方面から考へても想像がつきません。

日本からの消息はどんな消息も待ち遠しい。然しそれを見終つた僕は屹度憂鬱に襲はれます。僕に若し信仰が與へられてゐなかつたら、僕は今如何なつてゐたかを知りません。

前の手紙との間に三日が經ちました。僕はバビコック博士夫婦と今夜ライシアム座にウェルシ孃の演じたトルストイの「復活」を見物しました。そこには基督教徒として眼を背けなければならないやうな場面がないではなかつたけれども、終りの方に近づいて行つての莊嚴さは見物人の總てを捕捉してしまひました。ウェルシ孃の演じた女主人公は眞に迫りすぎてゐる位ゐでした。貴女が若しまだ「復活」を讀んで居られないのなら僕は是非それをお勸めします。僕はトルストイの「懺悔」をK氏の邦文譯で日本にゐる時讀んだゞけですが、あの芝居を見てから、暇があつたら、もつと深く色々研究したいと思ふやうになりました。日本ではトルストイの著

書はまだ多くの人に知られてゐないと思ひますが、少くとも「復活」だけは丸善からでも取り寄せて讀んでいただきたい、貴女を啓發する事が必ず多いのは請合ひますから。僕等は等しく神の前に罪人です。然しその罪を悔い改める事によつて等しく選ばれた神の僕となり得るのです。この道の外には人の子の生活を天國に結び付ける道は考へられません。神を敬ひ人を愛する心の萎えてしまはない中にお互に光を仰がうではありませんか。

葉子さん、貴女の心に空虚なり汚點なりがあつても萬望絶望しないで下さいよ。貴女をそのまゝに喜んで受け入れて、――苦しみがあれば貴女と共に苦しみ、貴女に悲しみがあれば貴女と共に悲しむものがこゝに一人ゐる事を忘れないで下さい。僕は戰つて見せます。どんなに貴女が傷いてゐても、僕は貴女を庇つて勇ましくこの人生を戰つて見せます。僕の前に事業が、而して後ろに貴女があれば、僕は神の最も小さい僕として人類の祝福の爲めに一生を獻げます。

嗚呼、筆も言語も遂に無益です。火と熱する誠意と祈りとを籠めて僕はこゝにこの手紙を封じます。この手紙が倉地氏の手から貴女に屆いたら、倉地氏にも宜しく傳へて下さい。倉地氏に迷惑をおかけした金錢上の事については前便に書いておきましたから見て下さつたと思ひます。願はくは神我等と共に在し給はん事を。

明治三十四年十二月十三日」

倉地は事業の爲めに奔走してゐるのでその夜は年越しに來ないと下宿から知らせて來た。妹達は除夜の鐘を聞くまでは寢ないなどゝ云つてゐたが何時の間にか睡むくなつたと見えて、餘り靜かなので二階に行つて見ると、二人とも寢床に這入つてゐた。つやには暇が出してあつた。葉子に內所で報正新報を倉地に取り次いだのは、縱令葉子に無益な心配をさせない爲めだと云ふ倉地の注意があつた爲めであるにもせよ、葉子の心持を損じもし不安にもした。つやが葉子に對しても素直な敬愛の情を抱いてゐたのは葉子もよく心得てゐた。前にも書いたやう

に葉子は一目見た時からつやが好きだつた。臺所などをさせずに、小間使として手廻りの用事でもさせたら顔容と云ひ、性質と云ひ、取り廻しと云ひこれ程理想的な少女はないと思ふ程だつた。つやにも葉子の心持はすぐ通じたらしく、つやはこの家の爲めに蔭日向なくせつせと働いたのだつた。けれども新聞の小さな出來事一つが葉子を不安にしてしまつた。倉地が雙鶴館の女將に對しても氣の毒がるのを構はず、妹達に働かせるのが却つていいからとの口實の下に暇をやつてしまつたのだつた。で勝手の方にも人氣はなかつた。

葉子は何を原因ともなくその頃氣分がいら〳〵し勝ちで寢付きも惡かつたので、ぞく〳〵沁み込んで來るやうな寒さにも係らず、火鉢の側にゐた。而して所在ないまゝにその日倉地の下宿から屆けて來た木村の手紙を讀んで見る氣になつたのだ。

葉子は猫板に片肘を持たせながら、必要もない程高價だと思はれる厚い書牋紙に大きな字で書き綴つてある木村の手紙を一枚々々讀み進んだ。大人びたやうで子供つぽい、さうかと思ふと感情の高潮を示したと思はれる所も妙に打算的な所が離れ切らないと葉子に思はせるやうな內容だつた。葉子は一々精讀するのが面倒なので行から行に飛び越えながら讀んで行つた。而して日附けの所まで來ても格別な情緒を誘はれはしなかつた。然し葉子はこの以前倉地の見てゐる前でしたやうにずた〳〵に引き裂いて捨てゝしまふ事はしなかつた。しなかつた所ではない、その中には葉子を考へさせるものが含まれてゐた。木村は遠からずハミルトンとか云ふ日本の名譽領事をしてゐる人の手から、日本を去る前に思ひ切つてして行つた放資の回收をして貰へるのだ。不即不離の關係を破らずに別れた自分のやり方は矢張り圖に中つてゐたと思つた。「宿屋きめずに草鞋を脫ぐ」で馬鹿をしない必要はもうない、倉地の愛は確かに自分の手に握り得たから。然し口にこそ出しはしないが、倉地は金の上では可なりに苦しんでゐるに違ひない。倉地の事業と云ふのは日本中の開港場にゐる水先案內業者の組合を作つて、その實

權を自分の手に握らうとするのらしかつたが、それが仕上るのは短い日月には出來る事ではなさゝうだつた。殊に時節が時節がら正月にかゝつてゐるから、さう云ふもの〻設立には一番不便な時らしくも思はれた。木村を利用してやらう。

　然し葉子の心の底には何處かに痛みを覺えた。散々木村を苦しめ拔いた揚句に、なほあの根の正直な人間をたぶらかしてなけなしの金を搾り取るのは俗に云ふ「つゝもたせ」の所業と違つてはゐない。さう思ふと葉子は自分の墮落を痛く感ぜずにはゐられなかつた。けれども現在の葉子に一番大事なものは倉地と云ふ情人の外にはなかつた。心の痛みを感じながらも倉地の事を思ふとなほ心が痛かつた。彼は妻子を犧牲に供し、自分の職業を犧牲に供し、社會上の名譽を犧牲に供してまで葉子の愛に溺れ、葉子の存在に生きようとしてくれてゐるのだ。それを思ふと葉子は倉地の爲めに何んでもして見せてやりたかつた。時によると我れにもなく侵して來る涙ぐましい感じをぢつと堪へて、定子に會ひに行かずにゐるのも、さうする事が、何か宗教上の願がけで、倉地の愛を繋ぎとめる禁厭のやうに思へるからしてゐる事だつた。木村にだつて何時かは物質上の償ひ目に對して物質上の返禮だけはする事が出來るだらう。自分のする事は「つゝもたせ」とは形が似てゐるだけだ。やつてやれ。さう葉子は決心した。讀むでもなく讀まぬでもなく手に持つて眺めてゐた手紙の最後の一枚を葉子は無意識のやうにぽたりと膝の上に落した。而してそのまゝぢつと鐵瓶から立つ湯氣が電燈の光の中に多樣な渦紋を描いては消え描いては消えするのを見つめてゐた。

　暫くしてから葉子は物憂げに深い吐息を一つして、上體をひねつて棚の上から手文庫を取り下ろした。而して筆を噛みながら又上眼でぢつと何か考へるらしかつた。と、急に生きかへつたやうにはき〳〵となつて、上等の支那墨を眼の三つまで這入つた眞圓い硯にすり下ろした。そして輕く麝香の漂ふなかで男の字のやうな健筆で、精

坊な雁皮紙の卷紙に、一氣に、次のやうに認めた。

「書けばきりが御座いません。伺へばきりが御座いません。だから書きも致しませんでした。あなたのお手紙も今日いたゞいたものまでは拜見せずにずた／＼に破つて捨てゝしまひました。その心をお察し下さいまし。

噂にもお聞きとは存じますが、私は見事に社會的に殺されてしまひました。如何して私がこの上あなたの妻と名乘れませう。自業自得と世の中では申します。私も確かにさう存じてゐます。けれども親類、緣者、友達にまで突き放されて、二人の妹を抱へて見ますと、私は眼もくらんで仕舞ひます。倉地さんだけが如何云ふ御緣かお見捨てなく私共三人をお世話下さつてゐます。かうして私は何處まで沈んで行く事で御座いませう。本當に自業自得で御座います。

今日拜見したお手紙も本當は讀まずに裂いてしまふので御座いましたけれども……私の居所を誰方にもお知らせしない譯などは申し上げるまでも御座いますまい。

この手紙はあなたに差上げる最後のものかと思はれます。お大事にお過し遊ばしませ。蔭ながら御成功を祈り上げます。

只今除夜の鐘が鳴ります。

大晦日の夜　　　　葉より」

木村樣

葉子はそれを日本風の狀袋に收めて、毛筆で器用に表記を書いた。書き終ると急にいら／＼し出して、いきなり兩手に握つて一思ひに引き裂かうとしたが、思ひ返して、捨てるやうにそれを疊の上に投げ出すと、我れにもなく冷やかな微笑が口尻をかすかに引きつらした。

葉子の胸をどきんとさせる程高く、すぐ最寄りにある増上寺の除夜の鐘が鳴り出した。遠くから何處の寺のとも知れない鐘の聲がそれに應ずるやうに聞こえて來た。その音に引き入れられて耳を澄ますと夜の沈默の中にも聲はあつた。十二時を打つぼん／＼時計、「かるた」を讀み上げるらしいはしやいだ聲、何に驚いてか夜啼きをする鷄……葉子はそんな響きを探り出すと、人の生きてゐるといふのが恐ろしい程不思議に思はれ出した。

急に寒さを覺えて葉子は寢支度に立ち上つた。

三一

寒い明治三十五年の正月が來て、愛子達の冬期休暇も終りに近づいた。葉子は妹達を再び田島塾の方に歸してやる氣にはなれなかつた。田島といふ人に對して反感を抱いたばかりではない。妹達を再び預かつて貰ふ事になれば葉子は當然挨拶に行つて來るべき義務を感じたけれども、如何云ふものかそれが憚られて出來なかつた。横濱の支店長の永井とか、この田島とか、葉子には自分ながら譯の分らない苦手の人があつた。その人達が格別偉い人だとも、恐ろしい人だとも思ふのではなかつたけれども、如何云ふものかその前に出る事に氣が引けた。葉子は又妹達が不言不語の中に生徒達から受けねばならぬ迫害を思ふと不憫でもあつた。で、毎日通學するには遠すぎると云ふ理由の下にそこをやめて、飯倉にある幽蘭女學校といふのに通はせる事にした。

二人が學校に通ひ出すやうになると、倉地は朝から葉子の所で退校時間まで過すやうになつた。倉地の腹心の仲間達も、ちよい／＼出入りした。殊に正井といふ男は倉地の影のやうに倉地のゐる所には必ず居た。例の水先案内業者組合の設立について正井が一番働いてゐるらしかつた。正井と云ふ男は、一見放漫なやうに見えてゐて、剃刀のやうに目端の利く人だつた。その人が玄關から這入つたら、そのあとに行つて見ると履物は一つ殘らず揃

へてあつて、傘は傘で一隅にちやんと集めてあつた。葉子も及ばない素早さで花瓶の花の萎れかけたのや、茶や葉子の足しなくなつたのを見て取つて、翌日は忘れずにそれを買ひ調へて來た。無口の癖に何處かに愛嬌があるかと思ふと、馬鹿笑ひをしてゐる最中に不思議に陰險な眼付をちらつかせたりした。葉子はその人を觀察すればする程その正體が分らないやうに思つた。それは葉子をもどかしくさせる程だつた。時々葉子は倉地がこの男と組合設立の相談以外の祕密らしい話し合ひをしてゐるのに感付いたが、それは如何しても明瞭に知る事が出來なかつた。倉地に聞いて見ても、倉地は例の呑氣な態度で事もなげに話題を外らしてしまつた。

葉子は然し何んと云つても自分が望み得る幸福の絶頂に近い所にゐた。倉地を喜ばせる事が自分を喜ばせる事であり、自分を喜ばせる事が倉地を喜ばせる事である、さうした作爲のない調和は葉子の心をしとやかに快活にした。何にでも自分がしようとさへ思へば適應し得る葉子に取つては、拔け目のない世話女房になる位の事は何んでもなかつた。妹達もこの姉を無二のものとして、姉のしてくれる事は一も二もなく正しいものと思ふらしかつた。始終葉子から繼子あつかひにされてゐる愛子さへ、葉子の前には唯從順なしとやかな少女だつた。愛子としても少くとも一つは如何してもその姉に感謝しなければならない事があつた。それは年齡のお蔭もある。愛子は今年で十六になつてゐた。然し葉子がゐなかつたら、愛子はこれ程美しくはなれなかつたに違ひない。二三週間の中に愛子は山から掘り出されたばかりのルビーと磨きをかけ上げたルビーと程に變つてゐた。小肥りで背丈けは姉よりも遙かに低いが、ぴちぴちと締つた肉付と、拔け上るほど白い艶のある皮膚とはいゝ均整を保つて、短くはあるが、類のない程肉感的な手足の指の先き細な處に利點を見せてゐた。むつくりと牛乳色の皮膚に包まれた地藏肩の上に据ゑられたその顏は又葉子の苦心に十二分に酬いるものだつた。葉子が頸際を剃つてやるとそこに新しい美が生れ出た。髮を自分の意匠通りに束ねてやると、そこに新しい蠱惑が湧き上つた。葉子は愛子を美

しくする事に、成功した作品に對する藝術家と同樣の誇りと喜びとを感じた。暗い處にゐて明るい方に振り向いた時などの愛子の卵形の顏形は美の神ビーナスをさへ妬ます事が出來たらう。顏の輪廓と、稍〻額際を狹くするまでに厚く生え揃つた黑漆の髮とは闇の中に溶けこむやうにぼかされて、前からのみ來る光線の爲めに鼻筋は、希臘人のそれに見るやうな、規則正しく細長い前面の平面を際立たせ、潤ひ切つた大きな二つの瞳と、締つて厚い上下の唇とは、皮膚を切り破つて現はれ出た二對の魂のやうになま〳〵しい感じで見る人を打つた。愛子はさうした時に一番美しいやうに、闇の中に淋しく獨りでゐて、その多恨な眼でぢつと明るみを見詰めてゐるやうな少女だつた。

葉子は倉地が葉子の爲めにして見せた大きな英斷に酬いる爲めに、定子を自分の愛撫の胸から裂いて捨てようと思ひきはめながらも、如何してもそれが出來ないでゐた。あれから一度も訪れこそしないが、時折り金を送つてやる事と、乳母から安否を知らさせる事だけは續けてゐた。乳母の手紙は何時でも恨みつらみで滿たされてゐた。日本に歸つて來て下さつた甲斐が何處にある。親がなくて子が子らしく育つものか育たぬものか一寸でも考へて見て貰ひたい。乳母も段々年を取つて行く身だ。痲疹にかゝつて定子は每日々々マヽの名を呼び續けてゐる、その聲が葉子の耳に聞こえないのが不思議だ。こんな事が消息の度每にたど〳〵しく書き連ねてあつた。葉子はゐても立つても堪らないやうな事があつた。けれどもそんな時には倉地の事を思つた。一寸倉地の事を思つたゞけで、齒を喰ひしばりながらも、苦香園の表門からそつと家を拔け出る誘惑に打ち勝つた。

倉地の方から手紙を出すのは忘れたと見えて、岡はまだ訪れては來なかつた。木村にあれほど切な心持を書き送つた位だから、葉子の住所さへ分れば尋ねて來ない筈はないのだが、倉地にはそんな事はもう念頭に無くなつてしまつたらしい。誰も來るなと願つてゐた葉子もこの頃になつて見ると、ふと岡の事などを思ひ出す事があつ

た。横濱を立つ時に葉子にかじり附いて離れなかつた青年を思ひ出す事などもあつた。然しかう云ふ事がある度毎に倉地の心の動き方をも屹度推察した。而しては何時でも願をかけるやうにそんな事は夢にも思ひ出すまいと心に誓つた。

倉地が一向に無頓着なので、葉子はまだ籍を移してはゐなかつた。尤も倉地の先妻が果して籍を抜いてゐるか如何かも知らなかつた。それを知らうと求めるのは葉子の誇りが許さなかつた。凡てさう云ふ習慣を天から考への中に入れてゐない倉地に對して今更そんな形式事を迫るのは、自分の度胸を見透かされるといふ上からも、つらかつた。その誇りといふ心持も、度胸を見透されるといふ恐れも、本當を云ふと葉子が何處までも倉地に對してひけ目になつてゐるのを語るに過ぎないとは葉子自身存分に知り切つてゐる癖に、それを勝手に踏み躙つて自分の思ふ通りを倉地にして退けさす不敵さを持つ事は如何しても出來なかつた。それなのに葉子は動ともすると倉地の先妻の事が氣になつた。倉地の下宿の方に遊びに行く時でも、その近所で人妻らしい人の往來するのを見かけると葉子の眼は知らず識らず熟視の爲めにかゞやいた。一度も顏を合せないが、僅かな時間の寫眞の記憶から、屹度その人を見分けて見せると葉子は自信してゐた。葉子は何處を歩いても嘗てそんな人を見かけた事はなかつた。それが又妙に裏切られてゐるやうな感じを與へる事もあつた。

航海の初期に於ける批點の打ち處のないやうな健康の意識はその後葉子にはもう歸つて來なかつた。寒氣が募るにつれて下腹部が鈍痛を覺えるばかりでなく、腰の後ろの方に冷たい石でも釣り下げてあるやうな、重苦しい氣分を感ずるやうになつた。日本に歸つてから足の冷え出すのも知つた。血管の中には血の代りに文火でも流れてゐるのではないかと思ふ位寒氣に對して平氣だつた葉子が、床の中で倉地に足のひどく冷えるのを注意されたりすると不思議に思つた。肩の凝るのは幼少の時からの痼疾だつたが、それが近頃になつて殊更激しくなつた。

葉子はちよい〳〵按摩を呼んだりした。腹部の痛みが月經と關係があるのを氣付いて、葉子は婦人病であるに相違ないとは思つた。然しさうでもないと思ふやうな事が葉子の胸の中にはあつた。若しや懷姙では……葉子は喜びに胸を躍らせてさう思つても見た。牝豚のやうに幾人も子を生むのは迚も耐へられない。然し一人は如何あつても生みたいものだと葉子は祈るやうに願つてゐたのだ。定子の事から考へると自分には案外子運があるのかも知れないとも思つた。然し前の懷姙の經驗と今度の徵候とは色々な點で全く違つたものだつた。

一月の末になつて木村からは果して金を送つて來た。葉子は倉地が潤澤につけ屆けする金よりもこの金を使ふ事に寧ろ心安さを覺えた。葉子はすぐ思ひ切つた散財をして見たい誘惑に驅り立てられた。

或る日當りのいゝ日に倉地とさし向ひで酒を飮んでゐると苔香園の方から藪鶯の啼く聲が聞こえた。葉子は輕く酒ほてりのした顏を擧げて倉地を見やりながら、耳では鶯の啼き續けるのを注意した。

「春が來ますわ」

「早いもんだな」

「何處かへ行きませうか」

「まだ寒いよ」

「さうねえ……組合の方は」

「うむあれが片付いたら出かけようわい。いゝ加減くさ〳〵しをつた」

さう云つて倉地はさも面倒さうに杯の酒を一呷りに呷りつけた。

葉子はすぐその仕事がうまく運んでゐないのを感付いた。それにしてもあの每月の多額な金は何處から來るのだらう。さうちらつと思ひながら素早く話を他にそらした。

三二

それは二月初旬の或る日の晝頃だつた。からつと晴れた朝の天氣に引きかへて、朝日は暫く東向きの窓に射す間もなく、空は薄曇りに曇つて西風がごう／＼と杉森にあたつて物凄い音を立て始めた。何處にか春をほのめかすやうな日が來たりした後なので、殊更世の中が暗澹と見えた。雪でもまくしかけて來さうに、底冷えがするので、葉子は茶の間に置炬燵を持ち出して、倉地の着替へをそれにかけたりした。土曜だから妹達は早退けだと知りつゝも倉地は物臭さゝうに外出の支度にかゝらないで、どてらを引つかけたまゝ火鉢の側にうづくまつてゐた。葉子は食器を臺所の方に運びながら、來たり行つたりする序に倉地と物を云つた。臺所に行つた葉子に茶の間から大きな聲で倉地が云ひかけた。

「おいお葉（倉地は何時の間にか葉子をかう呼ぶやうになつてゐた）俺は今日は二人に對面して、これから勝手に出這入りの出來るやうにするぞ」

葉子は布巾を持つて臺所の方からいそ／＼と茶の間に歸つて來た。

「何んだつてまた今日……」

さう云つてつき膝をしながらちやぶ臺を拭つた。

「いつまでもかうしてゐるが氣づまりでしようないからよ」

「さうねえ」

葉子はそのまゝそこに坐り込んで布巾をちやぶ臺にあてがつたまゝ考へた。本當はこれは疾に葉子の方から云ひ出すべき事だつたのだ。妹達のゐない隙か、寢てからの暇を窺つて、倉地と會ふのは、始めの中こそあひゞき

のやうな興味を起させないでもないと思つたのと、葉子は自分の通つて來たやうな道は如何しても妹達には通らせたくない所から、自分の裏面を窺はせまいと云ふ心持とで、今までつひずる〳〵に、妹達を倉地に近づかせないで置いたのだつたが、倉地の言葉を聞いて見ると、さうしておくのが少し延び過ぎたと氣が附いた。又新しい局面を二人の間に開いて行くにもこれは惡い事ではない。葉子は決心した。

「ぢや今日にしませう。……それにしても着物だけは着替へてゐて下さいましな」

「よし來た」

と倉地はにこ〳〵しながらすぐ立ち上つた。葉子は倉地の後ろから着物を羽織つておいて羽がひに抱きながら、今更に倉地の頑丈な雄々しい體格を自分の胸に感じつゝ、

「それは二人ともいゝ子よ。可愛がつてやつて下さいましよ。……けれどもね、木村とのあの事だけはまだ內證よ。いゝ折を見つけて、私から上手に云つて聞かせるまでは知らん振りをしてね……よくつて……あなたはうつかりするとあけすけに物を云つたりなさるから……今度だけは用心して頂戴」

「馬鹿だな、どうせ知れる事を」

「でもそれはいけません……是非」

葉子は後ろから背延びをしてそつと倉地の後頸を吸つた。而して二人は顏を見合せて微笑みかはした。

その瞬間に勢よく玄關の格子戸ががらつと開いて「おゝ寒い」と云ふ貞世の聲が甲高く聞こえた。時間でもないので葉子は思はずぎよつとして倉地から飛び離れた。次いで玄關口の障子が開いた。貞世は茶の間に駈け込んで來るらしかつた。

「お姉様雪が降つて來てよ」

さう云つていきなり茶の間の襖を開けたのは貞世だつた。

「おやさう……寒かつたでせう」

とでも云つて迎へてくれる姉を期待してゐたらしい貞世は、置炬燵に這入つて胡坐をかいてゐる途方もなく大きな男を姉の外に見附けたので、驚いたやうに大きな眼を見張つたが、そのまゝすぐに玄關に取つて返した。

「愛姉さんお客様よ」

と聲をつぶすやうに云ふのが聞こえた。倉地と葉子とは顏を見合はして又微笑みかはした。

「こゝにお下駄があるぢやありませんか」

さう落ち付いていふ愛子の聲が聞こえて、やがて二人は靜かに這入つて來た。そして愛子はしとやかに貞世はべちやんと坐つて、聲を揃へて「只今」と云ひながら辭儀をした。愛子の年頃の時、嚴格な宗敎學校で無理强ひに男の子のやうな無趣味な服裝をさせられた、それに復讐するやうな氣で葉子の裝はした愛子の身なりはすぐ人の眼を牽いた。お下げをやめさせて、束髮にさせた項とたぼの所には、その頃米國での流行そのまゝに、蝶結びの大きな黑いリボンがとめられてゐた。古代紫の紬地の着物に、カシミヤの袴を裾短かにはいて、その袴は以前葉子が發明した例の尾錠どめになつてゐた。貞世の髮は又思ひ切つて短くおかつぱに切りつめて、横の方に深紅のリボンが結んであつた。それがこの才はじけた童女を、膝まで位な、わざと短く仕立てた袴と共に可憐にもいたづら〳〵らしく見せた。二人は寒さの爲めに頰を眞紅にして、眼を少し淚ぐましてゐた。それが殊更二人に別々な可憐な趣を添へてゐた。

葉子は少し改まつて二人を火鉢の座から見やりながら、

「お歸りなさい。今日はいつもより早かつたのね。……お部屋に行つてお包みをおいて袴を取つていらつしやい、

その上でゆつくりお話する事があるから……」
二人の部屋からは貞世が獨りではしやいでゐる聲が暫くしてゐたが、やがて愛子は廣い帶を普段着と着かへた上にしめて、貞世は袴をぬいだゞけで歸つて來た。
「さあこゝにいらつしやい。(さう云つて葉子は妹達を自分の身近かに坐らせた)このお方がいつか雙鶴館でお噂（うはさ）した倉地さんなのよ。今までも時々いらしつたんだけれどもつひにお目に懸る折がなかつたわね。これが愛子、これが貞世です」
さう云ひながら葉子は倉地の方を向くともうくすぐつたいやうな顔付をせずにはゐられなかつた。倉地は澁い笑を笑ひながら案外眞面目に、
「お初に(と云つて一寸頭を下げた)二人とも美しいねえ」
さう云つて貞世の顔をちよつと見てからぢつと眼を愛子にさだめた。愛子は格別恥ぢる樣子もなくその柔和な多恨な眼を大きく見開いてまんじりと倉地を見やつてゐた。それは男女の區別を知らぬ無邪氣な眼とも見えた。先天的に男といふものを知りぬいてその心を試みようとする淫婦の眼とも見られない事はなかつた。それほどその眼は奇怪な無表情の表情を持つてゐた。
「始めてお目に懸るが、愛子さんおいくつ」
倉地はなほ愛子を見やりながらかう尋ねた。
「私始めてゞは御座いません。……いつぞやお目に懸りました」
愛子は靜かに眼を伏せてはつきりと無表情な聲でかう云つた。愛子があの年頃で男の前にはつきりあゝ受け答へが出來るのは葉子にも意外だつた。葉子は思はず愛子を見た。

「はて、何處でね」

倉地もいぶかしげにかう問ひ返した。愛子は下を向いたまゝ口をつぐんでしまつた。そこにはかすかながら憎惡の影がひらめいて過ぎたやうだつた。葉子はそれを見逃さなかつた。

「寢顏を見せた時に矢張り彼女は眼を覺ましてゐたのだな。それを云ふのか知らん」

とも思つた。倉地の顏にも思ひかけず一寸どぎまぎしたらしい表情が浮んだのを葉子は見た。「なあに……」激しく葉子は自分で自分を打ち消した。

貞世は無邪氣にも、この熊のやうな大きな男が親しみ易い遊び相手と見て取つたらしい。貞世がその日學校で見聞きして來た事などを例の通り殘らず姉に報告しようと、何んでも構はず、何んでも隱さず、云つてのけるのに倉地が興に入つて合槌を打つので、こゝに移つて來てから客の味を全く忘れてゐた貞世は嬉しがつて倉地を相手にしようとした。倉地は散々貞世と戲れて、晝近く立つて行つた。

葉子は朝食がおそかつたからと云つて、妹達だけが晝食の膳についた。

「倉地さんは今、或る會社をお立てになるので色々御相談事があるのだけれども、下宿では周りがやかましくつて困ると仰有るから、これからいつでもこゝで御用をなさるやうに云つたから、屹度これからもちよく／＼いらつしやるだらうが、貞ちやん、今日のやうに遊びのお相手にばかりしてゐては駄目よ。その代り英語なんぞで分らない事があつたら何んでもお聞きするといゝ、姉さんより色々の事をよく知つていらつしやるから。……それから愛さんは、これから倉地さんのお客樣も見えるだらうから、そんな時には一々姉さんの指圖を待たないではき／＼お世話をして上げるのよ」

と葉子は豫め二人に釘をさした。

妹達が食事を終つて二人で後始末をしてゐると又玄關の格子が靜かに開く音がした。
貞世は葉子の所に飛んで來た。

「お姉樣又お客樣よ。今日は隨分澤山入らつしやるわね。誰でせう」

と物珍らしさうに玄關の方に注意の耳をそばだてた。葉子も誰だらうと訝つた。やゝ暫くして靜かに案内を求める男の聲がした。それを聞くと貞世は姉から離れて駈け出して行つた。愛子が襷を外しながら臺所から出て來た時分には、貞世はもう一枚の名刺を持つて葉子の所に取つて返してゐた。金縁のついた高價らしい名刺の表には岡一と記してあつた。

「まあ珍らしい」

葉子は思はず聲を立てゝ貞世と共に玄關に走り出た。そこには處女のやうに美しく小柄な岡が雪のかゝつた傘をつぼめて、外套の滴りを紅をさしたやうに赤らんだ指の先きではじきながら、女のやうにはにかんで立つてゐた。

「いゝ所でせう。お出でには少しお寒かつたかも知れないけれども、今日はほんとにいゝ折柄でしたわ。隣りに見えるのが有名な苔香園、あすこの森の中が紅葉館、この杉の森が私大好きですの。今日は雪が積つて猶更綺麗ですわ」

葉子は岡を二階に案内して、そこの硝子戸越しにあちこちの雪景色を誇りがに指呼して見せた。岡は言葉少な乍ら、ちか／＼と眩しい印象を眼に殘して、降り下り降り煽る雪の向うに隱見する山内の木立の姿を嘆賞した。

「それにしても如何してあなたはこゝを……倉地から手紙でも行きましたか」

岡は神祕的に微笑んで葉子を顧みながら「いゝえ」と云つた。

「そりやをかしい事……それでは如何して」
緣側から座敷へ戾りながら徐ろに、
「お知らせがないもんで上つては屹度いけないとは思ひましたけれども、こんな雪の日ならお客もなからうからひよつとかすると會つて下さるかとも思つて……」
さう云ふ云ひ出しで岡が語る所によれば、岡の從妹に當る人が幽蘭女學校に通學してゐて、正月の學期から早月と云ふ姉妹の美しい生徒が來て、それは芝山內の裏坂に美人屋敷と云つて界隈で有名な家の三人姉妹の中の二人であると云ふ事や、一番の姉に當る人が報正新報で噂を立てられた優れた美貌の持主だと云ふ事やが、早くも口さがない生徒間の評判になつてゐるのを何かの折に話したのですぐ思ひ當つたけれども、一日々々と訪問を躊躇してゐたのだとの事だつた。葉子は今更に世間の案外に狹いのを思つた。愛子と云はず貞世の上にも、自分の行跡がどんな影響を與へるかも考へずにはゐられなかつた。そこに貞世が、愛子が調へた茶器をあぶなつかしい手付で、眼八分に持つて來た。貞世はこの日淋しい家の內に幾人も客を迎へる物珍らしさに有頂天になつてゐたやうだつた。滿面に僞りのない愛嬌を見せながら、丁寧にぺつちやんとお辭儀をした。而して顏にたれかゝる黑髮を振り仰いで頭を振つて後ろにさばきながら、岡を無邪氣に見やつて、姉の方に寄り添ふと大きな聲で「どなた」と聞いた。
「一緒にお引き合せしますからね、愛さんにもお出でなさいと云つていらつしやい」
二人だけが座に落ち付くと岡は淚ぐましいやうな顏をしてぢつと手あぶりの中を見込んでゐた。葉子の思ひなしかその顏にも少しやつれが見えるやうだつた。普通の男ならば多分左程にも思はないに違ひない家の中のいさくさなどに纖細過ぎる神經をなやまして、それにつけても葉子の慰撫を殊更にあこがれてゐたらしい樣子は、そ

んな事については一言も云はないが、岡の顏にははつきりと描かれてゐるやうだつた。
「そんなにせいたつていやよ貞ちやんは。せつかちな人ねえ」
さう穩かにたしなめるらしい愛子の聲が階下でした。
「でもそんなにおしやれしなくつたつていゝわ。お姉樣が早くつて仰有つてよ」
無遠慮にかう云ふ貞世の聲もはつきり聞こえた。葉子はほゝゑみながら岡を暖かく見やつた。岡もさすがに笑ひを宿した顏を上げたが、葉子と見交はすと急に頰をぽつと赤くして眼を障子の方に外らしてしまつた。手あぶりの緣に置かれた手の先きが幽かに震ふのを葉子は見のがさなかつた。
やがて妹達二人が葉子の後ろに現はれた。葉子は坐つたまゝ手を後ろに廻して、
「そんな人のお尻の所に坐つて、もつとこつちにお出なさいな。……これが妹達ですの。どうかお友達にして下さいまし。お船で御一緒だつた岡一樣。……愛さんあなたお知り申してゐないの……あの失禮ですが何んと仰有いますの、お從妹御さんのお名前は」
と岡に尋ねた。岡は言葉通りに神經を顚倒させてゐた。それはこの靑年を非常に醜く且つ美しくして見せた。急いで坐り直した居住ひをすぐ意味もなく崩して、それを又非常に後悔したらしい顏付を見せたりした。
「は？」
「あの私共の噂をなさつたそのお孃樣のお名前は」
「あの矢張り岡と云ひます」
「岡さんならお顏は存じ上げて居りますわ。一つ上の級にいらつしやいます」
愛子は少しも騷がずに、倉地に對した時と同じ調子でぢつと岡を見やりながら卽座にかう答へた。その眼は相

變らず淫蕩と見える程極端に純潔だつた。純潔と見える程極端に淫蕩だつた。岡は怖ぢながらもその眼から自分の眼を外らす事が出來ないやうにまともに愛子を見て見る〳〵耳たぶまでを眞赤にしてゐた。葉子はそれを氣取ると愛子に對して一段の憎しみを感ぜずにはゐられなかつた。

「倉地さんは……」

岡は一路の逃げ路をやうやく求め出したやうに葉子に眼を轉じた。

「倉地さん？　たつた今お歸りになつたばかり惜しい事をしましてねえ。でもあなたこれからはちよく〳〵入らして下さいますわね。倉地さんもすぐお上げするのは今日が始めてゞすのよ。ねえ貞ちやん。……本當によく來て下さいました事。私疾から來ていたゞきたくつて仕樣がなかつたんですけれども、倉地さんから何んとか云つて上げて下さるだらうと、それればかりを待つてゐたのですよ。私からお手紙を上げるのはいけませんもの（そこで葉子は解つて下さるでせうと云ふやうな優しい眼付を強い表情を添へて岡に送つた）。木村からの手紙であなたの事は委しく伺つてゐましたわ。色々お苦しい事がおありになるんですつてね」

岡はその頃になつてやうやく自分を恢復したやうだつた。しどろもどろになつた考へや言葉も稍々整つて見えた。愛子は一度しげ〳〵と岡を見てしまつてからは、決して二度とはその方を向かずに、眼を疊の上に伏せてぢつと千里も離れた事でも考へてゐる樣子だつた。

「私の意氣地のないのが何よりもいけないんです。親類の者達は何んと云つても私を實業の方面に入れて父の事業を嗣がせようとするんです。それは多分本當にいゝ事なんでせう。けれども私には如何してもさう云ふ事が判らないから困ります。少しでも判れば、どうせこんなに病身で何も出來ませんから、母はじめ皆んなの云ふことと

を聴きたいんですけれども……私は時々乞食にでもなつて仕舞ひたいやうな氣がします。皆んなの主人思ひな眼で見つめられてゐると、私は皆んなに濟まなくなつて、何故自分見たいな屑な人間を惜しんでゐてくれるのだらうとよくさう思ひます……こんな事今まで誰にも云ひはしませんけれども。突然日本に歸つて來たりなぞしてから私は内々監視までされるやうになりました。……私のやうな家に生れると友達といふものは一人も出來ませんし、皆んなとは表面だけで物を云つてゐなければならないんですから……心が淋しくつて仕方がありません」

　さう云つて岡はすがるやうに葉子を見やつた。岡が少し震へを帶びた、汚れつ氣の塵ほどもない聲の調子を落してしんみりと物を云ふ樣子には自らな氣高い淋しみがあつた。戸障子をきしませながら雪を吹きまく戸外の荒荒しい自然の姿に比べては殊更それが目立つた。葉子には岡のやうな消極的な心持は少しも分らなかつた。然しあれでゐて、米國くんだりから乘つて行つた船で歸つて來る所なぞには、粘り強い意力が潛んでゐるやうにも思へた。平凡な青年なら出來ても出來なくとも周圍のものに煽てあげられゝば疑ひもせずに父の遺業を嗣ぐ眞似をして喜んでゐるだらう。それが如何しても出來ないと云ふ所にも何處か違つた所があるのではないか。葉子はさう思ふと何んの理解もなくこの青年を取り捲いて唯わい／＼騷ぎ立てゝゐる人達が馬鹿々々しくも見えた。それにしても何故もつとはき／＼とそんな下らない障碍位打ち破つてしまはないのだらう。自分ならその財産を使つてから、「かうすればいゝのかい」とでも云つて、圍りで世話を燒いた人間達を胸のすき切るまで思ひ存分笑つてやるのに。さう思ふと岡の煮え切らないやうな態度が歯がゆくもあつた。然し何んと云つても抱きしめたい程可憐なのは岡の纖美な淋しさうな姿だつた。岡は上手に入れられた甘露を啜り終つた茶碗を手の先きに据ゑて綿密にその作りを賞翫してゐた。

「御覺えになるやうなものぢや御座いません事よ」

岡は惡い事でもしてゐたやうに顏を赤くしてそれを下においた。彼はいゝ加減な世辭は云へないらしかつた。岡は始めて來た家に長居するのは失禮だと來た時から思つてゐて、機會ある每に座を立たうとするらしかつたが、葉子はさう云ふ岡の遠慮に感付けば感付く程巧みにも凡ての機會を岡に與へなかつた。

「もう少しお待ちになると雪が小降りになりますわ。今、こなひだ印度から來た紅茶を入れて見ますから召し上つて見て頂戴。普段いゝものを召し上りつけていらつしやるんだから、鑑定をしていたゞきますわ。一寸、……ほんの一寸待つていらしつて頂戴よ」

さう云ふ風にいつて岡を引き止めた。始めの間こそ倉地に對してのやうにはなつかなかつた貞世も段々と岡と口をきくやうになつて、仕舞には岡の穩やかな間に對して思ひのまゝを可愛らしく語つて聞かせたり、話題に窮して岡が默つてしまふと貞世の方から無邪氣な事を聞き糺して、岡をほゝゑましたりした。何んと云つても岡は美しい三人の姉妹が（その中愛子だけは他の二人とは全く違つた態度で）心を籠めて親しんで來るその好意には敵し兼ねて見えた。盛んに火を起した暖かい部屋の中の空氣にこもる若い女達の髮からとも、懷ろからとも、膚からとも知れぬ柔軟な香りだけでも去りがたい思ひをさせたに違ひなかつた。何時の間にか岡はすつかり腰を落ち付けて、云ひやうなく快く胸の中のわだかまりを一掃したやうに見えた。

それからと云ふもの、岡は美人屋敷と噂される葉子の隱れ家に折々出入りするやうになつた。倉地とも顏を合はせて、互に快く船の中での思ひ出し話などをした。岡の眼の上には葉子の眼が義眼されてゐた。葉子のよしと見るものは岡もよしと見た。葉子の憎むものは岡も無條件で憎んだ。唯一つその例外となつてゐるのは愛子といふものらしかつた。勿論葉子とて性格的には如何しても愛子と容れ合はなかつたが、骨肉の情として矢張り互に云ひやうのない執着を感じあつてゐた。然し岡は愛子に對しては心からの愛着を持ち出すやうになつてゐる事が

知れた。
兎に角岡の加はつた事が美人屋敷の彩りを多様にした。三人の姉妹は時折り倉地、岡に伴はれて苔香園の表門の方から三田の通りなどに散歩に出た。人々はそのきらびやかな群れに物好きな眼をかゞやかした。

三三

岡に住所を知らせてから、すぐそれが古藤に通じたと見えて、二月に這入つてからの木村の消息は、倉地の手を經ずに直接葉子にあてゝ古藤から廻送されるやうになつた。古藤は然し頑固にもその中に一言も自分の消息を封じ込んでよこすやうな事はしなかつた。古藤を近づかせる事は一面木村と葉子との關係を斷絶さす機會を早める恐れがないでもなかつたが、あの古藤の單純な心をうまく操りさへすれば、古藤を自分の方になづけてしまひ、從つて木村に不安を起させない方便になると思つた。葉子は例のいたづら心から古藤を手なづける興味をそゝられないでもなかつた。然しそれを實行に移すまでにその興味は嵩じては來なかつたのでそのまゝにしておいた。

木村の仕事は思ひの外都合よく運んで行くらしかつた。「日本に於ける未來のピーボデー」といふ標題に木村の肖像まで入れて、ハミルトン氏配下の敏腕家の一人として、又品性の高潔な公共心の厚い好箇の青年實業家として、やがては日本に於て、米國に於けるピーボデーと同樣の名聲を贏ち得べき約束にあるものと賞讃したシカゴ・トリビューンの「青年實業家評判記」の切り拔きなどを封入して來た。思ひの外巨額の爲替をちよい〱送つてよこして、倉地氏に支拂ふべき金額の全體を知らせてくれたら、どう工面しても必ず送附するから、一日も早く倉地氏の保護から獨立して世評の誤謬を實行的に訂正し、併せて自分に對する葉子の眞情を證明してほしいなどと云つてよこした。葉子は——倉地に溺れ切つてゐる葉子は鼻の先きでせゝら笑つた。

それに反して倉地の仕事の方はいつまでも目鼻がつかないらしかつた。倉地の云ふ所によれば日本だけの水先案內業者の組合と云つても、東洋の諸港や西部米國の沿岸にあるそれらの組合とも交渉をつけて連絡を取る必要があるのに、日本の移民問題が米國の西部諸州でやかましくなり、排日熱が過度に煽動され出したので、何事も米國人との交渉は思ふやうに行かずにその點で行きなやんでゐるとの事だつた。さう云へば米國人らしい外國人が屢々倉地の下宿に出入りするのを葉子は氣がついてゐた。或る時はそれが公使館の館員でゞもあるかと思ふやうな、禮裝をして見事な馬車に乘つた紳士である事もあり、或る時はズボンの折目もつけない程だらしの無い風をした人相のよくない男でもあつた。

兎に角二月に這入つてから倉地の樣子が少しづゝ荒んで來たらしいのが目立つやうになつた。酒の量も著しく增して來た。正井が噛みつくやうに怒鳴られてゐる事もあつた。然し葉子に對しては倉地は前にも勝つて溺愛の度を加へ、あらゆる愛情の證據を摑むまでは執拗に葉子を虐げるやうになつた。葉子は眼もくらむ火酒を煽りつけるやうにその虐げを喜んで迎へた。

或る夜葉子は妹達が就寢してから倉地の下宿を訪れた。倉地はたつた一人で淋しさうにソウダ・ビスケットを肴にウヰスキーを飲んでゐた。チャブ臺の周圍には書類や港灣の地圖やが亂暴に散らけてあつて、臺の上の虛のコップから察すると、正井か誰か、今客が歸つた所らしかつた。襖を明けて葉子の這入つて來たのを見ると倉地は毎時もになく一寸嶮しい眼付をして書類に眼をやつたが、そこにあるものを猿臂を延ばして引き寄せて忙はしく一まとめにして床の間に移すと、自分の隣りに座布團を敷いて、それに坐れと顎を突き出して合圖した。而して激しく手を鳴らした。

「コップと炭酸水を持つて來い」

用を聞きに來た女中にかう云ひ附けておいて、激しく葉子をまともに見た。

「葉ちやん（これはその頃倉地が葉子を呼ぶ名前だつた。妹達の前で葉子と呼び捨てにも出來ないので倉地は暫くの間お葉さん〳〵と呼んでゐたが葉子が、貞世を貞ちやんと呼ぶのから思ひついたと見えて、三人を葉ちやん、愛ちやん、貞ちやんと呼ぶやうになつた。而して差向ひの時にも葉子をさう呼ぶのだつた）は木村に貢がれてゐるな。白狀しつちまへ」

「それが如何して？」

葉子は左の片肘をちやぶ臺について、その指先きで鬢のほつれをかき上げながら、平氣な顏で正面から倉地を見返した。

「如何してがあるか。俺は赤の他人に俺の女を養はす程腑拔けではないんだ」

「まあ氣の小さい」

葉子はなほも動じなかつた。そこに婢が這入つて來たので話の腰が折られた。二人は暫く默つてゐた。

「俺はこれから竹柴へ行く。な、行かう」

「だつて明朝困りますわ。私が留守だと妹達が學校に行けないもの」

「一と筆書いて學校なんざあ休んで留守をしろと云つてやれい」

葉子は勿論一寸そんな事を云つて見たゞけだつた。妹達の學校に行つた後でも、苫香園の婆さんに言葉をかけておいて家を明ける事は常始終だつた。殊にその夜は木村の事について倉地に合點させておくのが必要だと思つたので、云ひ出された時から一緒する下心ではあつたのだ。葉子はそこにあつたペンを取り上げて紙切れに走り書きをした。倉地が急病になつたので介抱の爲めに今夜はこゝで泊る。明日の朝學校の時刻までに歸つて來なか

つたら、戸締りをして出懸けていゝ、さういふ意味を書いた。その間に倉地は手早く着代へをして、書類を大きな支那鞄に突つ込んで錠を下ろしてから、綿密に開くか開かないかを調べた。而して考へこむやうに俯向いて上眼をしながら、兩手を懷ろにさし込んで鍵を腹帶らしい所に仕舞ひ込んだ。

九時過ぎ十時近くなつてから二人は連れ立つて下宿を出た。増上寺前に來てから車を傭つた。滿月に近い月がもう大分寒空高くかう／＼とかゝつてゐた。

二人を迎へた竹柴館の女中は倉地を心得てゐて、すぐ庭先きに、離れになつてゐる二間ばかりの一軒に案內した。風はないけれども月の白さでひどく冷え込んだやうな晩だつた。葉子は足の先きが氷で包まれた程感覺を失つてゐるのを覺えた。倉地の浴した後で、熱目な鹽湯にゆつくり浸つたのでやうやく人心地がついて戻つて來た時には、素早い女中の働きで酒肴が調へられてゐた。葉子が倉地と遠出らしい事をしたのはこれが始めてなので、旅先きにゐるやうな氣分が妙に二人を親しみ合はせた。況してや座敷に續く芝生のはづれの石垣には海の波が來て靜かに音を立てゝゐた。空には月が冴えてゐた。妹達に取り捲かれたり、下宿人の眼をかねたりしてゐなければならなかつた二人は、くつろいだ姿と心とで火鉢に倚り添つた。世の中は二人きりのやうだつた。いつの間にか良人とばかり倉地を考へ慣れてしまつた葉子は、こゝに再び情人を見出したやうに思つた。而して何とはなく倉地をぢらしてぢらしてぢらし拔いた揚句に、その反動から來る蜜のやうな歡語を思ひ切り味ひたい衝動に驅られてゐた。而してそれが又倉地の要求でもある事を本能的に感じてゐた。

「いゝわねえ。何故もつと早くこんな所に來なかつたでせう。すつかり苦勞も何も忘れてしまひましたわ」

葉子はすべ／＼とほてつて少しこはばるやうな頰を撫でながら、とろけるやうに倉地を見た。もう大分酒の氣のまはつた倉地は、女の肉感をそゝり立てるやうな匂ひを部屋中に撒き散らす葉卷をふかしながら、葉子を尻目

にかけた。
「それは結構。だが俺にはさつきの話が喉につかへて殘つとるて。胸糞が惡いぞ」
葉子は呆れたやうに倉地を見た。
「木村の事？」
「お前は俺の金を心任せに使ふ氣にはなれないんか」
「足りませんもの」
「足りなきや何故云はん」
「云はなくつたつて木村がよこすんだからいゝぢやありませんか」
「馬鹿！」
倉地は右の肩を小山のやうに聳かして、上體を斜に構へながら葉子を睨みつけた。葉子はその眼の前で、海から出る夏の月のやうに微笑んで見せた。
「木村は葉ちやんに惚れとるんだよ」
「而して葉ちやんは嫌つてるんですわね」
「冗談は措いてくれ……俺や眞劍で云つとるんだ。俺達は木村に用はない筈だ。俺は用のないものは片つ端から捨てるのが立て前だ。嚊だらうが子だらうが……見ろ俺を……よく見ろ。お前はまだこの俺を疑ぐつとるんだな。後釜には木村を何時でもなほせるやうに喰ひ殘しをしとるんだな」
「そんな事はありませんわ」
「では何んで手紙の遣り取りなどし居るんだ」

「お金が欲しいからなの」

葉子は平氣な顏をして又話をあとに戻した。さうして獨酌で杯を傾けた。倉地は少し吃る程怒りが募つてゐた。

「それが惡いと云つとるのが解らないか……俺の面に泥を塗りこくつとる……こつちに來い（さう云ひながら倉地は葉子の手を取つて自分の膝の上に葉子の上體をたくし込んだ）。云へ、隱さずに。今になつて木村に未練が出て來をつたんだらう。女と云ふはさうしたもんだ。木村に行きたくば行け、今行け。俺のやうなやくざを構つとると芽は出やせんから。……お前には太て腐れがいつちよく似合つとるよ……但し俺をだましにかゝると見當違ひだぞ」

さう云ひながら倉地は葉子を突つ放すやうにした。葉子はそれでも少しも平靜を失つてはゐなかつた。あでやかに微笑みながら、

「あなたもあんまり分らない……」

と云ひながら今度は葉子の方から倉地の膝に後向きに凭れかゝつた。倉地はそれを退けようとはしなかつた。

「何が分らんかい」

暫くしてから、倉地は葉子の肩越しに杯を取り上げながらかう尋ねた。葉子には返事がなかつた。又暫くの沈默の時間が過ぎた。倉地がもう一度何か云はうとした時、葉子は何時の間にかしく〳〵と泣いてゐた。倉地はこの不意打ちに思はずはつとしたやうだつた。

「何故木村から送らせるのが惡いんです」

葉子は涙を氣取らせまいとするやうに、然し打ち沈んだ調子でかう云ひ出した。

「あなたの御樣子でお心持が讀めない私だとお思ひになつて？　私故に會社をお引きになつてから、どれ程暮し

向きに苦しんでいらつしやるか……その位は馬鹿でも私にはちやんと響いてゐます。それでもしみつたれた事をするのはあなたもお嫌ひ、私も嫌ひ……私は思ふやうにお金をつかつてはゐました。ゐましたけれども……心では泣いてたんです。あなたの爲めならどんな事でも喜んでしよう……さうこの頃思つたんです。それから木村にとう／＼手紙を書きました。私が木村を何んと思つてるか、今更そんな事をお疑ひになるのあなたは。そんな水臭い廻はし氣をなさるからつひ口惜しくなつちまひます。……そんな私だか私ではないか……（そこで葉子は倉地から離れてきちんと坐り直して袂で顔を被うてしまつた）泥棒をしろと仰有る方がまだ増しです……あなたお一人でくよ／＼なさつて……お金の出所を……暮し向きが張り過ぎるなら張り過ぎると……何故相談に乘らせては下さらないの……矢張りあなたは私を親身には思つていらつしやらないのね……」

倉地は一度は眼を張つて驚いたやうだつたが、やがて事もなげに笑ひ出した。

「そんな事を思つとつたのか。馬鹿だなあお前は。御好意は感謝します……全く。然しなんぼ痩せても枯れても、俺は女の子の二人や三人養ふに事は缺かんよ。男に三百や四百の金が手廻らんやうなら首をくゝつて死んで見せる。お前をまで相談に乘せるやうな事はいらんのだよ。そんな蔭にまはつた心配事はせん事にせうや。この呑氣坊の俺までがいらん氣を揉ませられるで……」

「そりや虚言です」

葉子は顔を被うたまゝきつぱりと矢繼早に云ひ放つた。倉地は默つてしまつた。葉子もそのまゝ暫くは何んとも云ひ出でなかつた。

母屋の方で十二を打つ柱時計の聲が幽かに聞こえて來た。寒さもしん／＼と募つてゐたには相違なかつた。然し葉子はその何れをも心の戸の中までは感じなかつた。始めは一種の企らみから狂言でもするやうな氣でかゝつ

たのだつたけれども、かうなると葉子は何時の間にか自分で自分の情に溺れてしまつてゐた。木村を犧牲にしてまでも倉地に溺れ込んで行く自分が憐れまれもした。倉地が費用の出所をつひぞ打ち明けて相談してくれないのが恨みがましく思はれもした。知らず識らずの中にどれ程葉子は倉地に喰ひ込み、倉地に喰ひ込まれてゐたかをしみ〴〵と今更に思ひ知つた。如何ならうと如何あらうと倉地から離れる事はもう出來ない。倉地から離れる位なら自分は屹度死んで見せる。倉地の胸に齒を立てゝその心臟を嚙み破つてしまひたいやうな狂暴な執念が葉子を底知れぬ悲しみへ誘ひ込んだ。

心の不思議な作用として倉地も葉子の心持は刺靑をされるやうに自分の胸に感じて行くらしかつた。稍ゝ程經つてから倉地は無感情のやうな鈍い聲で云ひ出した。

「全くは俺が惡かつたのかも知れない。一時は全く金には弱り込んだ。然し俺は早や世の中の底潮にもぐり込んだ人間だと思ふと度胸が据つてしまひ居つた。毒も皿も喰つてくれよう、さう思つて（倉地はあたりを憚るやうに更に聲を落した）やり出した仕事があの組合の事よ。水先案內の奴等は委しい海圖を自分で作つて持つとる。要塞地の樣子も玄人以上だ。それを集めにかゝつて見た。思ふやうには行かんが、食ふだけの金は餘る程出る」

葉子は思はずぎよつとして氣息がつまつた。近頃怪しげな外國人が倉地の所に出入りするのも心當りになつた。捨鉢な不敵さと力とが漲つて見えた。

倉地は葉子が倉地の言葉を理解して驚いた樣子を見ると、ほと〳〵惡魔のやうな顏をしてにやりと笑つた。

「愛想が盡きたか……」

愛想が盡きた。葉子は自分自身に愛想が盡きようとしてゐた。葉子は自分の乘つた船は毎時でも相客諸共に轉覆して沈んで底知れぬ泥土の中に深々と潛り込んで行く事を知つた。賣國奴、國賊、――或はさう云ふ名が倉地

の名に加へられるかも知れない……と思つたゞけで葉子は怖毛を振つて、倉地から飛び退かうとする衝動を感じた。ぎよつとした瞬間に唯瞬間だけ感じた。次に如何かしてそんな恐ろしいはめから倉地を救ひ出さなければならないと云ふ殊勝な心にもなつた。然し最後に落ち付いたのは、その深みに倉地を殊更突き落して見たい悪魔的な誘惑だつた。それ程までの葉子に對する倉地の心盡しを、臆病な驚きと躊躇とで迎へる事によつて、倉地に自分の心持の不徹底なのを見下げられはしないかと云ふ危惧よりも、倉地が自分の爲めにどれ程の墮落でも汚辱でも甘んじて犯すか、それをさせて見て、滿足しても滿足しても滿足し切らない自分の心の不足を滿たしたかつた。そこまで倉地を突き落すことは、それだけ二人の執着を强める事だとも思つた。葉子は何事を犧牲に供しても灼熱した二人の間の執着を續けるばかりでなく更に强める術を見出さうとした。倉地の告白を聞いて驚いた次ぎの瞬間には、葉子は意識こそせね、これだけの心持に働かれてゐた。「そんな事で愛想が盡きてたまるものか」と鼻であしらふやうな心持に素早くも自分を落ち付けてしまつた。驚きの表情はすぐ葉子の顏から消えて、妖婦にのみ見る極端に肉的な蠱惑の微笑がそれに代つて浮み出した。

「一寸驚かされはしましたわ。……いゝわ、私だつて何んでもしますわ」

倉地は葉子が不言不語の中に感激してゐるのを感得してゐた。

「よしそれで話は分つた。木村……木村からも搾り上げろ、構ふものかい。人間並みに見られない俺達が人間並みに振舞つてゐてたまるかい。葉ちやん……命」

「命！……命!!　命!!!」

葉子は自分の激しい言葉に眼もくるめくやうな醉ひを覺えながら、あらん限りの力を籠めて倉地を引き寄せた。膳の上のものが音を立てゝ覆るのを聞いたやうだつたが、その後は色も音もない焰の天地だつた。すさまじく燒

け爛れた肉の欲念が、葉子の心を全く暗ましてしまつた。天國か地獄かそれは知らない。然かも何もかも微塵につき摧いて、びり〳〵と震動する炎々たる焰に燃やし上げたこの有頂天の歡樂の外に世に何者があらう。葉子は倉地を引き寄せた。倉地に於て今まで自分から離れてゐた葉子自身を引き寄せた。而して切るやうな痛みと、痛みからのみ來る奇怪な快感とを自分自身に感じて陶然と醉ひしれながら、倉地の二の腕に齒を立てゝ、思ひ切り彈力性に富んだ熱したその肉を嚙んだ。

その翌日十一時過ぎに葉子は地の底から掘り起されたやうに地球の上に眼を開いた。倉地はまだ死んだもの同然にいぎたなく眠つてゐた。戶板の杉の赤みが鰹節の心のやうに半透明に眞赤に光つてゐるので、日が高いのも天氣が美しく晴れてゐるのも察せられた。甘酸ぱく立ち罩つた酒と煙草の餘燻の中に、隙間漏る光線が、透明に輝く飴色の板となつて縱に薄暗さの中を區切つてゐた。いつもならば眞赤に充血して、精力に充ち滿ちて、眠りながら働いてゐるやうに見える倉地も、その朝は眼の周圍に死色をさへ注してゐた。むき出しにした腕には靑筋が病的と思はれる程高く飛び出て這ひずつてゐた。泳ぎ廻る者でもゐるやうに頭の中がぐら〳〵する葉子には、殺人者が兇行から眼覺めて行つた時のやうな底の知れない氣味惡さが感ぜられた。葉子は密やかにその部屋を拔け出して戶外に出た。

降るやうな眞晝の光線に遇ふと、兩眼は腦心の方に遮二無二引きつけられて堪らない痛さを感じた。乾いた空氣は氣息をとめる程喉を干からばした。葉子は思はずよろけて入口の下見板に寄りかゝつて、打撲を避けるやうに兩手で顏を隱して俯向いてしまつた。

軈て葉子は人を避けながら芝生の先きの海際に出て見た。滿月に近い頃の事とて潮は遠く退いてゐた。蘆の枯葉が日を浴びて立つ沮洳地のやうな平地が眼の前に擴がつてゐた。然し自然は少しも昔の姿を變へてはゐなかつ

た。自然も人も昨日のまゝの營みをしてゐた。葉子は不思議なものを見せつけられたやうに茫然として潮干潟の泥を見、鱗雲で飾られた靑空を仰いだ。昨夜の事が眞實ならこの景色は夢であらねばならぬ。この景色が眞實なら昨夜の事は夢であらねばならぬ。二つが兩立しよう筈はない。……葉子は茫然としてなほ眼に這入つて來るものを眺め續けた。

痲痺し切つたやうな葉子の感覺は段々恢復して來た。それと共に瞑眩を感ずる程の頭痛を先づ覺えた。次いで後腰部に鈍重な疼みがむく〳〵と頭を擡げるのを覺えた。肩は石のやうに凝つてゐた。足は氷のやうに冷えてゐた。

昨夜の事は夢ではなかつたのだ……而して今見るこの景色も夢ではあり得ない……それは餘りに殘酷だ、殘酷だ。何故昨夜を界にして、世の中は加留多を裏返したやうに變つてゐてはくれなかつたのだ。

この景色の何處に自分は身を措く事が出來よう。葉子は痛切に自分が落ち込んで行つた深淵の深みを知つた。而してそこにしやがんでしまつて、苦い淚を泣き始めた。

懺悔の門の堅く閉された暗い道がたゞ一筋、葉子の心の眼には行く手に見やられるばかりだつた。

三四

兎も角も一家の主となり、妹達を呼び迎へて、その敎育に興味と責任とを持ち始めた葉子は、自然々々に妻らしく又母らしい本能に立ち返つて、倉地に對する情念にも何處か肉から精神に移らうとする傾きが出來て來るのを感じた。それは樂しい無事とも考へれば考へられぬ事はなかつた。然し葉子は明かに倉地の心がさう云ふ狀態の下には少しづゝ硬ばつて行き冷えて行くのを感ぜずにはゐられなかつた。それが葉子には何よりも不滿だつた。

倉地を選んだ葉子であつて見れば、日が經つに從つて葉子にも倉地が感じ始めたと同樣な物足らなさが感ぜられて行つた。落ち付くのか冷えるのか、兎に角倉地の感情が白熱して働かないのを見せつけられる瞬間は深い淋しみを誘ひ起した。こんな事で自分の全我を投げ入れた戀の花を散つてしまはせてなるものか。自分の戀には絕頂があつてはならない。自分にはまだどんな難路でも舞ひ狂ひながら登つて行く熱と力とがある。その熱と力とが續く限り、ぼんやり腰を据ゑて周圍の平凡な景色などを眺めて滿足してはゐられない。自分の眼には絕巓のない絕巓ばかりが見えてゐたい。さうした衝動は小休みなく葉子の胸に蟠つてゐた。繪島丸の船室で倉地が見せてくれたやうな、何もかも無視した、神のやうに狂暴な熱心――それを繰り返して行きたかつた。

竹柴館の一夜は正しくそれだつた。その夜葉子は、次の朝になつて自分が死んで見出されようとも滿足だと思つた。然し次の朝生きたまゝで眼を開くと、その場で死ぬ心持にはもうなれなかつた。もつと嵩じた懽樂を追ひ試みようといふ欲念、而してそれが出來さうな期待が葉子を未練にした。それからと云ふもの葉子は忘我渾沌の懽喜に浸る爲めには、凡てを犧牲としても惜しまない心になつてゐた。而して倉地と葉子とは互々を樂しませ而して牽き寄せる爲めにあらん限りの手段を試みた。葉子は自分の不可犯性（女が男に對して持つ一番强大な蠱惑物）の總てまで惜しみなく投げ出して、自分を倉地の眼に娼婦以下のものに見せるとも悔いようとはしなくなつた。二人は、傍眼には酸鼻だとさへ思はせるやうな肉慾の腐敗の末遠く、互に淫樂の實を互々から奪ひ合ひながらずる／＼と壞れこんで行くのだつた。

然し倉地は知らず、葉子に取つてはこの忌はしい腐敗の中にも一縷の期待が潛んでゐた。一度ぎゆつと摑み得たらもう動かない或る物がその中に橫はつてゐるに違ひない、さう云ふ期待を心の隅から拭ひ去る事が出來なかつたのだつた。それは倉地が葉子の蠱惑に全く迷はされてしまつて再び自分を恢復し得ない時期があるだらうと

いふそれだつた。戀をしかけたものゝひけめとして葉子は今まで、自分が倉地を愛する程倉地が自分を愛してはゐないとばかり思つた。それが何時でも葉子の心を不安にし、自分といふものゝ居据り所までぐらつかせた。如何かして倉地を痴呆のやうにしてしまひたい。葉子はそれが爲めにはある限りの手段を取つて悔いなかつたのだ。妻子を離縁させても、社會的に死なしてしまつても、まだ〳〵物足らなかつた。竹柴館の夜に葉子は倉地を極印附きの兇状持ちにまでした事を知つた。外界から切り離されるだけそれだけ倉地が自分の手に落ちるやうに思つてゐた葉子はそれを知つて有頂天になつた。而して倉地が忍ばねばならぬ屈辱を埋め合せる爲めに葉子は倉地が欲すると思はしい激しい情慾を提供しようとしたのだ。而してさうする事によつて、葉子自身が結局自己を銷盡して倉地の興味から離れつゝある事には氣附かなかつたのだ。

兎にも角にも二人の關係は竹柴館の一夜から面目を改めた。葉子は再び妻から情熱の若々しい情人になつて見えた。さう云ふ心の變化が葉子の肉體に及ぼす變化は驚くばかりだつた。葉子は急に三つも四つも若やいだ。二十六の春を迎へた葉子はその頃の女としてはそろ〳〵老いの徵候をも見せる筈なのに、葉子は一つだけ年を若く取つたやうだつた。

或る天氣のいゝ午後——それは梅の蕾がもう少しづゝふくらみかゝつた午後の事だつたが——葉子が緣側に倉地の肩に手をかけて立ち並びながら、うつとりと上氣して雀の交るのを見てゐた時、玄關に訪れた人の氣配がした。

「誰でせう」

倉地は物惰さゝうに、

「岡だらう」

と云つた。

「いゝえ屹度正井さんよ」

「なあに岡だ」

「ぢや賭けよ」

葉子は丸で少女のやうに甘つたれた口調で云つて玄關に出て見た。倉地が云つたやうに岡だつた。葉子は挨拶も碌々しないでいきなり岡の手をしつかりと取つた。而して小さな聲で、

「よく入らしつてね。その間着のよくお似合ひになる事。春らしいいゝ色地ですわ。今倉地と賭けをしてゐたところ。早くお上り遊ばせ」

葉子は倉地にしてゐたやうに岡のやさ肩に手を廻してならびながら座敷に這入つて來た。

「矢張りあなたの勝ちよ。あなたはあて事がお上手だから岡さんを讓つて上げたらうまく中つたわ。今御褒美を上げるからそこで見ていらつしやいよ」

さう倉地に云ふかと思ふと、いきなり岡を抱きすくめてその頰に強い接吻を與へた。岡は少女のやうに恥ぢらつて強ひて葉子から離れようと藻搔いた。倉地は例の澁いやうに口許をねぢつて微笑みながら、

「馬鹿！……この頃この女は少しどうかしとりますよ。岡さん、あなた一つ背中でもどやしてやつて下さい。……まだ勉強か」

と云ひながら葉子に天井を指して見せた。葉子は岡に背中を向けて「さあどやして頂戴」と云ひながら、今度は天井を向いて、

「愛さん、貞ちやん、岡さんが入らしつてよ。お勉強が濟んだら早く下りてお出で」

と澄んだ美しい聲で蓮葉に叫んだ。

「さうお」

と云ふ聲がしてすぐ貞世が飛んで下りて來た。

「貞ちやんは今勉强が濟んだのか」

と倉地が聞くと、貞世は平氣な顏で、

「えゝ今濟んでよ」

と云つた。そこにはすぐ華やかな笑ひが破裂した。愛子は中々下に降りて來ようとはしなかつた。それでも三人は親しくちやぶ臺を圍んで茶を飲んだ。その日岡は特別に何か云ひ出したさうにしてゐる樣子だつたが。やがて、

「今日は私少しお願ひがあるんですが、皆樣聽いて下さるでせうか」

重苦しく云ひ出した。

「えゝ〳〵あなたの仰有る事なら何んでも……ねえ貞ちやん（とこゝまでは冗談らしく云つたが急に眞面目になつて）……何んでも仰有つて下さいましな、そんな他人行儀をして下さると變ですわ」

と葉子が云つた。

「倉地さんもゐて下さるので却つて云ひよいと思ひますが、古藤さんをこゝにお連れしちやいけないでせうか。……木村さんから古藤さんの事は前から伺つてゐたんですが、私は始めてのお方に會ひするのが何んだか億劫な質なもので、二つ前の日曜日までとう〳〵お手紙も上げないでゐたら、その日突然古藤さんの方から尋ねて來て下さつたんです。古藤さんも一度お尋ねしなければいけないんだがと云つてゐなさいました。で私、今日は水曜日

だから、用便外出の日だから、これから迎へに行つて來たいと思ふんです。いけないでせうか」
葉子は倉地だけに顔が見えるやうに向き直つて「自分に任せろ」と云ふ眼付をしながら、
「いゝわね」
と念を押した。倉地は祕密を傳へる人のやうに顔色だけで「よし」と答へた。葉子はくるりと岡の方に向き直つた。
「よう御座いますとも（葉子はそのようにアクセントを附けた）あなたにお迎ひに行つて頂いてはほんとに濟みませんけれども、さうして下さると本當に結構。貞ちやんもいゝでせう。又もう一人お友達が增えて……而かも珍らしい兵隊さんのお友達……」
「愛姉さんが岡さんに連れていらつしやいつてこの間さう云つたのよ」
と貞世は遠慮なく云つた。
「さう／＼愛子さんもさう仰有つてゞしたね」
と岡は何處までも上品な叮嚀な言葉で事の序でのやうに云つた。
岡が家を出ると暫くして倉地も座を立つた。
「いゝでせう。うまくやつて見せるわ。却つて出入りさせる方がいゝわ」
玄關に送り出してさう葉子は云つた。
「どうかな彼奴、古藤の奴は少し骨張り過ぎてる……が惡かつたら元々だ……兎に角今日俺のゐない方がよからう」
さう云つて倉地は出て行つた。葉子は張り出しになつてゐる六疊の部屋を綺麗に片付けて、火鉢の中に香を焚き

こめて、心靜かに目論見をめぐらしながら古藤の來るのを待つた。暫く會はない中に古藤は大分手硬くなつてゐるやうにも思へた。そこを自分の才力で丸めるのが時に取つての興味のやうにも思へた。若し古藤を軟化すれば、木村との關係は今よりも繫ぎがよくなる……。

三十分程たつた頃一ツ木の兵營から古藤は岡に伴はれてやつて來た。葉子は六疊にゐて、貞世を取次ぎに出した。

「貞世さんだね。大きくなつたね」

丸で前の古藤の聲とは思はれぬやうな大人びた黑ずんだ聲がして、がちや〳〵と佩劍を取るらしい音も聞こえた。やがて岡の先きに立つて恰好の惡い汚ない黑の軍服を着た古藤が、皮類の腐つたやうな香ひをぷん〳〵させながら葉子のゐる所に這入つて來た。

葉子は他意なく好意を籠めた眼付で、少女のやうに晴れやかに驚きながら古藤を見た。

「まあこれが古藤さん？　何んて怖い方になつてお仕舞ひなすつたんでせう。元の古藤さんはお額のお白い所だけにしか殘つちやゐませんわ。がみ〳〵と叱つたりなすつちやいやです事よ。本當に暫く。もう金輪際來ては下さらないものと諦めてゐましたのに、よく……よく入らしつて下さいました。岡さんのお手柄ですわ……難有う御座いました」

と云つて葉子はそこに併んで坐つた二人の青年をかたみ代りに見やりながら輕く挨拶した。

「さぞお辛いでせうねえ。お湯は？　お召しにならない？　丁度沸いてゐますわ」

「大分臭くつてお氣の毒ですが、一度や二度湯につかつたつてなほりはしませんから……まあ這入りません」

古藤は這入つて來た時のしかつめらしい樣子に引きかへて顏色を軟らがせられてゐた。葉子は心の中で相變ら

ずの Simpleton だと思つた。

「さうねえ何時まで門限は？……え、六時？　それぢやもういくらもありませんわね。ぢやお湯はよしていたゞいてお話の方をたんとしませうねえ。いかゞ軍隊生活は、お氣に入つて？」

「這入らなかつた前以上に嫌ひになりました」

「岡さんは如何なさつたの」

「私まだ猶豫中ですが檢査を受けたつて屹度駄目です。不合格のやうな健康を持つと、私軍隊生活の出來るやうな人が羨ましくつてなりません。……體でも強くなつたら私、もう少し心も強くなるんでせうけれども……」

「そんな事はありませんねえ」

古藤は自分の經驗から岡を說伏するやうにさう云つた。

「僕もその一人だが、鬼のやうな體格を持つてゐて、女のやうな弱蟲が隊にゐて見ると澤山ゐますよ。僕はこんな心でこんな體格を持つてゐるのが先天的の二重生活を强ひられるやうで苦しいんです。これからも僕はこの矛盾の爲めに屹度苦しむに違ひない」

「何んですねお二人とも、妙な所で謙遜のしつこをなさるのね。岡さんだつてさうお弱くはないし、古藤さんと來たらそれは意志堅固……」

「さうなら僕は今日もこゝなんかには來やしません。木村君にも疾に決心をさせてゐる筈なんです」

葉子の言葉を中途から奪つて、古藤はしたゝか自分自身を鞭うつやうに激しくから云つた。葉子は何もかも解つてゐる癖にしらを切つて不思議さうな顏付をして見せた。

「さうだ、思ひ切つて云ふだけの事は云つてしまひませう。…　岡君立たないで下さい。君がゐて下さると却つ

ていゝんです」

　さう云つて古藤は葉子を暫く熟視してから云ひ出す事を纏めようとするやうに下を向いた。岡も一寸形を改めて葉子の方を窃み見るやうにした。葉子は眉一つ動かさなかつた。そして側にゐる貞世に耳うちして、愛子を手傳つて五時に夕食の食べられる用意をするやうに、而して三緣亭から三皿程の料理を取り寄せるやうに云ひつけて座を外さした。古藤は躍るやうにして部屋を出て行く貞世をそつと眼のはづれで見送つてゐたが、やがて徐ろに顏を擧げた。日に燒けた顏が更に赤くなつてゐた。

「僕はね……(さう云つておいて古藤は又考へた)……あなたが、そんな事はないとあなたは云ふでせうが、あなたが倉地と云ふその事務長の人の奥さんになれると云ふのなら、それが惡いつて思つてる譯ぢやないんです。そんな事があるとすりや、そりや仕方のない事なんだ。……而してゞすね、僕にもそりや解るやうです。……解るつて云ふのは、あなたがさうなればなりさうな事だと、それが解るつて云ふんです。然しそれならそれでいゝから、それを木村にはつきりと云つてやつて下さい。そこなんだ僕の云はむとするのは。あなたは怒るかも知れませんが、僕は木村に幾度も葉子さんとはもう緣を切れつて勸告しました。これまで僕があなたに默つてそんな事をしてゐたのは惡かつたからお斷りをします(さう云つて古藤は一寸誠實に頭を下げた。葉子も默つたまゝ眞面目に合點いて見せた)。けれども木村からの返事は、それに對する返事はいつでも同一なんです。葉子から破約の事を申出て來るか、倉地といふ人との結婚を申出て來るまでは、自分は誰の言葉よりも葉子の言葉と心とに信用をおく。親友であつてもこの問題に就いては、君の勸告だけでは心は動かない。かうなんです。木村つてのはそんな男なんですよ(古藤の言葉は一寸曇つたがすぐ元のやうになつた)。それをあなたは默つておくのは少し變だと思ひます」

「それで……」
葉子は少し座を乘り出して古藤を勵ますやうに言葉を續けさせた。
「木村からは前からあなたの所に行つてよく事情を見てやつてくれ、病氣の事も心配でならないからと云つて來てはゐるんですが、僕は自分ながら如何しようもない妙な潔癖があるもんだからつひ伺ひおくれてしまつたのです。成程あなたは先よりは痩せましたね。而して顏の色もよくありませんね」
さう云ひながら古藤はぢつと葉子の顏を見やつた。葉子は姉のやうに一段の高みから古藤の眼を迎へて鷹揚に微笑んでゐた。云ふだけ云はせて見よう、さう思つて今度は岡の方に眼をやつた。
「岡さん。あなた今古藤さんの仰有る事をすつかりお聞きになつてゐて下さいましたわね。あなたはこの頃失禮ながら家族の一人のやうにこちらに遊びにお出で下さるんですが、私を如何お思ひになつていらつしやるか、御遠慮なく古藤さんにお話しなすつて下さいましな。決して御遠慮なく……私どんな事を伺つても決して〳〵何んとも思ひは致しませんから」
それを聞くと岡はひどく當惑して顏を眞赤にして處女のやうに羞恥かんだ。古藤の側に岡を置いて見るのは、青銅の花瓶の側に咲きかけの櫻を置いて見るやうだつた。葉子はふと心に浮んだその對比を自分ながら面白いと思つた。そんな餘裕を葉子は失はないでゐた。
「私から云ふ事柄には物を云ふ力はないやうに思ひますから……」
「さう云はないで本當に思つた事を云つて見て下さい。僕は一徹ですからひどい思ひ間違ひをしてゐないとも限りませんから。どうか聞かして下さい」
さう云つて古藤も肩章越しに岡を顧みた。

「本當に何も云ふ事はないんですけれども……木村さんには私口に云へない程御同情してゐます。木村さんのやうないゝ方が今頃どんなに獨りで淋しく思つて居られるかと思ひやつたゞけで、私淋しくなつてしまひます。けれども世の中には色々な運命があるのではないでせうか。而して銘々は默つてそれを耐へて行くより仕方がないやうに私思ひます。そこで無理をしようとすると凡ての事が惡くなるばかり……それは私だけの考へですけれども。私さう考へないと一刻も生きてゐられないやうな氣がしてなりません。葉子さんと木村さんと倉地さんとの關係は私少しは知つてるやうにも思ひますけれども、よく考へて見ると却つてちつとも知らないのかも知れませんねえ。私は自分自身が少しも解らないんですからお三人の事なども、分らない自分の、分らない想像だけの事だと思ひたいんです。……古藤さんにはそこまではお話しませんでしたけれども、私自分の家の事情が大變苦しいので心を打ち開けるやうな人を持つてゐませんでしたが……、殊に母とか姉妹とか云ふ女の人に……葉子さんにお目にかゝつたら、何んでもなくそれが出來たんです。それで私は嬉しかつたんです。而して葉子さんが木村さんと如何しても氣がお合ひにならない、その事も失禮ですけれども今の所では私想像が違つてゐないやうにも思ひます。けれどもその外の事は私何んとも自信を以て云ふ事が出來ません。そんな所まで他人が想像をしたり口を出したりしていゝものか如何かも私判りません。大變獨善的に聞こえるかも知れませんが、そんな氣はなく、運命に出來るだけ從順にしてゐたいと思ふと、私進んで物を云つたりしたりするのが恐ろしいと思ひます。……何んだか少しも役に立たない事を云つてしまひまして……私矢張り力がありませんから、何も云はなかつた方がよかつたんですけれども……」

　さう絶え入るやうに聲を細めて岡は言葉を結ばぬ中に口をつぐんでしまつた。その後には沈默だけがふさはしいやうに口をつぐんでしまつた。

實際その後には不思議な程しめやかな沈默が續いた。たき込めた香の香ひがかすかに動くだけだつた。

「あんなに謙遜な岡君も（岡は慌てゝその讃辭らしい古藤の言葉を打ち消さうとしさうにしたが、古藤がどんどん言葉を續けるのでそのまゝ顏を赤くして默つてしまつた）あなたと木村とが如何しても折り合はない事だけは少くとも認めてゐるんです。さうでせう」

葉子は美しい沈默をがさつな手でかき亂された不快をかすかに物足らなく思ふらしい表情をして、

「それは洋行する前、いつぞや横濱に一緒に行つていたゞいた時委しくお話したぢやありませんか。それは私誰方にでも申上げてゐた事ですわ」

「そんなら何故……その時は木村の外には保護者はゐなかつたから、あなたとしてはお妹さん達を育てゝ行く上にも自分を犧牲にして木村に行く氣でお出でだつたかも知れませんが何故……何故今になつても木村との關係をそのまゝにしておく必要があるんです」

岡は激しい言葉で自分が責められるかのやうにはら〳〵しながら首を下げたり、葉子と古藤の顏とをかたみがはに見やつたりしてゐたが、とう〳〵居たゝまれなくなつたと見えて、靜かに座を立つて人のゐない二階の方に行つてしまつた。葉子は岡の心持を思ひやつて引き止めなかつたし、古藤は、ゐて貰つた處が何んの役にも立たないと思つたらしく、これも引き止めはしなかつた。挿す花もない青銅の花瓶一つ……葉子は心の中で皮肉に微笑んだ。

「それより先きに伺はして頂戴な、倉地さんはどの位の程度で私達を保護していらつしやるか御存じ？」

古藤はすぐぐつと詰まつてしまつた。然しすぐ盛り返して來た。

「僕は岡君と違つてブルヂョアの家に生れなかつたのですから、デリカシーと云ふやうな美德を餘り澤山持つて

ゐないやうだから、失禮な事を云つたら許して下さい。倉地つて人は妻子まで離緣した……而かも非常に貞節らしい奥さんまで離緣したと新聞に出てゐました」

「さうね新聞には出てゐましたわね。……よう御座いますわ、假りにさうだとしたらそれが何か私と關係のある事だとでも仰有るの」

さう云ひながら葉子は少し氣に障へたらしく、炭取りを引き寄せて火鉢に火をつぎ足した。櫻炭の火花が激しく飛んで二人の間に彈けた。

「まあひどいこの炭は、水をかけずに持つて來たと見えるのね。女ばかりの世帶だと思つて出入りの御用聞きまで人を馬鹿にするんですのよ」

葉子はさう云ひ〳〵眉をひそめた。古藤は胸をつかれたやうだつた。

「僕は亂暴なもんだから……云ひ過ぎがあつたら本當に許して下さい。僕は實際如何に親友だからと云つて木村ばかりをいゝやうにと思つてる譯ぢやないんですけれども、全くあの境遇には同情してしまふもんだから……僕はあなたも自分の立場さへはつきり云つて下さればあなたの立場も理解が出來ると思ふんだけれどもなあ。……僕は餘り直線的過ぎるんでせうか。僕は世の中を sun-clear に見たいと思ひますよ。出來ないもんでせうか」

葉子は撫でるやうな好意のほゝゑみを見せた。

「あなたが私本當に羨しう御座んすわ。平和な家庭にお育ちになつて素直に何んでも御覽になれるのは難有い事なんですわ。そんな方ばかりが世の中にいらつしやると面倒がなくなつてそれはいゝんですけれども、岡さんなんかはそれから見ると本當にお氣の毒なんですの。私見たいなものをさへあゝして賴りにしていらつしやるのを見るといぢらしくつて今日は倉地さんの見てゐる前でキスして上げつちまつたの。……他人事ぢやありませんわ

ね(葉子の顏はすぐ曇つた)。あなたと同樣はき〳〵した事の好きな私がこんなに意地をこぢらしたり、人の氣をかねたり、好んで誤解を買つて出たりするやうになつてしまつた、それを考へて御覽になつて頂戴。あなたには今はお分りにならないかも知れませんけれども……それにしてももう五時。愛子に手料理を作らせておきましたから久振りで妹達にも會つてやつて下さいまし、ね、いゝでせう」

古藤は急に固くなつた。

「僕は歸ります。僕は木村にはつきりした報告も出來ない中に、こちらで御飯をいたゞいたりするのは何んだか氣が尤めます。葉子さん頼みます、木村を救つて下さい。而してあなた自身を救つて下さい。僕は本當を云ふと遠くに離れてあなたを見てゐると如何しても嫌ひになつちまうんですが、かうやつてお話してゐると失禮な事を云つたり自分で怒つたりしながらも、あなたは自分でもあざむけないやうなものを持つて居られるのを感ずるやうに思ふんです。境遇が惡いんだ屹度。僕は一生が大事だと思ひますよ。來世があらうが過去世があらうがこの一生が大事だと思ひますよ。生き甲斐があつたと思ふやうに生きて行きたいと思ひますよ。轉んだつて倒れたつてそんな事を世間のやうに彼是れくよ〳〵せずに、轉んだら立つて、倒れたら起き上つて行きたいと思ひます。僕は少し人並み外れて馬鹿のやうだけれども、馬鹿者でさへがさうして行きたいと思つてるんです」

古藤は眼に涙をためて痛ましげに葉子を見やつた。その時電燈が急に部屋を明るくした。

「あなたは本當にどこか惡いやうですね、早く治つて下さい。それぢや僕はこれで今日は御免を蒙ります。左樣なら」

牝鹿のやうに敏感な岡さへが一向注意しない葉子の健康狀態を、鈍重らしい古藤が逸早く見て取つて案じてくれるのを見ると、葉子はこの素朴な青年になつかしみを感ずるのだつた。葉子は立つて行く古藤の後ろから、

「愛さん貞ちやん古藤さんがお歸りになるといけないから早く來ておとめ申しておくれ」

と叫んだ。玄關に出た古藤の所に臺所口から貞世が飛んで來た。飛んで來はしたが、倉地に對してのやうにすぐ躍りかゝる事は得しないで、口もきかずに、少し恥かしげにそこに立ちすくんだ。その後から愛子が手拭を頭から取りながら急ぎ足で現はれた。玄關のなげしの所に照り返しをつけて置いてあるランプの光をまともに受けた愛子の顏を見ると、古藤は魅られたやうにその美に打たれたらしく、目禮もせずにその立姿に眺め入つた。愛子はにこりと左の口尻に笑窪の出る微笑を見せて、右手の指先きが廊下の板にやつと觸るほど膝を折つて輕く頭を下げた。愛子の顏には羞恥らしいものは少しも現はれなかつた。

「いけません、古藤さん。妹達が御恩返しの積りで一生懸命にしたんですから、おいしくはありませんが、是非、ね。貞ちやんお前さんそのお帽子と劍とを持つてお逃げ」

葉子にさう云はれて貞世はすばしこく帽子だけ取り上げてしまつた。古藤はおめ〳〵と居殘る事になつた。

葉子は倉地をも呼び迎へさせた。

十二疊の座敷にはこの家に珍らしく賑やかな食卓がしつらへられた。五人がおの〳〵座に就いて箸を取らうとする所に倉地が這入つて來た。

「さあ入らしやいまし、今夜は賑やかですのよ。こゝへどうぞ(さう云つて古藤の隣りの座を眼で示した)。倉地さん、この方がいつもお噂する木村の親友の古藤義一さんです。今日珍らしく入らしつて下さいましたの。これが事務長をしていらしつた倉地三吉さんです」

紹介された倉地は心置きない態度で古藤の傍に坐りながら、

「私はたしか雙鶴館で一寸お目に懸つたやうに思ふが御挨拶もせず失敬しました。こちらには始終お世話になつ

とります。以後宜しく」

と云つた。古藤は正面から倉地をぢつと見やりながら一寸頭を下げたきり物も云はなかつた。倉地は輕々しく出した自分の今の言葉を不快に思つたらしく、苦り切つて顏を正面に直したが、强ひて努力するやうに笑顏を作つてもう一度古藤を顧みた。

「あの時からすると見違へるやうに變られましたな。私も日淸戰爭の時は半分軍人のやうな生活をしたが、中々面白かつたですよ。然し苦しい事も偶にはおありだらうな」

古藤は食卓を見やつたまゝ、

「えゝ」

とだけ答へた。倉地の我慢はそれまでだつた。一座はその氣分を感じて何んとなく白け渡つた。葉子の手慣れた tact でもそれは中々一掃されなかつた。岡はその氣まづさを强烈な電氣のやうに感じてゐるらしかつた。獨り貞世だけはしやぎ返つた。

「このサラダは愛姉さんがお醋とオリーブ油を間違つて油を澤山かけたから屹度油つこくつてよ」

愛子はおだやかに貞世を睨むやうにして、

「貞ちやんはひどい」

と云つた。貞世は平氣だつた。

「その代り私が又お醋を後から入れたから酸つぱ過ぎる所があるかも知れなくなつてよ。も少し序でにお葉も入れればよかつてねえ、愛姉さん」

皆んなは思はず笑つた。古藤も笑ふには笑つた。然しその笑ひ聲はすぐ鎭まつてしまつた。

やがて古藤が突然箸を措いた。

「僕が悪い爲めに折角の食卓を大變不愉快にしたやうです。濟みませんでした。僕はこれで失禮します」

葉子は慌てゝ、

「まあそんな事はちつともありません事よ。古藤さんそんな事を仰有らずに仕舞ひまでいらしつて頂戴どうぞ。皆んなで途中までお送りしますから」

ととめたが古藤は如何しても聽かなかつた。人々は食事半ばで立ち上らねばならなかつた。古藤は靴を履いてから、帶革を取り上げて劍をつると、洋服の皺を延ばしながら、ちらつと愛子に鋭く眼をやつた。始めから殆んど物を云はなかつた愛子は、この時も默つたまゝ、多恨な柔和な眼を大きく見開いて、中座をして行く古藤を美しくたしなめるやうにぢつと見返してゐた。それを葉子の鋭い視覺は見逃さなかつた。

「古藤さん、あなたこれから屹度度々いらしつて下さいましよ。まだ／＼申上げる事が澤山殘つてゐますし、妹達もお待ち申してゐますから、屹度ですことよ」

さう云つて葉子も親しみを込めた眸を送つた。古藤はしやちこ張つた軍隊式の立禮をして、さく／＼と砂利の上に靴の音を立てながら、夕闇の催した杉森の下道の方へと消えて行つた。

見送りに立たなかつた倉地が座敷の方で獨語のやうに誰に向つてともなく「馬鹿！」と云ふのが聞こえた。

三五

葉子と倉地とは竹柴館以來度々家を明けて小さな戀の冒險を樂しみ合ふやうになつた。さう云ふ時に倉地の家に出入する外國人や正井などを同伴する事もあつた。外國人は主に米國の人だつたが、葉子は倉地がさう云ふ人

達を同座させる意味を知つて、その滑らかな英語と、誰でも——殊に顏や手の表情に本能的な興味を持つ外國人を——蠱惑しないでは措かない華やかな應接振りとで、彼等を擒にする事に成功した。それは倉地の仕事を少からず助けたに違ひなかつた。倉地の金まはりは益〻潤澤になつて行くらしかつた。葉子一家は倉地と木村とから貢がれる金で中流階級にはあり得ない程餘裕のある生活が出來たのみならず、葉子は十分の仕送りを定子にして、なほ餘る金を女らしく毎月銀行に預け入れるまでになつた。

然しそれと共に倉地は益〻荒んで行つた。眼の光にさへ舊のやうに大海にのみ見る寛濶な無頓着な而して恐ろしく力強い表情はなくなつて、いら〳〵と宛てもなく燃えさかる石炭の火のやうな熱と不安とが見られるやうになつた。動ともすると倉地は突然譯もない事にきびしく腹を立てた。正井などは木葉微塵に叱り飛ばされたりした。さう云ふ時の倉地は嵐のやうな狂暴な威力を示した。

葉子も自分の健康が段々悪い方に向いて行くのを意識しないではゐられなくなつた。倉地の心が荒めば荒む程葉子に對して要求するものは燃え爛れる情熱の肉體だつたが、葉子も亦知らず識らず自分をそれに適應させ、且つは自分が倉地から同様な狂暴な愛撫を受けたい欲念から、先きの事も後の事も考へずに、現在の可能の總てを盡して倉地の要求に應じて行つた。腦も心臟も振り廻して、ゆすぶつて、敲きつけて、一氣に猛火であぶり立てるやうな激情、魂ばかりになつたやうな、肉ばかりになつたやうな極端な神經の混亂、而してその後に續く死滅と同然の倦怠疲勞。人間が有する生命力をどん底から驗めし試みるさう云ふ虐待が日に二度も三度も繰り返された。さうしてその後では倉地の心は屹度野獸のやうに更に荒んでゐた。葉子は不快極まる病理的の憂鬱に襲はれた。靜かに鈍く生命を脅やかす腰部の痛み、二匹の小魔が肉と骨との間に這入り込んで、肉を肩にあてゝ骨を踏んばつて、うんと力任せに反り上るかと思はれる程の肩の凝り、段々鼓動を低めて行つて、呼吸を苦しくして、

今動きを止めるかと危むと、一時に耳にまで音が聞こえる位激しく動き出す不規則な心臓の動作、もや／＼と火の霧で包まれたり、透明な氷の水で滿たされるやうな頭腦の狂ひ、……かう云ふ現象は日一日と生命に對する、而して人生に對する葉子の猜疑を激しくした。

有頂天の溺樂の後に襲つて來る淋しいとも、悲しいとも、果敢ないとも形容の出來ないその空虚さは何よりも葉子につらかつた。縱令その場で命を絶つてもその空虚さは永遠に葉子を襲ふものゝやうにも思はれた。唯これから遁れる唯一つの道は捨て鉢になつて、一時的のものだとは知り拔きながら、而してその後には更に苦しい空虚さが待ち伏せしてゐるとは覺悟しながら、次ぎの溺樂を逐ふ外はなかつた。氣分の荒んだ倉地も同じ葉子と同じ心で同じ事を求めてゐた。かうして二人は底止する所のない何處かへ手をつないで迷ひ込んで行つた。

或る朝葉子は朝湯を使つてから、例の六疊で鏡臺に向つたが一日々々に變つて行くやうな自分の顏には唯驚くばかりだつた。少し縱に長く見える鏡ではあるけれども、そこに映る姿は餘りに細つてゐた。その代り眼は前にも增して大きく鈴を張つて、化粧燒けとも思はれぬ薄い紫色の色素がその周りに現はれて來てゐた。それが葉子の眼に例へば森林に圍まれた澄んだ湖のやうな深みと神祕とを添へるやうにも見えた。鼻筋は瘦せ細つて精神的な敏感さを際立たしてゐた。頰の傷々しくこけた爲めに、葉子の顏に云ふべからざる暖かみを與へる笑窪を失はうとしてはゐたが、その代りにそこには惱ましく物思はしい張りを加へてゐた。唯葉子が如何しても辯護の出來ないのは益々眼立つて來た固い下顎の輪廓だつた。然し兎にも角にも肉情の昻奮の結果が顏に妖凄な精神美を附け加へてゐるのは不思議だつた。葉子はこれまでの化粧法を全然改める必要をその朝になつてしみ／＼と感じた。而して今まで着てゐた衣類までが殘らず氣に喰はなくなつた。さうなると葉子は矢も楯もたまらなかつた。

葉子は紅の交つた白粉を殆んど使はずに化粧をした。顎の兩側と眼の周りとの紅粉をわざと薄く拭き取つた。

枕を入れずに前髪を取つて、束髪の髷を思ひきり下げて結つて見た。鬢だけを少しふくらましたので顎の張つたのも眼立たず、顔の細くなつたのもいくらか調節されて、そこには葉子自身が期待もしなかつたやうな廢頽的な同時に神經質的な凄くも美しい一つの顔面が創造されてゐた。有り合はせのもの丶中から出來るだけ地味な一揃ひを選んでそれを着ると葉子はすぐ越後屋に車を走らせた。

晝過ぎまで葉子は越後屋にゐて註文や買物に時を過した。衣服や身の周りのもの丶見立てについては葉子は天才と云つてよかつた。自分でもその才能には自信を持つてゐた。從つて思ひ存分の金を懷ろに入れてゐて買物をする位興の多いものは葉子に取つては他になかつた。越後屋を出る時には、感興と昂奮とに自分を傷めちぎつた藝術家のやうにへと／＼に疲れ切つてゐた。

歸りついた玄關の靴拔ぎ石の上には岡の細長い華車な半靴が脱ぎ捨てられてゐた。葉子は自分の部屋に行つて懷中物などを仕舞つて、湯呑でなみ／＼と一杯の白湯を飲むと、すぐ二階に上つて行つた。自分の新しい化粧法がどんな風に岡の眼を刺戟するか、葉子は子供らしくそれを試みて見たかつたのだ。彼女は不意に岡の前に現はれよう爲めに裏階子からそつと登つて行つた。而して襖を開けるとそこに岡と愛子だけがゐた。貞世は苔香園にでも行つて遊んでゐるのか、そこには姿を見せなかつた。

岡は詩集らしいものを開いて見てゐた。そこにはなほ二三冊の書物が散らばつてゐた。愛子は縁側に出て手欄から庭を見下ろしてゐた。然し葉子は不思議な本能から、階子段に足をかけた頃には、二人は決して今のやうな位置に、今のやうな態度でゐたのではないと云ふ事を直覺してゐた。二人が、一人は本を讀み、一人が縁に出てゐるのは、如何にも自然でありながら非常に不自然だつた。

突然――それは本當に突然何處から飛び込んで來たのか知れない不快の念の爲めに葉子の胸はかきむしられ

た。岡は葉子の姿を見ると、わざつと寛がせてゐたやうな姿勢を急に正して、讀み耽つてゐたらしく見せた詩集を餘りに惜しげもなく閉ぢてしまつた。而していつもより少し忸れ／＼しく挨拶した。愛子は縁側から靜かにこつちを振り向いて平生と少しも變らない態度で、柔順に無表情に縁板の上に一寸膝をついて挨拶した。然しその沈着にも係はらず、葉子は愛子が今まで涙を眼にためてゐたのをつきとめた。岡も愛子も明かに葉子の顏や髮の様子の變つたのに氣附いてゐない位、心に餘裕のないのが明かだつた。

「貞ちやんは」

と葉子は立つたまゝで尋ねて見た。二人は思はず慌てゝ答へようとしたが、岡は愛子を窃み見るやうにして控へた。

「隣りの庭に花を買ひに行つて貰ひましたの」

さう愛子が少し下を向いて髷だけを葉子に見えるやうにして素直に答へた。「ふゝん」と葉子は腹の中でせゝら笑つた。而して始めてそこに坐つて、ぢつと岡の眼を見つめながら、

「何？ 讀んでいらしつたのは」

と云つて、そこに在る四六細型の美しい表裝の書物を取り上げて見た。黒髮を亂した妖艶な女の頭、矢で貫かれた心臟、その心臟からぽた／＼落ちる血の滴りが自ら字になつたやうに圖案された「みだれ髮」といふ標題―文字に親しむ事の大嫌ひな葉子も噂で聞いてゐた有名な鳳晶子の詩集だつた。そこには「明星」といふ文藝雜誌だの、春雨の「無花果」だの、兆民居士の「一年有半」だのと云ふ新刊の書物も散らばつてゐた。

「まあ岡さんも中々のロマンティストね、こんなものを愛讀なさるの」

と葉子は少し皮肉なものを口尻に見せながら尋ねて見た。岡は靜かな調子で訂正するやうに、

「それは愛子さんのです。私今一寸拜見したゞけです」

「これは」

と云つて葉子は今度は「一年有半」を取り上げた。

「それは岡さんが今日貸して下さいましたの。私判りさうもありませんわ」

愛子は姉の毒舌を豫め防がうとするやうに。

「へえ、それぢや岡さん、あなたは又大したリアリストね」

葉子は愛子を眼中にもおかない風でかう云つた。去年の下半期の思想界を震撼したやうなこの書物と續編とは倉地の貧しい書架の中にもあつたのだ。而して葉子は面白く思ひながら、その中を時々拾ひ讀みしてゐたのだつた。

「何んだか私とはすつかり違つた世界を見るやうでゐながら、自分の心持か殘らず云つてあるやうでもあるんで……私それが好きなんです。リアリストと云ふ譯ではありませんけれども……」

「でもこの本の皮肉は少し瘦せ我慢ね。あなたのやうな方には一寸不似合ですわ」

「さうでせうか」

岡は何とはなく今にでも腫物に觸られるかのやうにそは〳〵してゐた。會話は少しもいつものやうには彈まなかつた。葉子はいら〳〵しながらもそれを顏には見せないで今度は愛子の方に槍先を向けた。

「愛さんお前こんな本をいつお買ひだつたの」

と云つて見ると、愛子は少し躊つてゐる樣子だつたが、すぐに素直な落ち付きを見せて、

「買つたんぢやないんですの。古藤さんが送つて下さいましたの」

と云つた。葉子はさすがに驚いた。古藤はあの會食の晩、中座したつきり、この家には足踏みもしなかつたのに……。葉子は少し激しい言葉になつた。

「何んだつて又こんな本を送つておよこしなさつたんだらう。あなたお手紙でも上げたのね」

「えゝ、……下さいましたから」

「どんなお手紙を」

愛子は少し俯向き加減に默つてしまつた、かう云ふ態度を取つた時の愛子のしぶとさを葉子はよく知つてゐた。葉子の神經はぴりぴりと緊張して來た。

「持つて來てお見せ」

さう嚴格に云ひながら、葉子はそこに岡のゐる事も意識の中に加へてゐた。愛子は執拗に默つたまゝ坐つてゐた。然し葉子がもう一度催促の言葉を出さうとすると、その瞬間に愛子はつと立ち上つて部屋を出て行つた。

葉子はその隙に岡の顏を見た。それはまた無垢童貞の青年が不思議な戰慄を胸の中に感じて、反感を催すか、牽き付けられかしないではゐられないやうな眼で岡を見た。岡は少女のやうに顏を赤めて、葉子の視線を受け切れないで眸をたじろがしつゝ眼を伏せてしまつた。葉子はいつまでもそのデリケートな横顏を注視つゞけた。岡は唾を飲みこむのも憚るやうな樣子をしてゐた。

「岡さん」

さう葉子に呼ばれて、岡は已むを得ずおづおづ頭を上げた。葉子は今度は詰るやうにその若々しい上品な岡を見詰めてゐた。

そこに愛子が白い西洋封筒を持つて歸つて來た。葉子は岡にそれを見せつけるやうに取り上げて、取るにも足

らぬ輕いものでも扱ふやうに飛び〳〵に讀んで見た。それには唯當り前な事だけが書いてあつた。暫く目で見た二人の大きくなつて變つたのには驚いたとか、折角寄つて作つてくれた御馳走をすつかり賞味しない中に歸つたのは殘念だが、自分の性分としてはあの上我慢が出來なかつたのだから許してくれとか、人間は他人の見やう見眞似で育つて行つたのでは駄目だから、縱令どんな境遇にゐても自分の見識を失つてはいけないとか、二人には倉地といふ人間だけは如何かして近づけさせたくないと思ふとか、而して最後に、愛子さんは詠歌が中々上手だつたがこの頃出來るか、出來るならそれを見せてほしい、軍隊生活の乾燥無味なのには堪へられないからとしてあつた。而して宛名は愛子、貞世の二人になつてゐた。

「馬鹿ぢやないの愛さん、あなたこのお手紙でいゝ氣になつて、下手糞なぬたでもお見せ申したんでせう……いい氣なものね……この御本と一緒にもお手紙が來た筈ね」

愛子はすぐ又立たうとした。然し葉子はさうはさせなかつた。

「一本々々お手紙を取りに行つたり歸つたりしたんぢや日が暮れますわ。……日が暮れると云へばもう暗くなつたわ。貞ちやんは又何をしてゐるだらう……あなた早く呼びに行つて一緒にお夕飯の支度をして頂戴」

愛子はそこにある書物を一抱へに胸に抱いて、俯向くと愛らしく二重になる顋で抑へて座を立つて行つた。それが如何にもしを〳〵と、細かい擧動の一つ〳〵で岡に哀訴するやうに見れば見なされた。「互に見交はすやうな事をして見るがいゝ」さう葉子は心の中で二人をたしなめながら、二人に氣を配つた。岡も愛子も申合はしたやうに瞥視もし合はなかつた。けれども葉子は二人がせめては眼だけでも慰め合ひたい願ひに胸を震はしてゐるのをはつきりと感ずるやうに思つた。葉子の心はおぞましくも苦々しい猜疑の爲めに苦しんだ。若さと若さとが互ひにきびしく求め合つて、葉子などを易々と袖にするまでにその情炎は嵩じてゐると思ふと耐へられなかつた。葉

子は強ひて自分を押し鎭める爲めに、帶の間から煙草入れを取り出してゆつくり煙を吹いた。煙管の先きが端なく火鉢にかざした岡の指先に觸れると電氣のやうなものが葉子に傳はるのを覺えた。若さ……若さ……。

そこには二人の間に暫くぎこちない沈默が續いた。岡が何を云へば愛子は泣いたんだらう。愛子は何を泣いて岡に訴へてゐたのだらう。葉子が數へ切れぬ程經驗した幾多の戀の場面の中から、激情的な色々の光景がつぎつぎに頭の中に描かれるのだつた。もうさうした年齡が岡にも愛子にも來てゐるのだ。それに不思議はない。然しあれほど葉子にあこがれ溺れて、謂はゞ戀以上の戀とも云ふべきものを崇拜的に捧げてゐた岡が、あの純直な上品な而して極めて內氣な岡が、見る〳〵葉子の把持から離れて、人もあらうに愛子――妹の愛子の方に移つて行かうとしてゐるらしいのを見なければならないのは何んと云ふ事だらう。愛子の淚――それは察する事が出來る。愛子は屹度淚ながらに葉子と倉地との間にこの頃募つて行く奔放な放埒な醜行を訴へたに違ひない。葉子の愛子と貞世とに對する偏頗な愛憎と、愛子の上に加へられる御殿女中風な壓迫とを歎いたに違ひない。而かもそれをあの女に特有な多恨らしい、冷やかな、淋しい表現法で、而して氣息づまるやうな若さと若さとの共鳴の中に……。

勃然として燒くやうな嫉妬が葉子の胸の中に堅く凝りついて來た。葉子はすり寄つておど〳〵してゐる岡の手を力強く握りしめた。葉子の手は氷のやうに冷たかつた。岡の手は火鉢にかざしてあつた故か、珍らしく火照つて、臆病らしい油汗が掌にしとゞに滲み出てゐた。

「あなたは私がお怖いの」

葉子はさりげなく岡の顏を覗き込むやうにしてかう云つた。

「そんな事……」

岡はせう事なしに腹を据ゑたやうに割合にしやんとした聲でかう云ひながら、葉子の眼をゆつくり見やつて、

握られた手には少しも力を籠めようとはしなかつた。葉子は裏切られたと思ふ不滿の爲めにもうそれ以上冷靜を裝つてはゐられなかつた。昔のやうに何處までも自分を失はない、粘り氣の强い、銳い神經はもう葉子にはなかつた。

「あなたは愛子を愛してゐて下さるのね。さうでせう。私がこゝに來る前愛子はあんなに泣いて何を申上げてゐたの？……仰有つて下さいな。愛子があなたのやうな方に愛していたゞけるのは勿體ない位ですから、私喜ぶとも、尤め立てなどはしません、屹度。だから仰有つて頂戴。……いゝえ、そんな事を仰有つてそれや駄目、私の眼はまだこれでも黑う御座んすから。……あなたそんな水臭いお仕向けを私になさらうと云ふの？　まさかとは思ひますがあなた私に仰有つた事を忘れなさつちや困りますよ。私はこれでも眞劍な事には眞劍になる位の誠實はある積りです事よ。私あなたのお言葉は忘れては居りませんわ。姉だと今でも思つてゐて下さるなら本當の事を仰有つて下さい。愛子に對しては私は私だけの事をして御覽に入れますから……さ」

さう疳走つた聲で云ひながら葉子は時々握つてゐる岡の手をヒステリックに激しく振り動かした。泣いてはならぬと思へば思ふ程葉子の眼からは淚が流れた。宛ら戀人に不實を責めるやうな熱意が思ふざま湧き立つて來た。仕舞には岡にもその心持が移つて行つたやうだつた。而して右手を握つた葉子の手の上に左の手を添へながら、上下から挾むやうに押へて、岡は震へ聲で靜かに云ひ出した。

「御存じぢやありませんか、私、戀の出來るやうな人間ではないのを。年こそ若う御座いますけれども心は妙にいぢけて老いてしまつてゐるんです。如何しても戀の遂げられないやうな女の方にでなければ私の戀は動きません。私を戀してくれる人があるとしたら、私、心が卽座に冷えてしまふのです。一度自分の手に入れたら、どれ程尊いものでも大事なものでも、もう私には尊くも大事でもなくなつて仕舞ふんです。だから私、淋しいんです。

何んにも持つてゐない、何んにも空しい……その辯さう知り抜きながら私、何か何處かにあるやうに思つて摑む事の出來ないものに憧れます。この心さへなくなれば淋しくつてもそれでいゝのだがなと思ふ程苦しくもあります。何にでも自分の理想をすぐあてはめて熱するやうな、そんな若い心が欲しくもありますけれども、そんなものは私には來はしません……春にでもなつて來ると餘計世の中は空しく見えて堪りません。それを先刻ふと愛子さんに申上げたんです。さうしたら愛子さんがお泣きになつたんです。私、あとですぐ惡いと思ひました、人に云ふやうな事ぢやなかつたのを……」

かう云ふ事を云ふ時の岡は云ふ言葉にも似ず冷酷とも思はれる程唯淋しい顏になつた。葉子には岡の言葉が解るやうでもあり、妙にからんでも聞こえた。而して一寸すかされたやうに氣勢を殺がれたが、どん／＼湧き上るやうに內部から襲ひ立てる力はすぐ葉子を理不盡にした。

「愛子がそんなお言葉で泣きましたつて？　不思議ですわねえ。……それならそれでよう御座んす。……（こゝで葉子は自分にも堪へ切れずにさめ／＼と泣き出した）岡さん私も淋しい……淋しくつて、淋しくつて……」

「お察し申します」

岡は案外しんみりした言葉でさう云つた。

「お判りになつて？」

と葉子は泣きながら取りすがるやうにした。

「判ります。……あなたは墮落した天使のやうな方です。御免下さい。船の中で始めてお眼にかゝつてから私、ちつとも心持が變つてはゐないんです。あなたがいらつしやるんで私、やうやく淋しさからのがれます」

「噓！……あなたはもう私に愛想をおつかしなのよ。私のやうに墮落したものは……」

葉子は岡の手を放して、とう〳〵ハンケチを顔にあてた。

「さう云ふ意味で云つた譯ぢやないんですけれども……」

稍〻暫く沈默した後に、當惑し切つたやうに淋しく岡は獨語ちて又默つてしまつた。岡はどんなに淋しさうな時でも中々泣かなかつた。それが彼を一層淋しく見せた。

三月末の夕方の空はなごやかだつた。庭先の一重櫻の梢には南に向いた方に白い花瓣が何處からか飛んで來て粘着いたやうにちらほら見え出してゐた。その先きには赤く霜枯れた杉森がゆるやかに暮れ初めて、光を含んだ青空が靜かに流れるやうに漂つてゐた。苔香園の方から園丁が間遠に鋏をならす音が聞こえるばかりだつた。

若さから置いて行かれる……さうした淋しみが嫉妬に代つてひし〳〵と葉子を襲つて來た。葉子はふと母の親佐を思つた。葉子が木部との戀に深入りして行つた時、それを見守つてゐた時の親佐を思つた。親佐のその心を思つた。自分の番が來た……その心持は堪らないものだつた。と、突然定子の姿が何よりもなつかしいものとなつて胸に逼つて來た。葉子は自分にもその突然の聯想の經路は判らなかつた。突然も餘りに突然——然し葉子に逼るその心持は、更に葉子を疊に突伏して泣かせる程强いものだつた。

玄關から人の這入つて來る氣配がした。葉子はすぐそれが倉地である事を感じた。葉子は倉地と思つたゞけで、不思議な憎惡を感じながら、その動靜に耳をすました。倉地は臺所の方に行つて愛子を呼んだやうだつた。二人の跫音が玄關の隣りの六疊の方に行つた。而して暫く靜かだつた。と思ふと、

「いや」

と小さく退けるやうに云ふ愛子の聲が確かに聞こえた。抱きすくめられて、もがきながら放たれた聲らしかつたが、その聲の中には憎惡の影は明かに薄かつた。

葉子は雷に撃たれたやうに突然泣きやんで頭を擧げた。すぐ倉地が階子段を昇つて來る音が聞こえた。

「私、臺所に參りますからね」

何も知らなかつたらしい岡に、葉子は僅かにそれだけを云つて、突然座を立つて裏階子に急いだ。と、かけ違ひに倉地は座敷に這入つて來た。強い酒の香がすぐ部屋の空氣を汚した。

「やあ春になり居つた、櫻が咲いたぜ。おい葉子」

いかにも氣さくらしく鹽がれた聲でかう叫んだ倉地に對して、葉子は返事も出來ない程昂奮してゐた。葉子は手に持つたハンケチを口に押込むやうに銜へて、震へる手で壁を細かく敲くやうにしながら階子段を降りた。

葉子は頭の中に天地の壞れ落ちるやうな音を聞きながら、そのまゝ緣に出て庭下駄を履かうとあせつたけれども如何しても履けないので、跣足のまゝ庭に出た。而して次ぎの瞬間に自分を見出した時には何時戸を開けたとも知らず物置小屋の中に這入つてゐた。

三六

底のない悒鬱がともすると烈しく葉子を襲ふやうになつた。謂れのない激怒がつまらない事にもふと頭を擡げて、葉子はそれを押し鎭める事が出來なくなつた。春が來て、木の芽から疊の床に至るまで總てのものが膨らんで來た。愛子も貞世も見違へるやうに美しくなつた。その肉體は細胞の一つ〳〵まで素早く春を嗅ぎつけ、吸收し、飽滿するやうに見えた。愛子はその壓迫に堪へないで春の來たのを恨むやうなけだるさと淋しさとを見せた。貞世は生命そのものだつた。秋から冬にかけてによき〳〵と延び上つた細々した體には、春の精のやうな豐麗な脂

肪がしめやかに沁み亙つて行くのが眼に見えた。葉子だけは春が來ても痩せた。來るにつけて痩せた。ゴム毬の弧線のやうな肩は骨ばつた輪廓を、薄着になつた着物の下から覗かせて、潤澤な髮の毛の重みに堪へないやうに頸筋も細々となつた。痩せて悒欝になつた事から生じた別種の美――さう思つて葉子が便りにしてゐた美も、それは段々冴え增さつて行く種類の美ではない事を氣附かねばならなくなつた。その美はその行手には夏がなかつた。寒い冬のみが待ち構へてゐた。

歡樂ももう歡樂自身の歡樂は持たなくなつた。歡樂の後には必ず病理的な苦痛が伴ふやうになつた。或る時にはそれを思ふ事すらが失望だつた。それでも葉子は凡ての不自然な方法によつて、今は振り返つて見る過去にばかり眺められる歡樂の絕頂を幻影としてゞも現在に描かうとした。而して倉地を自分の力の支配の下に繫がうとした。健康が衰へて行けば行く程この焦燥の爲めに葉子の心は休まなかつた。全盛期を過ぎた伎藝の女にのみ見られるやうな、傷ましく廢頽した、腐菌の燐光を思はせる凄慘な蠱惑力を僅かな力として葉子は何處までも倉地を擄にしようとあせりにあせつた。

然しそれは葉子の傷ましい自覺だつた。美と健康との凡てを備へてゐた葉子には今の自分がさう自覺されたのだけれども、始めて葉子を見る第三者は、物凄い程冴え切つて見える女盛りの葉子の惑力に、日本には見られないやうなコケットの典型を見出したらう。おまけに葉子は肉體の不足を極端に人目を牽く衣服で補ふやうになつてゐた。その當時は日露の關係も日米の關係も嵐の前のやうな暗い徵候を現はし出して、國人全體は一種の壓迫を感じ出してゐた。臥薪嘗膽といふやうな合ひ言葉が頻りと言論界には說かれてゐた。然しそれと同時に日清戰爭を相當に遠い過去として眺め得るまでに、その戰役の重い負擔から氣のゆるんだ人々は、漸く調整され始めた經濟狀態の下で、生活の美裝といふ事に傾いてゐた。自然主義は思想生活の根柢となり、當時病天才の名を擅

まにした高山樗牛等の一團は、ニイチエの思想を標榜して「美的生活」とか「清盛論」と云ふやうな大膽奔放な言説を以て思想の維新を叫んでゐた。風俗問題とか女子の服裝問題とか云ふ議論が守舊派の人々の間には喧しく持ち出されてゐる間に、その反對の傾向は、殼を破つた芥子の種のやうに四方八方に飛び散つた。かうして何か今までの日本にはなかつたやうなものゝ出現を待ち設け見守つてゐた若い人々の眼には、葉子の姿は一つの天啓のやうに映つたに違ひない。女優らしい女優を持たず、カフエーらしいカフエーを持たない當時の路上に葉子の姿は眩しいものゝ一つだ。葉子を見た人は男女を問はず目を聳てた。

或る朝葉子は裝ひを凝らして倉地の下宿に出かけた。倉地は寢ごみを襲はれて眼を覺ました。座敷の隅には夜を更かして樂しんだらしい酒肴の殘りが敗えたやうにかためて置いてあつた。例の支那鞄だけはちやんと錠がおりて床の間の隅に片付けられてゐた。葉子は毎時もの通り知らん振りをしながら、そこらに散らばつてゐる手紙の差出人の名前に鋭い觀察を與へるのだつた。倉地は宿醉を不快がつて頭を敲きながら寢床から半身を起すと、

「何んで今朝は又そんなにしやれ込んで早くからやつて來をつたんだ」

とそつぽに向いて、欠伸でもしながらのやうに云つた。これが一ケ月前だつたら、少くとも三ケ月前だつたら、一夜の安眠に、あの逞ましい精力の全部を回復した倉地は、いきなり寢床の中から飛び出して來て、さうはさせまいとする葉子を否應なしに床の上に捩ぢ伏せてゐたに違ひないのだ。葉子は傍目にもこせ〳〵とうるさく見えるやうな敏捷さでその邊に散らばつてゐる物を、手紙は手紙、懷中物は懷中物、茶道具は茶道具とどん〳〵片付けながら、倉地の方も見ずに、

「昨日の約束ぢやありませんか」

と無愛想につぶやいた。倉地はその言葉で始めて何か云つたのをかすかに思ひ出した風で、

「何しろ俺は今日は忙しいで駄目だよ」

と云つて、やうやく伸びをしながら立ち上つた。葉子はもう腹に据ゑかねる程怒りを發してゐた。

「怒つてしまつてはいけない。これが倉地を冷淡にさせるのだ」――さう心の中には思ひながらも、葉子の心は如何してもその云ふ事を聞かぬ惡戲好きな小惡魔がゐるやうだつた。卽座にその場を一人だけで飛び出して仕舞ひたい衝動と、もつと巧みな手練で如何しても倉地をおびき出さなければいけないと云ふ冷靜な思慮とが激しく戰ひ合つた。葉子は暫くの後に辛うじてその二つの心持を混ぜ合はせる事が出來た。

「それでは駄目ね……又にしませうか。でも口惜しいわ、このいゝお天氣に……いけない、あなたの忙しいは噓ですわ。忙しい〳〵つて云つときながら、お酒ばかり飮んでいらつしやるんだもの。ね、行きませうよ。こら見て頂戴」

さう云ひながら葉子は立ち上つて、兩手を左右に廣く開いて、袂が延びたまゝ兩腕からすらりと垂れるやうにして、稍ゝ劍を持つた笑ひを笑ひながら倉地の方に近寄つて行つた。倉地もさすがに、今更その美しさに見惚れるやうに葉子を見やつた。天才が持つと稱せられるあの靑色をさへ帶びた乳白色の皮膚、それがやゝ淺黑くなつて、眼の緣に憂ひの雲をかけたやうな薄紫の暈、霞んで見えるだけにそつと刷いた紅粉、際立つて赤く彩られた唇、黑い焰を上げて燃えるやうな眸、後ろにさばいて束ねられた黑漆の髮、大きな西班牙風の玳瑁の飾り櫛、くつきりと白く細い喉を攻めるやうにきりつと重ね合はされた藤色の襟、胸の凹みに一寸覗かせた、燃えるやうな緋の帶上げの外は、濡れたかとばかり體にそぐつて底光りのする紫紺色の袷、その下に愼ましく潜んで消える程薄い紫色の足袋（から云ふ色足袋は葉子が工夫し出した新らしい試みの一つだつた）さう云ふものが互ひ〳〵に溶け合つて、長閑やかな朝の空氣の中にぽつかりと、葉子と云ふ世にも稀れな程凄艶な一つの存在を浮き出さし

てゐた。その存在の中から黑い焔を上げて燃えるやうな二つの眸が生きて動いて倉地をぢつと見やつてゐた。

倉地が物を云ふか、身を動かすか、兎に角次ぎの動作に移らうとするその前に、葉子は氣味の悪い程滑らかな足取りで、倉地の眼の先きに立つてその胸の所に、兩手をかけてゐた。

「もう私に愛想が盡きたら盡きたとはつきり云つて下さい、ね。あなたは確かに冷淡におなりね。私は自分が憎う御座んす、自分に愛想を盡かしてゐます。さあ云つて下さい、……今……この場で、はつきり……でも死ねと仰有い、殺すと仰有い。私は喜んで……私はどんなにうれしいか知れないのに。……よう御座んすわ、何んでも私本當が知りたいんですから。さ、云つて下さい。私どんなきつい言葉でも覺悟してゐますから。悪びれなんかしはしませんから……あなたは本當にひどい……」

葉子はそのまゝ倉地の胸に顏をあてた。而して始めの中はしめやかにしめやかに泣いてゐたが、急に激しいヒステリー風な啜り泣きに變つて、汚ないものにでも觸れてゐたやうに倉地の熱氣の強い胸許から飛びしざると、寢床の上にがばと突伏して激しく聲を立てゝ泣き出した。

この咄嗟の激しい脅威に、近頃さう云ふ動作には慣れてゐた倉地だつたけれども、慌てゝ葉子に近づいてその肩に手をかけた。葉子はおびえるやうにその手から飛び退いた。そこには獸に見るやうな野性のまゝの取り亂し方が美しい衣裳にまとはれて演ぜられた。葉子の齒も爪も尖つて見えた。體は激しい痙攣に襲はれたやうに痛ましく震へをのゝいてゐた。憤怒と恐怖と嫌悪とがもつれ合ひいがみ合つてのたうち廻るやうだつた。葉子は自分の五體が青空遠くかきさらはれて行くのを懸命に喰ひ止める爲めに蒲團でも疊でも爪の立ちつものに獅嚙みついた。倉地は何よりもその激しい泣き聲が隣り近所の耳に這入るのを恥ぢるやうに背に手をやつてなだめようとして見たけれども、その度毎に葉子は更に泣き募つて遁れようとばかりあせつた。

「何を思ひ違ひをしとる、これ」

倉地は喉笛を開けつ放した低い聲で葉子の耳許にかう云つて見たが、葉子は理不盡にも激しく頭を振るばかりだつた。倉地は決心したやうに力任せにあらがふ葉子を抱きすくめて、その口に手をあてた。

「えゝ、殺すなら殺して下さい……下さいとも」

といふ狂氣じみた聲をしいつと制しながら、その耳許にさゝやかうとすると、葉子は我れながら夢中で、あてがつた倉地の手を骨も摧けよと嚙んだ。

「痛い……何しやがる」

倉地はいきなり一方の手で葉子の細頸を取つて自分の膝の上に乘せて締めつけた。葉子は呼吸が段々苦しくなつて行くのをこの狂亂の中にも意識して快く思つた。倉地の手で死んで行くのだなと思ふとそれが何んとも云へず美しく心安かつた。葉子の五體からはひとりでに力が拔けて行つて、震へを立てゝ嚙み合つてゐた齒がゆるんだ。その瞬間をすかさず倉地は嚙まれてゐた手を振りほどくと、いきなり葉子の頰げたをひし／＼と五六度續けさまに平手で打つた。葉子はそれがまた快かつた。そのびり／＼と神經の末梢に應へて來る感覺の爲めに體中に一種の陶醉を感ずるやうにさへ思つた。「もつとお打ちなさい」と云つてやりたかつたけれども聲は出なかつた。その癖葉子の手は本能的に自分の頰を庇ふやうに倉地の手の下るのを支へようとしてゐた。倉地は兩肘まで使つて、ばた／＼と裾を蹴亂して暴れる兩脚の外には葉子を身動きも出來ないやうにしてしまつた。酒で心臟の昂奮し易くなつた倉地の呼吸は霰のやうにせはしく葉子の顏にかゝつた。

「馬鹿が……靜かに物を云へば判る事だに……俺がお前を見捨てるか見捨てないか……靜かに考へても見ろ。馬鹿が……恥曝しな眞似をしやがつて……顏を洗つて出直して來い一

さう云つて倉地は捨てるやうに葉子を寢床の上にどんと放り投げた。

葉子の力は使ひ盡されて泣き續ける氣力さへないやうだつた。而してそのまゝ昏々として眠るやうに仰向いたまゝ眼を閉ぢてゐた。倉地は肩で激しく氣息をつきながら、傷ましく取り亂した葉子の姿をまんじりと眺めてゐた。

一時間程の後には葉子は然したつた今惹き起された亂脈騷ぎをけろりと忘れたものゝやうに快活で無邪氣になつてゐた。而して二人は樂しげに下宿から新橋驛に車を走らした。葉子が薄暗い婦人待合室の色の剝げたモロッコ皮のディバンに腰かけて、倉地が切符を買つて來るのを待つてる間、そこに居合はせた貴婦人と云ふやうな四五人の人達は、すぐ今までの話を捨てゝしまつて、こそ〳〵と葉子に就いて私語き交はすらしかつた。高慢と云ふのでもなく謙遜といふのでもなく、極めて自然に落ち付いて眞直に腰かけたまゝ、柄の長い白の琥珀のパラソルの握りに手を載せてゐながら、葉子にはその貴婦人達の中の一人が如何も見知り越しの人らしく感ぜられた。或は女學校にゐた時に葉子を崇拜してその風俗をすら眞似た連中の一人であるかとも思はれた。葉子がどんな事を噂されてゐるかは、その婦人に耳打ちされて、見るやうに見ないやうに葉子を窃み見る他の婦人達の眼色で想像された。

「お前達は呆れ返りながら心の中の何處かで私を羨んでゐるのだらう。お前達の、その物怯ぢしながらも金目をかけた派手作りな衣裳や化粧は、社會上の位置に恥ぢないだけの作りなのか、良人の眼に快く見えよう爲めなのか。それはかりなのか。お前達を見る路傍の男達の眼は勘定に入れてゐないのか。……臆病卑怯な僞善者共め！」

葉子はそんな人間からは一段も二段も高い所にゐるやうな氣位を感じた。自分の扮粧がその人達のどれよりも立ち勝つてゐる自信を十二分に持つてゐた。葉子は女王のやうに誇りの必要もないと云ふ自らの鷹揚を見せて坐

つてゐた。

そこに一人の夫人が這入つて來た。田川夫人——葉子はその影を見るか見ないかに見て取つた。然し顏色一つ動かさなかつた（倉地以外の人に對しては葉子はその時でも可なり勝れた自制力の持主だつた）。田川夫人は元よりそこに葉子がゐようなどゝは思ひもかけないので、葉子の方に一寸眼をやりながらも一向に氣付かずに、

「お待たせ致しまして濟みません」

と云ひながら貴婦人等の方に近寄つて行つた。互の挨拶が濟むか濟まない中に、一同は田川夫人によりそつてひそ〳〵と私語いた。葉子は靜かに機會を待つてゐた。ぎよつとした風で、葉子に後ろを向けてゐた田川夫人は肩越しに葉子の方を振り返つた。待ち設けてゐた葉子は今まで正面に向けてゐた顏をしとやかに向けかへて田川夫人と眼を見合はした。葉子の眼は憎むやうに笑つてゐた。田川夫人の眼は笑ふやうに憎んでゐた。「生意氣な」……葉子は田川夫人が眼を外らさない中に、すつくと立つて田川夫人の方に寄つて行つた。この不意打ちに度を失つた夫人は（明かに葉子が眞紅になつて顏を伏せるとばかり思つてゐたらしく、居合はせた婦人達もその樣を見て、容貌でも服裝でも自分等を蹴落さうとする葉子に對して溜飲を下ろさうとしてゐるらしかつた）少し色を失つて、そつぽを向かうとしたけれどももう遲かつた。葉子は夫人の前に輕く頭を下げてゐた。夫人も已むを得ず挨拶の眞似をして、高飛車に出る積りらしく、

「あなたは誰方？」

いかにも橫柄に魁けて口を切つた。

「早月葉で御座います」

葉子は對等の態度で惡びれもせずから受けた。

「繪島丸では色々お世話樣になつて難有う存じました。あのう……報正新報も拜見させていたゞきました（夫人の顏色が葉子の言葉一つ每に變るのを葉子は珍らしいものでも見るやうにまじ〳〵と眺めながら）。大層面白う御座いました事。よくあんなに委しく御通信になりましてねえ、お忙しく入らつしやいますから……今一寸切符を買ひに……お連れ申しませうか」

田川夫人は見る〳〵眞靑になつてしまつてゐた。折返して云ふべき言葉に窮してしまつて、拙くも、

「私はこんな所であなたとお話するのは存じがけません。御用でしたら宅へお出でを願ひませう」

と云ひつゝ今にも倉地がそこに現はれて來るかと只管それを怖れる風だつた。葉子はわざと夫人の言葉を取り違へたやうに、

「いゝえ如何致しまして私こそ……一寸お待ち下さい、直ぐ倉地さんをお呼び申して參りますから」

さう云つてどん〳〵待合所を出てしまつた。後に殘つた田川夫人がその貴婦人達の前でどんな顏をして當惑したか、それを葉子は眼に見るやうに想像しながら惡戯者らしくほくそ笑んだ。丁度そこに倉地が切符を買つて來かゝつてゐた。

一等の客室には他に二三人の客がゐるばかりだつた。田川夫人以下の人達は誰かの見送りか出迎へにでも來たのだと見えて、汽車が出るまで影も見せなかつた。葉子は早速倉地に事の始終を話して聞かせた。而して二人は思ひ存分胸をすかして笑つた。

「田川の奧さん可哀さうにまだあすこで今にもあなたが來るかともじ〳〵してゐるでせうよ、外の人達の手前ああ云はれてこそ〳〵と逃げ出す譯にも行かないし」

「俺が一つ顏を出して見せれば又面白かつたにな」

「今日は妙な人に遇つて仕舞つたから又屹度誰かに遇ひますよ。奇妙ねえ、お客樣が來たとなると不思議にたて續くし……」

「不仕合せなんぞも來出すと束になつて來くさるて」

倉地は何か心ありげにかう云つて澁い顏をしながらこの笑ひ話を結んだ。

葉子は今朝の發作の反動のやうに、田川夫人の事があつてから唯何となく心が浮々して仕やうがなかつた。若しそこに客がゐなかつたら、葉子は子供のやうに單純な愛嬌者になつて、倉地に澁い顏ばかりはさせておかなかつたらう。「如何して世の中には何處にでも他人の邪魔に來ましたと云はんばかりにかう澤山人がゐるんだらう」と思つたりした。それすらが葉子には笑ひの種となつた。自分達の向座にしかつめらしい顏をして老年の夫婦者が坐つてゐるのを、葉子は暫くまじ〳〵と見やつてゐたが、その人達のしかつめらしいのが無性にグロテスクな不思議なものに見え出して、とう〳〵我慢がし切れずに、ハンケチを口にあてゝきゆつ〳〵と噴き出してしまつた。

三七

天心に近くぽつりと一つ白く湧き出た雲の色にも形にもそれと知られるやうな闌はな春が、所々の別莊の建物の外には見渡すかぎり古く寂びれた鎌倉の谷々にまで溢れてゐた。重い砂土の白ばんだ道の上には落椿が一重櫻の花とまじつて無殘に落ち散つてゐた。櫻の梢には紅味を持つた若葉がきら〳〵と日に輝いて、淺い影を地に落した。名もない雜木までが美しかつた。蛙の聲が眠むく田圃の方から聞こえて來た。休暇でない故か、思ひの外に人の雜閙もなく、時折り、同じ花簪を、女は髮に男は襟にさして先達らしいのが紫の小旗を持つた、遠い所から春

を逐つて來たらしい田舍の人達の群れが、酒の氣も借らずにしめやかに話し合ひながら通るのに行き遇ふ位のものだつた。

倉地も汽車の中から自然に氣分が晴れたと見えて、いかにも屈託なくなつて見えた。二人は停車場の附近にある或る小綺麗な旅館を兼ねた料理屋で中食をしたゝめた。日朝樣ともどんぶく樣とも云ふ寺の屋根が庭先に見えて、そこから眼病の祈禱だと云ふ團扇太鼓の音がどんぶく／＼と單調に聞こえるやうな所だつた。東の方はその名さながらの屛風山が若葉で花よりも美しく裝はれて霞んでゐた。短く美しく苅り込まれた芝生の芝はまだ萠えてゐなかつたが、所疎らに立ち連なつた小松は綠をふきかけて、八重櫻はのぼせたやうに花で首垂れてゐた。もう袷一枚になつて、そこに食物を運んで來る女中は襟前を寛げながら夏が來たやうだと云つて笑つたりした。

「こゝはいゝわ。今日はこゝで宿りませう」

葉子は計畫から計畫で頭を一杯にしてゐた。而してそこに用らないものを預けて、江ノ島の方まで車を走らした。

歸りには極樂寺坂の下で二人とも車を捨てゝ海岸に出た。もう日は稻村ケ崎の方に傾いて砂濱はやゝ暮れ初めてゐた。小坪の鼻の崕の上に若葉に包まれてたつた一軒建てられた西洋人の白ペンキ塗りの別莊が、夕日を受けて綠色に染めたコケットの、髮の中のダイヤモンドのやうに輝いてゐた。その崕下の民家からは炊煙が夕靄と一緖になつて海の方に棚引いてゐた。波打際の砂はいゝ程に濕つて葉子の吾妻下駄の齒を吸つた。二人は別莊から散歩に出て來たらしい幾組かの上品な男女の群れと出遇つたが、葉子は自分の容貌なり服裝なりが、そのどの群れのどの人にも立ち勝つてゐるのを意識して、輕い誇りと落ち付きを感じてゐた。倉地もさう云ふ女を自分の伴侶とするのを強ち無頓着には思はぬらしかつた。

「誰かひょんな人に遇ふだらうと思つてゐましたが甘く誰にも遇はなかつてね。向うの小坪の人家の見える所まで行きませうね。而して光明寺の櫻を見て歸りませう。さうすると丁度お腹がいゝ空き具合になるわ」

倉地は何んとも答へなかつたが、無論承知でゐるらしかつた。葉子はふと海の方を見て倉地に又口を切つた。

「あれは海ね」

「仰せの通り」

倉地は葉子が時々途轍もなく判り切つた事を少女見たいな無邪氣さで云ふ、又それが始つたといふやうに澁さうな笑ひを片頰に浮べて見せた。

「私もう一度あの眞只中に乘り出して見たい」

「して如何するのだい」

倉地もさすが長かつた海の上の生活を遠く思ひやるやうな顏をしながら云つた。

「たゞ乘り出して見たいの。どーつと見界もなく吹きまくく風の中を、大波に思ひ存分搖られながら、顚覆へりさうになつては立ち直つて切り拔けて行くあの船の上の事を思ふと、胸がどき〳〵する程もう一度乘つて見たくなりますわ。こんな所嫌やねえ、住んで見ると」

さう云つて葉子はパラソルを開いたまゝ柄の先きで白い砂をざく〳〵と刺し通した。

「あの寒い晩の事、私が甲板の上で考へ込んでゐた時、あなたが灯をぶら下げて岡さんを連れて、やつて入らしつたあの時の事などを私は譯もなく思ひ出しますわ。あの時私は海でなければ聞けないやうな音樂を聞いてゐましたわ。陸の上にはあんな音樂は聞かうと云つたつてありやしない。おーい、おーい、おい、おい、おい、おーい……あれは何？」

「何んだそれは」

倉地は怪訝な顔をして葉子を振り返つた。

「あの聲」

「どの」

「海の聲……人を呼ぶやうな……お互で呼び合ふやうな」

「何んにも聞こえやせんぢやないか」

「その時聞いたのよ……こんな淺い所では何が聞こえますものか」

「俺は永年海の上で暮したが、そんな聲は一度だつて聞いた事はないわ」

「さうお。不思議ね。音樂の耳のない人には聞こえないのか知ら。……確かに聞こえましたよ、あの晩に……それは氣味の惡いやうな物凄いやうな……謂はゞね、一緒になるべき筈なのに一緒になれなかつた……その人達が幾億萬と海の底に集まつてゐて、銘々死にかけたやうな低い音で、おーい、おーいと呼び立てる、それが一緒になつてあんなぼんやりした大きな聲になるかと思ふやうなそんな氣味の惡い聲なの……何處かで今でもその聲が聞こえるやうよ」

「木村がやつてゐるのだらう」

さう云つて倉地は高々と笑つた。葉子は妙に笑へなかつた。而してもう一度海の方を眺めやつた。眼も屆かないやうな遠くの方に、大島が山の腰から下は夕靄にぼかされて無くなつて、上の方だけがへの字を描いてぼんやりと空に浮んでゐた。

二人は何時か滑川の川口の所まで來着いてゐた。稻瀨川を渡る時、倉地は、横濱埠頭で葉子にまつはる若者に

したやうに、葉子の上體を右手に輕々とかゝへて、苦もなく細い流れを跳り越してしまつたが、滑川の方はさうは行かなかつた。二人は川幅の狹さうな所を尋ねて段々上流の方に流れに沿うて上つて行つたが、川幅は廣くなつて行くばかりだつた。

「面倒臭い、歸りませうか」

大きな事を云ひながら、光明寺までには半分道も來ない中に、下駄全體が滅入りこむやうな砂道で疲れ果てゝ仕舞つた葉子はかう云ひ出した。

「あすこに橋が見える、兎に角あすこまで行つて見ようや」

倉地はさう云つて海岸線に沿うてむつくり盛れ上つた砂丘の方に續く砂道を昇り始めた。葉子は倉地に手を引かれて氣息をせいせい云はせながら、筋肉が强直するやうに疲れた足を運んだ。自分の健康の衰退が今更にはつきり思はせられるやうなそれは疲れ方だつた。今にも破裂するやうに心臟が皷動した。

「一寸待つて、辨慶蟹を踏みつけさうで步けやしませんわ」

さう葉子は申譯らしく云つて幾度か足を停めた。實際その邊には紅い甲良を背負つた小さな蟹がいかめしい鋏を上げて、ざわざわと音を立てる程夥しく横行してゐた。それが如何にも晚春の夕暮らしかつた。

砂丘を上り切ると材木座の方に續く道路に出た。葉子は如何も不思議な心持で、濱から見えてゐた亂橋の方に行く氣になれなかつた。然し倉地がどんどんそつちに向いて步き出すので、少しすねたやうにその手に取りすがりながらもつれ合つて人氣のないその橋の上まで來てしまつた。

橋の手前の小さな掛茶屋には主人の婆さんが葭で圍つた薄暗い小部屋の中で、こそこそと店をたゝむ支度でもしてゐるだけだつた。

橋の上から見ると、滑川の水は輕く薄濁つて、まだ芽を吹かない兩岸の枯葦の根を靜かに洗ひながら音も立てずに流れてゐた。それが向うに行くと吸ひ込まれたやうに砂の盛れ上つた後ろに隱れて、又その先きに光つて現はれて、穩やかなリズムを立てゝ寄せ返す海邊の波の中に溶けこむやうに注いでゐた。

ふと葉子は眼の下の枯葦の中に動くものがあるのに氣が付いて見ると、大きな麥桿の海水帽を被つて、杭に腰かけて、釣竿を握つた男が、帽子の庇の下から眼を光らして葉子をぢつと見つめてゐるのだつた。葉子は何んの氣なしにその男の顏を眺めた。

木部孤笻だつた。

帽子の下に隱れてゐる故か、その顏は一寸見忘れる位年がいつてゐた。而して服裝からも樣子からも、落魄といふやうな一種の氣分が漂つてゐた。木部の顏は假面のやうに冷然としてゐたが、釣竿の先きは不注意にも水に浸つて、釣絲が女の髮の毛を流したやうに水に浮いて輕く震へてゐた。

さすがの葉子も胸をどきんとさせて思はず身を退らせた。「おーい、おい、おい、おい、おーい」……それがその瞬間に耳の底をすーつと通つてすーつと行方も知らず過ぎ去つた。怯づ〳〵と倉地を窺ふと、倉地は何事も知らぬげに、暖かに暮れて行く靑空を振り仰いで眼一杯に眺めてゐた。

「歸りませう」

葉子の聲は震へてゐた。倉地は何んの氣なしに葉子を顧みたが、

「寒くでもなつたか、唇が白いぞ」

と云ひながら欄干を離れた。二人がその男に後ろを見せて五六歩歩み出すと、

「一寸お待ち下さい」

と云ふ聲が橋の下から聞こえた。倉地は始めてそこに人のゐたのに氣が付いて、眉をひそめながら振り返つた。ざわ〳〵と葦を分けながら小路を登つて來る跫音がして、ひよつこり眼の前に木部の姿が現はれ出た。葉子はその時は然し凡てに對する身構へを十分にしてしまつてゐた。

木部は少し馬鹿叮嚀な位に倉地に對して帽子を取ると、すぐ葉子に向いて、

「不思議な所でお目に懸りましたね、暫く」

と云つた。一年前の木部から想像してどんな激情的な口調で呼びかけられるかも知れないと危ぶんでゐた葉子は、案外冷淡な木部の態度に安心もし、不安も感じた。木部は如何かすると居直るやうな事をしかねない男だと葉子は豫ねて思つてゐたからだ。然し木部といふ事を先方から云ひ出すまでは包めるだけ倉地には事實を包んで見ようと思つて、唯にこやかに、

「こんな所でお目に懸らうとは……私も本當に驚いてしまひました。でもまあ本當にお珍らしい……只今こちらの方にお住ひで御座いますの？」

「住ふといふ程もない……くすぶりこんでゐますよハヽヽヽ」

と木部は虛ろに笑つて、鍔の廣い帽子を書生つぽらしく阿彌陀に被つた。と思ふと又急いで取つて、

「あんな所からいきなり飛び出して來てかう狎れ〳〵しく早月さんにお話しかけて變にお思ひでせうが、僕は下らんやくざ者で、これでも元は早月家には色々御厄介になつた男です。申上げる程の名もありませんから、まあ御覽の通りの奴です。……どちらにお出でゞす」

と倉地に向いて云つた。その小さな眼には勝れた才氣と、敗け嫌ひらしい氣象とが迸つてはゐたけれども、ぢぢむさい顎髯と、伸びるまゝに伸ばした髮の毛とで、葉子でなければその特長は見えないらしかつた。倉地は何

處の馬の骨かと思ふやうな調子で、自分の名を名乘る事は固よりせずに、輕く帽子を取つて見せたゞけだつた。而して、

「光明寺の方へでも行つて見ようかと思つたのだが、河が渡れんで……この橋を行つても行かれますだらう」

三人は橋の方を振り返つた。眞直な土堤道が白く山の際の方まで續いてゐた。

「行けますがね、それは濱傳ひの方が趣がありますよ。防風草でも摘みながらいらつしやい。河も渡れます、御案內しませう」

と云つた。葉子は一時も早く木部から遁れたくもあつたが、同時にしんみりと一別以來の事などを語り合つて見たい氣もした。いつか汽車の中で遇つてこれが最後の對面だらうと思つた、あの時からすると木部はずつとさばけた男らしくなつてゐた。その服裝がいかにも生活の不規則なのと窮迫してゐるのを思はせると、葉子は親身な同情にそゝられるのを拒む事が出來なかつた。

倉地は四五歩先立つて、その後から葉子と木部とは間を隔てゝ並びながら、又辨慶蟹のうざ〳〵ゐる砂道を濱の方に降りて行つた。

「あなたの事は大抵噂や新聞で知つてゐましたよ……人間てものはをかしなもんですね。……私はあれから落伍者です。何をして見ても成り立つた事はありません。妻も子供も里に返してしまつて今は一人でこゝに放浪してゐます。每日釣りをやつてね……あゝやつて水の流れを見てゐると、それでも晚飯の酒の肴位なものは釣れて來ますよハヽヽヽヽ」

木部は又虛ろに笑つたが、その笑ひの響が傷口にでも應へたやうに急に默つてしまつた。砂に喰ひ込む二人の下駄の音だけが聞こえた。

「然しこれでゐて全くの孤獨でもありませんよ。ついこの間から知り合ひになつた男だが、砂山の砂の中に酒を埋めておいて、ぶらりとやつて來てそれを飮んで醉ふのを樂しみにしてゐるのと知り合ひになりましてね……そいつの人生觀(ライフ・フイロソフイー)が馬鹿に面白いんです。徹底した運命論者ですよ。酒を呑んで運命論を吐くんです。丸で仙人ですよ」

倉地はどん〳〵歩いて二人の話聲が耳に入らぬ位遠ざかつた。葉子は木部の口から例の感傷的な言葉が今出るか今出るかと思つて待つてゐたけれども、木部には些(いさゝ)かもそんな風はなかつた。笑ひばかりでなく、凡てに虚(うつ)ろな感じがする程無感情に見えた。

「あなたは本當に今何をなさつて入らつしやいますの」

と葉子は少し木部に近寄つて尋ねた。木部は近寄られたゞけ葉子から遠退(とほの)いて又虚ろに笑つた。

「何をするもんですか。人間に何が出來るもんですか。……もう春も末になりましたね」

途轍(とてつ)もない言葉を強ひてくつ附けて木部はそのよく光る眼で葉子を見た。而してすぐその眼を返して、遠ざかつた倉地をこめて遠く海と空との境目に眺め入つた。

「私あなたとゆつくりお話がして見たいと思ひますが……」

かう葉子はしんみり竊(ぬす)むやうに云つて見た。木部は少しもそれに心を動かされないやうに見えた。

「さう……それも面白いかな。……私はこれでも時折はあなたの幸福を祈つたりしてゐますよ、をかしなもんですね。ハヽヽ(葉子がその言葉につけ入つて何か云はうとするのを木部は悠々(いう〳〵)とおつかぶせて)あれが、あすこに見えるのが大島です。ぽつんと一つ雲か何かのやうに見えるでせう空に浮いて……大島つて伊豆の先きの離れ島です、あれが私の釣をする所から正面に見えるんです。あれでゐて、日によつて色がさま〴〵に變ります。

どうかすると噴煙がぽーつと見える事もありますよ」
又言葉がぽつんと切れて沈默が續いた。下駄の音の外に波の音も段々と近く聞こえ出した。葉子は唯々胸が切なくなるのを覺えた。もう一度如何してもゆつくり木部に遇ひたい氣になつてゐた。
「木部さん……あなたさぞ私を恨んでいらつしやいませうね。……けれども私あなたに如何しても申上げておきたい事がありますの。何んとかして一度私に會つて下さいません？　その中に。私の番地は……」
「お會ひしませう『その中に』……その中にはいゝ言葉ですね……その中に……。話があるからと女に云はれた時には、話を期待しないで抱擁か虛無かを覺悟しろつて名言がありますぜ、ハ、、、、」
「それは餘りな仰有り方ですわ」
葉子は極めて冗談のやうに又極めて眞面目のやうにかう云つて見た。
「餘りか餘りでないか……兎に角名言には相違ありますまい、ハ、、、、」
木部は又虛ろに笑つたが、又痛い所にでも觸れたやうに突然笑ひやんだ。
倉地は波打際近く迄來ても渡れさうもないので遠くからこつちに振り向いて、むづかしい顏をして立つてゐた。
「どれお二人に橋渡しをして上げませうかな」
さう云つて木部は川邊の葦を分けて暫く姿を隱してゐたが、やがて小さな田舟に乘つて竿をさして現はれて來た。その時葉子は木部が釣道具を持つてゐないのに氣がついた。
「あなた釣竿は」
「釣竿ですか……釣竿は水の上に浮いてるでせう。いまにこゝまで流れて來るか……來ないか……」
さう應へて案外上手に舟を漕いだ。倉地は行き過ぎたゞけを忙いで取つて返して來た。而して三人は危かしく

立つたまゝ舟に乘つた。倉地は木部の前も構はず脇の下に手を入れて葉子を抱へた。木部は冷然として竿を取つた。三突きほどで他愛なく舟は向う岸に着いた。倉地が逸早く岸に飛び上つて、手を延ばして葉子を助けようとした時、木部が葉子に手を貸してゐたので、葉子はすぐにそれを摑んだ。思ひ切り力を籠めた爲めか、木部の手が舟を漕いだ爲めだつたか、兎に角二人の手は握り合はされたまゝ小刻みに烈しく震へた。

「やつ、どうも難有う」

倉地は葉子の上陸を助けてくれた木部にかう禮を云つた。

木部は舟からは上らなかつた。而して鍔廣の帽子を取つて、

「それぢやこれでお別れします」

と云つた。

「暗くなりましたから、お二人とも足許に氣をおつけなさい。左樣なら」

と附け加へた。

三人は相當の挨拶を取り交はして別れた。一町程來てから急に行手が明るくなつたので、見ると光明寺裏の山の端に、夕月が濃い雲の切れ目から姿を見せたのだつた。葉子は後ろを振り返つて見た。紫色に暮れた砂の上に木部が舟を葦間に漕ぎ返して行く姿が影繪のやうに黑く眺められた。葉子は白琥珀のパラソルをぱつと開いて、倉地にはいたづらに見えるやうに振り動かした。

三四町來てから倉地が今度は後ろを振り返つた。もうそこには木部の姿はなかつた。葉子はパラソルを疊まうとして思はず淚ぐんでしまつてゐた。

「あれは一體誰だ」

「誰だつていゝぢやありませんか」
暗さにまぎれて倉地に涙は見せなかつたが、葉子の言葉は痛ましく疳走つてゐた。
「ローマンスの澤山ある女はちがつたものだな」
「えゝ、その通り……あんな乞食見たいな見つともない戀人も持つた事があるのよ」
「さすがはお前だよ」
「だから愛想が盡きたでせう」
突如(とつじよ)として又云ひやうのない淋しさ、哀(かな)しさ、口惜しさが暴風のやうに襲つて來た。又來たと思つてもそれはもう遲かつた。砂の上に突つ伏して、今にも絕え入りさうに身もだえする葉子を、倉地は聞こえぬ程度に舌打ちしながら介抱せねばならなかつた。

その夜旅館に歸つてからも葉子はいつまでも眠らなかつた。そこに來て働く女中達を一人々々突慳貪(つけんどん)に嚴(きび)しくたしなめた。仕舞には一人として寄りつくものが無くなつて仕舞ふ位。倉地も始めの中はしぶ〳〵つき合つてゐたが、遂には勝手にするがいゝと云はんばかりに座敷を代へて獨りで寢てしまつた。

春の夜は唯、事もなくしめやかに更けて行つた。遠くから聞こえて來る蛙の鳴き聲の外には、日朝樣の森あたりで啼くらしい梟(ふくろふ)の聲がするばかりだつた。葉子とは何んの關係もない夜鳥でありながら、その聲には人を馬鹿(ま)にし切つたやうな、それでゐて聞くに堪へない程淋しい響きが潛んでゐた。ほう、ほう……ほう、ほう〳〵と間遠(とほ)に單調に、同じ木の枝と思はしい所から聞こえてゐた。人々が寢鎭(しづ)まつて見ると、憤怒(ふんぬ)の情は何時か消え果てゝ、云ひやうのない寂寞がその後に殘つた。

葉子のする事云ふ事は一つ〳〵葉子を倉地から引き離さうとするものばかりだつた。今夜も倉地が葉子から待

ち望んでゐたものを葉子は明かに知つてゐた。而かも葉子は譯の分らない怒りに任せて自分の思ふまゝを振舞つた結果、倉地には不快極まる失望を與へたに違ひない。かうしたまゝで日がたつに從つて、倉地は否應なしに更に新しい性的興味の對象を求めるやうになるのは目前の事だ。現に愛子はその候補者の一人として、倉地の眼には映り始めてゐるのではないか。葉子は倉地との關係を始めから考へ辿つて見るに連れて、如何しても間違つた方向に深入りしたのを悔いないではゐられなかつた。然し倉地を手なづける爲めにはあの道を擇ぶより仕方がなかつたやうにも思へる。倉地の性格に缺點があるのだ。さうではない。倉地に愛を求めて行つた自分の性格に缺點があるのだ。……そこまで理窟らしく理窟を辿つて來て見ると、葉子は自分といふものが踏みにじつても飽き足りない程いやな者に見えた。

「何故私は木部を捨て木村を苦しめなければならないのだらう。何故木部を捨てた時に私は心に望んでゐるやうな道を驀地に進んで行く事が出來なかつたのだらう。私を木村に強ひて押し附けた五十川の小母さんは惡い……私の恨みは如何しても消えるものか。……と云つておめ／＼とその策略に乘つてしまつた私は何んといふ腑甲斐ない女だつたのだらう。倉地にだけは私は失望したくないと思つた。今までの總ての失望をあの人で全部取り返してまだ餘り切るやうな喜びを持たうとしたのだつた。私は倉地とは離れてはゐられない人間だと確かに信じてゐた。そして私の持つてる總てを……醜いものゝ總てをも倉地に與へて悲しいとも思はなかつたのだ。私は自分の命を倉地の胸にたゝきつけた。それだのに今は何が殘つてゐる……何が殘つてゐる……。今夜かぎり私は倉地に見放されるのだ。この部屋を出て行つてしまつた時の冷淡な倉地の顏！……私は行かう。これから行つて倉地に詫びよう、奴隷のやうに疊に頭をこすり附けて詫びよう……さうだ。……然し倉地が冷刻な顏をして私の心を見も返らなかつたら……私は生きてる間にそんな倉地の顏を見る勇氣はない。……木部に詫びようか……木部は

居所さへ知らさうとはしないのだもの……」

葉子は瘦せた肩を痛ましく震はして、倉地から絶縁されてしまつたもの丶やうに、淋しく哀しく淚の涸れるかと思ふまで泣くのだつた。靜まり切つた夜の空氣の中に、時々鼻をかみながらすゝり上げ〳〵泣き伏す痛ましい聲だけが聞こえた。葉子は自分の聲につまされて猶更悲哀のどん底に沈んで行つた。

稍ゝ暫くしてから葉子は決心するやうに、手近かにあつた硯箱と料紙とを引き寄せた。而して震へる手先を強ひて繰りながら簡單な手紙を乳母にあてゝ書いた。それには乳母とも定子とも斷然緣を切るから以後他人と思つてくれ。若し自分が死んだらこゝに同封する手紙を木部の所に持つて行くがいゝ。木部は屹度如何してゞも定子を養つてくれるだらうからと云ふ意味だけを書いた。而して木部あての手紙には、

「定子はあなたの子です。その顏を一目御覽になつたらすぐお分りになります。私は今まで意地からも定子は私一人のものとする積りでゐました。けれども私が世にないものとなつた今は、あなたはもう私の罪を許して下さるかとも思ひます。せめては定子を受け入れて下さいませう。

葉子の死んだ後

憐れなる定子のマヽより

定子のお父樣へ」

と書いた。淚は卷紙の上に留度なく落ちて字をにじました。東京に歸つたら溜めて置いた預金の全部を引き出してそれを爲替にして同封する爲めに封を閉ぢなかつた。

最後の犧牲……今までとつおいつ捨て兼ねてゐた最愛のものを最後の犧牲にして見たら、多分は倉地の心がもう一度自分に戾つて來るかも知れない。葉子は荒神に最愛のものを生牲として願ひを聽いて貰はうとする太古の

人のやうな必死な心になつてゐた。それは胸を張り裂くやうな犠牲だつた。葉子は自分の眼からも英雄的に見えるこの決心に感激して又新しく泣き崩れた。

「どうか、どうか、……どうーか」

葉子は誰にともなく手を合はして、一心に念じておいて、雄々しく涙を押し拭ふと、そつと座を立つて、倉地の寢てゐる方へと忍びよつた。廊下の明りは大半消されてゐるので、硝子窓から朧にさし込む月の光が便りになつた。廊下の半分がた燐の燃えたやうなその光の中を、痩せ細つて一層背丈けの伸びて見える葉子は、影が歩むやうに音もなく靜かに歩みながら、そつと倉地の部屋の襖を開いて中に這入つた。薄暗く點つた有明の下に倉地は何事も知らぬげに快く眠つてゐた。葉子はそつとその枕許に座を占めた。而して倉地の寢顏を見守つた。

葉子の眼にはひとりでに涙が湧くやうに溢れ出て、厚ぼつたいやうな感じになつた唇は我れにもなくわな〳〵と震へて來た。葉子はさうしたまゝで默つてなほも倉地を見續けてゐた。葉子の眼に溜つた涙の爲めに倉地の姿は見る〳〵にじんだやうに輪廓がぼやけてしまつた。葉子は今更人が違つたやうに心が弱つて、受け身にばかりならずにはゐられなくなつた自分が悲しかつた。何んと云ふ情けない可哀さうな事だらう。さう葉子はしみ〴〵と思つた。

段々葉子の涙はすゝり泣きに代つて行つた。倉地が眠りの中でそれを感じたらしく、うるさゝうに呻き聲を小さく立てゝ寢返りを打つた。葉子はぎよつとして氣息をつめた。

然しすぐすゝり泣きは又返つて來た。葉子は何事も忘れ果てゝ、倉地の床の側にきちんと坐つたまゝいつまでも〳〵泣き續けてゐた。

三八

「何をさう怯づ／＼してゐるのかい。そのボタンを後ろにはめてくれさへすればそれでいゝのだに」

倉地は倉地にしては特にやさしい聲でかう云つた、ワイシヤツを着ようとしたまゝ葉子に背を向けて立ちながら。葉子は飛んでもない失策でもしたやうに、シヤツの背部につけるカラーボタンを手に持つたまゝおろ／＼してゐた。

「つひシヤツを仕替へる時それだけ忘れてしまつて……」

「云ひ譯なんぞはいゝわい。早く賴む」

「はい」

葉子はしとやかにさう云つて寄り添ふやうに倉地に近寄つてそのボタンをボタン孔に入れようとしたが、糊が硬いのと、氣おくれがしてゐるので一寸は這入りさうになかつた。

「濟みませんが一寸脫いで下さいましな」

「面倒だな、このまゝで出來ようが」

葉子はもう一度試みた。然し思ふやうには行かなかつた。倉地はもう明かにいら／＼し出してゐた。

「駄目か」

「まあ一寸」

「出せ、貸せ俺に。何んでもない事だに」

さう云つてくるりと振り返つて一寸葉子を睨みつけながら、ひつたくるやうにボタンを受け取つた。而して又

く震へ出した。

葉子に後ろを向けて自分でそれを箝めようとかゝつた。然し中々うまく行かなかつた。見る／＼倉地の手は烈しく震へ出した。

「おい、手傳つてくれてもよからうが」

葉子が慌てゝ手を出すと機みにボタンは疊の上に落ちてしまつた。葉子がそれを拾はうとする間もなく、頭の上から倉地の聲が雷のやうに鳴り響いた。

「馬鹿！　邪魔をしろと云ひやせんぞ」

葉子はそれでも何處までも優しく出ようとした。

「御免下さいね、私お邪魔なんぞ……」

「邪魔よ。これで邪魔でなくて何んだ……えゝ、そこぢやありやせんよ。そこに見えとるぢやないか」

倉地は口を尖らして顎を突き出しながらどしい〳〵と足を擧げて疊を踏み鳴らした。

葉子はそれでも我慢した。而してボタンを拾つて立ち上ると倉地はもうワイシャツを脫ぎ捨てゝゐる所だつた。

「胸糞の悪い……おい日本服を出せ」

「襦袢の襟がかけずにありますから……洋服で我慢して下さいましね」

葉子は自分が持つてゐると思ふ程の媚をある限り眼に集めて歎願するやうにから云つた。

「お前には頼まんまでよ……愛ちやん」

倉地は大きな聲で愛子を呼びながら階下の方に耳を澄ました。葉子はそれでも根かぎり我慢しようとした。階子段をしとやかに昇つて愛子がいつものやうに柔順に部屋に這入つて來た。倉地は急に相好を崩してにこやかになつてゐた。

「愛ちやん賴む、シヤツにそのボタンをつけておくれ」

愛子は何事の起つたかを露知らぬやうな顔をして、男の肉感をそゝるやうな堅肉の肉體を美しく折り曲げて、雪白のシヤツを手に取り上げるのだつた。葉子がちやんと倉地にかしづいてそこにゐるのを全く無視したやうなづう〳〵しい態度が、ひがんでしまつた葉子の眼には憎々しく映つた。

「餘計な事をおしでない」

葉子はとう〳〵かつとなつて愛子をたしなめながらいきなり手にあるシヤツをひつたくつてしまつた。

「貴樣は……俺が愛ちやんに賴んだに何故餘計な事をしくさるんだ」

とさう云つて威丈高になつた倉地には葉子はもう眼もくれなかつた。愛子ばかりが葉子の眼には見えてゐた。

「お前は下にゐればそれでいゝ人間なんだよ。おさんどんの仕事も碌々出來はしない癖に餘計な所に出しやばるもんぢやない事よ。……下に行つてお出で」

愛子はかうまで姉にたしなめられても、逆ふでもなく怒るでもなく、默つたまゝ柔順に、多恨な眼で姉をぢつと見て靜々とその座を外してしまつた。

こんなもつれ合つたいさかひがともすると葉子の家で繰り返されるやうになつた。獨りになつて氣が鎭まると葉子は心の底から自分の狂暴な振舞ひを悔いた。而して氣を取直した積りで、何處までも愛子をいたはつてやらうとした。愛子に愛情を見せる爲めには義理にも貞世につらく當るのが當然だと思つた。而して愛子の見てゐる前で、愛するものが愛する者を憎んだ時ばかりに見せる殘虐な呵責を貞世に與へたりした。葉子はそれが理不盡極まる事だとは知つてゐながら、さう偏頗に傾いて來る自分の心持を如何する事も出來なかつた。それのみならず葉子には自分の鬱憤を漏らす爲めの對象が是非一つ必要になつて來た。人でなければ動物、動物でなければ草木、草

木でなければ自分自身に何かなしに傷害を與へてゐなければ氣が休まなくなつた。庭の草などを掴んでゐる時でも、ふと氣が付くと葉子はしやがんだまゝ一莖の名もない草をたつた一本摘みとつて、眼に涙を一杯溜めながら爪の先きで寸々に切り虐んでゐる自分を見出したりした。

同じ衝動は葉子を驅つて倉地の抱擁に自分自身を思ひ存分虐げようとした。そこには倉地の愛を少しでも多く自分に繋ぎたい欲求も手傳つてはゐたけれども、倉地の手で極度の苦痛を感ずる事に不滿足極まる滿足を見出さうとしてゐたのだ。精神も肉體も甚しく病に蝕まれた葉子は抱擁によつての有頂天な歡樂を味ふ資格を失つてから可なり久しかつた。そこには唯地獄のやうな呵責があるばかりだつた。凡てが終つてから葉子に殘るものは、嘔吐を催すやうな肉體の苦痛と、強ひて自分を忘我に誘はうと藻掻きながら、それが裏切られて無益に終つた。その後に襲つて來る唾棄すべき倦怠ばかりだつた。倉地が葉子のその悲慘な無感覺を分け前して例へやうもない憎惡を感ずるのは勿論だつた。葉子はそれを知ると更に云ひ知れない便りなさを感じて又烈しく倉地に挑みかゝるのだつた。倉地は見る／＼一歩々々葉子から離れて行つた。而して益々その氣分は荒んで行つた。

「貴樣は俺に厭きたな。男でも作り居つたんだらう」

さう唾でも吐き捨てるやうに忌々しげに倉地があらはに云ふやうな日も來た。

「如何すればいゝんだらう」

さう云つて額の所に手をやつて頭痛を忍びながら葉子は獨り苦しまねばならなかつた。

或る日葉子は思ひ切つて竊かに醫師を訪れた。醫師は手もなく、葉子の總ての惱みの原因は子宮後屈症と子宮内膜炎とを併發してゐるからだと云つて聞かせた。葉子は餘りに分り切つた事を醫師がさも知つたか振りに云つて聞かせるやうにも、又そののつぺりした白い顏が、恐ろしい運命が葉子に對して裝うた假面で、葉子はその言

葉によつて眞暗な行手を明かに示されたやうにも思つた。而して怒りと失望とを抱きながらその家を出た。歸途葉子は本屋に立ち寄つて婦人病に關する大部な醫書を買ひ求めた。それは自分の病症に關する徹底的な知識を得よう爲めだつた。家に歸ると自分の部屋に閉ぢ籠つてすぐ大體を讀んで見た。後屈症は外科手術を施して位置矯正をする事によつて、內膜炎は內膜炎を抉搔する事によつて、それが器械的の發病である限り全治の見込みはあるが、位置矯正の場合などに、施術者の不注意から子宮底に穿孔を生じた時などには、往々にして激烈な腹膜炎を結果する危險が伴はないでもないなどゝ書いてあつた。葉子は倉地に事情を打ち明けて手術を受けようかとも思つた。普段ならば常識がすぐそれを葉子にさせたに違ひない。然し今はもう葉子の神經は極度に脆弱になつて、あらぬ方向にばかり我れにもなく鋭く働くやうになつてゐた。倉地は疑ひもなく自分の病氣に愛想を盡かすだらう。縱令そんな事はないとしても入院の期間に倉地の肉の要求が倉地を思はぬ方に連れて行かないとは誰が保證出來よう。それは葉子の僻見であるかも知れない、然し若し愛子が倉地の注意を牽いてゐるとすれば、自分の留守の間に倉地が彼女に近づくのは唯一步の事だ。愛子があの年であの無經驗で、倉地のやうな野性と暴力とに興味を持たぬのは勿論、一種の厭惡をさへ感じてゐるのは察せられないではない。愛子は屹度倉地を退けるだらう。然し倉地には恐ろしい無恥がある。而して一度倉地が女を己れの力の下に取り拉いだら、如何なる女も二度と倉地から遁れる事の出來ないやうな奇怪な魔醉の力を持つてゐる。思想とか禮儀とかに煩はされない、無盡藏に強烈で征服的な生のまゝな男性の力は如何な女をもその本能に立ち返らせる魔術を持つてゐる。而かもあの柔順らしく見える愛子は葉子に對して生れるとからの敵意を挾んでゐるのだ。どんな可能でも描いて見る事が出來る。さう思ふと葉子は我が身で我が身を燒くやうな未練と嫉妬の爲めに前後も忘れてしまつた。何んとかして倉地を縛り上げるまでは葉子は甘んじて今の苦痛に堪へ忍ばうとした。

その頃からあの正井と云ふ男が倉地の留守を窺つては葉子に會ひに來るやうになつた。

「あいつは犬だつた。危く手を噛ませる所だつた。どんな事があつても寄せ付けるではないぞ」

と倉地が葉子に云ひ聞かせてから一週間も經たない後に、ひよつこり正井が顏を見せた。中々のしやれ者で、寸分の隙もない身なりをしてゐた男が、どこかに貧窮を香はすやうになつてゐた。カラーには薄すり汗じみが出來て、ズボンの膝には燒けこげの小さな孔が明いたりしてゐた。葉子が上げる上げないも云はない中に、懇意づくらしく、どん／＼玄關から上りこんで座敷に通つた。そして高價らしい西洋菓子の美しい箱を葉子の眼の前に風呂敷から取り出した。

「折角お出で下さいましたのに倉地さんは留守ですから、憚りですが出直してお遊びに入らしつて下さいまし。これはそれまでお預りおきを願ひますわ」

さう云つて葉子は顏には如何にも懇意を見せながら、言葉には二の句がつけない程の冷淡さと强さとを示してやつた。然し正井はしやあ／＼として平氣なものだつた。ゆつくり內衣囊から卷煙草入れを取り出して、金口を一本摘まみ取ると、炭の上に溜つた灰を靜かにかき除けるやうにして火をつけて、長閑かに香りのいゝ煙を座敷に漂はした。

「お留守ですか……それは却つて好都合でした……もう夏らしくなつて來ましたね、隣りの薔薇も咲き出すでせう……遠いやうだがまだ去年の事ですねえ、お互樣に太平洋を往つたり來たりしたのは……あの頃が面白い盛りでしたよ。私達の仕事もまだ睨まれずにゐたんでしたから……時に奧さん」

さう云つて折り入つて相談でもするやうに正井は煙草盆を押し退けて膝を乘り出すのだつた。人を侮つてかゝつて來ると思ふと葉子はぐつと癪に障つた。然し以前のやうな葉子はそこにはゐなかつた。若しそれが以前であつ

たら、自分の才氣と力量と美貌とに十分の自信を持つ葉子であつたら、毛の末ほども自分を失ふ事なく、優婉に圓滑に男を自分のかけた陥穽の中に陥れて、自縄自縛の苦い目に遇はせてゐるに違ひない。然し現在の葉子は他愛もなく敵を手許まで潜りこませてしまつて唯いら〳〵とあせるだけだつた。さう云ふ破目になると葉子は存外力のない自分であるのを知らねばならなかつた。

正井は膝を乗り出してから、暫く默つて敏捷に葉子の顔色を窺つてゐたが、これなら大丈夫と見極めをつけたらしく、

「少しばかりでいゝんです、一つ融通して下さい」

と切り出した。

「そんな事を仰有つたつて、私に如何しようもない位は御存じぢやありませんか。それや餘人ぢやなし、出來るのなら何んとか致しますけれども、姉妹三人が如何かかうかして、倉地に養はれてゐる今日のやうな境界では、私に何が出來ませう。正井さんにも似合はない的違ひを仰有るのね。倉地なら御相談にもなるでせうから面と向つてお話し下さいまし。中に這入ると私が困りますから」

葉子は取りつく島もないやうにと嫌味な調子でづけ〳〵とかう云つた。正井はせゝら笑ふやうに微笑んで金口の灰を靜かに灰吹きに落した。

「もう少しざつくばらんに云つて下さいよ、昨日今日のお交際ぢやなし。倉地さんとまづくなつた位は御承知ぢやありませんか。……知つていらつしつてさう云ふ口のきゝかたは少しひど過ぎますぜ、（こゝで假面を取つたやうに正井は不貞腐れた態度になつた。然し言葉はどこまでも穏當だつた）嫌はれたつて私は何も倉地さんを如何しようのかうしようのと、そんな薄情な事はしない積りです。倉地さんに怪我があれば私だつて同罪以上ですか

らね。……然し……一つ何んとかならないもんでせうか」

葉子の怒りに昂奮した神經は正井のこの一言にすぐおびえてしまつた。何もかも倉地の裏面を知り拔いてる筈の正井が、捨て鉢になつたら倉地の身の上にどんな災難が降りかゝらぬとも限らぬ。そんな事をさせては飛んだ事になるだらう。そんな事をさせては飛んだ事になる。葉子は益々弱身になつた自分を救ひ出す術に困じ果てゝゐた。

「それを御承知で私の所に入らしつたつて……縱令私に都合がついたとした所で、如何しようもありませんぢやないの。なんぼ私だつても、倉地と仲たがへをなさつたあなたに倉地の金を何する……」

「だから倉地さんのものをおねだりはしませんさ。木村さんからもたんまり來てゐる筈ぢやありませんか。その中から……たんとたあ云ひませんから、窮境を助けると思つてどうか」

正井は葉子を男たらしと見くびつた態度で、情夫を持つてる妾にでも逼るやうな圖々しい顏色を見せた。こんな押問答の結果葉子はとう〳〵正井に三百圓程の金をむざ〳〵とせびり取られてしまつた。葉子はその晩倉地が歸つて來た時もそれを云ひ出す氣力はなかつた。貯金は全部定子の方に送つてしまつて、葉子の手許にはいくらも殘つてはゐなかつた。

それからと云ふもの正井は一週間とおかずに葉子の所に來ては金をせびつた。正井はその折々に、繪島丸のサルンの一隅に陣取つて酒と煙草とにひたりながら、何か知らんひそ〳〵話をしてゐた數人の人達――人を見貫く眼の鋭い葉子にも如何してもその人達の職業を推察し得なかつた數人の人達の仲間に倉地が這入つて始め出した祕密な仕事の巨細を漏らした。正井が葉子を脅かす爲めに、その話には誇張が加へられてゐる、さう思つて聞いて見ても、葉子の胸をひやつとさせる事ばかりだつた。倉地が日清戰爭にも參加した事務長で、海軍の人達にも

航海業者にも割合に廣い交際がある所から、材料の蒐集者としてその仲間の牛耳を取るやうになり、露國や米國に向つて漏らした祖國の軍事上の祕密は中々容易ならざるものらしかつた。倉地の氣分が荒んで行くのも尤だと思はれるやうな事柄を數々葉子は聞かされた。葉子は仕舞には自分自身を護る爲めにも正井の機嫌を取り外してはならないと思ふやうになつた。而して正井の言葉が一語々々思ひ出されて、夜なぞになると眠らせぬ程に葉子を苦しめた。葉子はまた一つの重い祕密を背負はなければならぬ自分を見出した。このつらい意識はすぐに又倉地に響くやうだつた。倉地は兎もすると敵の間諜ではないかと疑ふやうな險しい眼で葉子を睨むやうになつた。而して二人の間には又一つの溝がふえた。

そればかりではなかつた。正井に祕密な金を融通する爲めには倉地からのあてがひだけでは迚も足りなかつた。葉子はありもしない事を誠しやかに書き連ねて木村の方から送金させねばならなかつた。倉地の爲めなら兎にも角にも、倉地と自分の妹達とが豐かな生活を導く爲めになら兎にも角にも、葉子は一種の獰惡な誇りを以てそれをして、男の爲めになら何事でもと云ふ捨て鉢な滿足を買ひ得ないではなかつたが、その金が大抵正井の懷ろに吸收されてしまふのだと思ふと、いくら間接には倉地の爲めだとは云へ葉子の胸は痛かつた。木村からは送金の度毎に相變らず長い消息が添へられて來た。木村の葉子に對する愛着は日を追うて增さるとも衰へる樣子は見えなかつた。仕事の方にも手違ひや誤算があつて始めの見込み通りには成功とは云へないが、葉子の方に送る位の金は如何してゞも都合がつく位の信用は得てゐるから構はず云つてよこせとも書いてあつた。こんな信實な愛情と熱意を絶えず示されるこの頃は葉子もさすがに自分のしてゐる事が苦しくなつて、思ひ切つて木村に總てを打ち開けて、關係を絶たうかと思ひ惱むやうな事が時々あつた。その矢先きなので、葉子は胸に殊更痛みを覺えた。それが益々葉子の神經をいらだゝせて、その病氣にも影響した。而して花の五月が過ぎて、靑葉の六月にならうと

する頃には、葉子は痛ましく痩せ細つた、眼ばかりどぎつい純然たるヒステリー症の女になつてゐた。

三九

巡査の制服は一氣に夏服になつたけれども、その年の氣候はひどく不順で、その白服が美しい程暑い時と、氣の毒な程惡冷(わるび)えのする日が入れ代り立ち代り續いた。從つて晴雨も定めがたかつた。それがどれ程葉子の健康にさし響いたか知れなかつた。葉子は絶えず腰部の不愉快な鈍痛を覺ゆるにつけ、暑くて苦しい頭痛に惱まされるにつけ、何一つ身體に申分の無かつた十代の昔を思ひ忍んだ。晴雨寒暑といふやうなものがこれほど氣分に影響するものとは思ひも寄らなかつた葉子は、寢起きの天氣を何よりも氣にするやうになつた。今日こそは一日氣が晴れ〳〵するだらうと思ふやうな日は一日も無かつた。今日も亦つらい一日を過さねばならぬと云ふその忌(いま)はしい豫想だけでも葉子の氣分を害(そこな)ふには十分過ぎた。

五月の始め頃から葉子の家に通ふ倉地の足は段々遠退(とほの)いて、時々何處へとも知れぬ旅に出るやうになつた。それは倉地が葉子のしつゝこい挑みと、激しい嫉妬と、理不盡な癇癖(かんぺき)の發作とを避けるばかりだとは葉子自身にさへ思へない節(ふし)があつた。倉地の所謂事業には何か可なり致命的な内場破(うちばわ)れが起つて、倉地の力でそれを如何(どう)する事も出來ないらしい事はおぼろげながらも葉子にも判(わか)つてゐた。債權者であるか、商賣仲間であるか、兎に角さう云ふ者を避ける爲めに不意に倉地が姿を隱さねばならぬらしい事は確かだつた。それにしても倉地の疎遠は一向(ひたすら)に葉子には憎かつた。

或る時葉子は激しく倉地に迫つてその仕事の内容をすつかり打ち明けさせようとした。倉地の情人である葉子が倉地の身に大事が降りかゝらうとしてゐるのを知り乍ら、それに助力もし得ないと云ふ法はない、さう云つて葉

子はせがみにせがんだ。

「こればかりは女の知つた事ぢやないわい。俺が喰ひ込んでもお前にはとばつちりが行くやうにはしたくないで打ち明けないのだ。何處に行つても知らない〳〵で一點張りに通すがいゝぜ。……二度と聞きたいとせがんで見ろ、俺はうそほんなしにお前とは手を切つて見せるから」

その最後の言葉は倉地の平生に似合はない重苦しい響きを持つてゐた。葉子が氣息をつめてそれ以上を如何しても迫る事が出來ないと斷念する程重苦しいものだつた。正井の言葉から判じても、それは女手などでは實際如何する事も出來ないものらしいので、葉子はこれだけは斷念して口をつぐむより仕方がなかつた。

墮落と云はれようと、不貞と云はれようと、他人手を待つてゐては迚も自分の思ふやうな道は開けないと見切りをつけた本能的の衝動から、知らず識らず自分で選び取つた道の行く手に眼も眩むやうな未來が見えたと有頂天になつた繪島丸の上の出來事以來一年もたゝない中に、葉子が命も名も捧げてかゝつた新しい生活は見る〳〵土臺から腐り出して、もう今は一陣の風さへ吹けば、さしもの高樓ももんどり打つて地上に崩れてしまふと思ひやると、葉子は屢々眞劍に自殺を考へた。倉地が旅に出た留守に倉地の下宿に行つて「急用あり直ぐ歸れ」といふ電報をその行く先きに打つてやる。而して自分は心靜かに倉地の寢床の上で刄に伏してゐよう。それは自分の一生の幕切れとしては、一番ふさはしい行爲らしい。倉地の心にもまだ自分に對する愛情は燃えかすれながらも殘つてゐる。それがこの最後によつて一時なりとも美しく燃え上るだらう。それでいゝ、それで自分は滿足だ。さう心から涙ぐみながら思ふ事もあつた。

實際倉地が留守の筈の或る夜、葉子はふら〳〵と普段空想してゐたその心持に嚴しく捕へられて前後も知らず家を飛び出した事があつた。葉子の心は緊張し切つて天氣なのやら曇つてゐるのやら、暑いのやら寒いのやら更

に差別がつかなかつた。盛んに羽蟲が飛びかはして往來の邪魔になるのをかすかに意識しながら、家を出てから小半町裏坂を下りて行つたが、不圖自分の體が穢れてゐて、この三四日湯に這入らない事を思ひ出すと、死んだ後の醜さを恐れてそのまゝ家に取つて返した。而して妹達だけが這入つたまゝになつてゐる湯殿に忍んで行つて、さめかけた風呂につかつた。妹達は疾に寢入つてゐた。手拭掛けの竹竿に濡れた手拭が二筋だけかゝつてゐるのを見ると、寢入つてゐる二人の妹の事がひし／＼と心に逼るやうだつた。葉子の決心は然しその位の事では動かなかつた。簡單に身仕舞をして又家を出た。

倉地の下宿近くなつた時、その下宿から急ぎ足で出て來る背丈の低い丸髷の女がゐた。夜の事ではあり、その邊は街燈の光も暗いので、葉子にはさだかにそれと分らなかつたが、如何も雙鶴館の女將らしくもあつた。葉子はかつとなつて足早にその後をつけた。二人の間は半町とは離れてゐなかつた。段々二人の間の距離がちゞまつて行つて、その女が街燈の下を通る時などに氣を付けて見ると如何しても思つた通りの女らしかつた。偖は今まであの女を眞正直に信じてゐた自分はまんまと詐られてゐたのだつたか。倉地の妻に對しても義理が立たないから、今夜以後葉子とも倉地の妻とも關係を絶つ。惡く思はないでくれと確かにさう云つた、その義俠らしい口車にまんまと乘せられて、今まで殊勝な女だとばかり思つてゐた自分の愚かさは如何だ。葉子はさう思ふと眼が廻つてその場に倒れてしまひさうな口惜しさ恐ろしさを感じた。而して女の形を目がけてよろ／＼となりながら駈け出した。その時女はその邊に辻待ちをしてゐる車に乘らうとする所だつた。取り遁がしてなるものかと、葉子はひた走りに走らうとした。然し足は思ふやうにはかどらなかつた。さすがにその靜けさを破つて聲を立てる事も憚られた。もう十間と云ふ位の所まで來た時車はがら／＼と音を立てゝ砂利道を動きはじめた。葉子は息せき切つてそれに追ひつかうとあせつたが、見る／＼その距離は遠ざかつて、葉子は杉森で圍まれた淋しい暗闇の中にた

だ一人取り殘されてゐた。葉子は何んと云ふ事なくその辻車のゐた處まで行つて見た。一臺よりゐなかつたので飛び乘つて後を追ふべき車もなかつた。葉子はぼんやりそこに立つて、そこに字でも書き殘してあるかのやうに、暗い地面をぢつと見詰めてゐた。確かにあの女に違ひなかつた。背恰好と云ひ、髷の形と云ひ、小刻みな歩き振りと云ひ、……あの女に違ひなかつた。旅行に出ると云つた倉地は疑ひもなくうそを使つて下宿にくすぶつてゐるに違ひない。而してあの女を仲人に立てゝ先妻とのよりを戻さうとしてゐるに決つてゐる。それに何んの不思議があらう。永年連れ添つた妻ではないか。可愛い三人の娘の母ではないか。葉子と云ふものに一日々々疎くならうとする倉地ではないか。それに何んの不思議があらう。……それにしても餘りと云へば餘りな仕打ちだ。何故それならさうと明かに云つてはくれないのだ。云つてさへくれゝば自分にだつて戀する男に對しての女らしい覺悟はある。別れろとならば綺麗さつぱりと別れても見せる。……何んと云ふ踏みつけ方だ。何んと云ふ恥曝しだ。倉地の妻はおほそれた貞女振つた顏を震はして、涙を流しながら、「それではお葉さんといふ方にお氣の毒だから、私はもう亡いものと思つて下さいまし……」……見てゐられぬ、聞いてゐられぬ。……葉子と云ふ女はどんな女だか、今夜こそは倉地にしつかり思ひ知らせてやる……。

葉子は醉つたものゝやうにふら／＼した足どりでそこから引き返した。そして下宿屋に來着いた時には、氣息苦しさの爲めに聲も出ない位になつてゐた。下宿の女達は葉子を見ると「又あの氣狂ひが來た」と云はんばかりの顏をして、その夜の葉子の殊更に取りつめた顏色には注意を拂ふ暇もなく、その場を外して姿を隱した。葉子はそんな事には氣もかけずに物凄い笑顏で殊更らしく帳場にゐる男に一寸頭を下げて見せて、そのまゝふら／＼と階子段を昇つて行つた。こゝが倉地の部屋だと云ふその襖の前に立つた時には、葉子は泣き聲に氣がついて驚いた程、我れ知らず啜り上げて泣いてゐた。身の破滅、戀の破滅は今夜の今、さう思つて荒々しく襖を開いた。

部屋の中には案外にも倉地はゐなかつた。隅から隅まで片付いてゐて、倉地のあの強烈な膚の香ひも更に殘つてはゐなかつた。葉子は思はずふら〳〵とよろけて、泣きやんで、部屋の中に倒れこみながらあたりを見廻した。居るに違ひないと獨り決めをした自分の妄想が破れたと云ふ氣は少しも起らないで、確かにゐたものが突然溶けてしまふか如何かしたやうな氣味の惡い不思議さに襲はれた。葉子はすつかり氣拔けがして、髪も衣紋も取り亂したまゝ横坐りに坐つたきりでぼんやりしてゐた。

あたりは深山のやうにしーんとしてゐた。唯葉子の眼の前をうるさく行つたり來たりする黒い影のやうなものがあつた。葉子は何物と云ふ分別もなく始めは唯うるさいとのみ思つてゐたが、仕舞には堪らへかねて手を擧げて頻りにそれを追ひ拂つて見た。追ひ拂つても〳〵そのうるさい黒い影は眼の前を立ち去らうとはしなかつた。……暫くさうしてゐる中に葉子は寒氣がするほどぞつと怖ろしくなつて氣がはつきりした。

急に周圍には騷がしい下宿屋らしい雜音が聞こえ出した。葉子をうるさがらしたその黒い影は見る〳〵小さく遠ざかつて、電燈の周圍をきり〳〵と舞ひ始めた。よく見るとそれは大きな黒い夜蛾だつた。葉子は神がゝりが離れたやうにきよとんとなつて、不思議さうに居住ひを正して見た。

何處までが眞實で、何處までが夢なんだらう……。

自分の家を出た、それに間違ひはない。途中から取つて返して風呂をつかつた、……何んの爲めに？　そんな馬鹿な事をする筈がない。でも妹達の手拭が二筋濡れて手拭かけの竹竿にかゝつてゐた（葉子はさう思ひながら自分の顏を撫でたり、手の甲を調べて見たりした。而して確かに湯に這入つた事を知つた）。それならそれでいゝ。それから雙鶴館の女將の後をつけたのだつたが、……あの邊から夢になつたのか知らん。あすこにゐる蛾をもやもやした黒い影のやうに思つたりしてゐた事から考へて見ると、いま〳〵しさから自分は思はず背丈の低い女の

幻影を見てゐたのかも知れない。それにしてもゐる筈の倉地がゐないといふ法はないが…葉子は如何しても自分のして來た事にはつきり連絡をつけて考へる事が出來なかつた。

葉子は…自分の頭では如何考へて見ようもなくなつて、ベルを押して番頭に來て貰つた。

「あのう、あとでこの蛾を追ひ出しておいて下さいな…それからね、さつき…と云つた所がどれ程前だか私にもはつきりしませんがね、こゝに三十恰好の丸髷を結つた女の人が見えましたか」

「こちら様には誰方もお見えにはなりませんが……」

番頭は怪訝な顔をしてから答へた。

「こちら様だらうが何んだらうが、そんな事を聞くんぢやないの。この下宿屋からそんな女の人が出て行きましたか」

「左様……へ、一時間ばかり前ならお一人お歸りになりました」

「雙鶴館のお內儀さんでせう」

圖星をさゝれたらうと云はんばかりに葉子はわざと鷹揚な態度を見せてから聞いて見た。

「いゝえさうぢや御座いません」

番頭は案外にもさうきつぱりと云ひ切つてしまつた。

「それぢや誰」

「兎に角他のお部屋にお出でなさつたお客様で、手前共の商賣上お名前までは申上げ兼ねますが」

葉子もこの上の問答の無益なのを知つてそのまゝ番頭を返してしまつた。

葉子はもう何者も信用する事が出來なかつた。本當に雙鶴館の女將が來たのではないらしくもあり、番頭まで

が倉地とぐるになつてゐてしら〴〵しい虚言を吐いたやうにもあつた。

何事も當てにはならない。何事もうそから出た誠だ。……葉子は本當に生きてゐる事がいやになつた。……そこまで來て葉子は始めて自分が家を出て來た本當の目的が何んであるかに氣付いた。總てに蹉いて、總てに見限られて、總てを見限らうとする、苦しみぬいた一つの魂が、虚無の世界の幻の中から消えて行くのだ。そこには何んの未練も執着もない。嬉しかつた事も、悲しかつた事も、悲しんだ事も、苦しんだ事も、畢竟は水の上に浮いた泡がまたはじけて水に歸るやうなものだ。倉地が、死骸になつた葉子を見て歎かうが歎くまいが、その倉地さへ幻の影ではないか。雙鶴館の女將だと思つた人が、他人であつたやうに、他人だと思つたその人が、案外雙鶴館の女將であるかも知れないやうに、生きると云ふ事がそれ自身幻影でなくつて何んであらう。葉子は覺め切つたやうな、眠りほうけてゐるやうな意識の中でかう思つた。しん〳〵と底も知らず澄み透つた心が唯一つぎり〳〵と死の方に働いて行つた。葉子の眼には一雫の涙も宿つてはゐなかつた。妙に冴えて落ち付き拂つた眸を靜かに働かして、部屋の中を靜かに見廻してゐたが、やがて夢遊病者のやうに立ち上つて、戸棚の中から倉地の寢具を引き出して來て、それを部屋の眞中に敷いた。而して暫くの間その上に靜かに坐つて眼を瞑つて見た。それから又立ち上つて全く無感情な顔付をしながら、もう一度戸棚に行つて、倉地が始終身近かに備へてゐる短銃をあちこちと尋ね求めた。仕舞にそれが本箱の引出しの中の幾通かの手紙と、書き損ねの書類と、四五枚の寫眞とがごつちやに仕舞ひ込んであるその中から現はれ出た。葉子は妙に無關心な心持でそれを手に取つた。而して恐ろしいものを取り扱ふやうにそれを體から離して右手にぶら下げて寢床に歸つた。その癖葉子は露程もその兇器に怖れを懷いてゐる譯ではなかつた。寢床の眞中に坐つてから短銃を膝の上に置いて手をかけたまゝ暫く眺めてゐたが、やがてそれを取り上げると胸の所に持つて來て鷄頭を引き上げた。

きりつと齒切れのいゝ音を立てゝ彈筒が少し囘轉した。同時に葉子の全身は電氣を感じたやうにぴりつと戰いた。然し葉子の心は水が澄んだやうに搖がなかつた。葉子はさうしたまゝ短銃を又膝の上に置いてぢつと眺めてゐた。

　ふと葉子は唯一つ仕殘した事のあるのに氣が附いた。それが何んであるかを自分でもはつきりとは知らずに、謂はゞ何物かの餘儀ない命令に服從するやうに、又寢床から立ち上つて戸棚の中の本箱の前に行つて引出しを開けた。而してそこにあつた寫眞を丁寧に一枚づゝ取り上げて靜かに眺めるのだつた。葉子は心竊かに何をしてゐるんだらうと自分の動作を怪しんでゐた。

　葉子はやがて一人の女の寫眞を見詰めてゐる自分を見出だした。長く〳〵見詰めてゐた。……その中に、白痴がどうかして段々眞人間に還る時はさうもあらうかと思はれるやうに、葉子の心は靜かに〳〵自分で働くやうになつて行つた。女の寫眞を見て如何するのだらうと思つた。早く死なゝければいけないのだがと思つた。一體その女は誰だらうと思つた。……それは倉地の妻の寫眞だつた。さうだ、倉地の妻の若い時の寫眞だ。成程美しい女だ。倉地は今でもこの女に未練を持つてゐるだらうか。この妻には、三人の可愛い娘があるのだ。「今でも時々思ひ出す」さう倉地の云つた事がある。こんな寫眞が一體この部屋なんぞにあつてはならないのだが。それは本當にならないのだ。倉地はまだこんなものを大事にしてゐる。この女はいつまでも倉地に歸つて來ようと待ち構へてゐるのだ。而してまだこの女は生きてゐるのだ。それが幻なものか。生きてゐるのだ、生きてゐるのだ。……死なれるか、それで死なれるか。何が幻だ、何が虚無だ。この通りこの女は生きてゐるではないか……危く……危く自分は倉地を安堵させる所だつた。而してこの女を……このまだ生のあるこの女を喜ばせる所だつた。

　葉子は一刹那の違ひで死の境から救ひ出された人のやうに、驚喜に近い表情を顏一面に漲らして裂ける程眼を

見張つて、寫眞を持つたまゝ飛び上らんばかりに突つ立つたが、急に襲ひかゝる遣瀨ない嫉妬の情と憤怒とに怖ろしい形相になつて、齒がみをしながら、寫眞の一端を啣へて、「いゝ……」と云ひながら、總身の力をこめて眞二つに裂くと、いきなり寢床の上にどうと倒れて、物凄い叫び聲を立てながら、涙も流さずに叫びに叫んだ。

店のものが慌てゝ部屋に這入つて來た時には、葉子はしをらしい樣子をして、短銃を床の下に隱してしまつて、しく／＼と本當に泣いてゐた。

番頭は已むを得ず、てれ隱しに、

「夢でも御覽になりましたか、大層なお聲だつたものですから、つい御案內も致さず飛び込んで仕舞ひまして」

と云つた。葉子は、

「えゝ、夢を見ました。あの黑い蛾が惡いんです。早く追ひ出して下さい」

そんな譯の分らない事を云つて、漸く涙を押し拭つた。

かう云ふ發作を繰り返す度每に、葉子の顏は暗くばかりなつて行つた。葉子には、今まで自分が考へてゐた生活の外に、もう一つ不可思議な世界があるやうに思はれて來た。而して動ともすればその兩方の世界に出たり入つたりする自分を見出すのだつた。二人の妹達は唯はら／＼して、姉の狂暴な振舞ひを見守る外はなかつた。倉地は愛子に刃物などに注意しろと云つたりした。

岡の來た時だけは、葉子の機嫌は沈むやうな事はあつても狂暴になる事は絕えてなかつたので、岡は妹達の言葉にさして重きを置いてゐないやうに見えた。

四〇

六月の或る夕方だつた。もう誰彼時で、電燈が點つて、その周圍に夥しく杉森の中から小さな羽蟲が集まつてうるさく飛び廻り、藪蚊がすさまじく鳴きたてゝ軒先に蚊柱を立てゝゐる頃だつた。暫く目で來た倉地が、張り出しの葉子の部屋で酒を飲んでゐた。葉子は瘦せ細つた肩を單衣物の下に尖らして、神經的に襟をぐつと搔き合せて、きちんと膳の側に坐つて、華車な團扇で酒の香に寄りたかつて來る蚊を追ひ拂つてゐた。二人の間にはもう元のやうに滾々と泉の如く湧き出る話題はなかつた。偶に話が少し彈んだと思ふと、どちらにか差しさはるやうな言葉が飛び出して、ぷつんと會話を杜絶してしまつた。

「貞ちやん矢張り駄々をこねるか」

一と口酒を飲んで、溜息をつくやうに庭の方に向いて氣を吐いた倉地は、自分で氣分を引き立てながら、思ひ出したやうに葉子の方を向いてから尋ねた。

「えゝ、仕樣がなくなつちまひました。この四五日つたら殊更ひどいんですから」

「さうした時期もあるんだらう。まあたんといびらないで置くがいゝよ」

「私、時々本當に死にたくなつちまひます」

葉子は途轍もなく貞世の噂とは緣もゆかりもないこんなひよんな事を云つた。

「さうだ俺もさう思ふ事があるて。……落ち目になつたら最後、人間は浮き上るが面倒になる。船でもが浸水し始めたら埒はあかんからな。……したが、俺はまだもう一反り反つて見てくれる。死んだ氣になつて、やれん事は一つもないからな」

「本當ですわ」

さう云つた葉子の眼はいら／＼と輝いて、睨むやうに倉地を見た。

「正井の奴が來るさうぢやないか」

倉地はまた話題を轉ずるやうにかう云つた。葉子がさうだとさへ云へば、倉地は割合に平氣で受けて「困つた奴に見込まれたものだが、見込まれた以上は仕方がないから、空腹がらないだけの仕向けをしてやるがいゝ」と云ふに違ひない事は、葉子によく分つてはゐたけれども、今まで祕密にしてゐた事を何んとか云はれやしないかとの氣遣ひの爲めか、それとも倉地が祕密を持つのならこつちも祕密を持つて見せるぞと云ふ腹になりたい爲めか、自分にもはつきりとは判らない衝動に驅られて、何と云ふ事なしに、

「いゝえ」

と答へてしまつた。

「來ない？……それやお前いゝ加減ぢやらう」

と倉地はたしなめるやうな調子になつた。

「いゝえ」

葉子は頑固に云ひ張つてそつぽを向いてしまつた。

「おいその團扇を貸してくれ、煽がずにゐては蚊でたまらん……來ない事があるものか」

「誰からそんな馬鹿な事お聞きになつて？」

「誰からでもいゝわさ」

葉子は倉地がまた齒に衣着せた物の云ひ方をすると思ふとかつと腹が立つて返辭もしなかつた。

「葉ちやん。俺は女の機嫌を取る爲めに生れて來はせんぞ。いゝ加減を云つて甘く見くびるとよくはないぜ」

葉子はそれでも返辭をしなかつた。倉地は葉子の拗ね方に不快を催したらしかつた。

「おい葉子！　正井は來るのか來んのか」

正井の來る來ないは大事ではないが、葉子の虛言を訂正させずには置かないと云ふやうに、倉地は詰め寄せて嚴しく問ひ迫つた。葉子は庭の方にやつてゐた眼を返して不思議さうに倉地を見た。

「いゝえと云つたらいゝえとより云ひやうはありませんわ。あなたの『いゝえ』と私の『いゝえ』は『いゝえ』が違ひでもしますか知ら」

「酒も何も飮めるか……俺が暇を無理に作つてゆつくりくつろがうと思うて來れば、いらん事に角を立てゝ……何んの藥になるかいそれが」

葉子はもう胸一杯悲しくなつてゐた。本當は倉地の前に突つ伏して、自分は病氣で始終身體が自由にならないのが倉地に氣の毒だ。けれども如何か捨てないで愛し續けてくれ。身體が駄目になつても心の續く限りは自分は倉地の情人でゐたい。さうより出來ない。そこを憐れんでせめては心の誠を捧げさしてくれ。若し倉地が明々地に云つてくれさへすれば、元の細君を呼び迎へてくれても構はない。而してせめては自分を憐れんでなり愛してくれ。さう歎願がしたかつたのだ。倉地はそれに感激してくれるかも知れない。俺はお前も愛するが去つた妻も捨てるには忍びない。よく云つてくれた。それならお前の言葉に甘えて哀れな妻を呼び迎へよう。妻もさぞお前の黃金のやうな心には感ずるだらう。俺は妻とは家庭を持たう。然しお前とは戀を持たう。さう云つて涙ぐんでくれるかも知れない。若しそんな場面が起り得たら葉子はどれ程嬉しいだらう。葉子はその瞬間に、生れ代つて、正しい生活が開けてくるのにと思つた。それを考へたゞけで胸の中からは美しい涙が滲み出すのだつた。けれども、そんな馬鹿を云ふものではない、俺の愛してゐるのはお前一人だ。元の妻などに俺が未練を持つてゐると思ふのが間違ひだ。病氣があるのなら早速病院に這入るがいゝ、費用はいくらでも出してやるから。かう倉地が云

はないとも限らない。それはありさうな事だ。その時葉子は自分の心を斷ち割つて誠を見せた言葉が、情けも容赦も思ひやりもなく、踏み躙られ穢されてしまふのを見なければならないのだ。それは地獄の苛責よりも葉子には堪へがたい事だ。縱令倉地が前の態度に出てくれる可能性が九十九あつて、後の態度を採りさうな可能性が一つしかないとしても、葉子には思ひ切つて歎願をして見る勇氣が出ないのだ。倉地も倉地で同じやうな事を思つて苦しんでゐるらしい。何んとかして元のやうな懸け隔てのない葉子を見出して、段々と陷つて行く生活の窮境の中にも、せめては暫くなりとも人間らしい心になりたいと思つて、葉子に近づいて來てゐるのだ。それを何處までも知り拔きながら、而して身につまされて深い同情を感じながら、如何しても面と向ふと殺したい程憎まないではゐられない葉子の心は自分ながら悲しかつた。

　葉子は倉地の最後の一言でその急所に觸れられたのだつた。葉子は倉地の眼の前で見る〳〵しをれてしまつた。泣くまいと氣張りながら幾度も雄々しく涙を飲んだ。倉地は明かに葉子の心を感じたらしく見えた。

「葉子！　お前は何んでこの頃さう他所々々しくしてゐなければならんのだ。え」

　と云ひながら葉子の手を取らうとした。その瞬間に葉子の心は火のやうに怒つてゐた。

「他所々々しいのはあなたぢやありませんか」

　さう知らず〳〵云つてしまつて、葉子は沒義道に手を引つ込めた。倉地を睨みつける眼からは熱い大粒の涙がぼろ〳〵とこぼれた。而して、

「あゝ……あ、地獄だ〳〵」

　と心の中で絕望的に切なく叫んだ。

　二人の間には又も忌はしい沈默が繰り返された。

その時玄關に案内の聲が聞こえた。葉子はその聲を聞いて古藤が來たのを知つた。而して大急ぎで涙を押し拭つた。二階から降りて來て取次ぎに立つた愛子がやがて六疊の間に這入つて來て、古藤が來たと告げた。

「二階にお通しゝてお茶でも上げてお置き。何んだつて今頃……御飯時も構はないで……」

と面倒臭さうに云つたが、あれ以來來た事のない古藤に遇ふのは、今のこの苦しい壓迫から遁れるだけでも都合がよかつた。このまゝ續いたら又例の發作で倉地に愛想を盡かさせるやうな事を仕出かすにきまつてゐたから。

「私一寸會つて見ますからね、あなた構はないでいらつしやい。木村の事も探つておきたいから」

さう云つて葉子はその座を外した。倉地は返事一つせずに杯を取り上げてゐた。

二階に行つて見ると、古藤は例の軍服に上等兵の肩章を附けて、胡坐をかきながら貞世と何か話をしてゐた。葉子は今まで泣き苦しんでゐたとは思へぬ程美しい機嫌になつてゐた。簡單な挨拶を濟ますと、古藤は例の云ふべき事から先きに云ひ始めた。

「御面倒ですがね、明日定期檢閲な所が今度は室內の整頓なんです。所が僕は整頓風呂敷を洗濯しておくのをすつかり忘れてしまつてね。今特別に外出を伍長にそつと賴んで許して貰つて、これだけ布を買つて來たんですが、縁を縫つてくれる人がないんで弱つて駈けつけたんです。大急ぎでやつていたゞけないでせうか」

「お易い御用ですともね。愛さん！」

大きく呼ぶと階下にゐた愛子が平生に似合はず、あたふたと階子段を昇つて來た。葉子はふと又倉地を念頭に浮べていやな氣持になつた。然しその頃貞世から愛子に愛が移つたかと思はれる程葉子は愛子を大事に取り扱つてゐた。それは前にも書いた通り、强ひても他人に對する愛情を殺す事によつて、倉地との愛がより緊く結ばれる

と云ふ迷信のやうな心の働きから起つた事だつた。愛しても愛し足りないやうな貞世につらく當つて、如何しても氣の合はない愛子を蟲を殺して大事にして見たら、或は倉地の心が變つて來るかも知れないとさう葉子は何がなしに思ふのだつた。で、倉地と愛子との間にどんな奇怪な徵候を見つけ出さうとも、念にかけても葉子は愛子を責めまいと覺悟をしてゐた。

「愛さん古藤さんがね、大急ぎでこの緣を縫つて貰ひたいと仰有るんだから、あなたして上げて頂戴な。古藤さん、今下には倉地さんが來ていらつしやるんですが、あなたはお嫌ひねお遇ひなさるのは……さう、ぢやこちらでお話でもしますからどうぞ」

さう云つて古藤を妹達の部屋の隣りに案內した。古藤は時計を見い〳〵せはしさうにしてゐた。

「木村から便りがありますか」

木村は葉子の良人ではなく自分の親友だと云つたやうな風で、古藤はもう木村君とは云はなかつた。葉子はこの前古藤が來た時からそれを氣付いてゐたが、今日は殊更その心持が目立つて聞こえた。葉子は度々來ると答へた。

「困つてゐるやうですね」

「えゝ、少しはね」

「少しどころぢやないやうですよ、僕の所に來る手紙によると。何んでも來年に開かれる筈だつた博覽會が再來年に延びたので、木村は又この前以上の窮境に陷つたらしいのです。若い中だからいゝやうなものゝあんな不運な男も少くない。金も送つては來ないでせう」

何んと云ふぶしつけな事を云ふ男だらうと葉子は思つたが、餘り云ふ事にわだかまりがないので皮肉でも云つ

てやる氣にはなれなかつた。

「いゝえ相變らず送つてくれますことよ」

「木村つて云ふのはさうした男なんだ」

古藤は半ば自分に云ふやうに感激した調子でかう云つたが、平氣で仕送りを受けてゐるらしく物を云ふ葉子にはひどく反感を催したらしく、

「木村からの送金を受け取つた時、その金があなたの手を燒きたゞらかすやうには思ひませんか」

と激しく葉子をまともに見詰めながら云つた。そして油で汚れたやうな赤い手で、せはしなく胸の眞鍮釦をはめたり外したりした。

「何故ですの」

「木村は困り切つてるんですよ。……本當にあなた考へて御覧なさい……」

勢込んでなほ云ひ募らうとした古藤は、襖を明け開いたまゝの隣りの部屋に愛子達がゐるのに氣付いたらしく、

「あなたはこの前お眼にかゝつた時からすると、又ひどく瘦せましたねえ」

と言葉を反らした。

「愛さんもう出來て？」

と葉子も調子をかへて愛子に遠くからかう尋ね、「いゝえまだ少し」と愛子が云ふのをしほに葉子はそちらに立つた。貞世はひどくつまらなさうな顔をして、机に兩肘を持たせたまゝ、ぼんやりと庭の方を見やつて、三人の擧動などには眼もくれない風だつた。垣根沿ひの木の間からは、種々な色の薔薇の花が夕闇の中にもちらほらと見えてゐた。葉子はこの頃の貞世は本當に變だと思ひながら、愛子の縫ひかけの布を取り上げて見た。それはまだ

半分も縫ひ上げられてはゐなかつた。葉子の癇癪はぎり〳〵募つて來たけれども、强ひて心を押し鎭めながら、

「これつぽつち……愛子さん如何したと云ふんだらう。どれ姉さんにお貸し、而してあなたは……貞ちやんも古藤さんの所に行つてお相手をしてお出で……」

「僕は倉地さんに遇つて來ます」

突然後ろ向きの古藤は疊に片手をついて肩越しに向き返りながらかう云つた。そして葉子が返事をする暇もなく立ち上つて階子段を降りて行かうとした。葉子はすばやく愛子に眼くばせして、下に案內して二人の用を足してやるやうにと云つた。愛子は急いで立つて行つた。

葉子は縫ひ物をしながら多少の不安を感じた。あの何んの技巧もない古藤と、癇癖が募り出して自分ながら始末をしあぐねてゐるやうな倉地とがまともに打突かり合つたら、どんな事を仕出かすかも知れない。木村を手の中に丸めておく事も今日二人の會見の結果で駄目になるかも分らないと思つた。然し木村と云へば、古藤の云ふ事などを聞いてゐると葉子もさすがにその心根を思ひやらずにはゐられなかつた。葉子がこの頃倉地に對して持つてゐるやうな氣持からは、木村の立場や心持があからさま過ぎる位想像が出來た。木村は戀するものゝ本能から疾に倉地と葉子との關係は了解してゐるのに違ひないのだ。了解して一人ぽつちで苦しめるだけ苦しんでゐるに違ひないのだ。それにも係はらず、その善良な心から何處までも葉子の言葉に信用を置いて、何時かは自分の誠意が葉子の心に徹するのを、あり得べき事のやうに思つて、苦しい一日々々を暮してゐるのに違ひない。而して又落ち込まうとする窮境の中から血の出るやうな金を缺かさずに送つてよこす。それを思ふと、古藤が云ふやうにその金が葉子の手を燒かないのは不思議と云つていゝ程だつた。尤も葉子であつて見れば、木村に醜いエゴイズムを見出さない程呑氣ではなかつた。木村が何處までも葉子の言葉を信用してかゝつてゐる點にも、血の出

るやうな金を送つてよこす點にも、葉子が倉地に對して持つてゐるよりはもつと冷靜な功利的な打算が行はれてゐると決める事が出來る程木村の心の裏を察してゐないではなかつた。葉子の倉地に對する心持から考へると木村の葉子に對する心持にはまだ隙があると葉子は思つた。葉子が若し木村であつたら、如何しておめ〳〵米國三界にゐ續けて、遠くから葉子の心を飜へす手段を講ずるやうな呑氣な眞似がして濟ましてゐられよう。葉子が木村の立場にゐたら、事業を捨てゝも、乞食になつても、すぐ米國から歸つて來ないぢやゐられない筈だ。米國から葉子と一緒に日本に引き返した岡の心の方がどれだけ素直で誠しやかだか知れやしない。そこには生活と云ふ問題もある。事業といふ事もある。岡は生活に對して懸念などする必要はないし、事業と云ふやうなものはてんで持つてはゐない。木村とは何んと云つても立場が違つてはゐる。と云つた所で、木村の持つ生活問題なり事業なりが、葉子と一緒になつてから後の事を顧慮してされてゐる事だとして見ても、そんな氣持でゐる木村には、何んと云つても餘裕があり過ぎると思はないではゐられない物足りなさがあつた。縱し眞裸かになる程、職業から離れて無一文になつてゐてもいゝ、葉子の乘つて歸つて來た船に木村も乘つて一緒に歸つて來たら、葉子は或は木村を船の中で人知れず殺して海の中に投げ込んでゐようとも、木村の記憶は哀しくなつかしいものとして死ぬまで葉子の胸に刻みつけられてゐたらうものを。……それはさうに相違ない。それにしても木村は氣の毒な男だ。自分の愛しようとする人が他人に心を牽かれてゐる……それを發見する事だけで悲慘は十分だ。葉子は本當は、倉地は葉子以外の人に心を牽かれてゐるとは思つてはゐないのだ。唯少し葉子から離れて來たらしいと疑ひ始めたゞけだ。それだけでも葉子は既に熱鐵を呑まされるやうな焦燥と嫉妬とを感ずるのだから、木村の立場はさぞ苦しいだらう。……さう推察すると葉子は自分の餘りと云へば餘りに殘虐な心に胸の中がちく〳〵と刺されるやうになつた。「金が手を燒くやうに思ひはしませんか」との古藤の云つた言葉が妙に耳に殘つた。

さう思ひ〳〵布の一方を手早く縫ひ終つて、縫ひ目を器用にしごきながら眼を擧げると、そこには貞世が先刻のまゝ机に兩肘をついて、たかつて來る蚊も追はずにぼんやりと庭の向うを見續けてゐた。切り下げにした厚い黑漆の髮の毛の下に覗き出した耳朶は霜燒けでもしたやうに赤くなつて、それを見ただけでも、貞世は何か昂奮して向うを向きながら泣いてゐるに違ひなく思はれた。覺えがないではない。葉子も貞世程の齡の時には何か知らず急に世の中が悲しく見える事があつた。何事も唯明るく快く賴もしくのみ見えるその底からふつと悲しいものが胸を抉つて湧き出る事があつた。取り分けて快活ではあつたが、葉子は幼い時から妙な事に臆病がる兒だつた。或る時家族中で北國の淋しい田舍の方に避暑に出かけた事があつたが、或る晩がらんと客の空いた大きな旅籠屋に宿つた時、枕を並べて寢た人達の中で葉子は床の間に近い一番端しに寢かされたが、如何した加減でか氣味が惡くて堪らなくなり出した。暗い床の間の軸物の中からか、置物の蔭からか、得體の分らないものが現はれ出て來さうなやうな氣がして、さう思ひ出すとぞく〳〵と總身に震へが來て、迚も頭を枕につけてはゐられなかつた。で、眠りかゝつた父や母にせがんで、その二人の中に割りこまして貰はうと思つたけれども、父も母も、そんなに大きくなつて何を馬鹿を云ふのだと云つて少しも葉子の云ふ事を取り上げてはくれなかつた。葉子は暫く兩親と爭つてゐる中に、何時の間にか寢入つたと見えて、翌日眼を覺まして見ると、矢張り自分が氣味の惡いと思つた所に寢てゐた自分を見出した。その夕方、同じ旅籠屋の二階の手摺から少し荒れたやうな庭を何んの氣なしにぢつと見入つてゐると、急に昨夜の事を思ひ出して葉子は悲しくなり出した。父にも母にも世の中の總てのものにも自分は如何かして見放されてしまつたのだ。親切らしく云つてくれる人は皆んな自分に虛事をしてゐるのだ。いゝ加減の所で自分はどんと皆んなから突き放されるやうな悲しい事になるに違ひない。如何してそれを今まで氣附かずにゐたのだらう。さうなつた曉に一人でこの庭をかうして見守つたらどんなに悲しいだらう。

少さいながらにそんな事を一人で思ひ耽つてゐるともう留度なく悲しくなつて來て、父が何んと云つても母が何んと云つても、自分の心を自分の涙にひたし切つて泣いた事を覺えてゐる。

葉子は貞世の後姿を見るにつけてふとその時の自分を思ひ出した。妙な心の働きから、その時の葉子が貞世になつてそこに幻のやうに現はれたのではないかとさへ疑つた。これは葉子には始終ある癖だつた。始めて起つた事が、如何しても何時かの過去にそのまゝ起つた事のやうに思はれてならない事がよくあつた。貞世の姿は貞世ではなかつた。苔香園は苔香園ではなかつた。美人屋敷は美人屋敷ではなかつた。周圍だけが妙にもや／＼して心の方だけが澄み切つた水のやうにはつきりしたその頭の中には、貞世のとも、幼い時の自分のとも區別のつかない果敢なさ悲しさがこみ上げるやうに湧いてゐた。葉子は暫くは針の運びも忘れてしまつて、電燈の光を背に負つて夕闇に埋れて行く木立に眺め入つた貞世の姿を、恐ろしさを感ずるまでになりながら見續けた。

「貞ちやん」

とう／＼默つてゐるのが無氣味になつて葉子は沈默を破りたいばかりにかう呼んで見た。貞世は返事一つしなかつた。……葉子はぞつとした。貞世はあゝしたまゝで通り魔にでも魅られて死んでゐるのではないか。それともう一度名前を呼んだら、線香の上に溜つた灰が少しの風で崩れ落ちるやうに、聲の響きでほろ／＼とかき消すやうにあのいたいけな姿は失くなつてしまふのではないだらうか。而してその後には夕闇に包まれた苔香園の木立と、二階の縁側と、小さな机だけが殘るのではないだらうか。……普段の葉子ならば何んといふ馬鹿だらうと思ふやうな事をおど／＼しながら眞面目に考へてゐた。

その時階下で倉地のひどく激昂した聲が聞こえた。葉子ははつとして長い惡夢からでも覺めたやうに我れに返つた。そこにゐるのは姿は元のまゝたが、矢張りまがふ方なき貞世だつた。葉子は慌てゝ何時の間にか膝からず

り落してあつた白布を取り上げて、階下の方にきつと聞き耳を立てた。事態は大分大事らしかつた。

「貞ちやん。……貞ちやん……」

葉子はさう云ひながら立ち上つて行つて、貞世を後ろから羽がひに抱きしめてやらうとした。然しその瞬間に自分の胸の中に自然に出來上らしてゐた結願を思ひ出して、心を鬼にしながら、

「貞ちやんと云つたらお返事をなさいな。何んの事です拗ねたまねをして。臺所に行つてあとのすゝぎ返しでもしてお出で、勉強もしないでぼんやりばかりしてゐると毒ですよ」

「だつてお姉樣私苦しいんですもの」

「嘘をお云ひ。この頃はあなた本當にいけなくなつた事。我儘ばかししてゐると姉さんは聽きませんよ」

貞世は淋しさうな恨めしさうな顔を眞赤にして葉子の方を振り向いた。それを見たゞけで葉子はすつかり打ち摧かれてゐた。水落のあたりをすつと氷の棒でも通るやうな心持がすると、喉の所はもう泣きかけてゐた。何んといふ心に自分はなつてしまつたのだらう……葉子はその上その場にはゐたゝまれないで、急いで階下の方へ降りて行つた。

倉地の聲に交つて古藤の聲も激して聞こえた。

四一

階子段の上り口には愛子が姉を呼びに行かうか行くまいかと思案するらしく立つてゐた。そこを通り拔けて自分の部屋に來て見ると、胸毛をあらはに襟を濶げて、セルの兩袖を高々とまくり上げた倉地が、胡坐をかいたまま、電燈の燈の下に熟柿のやうに赤くなつてこつちを向いて威丈高になつてゐた。古藤は軍服の膝をきちんと折

つて眞直に固く坐つて、葉子には後ろを向けてゐた。それを見るともう葉子の神經はびり〳〵と逆立つて自分ながら如何しようもない程荒れすさんで來てゐた。「何もかもいやだ。どうでも勝手になるがいゝ」するとすぐ頭が重くかぶさつて來て、腹部の鈍痛が鉛の大きな球のやうに腰を虐げた。それは二重に葉子をいら〳〵させた。

「あなた方は一體何をそんなに云ひ合つていらつしやるの」

もうそこには葉子はタクトを用ゐる餘裕さへ持つてゐなかつた。始終腹の底に冷靜さを失はないで、あらん限りの表情を勝手に操縦してどんな難關でも、葉子に特有な仕方で切り開いて行くそんな餘裕はその場には迚も出て來なかつた。

「何をと云つてこの古藤と云ふ青年は餘り禮儀を辨へんからよ。木村さんの親友々々と二言目には鼻にかけたやうな事を云はるゝが、わしもわしで木村さんから頼まれとるんだから、一人よがりの事は云うて貰はんでもがいいのだ。それをつべこべ碌々あなたの世話も見ずにおきながら、云ひ立てなさるので、筋が違つてゐようと云つて聞かせて上げた所だ。古藤さん、あなた失禮だが一體いくつです」

葉子に云つて聞かせるでもなくさう云つて、倉地は又古藤の方に向き直つた。古藤はこの侮辱に對して口答への言葉も出ないやうに激昂して默つてゐた。

「答へるが恥しければ强ひても聞くまい。が、いづれ二十は過ぎてゐられるのだらう。二十過ぎた男があなたのやうに禮儀を辨へずに他人の生活の内輪にまで立ち入つて物を云ふは馬鹿の證據ですよ。男が物を云ふなら考へてから云ふがいゝ」

さう云つて倉地は言葉の激昂してゐる割合に、又見かけのいかにも威丈高な割合に、十分の餘裕を見せて、空嘯くやうに打水をした庭の方を見ながら團扇をつかつた。

古藤は暫く默つてゐてから後ろを振り仰いで葉子を見やりつゝ、

「葉子さん……まあ、す、坐つて下さい」

と少しどもるやうに強ひて穩やかに云つた。葉子はその時始めて、我れにもなくそれまでそこに突つ立つたままぼんやりしてゐたのを知つて、自分に嘗てないやうなとんきよな事をしてゐたのに氣が附いた。而して自分ながらこの頃は本當に變だと思ひながら二人の間に、出來るだけ氣を落ち付けて座についた。古藤の顏を見るとやや青ざめて、顳顬の所に太い筋を立てゝゐた。葉子はその時分になつて始めて少しづゝ自分を恢復してゐた。

「古藤さん、倉地さんは少しお酒を召し上つた所だからこんな時むづかしいお話をなさるのはよくありませんでしたわ。何んですか知りませんけれども今夜はもうそのお話は綺麗にやめませう。如何？……又ゆつくりね……あ、愛さん、あなたお二階に行つて縫ひかけを大急ぎで仕上げて置いて頂戴、姉さんがあらかたしてしまつてあるけれども……」

さう云つて先刻から逐一二人の爭論を聽いてゐたらしい愛子を階上に追ひ上げた。暫くして古藤はやうやく落ち付いて自分の言葉を見出したやうに、

「倉地さんに物を云つたのは僕が間違つてゐたかも知れません。ぢや倉地さんを前に置いてあなたに云はして下さい。お世辭でも何んでもなく、僕は始めからあなたには倉地さんなんかには無い誠實な所が、何處かに隱れてゐるやうに思つてゐたんです。僕の云ふ事をその誠實な所で判斷して下さい」

「まあ今日はもういゝぢやありませんか、ね。私、あなたの仰有らうとする事はよく分つてゐますわ。私決して仇やおろそかには思つてゐません本當に。私だつて考へてはゐますわ。その中とつくり私の方から伺つていたゞき度いと思つてゐた位ですからそれまで……」

「今日聞いて下さい。軍隊生活をしてゐると三人でかうしてお話する機會はさうありさうにはありません。もう歸營の時間が逼つてゐますから、長くお話は出來ないけれども……それだから我慢して聞いて下さい」

　それなら何んでも勝手に云つて見るがいゝ、仕儀によつては默つてはゐないからといふ腹を、かすかに皮肉に開いた唇に見せて葉子は古藤に耳を假す態度を見せた。倉地は知らん振りをして庭の方を見續けてゐた。古藤は倉地を全く度外視したやうに葉子の方に向き直つて、葉子の眼に自分の眼を定めた。率直な明らさまなその眼にはその場合にすら子供じみた羞恥の色を湛へてゐた。例の如く古藤は胸の金釦をはめたり外したりしながら、

「僕は今まで自分の因循からあなたに對しても木村に對しても本當に友情らしい友情を現はさなかつたのを恥かしく思ひます。僕は疾にもつと如何かしなければいけなかつたんですけれども……木村、木村つて、木村の事ばかり云ふやうですけれども、木村の事を云ふのはあなたの事を云ふのも同じだと僕は思ふんですが、あなたは今でも木村と結婚する氣が確かに有るんですか無いんですか、倉地さんの前でそれをはつきり僕に聞かせて下さい。何事もそこから出發して行かなければこの話は畢竟まはりばかり廻る事になりますから。僕はあなたが木村と結婚する氣はないと云はれても決してそれを如何と云ふんぢやありません。木村は氣の毒です。あの男は表面はあんなに樂天的に見えてゐて、意志が强さうだけれども、隨分淚つぽい方だから、その失望は思ひやられます。けれどもそれだつて仕方がない。第一始めから無理だつたから……あなたのお話のやうなら……。然し事情が事情だつたとは云へ、あなたは何故いやならいやと……そんな過去を云つた所が始まらないからやめませう。……葉子さん、あなたは本當に自分を考へて見て、何處か間違つてゐると思つた事はありませんか。誤解しては困りますよ、僕はあなたが間違つてゐると云ふ積りぢやないんですから。他人の事を他人が判斷する事なんかは出來ない事だけれども、僕はあなたが何處か不自然に見えていけないんです。よく世の中では人生の事はさう單純に行

くもんぢやないと云ひますが、而してあなたの生活なんぞを見てゐると、それは極く外面的に見てゐるからさう見えるのかも知れないけれども、實際隨分複雜らしく思はれますが、さうあるべき事なんでせうか。もつと／＼clear に sun-clear に自分の力だけの事、德だけの事をして暮せさうなものだと僕自身は思ふんですがね……僕にもさうでなくなる時代が來るかも知らないけれども、今の僕としてはさうより考へられないんです。一時は混雜も來、不和も來、喧嘩も來るかは知れないが、結局はさうするより仕方がないと思ひますよ。あなたの事についても僕は前からさういふ風にはつきり片付けてしまひたいと思つてゐたんですけれど、姑息な心からそれまでに行かずともいゝ結果が生れて來はしないかと思つたりして今日までどつちつかずで過して來たんです。然しもうこの以上僕には我慢が出來なくなりました。

　倉地さんとあなたと結婚なさるならなさるで木村も斷念めるより外に道はありません。木村に取つては苦しい事だらうが、僕から考へるとどつち附かずで煩悶してゐるのよりどれだけいゝか分りません。だから倉地さんに意向を伺はうとすれば、倉地さんは頭から僕を馬鹿にして話を親身に受けては下さらないんです」

「馬鹿にされる方が惡いのよ」

　倉地は庭の方から顏を返して、「どこまで馬鹿に出來上つた男だらう」といふやうに苦笑ひをしながら古藤を見やつて、又知らぬ顏に庭の方を向いてしまつた。

「そりやさうだ。馬鹿にされる僕は馬鹿だらう。然しあなたには……あなたには僕等が持つてる良心といふものがないんだ。それだけは馬鹿でも僕には判る。あなたが馬鹿と云はれるのと、僕が自分を馬鹿と思つてゐるそれとは、意味が違ひますよ」

「その通り、あなたは馬鹿だと思ひながら、何處か心の隅で『何馬鹿なものか』と思ひよるし、私はあなたを嘘

本なしに馬鹿と云ふだけの相違があるよ」
「あなたは氣の毒な人です」
　古藤の眼には怒りと云ふよりも、或る激しい感情の涙が薄く宿つてゐた。古藤の心の中の一番奥深い所が汚されないまゝで、ふと眼から覗き出したかと思はれる程、その涙をためた眼は一種の力と淸さとを持つてゐた。さすがの倉地もその一言には言葉を返す事なく、不思議さうに古藤の顏を見た。葉子も思はず一種改まつた氣分になつた。そこにはこれまで見慣れてゐた古藤はゐなくなつて、その代りに誤魔化しの利かない强い力を持つた一人の純潔な青年がひよつこり現はれ出たやうに見えた。何を云ふか、叉いつものやうなあり來りの道德論を振り廻すと思ひながら、一種の輕侮を以て默つて聞いてゐた葉子は、この一言で、謂はゞ古藤を壁際に思ひ存分押し附けてゐた倉地が手もなく彈き返されたのを見た。言葉の上や仕打ちの上やで如何に高壓的に出て見ても、如何する事も出來ないやうな眞實さが古藤から溢れ出てゐた。それに刃向ふには眞實で刃向ふ外はない。倉地はそれを持ち合はしてゐるか如何か葉子には想像がつかなかつた。その場合倉地は暫く古藤の顏を不思議さうに見やつた後、平氣な顏をして膳から杯を取り上げて、飲み殘して冷えた酒をてれかくしのやうに呷りつけた。葉子はこの時古藤とこんな調子で向ひ合つてゐるのが恐ろしくつてならなくなつた。古藤の眼の前でひよつとすると今まで築いて來た生活が崩れてしまひさうな危惧をさへ感じた。で、そのまゝ默つて倉地の眞似をするやうだが、平氣を裝ひつゝ煙管を取り上げた。その場の仕打ちとしては拙いやり方であるのを齒痒くは思ひながら。
　古藤は暫く言葉を途切らしてゐたが、叉改まつて葉子の方に話しかけた。
「さう改まらないで下さい。その代り思つたゞけの事をいゝ加減にしておかずに話し合はせて見て下さい。いゝですか。あなたと倉地さんとのこれまでの生活は、僕見たいな無經驗なものにも、疑問として片付けておく事の

出來ないやうな事實を感じさせるんです。それに對するあなたの辯解は詭辯より僕には響かなくなりました。僕の鈍い直覺ですらがさう考へるのです。だからこの際あなたと倉地さんとの關係を明かにして、あなたから木村に僞りのない告白をして頂きたいんです。木村が一人で生活に苦しみながら例へやうのない疑惑の中に藻掻いてゐるのを少しでも想像して見たら……今のあなたにはそれを要求するのは無理かも知れないけれども……。第一こんな不安定な狀態からあなたは愛子さんや貞世さんを救ふ義務があると思ひますよ僕は。あなたゞけに限られずに、四方八方の人の心に響くといふのは恐ろしい事だとは本當にあなたには思へませんかねえ。僕には側で見てゐるだけでも恐ろしいがなあ。人にはいつか總勘定をしなければならない時が來るんだ。いくら借りになつてゐてもびくともしないと云ふ自信もなくつて、ずる〳〵べつたりに無反省に借りばかり作つてゐるのは考へて見ると不安ぢやないでせうか。葉子さん、あなたには美しい誠實があるんだ。僕はそれを知つてゐます。木村にだけは如何した譯か別だけれども、あなたはびた一文でも借りをしてゐると思ふと寢心地が悪いと云ふやうな氣象を持つてゐるぢやありませんか。それに心の借金なら幾ら借金をしてゐても、平氣でゐられる譯はないと思ひますよ。何故あなたは好んでそれを踏み躙らうとばかりしてゐるんです。そんな情けない事ばかりしてゐては駄目ぢやありませんか。……僕ははつきり思ふ通りを云ひ現はし得ないけれども……云はうとしてゐる事は分つて下さるでせう」

古藤は思ひ入つた風で、脂で汚れた手を幾度も眞黑に日に燒けた眼頭の所に持つて行つた。蚊がぶん〳〵と攻めかけて來るのも忘れたやうだつた。葉子は古藤の言葉をもうそれ以上は聞いてゐられなかつた。折角そつとして置いた心のよどみが掻きまはされて、見まいとしてゐた穢いものがぬら〳〵と眼の前に浮き出て來るやうでもあつた。塗りつぶし〳〵してゐた心の壁に罅が入つて、そこから面も向けられない白い光がちらと射すやうにも

思つた。もう然しそれは凡て餘り遲い。葉子はそんな物を無視してかゝる外に道がないと思つた。誤魔化していけないと古藤の云つた言葉は、その瞬間にもすぐ葉子にきびしく應へたけれども、葉子は押し切つてそんな言葉をかなぐり捨てないではゐられないと自分から諦めた。

「よく分りました。あなたの仰有る事は何時でも私にはよく判りますわ。その中私屹度木村の方に手紙を出すから安心して下さいまし。この頃はあなたの方が木村以上に神經質になつていらつしやるやうだけれども、御親切はよく私にも分りますわ。倉地さんだつてあなたのお心持は通じてゐるに違ひないんですけれども、あなたが……何んと云つたらいゝでせうねえ……あなたがあんまり眞正面から仰有るもんだから、つひ向つ腹をお立てなすつたんでせう。さうでせう、ね、倉地さん。… こんないやなお話はこれだけにして妹達でも呼んで面白いお話でもしませう」

「僕がもつと偉いと、云ふ事がもつと深く皆さんの心に這入るんですが、僕の云ふ事は本當の事だと思ふんだけれども仕方がありません。それぢや屹度木村に書いてやつて下さい。僕自身は何も物數奇らしくその内容を知りたいとは思つてる譯ぢやないんですから……」

古藤がまだ何か云はうとしてゐる時に愛子が整頓風呂敷の出來上つたのを持つて、二階から降りて來た。古藤は愛子からそれを受け取ると、思ひ出したやうに慌てゝ時計を見た。葉子はそれには頓着しないやうに、

「愛さんあれを古藤さんにお目に懸けよう。古藤さん一寸待つていらしつてね。今面白いものをお目に懸けるから。貞ちやんは二階？　ゐないの？　何處に行つたんだらう……貞ちやん！」

かう云つて葉子が呼ぶと臺所の方から貞世が打ち沈んだ顔をして泣いた後のやうに頬を赤くして這入つて來た。矢張り自分の云つた言葉に從つて一人ぽつちで臺所に行つてすゝぎ物をしてゐたのかと思ふと、葉子はもう

胸が逼つて眼の中が熱くなるのだつた。

「さあ二人でこの間學校で習つて來たダンスをして古藤さんと倉地さんとにお目にお懸け。一寸コテイロンのやうで又變つてゐますの。さ」

二人は十疊の座敷の方に立つて行つた。倉地はこれをきつかけにかつかと快活になつて、今までの事は忘れたやうに、古藤にも微笑を與へながら「それは面白からう」と云ひつゝ後に續いた。愛子の姿を見ると古藤も釣り込まれる風に見えた。葉子は決してそれを見遁さなかつた。

可憐な姿をした姉と妹とは十疊の電燈の下に向ひ合つて立つた。愛子はいつでもさうなやうにこんな場合でもいかにも冷靜だつた。普通ならばその年頃の少女としては、遣り所もない羞恥を感ずる筈であるのに、愛子は少し眼を伏せてゐる外にはしらしらとしてゐた。きやつきやつと嬉しがつたり恥かしがつたりする貞世はその夜は如何したものかたゞ物憂げにそこにしよんぼりと立つた。その夜の二人は妙に無感情な一對の美しい踊り手だつた。葉子が「一二三」と合圖をすると、二人は兩手を腰骨の所に置き添へて靜かに回旋しながら舞ひ始めた。兵營の中ばかりにゐて美しいものを全く見なかつたらしい古藤は、暫くは何事も忘れたやうに恍惚として二人の描く曲線のさまざまに見とれてゐた。

と、突然貞世が兩袖を顔にあてたと思ふと、急に舞ひの輪から外れて、一散に玄關側の六疊に駈け込んだ。六疊に達しない中に痛ましく啜り泣く聲が聞こえ出した。古藤ははつと慌てゝそつちに行かうとしたが、愛子が一人になつても、顔色も動かさずに踊り續けてゐるのを見るとそのまゝ又立ち止つた。愛子は自分の仕遂すべき務めを仕遂せる事に心を集める様子で舞ひつゞけた。

「愛さん一寸お待ち」

と云つた葉子の聲は、低いながら帛を裂くやうに癇癖らしい調子になつてゐた。別室に妹の駈け込んだのを見向きもしない愛子の不人情さを憤る怒りと、命ぜられた事を中途半端でやめてしまつた貞世を憤る怒りとで葉子は自制が出來ない程慄へてゐた。愛子は靜かにそこに兩手を腰から降ろして立ち止つた。

「貞ちやん、なんですその失禮は。出ておいでなさい」

葉子は激しく隣室に向つてから叫んだ。隣室から貞世のすゝり泣く聲が哀れにもまざ〳〵と聞こえて來るだけだつた。抱きしめても〳〵飽き足らない程の愛着をそのまゝ裏返したやうな憎しみが、葉子の心を火のやうにした。葉子は愛子に嚴しく云ひつけて貞世を六疊から呼び返さした。

やがてその六疊から出て來た愛子は、さすがに不安な面持をしてゐた。苦しくつて堪らないと云ふから額に手をあてゝ見たら火のやうに熱いと云ふのだ。

葉子は思はずぎよつとした。生れ落ちるとから病氣一つせずに育つて來た貞世は前から發熱してゐたのを自分で知らずにゐたに違ひない。氣むづかしくなつてから一週間位になるから、何かの熱病にかゝつたとすれば病氣は可なり進んでゐる筈だ。ひよつとすると貞世はもう死ぬ……それを葉子は直覺したやうに思つた。眼の前で世界が急に暗くなつた。電燈の光も見えない程に頭の中が暗い渦卷で一杯になつた。えゝ、一層の事死んでくれ。この血祭りで倉地が自分にはつきり繫がれてしまはないと誰が云へよう。人身御供にしてしまはう。さう葉子は恐怖の絶頂にありながら妙にしんとした心持で思ひめぐらした。而してそこにぼんやりしたまゝ突つ立つてゐた。

いつの間に行つたのか、倉地と古藤とが六疊の間から首を出した。

「お葉さん……ありや泣いた爲めばかりの熱ぢやない。早く來て御覧」

倉地の慌てるやうな聲が聞こえた。

それを聞くと葉子は始めて事の眞相が分つたやうに、夢から眼覺めたやうに、急に頭がはつきりして六疊の間に走り込んだ。貞世は一際背丈けが縮まつたやうに小さく丸まつて、座布團に顏を埋めてゐた。膝をついて側によつて後頸の所を觸つて見ると、氣味の惡い程の熱が葉子の手に傳はつて來た。

その瞬間に葉子の心はでんぐり返しを打つた。いとしい貞世につらく當つたら、而して若い貞世がその爲めに命を落すやうな事でもあつたら、倉地を大丈夫掴む事が出來ると何がなしに思ひ込んで、而かもそれを實行した迷信とも妄想とも例へやうのない、狂氣染みた結願が何んの苦もなくばら／＼に崩れてしまつて、その後には如何かして貞世を活かしたいといふ素直な涙ぐましい願ひばかりがしみ／″＼と働いてゐた。自分の愛するものが死ぬか活きるかの境目に來たと思ふと、生への執着と死への恐怖とが、今まで想像も及ばなかつた強さでひし／＼と感ぜられた。自分を八つ裂きにしても貞世の命は取りとめなくてはならぬ。若し貞世が死ねばそれは自分が殺したんだ。何も知らない、神のやうな少女を……葉子はあらぬことまで勝手に想像して勝手に苦しむ自分をたしなめる積りでゐても、それ以上に種々な豫想が激しく頭の中で働いた。

葉子は貞世の背を擦りながら、歎願するやうに哀恕を乞ふやうに古藤や倉地や愛子までを見まはした。それらの人々は何れも心痛げな顏色を見せてゐないではなかつた。然し葉子から見るとそれは皆んな贋物だつた。

やがて古藤は兵營への歸途醫者を頼むといつて歸つて行つた。葉子は、一人でも、どんな人でも貞世の身近から離れて行くのをつらく思つた。そんな人達は多少でも貞世の生命を一緒に持つて行つてしまふやうに思はれてならなかつた。

日はとつぷり暮れてしまつたけれども何處の戸締りもしないこの家に、古藤が云つてよこした醫者がやつて來た。そして貞世は明かに腸チブスに罹つてゐると診斷されてしまつた。

「お姉様……行つちやいやあ……」

まるで四つか五つの幼兒のやうに頑是なく我儘になつてしまつた貞世の聲を聞き殘しながら、葉子は病室を出た。折からじめ〳〵と降りつゞいてゐる五月雨に、廊下には夜明けからの薄暗さがそのまゝ殘つてゐた。白衣を着た看護婦が、暗いだゞつ廣い廊下を、上草履の大きな音をさせながら案內に立つた。十日の餘も、夜晝の見界もなく、帶も解かずに看護の手を盡した葉子は、如何かするとふら〳〵となつて、頭だけが五體から離れて何處ともなく漂つて行くかとも思ふやうな不思議な錯覺を感じながら、それでも緊張し切つた心持になつてゐた。總ての音響、總ての色彩が極度に誇張されてその感覺に觸れて來た。貞世が腸チブスと診斷されたその晩、葉子は擔架に乘せられたその憐れな小さな妹に附添つてこの大學病院の隔離室に來てしまつたのであるが、その時別れたなりで、倉地は一度も病院を尋ねては來なかつたのだ。葉子は愛子一人が留守する山內の家の方に、少し不安心ではあるけれどもいつか暇をやつたつやを呼び寄せておかうと思つて、宿許に云つてやると、つやはあれから看護婦を志願して京橋の方の或る病院にゐるといふ事が知れたので、已むを得ず倉地の下宿から年を取つた女中を一人賴んでゐて貰ふ事にした。病院に來てからの十日——それは昨日から今日にかけての事のやうに短く思はれもし、一日が一年に相當するかと疑はれる程永くも感じられた。

その永く感じられる方の期間には、倉地と愛子との姿が不安と嫉妬との對照となつて葉子の心の眼に立ち現はれた。葉子の家を預かつてゐるものは倉地の下宿から來た女だとすると、それは倉地の犬と云つてもよかつた。そこに一人殘された愛子……永い時間の間にどんな事でも起り得ずにゐるものか。さう氣を廻し出すと葉子は貞

世の寢臺の傍にゐて、熱の爲めに唇がかさ〳〵になつて、半分眼を開けたまゝ昏睡してゐるその小さな顏を見詰めてゐる時でも、思はずかつとなつてそこを飛び出さうとするやうな衝動に驅り立てられるのだつた。

然し又短く感じられる方の期間にはたゞ貞世ばかりがゐた。末子として兩親から嘗める程溺愛もされ、葉子の唯一の寵兒ともされ、健康で、快活で、無邪氣で、我儘で、病氣といふ事などはつひぞ知らなかつたその子は、引き續いて父を失ひ、母を失ひ、葉子の病的な呪咀の犧牲となり、突然死病に取りつかれて、夢にも現にも思ひもかけなかつた死と向ひ合つて、ひたすらに恐れをのゝいてゐる、その姿は、千丈の谷底に續く崕の際に兩手だけで垂れ下つた人が、そこの土がぼろ〳〵と崩れ落ちる度毎に、懸命になつて助けを求めて泣き叫びながら、少しでも手がゝりのある物に獅嚙み附からうとするのを見るのと異ならなかつた。而かもそんなはめに貞世を陷れてしまつたのは結局自分に責任の大部分があると思ふと、葉子はいとしさ悲しさで胸も腸も裂けるやうになつた。貞世が死ぬにしても、せめては自分だけは貞世を愛し拔いて死なせたかつた。貞世を假りにもいぢめるとは……まるで天使のやうな心で自分を信じ切り愛し拔いてくれてゐた貞世を假りにも沒義道に取り扱つたとは……葉子は自分ながら自分の心の埒なさ恐ろしさに悔いても〳〵及ばない悔を感じた。そこまで詮じつめて來ると、葉子には倉地もなかつた。唯命にかけても貞世を病氣から救つて、貞世が元通りにつや〳〵しい健康に歸つた時、貞世を大事に〳〵自分の胸にかき抱いてやつて、

「貞ちやんお前はよくこそ治つてくれたね。姉さんを恨まないでおくれ。姉さんはもう今までの事を皆んな後悔して、これからはあなたをいつまでも〳〵後生大事にしてあげますからね」

としみ〴〵と泣きながら云つてやりたかつた。たゞそれだけの願ひに固まつてしまつた。さうした心持になつてゐると、時間は唯矢のやうに飛んで過ぎた。死の方へ貞世を連れて行く時間は唯矢のやうに飛んで過ぎると思へ

た。

この奇怪な心の葛藤に加へて、葉子の健康はこの十日程の激しい昂奮と活動とでみじめにも害ひ傷つけられてゐるらしかつた。緊張の極點にゐるやうな今の葉子には左程と思はれないやうにもあつたが、貞世が死ぬか治るかして一息つく時が來たら、如何して肉體を支へる事が出來ようかと危まないではゐられない豫感が嚴しく葉子を襲ふ瞬間は幾度もあつた。

さうした苦しみの最中に珍らしく倉地が尋ねて來たのだつた。丁度何もかも忘れて貞世の事ばかり氣にしてゐた葉子は、この案内を聞くと、まるで生れ代つたやうにその心は倉地で一杯になつてしまつた。

病室の中から叫びに叫ぶ貞世の聲が廊下まで響いて聞こえたけれども、葉子はそれには頓着してゐられない程無氣になつて看護婦の後を追つた。歩きながら衣紋を整へて、例の左手を擧げて鬢の毛を器用にかき上げながら、應接室の所まで來ると、そこはさすがに幾分か明るくなつてゐて、開戸の側の硝子窓の向うに頑丈な倉地と、思ひもかけず岡の華車な姿とが眺められた。

葉子は看護婦のゐるのも岡のゐるのも忘れたやうにいきなり倉地に近づいて、その胸に自分の顔を埋めてしまつた。何よりもかによりも長い〳〵間遇ひ得ずにゐた倉地の胸は、數限りもない聯想に飾られて、總ての疑惑や不快を一掃するに足る程なつかしかつた。倉地の胸からは觸れ慣れた衣ざはりと、强烈な膚の匂ひとが、葉子の病的に嵩じた感覺を亂酔さす程に傳はつて來た。

「如何だ、ちつとはいゝか」

「おゝこの聲だ、この聲だ」……葉子はかく思ひながら悲しくなつた。それは長い間闇の中に閉ぢこめられてゐたものが偶然燈の光を見た時に胸を突いて湧き出て來るやうな悲しさだつた。葉子は自分の立場を殊更憐れに描

いて見たい衝動を感じた。
「駄目です。貞世は、可哀さうに死にます」
「馬鹿な……あなたにも似合はん、さう早う落膽する法があるものかい。どれ一つ見舞つてやらう」
さう云ひながら倉地は先刻からそこにゐた看護婦の方に振り向いた樣子だつた。そこに看護婦も岡もゐるといふ事はちやんと知つてゐながら、葉子は誰もゐないものゝやうな心持で振舞つてゐたのを思ふと、自分ながらこの頃は心が狂つてゐるのではないかとさへ疑つた。看護婦は倉地と葉子との對話振りで、この美しい婦人の素性を吞み込んだと云ふやうな顏をしてゐた。岡はさすがに愼ましやかに心痛の色を顏に現はして椅子の背に手をかけたまゝ立つてゐた。
「あゝ、岡さんあなたもわざ〳〵お見舞下さつて難有う御座いました」
葉子は少し挨拶の機會をおくらしたと思ひながらもやさしくかう云つた。岡は頰を紅めたまゝ默つてうなづいた。
「丁度今見えたもんだで御一緒したが、岡さんはこゝでお歸りを願つたがいゝと思ふが……（さう云つて倉地は岡の方を見た）何しろ病氣が病氣ですから……」
「私、貞世さんに是非お會ひしたいと思ひますからどうかお許し下さい」
岡は思ひ入つたやうにかう云つて、丁度そこに看護婦が持つて來た二枚の白い上つ張りの中少し古く見える一枚を取つて倉地よりも先きに着始めた。葉子は岡を見るともう一つのたくらみを心の中で案じ出してゐた。岡を出來るだけ度々山内の家の方に遊びに行かせてやらう。それは倉地と愛子とが接觸する機會をいくらかでも妨げる結果になるに違ひない。岡と愛子とが互に愛し合ふやうになつたら……なつたとしてもそれは惡い結果といふ事

は出來ない。岡は病身ではあるけれども地位もあれば金もある。それは愛子のみならず、自分の將來に取つても役に立つに相違ない。……とさう思ふすぐその下から、如何しても蟲の好かない愛子が、葉子の意志の下にすつかり繋ぎ附けられてゐるやうな岡を偸んで行くのを見なければならないのが面憎くも妬ましくもあつた。

葉子は二人の男を案內しながら先きに立つた。暗い長い廊下の兩側に立ち列んだ病室の中からは、呼吸困難の中からかすれたやうな聲でヂフテリヤらしい幼兒の泣き叫ぶのが聞こえたりした。貞世の病室からは一人の看護婦が半ば身を乘り出して、部屋の中に向いて何か云ひながら、頻りとこつちを眺めてゐた。貞世の何か云ひ募る言葉さへが葉子の耳に屆いて來た。その瞬間にもう葉子はそこに倉地のゐる事なども忘れて、急ぎ足でその方に走り近づいた。

「そらもう歸つていらつしやいましたよ」

と云ひながら顏を引つ込めた看護婦に續いて、飛び込むやうに病室に這入つて見ると、貞世は亂暴にも寢臺の上に起き上つて、膝小僧も露はになる程取り亂した姿で、手を顏にあてたまゝおい／＼と泣いてゐた。葉子は驚いて寢臺に近寄つた。

「何んと云ふあなたは聞き譯のない……貞ちやんその病氣で、あなた、寢臺から起き上つたりすると何時までも治りはしませんよ。あなたの好きな倉地の小父さんと岡さんがお見舞に來て下さつたのですよ。はつきり分りますか、そら、そこを御覽、横になつてから」

さう云ひ／＼葉子は如何にも愛情に滿ちた器用な手つきで輕く貞世を抱へて床の上に臥かしつけた。貞世の顏は今まで盛んな運動でもしてゐたやうに美しく活々と紅味がさして、房々した髮の毛は少しもつれて汗ばんで額際に粘りついてゐた。それは病氣を思はせるよりも過剩の健康とでも云ふべきものを思はせた。唯その兩眼と唇

だけは明かに尋常でなかつた。すつかり充血したその眼は、普段よりも大きくなつて、二重瞼になつてゐた。その眸は熱の爲めに燃えて、おど／＼と何者かを見詰めてゐるやうにも、何かを見出さうとして尋ねあぐんでゐるやうにも見えた。その樣子は例へば葉子を見入つてゐる時でも、葉子を貫いて葉子の後ろの方遙かの所にある或る者を見極めようと有らん限りの力を盡してゐるやうだつた。脣は上下ともから／＼になつて、內紫といふ柑類の實をむいて天日に干したやうに乾いてゐた。それは見るもいた／＼しかつた。その脣の中から高熱の爲めに一種の臭氣が呼吸の度每に吐き出される、その臭氣が脣の著しいゆがめ方の爲めに、眼に見えるやうだつた。貞世は葉子に注意されて物惰げに少し眼をそらして倉地と岡とのゐる方を見たが、それが如何したんだといふやうに、少しの興味も見せずに又葉子を見やりながらせつせと肩をゆすつて苦しげな呼吸をつゞけた。

「お姉さま…水……氷……もういつちやいや……」

これだけ幽かに云ふともう苦しさうに眼をつぶつてほろ／＼と大粒の淚をこぼすのだつた。

倉地は陰欝な雨脚で灰色になつたガラス窓を背景にして突つ立ちながら、默つたまゝ不安らしく首をかしげた。岡は日頃の滅多に泣かない性質に似ず、倉地の後ろにそつと引きそつて淚ぐんでゐた。葉子には後ろを振り向いて見ないでもそれが眼に見るやうにはつきり分つた。貞世の事は自分一人で背負つて立つ。餘計な憐れみはかけて貰ひたくない、そんないら／＼しい反抗的な心持さへその場合起らずにはゐなかつた。過ぐる十日といふもの一度も見舞ふ事をせずにゐて、今更その由々しげな顏付は何だ。さう倉地にでも岡にでも云つてやりたい程葉子の心は棘々しくなつてゐた。で、葉子は後ろを振り向きもせずに、箸の先きにつけた脫脂綿を氷水の中に浸しては、貞世の口を拭つてゐた。

かうやつて、ものゝ稍ゝ二十分が過ぎた。飾り氣も何もない板張りの病室には段々夕暮の色が催して來た。五月

雨はじめ〳〵と小休みなく戸外では降りつゞいてゐた。「お姉樣治して頂戴よう」とか「苦しい……苦しいからお藥を下さい」とか「もう熱を計るのはいや」とか時々囈言のやうに言つては、葉子の手に嚙り附く貞世の姿は何時氣息を引き取るかも知れないと葉子に思はせた。

「ではもう歸りませうか」

倉地が岡を促すやうにかう云つた。岡は倉地に對し葉子に對して少しの間返事を敢へてするのを憚つてゐる樣子だつたが、とう〳〵思ひ切つて、倉地に向つて云つてゐながら少し葉子に對して歎願するやうな調子で、

「私、今日は何んにも用がありませんから、こちらに殘らしていたゞいて、葉子さんのお手傳ひをしたいと思ひますから、お先きにお歸り下さい」

と云つた。岡はひどく意志が弱さうに見えながら一度思ひ入つて云ひ出した事は、とう〳〵仕畢せずにはおかない事を、葉子も倉地も今までの經驗から知つてゐた。葉子は結局それを許す外はないと思つた。

「ぢやわしはお先きするがお葉さん一寸……」

と云つて倉地は入口の方にしざつて行つた。折から貞世はすや〳〵と昏睡に陷つてゐたので、葉子はそつと自分の袖を捕へてゐる貞世の手をほどいて、倉地の後から病室を出た。病室を出るとすぐ葉子はもう貞世を看護してゐる葉子ではなかつた。

葉子はすぐに倉地に引き添つて肩をならべながら廊下を應接室の方に傳つて行つた。

「お前は隨分と疲れとるよ。用心せんといかんぜ」

「大丈夫……こつちは大丈夫です。それにしてもあなたは……お忙しかつたんでせうね」

例へば自分の言葉は稜針で、それを倉地の心臟に揉み込むと云ふやうな銳い語氣になつてさう云つた。

「全く忙しかつた。あれからわしはお前の家には一度もよう行かずにゐるんだ」

さう云つた倉地の返事には如何にもわだかまりがなかつた。葉子の鋭い言葉にも少しも引けめを感じてゐる風は見えなかつた。葉子でさへが危くそれを信じようとする程だつた。然しその瞬間に葉子は燕返しに自分に返つた。何をいゝ加減な……それは白々しさが少し過ぎてゐる。この十日の間に、倉地に取つてはこの上もない機會の與へられた十日の間に、杉森の中の淋しい家にその足跡の印されなかつた譯があるものか。……さらぬだに、病み果て疲れ果てた頭腦に、極度の緊張を加へた葉子は、ぐら〳〵とよろけて足許が廊下の板に着いてゐないやうな憤怒に襲はれた。

應接室まで來て上つ張りを脫ぐと、看護婦が噴霧器を持つて來て倉地の身のまはりに消毒薬を振りかけた。その幽かな匂ひがやうやく葉子をはつきりした意識に返らした。葉子の健康が一日々々と云はず、一時間每にもどん〳〵弱つて行くのが身に沁みて知れるにつけて、倉地の何處にも批點のないやうな頑丈な五體にも心にも、葉子は遣り所のないひがみと憎しみを感じた。倉地に取つては葉子は段々と用のないものになつて行きつゝある。絕えず何か眼新しい冒險を求めてゐるやうな倉地に取つては、葉子はもう散り際の花に過ぎない。

看護婦がその室を出ると、倉地は窓の所に寄つて行つて、衣嚢の中から大きな鰐皮のポケットブックを取り出して、拾圓札の可なりの束を引き出した。葉子はそのポケットブックにも色々の記憶を持つてゐた。竹柴館で一夜を過ごしたその朝にも、その後の度々のあひゞきの後の支拂ひにも、葉子は倉地からそのポケットブックを受け取つて、贅澤な支拂ひを心持よくしたのだつた。而してそんな記憶はもう二度とは繰り返せさうもなく、何んとなく葉子には思へた。そんな事をさせてなるものかと思ひながらも、葉子の心は妙に弱くなつてゐた。

「又足らなくなつたらいつでも云つてよこすがいゝから……俺の方の仕事はどうも面白くなくなつて來をつた。

「正井の奴何か容易ならぬ悪戯をしをつた様子もあるし、油斷がならん。度々俺がこゝに來るのも考へ物だて」

紙幣を渡しながらかう云つて倉地は應接室を出た。可なり濡れてゐるらしい靴を履いて、雨水で重さうになつた洋傘をばさ〳〵云はせながら開いて、倉地は輕い挨拶を殘したまゝ夕闇の中に消えて行かうとした。間を置いて道側に點された電燈の灯が、濡れた青葉を辷り落ちて泥濘の中に燐のやうな光を漂はしてゐた。その中を段々南門の方に遠ざかつて行く倉地を見送つてゐると葉子は迚もそのまゝそこに居殘つてはゐられなくなつた。

誰の履物とも知らずそこにあつた吾妻下駄をつゝかけて葉子は雨の中を玄關から走り出て倉地の後を追つた。そこにある廣場には欅や櫻の木が疎らに立つてゐて、大規模な增築の爲めの材料が、煉瓦や石や、處々に積み上げてあつた。東京の中央にこんな所があるかと思はれる程物淋しく靜かで、街燈の光の屆く所だけに白く光つて斜めに雨のそゝぐのがほのかに見えるばかりだつた。寒いとも暑いとも更に感じなく過して來た葉子は、雨が襟脚に落ちたので初めて寒いと思つた。關東に時々襲つて來る、時ならぬ冷え日でその日もあつたらしい。葉子は輕く身震ひしながら、一圖に倉地の後を追つた。稍ゝ十四五間も先きにゐた倉地は跫音を聞きつけたと見えて立ち停つて振り返つた。葉子が追ひ付いた時には、肩はいゝ加減濡れて、雨の滴が前髮を傳つて額に流れかゝるまでになつてゐた。葉子は幽かな光にすかして、倉地が迷惑さうな顏付で立つてゐるのを知つた。葉子は我れにもなく倉地が傘を持つ爲めに水平に曲げたその腕にすがり付いた。

「先刻のお金はお返しゝます。義理づくで他人からしていたゞくんでは胸がつかへますから……」

倉地の腕の所で葉子のすがり付いた手はぶる〳〵と震へた。傘からは滴りが殊更繁く落ちて、單衣をぬけて葉子の肌に滲み通つた。葉子は、熱病患者が冷たいものに觸れた時のやうな不快な惡寒を感じた。

「お前の神經は全く少し如何かしとるぜ。俺の事を少しは思つて見てくれてもよからうが……疑ふにもひがむに

も程があつていゝ筈だ。俺はこれまでにどんな不貞腐れをした。云へるなら云つて見ろ」

さすがに倉地も氣にさへてゐるらしく見えた。

「云へないやうに上手に不貞腐れをなさるのぢや、云はうたつて云へやしませんわね。何故あなたははつきり葉子には厭きた、もう用がないとお云ひになれないの。男らしくもない。さ、取つて下さいましこれを」

葉子は紙幣の束をわなわなする手先で倉地の胸の所に押しつけた。

「そしてちやんと奥さんをお呼び戻しなさいまし。それで何もかも元通りになるんだから。憚りながら……」

「愛子は」と口許まで云ひかけて、葉子は恐ろしさに氣息を引いてしまつた。倉地の細君の事まで云つたのはその夜が始めてだつた。これほど露骨な嫉妬の言葉は、男の心を葉子から遠ざからすばかりだと知り拔いて愼しんでゐた癖に、葉子は我れにもなく、がみがみと妹の事まで云つて退けようとする自分に呆れてしまつた。

葉子がそこまで走り出て來たのは、別れる前にもう一度倉地の強い腕で、その暖かく廣い胸に抱かれたい爲めだつたのだ。倉地に惡たれ口をきいた瞬間でも葉子の願ひはそこにあつた。それにも拘らず口の上では全く反對に、倉地を自分からどんどん離れさすやうな事を云つて退けてゐるのだ。

葉子の言葉が募るにつれて、倉地は人目を憚るやうにあたりを見廻した。互々に殺し合ひたい程の執着を感じながら、それを言ひ現はす事も信ずる事も出來ず、用もない猜疑と不滿とに遮られて、見る見る路傍の人のやうに、遠ざかつて行かねばならぬ、――そのおそろしい運命を葉子は殊更痛切に感じた。倉地があたりを見廻した――それだけの擧動が、機を見計つていきなりそこを逃げ出さうとするものゝやうにも思ひなされた。葉子は倉地に對する憎惡の心を切ないまでに募らしながら、益々相手の腕に堅く寄り添つた。

暫くの沈默の後、倉地はいきなり洋傘をそこにかなぐり捨てゝ、葉子の頭を右腕で卷きすくめようとした。葉

子は本能的に激しくそれに逆つた。而して紙幣の束を、泥濘の中に敲きつけた。而して二人は野獸のやうに爭つた。

「勝手にせい……馬鹿つ」

やがてさう激しく云ひ捨てると思ふと、倉地は腕の力を急にゆるめて、洋傘を拾ひ上げるなり、後をも向かずに南門の方に向いてずん〳〵と歩き出した。憤怒と嫉妬とに昻奮し切つた葉子は躍起となつてその後を追はうとしたが、脚は痺れたやうに動かなかつた。唯段々遠ざかつて行く後姿に對して、熱い涙が留度なく流れ落ちるばかりだつた。

しめやかな音を立てゝ雨は降りつゞけてゐた。隔離病室のある限りの窓にはかん〳〵と灯が點つて、白いカーテンが引いてあつた。陰慘な病室にさう赤々と灯の點つてゐるのは却つてあたりを物すさまじくして見せた。

葉子は紙幣の束を拾ひ上げる外、術のないのを知つて、しを〳〵とそれを拾ひ上げた。貞世の入院料は何んと云つてもそれで支拂ふより仕樣がなかつたから。云ひやうのない口惜涙が更に湧き返つた。

四三

その夜遲くまで岡は本當に忠實やかに貞世の病床に附き添つて世話をしてくれた。口少なにしいとやかによく氣をつけて、貞世の欲する事を豫め知り拔いてゐるやうな岡の看護振りは、通り一遍な看護婦の働き振りとは丸で較べものにならなかつた。葉子は看護婦を早く寢かしてしまつて、岡と二人だけで夜の更けるまで氷囊を取りかへたり、熱を計つたりした。

高熱の爲めに貞世の意識は段々不明瞭になつて來てゐた。退院して家に歸りたいとせがんで仕やうのない時は、

そつと向きをかへて臥かしてから、「さあもうお家ですよ」と云ふと、嬉しさうに笑ひ顔を漏らしたりした。それを見なければならぬ葉子は堪らなかつた。如何かした拍子に、葉子は飛び上りさうに心が責められた。これで貞世が死んでしまつたなら、如何して生き永らへてゐられよう。貞世をこんな苦しみに陥れたものは皆んな自分だ。自分が前通りに貞世に優しくさへしてゐたら、こんな死病は夢にも貞世を襲つて來はしなかつたのだ。人の心の報いは恐ろしい……さう思つて來ると葉子は誰に詫びやうもない苦惱に氣息づまつた。

　綠色の風呂敷で包んだ電燈の下に、氷嚢を幾つも頭と腹部とにあてがはれた貞世は、今にも絶え入るかと危まれるやうな荒い氣息づかひで夢現の間をさまよふらしく、聞きとれない囈言を時々口走りながら、眠つてゐた。岡は部屋の隅の方に愼ましく突つ立つたまゝ、綠色を透して來る電燈の光で、殊更青白い顔色をして、ぢつと貞世を見守つてゐた。葉子は寢臺に近く椅子を寄せて、貞世の顔を覗き込むやうにしながら、貞世の爲めに何かし續けてゐなければ、貞世の病氣が益々重るといふ迷信のやうな心づかひから、要もないのに絶えず氷嚢の位置を取りかへてやつたりなどしてゐた。

　而して短い夜は段々に更けて行つた。葉子の眼からは絶えず涙がはふり落ちた。倉地と思ひもかけない別れ方をしたその記憶が、たゞ譯もなく葉子を涙ぐました。

と、ふつと葉子は山内の家の有樣を想像に浮べた。玄關側の六疊でゞもあらうか、二階の子供の勉强部屋でゞもあらうか、この夜更けを下宿から送られた老女が寢入つた後、倉地と愛子とが話し續けてゐるやうな事はないか。あの不思議に心の裏を決して他人に見せた事のない愛子が、倉地を如何思つてゐるかそれは分らない。恐らくは倉地に對しては何んの誘惑も感じてはゐないだらう。然し倉地はあゝ云ふしたゝか者だ。愛子は骨に徹する怨恨を葉子に對して抱いてゐる。その愛子が葉子に對して復讐の機會を見出したとこの晩思ひ定めなかつたと誰

が保證し得よう。そんな事は遠の昔に行はれてしまつてゐるのかも知れない。若しさうなら、今頃は、このしめやかな夜を……太陽が消えて失くなつたやうな寒さと闇とが葉子の心に被ひかぶさつて來た。愛子一人位を指の間に握りつぶす事が出來ないと思つてゐるのか……見てゐるがいゝ。葉子は苛立ち切つて毒蛇のやうな殺氣立つた心になつた。そして靜かに岡の方を顧みた。

何か遠い方の物でも見つめてゐるやうに少しぼんやりした眼付で貞世を見守つてゐた岡は、葉子に振り向かれると、その方に素早く眼を轉じたが、その物凄い無氣味さに脊髄まで襲はれた風で、顏色をかへて眼をたじろがした。

「岡さん。私一生のお賴み……これからすぐ山内の家まで行つて下さい。而して不用な荷物は今夜の中に皆んな倉地さんの下宿に送り返してしまつて、私と愛子の普段使ひの着物と道具とを持つて、すぐこゝに引越して來るやうに愛子に云ひつけて下さい。若し倉地さんが家に來てゐたら、私から確かに返したと云つてこれを渡して下さい(さう云つて葉子は懷紙に拾圓紙幣の束を包んで渡した)。何時までかゝつても構はないから今夜の中にね。お賴みを聞いて下さつて？」

何んでも葉子の云ふ事なら口返答をしない岡だけれどもこの常識を外れた葉子の言葉には當惑して見えた。岡は窓際に行つてカーテンの蔭から戸外を透して見て、ポケットから巧緻な浮彫を施した金時計を取り出して時間を讀んだりした。而して少し躊躇するやうに、

「それは少し無理だと私、思ひますが……あれだけの荷物を片付けるのは……」

「無理だからこそあなたを見込んでお願ひするんですわ。さうねえ、入用のない荷物を倉地さんの下宿に屆けるのは何かも知れませんわね。ぢや構はないから置手紙を婆やといふのに渡しておいて下さいまし。そして婆やに

云ひつけて明日でも倉地さんの所に運ばして下さいまし。それなら何もいさくさはないでせう。それでもおいや？　いかゞ？……よう御座います。それぢやもうよう御座います。あなたをこんなに晩くまでお引きとめしておいて、又候面倒なお願ひをしようとするなんて私もどうかしてゐましたわ。……貞ちやん何んでもないのよ。私いま岡さんとお話してゐたんですよ。汽車の音でも何んでもないんだから、心配せずにお休み……どうして貞世はこんなに怖い事ばかり云ふやうになつてしまつたんでせう。夜中などに一人で起きてゐて囈言を聞くとぞーつとする程氣味が惡くなりますのよ。あなたはどうぞもうお引き取り下さいまし。私、車屋をやりますから……」

「車屋をおやりになる位なら私行きます」

「でもあなたが倉地さんに何んとか思はれなさるやうぢやお氣の毒ですもの」

「私、倉地さんなんぞを憚つて云つてゐるのではありません」

「それはよく分つてゐますわ。でも私としてはそんな結果も考へて見てからお頼みするんでしたのに……」

かう云ふ押問答の末に岡はとう／＼愛子の迎へに行く事になつてしまつた。倉地がその夜は屹度愛子の所にゐるに違ひないと思つた葉子は、病院に泊るものと高をくゝつてゐた岡が突然眞夜中に訪れて來たので倉地もさすがに慌てずにはゐられまい。それだけの狼狽をさせるにしても快い事だと思つてゐた。葉子は宿直部屋に行つて、しだらなく睡入つた當番の看護婦を呼び起して人力車を賴ました。

岡は思ひ入つた樣子でそつと貞世の病室を出た。出る時に岡は持つて來たパラフィン紙に包んである包みを開くと美しい花束だつた。岡はそれをそつと貞世の枕許において出て行つた。

暫くすると、しと／＼と降る雨の中を、岡を乗せた人力車が走り去る音が幽かに聞こえて、やがて遠くに消えてしまつた。看護婦が激しく玄關の戸締りする音が響いて、その後は寂爾と夜が更けた。遠くの部屋でディフテ

リヤに罹つてゐる子供の泣く聲が間遠に聞こえる外には、音といふ音は絶え果てゝゐた。

葉子は唯一人徒らに昂奮して狂ふやうな自分を見出した。不眠で過した夜が、三日も四日も續いてゐるのに拘らず、睡氣といふものは少しも襲つて來なかつた。重石を垂り下げたやうな腰部の鈍痛ばかりでなく、脚部は拔けるやうにだるく冷え、肩は動かす度毎にめり／＼音がするかと思ふ程固く凝り、頭の心は絶え間なくぎり／＼と痛んで、そこから遣り所のない悲哀と癇癪とが滾々と湧いて出た。もう鏡は見まいと思ふ程顏はげつそりと肉がこけて、眼の周りの青黑い暈は、さらぬだに大きい眼を殊更にぎら／＼と大きく見せた。鏡を見まいと思ひながら、葉子は折ある毎に帶の間から懷中鏡を出して自分の顏を見詰めないではゐられなかつた。

葉子は貞世の寢息を窺つていつものやうに鏡を取り出した。而して顏を少し電燈の方に振り向けてぢつと自分を映して見た。夥しい毎日の拔毛で額際の著しく透いてしまつたのが第一に氣になつた。少し振り仰いで顏を映すと頰のこけたのが左程に目立たないけれども、顎を引いて下俯きになると、口と耳との間には縱に大きな溝のやうな凹みが出來て、下顎骨が目立つていかめしく現はれ出てゐた。長く見詰めてゐる中には段々慣れて來て、自分の意識で強ひて矯正する爲めに、痩せた顏も左程とは思はれなくなり出すが、ふと鏡に向つた瞬間には、これが葉子々々と人々の目を聳たした自分かと思ふ程醜かつた。さうして鏡に向つてゐる中に、葉子はその投影を自分以外の或る他人の顏ではないかと疑ひ出した。自分の顏より映る筈がない。それだのにそこに映つてゐるのは確かに誰か見も知らぬ人の顏だ。苦痛に虐げられ、惡意に歪められ、煩惱の爲めに支離滅裂になつた亡者の顏……葉子は背筋に一時に氷をあてられたやうになつて、身震ひしながら思はず鏡を手から落した。

金屬の床に觸れる音が雷のやうに響いた。葉子は慌てゝ貞世を見やつた。貞世は眞赤に充血して熱の籠つた眼をまんじりと開いて、さも不思議さうに中有を見やつてゐた。

「愛姉さん……遠くでピストルの音がしたやうよ」

はつきりした聲でかう云つたので、葉子が顏を近寄せて何か云はうとすると昏々として他愛もなく又眠りに陷るのだつた。貞世の眠るのと共に、何んとも云へない無氣味な死の脅かしが卒然として葉子を襲つた。部屋の中にはそこら中に死の影が滿ち〳〵てゐた。眼の前の氷水を入れたコップ一つも次ぎの瞬間にはひとりでに倒れて壞れてしまひさうに見えた。物の影になつて薄暗い部分は見る〳〵部屋中に擴がつて、總てを冷たく暗く包み終るかとも疑はれた。死の影は最も濃く貞世の眼と口の周りに集まつてゐた。そこには死が蛆のやうによろ〳〵と蠢いてゐるのが見えた。それよりも……それよりもその影はそろ〳〵と葉子を目がけて四方の壁から集まり近づかうと犇めいてゐるのだ。葉子は殆んどその死の姿を見るやうに思つた。頭の中がしーんと冷え通つて、冴え切つた寒さがぞく〳〵と四肢を震はした。

その時宿直室の掛時計が遠くの方で一時を打つた。

若しこの音を聞かなかつたら、葉子は恐ろしさのあまり自分の方から宿直室に駈け込んで行つたかも知れなかつた。葉子はおびえながら耳を欹てた。宿直室の方から看護婦が草履をばた〳〵と引きずつて來る音が聞こえた。葉子はほつと氣息をついた。而して慌てるやうに身を動かして、貞世の頭の氷嚢の溶け具合を驗べて見たり、搔卷きを整へてやつたりした。海の底に一つ沈んでぎらつと光る貝殼のやうに、床の上で影の中に物凄く横はつてゐる鏡を取り上げて懷ろに入れた。而して一室々々と近づいて來る看護婦の跫音に耳を澄ましながら又考へ續けた。

今度は山内の家の有樣が宛らまざ〳〵と眼に見るやうに想像された。岡が夜更けにそこを訪れた時には倉地が確かにゐたに違ひない。而して毎時の通り一種の粘り強さを以て葉子の言傳を取次ぐ岡に對して、激しい言葉でその理不盡な狂氣染みた葉子の出來心を罵つたに違ひない。倉地と岡との間には暗々裡に愛子に對する心の爭鬪

が行はれたらう。岡の差出す紙幣の束を怒りに任せて疊の上に敲きつける倉地の威丈高な樣子、少女にはあり得ない程の冷靜さで他人事のやうに二人の間のいきさつを伏眼ながらに見守る愛子の一種毒々しい妖艶さ。さう云ふ姿が宛ら眼の前に浮んで見えた。普段の葉子だつたらその想像は葉子をその場にゐるやうに昂奮させてゐたであう。けれども死の恐怖に激しく襲はれた葉子は何んとも云へない嫌惡の情を以ての外にはその場面を想像する事が出來なかつた。何んと云ふ淺間しい人の心だらう。結局は何もかも滅びて行くのに、永遠な灰色の沈默の中に崩れ込んで仕舞ふのに、目前の貪婪に心火の限りを燃やして、餓鬼同樣に命を嚙み合ふとは何んと云ふ淺間しい心だらう。而かもその醜い爭ひの種子を播いたのは葉子自身なのだ。さう思ふと葉子は自分の心と肉體とが宛ら蛆蟲のやうに汚なく見えた。……何んの爲めに今まで有つて無いやうな妄執に苦しみ抜いて、それを生命そのもののやうに大事に考へ抜いてゐた事か。それは丸で貞世が始終見てゐるらしい惡夢の一つよりも更に果敢ないものではないか。……かうなると倉地さへが縁もゆかりもないもの〻やうに遠く考へられ出した。葉子は總てのものの空しさに呆れたやうな眼を擧げて今更らしく部屋の中を眺め廻した。何んの飾りもない、修道院の內部のやうな裸かな室內が却つてすが〱しく見えた。岡の殘した貞世の枕許の花束だけが、而して恐らくは（自分では見えないけれども）これ程の忙しさの間にも自分を粉飾するのを忘れずにゐる葉子自身がいかにも浮薄な便りないものだつた。葉子はかうした心になると、熱に浮かされながら一歩々々何んの心のわだかまりもなく死に近づいて行く貞世の顏が神々しいものにさへ見えた。葉子は祈るやうな詫びるやうな心でしみ〲と貞世を見入つた。

やがて看護婦が貞世の部屋に這入つて來た。形式一遍のお辭儀を睡さうにして、寢臺の側に近寄ると、無頓着な風に葉子が入れておいた檢溫器を出して灯にすかして見てから、胸の氷嚢を取りかへにか〻つた。葉子は自分一人の手でそんな事をしてやり度いやうな愛着と神聖さとを貞世に感じながら看護婦を手傳つた。

「貞ちやん……さ、氷嚢を取りかへますからね……」

とやさしく云ふと、囈言を云ひ續けてゐながら矢張り貞世はそれまで眠つてゐたらしく、痛々しいまで大きくなつた眼を開いて、まじ〳〵と意外な人でも見るやうに葉子を見るのだつた。

「お姉樣なの……何時歸つて來たの。お母樣が先刻入らしつてよ……いやお姉樣、病院いや歸る〳〵……お母樣お母樣（さう云つてきよろ〳〵とあたりを見廻しながら）歸らして頂戴よう。お家に早く、お母樣のゐるお家に早く……」

葉子は思はず毛孔が一本々々逆立つ程の寒氣を感じた。嘗て母と云ふ言葉も云はなかつた貞世の口から思ひもかけずこんな事を聞くと、其の部屋のどこかにぼんやり立つてゐる母が感ぜられるやうに思へた。其の母の所に貞世は行きたがつてあせつてゐる。何んと云ふ深い淺間しい骨肉の執着だらう。

看護婦が行つてしまふと又病室の中はしいんとなつてしまつた。何んとも云へず可憐な澄んだ音を立てゝ水溜りに落ちる雨垂れの音はなほ絶え間なく聞こえ續けてゐた。葉子は泣くにも泣かれないやうな心になつて、苦しい呼吸をしながらもうつら〳〵と生死の間を知らぬげに眠る貞世の顏を覗き込んでゐた。

と、雨垂れの音に混つて遠くの方に車の轍の音を聞いたやうに思つた。もう眼を覺まして用事をする人もあるかと、何んだか違つた世界の出來事のやうにそれを聞いてゐると、その音は段々病室の方に近寄つて來た。……愛子ではないか……葉子は愕然として夢から覺めた人のやうにきつとなつて更に耳を欹てた。

もうそこには死生を瞑想して自分の妄執の果敢なさをしみ〴〵と思ひやつた葉子はゐなかつた。我執の爲めに緊張し切つたその眼は怪しく輝いた。而して大急ぎで髮のほつれをかき上げて、鏡に顏を映しながら、あちこちと指先きで容子を整へた。衣紋もなほした。而してまたぢつと玄關の方に聞耳を立てた。

果して玄關の戸の開く音が聞こえた。暫く廊下がごたごたする様子だつたが、やがて二三人の跫音が聞こえて、貞世の病室の戸がしめやかに開かれた。葉子はそのしめやかさでそれは岡が開いたに違ひない事を知つた。やがて開かれた戸口から岡に一寸挨拶しながら愛子の顏が靜かに現はれた。葉子の眼は知らずしらずその何處までも從順らしく伏目になつた愛子の面に激しく注がれて、そこに書かれた總てを一時に讀み取らうとした。小羊のやうに睫毛の長いやさしい愛子の眼は然し不思議にも葉子の鋭い眼光にさへ何物をも見せようとはしなかつた。葉子はすぐいらいらして、何事も發かないではおくものかと心の中で自分自身に誓言を立てながら、

「倉地さんは」

と突然眞正面から愛子にかう尋ねた。愛子は多恨な眼をはじめてまともに葉子の方に向けて、貞世の方にそれを外らしながら、又葉子を窃み見るやうにした。そして倉地さんが如何したと云ふのか意味が讀み取れないといふ風を見せながら返事をしなかつた。生意氣をして見るがいゝ……葉子はいらだつてゐた。

「小父さんも一緒に入らしつたかいと云ふんだよ」

「いゝえ」

愛子は無愛想な程無表情に一言さう答へた。二人の間にはむづかしい沈默が續いた。葉子は坐れとさへ云つてやらなかつた。一日々々と美しくなつて行くやうな愛子は小肥りな體を愼ましく整へて靜かに立つてゐた。

そこに岡が小道具を兩手に下げて玄關の方から歸つて來た。外套をびつしより雨に濡らしてゐるのから見ても、この眞夜中に岡がどれ程働いてくれたかゞ分つてゐた。葉子は然しそれには一言の挨拶もせずに、岡が道具を部屋の隅におくや否や、

「倉地さんは何か云つてゐましたか？」

と劍を言葉に持たせながら尋ねた。

「倉地さんはお出でがありませんでした。で婆やに言傳てをしておいて、お入用の荷物だけ造つて持つて來ました。これはお返しゝておきます」

さう云つて衣囊の中から例の紙幣の束を取り出して葉子に渡さうとした。

愛子だけならまだしも、岡までがとう／＼自分を裏切つてしまつた。二人が二人ながら見え透いた虛言をよくもあゝしら／＼しく云へたものだ。おほそれた弱蟲共め。葉子は世の中が手ぐすね引いて自分一人を敵に廻してゐるやうに思つた。

「へえ、さうですか。どうも御苦勞さま。……愛さんお前はそこにさうぼんやり立つてる爲めにこゝに呼ばれたと思つてゐるの？　岡さんのその濡れた外套でも取つてお上げなさいな。そして宿直室に行つて看護婦にさう云つてお茶でも持つてお出で。あなたの大事な岡さんがこんなにおそくまで働いて下さつたのに……さあ岡さんどうぞこの椅子に（と云つて自分は立ち上つた）……私が行つて來るわ、愛さんも働いてさぞ疲れたらうから……よござんす、よござんすつたら愛さん……」

自分の後を追はうとする愛子を刺し貫く程睨めつけておいて葉子は部屋を出た。而して火をかけられたやうにかつと逆上しながら、ほろ／＼と口惜涙を流して暗い廊下を夢中で宿直室の方へ急いで行つた。

四四

敲きつけるやうにして倉地に返して仕舞はうとした金は、矢張り手に持つてゐる中に使ひ始めてしまつた。葉子の性癖として何時でも出來るだけ豐かな快い夜晝を迭るやうにのみ傾いてゐたので、貞世の病院生活にも、誰

に見せてもひけを取らないだけの事を上邊ばかりでもしてゐたかつた。夜具でも調度でも家にあるものゝ中で、一番優れたものを選んで來て見ると、凡ての事までそれにふさはしいものを使はなければならなかつた。葉子が專用の看護婦を二人も頼まなかつたのは不思議なやうだが、如何云ふものか貞世の看護を何處までも自分一人でして退けたかつたのだ。その代り年とつた女を二人傭つて交代に病院に來さして、洗ひ物から食事の事までを賄はした。葉子は迚も病院の食事では濟ましてゐられなかつた。材料のいゝ惡いは兎に角、味は兎に角、何よりも穢らしい感じがして箸もつける氣になれなかつたので、本鄉通りにある或る料理屋から日々入れさせる事にした。こんな鹽梅で、費用は知れない所に思ひの外かゝつた。葉子が倉地が持つて來てくれた紙幣の束から支拂はうとした時は、いづれその中木村から送金があるだらうから、あり次第それから埋め合せをして、すぐその儘返さうと思つてゐたのだつた。然し木村からは、六月になつて以來一度も送金の通知は來なかつた。葉子はそれだから猶更の事もう來さうなものだと心待ちをしたのだつた。それがいくら待つても來ないとなると已むを得ず持ち合はせた分から使つて行かなければならなかつた。まだ〳〵と思つてゐる中に束の厚みはどん〳〵減つて行つた。それが半分程減ると、葉子は全く返濟の事などは忘れてしまつたやうになつて、あるに任せて惜しげもなく支拂ひをした。

　七月に這入つてから氣候は滅切り暑くなつた。椎の樹の古葉もすつかり散り盡して、松も新しい綠に代つて、草も木も青い焰のやうになつた。長く寒く續いた五月雨の名殘りで、水蒸氣が空氣中に氣味惡く飽和されて、さらぬだに急に堪へ難く暑くなつた氣候を益々堪へ難いものにした。葉子は自身の五體が、貞世の恢復をも待たずにずん〳〵崩れて行くのを感じない譯には行かなかつた。それと共に勃發的に起つて來るヒステリーはいよ〳〵募るばかりで、その發作に襲はれたが最後、自分ながら氣が違つたと思ふやうな事が度々になつた。葉子は心竊

かに自分を恐れながら、日々の自分を見守る事を餘儀なくされた。

葉子のヒステリーは誰れ彼れの見界なく破裂するやうになつたが、殊に愛子に屈强の逃げ場を見出した。何んて云はれても罵られても、打ち据ゑられさへしても、屠所の羊のやうに柔順に默つたまゝ、葉子にはまどろしく見える位ゆつくり落ち付いて働く愛子を見せつけられると、葉子の癇癪は嵩じるばかりだつた。あんな素直な殊勝氣な風をしてゐながらしら〴〵しくも姉を欺いてゐる。それが倉地との關係に於てゞあれ、岡との關係に於てゞあれ、ひよつとすると古藤との關係に於てゞあれ、愛子は葉子に打ち明けない祕密を持ち始めてゐる筈だ。さう思ふと葉子は無理にも平地に波瀾が起して見たかつた。殆んど每日――それは愛子が病院に寢泊りするやうになつた爲めだと葉子は自分決めに決めてゐた――幾時間かの間、見舞に來てくれる岡に對しても、葉子はもう元のやうな葉子ではなかつた。如何かすると思ひもかけない時に明白な皮肉が矢のやうに葉子の唇から岡に向つて飛ばされた。岡は自分が恥ぢるやうに顏を紅らめながらも、上品な態度でそれを堪へた。それが又猶更葉子をいらつかす種になつた。

もう來られさうもないと云ひながら倉地も三日に一度位は病院を見舞ふやうになつた。葉子はそれをも愛子故と考へずにはゐられなかつた。さう激しい妄想に驅り立てられて來ると、如何いふ關係で倉地と自分とを繫いでおけばいゝのか、如何した態度で倉地をもちあつかへばいゝのか、葉子にはほと〳〵見當がつかなくなつてしまつた。親身に持ちかけて見たり、よそ〳〵しく取りなして見たり、その時の氣分々々で勝手な無技巧な事をしてゐながらも、如何しても遁れ出る事の出來ないのは倉地に對するこちんと固まつた深い執着だつた。それは情けなくも激しく强くなり增さるばかりだつた。もう自分で自分の心根を憫然に思つてそゞろに淚を流して、自らを慰めると云ふ餘裕すらなくなつてしまつた。乾き切つた火のやうなものが息苦しいまでに胸の中にぎつしりつま

つてゐるだけだつた。

唯一人貞世だけは……死ぬか生きるか分らない貞世だけは、この姉を信じ切つてくれてゐる……さう思ふと葉子は前にも増した愛着をこの病兒にだけは感じないでゐられなかつた。「貞世がゐるばかりで自分は人殺しもしないでかうしてゐられるのだ」と葉子は心の中で獨語ちた。

けれども或る朝そのかすかな希望さへ破れねばならぬやうな事件がまくし上つた。

その朝は曉から水が滴りさうに空が晴れて、珍らしくすが〳〵しい涼風が木の間から來て窓の白いカーテンをそつと撫でゝ通るさわやかな天氣だつたので、夜通し貞世の寢臺の傍に附き添つて、睡くなるとさうしたまゝでうと〳〵と居睡りしながら過して來た葉子も、思ひの外頭の中が輕くなつてゐた。貞世もその晩は、ひどく熱に浮かされもせずに寢續けて、四時頃の體溫は七度八分まで下つてゐた。緣色の風呂敷を通して來る光でそれを發見した葉子は飛び立つやうな喜びを感じた。入院してから七度臺に熱の下つたのはその朝が始めてだつたので、もう熱の剝離期が來たのかと思ふと、とう〳〵貞世の命は取り留めたといふ喜悅の情で涙ぐましいまでに胸は一杯になつた。やうやく一心が屆いた。自分の爲めに病氣になつた貞世は、自分の力でなほつた。そこから自分の運命は又新しく開けて行くかも知れない。屹度開けて行く。もう一度心置きなくこの世に生きる時が來たら、それはどの位いゝ事だらう。今度こそは考へ直して生きて見よう。もう自分も二十六だ。今までのやうな態度で暮してはゐられない。倉地にも濟まなかつた。倉地があれ程ある限りのものを犧牲にして、而かもその事業と云つてゐる仕事は如何考へて見ても思はしく行つてゐないらしいのに、自分達の暮し向きは丸でそんな事も考へないやうな寬濶なものだつた。自分は決心さへすればどんな境遇にでも自分を篏め込む事位出來る女だ。若し今度家を持つやうになつたら總てを妹達に云つて聞かして、倉地と一緒にならう。そして木村とはいつきり緣を切らう。

木村と云へば……さうして葉子は倉地と古藤とが云ひ合ひをしたその晩の事を考へ出した。古藤にあんな約束をしながら、貞世の病氣に紛れてゐたと云ふ外に、てんで眞相を告白する氣がなかつたので今までも何んの消息もしないでゐた自分が尤められた。本當に木村にも濟まなかつた。今になつてやうやく長い間の木村の心の苦しさが想像される。若し貞世が退院するやうになつたら――而して退院するに決つてゐるが――自分は何を措いても木村に手紙を書く。さうしたらどれ程心が安く而して輕くなるか知れない。……葉子はもうそんな境界が來てしまつたやうに考へて、誰とでもその喜びを分ちたく思つた。で、椅子にかけたまゝ右後ろを向いて見ると、床板の上に三疊疊を敷いた部屋の一隅に愛子が他愛もなくすや〳〵と眠つてゐた。うるさがるので貞世には蚊帳を吊つてなかつたが、愛子の所には小さな白い西洋蚊帳が吊つてあつた。その細かい目を通して見る愛子の顏は人形のやうに整つて美しかつた。その愛子をこれまで憎み通しに憎み、疑ひ通しに疑つてゐたのが、不思議を通り越して、奇怪な事にさへ思はれた。葉子はにこ〳〵しながら立つて行つて蚊帳の側によつて、

「愛さん……愛さん」

さう可なり大きな聲で呼びかけた。昨夜遲く枕に就いた愛子はやがてやうやく睡さうに大きな眼を靜かに開いて、姉が枕許にゐるのに氣がつくと、寢過しでもしたと思つたのか、慌てるやうに半身を起して、そつと葉子を竊み見るやうにした。日頃ならばそんな擧動をすぐ癇癪の種にする葉子も、その朝ばかりは可哀さうな位に思つてゐた。

「愛さんお喜び、貞ちやんの熱がとう〳〵七度臺に下つてよ。一寸起きて來て御覽、それはいゝ顏をして寢てゐるから……靜かにね」

「靜かにね」と云ひながら葉子の聲は妙に彈んで高かつた。愛子は柔順に起き上つてそつと蚊帳をくゞつて出て、

前を合せながら寢臺の側に來た。
「ね？」
葉子は笑みかまけて愛子にかう呼びかけた。
「でも何んだか、大分に蒼白く見えますわね」
と愛子が靜かに云ふのを葉子は忙はしく引たくつて、
「それは電燈の風呂敷の故だわ……それに熱が取れゝば病人は皆んな一度は却つて惡くなつたやうに見えるものなのよ。本當によかつた。あなたも親身に世話してやつたからよ」
さう云つて葉子は右手で愛子の肩をやさしく抱いた。そんな事を愛子にしたのは葉子としては始めてだつた。愛子は恐れをなしたやうに身をすぼめた。
葉子は何んとなくぢつとしてはゐられなかつた。子供らしく、早く貞世が眼を覺ませばいゝと思つた。さうしたら熱の下つたのを知らせて喜ばせてやるのにと思つた。然しさすがにその小さな眠りを搖り覺ます事はし得ないで、頻りと部屋の中を片付け始めた。愛子が注意の上に注意をしてことの音もさせまいと氣を遣つてゐるのに、葉子がわざとするかとも思はれる程騷々しく働く樣は、日頃とは丸で反對だつた。愛子は時々不思議さうな眼付をしてそつと葉子の擧動を注意した。
その中に夜がどん〳〵明け離れて、電燈の消えた瞬間は一寸部屋の中が暗くなつたが、夏の朝らしく見る〳〵中に白い光が窓から容赦なく流れ込んだ。晝になつてからの暑さを豫想させるやうな涼しさが青葉の輕い匂ひと共に部屋の中に充ち溢れた。愛子の着かへた大柄な白の飛白も、赤いメリンスの帶も、葉子の眼を淸々しく刺戟した。

葉子は自分で貞世の食事を作つてやる爲めに宿直室の側にある小さな庖厨に行つて、洋食店から屆けて來たソップを溫めて鹽で味をつけてゐる間も、段々起き出て來る看護婦達に貞世の昨夜の經過を誇りがに話して聞かせた。病室に歸つて見ると、愛子が既に目覺めた貞世に朝仕舞をさせてゐた。熱が下つたので機嫌のよかるべき貞世は一層不機嫌になつて見えた。愛子のする事一つ〳〵に故障を云ひ立てゝ、中々云ふ事を聞かうとはしなかつた。熱の下つたのに連れて始めて貞世の意志が人間らしく働き出したのだと葉子は氣が付いて、それも許さなければならない事だと、自分の事のやうに心で辯疏した。漸く洗面が濟んで、それから寢臺の周圍を整頓するともう全く朝になつてゐた。今朝こそは貞世が屹度賞美しながら食事を取るだらうと葉子はいそ〳〵と丈けの高い食卓を寢臺の所に持つて行つた。

その時思ひがけなくも朝がけに倉地が見舞ひに來た。倉地も涼しげな單衣に絽の羽織を羽織つたまゝだつた。その強健な、物を物ともしない姿は夏の朝の氣分としつくりそぐつて見えたばかりでなく、その日に限つて葉子は繪島丸の中で語り合つた倉地を見出したやうに思つて、その寛濶な樣子がなつかしくのみ眺められた。倉地も勉めて葉子の立ち直つた氣分に同じてゐるらしかつた。それが葉子を一層快活にした。葉子は久し振りでその銀の鈴のやうな澄み透つた聲で高調子に物を云ひながら二言目には涼しく笑つた。

「さ、貞ちやん、姉さんが上手に味をつけて來て上げたからソップを召し上れ。今朝は屹度おいしく食べられますよ。今までは熱で味も何もなかつたわね、可哀さうに」

さう云つて貞世の身近かに椅子を占めながら、糊の强いナプキンを枕から喉にかけてあてがつてやると、貞世の顏は愛子の云ふやうにひどく青味がゝつて見えた。小さな不安が葉子の頭をつきぬけた。葉子は清潔な銀の匙に少しばかりソップをしやくひ上げて貞世の口許にあてがつた。

「まづい」
貞世はちらつと姉を窃み見て、口にあるだけのソップを強ひて飲みこんだ。
「おや如何して」
「甘つたらしくつて」
「そんな筈はないがねえ。どれ、それぢや少し鹽を入れてあげますわ」
葉子は鹽をたしして見た。けれども貞世は美味いとは云はなかつた。又一口飲み込むと、もういやだと云つた。
「さう云はずとも少し召上れ、ね、折角姉さんが加減したんだから。第一食べないでゐては弱つてしまひますよ」
さう促して見ても貞世は金輪際あとを食べようとはしなかつた。
突然自分でも思ひも寄らない憤怒が葉子に襲ひかゝつた。自分がこれ程骨を折つてしてやつたのに、義理にももう少しは食べてよさゝうなものだ。何んと云ふ我儘な子だらう（葉子は貞世が味覺を恢復してゐて、流動食では滿足しなくなつたのを少しも考へに入れなかつた）。
さうなるともう葉子は自分を統御する力を失つてしまつてゐた。血管の中の血が一時にかツと燃え立つて、それが心臓に、而して心臓から頭に衝き進んで、頭蓋骨はばり〳〵と音を立てゝ破れさうだつた。日頃あれ程可愛がつてやつてゐるのに、……憎さは一倍だつた。貞世を見つめてゐる中に、その痩せ切つた細首に鍬形にした兩手をかけて、一思ひにしめつけて、苦しみ踠く様子を見て、「そら見るがいゝ」と云ひ捨てゝやりたい衝動がむづむづと湧いて來た。その頭の廻りにあてがはるべき兩手の指は思はず知らず熊手のやうに折れ曲つて、烈しい力の爲めに細かく震へた。葉子は兇器に變つたやうなその手を人に見られるのが恐ろしかつたので、茶碗と匙とを食卓にかへして、前垂れの下に隠してしまつた。上瞼の一文字になつた眼をきりゝと据ゑてはたと貞世を睨みつ

けた。葉子の眼には貞世の外にその部屋のものは倉地から愛子に至るまですつかり見えなくなつてゐた。

「食べないかい」

「食べないかい。食べなければ云々」と小言を云つて貞世を責める筈だつたが、初句を出しただけで、自分の聲の餘りに激しい震へやうに言葉を切つてしまつた。

「食べない……食べない……御飯でなくつてはいやあだあ」

葉子の聲の下からすぐかうした我儘な貞世のすねにすねた聲が聞こえたと葉子は思つた。眞黑な血潮がどつと心臟を破つて腦天に衝き進んだと思つた。眼の前で貞世の顏が三つにも四つにもなつて泳いだ。その後には色も聲も痺れ果てゝしまつたやうな暗黑の忘我が來た。

「お姉樣……お姉樣ひどい……いやあ……」

「葉ちやん……あぶない……」

貞世と倉地の聲とがもつれ合つて、遠い所からのやうに聞こえて來るのを、葉子は誰かゞ何か貞世に亂暴をしてゐるのだなと思つたり、この勢ひで行かなければ、貞世は殺せやしないと思つたりしてゐた。何時の間にか葉子はたゞ一筋に貞世を殺さうとばかりあせつてゐたのだ。葉子は暗黑の中で何か自分に逆らふ力と根限りあらそひながら、物凄い程の力をふり搾つて鬪つてゐるらしかつた。何が何んだか解らなかつた。その混亂の中に、或は今自分は倉地の喉笛に針のやうになつた自分の十本の爪を立てゝ、ねぢり藻掻きながら爭つてゐるのではないかとも思つた。それもやがて夢のやうだつた。遠ざかりながら人の聲とも獸の聲とも知れぬ音響が幽かに耳に殘つて、胸の所にさし込んで來る痛みを吐氣のやうに感じた次きの瞬間には、葉子は昏々として熱も光も聲もない

物すさまじい暗黒の中に眞逆樣に浸つて行つた。

ふと葉子は擽むるやうなものを耳の所に感じた。それが音響だと解るまでにはどの位の時間が經過したか知れない。兎に角葉子はがや〳〵と云ふ聲を段々とはつきり聞くやうになつた。而してぽつかり視力を恢復した。見ると葉子は依然として貞世の病室にゐるのだつた。愛子が後向きになつて寢臺の上にゐる貞世を介抱してゐた。自分は……自分はと葉子は始めて自分を見廻さうとしたが、身體は自由を失つてゐた。そこには倉地がゐて葉子の頸根つこに腕を廻して、膝の上に一方の足を載せて、しつかりと抱きすくめてゐた。その足の重さが痛い程感じられ出した。やつぱり自分は倉地を死神の許へ追ひこくらうとしてゐたのだなと思つた。そこには白衣を着た醫者も看護婦も見え出した。

葉子はそれだけの事を見ると急に氣のゆるむのを覺えた。而して涙がぽろ〳〵と出てしかたがなくなつた。をかしな……如何してかう涙が出るのだらうと怪しむ中に、やる瀨ない悲哀がどつとこみ上げて來た。底のないやうな淋しい悲哀……その中に葉子は悲哀とも睡さとも區別の出來ない重い力に壓せられて又知覺から物のない世界に落ち込んで行つた。

本當に葉子が眼を覺ました時には、眞蒼に晴天の後の夕暮が催してゐる頃だつた。葉子は部屋の隅の三疊に蚊帳の中に横になつて寢てゐたのだつた。そこには愛子の外に岡も來合せて貞世の世話をしてゐた。倉地はもうゐなかつた。

愛子の云ふ所によると、葉子は貞世にソップを飲まさうとして色々に云つたが、熱が急に下つて急に食慾のついた貞世は飯でなければ如何しても食べないと云つて聽かなかつたのを、葉子は涙を流さんばかりになつて執念くソップを飲ませようとした結果、貞世はそこにあつたソップ皿を臥てゐながらひつくり返してしまつたのだつ

た。さうすると葉子はいきなり立ち上つて貞世の胸許を摑むなり寢臺から引きずり下ろしてこづき廻した。幸にゐ合せた倉地が大事にならない中に葉子から貞世を取り放しはしたが、今度は葉子は倉地に死物狂ひに喰つてかかつて、その中に激しい癪を起してしまつたのだとの事だつた。

　葉子の心は空しく痛んだ。何處にとて取りつくものもないやうな空しさが心には殘つてゐるばかりだつた。貞世の熱はすつかり元通りに昇つてしまつて、ひどくおびえるらしい囈言を絶え間なしに口走つた。節々はひどく痛みを覺えながら、發作の過ぎ去つた葉子は、普段通りになつて起き上る事も出來るのだつた。然し葉子は愛子や岡への手前直ぐ起き上るのも變だつたのでその日はそのまゝ寢續けた。

　貞世は今度こそは死ぬ。とう／＼自分の末路も來てしまつた。さう思ふと葉子はやる方なく悲しかつた。縱令貞世と自分とが幸ひに生き殘つたとしても、貞世は屹度永劫自分を命の敵と怨むに違ひない。

「死ぬに限る」

　葉子は窓を通して靑から藍に變つて行きつゝある初夏の夜の景色を眺めた。神祕的な穩かさと深さとは腦心に沁み通るやうだつた。貞世の枕許には若い岡と愛子とが睦まじげに居たり立つたりして貞世の看護に餘念なく見えた。その時の葉子にはそれは美しくさへ見えた。親切な岡、柔順な愛子……二人が愛し合ふのは當然でいゝ事らしい。

「どうせ總ては過ぎ去るのだ」

　葉子は美しい不思議な幻影でも見るやうに、電氣燈の綠の光の中に立つ二人の姿を、無常を見貫いた隱者のやうな心になつて打ち眺めた。

四五

この事があつた日から五日經つたけれども倉地はぱつたり來なくなつた。便りもよこさなかつた。金も送つては來なかつた。餘りに變なので岡に賴んで下宿の方を調べて貰ふと、三日前に荷物の大部分を持つて旅行に出ると云つて姿を隱してしまつたのださうだ。倉地がゐなくなると、刑事だと云ふ男が二度か三度色々な事を尋ねに來たとも云つてゐるさうだ。岡は倉地からの一通の手紙を持つて歸つて來た。葉子は直ぐに封を開いて見た。

「事重大となり姿を隱す。郵便では累を及ぼさん事を恐れ、これを主人に託しおく。金も當分は送れぬ。困つたら家財道具を賣れ。その中には何んとかする。讀後火中」

とだけ認めて葉子への宛名も自分の名も書いてはなかつた。倉地の手蹟には間違ない。然しあの發作以後益々ヒステリックに根性のひねくれてしまつた葉子は、手紙を讀んだ瞬間にこれは造り事だと思ひ込まないではゐられなかつた。とう〳〵倉地も自分の手から遁れてしまつた。やる瀨ない恨みと憤りが眼も眩む程に頭の中を攪き亂した。

岡と愛子とがすつかり打ち解けたやうになつて、岡が殆んど入り浸りに病院に來て貞世の介抱をするのが葉子には見てゐられなくなつて來た。

「岡さん、もうあなたこれからこゝには入らつしやらないで下さいまし。こんな事になると御迷惑があなたに懸らないとも限りませんから。私達の事は私達がしますから。私はもう他人に賴りたくはなくなりました」

「さう仰有らずにどうか私をあなたのお側に置かして下さい。私、決して傳染なぞを恐れはしません」

岡は倉地の手紙を讀んではゐないのに葉子は氣がついた。迷惑と云つたのを病氣の傳染と思ひ込んでゐるらし

い。さうぢやない。岡が倉地の犬でないと如何して云へよう。倉地が岡を通して愛子と慇懃を通はし合つてゐないと誰が斷言出來る。愛子は岡をたらし込む位は平氣でする娘だ。葉子は自分の愛子位の年頃の時の自分の經驗の一々が生き返つてその猜疑心を煽り立てるのに自分から苦しまねばならなかつた。あの年頃の時、思ひさへすれば自分にはそれ程の事は手もなくして退ける事が出來た。而して自分は愛子よりももつと無邪氣な、おまけに快活な少女であり得た。寄つてたかつて自分を欺しにかゝるのなら、自分にだつてして見せる事がある。

「そんなにお考へならお出で下さるのはお勝手ですが、愛子をあなたにさし上げる事は出來ないんですからそれは御承知下さいましよ。ちやんと申上げておかないと後になつていさくさが起るのはいやですから……愛さんお前も聞いてゐるだらうね」

さう云つて葉子は疊の上で貞世の胸にあてる濕布を縫つてゐる愛子の方にも振り向いた。首垂れた愛子は顏も上げず返事もしなかつたから、どんな樣子を顏に見せたかを知る由はなかつたが、岡は羞恥の爲めに葉子を見かへる事も出來ない位になつてゐた。それは然し岡が葉子の餘りと云へば露骨な言葉を恥ぢたのか、自分の心持を發かれたのを恥ぢたのか、葉子の迷ひ易くなつた心にはしつかりと見窮められなかつた。

是れにつけ彼れにつけもどかしい事ばかりだつた。葉子は自分の眼で二人を看視して同時に倉地を間接に看視するより外はないと思つた。こんな事を思ふすぐ側から葉子は倉地の細君の事も思つた。今頃は彼等はのう／＼として邪魔者がゐなくなつたのを喜びながら一つ家に住んでゐないとも限らないのだ。それとも倉地の事だ、第二第三の葉子が葉子の不幸をいゝ事にして倉地の側に現はれてゐるのかも知れない。……然し今の場合倉地の行方を尋ねあてる事は一寸むづかしい。

それからと云ふもの葉子の心は一秒の間も休まらなかつた。勿論今までゞも葉子は人一倍心の働く女だつたけ

れども、その頃のやうな激しさは嘗てなかつた。而かもそれが毎時も表から裏を行く働き方だつた。それは自分ながら全く地獄の苛責だつた。

その頃から葉子は屢〻自殺といふ事を深く考へるやうになつた。それは自分でも恐ろしい程だつた。肉體の生命を絶つ事の出來るやうな物さへ眼に觸れゝば、葉子の心はおびえながらもはつと高鳴つた。藥局の前を通るとずらつと列んだ藥瓶が誘惑のやうに眼を射た。看護婦が帽子を髪にとめる爲めの長い帽子ピン、天井の張つてない湯殿の梁、看護婦室に薄赤い色をして金盥にたゝへられた昇汞水、腐敗した牛乳、剃刀、鋏、夜更けなどに上野の方から聞こえて來る汽車の音、病室から眺められる生理學教室の三階の窓、密閉された部屋、しごき帶、……何んでも彼でもが自分の肉を喰む毒蛇の如く鎌首を立てゝ自分を待ち伏せしてゐるやうに思へた。或る時はそれ等をこの上なく恐ろしく、或る時は又この上なく親しみ深く眺めやつた。一疋の蚊にさゝれた時さへそれがマラリヤを傳へる種類であるかないかを疑つたりした。

「もう自分はこの世の中に何んの用があらう。死にさへすればそれで事は濟むのだ。この上自身も苦しみたくない。他人も苦しめたくない。いやだ〳〵と思ひながら自分と他人とを苦しめてゐるのが堪へられない。眠りだ。長い眠りだ。それだけのものだ」

と貞世の寢息を窺ひながらしつかり思ひ込むやうな時もあつたが、同時に倉地が何處かで生きてゐるのを考へると、忽ち燕返しに死から生の方へ、苦しい煩惱の生の方へ激しく執着して行つた。倉地の生きてる間に死んでなるものか……それは死よりも強い誘惑だつた。意地にかけても、肉體の總ての機關が目茶々々になつても、それでも生きてゐて見せる。……葉子は而してそのどちらにも本當の決心のつかない自分に又苦しまねばならなかつた。

凡てのものを愛してゐるのか憎んでゐるのか判らなかつた。貞世に對してゞすらさうだつた。葉子はどうかすると、熱に浮かされて見界のなくなつてゐる貞世を、繼母がまゝ子をいびり拔くやうに沒義道に取り扱つた。而して次ぎの瞬間には後悔し切つて、愛子の前でも看護婦の前でも構はずにおい／＼と泣きくづをれた。

貞世の病狀は惡くなるばかりだつた。

或る時傳染病室の醫長が來て、葉子が今のまゝでゐては迚も健康が續かないから、思ひ切つて手術をしたら如何だと勸告した。默つて聞いてゐた葉子は、すぐ岡の差入れ口だと邪推して取つた。その後ろには愛子がゐるに違ひない。葉子が附いてゐたのでは貞世の病氣は癒るどころか惡くなるばかりだ（それは葉子もさう思つてゐた。葉子は貞世を全快させてやりたいのだ。けれども如何してもいびらなければゐられないのだ。それはよく葉子自身が知つてゐると思つてゐた）。それには葉子を何んとかして貞世から離しておくのが第一だ。そんな相談を醫長としたものがゐない筈がない。ふむ、……甘い事を考へたものだ。その復讐は屹度してやる。根本的に病氣を癒してからしてやるから見てゐるがいゝ。葉子は醫長との對話の中に早くもかう決心した。而して思ひの外手取早く手術を受けようと進んで返答した。

婦人科の室は傳染病室とはずつと離れた所に近頃新築された建物の中にあつた。七月の央ばに葉子はそこに入院する事になつたが、その前に岡と古藤とに依賴して、自分の身近かにある貴重品から、倉地の下宿に運んである衣類までを處分して貰はなければならなかつた。金の出所は全く杜絕えてしまつてゐたから。岡が頻りに融通しようと申し出たのもすげなく斷つた。弟同樣の少年から金まで融通して貰ふのは如何しても葉子のプライドが承知しなかつた。

葉子は特等を選んで日當りのいゝ廣々とした部屋に這入つた。そこは傳染病室とは比べものにもならない位新

式の設備の整つた居心地のいゝ所だつた。窓の前の庭はまだ掘りくり返したまゝで赤土の上に草も生えてゐなかつたけれども、廣い廊下の冷やかな空氣は涼しく病室に通りぬけた。葉子は六月の末以來始めて寢床の上に安々と體を横へた。疲勞が回復するまで暫くの間手術は見合せるといふので葉子は毎日一度づゝ内診をして貰ふだけですする事もなく日を過した。

然し葉子の精神は昂奮するばかりだつた。一人になつて暇になつて見ると、自分の心身がどれ程破壞されてゐるかゞ自分ながら恐ろしい位感ぜられた。よくこんな有樣で今まで通して來たと驚くばかりだつた。寢臺の上に臥て見ると二度と起きて歩く勇氣もなく、又實際出來もしなかつた。唯鈍痛とのみ思つてゐた痛みは、どいつちに寢返つて見ても我慢の出來ない程な激痛になつてゐて、氣が狂ふやうに頭は重くうづいた。我慢にも貞世を見舞ふなどゝ云ふ事は出來なかつた。

かうして臥ながらにも葉子は斷片的に色々な事を考へた。自分の手許にある金の事を先づ思案して見た。倉地から受け取つた金の殘りと調度類を賣り拂つて貰つて出來た纏まつた金とが何にもかにもこれから姉妹三人を養つて行く唯一つの資本だつた。その金が使ひ盡された後には今の所、何を如何するといふ目途は露ほどもなかつた。葉子は普段の葉子に似合はずそれが氣になり出して仕方がなかつた。特等室なぞに這入り込んだ事が後悔されるばかりだつた。と云つて今になつて等級の下つた病室に移して貰ふなどゝは葉子としては思ひも寄らなかつた。

葉子は贅澤な寢臺の上に横になつて、羽根枕に深々と頭を沈めて、氷嚢を額にあてがひながら、かんかんと赤土に射してゐる眞夏の日の光を、廣々と取つた窓を通して眺めやつた。而して物心附いてからの自分の過去を針で揉み込むやうな頭の中でずつと見渡すやうに考へ廻つて見た。そんな過去が自分のものなのか、さう疑つて見ねばならぬ程にそれは遙かにもかけ隔たつた事だつた。父母——殊に父の嘗めるやうな寵愛の下に何一つ苦勞を

知らずに清い美しい童女としてすら〳〵と育つたあの時分が矢張り自分の過去なのだらうか。木部との戀に醉ひ耽つて、國分寺の櫟の林の中で、その胸に自分の頭を託して、木部の云ふ一語々々を美酒のやうに飮みほしたあの少女は矢張り自分なのだらうか。女の誇りと云ふ誇りを一身に集めたやうな美貌と才能の持主として、女達からは羨望の的となり、男達からは嘆美の祭壇とされたあの青春の女性は矢張りこの自分なのだらうか。誤解の中にも攻撃の中にも昂然と首を擡げて、自分は今の日本に生れて來べき女ではなかつたのだ。不幸にも時と處とを間違へて天上から送られた王女であるとまで自分に對する矜誇に滿ちてゐた、あの妖婉な女性はまがふ方なく自分なのだらうか。繪島丸の中で味ひ盡し嘗め盡した歡樂と陶醉との限りは、始めて世に生れ出た生甲斐をしみじみと感じた誇りがな暫くは今の自分と結び付けていゝ過去の一つなのだらうか……日はかん〳〵と赤土の上に照りつけてゐた。油蟬の聲は御殿の池をめぐる鬱蒼たる木立の方から沁み入るやうに聞こえてゐた。近い病室では輕病の患者が集まつて、何かみだらゝしい雜談に笑ひ興じてゐる聲が聞こえて來た。それは實際なのか夢なのか。それ等の總ては腹立たしい事なのか、哀しい事なのか、笑ひ捨つべき事なのか、歎き恨まねばならぬ事なのか。……喜怒哀樂のどれか一つだけでは表はし得ない、不思議に交錯した感情が、葉子の眼から留度なく涙を誘ひ出した。あんな世界がこんな世界に變つてしまつた。さうだ貞世が生死の境に彷徨つてゐるのはまちがひやうのない事實だ。自分の健康が衰へ果てたのも間違ひのない出來事だ。若し毎日貞世を見舞ふ事が出來るのならばこのまゝこゝにゐるのもいゝ。然し自分の身體の自由さへ今はきかなくなつた。手術を受ければどうせ當分は身動きも出來ないのだ。岡や愛子……そこまで來ると葉子は夢の中にゐる女ではなかつた。まざ〳〵とした煩惱が勃然としてその齒嚙みした物凄い鎌首をきつと擡げるのだつた。それもよし。近くゐても看視の利かないのを利用したくば思ふさま利用するがいゝ。倉地と三人で勝手な陰謀を企てるがいゝ。どうせ看視の利かないものなら、自分

は貞世の爲めに何處か第二流か第三流の病院に移らう。而していくらでも貞世の方を安樂にしてやらう。葉子は貞世から離れると一圖にそのあはれさが身に沁みてから思つた。

葉子はふとつやの事を思ひ出した。つやは看護婦になつて京橋あたりの病院にゐると雙鶴館から云つて來たのを思ひ出した。愛子を呼び寄せて電話で探させようと決心した。

四六

眞暗な廊下が古ぼけた緣側になつたり、緣側の突き當りに階子段があつたり、日當りのいゝ中二階のやうな部屋があつたり、納戸と思はれる暗い部屋に屋根を打ち拔いてガラスを箝めて光線が引いてあつたりするやうな、謂はゞその界隈に澤山ある待合の建物に手を入れて使つてゐるやうな病院だつた。つやは加治木病院といふその病院の看護婦になつてゐた。

長く天氣が續いて、その後に激しい南風が吹いて、東京の市街は埃まぶれになつて、空も、家屋も、樹木も、黄粉でまぶしたやうになつた擧句、氣持惡く蒸し〳〵と膚を汗ばませるやうな雨に變つた或る日の朝、葉子は僅かばかりな荷物を持つて、人力車で加治木病院に送られた。後ろの車には愛子が荷物の一部分を持つて乘つてゐた。須田町に出た時、愛子の車は日本橋の通りを眞直に一足先きに病院に行かして、葉子は外濠に沿うた道を日本銀行から暫く行く釘店の横丁に曲らせた。自分の住んでゐた家を他所ながら見て通りたい心持になつてゐたからだつた。前幌の隙間から覗くのだつたけれども、一年の後にもそこにはさして變つた樣子は見えなかつた。自分のゐた家の前で一寸車を止まらして中を覗いて見た。門札には叔父の名は無くなつて、知らない他人の姓名が掲げられてゐた。それでもその人は醫者だと見えて、父の時分からの永壽堂病院といふ看板は相變らず玄關の楣

に見えてゐた。長三洲と署名してあるその字も葉子には親しみの深いものだつた。葉子が亞米利加に出發した朝も九月ではあつたが矢張りその日のやうにじめ〳〵と雨の降る日だつたのを思ひ出した。愛子が櫛を折つて急に泣き出したのも、貞世が怒つたやうな顔をして眼に涙を一杯溜めたまゝ見送つてゐたのも、その玄關を見ると描くやうに思ひ出された。

「もういゝ早くやつておくれ」

さう葉子は車の上から涙聲で云つた。車は梶棒を向け換へられて、叉雨の中を小さく搖れながら日本橋の方に走り出した。葉子は不思議にそこに一緒に住んでゐた叔父叔母の事を泣きながら思ひやつた。あの人達は今何處に如何してゐるだらう。あの白痴の兒ももう隨分大きくなつたらう。でも渡米を企てゝからまだ一年とは經つてゐないんだ。へえ、そんな短い間にこれ程の變化が……葉子は自分で自分に呆れるやうにそれを思ひやつた。それではあの白痴の兒も思つた程大きくなつてゐる譯ではあるまい。葉子はその子の事を思ふと如何した譯か定子の事を胸が痛む程嚴しく想ひ出してしまつた。鎌倉に行つた時以來、自分の懷ろからもぎ放してしまつて、金輪際忘れてしまはうと堅く心に契つてゐたその定子が……それはその場合葉子を全く慘めにしてしまつた。

病院に着いた時も葉子は泣き續けてゐた。而してその病院のすぐ手前まで來て、そこに入院しようとした事を心から後悔してしまつた。こんな落魄したやうな姿をつやに見せるのが堪へがたい事のやうに思はれ出したのだ。

暗い二階の部屋に案內されて、愛子が準備しておいた床に横になると葉子は誰に挨拶もせずに唯泣き續けた。そこは運河の水の匂ひが泥臭く通つて來るやうな所だつた。愛子は煤けた障子の蔭で手廻りの荷物を取り出して按配した。口少なの愛子は姉を慰めるやうな言葉も出さなかつた。外部が騷々しいだけに部屋の中は猶更ひつそ

りと思はれた。

　葉子はやがて靜かに顏を擧げて部屋の中を見た。愛子の顏色が黄色く見える程その日の空も部屋の中も寂れてゐた。少し黴を持つたやうに埃つぽくぶく〳〵する疊の上には丸盆の上に大學病院から持つて來た藥瓶が載せてあつた。障子際には小さな鏡臺が、違ひ棚には手文庫と硯箱が飾られたけれども、床の間には幅物一つ、花活け一つ置いてなかつた。その代りに草色の風呂敷に包み込んだ衣類と黒い柄のパラソルとが置いてあつた。藥瓶の載せてある丸盆が、出入りの商人から到來のもので、縁の所に剝げた所が出來て、表には赤い短冊のついた矢が的に命中してゐる畫が安つぽい金で描いてあつた。葉子はそれを見ると盆もあらうにと思つた。それだけでもう葉子は腹が立つたり情けなくなつたりした。

「愛さんあなた御苦勞でも毎日一寸づゝは來てくれないぢや困りますよ。貞ちやんの樣子も聞きたいしね。……貞ちやんも賴んだよ。熱が下つて物事が分るやうになる時には私も癒つて歸るだらうから……愛さん」

　毎時もの通りはき〳〵とした手應へがないので、もうぎり〳〵して來た葉子は劍を持つた聲で、「愛さん」と語氣強く呼びかけた。言葉をかけるとそれでも片付けものゝ手を置いて葉子の方に向き直つた愛子は、この時やうやく顏を上げておとなしく「はい」と返事をした。葉子の眼はすかさずその顏を發矢と鞭うつた。而して寢床の上に半身を肘に支へて起き上つた。車で搖られた爲めに腹部は痛みを增して聲を揚げたい程うづいてゐた。

「あなたに今日ははつきり聞いておきたい事があるの……あなたはよもや岡さんとひよんな約束なんぞしてはゐますまいね」

「いゝえ」

　愛子は手もなく素直にかう答へて眼を伏せてしまつた。

「古藤さんとも？」

「いゝえ」

今度は顏を上げて不思議な事を問ひたゞすと云ふやうにぢつと葉子を見詰めながらから答へた。そのタクトがあるやうな、ないやうな愛子の態度が葉子をいやが上にいらだゝした。㒵の場合には何處か後ろめたくて首を垂れたとも見える。古藤の場合にはわざとしらを切る爲めに大膽に顏を上げたとも取れる。又そんな意味ではなく、あまり不思議な詰問が二度まで續いたので、二度目には怪訝に思つて顏を上げたのかとも考へられる。葉子は疊みかけて倉地の事まで問ひ正さうとしたが、その氣分は摧かれてしまつた。そんな事を聞いたのが第一愚かだつた。隱し立てをしようと決心した以上は、女は男よりも遙かに巧妙で大膽なのを葉子は自分で存分に知り拔いてゐるのだ。自分から進んで內兜を見透かされたやうなもどかしさは一層葉子の心を憤らした。

「あなたは二人から何かそんな事を云はれた覺えがあるでせう。その時あなたは何んと御返事したの」

愛子は下を向いたまゝ默つてゐた。葉子は圖星をさしたと思つて嵩にかゝつて行つた。

「私は考へがあるからあなたの口からもその事を聞いておきたいんだよ。仰有いな」

「お二人とも何んにもそんな事は仰有りはしませんわ」

「仰有らない事があるもんかね」

憤怒に伴つてさしこんで來る痛みを憤怒と共にぐつと押へつけながら葉子はわざと聲を和げた。而して愛子の擧動を爪の先きほども見逃すまいとした。愛子は默つてしまつた。この沈默は愛子の隱れ家だつた。さうなるとさすがの葉子もこの妹を如何取り扱ふ術もなかつた。㒵なり古藤なりが告白をしてゐるのなら、葉子がこの次ぎに云ひ出す言葉で樣子は知れる。この場合うつかり葉子の口車には乘られないと愛子は思つて沈默を守つてゐるの

かも知れない。岡なり古藤なりから何か聞いてゐるのなら、葉子はそれを十倍も二十倍もの强さにして使ひこなす術を知つてゐるのだけれども、生憎その備へはしてゐなかつた。愛子は確かに自分をあなどり出してゐると葉子は思はないではゐられなかつた。寄つてたかつて大きな詐僞の網を造つて、その中に自分を押しこめて、周圍から眺めながら面白さうに笑つてゐる。岡だらうが古藤だらうが何があてになるものか。……葉子は手傷を負つた猪のやうに一直線に荒れて行くより仕方がなくなつた。

「さあお云ひ愛さん、お前さんが默つてしまふのは惡い癖ですよ。姉さんを甘くお見でないよ。……お前さん本當に默つてる積りかい……さうぢやないでせう、あればある無ければ無いで、はつきり分るやうに話をしてくれるんだらうね……愛さん……あなたは心から私を見くびつてかゝるんだね」

「さうぢやありません」

餘り葉子の言葉が激して來るので、愛子は少し怖れを感じたらしく慌てゝかう云つて言葉で支へようとした。

「もつとこつちにお出で」

愛子は動かなかつた。葉子の愛子に對する憎惡は極點に達した。葉子は腹部の痛みも忘れて、寢床から跳り上つた。而していきなり愛子のたぶさを摑まうとした。

愛子は普段の冷靜に似ず、葉子の發作を見て取ると、敏捷に葉子の手許をすり拔けて身をかはした。葉子はふら〳〵とよろけて一方の手を障子紙に突つ込みながら、それでも倒れるはずみに愛子の袖先きを摑んだ。葉子は倒れながらそれをたぐり寄せた。醜い姉妹の爭鬪が、泣き、わめき、叫び立てる聲の中に演ぜられた。愛子は顏や手に搔き傷を受け、髮をおどろに亂しながらも、やうやく葉子の手を振り放して廊下に飛び出した。葉子はよろ〳〵とした足取りでその後を追つたが、迚も愛子の敏捷さには叶はなかつた。而して階子段の降口の所でつやに

喰ひ止められてしまつた。葉子はつやの肩に身を投げかけながらおい〳〵と聲を立てゝ子供のやうに泣き沈んでしまつた。

幾時間かの人事不省の後に意識がはつきりして見ると、葉子は愛子とのいきさつを唯惡夢のやうに思ひ出すばかりだつた。而かもそれは事實に違ひない。枕許の障子には葉子の手のさし込まれた孔が、大きく破れたまゝ殘つてゐる。入院のその日から、葉子の名は口さがない婦人患者の口の端にうるさく上つてゐるに違ひない。それを思ふと一時でもそこにぢつとしてゐるのが、堪へられない事だつた。葉子はすぐ外の病院に移らうと思つてつやに云ひつけた。然しつやは如何してもそれを承知しなかつた。自分が身に引き受けて看護するから、是非ともこの病院で手術を受けて貰ひたいとつやは云ひ張つた。葉子から暇を出されながら、妙に葉子に心を引き付けられてゐるらしい姿を見ると、この場合葉子はつやにしみ〴〵とした愛を感じた。淸潔な血が細いしなやかな血管を滯りなく流れ廻つてゐるやうな、すべ〳〵と健康らしい、淺黑いつやの皮膚は、何よりも葉子には愛らしかつた。始終吹出物でもしさうな、膿つぽい女を葉子は何よりも呪はしいものに思つてゐた。葉子はつやのまめやかな心と言葉に引かされてそこにゐ殘る事にした。

これだけ貞世から隔たると葉子は始めて少し氣のゆるむのを覺えて、腹部の痛みで突然眼を覺ます外には他愛なく眠るやうな事もあつた。然し何んと云つても一番心に懸るものは貞世だつた。さゝくれて、赤く乾いた唇から漏れ出るあの囈言……それが如何かすると近々と耳に聞こえたり、ぼんやりと眼を開いたりするその顏が浮き出して見えたりした。そればかりではない、葉子の五官は非常に敏捷になつて、おまけにイリウジョンやハルシネーションを絶えず見たり聞いたりするやうになつてしまつた。倉地なんぞはすぐ側に坐つてゐるなと思つて、苦しさに眼をつぶりながら手を延ばして疊の上を探つて見る事などもあつた。そんなにはつきり見えたり聞こえた

りするものが、凡て虚構であるのを見出す淋しさは例へやうがなかつた。

愛子は葉子が入院の日以來感心に毎日訪れて貞世の容體を話して行つた。もう始めの日のやうな狼藉はしなかつたけれども、その顏を見たばかりで、葉子は病氣が重るやうに思つた。殊に貞世の病狀が輕くなつて行くといふ報告は、激しく葉子を怒らした。自分があれ程の愛着を籠めて看護してもよくならなかつたものが、愛子なんその通り一遍の世話で治る筈がない。又愛子はいゝ加減な氣休めに虚言をついてゐるのだ。貞世はもうひよつとすると死んでゐるかも知れない。さう思つて岡が尋ねて來た時に根掘り葉掘り聞いて見るが、二人の言葉が餘りに符合するので、貞世の段々よくなつて行きつゝあるのを疑ふ餘地はなかつた。葉子には運命が狂ひ出したやうにしか思はれなかつた。愛情と云ふものなしに病氣が治せるなら、人の生命は機械でも造り上げる事が出來る譯だ。そんな筈はない。それだのに貞世は段々よくなつて行つてゐる。人ばかりではない、神までが、自分を自然法の他の法則で弄ばうとしてゐるのだ。

葉子は齒がみをしながら貞世が死ねかしと祈るやうな瞬間を持つた。

日は經つけれども倉地からは本當に何んの消息もなかつた。病的に感覺の昂奮した葉子は、時々肉體的に倉地を慕ふ衝動に驅り立てられた。葉子の心の眼には、倉地の肉體の總ての部分は觸れる事が出來ると思ふ程具體的に想像された。葉子は自分で造り出した不思議な迷宮の中にあつて、意識の痺れ切るやうな陶醉にひたつた。然しその醉が醒めた後の苦痛は、精神の疲弊と一緒に働いて、葉子を半死半生の境に打ちのめした。葉子は自分の妄想に嘔吐を催しながら、倉地と云はず總ての男を呪ひに呪つた。

愈ゝ葉子が手術を受けるべき前の日が來た。葉子はそれを左程恐ろしい事とは思はなかつた。子宮後屈症と診斷された時、買つて歸つて讀んだ浩澣な醫書によつて見ても、その手術は割合に簡單なものであるのを知り拔い

でゐたから、その事については割合に安々とした心持でゐる事が出來た。唯名狀し難い焦燥と悲哀とは如何片付けようもなかつた。毎日來てゐた愛子の足は二日おきになり三日おきになり段々遠ざかつた。岡などは全く姿を見せなくなつてしまつた。葉子は今更に自分の周りを淋しく見廻して見た。出遇ふかぎりの男と女とが何がなしに牽き着けられて、離れる事が出來なくなる、そんな磁力のやうな力を持つてゐるといふ自負に氣負つて、自分の周圍には知ると知らざるとを問はず、何時でも無數の人々の心が待つてゐるやうに思つてゐた葉子は、今は凡ての人から忘られ果てゝ、大事な定子からも倉地からも見放し見放されて、荷物のない物置部屋のやうな貧しい一室の隅つこに、夜具にくるまつて暑氣に蒸されながら崩れかけた五體を頼りなく横へねばならぬのだ。それは葉子に取つてはあるべき事とは思はれぬまでだつた。然しそれが確かな事實であるのを如何しよう。

それでも葉子はまだ立ち上らうとした。自分の病氣が癒え切つたその時を見てゐるがいゝ。如何して倉地をもう一度自分のものに仕遂せるか、それを見てゐるがいゝ。

葉子は腦心にたぐり込まれるやうな痛みを感ずる兩眼から熱い涙を流しながら、徒然なまゝに火のやうな一心を倉地の身の上に集めた。葉子の顏にはいつでもハンケチがあてがはれてゐた。それが十分も經たない中に熱く濡れ通つて、つやに新しいのと代へさせねばならなかつた。

四七

その夜六時過ぎ、つやが來て障子を開いて、段々滿ちて行かうとする月が瓦屋根の重なりの上にぽつかり上つたのを覗かせてくれてゐる時、見知らぬ看護婦が美しい花束と大きな西洋封筒に入れた手紙とを持つて這入つて來てつやに渡した。つやはそれを葉子の枕許に持つて來た。葉子はもう花も何も見る氣にはなれなかつた。電氣

もまだ來てゐないのでつやにその手紙を讀ませて見た。つやは薄明りにすかし〳〵讀み惜さうに文字を拾つた。

「あなたが手術の爲めに入院なさつた事を岡君から聞かされて驚きました。で、今日が外出日であるのを幸ひにお見舞します。

「僕はあなたにお目にかゝる氣にはなりません。僕はそれ程偏狹に出來上つた人間です。けれども僕は本當にあなたをお氣の毒に思ひます。倉地といふ人間が日本の軍事上の祕密を外國に漏らす商賣に關係した事が知れると共に、姿を隱したといふ報道を新聞で見た時、僕はそんなに驚きませんでした。然し倉地には二人程の外妾があると附け加へて書いてあるのを見て、本當にあなたをお氣の毒に思ひました。この手紙を皮肉に取らないで下さい。僕には皮肉は云へません。

「僕はあなたが失望なさらないやうに祈ります。僕は來週の月曜日から習志野の方に演習に行きます。木村からの便りでは、彼は窮迫の絶頂にゐるやうです。けれども木村はそこを突き拔けるでせう。

「花を持つて來て見ました。お大事に。

古　藤　生」

つやはつかへ〳〵それだけを讀み終つた。始終古藤を遙か年下な子供のやうに思つてゐる葉子は、一種侮蔑するやうな無感情を以てそれを聞いた。倉地が外妾を二人持つてると云ふ噂は初耳ではあるけれども、それは新聞の記事であつて見ればあてにはならない。その外妾二人と云ふのが、美人屋敷と評判のあつたそこに住む自分と愛子位の事を想像して、記者ならば云ひさうな事だ。唯さう輕くばかり思つてしまつた。

つやがその花束をガラス瓶に活けて、何んにも飾つてない床の上に置いて行つた後、葉子は前同樣にハンケチを顏にあてゝ、機械的に働く心の影と戰はうとしてゐた。

その時突然死が――死の問題ではなく――死がはつきりと葉子の心に立ち現はれた。若し手術の結果、子宮底に穿孔が出來るやうになつて腹膜炎を起したら、命の助かるべき見込みはないのだ。そんな事を不圖思ひ起した。部屋の姿も自分の心も何處と云つて特別に變つた譯ではなかつたけれども、何處となく葉子の周圍には確かに死の影がさまよつてゐるのをしつかりと感じないではゐられなくなつた。それは葉子が生れてから夢にも經驗しない事だつた。これまで葉子が死の問題を考へた時には、如何して死を招き寄せようかと云ふ事ばかりだつた。然し今は死の方がそろ〳〵と近寄つて來てゐるのだ。

月は段々光を增して行つて、電燈に灯も點つてゐた。眼の先きに見える屋根の間からは、炊煙だか、蚊遣火だかゞ薄すらと水のやうに澄み渡つた空に消えて行く。履物、車馬の類、汽笛の音、うるさい程の人々の話聲、さういふものは葉子の部屋をいつもの通り取り捲きながら、而して部屋の中は兎に角整頓して灯が點つてゐて、少しの不思議もないのに、何處とも知れずそこには死が這ひ寄つて來てゐた。

葉子はぎよつとして、血の代りに心臟の中に氷の水を瀉ぎこまれたやうに思つた。死なうとする時はとう〳〵葉子には來ないで、思ひもかけず死ぬ時が來たんだ。今まで留度なく流してゐた淚は、近づく嵐の前のそよ風のやうに何處ともなく姿をひそめてしまつてゐた。葉子は慌てふためいて、大きく眼を見開き、鋭く耳を聳かして、そこにある物、そこにある響きを捕へて、それにすがり附きたいと思つたが、眼にも耳にも何か感ぜられながら、何が何やら少しも分らなかつた。唯感ぜられるのは、心の中が譯もなく唯わく〳〵として、すがり附くものがあれば何にでもすがり附きたいと無性にあせつてゐる、その目まぐるしい欲求だけだつた。葉子は震へる手で枕を撫で廻したり、シーツを摘まみ上げてぢつと握り締めて見たりした。冷たい油汗が掌に滲み出るばかりで、握つたものは何んの力にもならない事を知つた。その失望は形容の出來ない程大きなものだつた。葉子は一つの努力

ごとにがつかりして、又懸命に便りになるもの、根のあるやうなものを追ひ求めて見た。然し何處を探して見ても總ての努力が全く無駄なのを心では本能的に知つてゐた。

周圍の世界は少しのこだはりもなくずる〳〵と平氣で日常の營みをしてゐた。看護婦が草履で廊下を歩いて行く、その音一つを考へて見ても、そこには明かに生命が見出された。その足は確かに廊下を踏み、廊下は礎に續き、礎は大地に据ゑられてゐた。患者と看護婦との間に取り交はされる言葉一つにも、それを與へる人と受ける人とがちやんと大地の上に存在してゐた。然しそれらは奇妙にも葉子とは全く無關係で沒交渉だつた。葉子のゐる所には何處にも底がない事を知らねばならなかつた。深い谷に誤つて落ち込んだ人が落ちた瞬間に感ずるあの焦燥……それが連續して止む時なく葉子を襲ふのだつた。深さの分らないやうな暗い闇が、葉子を唯一人眞中に据ゑておいて、果てしなくそのまはりを包まうと靜かに〳〵近づきつゝある。葉子は少しもそんな事を欲しないのに、葉子の心持には頓着なく、休む事なく止まる事なく、悠々閑々として近づいて來る。葉子は恐ろしさにおびえて聲も得上げなかつた。而して唯そこから遁れ出たい一心に心ばかり焦りに焦つた。

もう駄目だ、力が盡き切つたと、觀念しようとした時、然し、その奇怪な死は、すうつと朝霧が晴れるやうに、葉子の周圍から消え失せてしまつた。見た所、そこには何一つ變つた事もなければ變つた物もない。唯夏の夕が涼しく夜に繋がらうとしてゐるばかりだつた。葉子はきよとんとして庇の下に水々しく漂ふ月を見やつた。

唯不思議な變化の起つたのは心ばかりだつた。荒磯に波又波が千變萬化して追ひかぶさつて來ては激しく打ち摧けて、眞白な飛沫を空高く突き上げるやうに、これと云つて取り留めのない執着や、憤りや、悲しみや、恨みやが蜘手によれ合つて、それが自分の周圍の人達と結び附いて、譯もなく葉子の心を掻きむしつてゐたのに、その夕方の不思議な經驗の後では、一筋の透明な淋しさだけが秋の水のやうに果てしもなく流れてゐるばかりだつ

た。不思議な事には寢入つても忘れ切れない程な頭腦の激痛も痕なくなつてゐた。

神がゝりに遇つた人が神から見放された時のやうに、葉子は深い肉體の疲勞を感じて、寢床の上に打伏さつてしまつた。さうやつてゐると自分の過去や現在が手に取るやうにはつきり考へられ出した。而して冷やかな悔恨が泉のやうに湧き出した。

「間違つてゐた……かう世の中を歩いて來るんぢやなかつた。然しそれは誰の罪だ。分らない。然し兎に角自分には後悔がある。出來るだけ、生きてる中にそれを償つて置かなければならない」

內田の顏がふと葉子には思ひ出された。あの嚴格な基督の敎師は果して葉子の所に尋ねて來てくれるか如何か分らない。さう思ひながらも葉子はもう一度內田に遇つて話をしたい心持を止める事が出來なかつた。

葉子は枕許のベルを押してつやを呼び寄せた。そして手文庫の中から洋紙でとぢた手帳を取り出さして、それに毛筆で葉子の云ふ事を書き取らした。

「木村さんに。

「私はあなたを詐つて居りました。私は是れから他の男に嫁入ります。あなたは私を忘れて下さいまし。私はあなたの所に行ける女ではないのです。あなたのお思ひ違ひを十分御自分で調べて見て下さいまし。

「倉地さんに。

「私はあなたを死ぬまで。けれども二人とも間違つてゐた事を今はつきり知りました。死を見てから知りました。あなたにはお分りになりますまい。私は何もかも恨みはしません。あなたの奥さんは如何なさつておいでゞす。……私は一緒に泣く事が出來る。

「內田の小父さんに。

「私は今夜になつて小父さんを思ひ出しました。小母樣によろしく。
「木部さんに。
「一人の老女があなたの所に女の子を連れて參るでせう。その子の顏を見てやつて下さいまし。
「愛子と貞世に。
「愛さん、貞ちやん、もう一度さう呼ばしておくれ。それで澤山。
「岡さんに。
「私はあなたをも怒つてはゐません。
「古藤さんに。
「お花とお手紙とを難有う。あれから私は死を見ました。
七月二十一日　葉子」
つやはこんなぽつり〳〵と短い葉子の言葉を書き取りながら、時々怪訝な顏をして葉子を見た。葉子の唇は淋しく震へて、眼にはこぼれない程度に涙が滲み出してゐた。
「もうそれでいゝ難有うよ。あなたゞけね、こんなになつてしまつた私の側にゐてくれるのは。……それだのに、私はこんなに零落した姿をあなたに見られるのがつらくつて、來た日は途中から外の病院に行つて仕舞はうかと思つたのよ。馬鹿だつたわね」
葉子は口ではなつかしさうに笑ひながら、ほろ〳〵と涙をこぼしてしまつた。
「それをこの枕の下に入れておいておくれ。今夜こそは私久し振りで安々とした心持で寢られるだらうよ、明日の手術に疲れないやうによく寢ておかないといけないわね。でもこんなに弱つてゐても手術は出來るのか知らん……もう蚊帳を吊つておくれ。そして序でに寢床をもつとそつちに引つ張つて行つて、月の光が顏にあたるやう

にして頂戴な。戸は寢入つたら引いておくれ。……それから一寸あなたの手をお貸し。あなたの手は溫かい手ね。この手はいゝ手だわ」

葉子は人の手といふものをこんなになつかしいものに思つた事はなかつた。力を籠めた手でそうつと抱いて、いつまでもやさしくそれを撫でゝゐたかつた。つやも何時か葉子の氣分に引き入れられて、鼻をすゝるまでに涙ぐんでゐた。

葉子はやがて打ち開いた障子から蚊帳越しにうつとりと月を眺めながら考へてゐた。葉子の心は月の光で淸められたかと見えた。倉地が自分を捨てゝ逃げ出す爲めに書いた狂言が計らず其筋の嫌疑を受けたのか、それとも恐ろしい賣國の罪で金をすら葉子に送れぬやうになつたのか、それは如何でもよかつた。縱令ば妾が幾人あつてもそれも如何でもよかつた。唯總てが空しく見える中に倉地だけが唯一人本當に生きた人のやうに葉子の心に住んでゐた。互ひを墮落させ合ふやうな愛し方をした、それも今はなつかしい思ひ出だつた。木村は思へば思ふ程涙ぐましい不幸な男だつた。その思ひ入つた心持は何事もわだかまりのなくなつた葉子の胸の中を淸水のやうに流れて通つた。多年の迫害に復讐する時機が來たといふやうに、岡までをそゝのかして、葉子を見捨てゝしまつたと思はれる愛子の心持にも葉子は同情が出來た。愛子の情けに引かされて葉子を裏切つた岡の氣持は猶更よく分つた。泣いても泣いても泣き足りないやうに可哀さうなのは貞世だつた。愛子はいまに屹度自分以上に恐ろしい道に踏み迷ふ女だと葉子は思つた。その愛子の唯一人の妹として……若しも自分の命が無くなつてしまつた後は……さう思ふにつけて葉子は內田を考へた。凡ての人は何かの力で流れて行くべき先きに流れて行くだらう。而して仕舞には誰でも自分と同樣に一人ぼつちになつてしまふんだ。どの人を見ても憐れまれる……葉子はさう思ひ耽りながら、靜かに〳〵西に廻つて行く月を見入つてゐた。その月の輪廓が段々ぼやけて來て、空の中に浮き漂ふ

やうになると、葉子の睫毛の一つ〳〵にも月の光が宿つた。涙が眼尻から溢れて兩方の顳顬の所を擽ぐるやうにするる〳〵と流れ下つた。口の中は粘液で粘つた。許すべき何人もない。許さるべき何事もない。唯あるがまゝ……唯一抹の清い悲しい靜けさ。葉子の眼はひとりでに閉ぢて行つた。整つた呼吸が輕く小鼻を震はして流れた。

つやが戸をたてにそうつとその部屋に這入つた時には、葉子は病氣を忘れ果てたものゝやうに、がたぴしと戸を締める音にも目覺めずに安らけく寢入つてゐた。

四八

その翌朝手術臺に上らうとした葉子は昨夜の葉子とは別人のやうだつた。激しい呼鈴の音で呼ばれてつやが病室に來た時には、葉子は寢床から起き上つて、認め終つた手紙の狀袋を封じてゐる所だつたが、それをつやに渡さうとする瞬間にいきなり嫌やになつて、唇をぶる〳〵震はせながらつやの見てゐる前でそれをずた〳〵に裂いてしまつた。それは愛子に宛てた手紙だつたのだ。今日は手術を受けるから九時までに是非とも立會ひに來るやうにと認めたのだつた。いくら氣丈夫でも腹を斷ち割る恐ろしい手術を年若い少女が見てゐられない位は知つてゐながら、葉子は何がなしに愛子にそれを見せつけてやりたくなつたのだ。自分の美しい肉體が酷らしく傷けられて、そこから靜脈を流れてゐるどす黑い血が流れ出る、それを愛子が見てゐる中に氣が遠くなつて、そのまゝそこに打つ倒れる。そんな事になつたらどれ程快いだらうと葉子は思つた。幾度來てくれろと電話をかけても、何んとか口實をつけてこの頃見も返らなくなつた愛子に、これだけの復讐をしてやるのでも少しは胸がすく、さう葉子は思つたのだ。然しその手紙をつやに渡さうとする段になると、葉子には思ひもかけぬ躊躇が來た。若し手術中にはしたない囈言でも言つてそれを愛子に聞かれたら。あの冷刻な愛子が面も背けずにぢつと姉の肉體が

切りさいなまれるのを見續けながら、心の中で存分に復讐心を滿足するやうな事があつたら。こんな手紙を受け取つてもてんで相手にしないで愛子が來なかつたら……そんな事を豫想すると葉子は手紙を書いた自分に愛想が盡きてしまつた。

つやは恐ろしいまでに激昂した葉子の顏を見やりもし得ないで、おづ〳〵と立ちもやらずにそこにかしこまつてゐた。葉子はそれが堪らない程癪に障つた。自分に對して凡ての人が普通の人間として交らうとはしない。狂人にでも接するやうな仕打ちを見せる。誰も彼もさうだ。醫者までがさうだ。

「もう用はないのよ。早くあつちにお出で。お前は私を氣狂ひとでも思つてゐるんだらうね。……早く手術をして下さいつてさう云つてお出で。私はちやんと死ぬ覺悟をしてゐますからつてね」

昨夕なつかしく握つてやつたつやの手の事を思ひ出すと、葉子は嘔吐を催すやうな不快を感じてから云つた。汚ない〳〵何もかも汚ない。つやは所在なげにそつとそこを立つて行つた。葉子は眼で嚙み付くやうにその後姿を見送つた。

その日天氣は上々で東向きの壁は觸つて見たら內部からでもほんのりと暖味を感ずるだらうと思はれる程暑くなつてゐた。葉子は昨日までの疲勞と衰弱とに似ず、その日は起きるとから默つて寢てはゐられない位、體が動かしたかつた。動かす度每に襲つて來る腹部の鈍痛や頭の混亂をいやが上にも募らして、思ひ存分の苦痛を味はつて見たいやうな捨鉢な氣分になつてゐた。而してふら〳〵と少しよろけながら、衣紋も亂したまゝ部屋の中を片付けようとして床の間の所に行つた。懸軸もない床の間の片隅には昨日古藤が持つて來た花が、暑さの爲めに蒸れたやうに萎みかけて、甘つたるい香を放つてうなだれてゐた。葉子はガラス瓶ごとそれを持つて緣側の所に出た。そしてその花のかたまりの中に無圖と熱した手を突つ込んだ。死屍から來るやうな冷たさが葉子の手に傳

はつた。葉子の指先きは知らず〳〵縮まつて行つて沒義道にそれを爪も立たんばかり握りつぶした。握りつぶしては瓶から引き拔いて手欄から戸外に投げ出した。薔薇、ダリア、小田卷などの色とり〳〵の花がばら〳〵に亂れて、二階から部屋の下に當る汚ない路頭に落ちて行つた。葉子は殆んど無意識に一摑みづゝさうやつて投げ捨てた。而して最後にガラス瓶を力任せに敲きつけた。瓶は眼の下で激しく壞れた、そこから溢れ出た水が、乾き切つた緣側板に丸い斑紋をいくつとなく散らかして。

　ふと見ると向うの屋根の物干臺に浴衣の類を持つて干しに上つて來たらしい女中風の女が、ぢつと不思議さうにこつちを見つめてゐるのに氣がついた。葉子とは何の關係もないその女までが、葉子のする事を怪しむらしい樣子をしてゐるのを見ると、葉子の狂暴な氣分は益〻募つた。葉子は手欄に兩手をついてぶる〳〵と震へながら、その女を何時までも〳〵睨みつけた。女の方でも葉子の仕打ちに氣附いて、暫くは意趣に見返す風だつたが、やがて一種の恐怖に襲はれたらしく、干物を竿に通しもせずにあたふたと慌てゝ干物臺の急な階子を駈け下りてしまつた。後には燃えるやうな青空の中に不規則な屋根の波ばかりが眼をちか〳〵させて殘つてゐた。葉子は何故にとも知れぬ溜息を深くついてまんじりとそのあからさまな景色を夢かなぞのやうに眺め續けてゐた。

　やがて葉子は又我れに返つて、ふくよかな髮の中に指を突つ込んで激しく頭の地をかきながら部屋に戻つた。

　そこには寢床の側に洋服を着た一人の男が立つてゐた。激しい外光から暗い部屋の方に眼を向けた葉子には、たゞ眞黑な立姿が見えるばかりで誰とも見分けがつかなかつた。然し手術の爲めに醫員の一人が迎へに來たのだと思はれた。それにしても障子の開く音さへしなかつたのは不思議な事だ。這入つて來ながら聲一つかけないのも不思議だ。と、思ふと得體の分ならいその姿は、その圍りの物が段々明かになつて行く間に、たつた一つだけ眞黑なまゝで何時までも輪廓を見せないやうだつた。謂はゞ人の形をした眞暗な洞穴が空氣の中に出來上つたや

うだつた。始めの間好奇心を以てそれを眺めてゐた葉子は見詰めれば見詰める程、その形に實質がなくつて、眞暗な空虚ばかりであるやうに思ひ出すと、ぞうつと水を浴せられたやうに怖毛を震つた。「木村が來た」……何と云ふ事なしに葉子はさう思ひ込んでしまつた。爪の一枚々々までが肉に吸ひ寄せられて、毛と云ふ毛が强直して逆立つやうな薄氣味惡さが總身に傳はつて、思はず聲を立てようとしながら、聲は出ずに、脣ばかりが幽かに開いてぶる〳〵と震へた。而して胸の所に何か突きのけるやうな具合に手を擧げたまゝ、ぴつたりと立ち止つてしまつた。

その時その黑い人の影のやうなものが始めて動き出した。動いて見ると何んでもない、それは矢張り人間だつた。見る〳〵その姿の輪廓がはつきり判つて來て、暗さに慣れて來た葉子の眼にはそれが岡である事が知れた。

「まあ岡さん」

葉子はその瞬間のなつかしさに引き入れられて、今まで出なかつた聲を吃るやうな調子で出した。岡はかすかに頰を紅らめたやうだつた。而していつもの通り上品に、一寸疊の上に膝をついて挨拶した。まるで一年も牢獄にゐて、人間らしい人間に遇はないでゐた人のやうに葉子には岡がなつかしかつた。葉子とは何んの關係もない廣い世間から、一人の人が好意を籠めて葉子を見舞ふ爲めにそこに天降つたとも思はれた。走り寄つてしつかりとその手を取りたい衝動を抑へる事が出來ない程に葉子の心は感激してゐた。葉子は眼に淚をためながら思ふまゝの振舞ひをした。自分でも知らぬ間に、葉子は、岡の側近く坐つて、右手をその肩に、左手を疊に突いて、しげ〳〵と相手の顏を見やる自分を見出した。

「御無沙汰してゐました」

「よく入らしつて下さつてね」

どつちから云ひ出すともなく二人の言葉は親しげにからみ合つた。葉子は岡の聲を聞くと、急に今まで自分から逃げてゐた力が恢復して來たのを感じた。逆境にゐる女に對して、どんな男であれ、男の力がどれ程強いものであるかを思ひ知つた。男性の頼もしさがしみ〴〵と胸に逼つた。葉子は我れ知らずすがり附くやうに、岡の肩にかけてゐた右手を辷らして、膝の上に載せてゐる岡の右手の甲の上からしつかりと捕へた。岡の手は葉子の觸覺に妙に冷たく響いて來た。

「永く〳〵お遇ひしませんでしたわね。私あなたを幽靈ぢやないかと思ひましてよ。變な顏付をしたでせう。貞世は……あなた今朝病院の方から入らしつたの？」

岡は一寸返事を躊らつたやうだつた。

「いゝえ家から來ました。ですから私、今日の御樣子は知りませんが、昨日までの所では段々およろしいやうです。眼さへ覺めていらつしやると『お姉樣々々々』とお泣きなさるのが本當にお可哀さうです」

葉子はそれだけ聞くともう感情が脆くなつてゐて胸が張り裂けるやうだつた。岡は眼ざとくもそれを見て取つて、惡い事を云つたと思つたらしかつた。而して少し慌てたやうに笑ひ足しながら、

「さうかと思ふと、大變お元氣な事もあります。熱の下つていらつしやる時なんかは、愛子さんに面白い本を讀んでお貰ひになつて、喜んで聞いておいでゞす」

と附け足した。葉子は直覺的に岡がその場の間に合せを云つてゐるのだと知つた。それは葉子を安心させる爲めの好意であるとは云へ、岡の言葉は決して信用する事が出來ない。毎日一度づゝ大學病院まで見舞ひに行つて貰ふつやの言葉に安心が出來ないでゐて、誰か眼に見た通りを知らせてくれる人はないかと焦つてゐた矢先き、この人ならばと思つた岡も、つや以上にいゝ加減を云はうとしてゐるのだ。この調子では、疾に貞世が死んでし

まつてゐても、人達は岡が云つて聞かせるやうな事を何時までも自分に云ふのだらう。自分には誰一人として胸を開いて交際しようといふ人はゐなくなつてしまつたのだ。さう思ふと淋しいよりも、苦しいよりも、かつと取り上氣せる程貞世の身の上が氣遣はれてならなくなつた。

「可哀さうに貞世は……嘸瘦せてしまつたでせうね？」

葉子は口裏をひくやうにかう尋ねて見た。

「始終見つけてゐる故ですか、そんなにも見えません」

岡はハンケチで頸の周りを拭つて、ダブル・カラーの合せを左の手でくつろげながら少し息苦しさうにかう答へた。

「何んにもいたゞけないんでせうね」

「ソップと重湯だけですが兩方ともよく食べなさいます」

「ひもじがつて居りますか」

「いゝえそんなでも」

もう許せないと葉子は思ひ入つて腹を立てた。腸チブスの豫後にあるものが、食慾がない……そんなしらじらしい虛構があるものか。皆んな虛構だ。岡の云ふ事も皆んな虛構だ。昨夜は病院に泊らなかつたといふ、それも虛構でなくて何んだらう。愛子の熱情に燃えた手を握り慣れた岡の手が、葉子に握られて冷えるのも尤もだ。昨夜はこの手は……葉子は眸を定めて自分の美しい指にからまれた岡の美しい右手を見た。それは女の手のやうに白く滑らかだつた。然しこの手が昨夜は、……葉子は顏を擧げて岡を見た。殊更に鮮かに紅いその唇が昨夜は……

眩暈(めまひ)がする程一度に押し寄せて來た憤怒と嫉妬との爲めに、葉子は危くその場に有り合せたものに噛(か)み附かうとしたが、辛くそれを支へると、もう熱い涙が眼をこがすやうに痛めて流れ出した。

「あなたはよく嘘をおつきなさるのね」

葉子はもう肩で氣息(いき)をしてゐた。頭が激しい動悸の度毎に震へるので、髮の毛は小刻(こきざ)みに生き物のやうに戰いた。而して岡の手から自分の手を離して、袂から取り出したハンケチでそれを押し拭(ぬぐ)つた。眼に入る限りのもの、手に觸れる限りのものが又穢(けが)らはしく見え始めたのだ。岡の返事も待たずに葉子は疊みかけて吐き出すやうに云つた。

「貞世はもう死んでゐるんです。それを知らないとでもあなたは思つていらつしやるの。あなたや愛子に看護して貰へば誰でも難有い往生が出來ませうよ。本當に貞世は仕合せな子でした。……おゝ〳〵貞世！　お前はほんとに仕合せな子だねえ。……岡さん云つて聞かせて下さい、貞世はどんな死に方をしたか。飲みたい死水(しにみづ)も飲まずに死にましたか。あなたと愛子がお庭を歩き廻つてゐる中に死んでゐましたか。それとも……それとも愛子の眼が憎々しく笑つてゐるその前で眠るやうに氣息(いき)を引き取りましたか。どんなお葬式が出たんです。早桶(はやをけ)は何處で註文なさつたんです。私の早桶のより少し大きくしないと這入りませんよ。……私は何んと云ふ馬鹿だらう、早く丈夫になつて思ひ切り貞世を介抱してやりたいと思つたのに……もう死んでしまつたのですものねえ。嘘です……それなら何故(なぜ)あなたも愛子ももつとしげ〳〵私の見舞には來て下さらないの。あなたは今日私を苦しめに……なぶりにいらしつたのね……」

「そんな飛んでもない！」

岡がせきこんで葉子の言葉の切れ目に云ひ出さうとするのを、葉子は激しい笑ひで遮(さへぎ)つた。

「飛んでもない……その通り。あゝ頭が痛い。私は存分に呪ひを受けました。御安心なさいましとも。決して御邪魔はしませんから。私は散々踊りました。今度はあなた方が踊つていゝ番ですものね。……ふむ、踊れるものなら見事に踊つて御覽なさいまし。……踊れるものなら、はゝゝ」

葉子は狂女のやうに高々と笑つた。岡は葉子の物狂ほしく笑ふのを見ると、それを恥ぢるやうに眞紅になつて下を向いてしまつた。

「聞いて下さい」

やがて岡はかう云つてきつとなつた。

「伺ひませう」

葉子もきつとなつて岡を見やつたが、すぐ口許に酷らしい皮肉な微笑を湛へた。それは岡の氣先きをさへ折るに十分な程の皮肉さだつた。

「お疑ひなさつても仕方がありません。私、愛子さんには深い親しみを感じて居ります……」

「そんな事なら伺ふまでもありませんわ。私をどんな女だと思つていらつしやるの。愛子さんに深い親しみを感じていらつしやればこそ、今朝はわざ〳〵何日頃死ぬだらうと見に來て下さつたのね。何んとお禮を申していゝか、そこはお察し下さいまし。今日は手術を受けますから、死骸になつて手術室から出て來る所をよつく御覽なさつてあなたの愛子に知らせて喜ばしてやつて下さいましよ。死にゝ行く前に篤とお禮を申します。繪島丸では色々御親切を難有う御座いました。お蔭樣で私は淋しい世の中から救ひ出されました。あなたをお兄さんともお慕ひしてゐましたが、愛子に對しても氣恥しくなりましたから、もうあなたとは御緣を斷ちます。と云ふまでもない事ですわね。もう時間が來ますからお立ち下さいまし」

「私、ちつとも知りませんでした。本當にそのお體で手術をお受けになるのですか」
岡は呆れたやうな顏をした。
「毎日大學に行くつやは馬鹿ですから何も申上げなかつたんでせうよ。申上げてもお聞こえにならなかつたかも知れませんわね」
と葉子は微笑んで、眞青になつた顏にふりかゝる髮の毛を左の手で器用にかき上げた。その小指は瘦せ細つて骨ばかりのやうになりながらも、美しい線を描いて折れ曲つてゐた。
「それは是非お延ばし下さいお願ひしますから……お醫者さんもお醫者さんだと思ひます」
「私が私だもんですからね」
葉子はしげ〳〵と岡を見やつた。その眼からは淚がすつかり乾いて、額の所には油汗が滲み出てゐた。觸れて見たら氷のやうだらうと思はれるやうな靑白い冷たさが生え際かけて漂つてゐた。
「ではせめて私に立ち會はして下さい」
「それほどまでにあなたは私がお憎いの？……痲醉中に私の云ふ囈言でも聞いておいて笑話の種になさらうと云ふのね。えゝ、よう御座います入らつしやいまし、御覽に入れますから。呪ひの爲めに瘦せ細つてお婆さんのやうになつてしまつたこの體を頭から足の爪先きまで御覽に入れますから……今更お呆れになる餘地もありますまいけれど」
さう云つて葉子は瘦せ細つた顏にあらん限りの媚びを集めて、流眄に岡を見やつた。岡は思はず顏を背けた。
そこに若い醫員がつやを伴れて這入つて來た。葉子は手術の支度が出來た事を見て取つた。葉子は默つて醫員に一寸挨拶したまゝ衣紋をつくろつて直ぐ座を立つた。それに續いて部屋を出て來た岡などは全く無視した態度

で、怪しげな薄暗い階子段を降りて、これも暗い廊下を四五間辿つて手術室の前まで來た。つやが戸のハンドルを廻してそれを開けると、手術室からはさすがに眩しい豐かな光線が廊下の方に流れて來た。そこで葉子は岡の方に始めて振り返つた。

「遠方をわざ〳〵御苦勞さま。私はまだあなたに肌を御覽に入れる程の莫連者にはなつてゐませんから……」

さう小さな聲で云つて悠々と手術室に這入つて行つた。岡は勿論押し切つて後に跟いては來なかつた。

着物を脱ぐ間に、世話に立つたつやに葉子は斯うやうやくにして云つた。

「岡さんが這入りたいと仰有つても入れてはいけないよ。それから……それから（こゝで葉子は何がなしに涙ぐましくなつた）若し私が囈言のやうな事でも云ひかけたら、お前に一生のお願ひだからね、私の口を……口を抑へて殺してしまつておくれ。賴むよ。屹度！」

婦人科病院の事とて女の裸體は毎日幾人となく扱ひつけてゐる癖に、矢張り好奇な眼を向けて葉子を見守つてゐるらしい助手達に、葉子は瘦せさらばへた自分をさらけ出して見せるのが死ぬよりつらかつた。ふとした出來心から岡に對して云つた言葉が、葉子の頭にはいつまでもこびり附いて、貞世はもう本當に死んでしまつたものゝやうに思へて仕方がなかつた。貞世が死んでしまつたのに何を苦しんで手術を受ける事があらう。さう思はないでもなかつた。然し場合が場合でかうなるより仕方がなかつた。

眞白な手術衣を着た醫員や看護婦に圍まれて、矢張り眞白な手術臺は墓場のやうに葉子を待つてゐた。そこに近づくと葉子は我れにもなく急におびえが出た。思ひ切り鋭利なメスで手際よく切り取つてしまつたら嘸さつぱりするだらうと思つてゐた腰部の鈍痛も、急に痛みが止つてしまつて、身體全體がしびれるやうにしやちこばつて冷汗が額にも手にもしとゞに流れた。葉子は唯一つの慰藉のやうにつやを顧みた。そのつやの勵ますやうな顏

を唯一つの便りにして、細かく震へながら仰向けに冷やつとする手術臺に横はつた。

醫員の一人が白布の口あてを口から鼻の上にあてがつた。それだけで葉子はもう氣息がつまる程の思ひをした。その癖眼は妙に冴えて眼の前に見る天井板の細かい木理までが動いて走るやうに眺められた。神經の末梢が大風に遇つたやうにざわ／＼と小氣味惡く騷ぎ立つた。心臓が息苦しい程時々働きを止めた。

やがて芳芬の激しい藥滴が布の上にたらされた。葉子は兩手の脈所を醫員に取られながら、その香を薄氣味惡く嗅いだ。

「ひとーつ」

執刀者が鈍い聲でかう云つた。

「ひとーつ」

葉子のそれに應ずる聲は激しく震へてゐた。

「ふたーつ」

葉子は生命の尊さをしみ／″＼と思ひ知つた。死若しくは死の隣りへまでの不思議な冒險……さう思ふと血は凍るかと疑はれた。

「ふたーつ」

葉子の聲は益ゝ震へた。かうして數を讀んで行く中に、頭の中がしん／＼と冴えるやうになつて行つたと思ふと、世の中がひとりでに遠退くやうに思へた。葉子は我慢が出來なかつた。いきなり右手を振りほどいて力任せに口の所を掻い拂つた。然し醫員の力はすぐ葉子の自由を奪つてしまつた。葉子は確かにそれにあらがつてゐる積りだつた。

「倉地が生きてる間――死ぬものか、……如何してももう一度その胸に……やめて下さい。狂氣で死ぬとも殺されたくはない。やめて……人殺し」

さう思つたのか云つたのか、自分ながらどつちとも定めかねながら葉子は悶えた。

「生きる〳〵……死ぬのはいやだ……人殺し！……」

葉子は力のあらん限り戰つた、醫者とも藥とも… 運命とも……葉子は永久に戰つた。然し葉子は二十も數を讀まない中に、死んだ者同樣に意識なく醫員等の眼の前に橫はつてゐたのだ。

四九

手術を受けてから三日を過ぎてゐた。その間非常に望ましい經過を取つてゐるらしく見えた容體は三日目の夕方から突然激變した。突然の高熱、突然の腹痛、突然の煩悶、それは激しい驟雨が西風に伴はれて嵐がゝつた天氣模樣になつたその夕方の事だつた。

その日の朝から何んとなく頭の重かつた葉子は、それが天候の爲めだとばかり思つて、强ひてさう云ふ風に自分を說服して、憂慮を抑へつけてゐると、三時頃からどん〳〵熱が上り出して、それと共に激しい下腹部の疼痛が襲つて來た。子宮底穿孔?!　なまじつか醫書を讀み嚙つた葉子はすぐそつちに氣を廻した。氣を廻しては强ひてそれを否定して、一時延ばしに容體の恢復を待ちこがれた。それは然し無駄だつた。つやが慌てゝ當直醫を呼んで來た時には、葉子はもう生死を忘れて床の上に身を縮み上らしておい〳〵と泣いてゐた。

醫員の報告で院長も時を移さずそこに駈けつけた。應急の手あてとして四個の氷嚢が下腹部にあてがはれた。葉子は寢衣が一寸肌に觸るだけの事にも、生命をひつぱたかれるやうな痛みを覺えて思はずきやつと絹を裂くや

うな叫び聲を立てた。見る／＼葉子は一寸の身動きも出來ない位疼痛に痛めつけられてゐた。

激しい音を立てゝ戸外では雨の脚が瓦屋根を敲いた。むし／＼する晝間の暑さは急に冷え／＼となつて、にはかに暗くなつた部屋の中に、雨から逃げ延びて來たらしい蚊がぶーんと長く引いた聲を立てゝ飛び廻つた。青白い薄闇に包まれて葉子の顏は見る／＼崩れて行つた。痩せ細つてゐた頰は殊更げつそりとこけて、高々と聳えた鼻筋の兩側には、落ち窪んだ兩眼が、中有の中を所嫌はずおど／＼と何物かを探し求めるやうに輝いた。美しく弧を描いて延びてゐた眉は、目茶苦茶に歪んで、眉間の八の字の所に近々と寄り集まつた。かさ／＼に乾き切つた唇からは吐く氣息ばかりが強く押し出された。そこにはもう女の姿はなかつた。得體の分らない動物が悶え藻掻いてゐるだけだつた。

間を置いてはさし込んで來る痛み……鐵の棒を眞赤に燒いて、それで下腹の中を所嫌はずゑぐり廻すやうな痛みが來ると、葉子は眼も口も出來るだけ堅く結んで、氣息もつけなくなつてしまつた。何人そこに人がゐるのか、それを見廻すだけの氣力もなかつた。天氣なのか嵐なのか、それも分らなかつた。稻妻が空を縫つて走る時には、それが自分の痛みが形になつて現はれたやうに見えた。少し痛みが退くとほつと吐息をして、助けを求めるやうにそこに附いてゐる醫員に眼ですがつた。痛みさへ治してくれゝば殺されてもいゝといふ心と、とう／＼自分に致命的な傷を負はしたと恨む心とが入り亂れて、旋風のやうに體中を通り拔けた。倉地がゐてくれたら……木村がゐてくれたら……あの親切な木村がゐてくれたら……そりや駄目だ。もう駄目だ。……駄目だ。貞世だつて苦しんでゐるんだ、こんな事で……痛い／＼／＼……つやはゐるのか（葉子は思ひ切つて眼を開いた。眼の中が痛かつた）ゐる。心配相な顏をして、……うそだあの顏が何が心配相な顏なものか……皆んな他人だ……何んの緣故もない人達だ……皆んな呑氣な顏をして何事もせずに唯見てゐるんだ……この惱みの百分の一でも知つたら…

……あ、痛い〳〵〳〵！　……定子……お前はまだ何處かに生きてゐるのか、貞世は死んでしまつたのだよ、定子……私も死ぬんだ、死ぬよりも苦しい、この苦しみは……ひどい、これで死なれるものか……こんなにされて死なれるものか……何か……何處か……誰か……助けてくれさうなものだのに……神樣！　あんまりです……

葉子は身悶えも出來ない激痛の中で、シーツまで濡れ透る程な油汗を體中にかきながら、こんな事をつぎ〳〵に口走るのだつたが、それは固より言葉にはならなかつた。唯時々痛い〳〵と云ふのが慘らしく聞こえるばかりで、傷ついた牛のやうに叫ぶ外はなかつた。

ひどい吹き降りの中に夜が來た。然し葉子の容體は險惡になつて行くばかりだつた。電燈が故障の爲めに來ないので、室内には二本の蠟燭が風に煽られながら、薄暗くともつてゐた。熱度を計つた醫員は一度々々その側まで行つて、眼をそばめながら度盛りを見た。

その夜苦しみ通した葉子は明方近く少し痛みから遁れる事が出來た。シーツを思ひ切り摑んでゐた手を放して、弱々と額の所を撫でると、度々看護婦が拭つてくれたのにも係はらず、ぬる〳〵する程手も額も油汗でしとゞになつてゐた。「迚も助からない」と葉子は他人事のやうに思つた。さうなつて見ると、一番强い望みはもう一度倉地に會つて唯一目その顏を見たいといふ事だつた。それは然し望んでも叶へられる事でないのに氣付いた。葉子の前には暗いものがあるばかりだつた。葉子はほつと溜息をついた。二十六年間の胸の中の思ひを一時に吐き出して仕舞はうとするやうに。

やがて葉子はふと思ひ付いて眼でつやを求めた。夜通し看護に餘念のなかつたつやは眼ざとくそれを見て寢床に近づいた。葉子は半分眼付に物を云はせながら、

「枕の下〳〵」

と云つた。つやが枕の下を探すとそこから、手術の前の晩につやが書き取つた書き物が出て來た。葉子は一生懸命な努力でつやにそれを燒いて捨てろ、今見てゐる前で燒いて捨てろと命じた。葉子の命令は判つてゐながら、つやが躊躇してゐるのを見ると、葉子はかつと腹が立つて、その怒りに前後を忘れて起き上らうとした。その爲めに少しなごんでゐた下腹部の痛みが一時に押し寄せて來た。葉子は思はず氣を失ひさうになつて聲を揚げながら、脚を縮めてしまつた。けれども一生懸命だつた。もう死んだ後には何んにも殘しておきたくない。何んにも云はないで死なう。さう云ふ氣持ばかりが激しく働いてゐた。

「燒いて」

悶絶するやうな苦しみの中から、葉子は唯一言これだけを夢中になつて叫んだ。つやは醫員に促されてゐるらしかつたが、やがて一臺の蠟燭を葉子の身近かに運んで來て、葉子の見てゐる前でそれを燒き始めた。めら／＼と紫色の焰が立ち上るのを葉子は確かに見た。

それを見ると葉子は心からがつかりしてしまつた。これで自分の一生は何んにもなくなつたと思つた。もういい……誤解されたまゝで、女王は今死んで行く……さう思ふとさすがに一味の哀愁がしみ／＼と胸をこそいで通つた。葉子は涙を感じた。然し涙は流れて出ないで、眼の中が火のやうに熱くなつたばかりだつた。

又もひどい疼痛が襲ひ始めた、葉子は神の締め木にかけられて、自分の體が見る／＼瘦せて行くのを自分ながら感じた。人々が薄氣味惡げに自分を見守つてゐるのにも氣が付いた。

それでもとう／＼その夜も明け離れた。

葉子は精も根も盡き果てようとしてゐるのを感じた。身を切るやうな痛みさへが時々は遠い事のやうに感じられ出したのを知つた。もう仕殘してゐた事はなかつたかと働きの鈍つた頭を懸命に働かして考へて見た。その時

ふと定子の事が頭に浮んだ。あの紙を燒いてしまつては木部と定子とが遇ふ機會はないかも知れない。誰かに定子を賴んで……葉子は慌てふためきながらその人を考へた。

內田……さうだ內田に賴まう。葉子はその時不思議ななつかしさを以て內田の生涯を思ひやつた。あの偏頗(へんぱ)で頑固で意地張りな內田の心の奧の奧に小さく潛(ひそ)んでゐる澄み透つた魂が始めて見えるやうな心持がした。

葉子はつやに古藤を呼び寄せるやうに命じた。古藤の兵營にゐるのはつやも知つてゐる筈だ。古藤から內田に云つて貰つたら內田が來てくれない筈はあるまい、內田は古藤を愛してゐるから。

それから一時間苦しみ續けた後に、古藤の例の軍服姿は葉子の病室に現はれた。葉子の依賴を漸く飮みこむと、古藤は一圖な顏に思ひ入つた表情を湛へて、急いで座を立つた。

葉子は誰にともなく氣息を引き取る前に內田の來るのを祈つた。

然し小石川に住んでゐる內田は中々にやつて來る樣子も見せなかつた。

「痛い〳〵〳〵……痛い」

葉子が前後を忘れ我れを忘れて、魂を搾(しぼ)り出すやうにから呻(うめ)く、悲しげな叫び聲は、大雨の後の晴れやかな夏の朝の空氣をかき亂して、慘(いた)ましく聞こえ續けた。

（一九一一年一月——一九一三年二月、白樺所揭
一九一九年五月、新作）

——了——

The untold want, by life and
land ne'er granted,
Now, Voyager, sail thou forth,
to seek and fid.

—*Walt Whitman*—

半年に亙る歐羅巴の旅の
唯一無二の伴侶なりし
壬生馬に

旅する心

○

旅装をとゝのへるにつけて思ふことは心の旅だ。家を離れ、友と別れて人は旅行くやうに、心も何時かは一度、習慣を離れ、愛着と別れて、獨り淋しい旅に上らねばならぬ。……死……。旅装をとゝのへるにつけて思ふことは心の旅だ。

○

一九〇五年某月某日

山の如く群がり集まる紐育ホヾケン埠頭の見送り人の中に、私は私に對する一人の見送り人も見出さなかつた。私は少し淋しい、然し全くこだはることのない秋のやうな涼しい心で、見送る人々、見送られる人々が船と埠頭との間に描き出す心の渦紋を眺めやつてゐた。日も秋の初め。空も秋らしく晴れわたつた午後であつた。

船はプリンツェス・イリーネ。サロンから起る盛んなブラス・バンドの進行曲につれて、幾百かの旅心は徐ろに米國の土から離れて行つた。

やがて奏樂はやんだ。船客の笑ひも涙も各〻の胸の奥へと沈んで行つた。私は自分の船房に這入つて見た。そ

こに小卓の上に、船にあてゝ送られた葉書が二枚乘つてゐた。一枚はアーサーとその妹のフランセスから。一枚は神經衰弱の爲めに假りの宿としてゐたワシントン郊外の田舍家の人々から。

何といふ孤獨な三年を米國で過してゐたものだらうと私はその時しみ〴〵と思ひ入つた。かくばかりの孤獨を敢て忍んで來た私を誇りたい心もあつた。その反對の心もあつた。私は暫くぼんやりとして、寢臺に深く腰をおろしたまゝ動かずにゐた。

○

この朝亞米利加を出てから始めて陸の影を見た。それは葡萄牙に屬する小さな五つの島で、その名をファヤル・ピコ、サン・ジョージ・グラチオーザ、テルセイラ、サン・ミグネル、サンタ・マリヤといふ。所謂アゾーレ群島だ。その美しい名の連なりが、私をして旣にラテン民族の領域に近づいたことを思はせる。海拔六千尺といはれるピコの火山の頂きには、雲冠が靈の輪のやうに置かれてゐた。面積の最も廣いサン・ミグネル島の海沿ひには、白壁赤瓦の民家が、牧場に餌をあさる羊の群のやうにちらほら立ちならんで、山の斜面に石垣で築いた段畑には、雜穀の類と果樹とが綿密に栽培されてゐた。七日綠を見なかつた船客の眼は、どれほどこのなごやかな色を嗜み貪つたらう。

あすこに住んで一生を終る人もあるのだ。私はあの島を暫く眼にとゞめた。その島の上にうごめく人の影も不注意には見落さなかつた。けれども私は二度とあの島の傍を過らないかも知れない。あの島に住む人と私自身の存在とは、何といふ遠い隔りだ。普段はたゞ事もなげに暮らし過してはゐるけれども、ふとこんな境地に眼覺めると、生きるといふことが恐ろしくさへ考へられるではないか。私がこの地上に繫ぐ因緣の微弱さを……而して

自然の窮りなき豐滿と多樣とを……。心がひとりでに叫び出したくなるやうななつかしみを感じながら、言葉もかけず、挨拶もかはさず、たゞ一眼見合はしたばかりで、永遠に視界から離れ去つてしまふ人。その人は一體何の爲めに私の前に現はれ、何の爲めに私から隱れてしまふのだらう。

夕方にはもう島々は見えなかつた。夜が暗く來た。缺けて行く月がおそく海から上つて、波の上にさゝやかな燐光を投げた。

○

トラファルガーの灣を遠望して、船はタリファ岬を近々と通つた。海に突き出た岩礁の木がくれに、四五百の人口を護つてゐるらしい一かたまりの家屋が見える。それは英語のタリフといふ語源となつたタリファの村だ。バイロンの海賊篇の中からでも脫け出て來たやうな海賊共が、無賴放恣な風俗をして、海上を行く商船を目がけて、隼のやうに小船を乘りつけて掠奪を擅まゝにしたあたりはこゝだ。赤い布の鉢卷き、寬濶なズボン、段だら染めの帶の間に半月なりに曲つた小刀をたばさんで、小船の舷頭に倚る彼等の姿が眼に見えるやうだ。

國家はこの海賊共のし殘したことを、もつと散文的に而して合法的に摸倣して、それが國際の通商には缺くべからざる制度となつた。それは戰國時代の偸盜が、偃武時代の大名となつたのとよく似てゐる。けれどもその色彩は何といふ黝ずみかたをしたものだらう。

私の想像は更に太古に溯つて、このあたりの海の上に、勇敢無敵な小船の群を描き出した。フェニシヤを船出して數十日、ブリトンの山に銅を、北海の岸に瑪瑙を探らうとする冒險比ひなき商隊の乘るところのものだ。それらの小船は、地中海の波おだやかな航海を終へて、金毛の裘を求むる希臘神話の船のやうに、亘利そのもの

よりも、夢の如き冒險の快味に誘はれつゝ、この外海の波濤に船を弄ばせてゐるのだ。或は又、大きな獨木舟を思はせるやうな細長い船の舷に、丸い楯をかけならべ、百足蟲の足のやうに長い櫂を立てゝ毛皮と肉とで身づくろひした北方の海賊達が、サガの中の戰歌を海風に歌ひ合せながら、所在に恐怖を播きつゝ乘り廻したのもこの邊だらうか。

歐羅巴に來ると海も亦老いる。

○

忽ち私の空想は破れた。船の舳首に當つて、沙漠の砂から頭を擡げた獅子のやうに、かの世に名だゝるジブラルタルの巨岩が見え始めた。それは英國の牙だ――一旦事が起らば、歐羅巴の喉笛を嚙みしばるべき英國の牙だ。その恐ろしい、直徑二哩半に亙る獅子頭の下に、三時頃船は繫はれた。米國の見物に夏休暇を過して、今は歸途にある西班牙の女學生の群と、伊太利見物に出かける米國の學生の群とは、唯一人なる日本人の私を加へて上陸した。一番の大通りでも幅は極めて狹く、而して曲りくねつた坂路ばかりだ。家は中庭を繞つて四方に建て連ねた中の虛ろな四角形の建物から成り立つてゐて、その一方に狹く入口がついてゐる。歐羅巴に來てから、かゝる樣式が伊太利、佛蘭西あたりの一般のスタイルであることを知つた。その樣式はポムペイの廢墟のそれとほゞ同一である。壁は灰色のセメント、瓦は大抵は赤、窓の鎧戶は淡綠。道を隔てゝ家から家に張り渡された華やかな色の日よけの幔幕の下を、群衆が肩を摩さんばかりに混雜して往來してゐる。きらびやかな扇に日を遮つて、縫のある草色のショールを頭から、肩から羽織つた西班牙の婦人、手に細杖を弄んで、キャップを橫被りにした英國兵、黑衣を着て、こゞみがちに長い髮を風にをのゝかして行く猶太の神官、けばけばしい寬濶の絨衣を裝う

て、慓悍な面構へをしたモアーの商人、美しい露店の草花と果物、快い鳶色の皮膚に、大きな眼を持つた少年少女、荷をしこたま背に積んだ騾馬、鞭の音、聲高な罵り、油濃い料理の香、その間を私は――私自身その異様な雜閙の中に、一つの異様な色彩となりながら――縫つて歩いた。

要塞も物の序に見物した。海に向ひ、西班牙に向つて、五百尺以上の高所から開かれた砲門の數は夥しい。私達が見せられた大砲は然し新式といふことは出來ない。もつと高所に備へつけられてゐて、一般の觀覽を許さない部分の設備は、驚くべく精巧で新式なものだといはれてゐる。兵士は天水三ガロンと海水十五ガロンを毎日あてがはれて生活し、大抵は細君同伴で駐屯してゐるとのことだ。山の斜面を二ケ所も百エーカー程セメントで平らに固め、天水を採收する設備などはさすがに驚かれる。

山を下つて共同墓地を過ぎて、西班牙との國境に出て見る。そこには六百ヤードの中立地帶を隔てゝ、一列に兩國の番兵小屋が立てられてある。中立地帶に來ると、ジブラルタルからの道路も、西班牙からの道路も途絶えてしまつて、雜草の間に行人の踏みならした細逕が通じてゐるばかりだ。人間の利己心といふものをこの位明らかに見せたものはすくないだらう。海嘴を成す荒凉たる砂原のあなたには、西班牙領の人家が小さく眺められるが、その中に際立つて高い建物のあるのは闘牛場の屋根だと案内の人が敎へてくれた。

あの中立地帶に小屋を建てゝ住んでゐたらどうだらう。地球上何處に行つても、支配を受けなければならない人間に取つて、あの中立地帶だけは恐らく上に支配者なく、下に隷屬者のない唯一の地境であらう。そこでは人は誰のおせつかいにあづかる必要もあるまい。

そこを見物し終ると私達はそれまで一緒だつた西班牙の女學生達と別れた。彼等は騾馬の牽く輕快な馬車に滿乘して、いつまでも帽子やハンケチを私達に向つて打ち振りながら遠ざかつて行つた。

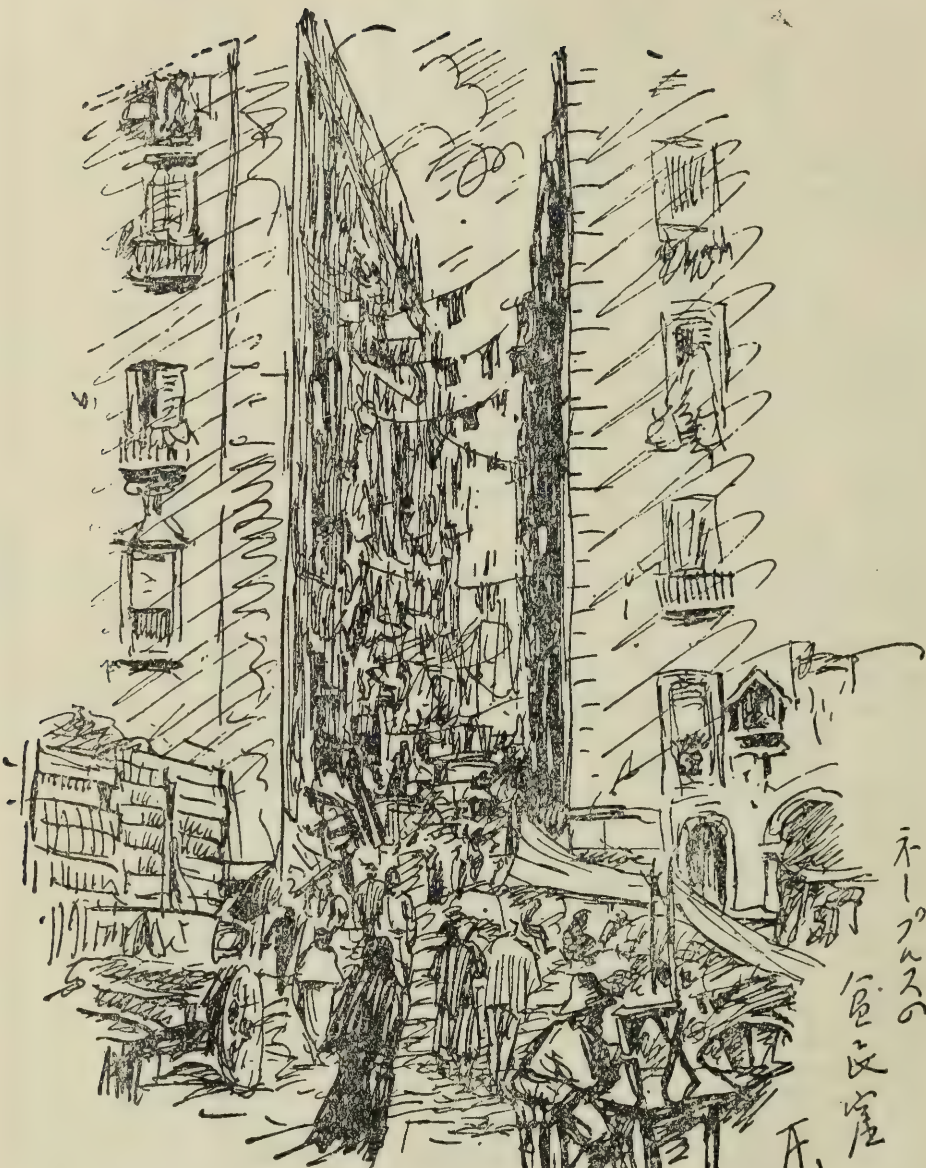
この夜この不思議な大きな巖石の塊りを船が遠ざかつてから、私は一種の默想に沈んだ。ジブラルタルやスエズの運河によつて僅かに保障されてゐる歐羅巴列强の勢力の均衡はいつまで續く命脈だらう。地理の上で地點から地點を觀察する時には、かゝる要害は致命的な力を何時までも振ふやうに思はれる。然し人間の能力は遂に地上の凸凹を平らかにしてしまふ。英國も何時かは老いるだらう。而してその牙も何時かは脆くこぼれ落ちる時が來るだらう。

そのあとに殘るものは何だ。

○

小鳥が二羽、どう迷つたか陸地から船を目がけて飛んで來た。二羽とも翼を疲らしてゐるらしかつた。檣に羽を休めようとすると、長い航海に倦んじ果てた船客は、一齊に聲を揚げてこの憐れむべき旅づかれのした小鳥を脅かした。小鳥は已むを得ず翼を返して海の上遙かに飛び退いた。而して蝶程に小さく見えるまで船を離れた。けれども他に賴るべきものを見出し得ない彼等は、再び船を目がけねばならなかつた。近づく彼等は又脅かされた。笑ひ興じながら小鳥の來る度每に、騷々しく聲を立てゝわめくものゝ中には、亞米利加で稼ぎをして多少の金を溜めて、いそ〳〵と故鄕に歸つて行く伊太利の勞働者の群もゐた。彼等は亞米利加でどれほどの迫害に遇つたことだらう、どれほど辛い日夜を過したことだらう。彼等は今にして漸く歸る所を見出した。けれども彼等は小鳥の心を少しも感じてはゐないやうに見えた。

一羽はどうなつたか知らない。夜になつて他の一羽はびつしより濡れて甲板に落ちて死んでゐた。それを一人の水夫が拾つて、大きな手の中に小さくまろばしながら、物好きらしく眺め入る船客に見せてゐた。


ネープルスの貧民窟

私はさうした人間の心の現はれを見るのが一番嫌ひだ。

○

十一時陸影が見え始めた。私は何か落ち付かない心持でそれに眺め入つた。伊太利が達せられたのだ。中食もそこ〳〵に甲板に出て見ると、風雅な古城や、寺院や、村落やに點綴された陸地が、ほがらかに晴れ亙つた初秋の空の下にくつきりと浮び出て見えた。やがて半眠のヴェスヴィヤス山が、而してネープルス灣の門柱ともいふべきカプリ、イスキヤの二島が今日新たに生れ出たかの如く新鮮な姿を以て現はれ出た。

船が潮に横波を立てゝ大旋回を描きつゝ進むと、山頂から海沿ひまで古劇場のやうな形に段々に建て連ねられたネープルスの全市街が、くすんだ色彩を以て眼の前に展開した。地中海の海と空との色、それは匂ふかと思はれる。その空には眼に痛い程眞白な濃い雲がぢつと休らつて、その海には色樣々な帆が靜かに動いてゐた。而して暖かい鈍色の屋根と壁とを持つた市街は、同じ鈍色の綠の橄欖や坊主松によつて句點を打たれて、趣き深く横たはつてゐた。市の絕巓には悒鬱な灰色のサン・マルティノ寺が例へば市街の冠のやうに立つてゐた。

船が錨を卸すか卸さないに、その周圍には、花と果物とを賣る船と、樂人を乘せた船と、海中になげられた小錢を拾ふ潛水の少年によつて操られる船とが、餌に集まるめだかのやうに集まつて來た。それらは、船の形から少年の帽子の色合に至るまで、私には珍らしいものであらねばならなかつた。然し私の眼が尋ねあてようとするものは外にあつた。舷側から身を乘り出して、暫く眼探りした後に、私は可なり大きな艀舟の舷首にたゞ一人突つ立つて、頻りと私を麾いてゐる壬生馬を見出した時、胸の中で心臟が大きく躍つた。三年會はずに過してゐた間に彼は美しい一人の靑年になつてゐた。私は極く親しい者が久し振りで遇つた時にのみ感ずるあの喜ばしいは

にかみを感じた。その瞬間の心持は忘れ難い。

○

伊太利の古畫を見たものは誰でもそれが持つ一つの特色を見逃がすことが出來ないだらう。空には必ず眼ぼしい雲がある。山には必ず際立つた樹木か岩石がある。人物は必ず背景から拔け出たやうに大きな輪廓を畫面に浮み出さしてゐる。いかなる畫面も、必ず急角度の印象を見る人の眼に殘すものを一つは備へてゐる。和蘭畫派(伊太利風の傳統から解放された)野心のない作風に較べて見るとこの特色は更に顯著だ。これが伊太利を端的に說明してゐる。伊太利人は何か或る一つのものを高調せずにはゐられない民族だ。かくて彼等は或る時期に於て征服の爲めに一切を犧牲にした。或る時期に於てシーザーの爲めに一切を犧牲にした。或る時期に於て歡樂の爲めに一切を犧牲にした。或る時期に於て法王の爲めに一切を犧牲にした。伊太利の歷史には山脈はない、孤峰があるばかりだ。孤峰の麓には丘陵はない、百里の平蕪があるばかりだ。

○

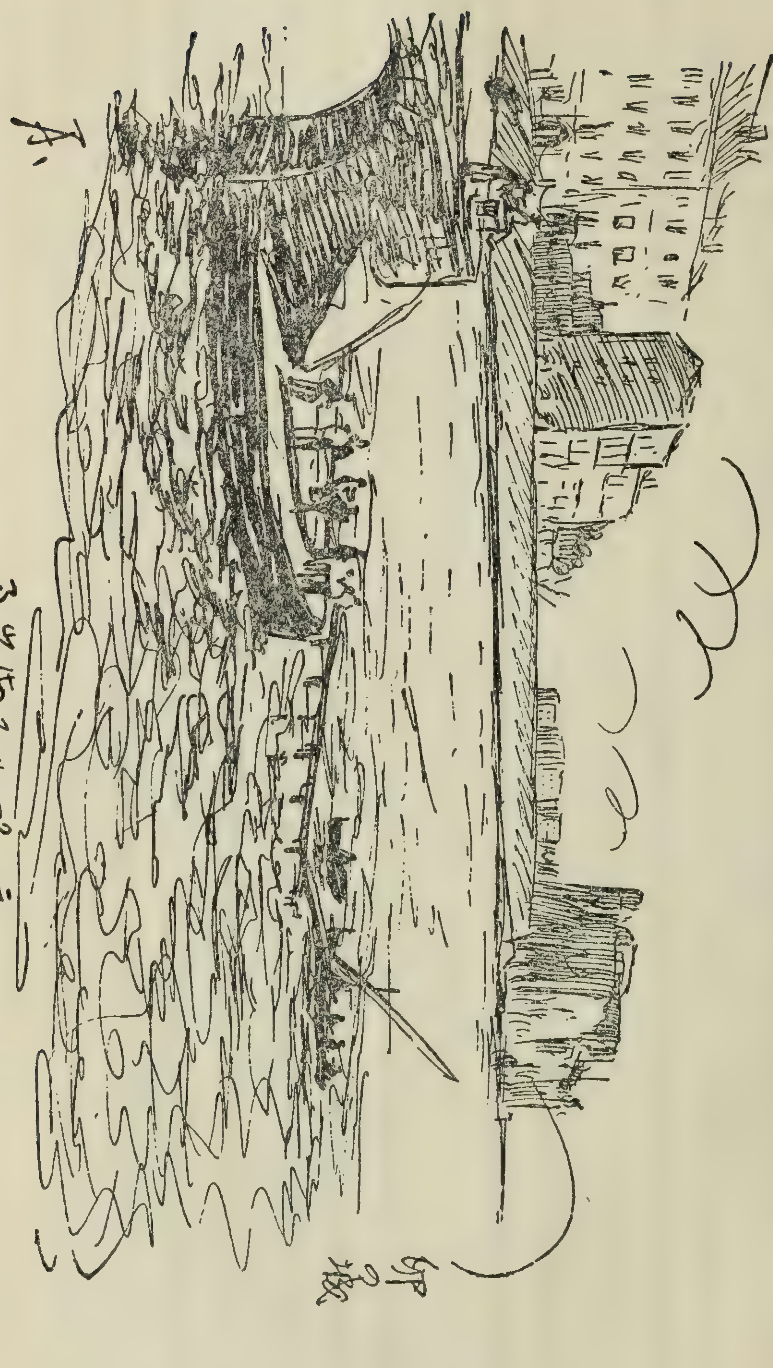
道を步くと、辻馬車の上から御者がぱちん〳〵と鞭を鳴らして、命令的に客を呼ぶ。靴磨きは靴臺を敲きながら、怒りつけるやうに人を招く。四辻といふ四辻には必ず四五人位の集團がゐて、芝居もどきな大業な手まねで立話しをしてゐる。乞食が腕を組まんばかりに近づき逼つて來る。行き違ふ兵士の佩劍があぶない。割合に高く建てられた家々は、頭から砂塵を被つて、窓や、看板や、壁によせて干してある干物までが無意味にげら〳〵と笑つてゐる。數多い寺院は一樣に黝ずんで、ふざけ散らす家人を、尻目にかける食客のやうに佇んでゐる。泥棒

程な惡相を持つた僧形の人がうよ〳〵と音もたてずにうごめいてゐる。賣女が唾のやうに媚笑を吐き散らして行く。馬車が砂塵と動搖とでしかめ面をした客を乘せて、縱橫に凸凹の烈しい石疊の上を走る。何といふ不規律と喧騷。正直で愚かさうな田舍娘が、山羊の群を追ひ〳〵、乳を賣つて步くのを見てほつと息をつき、雜閙のやゝ少ない海沿ひの道に出て潮の香をかぐ時ほつと息をつく。ネープルスの下町はかうした所だ。紐育の船つきの場末で見る以上のものをこの伊太利の一角に見出さうとは思ひもかけなかつた。

岡を電車で登つて少し步くと、サン・マルティノ寺に來た。寺院の一部は博物館になつてゐる。午後もまださう遲くはないのに、厚い壁で繞まれた部屋の中はしめやかに暗み亙つて、晩夏の暑さも侵して來ようとはしない。聞いてばかりゐたフレスコといふものを眼のあたり見て、その尊さに眼を射られたのもそこでのことだつた。ノルマン人が掠奪の爲めに乘り廻して來た海賊船の一つも陳列してあつた。それを見ると私はその日までの海路の樣を振り返つて見ずにはゐられなかつた。同じネープルスではありながら、そこにはもう先程までの光景は塵ほども窺はれなかつた。

そこで見た僧庵の內庭も忘れがたいものゝ一つとなるだらう。四方を廻廊でかこませて、中央に苔むした大理石の噴泉盤を持つたその庭は、思ふまゝに荒れすさんで、折からの秋草が斜めに陽の光を受けて心細く亂れ咲いてゐた。去年自然が落した所に種が埋つて、そのまゝ今年の花となつてゐる。

見る中に佇む中に陽は影つた。閉された門をわざ〳〵開いて貰つて、寒い程古びた土塀を外に出ると、眼下遙かに夕方の光がネープルス灣を照らしてゐた。この高みから見やると、ネープルスの市街も亦一箇可憐なる人類の巢だ。坊主のやうな松、仙者のやうな橄欖、少年のやうな葡萄、處女のやうな花無果樹、豫言者のやうな香栢、それらの錯綜した茂みの間から、呟くごとく市のどよみが聞こえて來て、それが夕風と共に靜かにヴェスヴィヤ


卵の城
ネープルス海岸通

スの方に流れる。

ペトロニアスが「亂行の市」と呼んだのもこゝだ。「ほゝゑめる市」と呼ばれるのもこゝだ。

○

私達の投じた旅館オテル・ド・フランスはネープルスの海岸通りなるヴィア・パルテノーペのヴィラ・ムニチパアレの公園に近い所にあつた。そこには世界各國からの旅客が集まつて來てゐて、眼の前に展け亙つた寶玉のやうな海の色や、晩餐の窓際に來て唄ふ唱歌者の群のサンタ・ルチアの歌を樂しんだりした。私達の部屋は二階で、玄關上の恰好な一間だつた。床がセメントで固めてあるのも、私には物珍らかだつた。窓がドアのやうに床際まで切り取つてあつて、觀音開きに開くと、大きな景色が一時に眼に集まるのも快かつた。大きな灣の眞中にはカプリの島が、藍の天鵞絨の上につゝましく置かれたサファイヤのやうに圓く盛上つてゐる。左の方には、十一世紀時分に、海中の岩礁の上に建て上げられたカステロ・デロ・オーヴォ（卵の城）が黄土色に屹立して、その先きには低い紺青の水平線を隔てゝかすかにヴェスヴィヤスの山城が見渡される。眼下には華麗な海岸の往來を、私の眼には珍らしい風俗の人々が綾をなして通つて行く。而してその總てを、海から吹き送る鹽氣の多い豊醇な空氣がなごやかに包んでゐる。

都會は女のやうに、不思議にも夜と結びついてその美しさを增す。殊にネープルスはさうだといはなければならない。或る晩食の後、アルゼンチンから來たといふ或る一家族の息子や娘達と共に、私達は夜を逐うて宿を出た。ヴィラ・ムニチパアレは夜光珠のやうな燈火と、綠光の滴るやうな苑樹と、着飾つた群集との渦だつた。人々は歡樂が終る前に夏を終らせまいとするやうに見えた。實際そこには夏のみづ／＼しさがまだ色濃く殘つてゐた。

若い男達は帽子を阿彌陀にして、汗ばんだ白い額にハンケチをあてた。若い女達は潤澤に湧きこぼれる噴泉の方に寄り近づいた。まだ耳にした事のない熱情的な、濃艶な伊太利獨特な音樂が、大人數の集團の吹奏につれて、園內に充ち溢れてゐた。

私達の伴れの息子や娘達は足取りまで浮き〳〵して、森に歸り着いたニンフやパンのやうに、この光景を at home に感ずるらしく見えた。彼等の心臟が、そこに集まつた群集の心臟と同じに打つのがよく私達には感ぜられた。それは私に一種の美しさを覺えさす程だつた。それ程私はそれらの人の間にあつて異邦人だ。生れつきさうである私は私自身を少し憐れんでやりたくなつた。笛吹けども踊らない私の心はどうしたのだらう。私は傍觀者らしい寛大な、而して少し妬ましげな心でこの光景を眺めやつた。

夜の更けるといふことはそこにはないやうに見えたが、私はどん〳〵それを意識して歸途に就かうと云ひ出した。少しのほど賑やかな通りを步き廻つたが、ふと人通りの少ない淋しい小路に出た。二三間おきに石段が一つづつあるやうな緩傾斜を以て、恐ろしく曲りくねつた道だつた。私――眞暗な日本の道を步きなれてゐる――は平氣でそこを通り拔けようとするのに、伴れの息子や娘達は思ひの外におびえてゐた。

「命を大事と思ふなら恐れなさい」

さう云つて、こは〴〵あたりに眼を配りながら、彼等は急ぎに急いだ。それは然し妄想でも臆病でもないことを壬生馬から聞かされた時に私は驚いた。ネープルスの淋しい道筋を夜步きするのは、盜賊の門を敲くに等しい危險な所業なのださうだ。

私達は匆々にして旅館に着いた。公園の方を窓から見ると、燈光の暈が空氣を染めて、歡樂の聲が誘惑のささやきのやうになほ聞こえてゐた。

○

國立博物館――それはネープルスのみならず、又伊太利のみならず、實に全世界の寶庫の一つだと云はれてゐる。私達は二日續けてそこを見舞つたけれども、例へば廣い海岸に出て一握りの砂を拾つたにも過ぎない。素晴らしいこの建築物と、その中の蒐集品とを守護するやうに見える入口の大きな伏獅子の大理石像を眺めて中に這入ると、それはさながら才能と努力との高山だ。長き時代と廣い方處とに生れ出た巨匠の會心の作業が互に丈け較べをして所狹きまでに列んでゐる。それらが觀衆に與へる最初の印象は、奇怪な一種の威嚇であると云つていゝだらう。非凡は狂亂と相通ずる所があるとロムブロオゾのいつた言葉が、殆んど字義通り思ひ起されるやうな心持がする。私はまとまりのつかない惑亂を心に感じた。而して痛みのやうなその威嚇に震へながら、偉大な力の凝塊の中を眼をそばだてゝ經巡つた。而してそこを出る時は、全く打ちのめされ、骨を拔き取られたやうに、立居も物惰い程疲れ果てゝゐた。この外に私はこの小さな手記の中に何を記し得よう。

そこにはプラキシステレスの作品として傳へられる、完全に保存された石像の幾箇かゞある。又ファルネーゼ家の蒐集品として知られるものゝ中には、見る人の魂を奪ふ傑作品の多數が見出される。又ポムペイの舊址から發掘されたものには、近代人の心と寸分の隔りをも感ぜしめないやうな藝術品の數多くがある。第二日に見たそれらの作品の中で、私の心をいつまでも捕へて離さなかつたのは、ファルネーゼのハーキュリスとして知られる宏大もない巨大な石像だつた。恐らくミケランジェロでもこの石像の前には威壓を感ぜずにはゐられなかつたらう。それは人類全體の永劫の運命と苦悶とを象徵するものゝ如くに今でも立つてゐる。彼は赤裸で、大きな棍棒に左脇を支へてゐる。その棍棒にはネミヤの獅子を逆剝ぎにした毛皮が被せてある。その外に彼の持つものといつて

は、濃い血液に浸した巖石のやうな骨格と、荒々しい卷毛の髪と鬚と、後ろにまはした右手の中に握つた二箇の林檎と、極めて悒鬱な、思ひ入つた凝視だけだ。而してそれだけの所有物が十全に彼自身を表現してゐるやうに見える。アレキサンドル・ファルネーゼによつて、この巨像はカルカラの大浴場から掘り出されたのだ。而してその大浴場に立てられる前には、それがどんな運命を潜つて來たか、それは誰も知る人がない。

　ジュピターの子として生れて來ながら、人間界の女の胎に宿つたばかりに、彼は生れるとからジュノーの意地惡な嫉妬に虐げられ、憤激のあまりその愛兒をさへ殺すに至つたその運命は、彼の生の源頭にあつて既に哀しく苦しい。彼はその有り餘る精力を、激しい氣稟に災ひされて、正當な用に役立たせることが出來ず、續けさまに常軌を踏み外す生活を營みながらも、巨人に適はしい意志を以て、彼の當然あるべき權威の境界に達しようと藻掻いた。その爲めに彼は自ら進んで流竄の人となり、神託に從つて十二の大功を立てゝ人間を塗炭の苦しみから救ひ出した。彼は又センタウルの首魁ネサスを一擊の下に打ち殺した。しかも悲しいかな、その血を塗りつけた肉衣(彼を妬む女の手によつて用意された)は彼を汚して、彼はその苦痛の爲めに狂亂に陷らうとした。而してエトナ山を攀ぢ登つて、堆積した薪の上に身を橫たへ、火の中に肉體を燒き捨てゝ、清淨の昔に還らうとした。一生の苦しい地上巡禮はかゝる試煉にまで彼を導いた。火はかけられた。地の上から彼を燒き盡す焰は炎々として天を指して上つた。その時天の上からは一叢の雲が降つて、その雲間からはジュピターの投槍なる電光がきらめいた。それがハーキュリスの上に掩ひかぶさつて來た。かくて肉體が燒き盡される前に、ハーキュリスは雲に抱かれて、超然としてオリムパスの神座に召されて行つてしまつたのだ。

　自分の數奇な運命を、黯然として心の眼で見守つてゐるやうなその悲壯な姿……人間の運命を何處かの世界から眺めたら、かくも見えようかと思ふその姿は、小さな彫刻家の竝べ立てられてゐる間に、獨り巨然として淋し

げにそゝり立つてゐた。あの表現の爲めにあの巨大な材料を選んだ作者の心持も見る人にはよくわかる。あれだけの巨大な材料にぶつかりながら、十二分にそれをこなしつけた作者の氣魄にも驚かされる。

薄暗い陳列室のかすかな光の中に聲もなく……

○

美しく晴れ亙つた初秋の一日だつた。

カプリ島に琅玕洞を見物し終へた私達は、皇帝テベリウスが無辜の人々を海中に投げ落して樂しみにしたといふ、身も戰くやうな高い斷崖を仰ぎなどしながら、紺碧の水の上を、小蒸汽船に快く搖られて、島の一角に立つ小さな旅館に上陸した。澄み切つた空氣と輝かしい日光とは、このカプリ島を夢の國のやうに思はせる。

私達は崖の上にしつらへた露臺に行つて憩ひを取つた。無花果樹の幅廣の葉蔭が、私達を暑い日の光から遮つて、風のまに〱、影日向をちら〱と搖れ動かした。高く登れば水平線も高く、イスキヤの島影は、瀛氣を避ける爲めに流眄する美女の如く、恍惚として眼の下に丸寢してゐた。

そこに、美しい手襟を頭上に戴いて、南方伊太利に特有な前垂れをしめ、日によい程燒けて、堅肥りのした二の腕から下を、雪白の胴着から覗かせた、屈强な體格の物賣りの娘が私達の前に現はれた。眼鼻立ちのはつきりした、表情の强いその顏は、人を恐れない小さな野の獸のやうな快活さと無邪氣さとを持つてゐた。美しい紐で肩から釣り下げた底の淺い木箱には、小さな、可愛いゝ、綺麗なものばかり列べてあつた。眼も綾な鮮明な色彩の絹絲で、だんだらに編み上げた頭巾、襟飾り、帶の類、靑い海の底から拾ひ上げた貝殼や珊瑚、又それらのもので細工した簪、襟止め、指輪、カフス釦、色さま〱な木片を絲程に細かく刻んで、モザイクのやうにはぎ


ネープルスの漁夫

合せた寶石盒や切手入れ……美しく成熟しながら、どこかまだ初々しく見えるその娘の趣味から、可憐にも選み拔いたと思はれるやうなものばかりがそこに集められてゐた。娘は臆する風もなく、狎れ〳〵しく私達と膝を列べて腰をおろしながら、是非何か買へとせがみ勸めた。慈善市の貴夫人令嬢よりも、この自然兒らしい娘は餘計私には蠱惑の力を持つてゐた。私達の心の中にはすぐ遠い故鄕に在る弟や妹達の姿が思ひ出された。彼等の眼がこの南歐の美しい小さな土產物に輝く樣子が髣髴した。壬生馬は滑らかな伊太利語を操つて、戲談口をきゝながら、私の望むがまゝにその娘からいくつかの小鄕土美術品を買ひ取つてくれた。私達はカプリの島の上で、南方伊太利を人にしたやうなその娘と膝つき合はして笑ひ興ずるのを快く感じた。

娘は商賣をすますと、旅館に行つて、私達の買物を包んで持つて來ると云つて、又他の客の方へとその潤澤な媚笑を惜しげもなくふり播きながら去つて行つた。

私達は食事をすまして、山を上つて廣い眺めを見渡しに行つた。歸つて見ると卓の上に先程の買物が包みになつておいてあつた。いゝ程に休息したと思ふ頃、眼の下に小さく見える蒸汽船の汽笛から蒸氣が眞白に吹き出されてから、やゝ暫くして晴れやかな銳い響きが私達の耳に傳はつて來た。それは出帆の合圖だ。(出帆……私はこの熟語をわざとこゝに使つて見た。これはまだ帆前船ばかりが走つてゐた頃の熟語に違ひない。私達の乘り込むべき船は小さいながら蒸氣力で動くものだけれども、この場合出帆といふ言葉は又なく似合はしい。)私達は麓の棧橋の方へ急坂を下つた。その坂の降口に來かゝつた時、偶然また先程の物賣りの娘と出喰はした。彼女は私達を見ると急に笑ひ溶けてゐた顏を固くして、碌々言葉をかけようともせずに、物怯ぢするやうにあらぬ方を向いてしまつた。賣物には既に景品を添へてあると娘は思つてゐるのだらう、さう私は思ひながら坂を降つた。

ネープルス灣の南の岬に沿うて立ち列つた遊覽地の一つなるソレントに船が着いた時にはもう夕景が催してゐ

た。又も険しい懸崖の下にしつらへてある棧橋で私達はその船を捨て、急な棧道を登りつめてホテル・シレーネといふ旅館に投じた。旅館の露臺から見ると、どつかり落ちになつた崖の下、眼も眩むばかりの深みから、大空の境目まで灣の水は漫々と溢れるばかりにたゝへられてゐる。私達はそこで、カプリの娘から買ひ取つた品物の包みをほどいて見た。包みを開いて見ると、割合に高價に買ひ取つた品物の二つ三つは影も形も見せなかつた。私達は思はず顏を見合せて苦笑ひをした。私達は男のうとましさといふものを輕く見せつけられたやうに思つたのだ。船への乘り際にその娘が私達に見せた氣まづい顏付もこの爲めだつたかと理解された。

忽ちの中に空が暗くなつた。眼路のかなたに見やられるイスキヤ島からポッォオリの岬にかけて、嵐雲が現はれ出して、見る〳〵それが大空に擴がつてゐたのだ。海もその影を胸に受けて、泡だつたやうに暗み亙つた。冷たい風が二度三度私達の顏を吹いて通つたと思ふと、大粒の雨が不意に落ちて來て、乾き切つた露臺のセメントの上に大きく滲んだ。さや〳〵と搖れ出した柑橘の葉も、雨滴を受けて上下に反動を取つた。一叢の雨の脚が、物凄く黑み亙つた海面を白く沫だゝせながら、押し寄せて來るのが指呼の間に見えた。

瀧のやうな夕立がどつとソレントを包んだ。私達は皮膚に、今起つたばかりの冷えを快く感じながら、固唾を呑んでこの爽やかな光景に見とれるばかりだつた。

物賣りの娘の譎詐――それも亦彼女が伊太利の自然から知らずに受けたものではないか。

私達は矢張り伊太利の土の上にゐるのだ。

○

夕食を終へてから　私達は驟雨に洗はれた町を散策した。人々は凉を逐うて門並みに休榻を持ち出してゐた。

雨に濡れ切つた並木の間には、街燈や窓の中の灯が水々しく光つてゐた。

廣場には、この小さな町の人々の大きな誇りなるタッソーの大理石像がほの白く立つてゐた。詩人らしい不遇な詩人。正しい心と、飛び離れた矜持と、而して摧かれ易い多感な情緒とを以て、骯髒を旅し盡した中世紀のオデシウス。その一生は誰にでも同情深く悲しまれるであらう。而して誰にでもいとしまれるであらう。

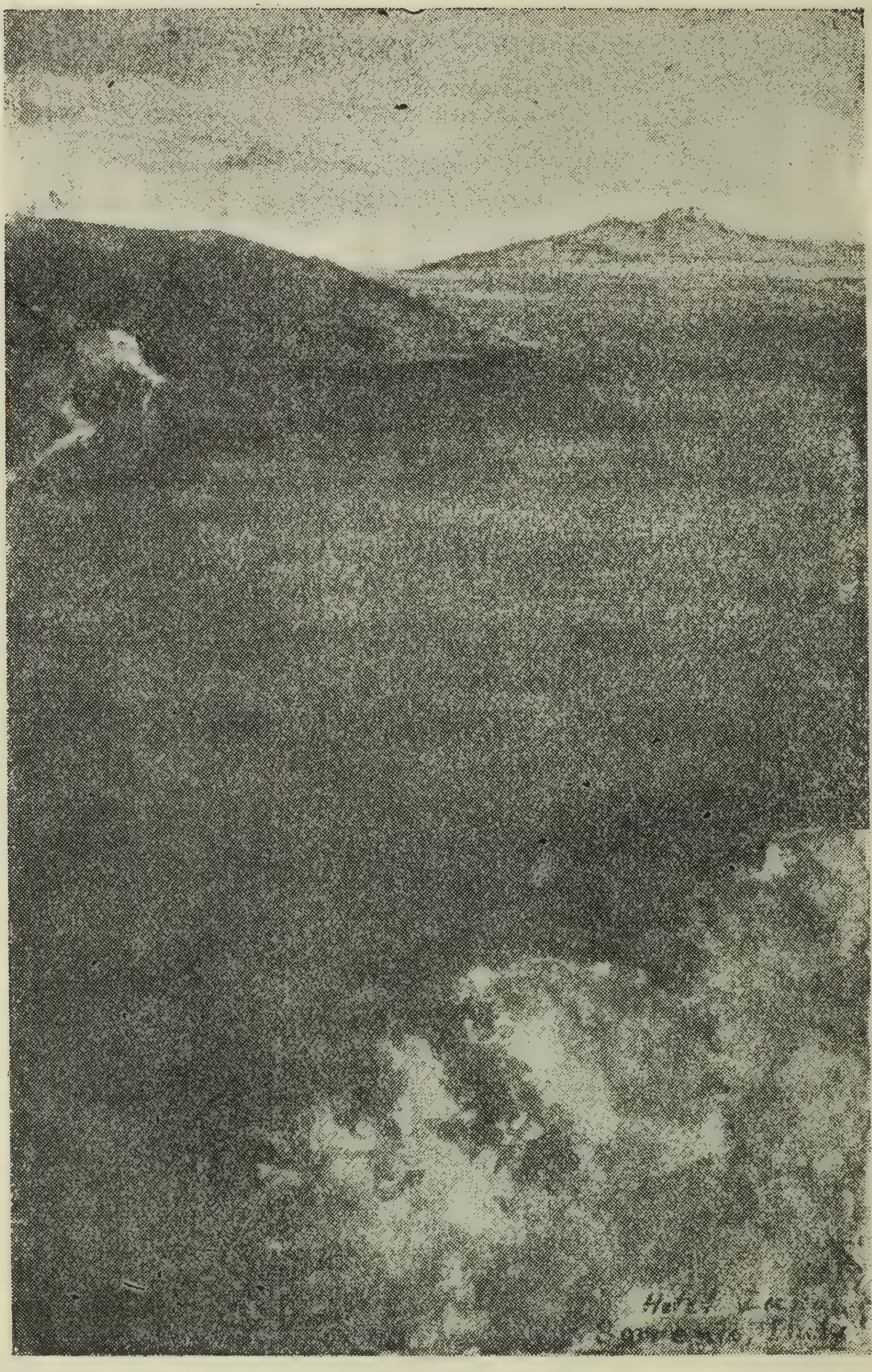
アルベルゴ・ディ・タッソーはこの詩人が世の光を見た館だと傳へられるけれども、詩人の眞の生れ場所は、その館に近い波打際にあるのだといはれてゐる。桑海の變はこゝでも免れない。今でも淺い海水の底、岸に近い海の水が波となつて寄せたり退いたりするあたりに、その館の鋪石の一部が殘つてゐるさうだ。その鋪石の上を幼ない折りの詩人の足は踏み慣れたのだらう。今はその殘址に、海草が生ひ茂つて、波のまに／＼靡き動いてゐる。

○

私達はまだ眠りから覺めきらないソレントを後ろにして、爽かな朝の空氣を有り餘る程呼吸しながら、馬車の旅に上つた。こゞしい山道のほとりに祭られた聖母の小龕には、蠟燭の灯が光もなく點り殘つてゐて、見渡すかぎり山も海もたゞ薄蒼い。

○

半島の脊骨をなす山を越え終ると、私達の馬車はネープルス灣の水から離れて、サレルネ灣の果てしもない海の擴がりを見渡しながら、山腹に築かれた白い道を走つてゐた。陽は高く登つて、私達は馬車の中で傘をさゝねばならなかつた。岩石をならして造つた堅固な道は堅く車の轍を受けて、僅かに白い埃を立てた。



伊豆半島の旅をした人は、このあたりの地形をおぼろげながら想像することが出來るだらう。急傾斜をなして頂きから海底に流れ下つてゐる山背は丁寧に鋤き起されて、葡萄、無花果樹、柑橘、橄欖の類が栽培されてゐる。而してそれらの果樹園の間には、漆喰の厚い壁と屋根とを持つた、方形に近い百姓の小屋が點綴してゐる。屋根に瓦を置かず、漆喰のまゝで圓形に盛り上げてある樣子は、ユダヤ邊の家屋を聯想させる。ましてその周圍を、年經た橄欖や無花果樹などが取りまいてゐるのだから猶更のことだ。ユダヤにも、こゝに見るやうな透明な空があるかも知れない。唯そこにはこゝに見るやうな海はない。そこから吹いて來る風がない。これだけの相違がユダヤを淋しくし、こゝを華やかにするやうに見える。兎にも角にも、九月といふ初秋の日に照らされたこのあたりの色彩はそのまゝに畫だ。まだ橄欖の實は青いが、無花果は熟し切つてゐる。それが葉蔭に鈍い紫の色を點ずる。葡萄の葉は稍ゝ乾いて、蟲に襲はれたものから、少しづゝあの多樣な色素の變化を現はし始めてゐる。日は黃色く輝いて、ものゝ影は總て紫に濃く煙る。而して草を着ない岩石の膚は色さめた朱に、乳のやうな白に、光澤なき瑪瑙の色に染め分けられてゐる。

人の往來は至つて尠い。私達の馬車は、呑氣らしい御者の鞭の音につれて、乾いた、ほがらかな轍と蹄との音を立てながら、この美しい風光に陶醉した二人の若い旅客を、トンネルから岬に、岬から入江に、入江から長汀にと導いて行く。

私達の馬車が、パンクして動かなくなつた大きな素晴らしい自動車の傍をすり抜けた時、自動車から降り立つて破損の箇所を調べてゐた一人の紳士は、壬生馬と顏を見合せて思はず聲を立てた。壬生馬も勿論この奇遇を聲に現はしてゐた。そこには紳士の外に、なほ二三の美々しく裝つた美しい婦人がゐた。壬生馬はその人々とも慇懃に挨拶を交はして別れた。壬生馬は私にその自動車の主人こそは、ボルゲーゼ家の當主なる侯爵であることを

告げた。この氣輕な侯爵は、自動車が發明されて間もなく、歐羅巴から北京までへの自動車競走に參加して一等賞を贏ち得た人ださうだ。アマルフヒに着いたらオテル・マリン・リウォエールに休んで中食をしたゝめるから是非來て一緒に食事をしろと壬生馬に云ひ殘した。

ソレントを出てから凡そ四時間、私達は馬車に乘り續けて稍ゝ疲れた頃、アマルフヒといふ小さな町に來た。途中で私達を乘り越したボルゲーゼ家の人々は、私達を心待ちにしてゐるだらうとは思つたが、その時私達は、壯麗な貴族の接待に遇つて、好奇心を滿足させるよりも、この町で訪れたいと思つた他の場所があつた。それはイブセンが滯在してゐたといはれる一つの旅館だつた。で、私達はその貴族が休んでゐるホテルの名高い眺めをも敢て貪らなかつた。白黑赤の大理石を用ひて華やかに建て上げられたカセドラルの見物も省いた。而して町を突きぬけた突端の曲り角、カボ・ダトラニの古塔のほとりに、海を眼の前に控へたオテル・デルラ・ルナに投じた。

○

オテル・デルラ・ルナ――この古雅な小旅館の回想はいつまでも私達の旅情をそゝるだらう。古いドミニカン派の僧院を殆んどそのまゝ使用してゐるのだ。厚い古い壁に圍まれた部屋は、古さで冷え〳〵と暗かつた。その暗い部屋の窓から見渡される海の色は、エメラルドを火に熔いて流したやうだつた。物憂げな眞晝の磯浪の音が、幽かに道を隔てゝ通つて來た。私達の馬車の馬は牽綱から解き放されて、ロマネスクの太い柱を持つた穹道のほとりに、涼しさに眼を細めながら、靜かに糧秣を待つた。その寂かさ。

机に向つた私達は、黑ずんだ壁にたゞ一つ小さな額面のかけられてあるのを發見した。手紙でも表裝したものらしかつた。給仕をしてくれたその家の老女は、私達の注意がそこに向けられたのを知ると、尋ねられもしない

のに、それが文豪イブセンの手簡であり、イブセンがこの淋しい海角に半年餘の間滯在してゐたことを語つて聞かせた。壬生馬がそれを讀んで見ると、伊太利語で克明にきちやうめんに滯在中の挨拶が書いてあるとのことだつた。

イブセンが故國の民衆の遲鈍を憤慨して、好んで自己放逐の旅に上り、羅馬近郊のアリッキヤに隱れ、その地の農民から Il Cappeleone と諢名されたまでの幅廣の鍔を持つた帽子に人目をいとひながら、貧困と戰ひつゝ、ブランドを書き上げた頃、彼はこの半島の旅を試みたのではなかつたらうか。と想像すると、その色合ひから朋友等に琅玕洞と名付けられたイブセンの大きな帽子の形までが思ひ浮べられる。肩のいかつい、ずんぐりした、氣むづかしい三十六七の無名の異邦人が、人の思はないやうなことを思ひ耽りながら、このあたりを逍遙したことがあるに違ひないのだ。

故國に歸つてから何をなすべきかを私はまだ知らない。迷ひに迷つてゐる私の心は、かういふ遺蹟にめぐり遇ふと、不思議な惑亂を感ぜずにはゐられない。同時に私は極端にかく搖れ動く心を恐れる。私は夢を見てゐるのかも知れないから。仕事を持たぬこと、仕事を持つまでに自分の性格の方向が純一になり得ぬこと。それを思はせられるのは淋しい。そこから私の思ひもかけぬ悒鬱は湧き出して來るのだ。

「もう出かけませう」

御者の方からかう云つて私達は出發を促がされた。

〇

ヴヰエトリから道は海沿ひを離れた。黎明にソレントの旅宿を鹿島立ちしてから、この上ない秋日和を、全く

陶醉したやうな心持で、一日旅し盡したのだ。餘り構造のよくない馬車の動搖に肉體はやゝ疲れはしたけれども、心は底の底までしめやかな活氣を感じて、なほ逍遙の長きを欲した。海を離れると道は忽ちに趣の異つた、木立の多い、谿間のやうな地帶に私達を導いて行つた。既に短い秋の日は暮れてゐた。三十分もさういふ晝夜の境目を馬車が走つたと思ふ頃、私達はカァヴァといふ小村のオテル・ヴィットリヤに着いた。日がとつぷりと暮れ果てた後の事とて、あたりの樣子は更に分らないが、茂り合つた木の間の奥に、青い葉をかすめてホテルの窓の灯がちら〱と見え隱れするのを、私達は殉情的な旅の心で眺めた。親しい所に歸り着いたやうな、思へば遠くも來たといふやうなその旅泊の心持。伊太利を旅する人はこの地點に來ると、誰でも瑞西の一地角を思はずにはゐられないといふのがこのカァヴァだ。

復興期風の古臭い大きな玄關に迎へられて、私達は燭光の暗い、裝飾の古風な一間に落ち付いた。それでも何ともいへない靜かな落ち付きを感じさせる宿りであつた。晩食後、秋草の花が右往左往に亂れ咲いてゐる廣やかな庭園を、やゝ濕氣のある空氣を快い程度に冷やかに覺えながら、逍ひ歩いてサロンに來て見ると、そこにはフロレンスの方から漫遊して來たといふ或る貴族の一家族が團欒して語り興じてゐるのに遇つた。それは謂はゞ修善寺あたりで、京都から來た堂上華族にでもめぐり遇つたやうな感じを與へた。羅馬の都びた言葉使ひに慣らされた壬生馬も、あの古雅な北方の都會で哺まれた一種の訛りある伊太利語を、珍らかに優しいものと思つてゐるらしかつた。

その家族の中の一青年と連れ立つて、明日はポムペイに馬車を驅らうといふ約束も成り立つた。

夢もない靜かな熟眠の一夜。

○

紀元七十九年ヴェスヴォヤスの灰がポムペイを一擧に地底に埋め盡した時、小プリニーがタシタスに送つて、その伯父大プリニーの最後を報じた手紙に次ぎのやうな記事がある。

その頃老プリニーは或る艦隊の司令官としてミセナム（ネープルスの西方、ポッオリ灣の西部岬嘴（かふし））に自分の率ゐる戰船を碇泊させてゐたが、東方遙かの陸上、ヴェスヴォヤス山の上部と思ふあたりに、奇怪な層雲が出現したのを見た。それはヴェスヴォヤスの噴煙だつた。恰（あだか）も坊主松のやうな形に、中空高く噴（ふ）き上げられた濃煙が、物凄くも見る〳〵四方の空に擴がつて行つた。ナチュラリス・ヒストリヤの大著を著はした自然學者なる彼は、この稀有な現象を見ると、烈しい研究心に驅られて、左右なく自分の率ゐる艦隊に命令を下し、徐ろにレシナ（ヴェスヴォヤスの眞西、海沿ひにある市街）の方に近づき、附近の避難民を收容救助することに全力を注いだ。然しながらその時はもう熱雨、熔岩、火灰の爲めに、その處に上陸することなどは思ひもよらなかつた。

プリニーは已むを得ずそこを退（しりぞ）いて、あらゆる危險を冒して、スタビヤなるその友ポムポニアスの邸第（やしき）のあたりに船を寄せた。折からポムポニアスは纔（わづ）かに身を以て遁れようとするところだつた。プリニーはその友の財寶一切を船に運び入れ、ポムポニアスを促がして、その地に止まり、更にこの噴火の研究を續けようとした。然しながら噴火と地震とは刻一刻に激甚になり増さるばかりだつた。遂にさすがのプリニーも研究を中止してそこをも見捨てねばならなくなつた。その決心をした時、大空は既に黑煙を以て蔽ひ盡され、熱湯や熔岩は驟雨の如く降りそゝいでゐた。二人は已むを得ず羽枕を頭にくびりつけて、傷害を防ぎつゝ、海岸を目がけて逃げのびた。然し海岸まで來て見ると、船に乘り込むすべは絶え果てゝゐた。そこで二人はそのまゝ岩蔭の地上にひれ伏



ポムペイ壁畫のスケッチ

して小康を窺ふ外に取るべき手段もなくなつた。かくする中に毒瓦斯は漸次彼等を襲ひ始めた。プリニー等は一歩々々避けられるだけそれを避けようと試みたらしい。然し遂に彼等は運命に打克たれた。數日の後、この大學者の死體は、降り積もる火山灰の下に發見された。

プリニーは何處も怪我はしてゐなかつた。而してその顏は心安く眠つてゐるものと異らなかつた。

○

ボムペイの廓外にあるオテル・スィスの庭。

村から村へと、火石灰から出來上つたやうな眞白な道路が馬車の走るにつれて濛々と砂塵を立て、その砂塵が、昨日の旅ですべ〳〵と洗ひ立てたやうな心にさへ、不愉快なじやり〳〵した感じを與へつゝ、馬車はやうやくにしてそこに着いた。

フロレンスから來た貴族の青年といふのは、思ひの外に不愉快な男だつた。砂塵のやうな男だつた。馬車がそこに着くと車賃の割前も拂はずにどん〳〵私達から別れてしまつた。私達は結局それを心安いことに思つて、ホテルの庭つゞきなる或る小亭に憩ひ、香りの高い珈琲をすゝつた。小亭は木材がすが〳〵しく白ペンキで塗られてゐた。燒石が風化して土になつたその地面は草木に惠み深いらしい。人手の事々しく加へてない庭草は、思ふまゝに茂りはびこつて、英語の rank といふ字で形容したら、一番ふさはしいやうな姿を見せた。柑橘の類もたわゝに實を結んでゐた。花の美しさ。而してその乾いた香りの高さ。

私は雲一ひらさへない青空から一面に降つて來る日光を快く浴びながら、茂り合つた叢の中から若干の花を折り取つて花束を造つた。この花束はネープルスの旅館に持つて歸られた。そこでトランクの中に藏ひこまれた。

而してとう〱日本にまで伴はれた。それは痛ましい土氣色に萎み上つてはしまつたけれども、秋の花だけに形はいつまでも崩れなかつた。強いあの南歐の芳芬も何時までも消え失せなかつた。日記類を仕舞ひ込んだ抽出しを開く度毎に、その高い薫りは、私をポムペイの廓外なるオテル・スヰスに伴れて行つてくれた。その時持ち合はしてゐた軟かい西洋紙で觀世こよりをひねつて根本を結び合せた私の不器用な細工までが、あの荒廢の都の姿をまざ〱と甦らせてくれた。

然し今はその花束も塵埃となつて失せてしまつた。

○

日はかん〱と照つてはゐる。然し何處か虚ろだ。風は落ちてゐて汗は湧く。然し何處か冷え〱する。見渡すかぎりの大空に一つの鳥影もなく、小さな草の蔭などに蟲のしめやかな晝音を聞く。さういふ初秋の一日だつた。私達がポムペイの廢墟に踏み入つたのは。

熔岩石で疊んだ眞直な狹い往來、二臺の車が擦れ違ふさへ難澁らしく見える狹い往來の兩側には、屋根が燒け落ちて、厚い壁の斷層のみになつた無住の廢屋が死の如く立ちならんでゐる。

轍の爲めに二條の深い溝が出來上つた往來の石疊を、無人の境にゐるやうな私達は不思議な心持をしながら眺めやつた。又道路の彼處此處には噴泉の址があつた。石の井戸側に石の柱が立つてゐて、その柱から水は井戸側に流れ落ちてゐたものと見える。往來の人々はその石の井戸側に片手をおき、石の柱に片手をかけて、振り仰ぐやうにして口づから泉の水を飲んだに違ひない。その井戸側と柱との一定の所に、深々と手擦れの跡が今でも殘つてゐるから。人はそれを見ると、奇異な心を以てその手擦れの跡を觸つて見ずにはゐられなくなる。

リットン卿の「ポムペイの最後の日」の中に出て來る怪しい宮殿の址、或はバジリカの址などを訪れた後、演劇場に來て私達は石の觀覽席に腰をおろして見た。石は秋の日を受けて僅かに暖まつてゐた。綴目のゆるんだ石と石との間からは、實のなつた雜草の莖がひよろ〳〵と生ひ出てゐた。役者たちが演伎をしたパルピタムには、へし折れた石柱が二つ三つ孑然と聳立して、濃いその影を白い石疊の上に落してゐた。長さ一丁に餘り、幅一丁にやゝ足りない宏大もないこの大廢墟の中には、私達の外に一人の人もゐなかつた。

そこからヴェスヴィヤス山は手に取るやうに見える。二年前、壬生馬が始めて伊太利に着いた時、家郷に送つた消息の中には「ヴェスヴィオの火流るゝ……」と書いてあつたが、今はその山は穩かに眠つて、晴れ亙つた空高く、夢のやうにはかない淡藍の煙をかすかに南に靡かしてゐた。

もうグレコ（北若しくは北々東の風）が秋を告げ顏に吹き始めようとしてゐるらしい。

○

その夜私達は三日に亙る半島の小旅を終へて又ネープルスに歸つた。食卓には親しい顏が無くなつて、初めての顏が加はつたりしてゐた。窓際に來て奏でる樂人の夜曲も一抹の哀愁をそゝつて、奔放な情熱に更に熱を加へる曲とも思はれなかつた。

晝間の暑さに引きかへて、日沒後のかど〳〵しい冷えよ。

○

月の半面より更に廣い面積を有つてゐるのは露西亞大帝國だといはれてゐる。その大露西亞全國の土も、羅馬



セレナータを唄ふ女

の一尺四方の土が含むほどの歴史は含んでゐないとトウルゲネフは嘆じてゐる。フロレンスといふ都もある。ヴェニスといふ町もある。アッシジといふ邑もある。然し羅馬といふ一つの名はそれらの總てから飛び離れて大きく位してゐる。羅馬——短い名だ。然し何といふ長い意味だらう。「永遠の都城」といはれる羅馬、「大理石の沙漠」と呼ばれる羅馬、三百二十の勝戰で飾られた羅馬、歴史の桂冠なる羅馬、幾多の帝國の墓石なる羅馬、地球の表面に羅馬といふもの丶放り出されてあるのは、骰子が神の手から誤つて人の眼の前に放り出されたやうなものだ。羅馬を見た人は神の賭する運命を見たのだ。然し誰が正しくそれを理解し得よう。

初秋の日が、アルプスの幼兒と呼ばれるアペナイン連山の彼方に舂いた後だつた、ネープルスを發つた私達が羅馬に足を踏み入れたのは。長い歴史と眞暗な夜とが、私達二人の兄弟を二つの塵の如くに呑みこんだ。私達は薄汚ない馬車の中に、荷物と一緒に搖られながら、國立博物館の傍を通りぬけ、狹い道を幾曲りかして、皇太后の御所だと壬生馬が指さすマルゲリータ宮殿の物々しい石壁を右に仰ぎ、ヴィア・ベネトの廣やかな大通りに出て、そこを上登りに暫く行くと、立ちならんだ高樓の左側の一軒の前に馬車を停めさせた。

頑丈な鐵造りの入口の戸はまだ閉してなかつた。エレベーターに乘ると、それを操る男は、壬生馬を見て馴れ馴れしく言葉を交はし、餘りに歸りがおそいので、人々は病氣にでもなつたのではないかと噂してゐたと云つた。壬生馬も急に旅の心づかひをかなぐり捨てたやうに見えた。三階に達して壬生馬は或る戸口をノックした。少しけゞんな顏で戸を細目に開けた一人の老夫人は、壬生馬を見ると思はず晴れやかな聲を擧げた。その部屋の中は廣くはなかつた。天井を暗く、下だけを明るく見せる笠を持つた電燈に照らされて、そこには女住ひの家の中らしく、雜多なものが散らかつてゐた。見ると、隅の方の薄暗い長椅子の所から、一雙の大きな眼がぢつと私達を見つめてゐるのに私は氣がついた。眼だけが先づ感ぜられたほど、その眼は大きく異常だつた。それはよく見る

と二十歳前後に見える一人の娘だつた。燃えるやうな紅い毛絲の上衣を着て、長椅子に深々とその細い體を埋めて、義理のやうに力なく微笑(ほゝゑ)んで見せた。壬生馬は私をその人々に紹介するのだつた。

「あなたの兄さんはあなたに少しも似てゐない。増井さんの兄弟といふのなら私達は信じよう」

老夫人は私に握手を與へながら、ラテン人種獨特の優しい快活さを以ていきなりから云つた。娘も母の言葉を裏書きするやうに、輕くうなづきながら私に眼の挨拶を送つた。

壬生馬の借りてゐた部屋は、留守の間に已むを得ず他に貸されてあつたので、私達はその隣りの小さな部屋(家族の部屋と眞向ひの)に案内された。そこには、日本にゐた時、壬生馬の机邊で見なれた小道具の二つ三つが見出された。私はなつかしく部屋の中を見廻した。而して所定めぬ旅の中ながらよい居心地を感じた。

老夫人が私に似てゐるといつた増井といふ青年は、ボルゲーゼ侯爵家の夫人でありながら、今は數奇な運命の下に在る老夫人の世話になつてゐる青年のことだが、それはその中委(くは)しく話さう。あの娘は足腰の立たない憐れな病人だ。病氣の爲めに益々鋭敏になつてゆく神經で彼女は眼のみが大きく美しくなる。と、寢る前に壬生馬が私に云つて聞かせた。

○

羅馬に這入つてから私達は十月を迎へた。羅馬の遊覽には最上といはれる十月を。毎日々々太陽は雲のない空を靜かに暖かく照らした。日中には時折り夏の暑さを道行く人に思ひ起させるやうなことがあつたけれども、夜になると空氣は水晶のやうに冷えた。

その十月の一日は十四夜に當つてゐた。日本大使館附きのS中佐は私達を日本風の晩餐に招いて、コロシュムに

月を見に行かうといひ出した。私達は喜んでそれに應じた。

馬車が幾度か曲角を曲つて走りつゞける中に、秋の空は蒼茫として暮れて行つた。家々の窓からは黄色い灯が見え始めた。馬車が或る坂道をつゞら折りに走り下ると、テイトの大浴場のあたりから既にコロシュムの物々しい外壁が、夜の影の中に斷崖の如く見え亙つた。その重黑い大きな塊的を照らして、月が東の人家の屋根から大きな凉しい姿を現はした。皮で張つた馬車の腰掛けが冷え〴〵する程空氣は澄んでゐた。私達は大きな聲で物をいふのが憚られるやうな心持がした。

木柵の外で私達は馬車を乘り捨てた。而して大トンネルのやうな穹道の闇を手さぐりしながら通り拔けた。眼の前には、音もなく靜まり返つて、長さ三分一哩に達する地積に卵形を描いて、灰華の石塊が眼にある高さに積み重ねられてあつた。月に背いた方は黝然として唯暗く、月に向つた方は、斜面に幾十層の階段をなして疊み上げられた座席の列が、燐を塗抹したやうに眞珠色に光つてゐた。

八世紀の頃、この大演武場を訪れた遍旅の客は、豫言するやうに歌つて云つた。

「コロシュムのあらん限り羅馬はあらん。
コロシュムの滅ぶる時羅馬は滅びん。
而して羅馬の滅ぶる時、世界も亦滅ぶべし」

かく歌はれた世界の要石なるコロシュム……それは私の眼の前に何といふ冷たい淋しい姿だ。

私達は夜寒を身に覺えながら、座席の最高所からアレーナを見渡した。月の光を受けた、荒れ果てた石疊の上には蟲一つ生きてゐるやうには見えなかつた。たゞ場の中央に一基の十字架が孑然と立つてゐた。紀元第八十年タイタスがこの大工事を竣工した時、その落成が記念されるために、百日の祝祭が催されて、五千頭の野獸が競

技のために屠られたと稱せられる。而して綺羅に裝はれた五萬の觀衆は、東方の染料で眼も覺めるばかり染め上げられた日覆の蔭にあつて、毎日競技の進行を喝采しながら見物したのだ。それ以來この地點の歷史は鮮血の歷史といつていゝ。人間がその獸性を鮮血と共に湧き立たせた凄慘な歷史といつていゝ。そこではグラディエトルと外國の捕虜とが互に殺し合つた。獅子と人間とが互に嚙み合つた。幾萬の基督敎徒が十字架の上で殺され且つ燒かれた。羅馬人はその血を見、その煙を嗅いだ。而して媚藥を用ひた人のやうな昂奮に醉ひしれたのだ。然し時は總てのものを葬る。そこには今一滴の血も殘されてはゐない。唯石が默して冷たい。

私達が妙に考へ深い氣持になつて立ち盡してゐる間に、月は高く天心に上つてゐた。伊太利の空は屢ゝ高原の空を思ひ起させる。その底力をこめて澄み切つた藍色の奥深く、小さく月が懸つてゐる。星は稀れだ。

人間が歷史を殘すといふことは自然に對する冒瀆ではないのか。

〇

十五夜の月に誘はれて私達は散歩に出た。ヴォルラ・ボルゲーゼの苑囿を繞らすアウレリヤスの古壁が、高々と連なるあたりを、短く濃い影に伴はれて行きつくし、ピンチヤナの門の淋しく立つあたりから家路についた。月の暈が大きく現はれて、夜の氣が冷え〳〵する。家に歸りついて寢支度をしてゐると、高い家と家との間を唄つて行く美しい男性の聲が聞こえた。

新聞に氣溫は十三度としてあつた。私達の住家なる番町の櫻の葉は、紅に黃に十分色づいて散り盡したらう。この地のプラタナスはまだ裕かに餘命を保つてゐる。

私達は家鄕にとて幾枚もの葉書を書いた。

來る所を知り行く所を知るものゝ心は哀しきかな。秋の雲はかくて我等の眼に哀しきなり。

○

○

朝の食事は宿で取る。ふはりと燒いた子供の拳程の大きさのパン二つと、有平糖のやうに卷き上つた少しばかりのバタと、牛乳を入れた珈琲一椀。雪白なナプキン。錆のない華車なナイフ。

晝食と晩食とは近所の料理屋で。それは狹い小路に在る綺麗でもない小さな食堂だ。畫家、黑い喪服を着た後家、下級官吏、私達。マカロニ、それに附隨する筋の通つた軟かい牛肉、葡萄酒、肉果、核果、雜菜のソップ。果物に眼のない私は、高脚のガラス皿に盛られた果物を、殊に尊くうれしく思つた。白い粉の下に細長く霞む薄皮の葡萄の粒、紫水晶の珠のやうな杏、靑磁色と代赭色の無花果の實。それらの味はさながら秋を嚙みしめるやうだ。私はまた酒の味ひを初めて知ることが出來た。伊太利の葡萄酒をも飮まないやうな禁酒會員がゐたら、それは白痴であらねばならぬと思ふほどだつた。總ての人の食皿の傍には、赤か白かの「自然」の血液が酒杯の中に澄み切つて湛へられてゐた。

宿の人達が私に似てゐるといふ增井といふ靑年に遇つたのもその食堂でのことだつた。私自身はさう似てゐるとは考へなかつた。彼は私よりはずつと福相で、小さいながら生々と美しいその眼も、下脹れなその豐かな顏形も、西部日本に特有な軟味と肉感味とを備へてゐた。彼は西方の訛りのある不完全な日本語で私達と話し合つた。話が急所に來ると彼はもどかしさうに、美しい伊太利語で自分の心を人に通はせようとした。

私達はその青年に伴はれて、そのアパルトメントに行つて畫を見せてもらつた。增井は壬生馬と同じやうに畫道に志してゐるのだ。その畫の大部分は人物畫の摸寫か、衣服や布類の綿密な習作だつた。刷毛目の見えぬ程の細やかな筆觸で、光澤を持つた布片の蔭日向が丹念に寫されてあつた。部屋の隅にある肖像畫なども、同じ筆觸で機械的といつてい丶までに固く描かれてゐた。感興といふものを何處にも汲み取ることの出來ないやうな、義理一片で描き上げたやうな畫品であつた。

そこを出てから、壬生馬は增井の傳奇的な悲しい過去を私に話して聞かせた。物心もつかない頃に突然誘拐されて旅藝人の群に投げ入れられ、南米から歐羅巴へと、激しい、苦しい輕業師の稼業にたづさはつて歩く中に、羅馬で興行をするやうになつた或る日、高い鞦韆から誤り落ちて、脚の骨を挫いたのだつたが、興行師は薄情にも片輪者になつた子供に用はないと見切りをつけたのだらう、病院に突つ込んだまゝ費用も拂はないで、いづこともなくその地を引き上げてしまつた。憐れな少年は負傷したまゝ天涯の孤客とならねばならなかつた。羅馬に滯在してゐた日本人の中一人として(公使館の人々は勿論のこと)この數奇な運命に弄ばれてゐる少年を省みてやらうとするものはなかつた。この奇怪な無關心は、或る少數の羅馬市民に憤りを感ぜしめた。而して少額づゝの義捐金が、異邦人の手からこの少年に與へられた。その中にも特にこの少年を憐れみいたはつたのは、その頃社交界に時めいたボルゲーゼ家の夫人だつたのだ。かくてこの片輪な不遇な少年は、穢い病院の寢床から一躍して侯爵家の物々しい邸宅に移された。人なつこい性質で、而かも明敏な頭腦を持つてゐる彼は、直ちに侯爵夫人の寵愛を一身に集めて、昨日の乞食兒は忽ち一人の小公子となつた。これは小說にもあり得べからざるほどに不思議な實際の出來事である。彼は羅馬で最高の貴人が受くべき教育としつけとを受け、或る時期には佛國にも遊學した。然しながら彼の世路は又一時に急轉せねばならなかつた。何故といへば、その侯爵夫人は或るローマンティ

ツクな事件から上流社會の交際場裡から永久に姿をくらまさねばならなかつたから。而してこの不思議な運命によつて結び付けられた母子のやうな二人は、昔の榮華をたゞ回想の中にのみ持ちつゞけて、淋しいパンションの生活に投じなければならなかつたから。夫人は……常に黒い質素な服に身を厭ふ夫人は今は老いた。而して增井が畫家として世に立たんことをたゞ一つの希望とも慰藉ともしてゐる。增井は增井で苛辣な運命の爲めに十分にひしがれてゐた。恐らく一介の乞食兒から一躍して貴公子の境地に身をおいた時でも、彼に對する周圍の隱約の間の嫉視迫害は恐らく他人の想像することが出來ないものであつたらう。彼はその間を手際よく泳いでゐたにもかゝはらず、底のないやうな孤獨悲哀の感に人知れず涙したことだらう。その境涯から落ちぶれゝば落ちぶれるで又人情の桎梏は起る。增井は、華やかな心にのみ芽ぐみ得る藝術の感興を全くもぎ去られてゐながら、手の先きの器用に任せて、失意から失意へと陷つて行く恩人の夢を希望ありげに繫いで行かねばならぬのだ。福々しげに見える彼の容貌こそは、實に自然がいやが上にも彼を弄ぶ爲めに案出した皮肉だとさへいへるのだ。

　羅馬といふやうな背景なしにはあり得ないやうな人間流轉の一挿話ではないか。それにしてもこの悲しい運命の捕虜なる增井の顏の何といふ福々しさよ。その福々しい顏が時々何かの拍子に黯然として曇る。その痛ましさは言葉にも盡せないと壬生馬は附け加へて私に語つた。

「あの人は畫は駄目です。第一師匠が惡い。ほんとに悲しい男だ」

　暫くしてから壬生馬は運命の餘りなる惡戲を憤るやうに激しくかう云つた。

○

大停車場の前にピヤツァ・デルレ・テルメといふ廣場があつて、中央には壯大な噴水池がしつらへてある。その大

水盤の四方には、大理石で擅まゝな姿をした女の裸體像が水のしぶきを浴びて立つてゐる。それは極めて近代的な奔放な印象を誰の眼にも投げ與へるであらう。そのすぐ東側には、紀元三百六年デオクレシャン大帝によつて築造された大浴場の斷壁が、眞黑に燻つて立ち列なつてゐる。その中に羅馬の國立博物館があるのだ。

　ネープルスで既に餘りに多くの偉作に途方に暮れた私は、こゝでも亦唯驚いて、古人の偉大さに魂を奪はれねばならなかつた。この博物館は、パイヤス四世法王がミケランジェロに命じて、大浴場の址に建てさせた僧院をそのまゝ使用してゐるのだ。僧院を訪れる毎に嗟嘆を禁じ得ないのは內庭の構造だ。美しい柱列に飾られた四角な廻廊と、廻廊によつて限られた平らな方形の庭。私達はこゝでもその廻廊の柱の一つに身をよせて、飽くことなく、荒れた庭の面を眺めた。館內に收めきれぬ幾多の大理石像と、柱冠と、柱礎とは、雨ざらしになつたまゝ、白くそこかしこに横たはつてゐた。その間から生え出でた草の中には、薔薇、野菊、萩、芙蓉などがあつた。シプラスは高く延びて、紫の影を廻廊の楣に落してゐた。光は強く熱の弱い日光がその廢庭の姿をあからさまに照らしてゐる。庭の中央にある噴泉には水が枯れて落葉が吹き溜つてゐた。

　跪ける少年の石像……頭と手との失せた……の形の整美は勿論だが、雨露にさらされて變化したらしいその石膚の色合ひは、伊太利の大理石でなければ出て來ないものゝやうに思はれる。コンスタンチ劇場より集めた壁畫の數々、第八室の出口に据ゑられた、横向きに凭れた女の像、ゲーテがホーマーの詩を誦するやうだと讃美したルドヴィチのジュノーの首、それらは私の注意を殊に強く牽いた。取分け私をいつまでも立ち停らしたのは、「眠れるエリニオの道」だつた。それは大理石の板に右半面を見せた浮彫りだつた。純希臘風に、額から鼻にかけて殆んど一直線をなして眞直に通つた線、素直な小鼻の下に、引き緊つた、稍ゝ肉感的にさへ見える上下の唇、それに續いて、一旦くぼんでから力強く突き出た下顎、死とも眠りともない、瞼を深々と垂れた眼、悒鬱に

長く引かれた眉、美しい波を打つて、なま白く思はれる額際から後頭に流れ亂れた頭髮、ルドヴィチのメデュサと俗に呼ばれる意味も察せられる。見る人が恐怖のあまり石になるといふ蛇髮のメデュサは、鼾られるとかゝる凄慘な妖美をその顏に現はしたのかも知れない。カノバの刻んだペルジュスの左の手高く揭げられたメデュサの首も、この浮彫りに比べてはその深刻な物凄さを甚だ僅かに表現してゐるやうに見える。おとなしく眼を瞑つて、如何にも人を脅かす表情とてはない、この美しい、少年とも少女ともつかぬ橫向きの顏が、どうして私の心を桒だゝすやうな不思議な寒さを感じさすのだらう。人間の生命の一番怖れるもの……歸無……滅却……をこの首は恐るべき力を以て暗示してゐるのだ。人はこの首を凝視することによつて、存在の根柢の一大事をしつかりと思ひ起させられる。不思議なものは入神の藝術の力だ。

この博物館に附屬して、現代伊太利の藝術品の陳列所がある。伊太利の藝術の過去現在を比較するほど悲しいものはない。その祖先が餘りに偉大なのか、その後裔が餘りに醜小なのか、或は歷史の推移によつて、伊太利の文明を支配する人種に異動を來たしたのではないかとさへ疑はれる。それほど彼と是との間には埋め難い溝がある。

○

古い羅馬の中でも、モンテ・パラティノほど古い地點はない。羅馬の都城が建設される前、ハーメスの子として傳へられるユヴンデルが、その生れ故鄕なるアルカデアを出て、伊太利半島に移住し、この地點にパラティノといふ名を與へたと傳へられてゐる。それから以後、この地は世界の中心なる羅馬の中核たるべき運命を擔はせられたのだ。


Oct. 5 '06
Mons Palatinus
Roma

カリテーネ、シセロ、及びシセロの仇敵なるクロディユス等は皆こゝにその邸第を有し、シーザー・アウガスタス以後歷代の僭王は皆この地に宮殿を築いて、前代の驕奢を凌ぎ合つた。然し時代はいつの間にか推移して、宏大もない舊址の上には砂塵が積み重なり、北方の蠻人が入寇して世の亂れが絕頂に達した頃からは、そこは羅馬に於ける最も下等な場末町の一つになつてしまつた。

メレヂコフスキーの「先驅者」を讀んだものは、文藝復興期頃のこの邊の模樣を視るが如く想像することが出來る。そこは家畜の糶市場だつた。低い家並みが汚らしく不規則に散らばつて、家と家との空地には豚や牛が、疎らに生えた雜草や野菜屑などを、小やかましくいがみ合ひながら食つてゐる。家畜の賣買をする狡猾さうな男達が、小汚ない酒店で濁酒に醉ひしれて、白晝をも顧みず云ひ罵つてゐる。亂雜な服裝をした女房達は、土の上に柱冠だけを現はした石柱から石柱へと綱をかけわたして、むさ苦しい洗濯物を憚りもなく乾してゐる。家畜の排泄物から釀される臭氣は、風のまに〳〵蒼蠅と一緒になつて所構はず飛散する。そんな皮肉な光景の下にこの地は永く埋もれてゐたのだ。

千七百年代に初めて大規模な發掘が企てられ、シーザーが刺されたカピトルの址も、アントニーが演說をしたフォラムの址も、アウガスタスの邸第の址も、ネロの宮殿の址も再び日の目に曝されるやうになつたとのことだ。

モンテ・カピトリーノにあるカピトリーノ博物館を見た。而してそこを出て、丘の端れからパラティノを見おろすと、秋の麗日が古蹟一面を隈なく照らして、雨よりも風よりもなほしめやかだ。あすこに立つたり轉がつたりしてゐる石塊が、果して二千年近い昔からあつたのだらうかといふ疑ひさへ起される。歷史とはまるで空想家の揑造物のやうにさへ思へる。私達の傍にゐた爺さんは、籃の中から土器を取り出して、カタコムベから掘り出した古い燈臺を買はないかと勸めたりした。羅馬市の象徵として、博物館の傍に飼はれてゐる檻の中の狼が、餓ゑ

てすさまじい聲で吠える頃にドンが鳴りわたつた。と同時に、市内の寺院のある限りから、音色様々の鐘の音が、霽れ亙つた空遠くほがらかに響き交はした。

私達が一時の興からシャイロック爺さんと諢名した小料理屋の老主人が、葡萄の粒を數へるやうにして持つて來た。想像力の逞ましい壬生馬は、あの爺さんには孫がないに違ひないとか、細君に夜逃げをされてあゝなつたのかも知れないなどゝ戲談をいつた。そこにも然し味のいゝ葡萄酒はあつた。

食事を終つてから私達は入場料を拂つてモンテ・パラティノに這入つて行つた。ドムス・ティベリアナの庭に上る所に新しい石階があつて、水が流れて瀧になつてゐる。レアンドラが咲いて、水草の青々と茂つた中に垂れかゝつてゐる風情は眞に古い。乾き干からびた古蹟の石は無理にも人を往古に伴れて行かうとするが、石の沙漠の中のこのオアシスはその幽かな水音の歌で心の底から人を懷古の情に堪へざらしめる。

私達は案内人に連れられてフォラムの眺めや、七丘の眺めを心ゆくまで味ひ、石と石との間を拾つて歩きながら、或る時は突屹と聳立する孤柱を仰いだり、或る時は石壁に殘つた浮彫りを撫でゝ見たりした。而してアウガスタスの邸第の址に足を停め、四方を遠望しながらスケッチなどを試みて、寺々の鐘が夕暮を催すまで去りがてだつた。そこの石と石との間に姫罌粟がたゞ一本、三寸程にも生ひ延びて小さな花を開いてゐた。私はその花を手折つて日記の間に挿んでおいた。今その日記を開いて見ると、花瓣は殘りなく散つてしまつて、小さな雄蘂としなびた莖だけになつてゐる。

○

夜增井が話しに來た。輿に乘つては彼も快活な一人の話上手だつた。夜が更けてからこの憐れな孤獨の人は一

人座を立つて歸つて行つた。三階を下る時間があつて、やがて大門の鐵の扉ががちやんと夜の寂寞の中に閉まる音がした。窓から下を見おろして見ると、往來の人通りは途絶(とだ)えがちになつて、秋の風が電燈の灯に青白い石敷の道の上にあつた。增井の帽子が歸つて行く。而して部屋のテーブルの上には、喰ひ散らされた秋の果(くだもの)が、白いナプキンの上の白い皿の中に散亂してゐた。

見もしない中に月は虧(か)けてゆく。

○

都市には必ずその特有な匂ひがあると誰かゞ云つた。本當にさうだ。それにしても、その都市の中から生れ出た特殊な藝術によつて匂ひ付けられない都市の如何に哀れなるよ。

若し伊太利の都市に來てその都市ごとの特有な匂ひを嗅ぎ出さうとする人があるなら、恰も紋章の如くに、各都市の屈強な場所を飾る鎭守の寺院を見るがいゝ。都市とはいふまい、どんな小さな村にも、伊太利では、特殊な様式を持つた寺院が、そこに住む代々の人達を雄辯に物語るやうに立つてゐる。日本などでは、寺院でも、神社でも、その宗派によつて建築の様式を異にしてゐるやうだ。それが建てられてある土地によつて變化するやうなことはない。伊太利に於てはさうではない。建てる人の心がその様式の制定者となるのだ。羅馬と、フロレンスと、ヴェニスと、ミランとの本寺を見る人は、すぐにこの事實に氣付き且つ首肯(うなづ)くだらう。おまけに伊太利では、各都市が守護聖者とでもいつたやうに、特有の藝術家を持つてゐる。羅馬にはミケランジェロとラファエル。フロレンスにはヂオットとフラ・アンジェリコ。ヴェニスにはチシアンとティントレット。ミランにはリオナルド・ダ・ヴィンチとルイニといふやうに。私は、かういふ伊太利諸都市の文化的遺業を羨ましいものと思はずにはゐられ

ない。

○

羅馬の紋章ともいふべき代表的建築物にはサン・ピエトロがある。然しながらこれは、私の感ずる所によれば、羅馬の一面――極端に物質化された精神的方面（若しこんな表現が許されるものとすれば）を言ひ現はしたものに過ぎないと思ふ。羅馬の穏健な雄偉な美を永久に記念するものを、私はそのパンテオンに見出した。そこには羅馬の本質的な心の表示がある。それは眞に特異だ。眞に羅馬的に特異だ。

上下議院、内務省、遞信省などの立つ役所町ともいふべき、壯大な建築物の間に繞まれて、ピヤッァ・デルラ・ロトンダといふ圓形の廣場がある。アルゼンタインに移住してゐる伊太利人等が、パンテオンに祭られてゐるヴヰットリオ・エムマニエーレ第二世や、ウムベルト第一世の長い眠りを安からしめようため、わざ〳〵南亞米利加から木目の堅い角材を渡來して、その廣場を敷きつめたと稱せられる。馬車が石疊の上を不愉快に搖られてその廣場に來ると、急に絨毯の上を走りでもするやうな平らかな乘心地を感じさせる。廣場の中央の大きな噴泉の中からは、イシスの神殿から運び取られたオベリスクが矗として立つてゐる。その廣場の南隅に、パンテオンは、羅馬の地中隈なくその根を張り擴げた大樹のやうに、古色を帶びて重々しく眺められる。

パンテオンは、アウガスタス・シーザーの養子アグリッパが紀元前二十七年頃に建造したものであるが、大體の現在の形は紀元百二十年代にハドリアン帝によつて改修されたのである。

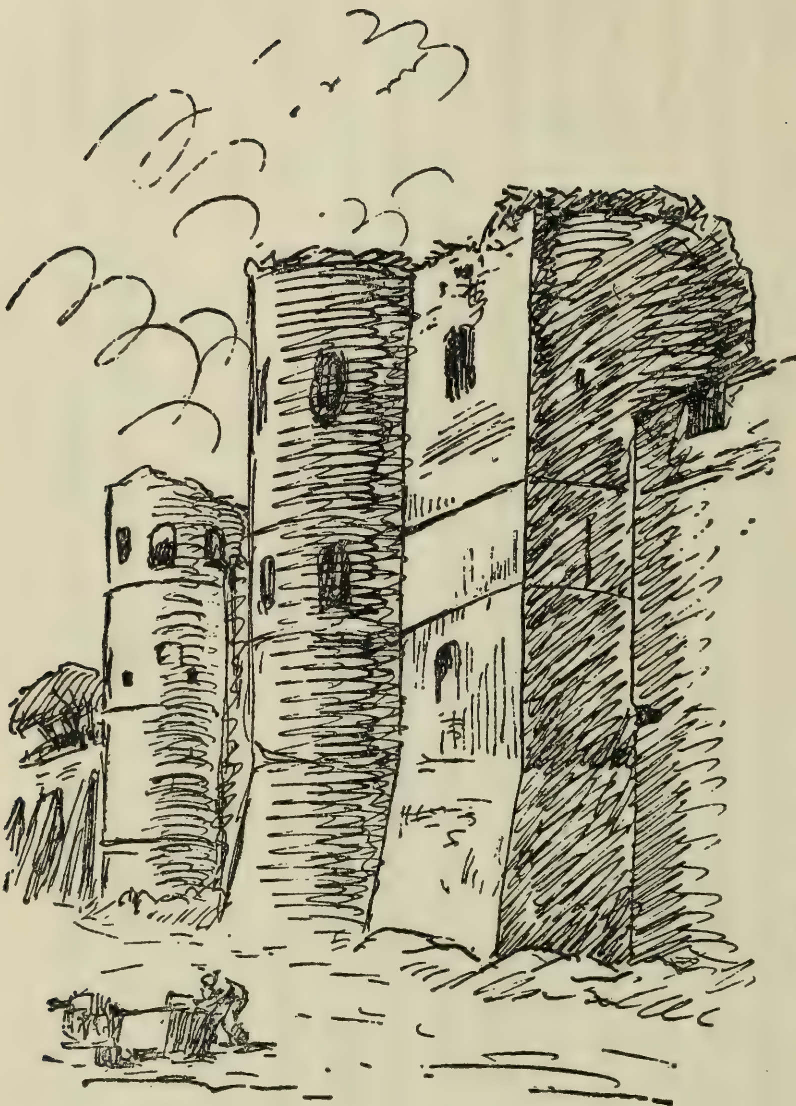
底邊の非常に長いティムパナムを戴いて、立ち列なる十六本のコリンシャン柱列はポルティコを三室に區分してゐる。その柱の大理石は長い年月の間に晦爛して黑みわたつてはゐるが、さすがにその昔雪のやうに白かつた

當時の整美を思はせる。ポルティコの三角の屋根の後ろには、かの圓屋根の頂上の一部が、大きな感じを以て覗き出てゐる。單純な輪廓を包む線の、複雜な配合の感じを何といつて言ひ現はしたらいゝだらう。それは居ながらにして、素朴な偉大さと、子供のやうな美に對する直覺とを持ち合はした古人の心をさながらに見るやうだ。

私達は古い青銅の大扉を見やりながら中に這入つた。高度と直徑と、共に百四十二尺に達するエトルリヤ式の大圓堂は、茫然として私達の眼の前に展けた。その偉大なる單純さ。壁面はたゞ平らで、七箇所の小龕があるばかり、蒼穹を思はせる圓天井は、角形沈模樣に區切られて、人の眼を頂邊の圓窓に吸ひ寄せて行く。茶碗を伏せたやうな圓天井、その絲底ともいふべき邊に、直徑三十呎に達する一箇の圓窓があるばかりだ。厚さ十五尺に餘る壁面には螢火一つほどの光も這入りこむことが出來ない。空の光は、たゞこの一つの窓を通して、百四十尺の下にある石疊の上に落ちて來るのだ。雨降る時には天の甘露も亦。一體美妙を極めた空の色は、宏大無邊なばかりに、安價に人に取り扱はれてゐる。然しかゝる莊嚴な設備によつて、天空が徑三十呎の圓に切り取られる時、人は天に對するあまり無反省な侮蔑を悔いないではゐられない。他所ならば物見高く罵り合ふ遊覽の客も、玆では靴の踵を上げて歩く。

花環に埋もれ、守衞の兵士に事々しく守られた皇帝等の墳塋に面して、反對の壁の一龕にはつゝましやかにラファエルの墓があつた。ベムボ僧正の墓碑銘に曰く。

「こゝにラファエル息へり。
　彼の生ける時、大自然はその事業の打負かされんことを恐れ、
　彼の死せる時、大自然は自らも亦死なんとするを恐れたり。」



羅馬 古城壘

○

朝窓を開けば又霧。アウレリヤスの古城壁やゝ白み、ヴヰラ・ボルゲーゼの松遠く煙り、やゝ霑ひを持つた石疊の上を馬車の音がやうやく忙しくならうとしてゐる。七時。

○

中食後パンテオンの前でマッツォニと一緒になり、ヴヰットリオ・エムマヌエーレの大通りを横ぎつて、ヴヰヤ・デル・パラディゾと名ばかりは美しい小路を拔けて、ヂオルダノ・ブルーノの記念碑のある廣場カムポ・ディ・フヰオーレに行つて見た。そこには日を定めて猶太人の骨董品や古着類の市場が立つのだ。その日は定日に當つてゐた。小路を拔け切る頃から、私の敏感な嗅覺はむせるやうな惡どい臭氣を知つた。續いて私達は、口いさかひをするやうに罵り騷ぐ群衆の聲を聞いた。ひと走りに走つて來た頑童が、いきなり私達に衝突しそこなつて、僅かに身をかはしながら、私達の異なつた皮膚の色に氣がつくと大聲を立てゝ惡口を云ひながら伴侶と笑ひこけた。私達の眼はやがて、立ち連なつた露店の毒々しい東洋風の色彩によつて眩しくされた。型の通り、ちやん〳〵このやうな胴着を着たり、頭巾を被つたり、古い山高帽子を阿彌陀に戴いたりした、鷲鼻の、眼のくぼい人達が、蒸れるばかりに群集して、聲高に小さな取引きをし合つてゐた。私達は邪魔にならぬやう物蔭に引きさがつて、飽くことなくこの騷々しい生活の一場面を眺めやつた。豚を口にしない彼等には、又豚よりも毒々しい臭い食物がある。彩られた鷄卵、大鍋から湯氣を立てゝ煮える何の獸かの肉、東洋風な模樣を持つた珍らしい布切れ、帶、巾着、珠玉の類、掃除用の小道具、被り物と履物、膚衣、外套、さては玩具。古い新しいそれらのものは、秋の日にその

銘々の形を存分に曝してうざ〳〵と積み重なつてゐる。その間を居たり、立つたり、歩いたりしながら、賣り買ひに忙しい人々は、私に存分好奇な心を起させた。私は米國にゐる間にも可なり猶太人は見た。然しながら米國に住んでゐる猶太人は、その風俗衣食共に大分米國化してゐるやうだ。羅馬に至つては又趣きを異にしてゐる。彼等の大部分は明かにその國風を持續してゐる。而して米國などに於てよりも、更に古い歷史を持つてゐるに相違ないにもかゝはらず、羅馬に於ては、彼等は却つて at home に見えることが私には一種の興味を感じさせた。拉典人種の美的寛大心がこの結果を來たしたのではないかなどゝ思つた。アングロ・サクソン人と拉典人との相違は或は存外この點にあるのではなからうか。現代の衣服だけを考へて見てもそれは判ることだと思ふ。今の歐羅巴人の服裝は、主としてアングロ・サクソン人の常用のものを基調としてゐる。全洲に亙つてさしたる特色がない。然し拉典人が歐羅巴の實權を掌握してゐた時にはさうではなかつたやうだ。西班牙には西班牙、和蘭には和蘭の特色がそのまゝに行はれてゐた。それは拉典人の美的寛大を證據立てるものではなからうか。兎に角それは餘談だ。煙草、酒、煮物の匂ひはそこの空氣になつてゐた。私は知らず〳〵ゴルキーの作品とその場の光景とを結び付けて打ち眺めてゐた。

見るとその騷々しい廣場の中央には、頭巾を眼のあたりまで深々と被つて、法衣に包まれた手を、沈思の爲めに顎の下に支へてゐるヂオルダノ・ブルーノの等身大に見える銅像が、群衆の頭を足臺にでもしてゐるやうに立つてゐる。「眞理は學者の有にあらず、僧侶の有にあらず、たゞこれを愛する者の有なり」といつた近代精神の創始者の一人なるヂオルダノ・ブルーノの銅像が俯向いて、私達と共にこの光景を眺めてゐるやうに見える。この廣場で彼は法王廳の爲めに燒き殺されたのだ。

このカムポ・デイフィオーレには每朝靑物と花との市場が立つのだ。私達がそこに行つた時には、その日の事が

終つて、野菜や花の落ち散つたのが踏みしだかれたまゝになつてゐた。

○

猶太人、世界の歴史に猶太人のゐるのは、藥局の棚の上に一瓶の劇藥があるやうなものではなからうか。彼等の數は少いがその血は濃い。私は嘗て聞いたことがある。猶太人が現在のやうに、經濟上の實權を歐米の天地に握るに至つたのは、猶太人が金錢上のことに際立つた才能を持つてゐたが故ではない。嘗て佛蘭西が歐羅巴の天地に最優權を占めた時、猶太人はその優れた才能を擅まゝに社會生活の各方面に振つて、到る所で佛國民を凌駕する勢を示した。これは佛蘭西人に取つて由々しい大事であつたので、その勢が窮まらない中に、强制的に總ての實權を彼等から掠奪し、當時人々の卑しんだ金貸しの仕事だけを彼等に許した。猶太人は然しこの働き榮えのない仕事の中にも自分達の活路を尋ね出すことに失敗しなかつた。彼等は忽ちの中に富者となつた。而して商業に手を出し始めた。商業の世界では富者に待つ外はない。佛蘭西の政府も商工業の階級も知らず〱の中に猶太人に依賴して國利を擧げねばならなくなつた。然し商權金力の掌握はやがて政治の脅威となる。佛蘭西は或る程度まで猶太人を利用したけれども、子飼ひに手を嚙まれさうになると、その財產を沒收して彼等を國外に追放した。然しその結果はいつでも佛蘭西の財政の萎縮に終るの恐れがあつた。かくて佛蘭西は又已むを得ず猶太人の入國を許さねばならなくなつた。このやうにして猶太人の才能は金錢といふ一方にのみ集中された結果、猶太人とさへいへば、一概に利殖に長じた民族と思はれるやうになつたといふのだ。かくの如き關係は諸國に散在した猶太民族に共通して行はれたかも知れない。少くとも、猶太民族が利殖の方面に於けると同一の、若しくは以上の才能を活動の諸方面に有してゐる民族であることは明らかな事實だ。この民族に對する僻見が近代に至つて歐

羅巴に少しくゆるむや、彼等は突如として實際精神兩界に活動を始めて、アリアン人種の文明なる歐羅巴の文化に著しい影響を蒙らせたのは周知の事實であるからである。

世界を通じて國土と結び付いた國家を有せざる大民族は猶太民族だ。又實際的に國家と結び付いた國土を有せざる大民族は支那人だ。近代的の意味に於ける國家が自分自らの破綻によつて形を變ぜなければならなくなつた時、地球の表面に新しい姿を與へるものは、實にこの二大民族ではあるまいか。彼等は私達の知らない自由を持ち、且つそれを知つてゐる。その自由はなほ若い。その胎は豐饒だ。ジュピターかエホバかゞその胎に自らを宿らせる時、これらの民族は私達の嘗て見なかつた救世主を生み出すに相違ない。

私にはさう思へる。

○

その夕方壬生馬に伴はれて、私は美術家街にウゴオ・ベルナスコーニといふ若い畫家を訪れた。春から夏にかけては、畫のやうな古風な裝ひをした田舍の娘達が集まつて來て、通行人に花を賣り、又美術家の爲めにモデルになるといふピヤツァ・ディ・スパアニャの美しい廣場から右に折れて、石を敷きつめた坂を上ると、アンデルセンの「卽興詩人」の中に、乞食が立つてゐたとあるあの邊の石塀のほとりに出る。而してそれを折れ曲つたヴィヤ・マルグッタといふ細い通りは寂かないゝ往來だ。家並みに樹木が多く、或は石欄の處々に据ゑられた石鉢からは、ナスターシャムが秋らしい花を一面に咲かしたり、或は木製の堅固な棚には、やゝ色づいた葉蔭に、サファイヤーのやうな白葡萄の房が鈴なりに垂れ下つてゐる。私達はさういふゆかしい家々を喜んで眺めやりながら一軒の家の戸口をおとづれた。

冷え〳〵する蔭を古い露臺の上に落して、そこの家にも葛の天蓋が頭の上に懸つてゐた。やがて一人の背丈けの高い、若い美術家が靜かに重い戸を開いて現はれ出た。高く白い額を特色として持つたその人は、くすんだ色の合服を着てゐた。この邊によく見受ける、いかにも藝術家氣取りな、事々しく奇異な服裝をして得々たる人々に比べれば、彼はその顏立ちだけで遙かにより多く藝術家だつた。しとやかに彼は私達をその畫室に導いた。

カリエール――總ての物象をあの不思議な神祕の霞の中に融かしこんで、光つた影の裡から悒鬱な物の姿を暗く描き出す、深い抒情詩の畫家カリエールをベルナスコーニはすぐ私に思ひ起させた。彼は羅馬の風景をカリエールの心持で描き現はしてゐる。暗い地面の中央に、曇つた鏡のやうに置かれた沼、低い地平線を持つて、夕暮の色に浸つた渺茫たるカムパニア・ロマーナの曠野、谷の間に、物を思ひ入つた道者のやうに五つ六つ立つ孤獨の樹木、或は月の光の下に在るやうな午後の曇り日、それは見るに淋しく悲しい。然し自然は、かゝる作品によつて、人の耳には傳はりにくい細い清い歌を唄つてゐる。

アーサーの姉のマーギーを思ふ。あの痩せこけた小さな體軀、音のしない歩み、稀れに瞬きする大きな深い眼、彼女も亦カリエールの崇拜者だつた。私は主にカリエールに對する知識を彼女から得た。人の世の愛を味はふには餘りに纖細に、あまりに虛弱な彼女は、家の人達とも或る距離を造つて生きてゐた。彼女は又私にメターリンクを讀むことを敎へた。……彼女は今日も收穫が殆んど片付いて、何となくあたりのさびれた田園にあつて、暗いあの書齋兼帶の客間の隅の方で、黑いピアノに向つてベートーフェンのソナタでも彈いてゐるであらうか。そこの壁には彼女が描いた幾枚かの油繪が、カリエールの樣式で描かれてかゝつてゐたが。

何事も何物も芝居もどきになりたがる羅馬で、この靜かな歡びに迎へられた私は幸福だつた。照り續く晴天に倦きて、大好きな雨を千秋の思ひで待ち望んでゐた私は、これらの畫を見るのを殊に難有く思つた。

畫家の靜かな擧止、靜かな雅びた言葉使ひ、それを私達は畫から受け取つたなつかしい印象に取り添へてそこを辭した。壬生馬はベルナスコーニに大きな期待を許すやうに見えた。

西日が燒くやうに横射しに射してゐた。私達は物蔭を選んで、赤黃色く照り映えた家並みに眼をそばめながら歸路についた。

○

マーギーを思ひ出したにつけて、その弟なるアーサーとその家を訪れた時のことをこゝに書きとめておかうか。米國を羅馬の眞中に移すのは時と處とを得てゐないかも知れないが、米國にも亦アーサーの家のやうな家もあるのだ。

感謝祭の休暇は來た。アーサーは躊躇する私を否應なしにせき立てゝ、休暇の第一日にその弟なるトムとフラデルフヒヤ府から夜汽車に乘つた。客車はその祝祭日に際して家鄕に歸る勞働者、會社員、敎師、農夫、學生等で混雜を極めてゐて、私達はやうやく車隅に棒のやうに細くなつて立つ餘地を見出したゞけだつた。アーサーは忽ち人々の雜閙の間に見つけものでもしたやうに、大きな聲を擧げて客車の他の一隅に呼びかけた。他の一隅には矢張り座席の取れない二人の青年と一人の少女がゐて、「手を擧げて叫びながらアーサーに應じた。「あれは私の兄と甥姪だ。その連中も私の所に泊りがけで遊びに來るのだ」とアーサーは私に說明した。

乘客の少い夜汽車の淋しさは、死骸を納れた大きな寢棺のやうだけれども、その夜の客車は賑やかさそのもののやうだつた。玉蜀黍は剝皮の上穀倉に入れられ、パムプキンは紅く黃色く熟して霜の白い朝の畑に累々と横たはり、牧草の堆積は畜舍の傍に小山のやうに聳え立つだらう。秋は暮れ果てゝ四方の眺めこそさびれては行くけ

れども、農家の人達に都會人の知らないやうな餘裕が出來て、爐火の紅くならうとするのはこれからのことである。汽車の中の人達は冬籠りの調度のかれこれ、感謝祭になくてはかなはぬ七面鳥、ラスプ・ベリー、親しい間の贈答品などを買ひ入れたのを、赤、白、青の包紙に包み、いづれも小高く膝の上に載せて、識ると識らざるとに隔てなく、その眼は等しくみな好意に輝き、その輝いた眼はたつた一人そこに交つてゐる皮膚の黄色い一人の旅客を物珍らしさうに眺め、やがてそれが好意に輝いた。豐滿な收穫は人の心をさへ豐かにするのだ。

その中に通過する停車場の灯の光は一驛毎に、數も少く疎らになつて、汽車が段々都會から遠ざかつて行くのを旅人に思はせた。乘客も乘るものよりは降りるものゝ數が增し始めて、私達もやうやく腰をおろす餘地を見出すやうになつた。

七時三十分頃かと思ふ時間に汽車はとある小驛に停車した。その前からそは〳〵と外套を着たり荷物を取りおろしたりしてゐたアーサー等は、私を促がして汽車を降りた。私達の外には一人も降りる客がない程のそれは小驛だつた。停車場といつたら黑塗りにでもしたやうに暗み亙つて、反射鏡つきの二三箇のランプが物怯ぢするやうに光を放つてゐるばかりだつた。

プラットフォームには一群の黑い影がうごめいてゐたが、私達が車から降りると、それがこつちに近づいて來ると、思ふ間もなく、喜びの叫びがアーサー等よりともなく、その黑い影よりともなく、一度にどつと擧げられた。二つの群は私だけを殘して一つの群になつた……と、汽車は地ひゞきを打つて進行を起し、見る〳〵暗闇の中にその後尾車の赤い灯の光さへ沒してしまつた。私はその時全く都會から絕緣された私を見出した。もうそこには昨日まで導いて來てゐた私の生活はない。

アーサーは自分を迎へた一群の人々を私に紹介するのだつたけれども、その心は中有にでも懸つてゐるやうに、

その言葉が私に解らうが解るまいが、聊かも意に介する様子は見えなかつた。全くあの素直な田舍者はこの小事件（アーサーには小事件ではないのだが）でのぼせ上つてゐる。私も何となくその氣分に誘はれて、誰が誰だか分らないで、たゞ無暗に手あたり次第握手を取り交はした。停車場を出た所に列んでゐる小商店は、既に閉ぢられて、ブラインドの蔭から灯の光が細く漏れてゐた。さうした暗い往來を三四丁歩いて右に曲ると、路傍には木柵などが見られるやうになつて、やがて打ち開いた平野に通ずる街道に出た。幼い妹と覺しい少女達は喜び勇んで互に肩を抱き合ひながら牝鹿のやうに飛びはねながら、澄み切つた夜道を辿つて行く。

アーサーにすら忘られてしまつた私は、たゞ默つたまゝに皆のあとに跟いて歩いた。彼等の歡喜に醉つた私は、顧みられないことを物憂いとも思はなかつた。

十四五丁も歩いたか、行手の左に當つて小高い丘陵の斜面に孤立する家の窓の灯が赤々と見える所まで來ると、忽ち暗い物蔭から小犬が跳り出して來た。私達の群に驀地に駈けこんで來て、悲しさうにさへ聞こえる叫びを發しながら、先きに立つた人から一人々々の靴を嘗めて、やがて私の所までやつて來たが、いきなり五六歩飛び退いて、今までの心安げな風を失つて見えた。人々はそれを見ると又面白さうに笑つた。

「階段だからつまづかないやうに」

から私は暗い中で注意されて廣緣に昇ると、一番稚い少女は逸早く戸に近づいて把手を引いた。中からは琥珀を溶いたやうな軟かい光が棒縞をなして緣の上に投げ出された。人々はその夜の第一の賓客たるべき私を殘したまゝ我れ勝ちに灯を慕ふやうに家の內に這入りこんだが、たゞ一人私のゐるのを忘れないで、私を招じ入れてくれた少女があつた。私はその少女の心の暖かさをすぐ感じた。

可なり廣い、然し天井が低くて、家具や、樂器や、書棚でごたついてゐるその客間（私が書齋兼帶といつた）に

は、老いたる父母と長女とが私達を待ち構へてゐた。外部から見た所では孤獨に立つ一軒の田舍家に過ぎなかつたけれども、そこには輝くランプもあり、燃えさかるストーヴもあり、グラン・ピアノもあり、書物のぎつしりつまつた壁一面の書架もあり、日本に於ける農家の内部を想像に描いてゐた私には、それは思ひ設けない姿だつた。

長女は名をマーガレットといつて、この家に神祕的な色彩を添へる役目を持つやうに見える。五體の釣合ひは美しく整ひながら、この國で見ると畸形と思はれる小柄な出來で、表情の少しも現はれない蒼白い長目な顏に、漆黑の眸だけが異樣の光を放つてゐる。縱令人に見詰められても彼女の眼は容易に瞬がない。それはいつでも外部を見ないで自分の心でも諦視してゐるものゝやうに思へる。私達がこの部屋に這入つた時、黑い裝ひをして部屋の隅のマホガニーのピアノの傍にぢつと突つ立つてゐたので、アーサー達さへ姉のゐるのに氣が付かず、「ペギーは」と母に問うて、母が「あすこを御覽」といつたので、彼女は始めて靜かに手をさし伸べて、微笑を含みながら私達と默つたまゝ挨拶したのだつた。

この家の長男は彫刻家で、既に家を成してゐるので、感謝祭にも歸つては來なかつた。次男はウォリアムといつて機械工學科の學生だが、フラウ・ゾルゲのポールを思はせるやうな、淋しい陰鬱な顏付の沈默家だ。三男はわがアーサーである。四男はトーマス。アーサーと同校でこの家のハーキュリース。五男はジェームスといつて父の寵兒だ。中學校に通つてゐるのだが、容貌の美しさは遙かに他の兄達を凌駕し、假りに女裝したら一人の可憐な少女と見まがふだらう。空氣がしめるとちゞれ過ぎて困るといふ程な光のやうな黃色い髮を持つてゐる。若しトーマスがこの家のハーキュリースならばジェームスはアポロだ。ジェームスの下にはまだ二人の妹がある。姉はフランセスとて十三。妹はカロラインとて十。二人の相違は黑と白と程の相違である。妹は黃髮紅顏人形そのまゝの子だ。人を恐れ憚るといふことなく、擅まゝに笑ひ、泣き、命令し、驅役する。それに引きかへてフラン

セスなるファニーはどう見ても淋しい子だつた。しかもその淋しさは人爲的の境遇が强(し)ひて迫りつけた淋しさではなく、淋しい自然があるやうな淋しさだつた。眼の表情にも、微笑にも、語るにも語らざるにも、彼女には不思議に深味のある暈薫(ニューアンス)が浮び出た。だからファニーは語る時よりも聞いてゐる時に美しく、働く時よりも考へる時に美しく、考へる時よりも無想でゐる時が更に美しいやうな子だつた。けれどもその顔には何處といつて美しい所はない。黑いちゞれのない髮、際立(きはだ)つてくすんだ皮膚、大きな手と、長すぎる脚……それを見たアーサーの友達は「まるでジプシーだな」といつたさうだ。ウヰリアムを除く外は、總ての子供達が何等かの藝術的才能を持つてゐるにかゝはらず、ファニーはピアノも彈(ひ)けず、歌も唄はなかつた。恐ろしい不器用。しかも私は彼女から一番匂ひやかな藝術的感銘を受けずにはゐられなかつた。この家の扉が開かれた時、最後まで廣緣に殘つてゐて、人々から忘れられた私を招じ入れたのは實にこの淋しいファニーだつた。

やがて人々は私を正客の座に据ゑて食卓についた。客間と同樣古ぼけた、天井の低い部屋であつたが、壁といふ壁にはカリエールを思はせるやうな油繪が隙間(すきま)なくかゝつてゐた。左にはクロウエル夫人、右にはマーガレット。クロウエル氏は得意の絶頂にあるやうに見えた。食卓主(トースト・マスター)を承つたアーサーが、大きな丸燒きの七面鳥を自在にあつかひかねて、椅子から立ち上つて、割烹刀(かつぽうたう)をむづかしげに働かすと、クロウエル夫人は珈琲を按配(あんばい)しながら蜜のやうに微笑(ほゝゑ)んで世話を燒く。メリーといふアーサーの姪にあたる處女はファニーと睦じげに語り合ひ、ウヰリーは默つたまゝ。パンを喰ひ、マーガレットは伏目に膝の上の猫を撫で、ジョーとジムは卓を隔てゝゐるので、遠くから大きな聲と手眞似とで、何處かで行はれたフートボールの噂に花を咲かしてゐる。カロラインは彼方に一語此方に一語、手は皿や匙を配付するに忙しい。私は默つて微笑してゐた。一種の醉ひを覺えたのだ。

食事が果てゝから私達は再び客間に退(しりぞ)き、少女達は食ひ荒された卓の上のものを臺所に運んだ。ジョーとジム

は卓上の話題がなほ盡きぬと見え、客間に來てまでも喧嘩腰で勝負の事を云ひ爭つた。クロウエル氏はうるさゝうに「ジョー、ジム、こゝに來い。フートボールの話なんぞは呪はれるがいゝ。いやなものが流行り出したものだ。全く國辱だ。そんな話をすると人間までいやしくなるぞ」とむづかしい顏をしてたしなめた。ジムは「又パヽのおはこが始まつた」とから〳〵と笑つて取り合はなかつたが、それでもその話はそのまゝやめてしまつた。而してそれからはこの家の珍客なる私が不十分な英語で、遙かに海を隔てた異國の物語を、熱心な聽手に語り出るべき役目に廻された。辯護士を業としてゐたクロウエル氏は、學生の時分に、フヒラデルフヒヤで大刀をたばさんだ日本最初の使節を見た思ひ出などををかしく物語つた。

その中に田舍の夜は更けた。ファニーやカロラインの就寢の時間は疾に過ぎてゐた。それでも寢室に行かうとはしないのを、クロウエル夫人が强ひて促がして、二人を自分の膝の所にひざまづかせて默禱を與へてやつて、二階に追ひ立てた。私達もそれから間もなく挨拶を交はして銘々寢室に退くことになつた。

私はアーサー、トム、ジムの三人と一つの部屋を占領することになつた。「君の寢臺は有名な叫鳴床といふのだ。驚いてはいけないよ」とアーサーがいつた。成程横になつて見ると、身動きをする度每に、古さの爲めに木の合せ目が鶯鳴きをした。

故屋の枕は軟かいと見える。靑年達はすぐに鼾になつた。私だけは妙に眼が冴えてゐた。秋の蟲も啼くべき力を失つたと見えて、窓の外にはこそとの音もしない。

知らず〳〵私も眼が細まつた。その時忽然として夜半と覺しい寂寞を破つて階下から細々とピアノの音が聞こえて來た。それは聞き覺えのあるショパンの小夜曲だつた。かゝる田舍の果てゞ、かゝる深夜に、こんな纎麗な樂音を聞かうとは誰が思ひかけようぞ。私は羽枕に顏を埋めながら一つ〳〵の音に喰ひ入るやうにその曲の終るま

で聞き惚れた。

その翌朝になつて、昨夜のピアニストがマーガレットであること、マーガレットに取つては晝と夜との區別が全くないこと、食堂の油繪の總ても彼女の製作なることを語り聞かせられた。それから以來マーガレットは、夜の世界から生れ出て來た小柄な妖女であるやうに私の眼に映りはじめた。

○

この日も晴れた。私達はまたS中佐の案內を受けて、ティボリに秋の一日を過すことになつた。

私達はポルタ・ディ・サン・ロレンツォの門の外から輕便鐵道の便を借りた。多くの外國からの遊覽客を乘せた列車は、程なく羅馬の市街を後にしてカムパニヤの野の方に出て行つた。羅馬といふ都は何といふ淋しい曠野と隣り合せに住んでゐるのだらう。ベデカー案內記を見ると、カムパニヤを遊覽する旅客は必ず案內者を伴はねばならぬといふこと、夕暮れが催したら、マラリヤの毒蚊からのがれる爲めにも、追剝ぎの難にかゝらない爲めにも、逸早く歸路につくがいゝといふことなどが、丸で昔の步旅でもする時のやうに注意してある。

暑氣に弱らせられて、一度は黃色く枯れしぼんだ草葉が、秋と共に二度芽をふいて綠の色を囘復したその間に、蛇のやうにうねくと造られた車道は、天氣續きの爲めに乾き上つて、砥の粉のやうな砂を濛々と揚げた。汽車に追ひ越されて行く荷車の類は、眞白に砂塵を被つて、車臺に手綱を握る百姓達の眉と眼とは不愉快さうにひそんでゐる。私達はさういふ車をいくつもくく追ひ越した。段々路傍の家屋は疎らになつて、野はその淋しい眺めを廣く旅客の眼の前に展開する。

水平な一線よりも更に物淋しくかすかな鈍い高低、殆んど立木を見ない草のつらなり、低い地平線、高い空、そ

れを秋の日が煙るまで隈なく照らしてゐた。天心から落ちて來る日の光が、あまりにあらはで容赦のない爲めに、言ひやうのない荒涼たる感じを眺める人に與へた。太陽の悒鬱……この深刻な感じは人に乾いた悲しみを與へる。短からぬ道程の間に野川はたゞ一つ、バアニ・デルラ・アックエ・アルブレの近くで見たばかりだつた。この溫泉場に來ると、汽車の窓から硫黃の匂ひも漂つて來た。日の光と、硫黃の匂ひと、土埃の色とは、破壞した地面といふ感じを殘りなく人々に印象した。

私達はヴヰルラ・アドリアノを見るために途中で汽車を乘り捨てた。二人三人づゝ客を乘せた馬車が私達の前後にティボリの方に向つて走つて行く。その馬車と馬車との距離が定かでない程舞ひ上る黃塵……その塵をうらうらと照らしつける白い日の光。

六十五町步にあまるハドリアン大帝の邸苑の遺址を私達はたゞ呆れて步き廻つた。征旅に一生のほゞ全部を費やしたこの大帝が、當時の世界の大建築の總てを摸倣して、この廣い地域の中に大厦高樓の數々を建て列ねたと傳へられてゐるが、その當時の姿は面影もなく、今は累々たる大理石の堆積と、シプレスの木立と橄欖の林と、花の小さくなつた秋草の茂みとに變つてしまつてゐる。風が遙かな靑い連山を流れて、私達を古い階段の上に吹いた。銀綠色の橄欖の葉はきら〳〵と日に輝きながら裏返つて、その葉蔭には、エシオピヤ人の膚の色と澤とを以て熟した卵形の實が、地に落ちたまゝ拾ふ人もなく散らばつてゐた。壬生馬に敎へられて、私はその實を拾つて前齒で嚙んだ。澁い苦い味が舌に痛く傳つた。けれどもその味のよさと云つたらなかつた。二人は步きながらも、語りながらも、時々その實の傷口から秋そのものを吸つた。

何といふ靜かさ、心安さだらう。私達は人を忘れ歷史を忘れて、そこには埃を立てない秋の日と風とに身をさらしながら、穩やかな暖かさに浸り切つて、放心して自然の懷に抱かれてしまつた。餘りに大きな悲しみは難有

くも人を忘我の境に連れて行く。

○

ヴヰルラ・アドリアノから馬車を傭つて、彼達はティボリに向つた。サビネ連山の一角に在るこの山村は、人口一萬ばかり、瀧と別業の址、美しい眺望の丘陵として知られてゐる。三十分程馬車に搖られてゆるやかな坂路を登ると村に來た。スビヤコから流れて來る河が山にせかれて、大きな屈曲を描いて山峽をたぎり落ちる、そのたぎり落ちた水の大量が造り出す大瀧を挾んで村は立ち連なつてゐるのだ。エトラスカ風な圓堂の外廓に美しいコリント式の柱列を置いたテムピオ・デルラ・シビラ といふ古い神殿の在る崖の中腹に建てられた飲食をさせる店に馬車をつけさせて休息した。秋の逍遙に快く疲れた私達の腹はまた空いてゐた。

崖の上を見るとシビラの神殿の柱列が半ば折れたまゝ、それでも世に美しい圓やかな姿をして白々と裂けた巖の上に立つてゐる。崖の下を見ると、恐ろしい程深く自然によつて掘り下げられた斷層の底の方に、鴨の羽色の水が澱みなく流れ動いて、峽の間を山禽が頻りに飛びかはしてゐる。所柄それが靈鳥の類であるかのやうに思はれる。瀧は垂直な懸崖を白布を懸けた如くたぎり落ちて、瀧口の石垣の所には、村の女房たちが日なたぼつこをしながら洗濯物に餘念がないらしく見えた。瀧の白に對して幾十人となく列んだ女達の衣服や洗濯物の色さま〴〵。

S中佐も壬生馬も空腹へそゝぎ入れた葡萄酒で快く陶醉した。自然の恩惠を人一倍に享樂し、悲痛な人生の中に生きながら、超然として怡樂の一境地を拓くのは、美術家の神から惠まれた權能だと壬生馬は傲語した。自然に近寄られると、いつまでも彼は本當に勇ましくなつた。

私達はこゝで又偶然にかの英國の老夫人に遇つた。羅馬で遇つた時彼女は私達の父の親友なるS氏のことを親

しげに語るのを聞いた。この老夫人はこゝでも奇遇を不思議がりながら又S氏の噂話を始めた。S氏の爲めに自分の家の一室を貸したやうなことも云つてゐた。S氏の寫眞を持つてゐるといつた。瀟洒な若い外交官としてロンドンにゐた東洋の一青年は、この老夫人に深い印象を與へたものゝ如く私達には想像された。彼女は今は英國にも住むべき家はない身だといふ。伊太利に來て單獨の生活を送る外國の婦人の中には、一生をすごすだけの財産を有して、人に嫁するに足らぬ容貌を持ち合はせたものが多いやうだ。この老夫人もかゝる種類の人の一人のやうに見えた。いかにも齒切れのいゝ物云ひをして、少しも取りつくろつた所のないらしく見える人ではあつたけれども、何處か人を近づけさせないひがみといふものが感ぜられるのを私は氣持惡く思つた。味ふべきものを味はゝずに老いた……その悔いの心が總ての物腰に見えるのが憐れでもあり、薄氣味惡くもあつた。

○

圓く谷を車行して、瀧と、谿流と、村の風色を眺めてから、ヴヰルラ・デスタの庭園を見物した。そこは噴泉とシプレスとの舞臺だ。日は既にやゝ斜めになつて、丈け高いシプレスの重い影は、紅い野薔薇の群や、イボリテの茂みなどに落ち敷いてゐた。ヴヰルラは復興期好みの大きな館で、古味の十分に乘つた大庭園を一眼に見渡し得る高臺に建てられてあつた。部屋毎に大きな壁畫が物々しく揭げられてあるが、その徒らに尨大な感じは空しい。

夕暮れのカムパニヤには處々に遠く近く羊の群がゐた。草が煙つた。六時には私達は羅馬に着いてゐた。點燈の頃である。

○

羅馬に着いてから十四日目でやうやく雨が來た。私の喜びは限りない。

三時半に私達は少しばかり裝ひを正してロッシ伯を訪れた。伯は私達の爲めに法王謁見の勞を取らうと云つてくれたのだ。

新しい伊太利帝國に新舊思想の混亂があるのは誰にでも考へられることだ。一方にはパラッオ・レアーレが巍然として聳えてゐる。一方にはサン・ピエトロ寺院が居然として立つてゐる。その間の溝は容易に埋め難い。聖羅馬帝國は伊太利帝政統一の運動の爲めに壓倒されて、法王は伊太利帝國の捕虜として、皇位に就任すると共に、ヴァティカン宮殿を一歩たりとも出ることが出來ないのだ。それでも西班牙の如きは今でも伊太利帝國と羅馬法王廳とに各〻一人づゝの大使を派遣してゐる。王室と法王廳との暗默の確執は傍觀者の容易に窺ひ知り得る所でない。古への榮華の夢に耽る舊華族と、今代の權勢を誇らしげに享受しつゝある新華族との對立も目ざましい。法王廳に伺候して、そこにのみ見出さるゝ傳統的の御覺えをせめてもの心やりとするものは舊華族だ。ロッシ伯もさうした人々の一人で、嘗て日本の公使館にゐた關係から壬生馬とも昵近となり、私が來たのを機會に、私達に容易に得がたい參廳を取り計らはうといふのだつた。

ヴァティカン宮殿の入口には、瑞西から募集された守衞兵が、ミケランジェロによつて考案され、畫のやうに古風な服裝をして、長槍を持つて人の出入を警めてゐた。折から役僧には差支へがあつてにはかに面會が出來なかつたので、二時間程の間、私達は宮中の廻廊、カーデナルの會議室、法王のアパルトメントにまで案内されて見物した。會議室は、カーデナル色ともいふべき海老茶で眼もさめるばかりに飾られてゐた――壁も、椅子も、窓

かけも、天井も、法王百年の後、七十餘人のカーデナルが集まつて後嗣の選擧をするのはこの大廣間でだらうか。法王の諸室の重々しさと靜けさは、私達の肩を壓するばかりだ。私達はまだ、かゝる壯麗な裝飾によつて重くせられた空氣を感じたことがなかつた。ナポレオン第一世が、物を物ともしない優勝者の意氣を以て、このアパルトメントの一つに、法王に會見を申入れた時、ふと見ると法王が忽然として彼の前に立つてゐたので、さすがのナポレオンも機先を制せられて驚愕の眼を見張つたと傳へられるのもこゝだなと思はせられる。代々の法王の極端な聖績と亂行、それはさながら是等の室の壁にも床にも滲み込んで見える。かゝる建築物は物質といふものゝみで立つてゐるやうには思へない。生きものゝ感じがする。一種の底氣味惡さが伴つてゐる。

私達は窓によつて町の方を眺めた。トラス・テヴェレの哀れな貧民區の町並みは、蠢々としてどす黑い塵埃の堆積のやうに見える。その家と家との間の灰色の小路を雨に濡れながら行き來する人々の黑點。その眺めを蔽うて、折からの夕空はどんよりと黃に煙つて、厚い硝子窓の爲めに音は聞こえないが、電光が小蛇のやうにきら〳〵よ空間に隱見してゐる。私は嘗てこれ程奇怪な人爲と自然との混淆を見たことがなかつた。

○

六時頃、燈火が海老茶色を照らす一室の中で、モンシニョール・ビットリに遇つた。齡はさまで更けてゐるとは見えないが、やがてはカーデナルの候補にも立たうといふ重要な地位を占める役僧だと伯爵は私達にそつと告げ知らせた。

モンシニョール・ビットリは、私達を輕蔑もせず、尊敬もせぬ丁度適當と思ふらしい慇懃な態度で、私達に善美を盡した椅子を與へた。彼は人にその人の位置と自分の位置とを十分に呑み込ませる技巧を十分に會得してゐる人

の一人であつた。而して滿面に笑顏を示しながら、壬生馬には伊太利語で、私には又精練された英語で、應對しながら、時々氷のやうな冷たい鋭い眼のさぐりを入れた。法王猊下は遠來の賓客を好んで引見されるだらう。但しその時機の確定は暫く私まで保留されたいといふやうなことを、いかにも納得が行くやうに十分に華麗な、同時に明晰な言葉遣ひを以て語つた。私達の名刺や、謁見に關する書類が、紐育市あたりで、取引所の帳場の上にでも見出されさうな最新式の綴錠で綴ぢ上げられるのを私は珍らしいものに眺めやつた。

○

その歸路、私達はロッシ伯の誘ひによつて、私達のことを法王廳に紹介してくれたモンシニョール・ビットリをピヤッサ・ディイ・ジエスのパラッオ・センシに訪れた。ビヤトリチエ・センシの悲劇をシェレーの劇詩によつて知つた私は、而してあの薄倖な悲劇の美しい女主人公ビヤトリチエとギド・レニの肖像畫によつて親しんだ私は、この建築物に深い傳奇的な心を動かした。文藝復興期といふ時代は私達の時代をさう遠く離れてゐる時代ではない。然しそこに釀された人の心の働きは、私達から見ると奇怪で且つ不可解なことが多い。父子、兄妹などゝいふ最も近い血脈の人々の間に行はれた血緣以上の執着、その深さ、鋭さ、捨鉢さ。それはどう考へて見たらばいゝのだらう。凡そ一つの革命にして、文藝復興期のそれほど外部的な破壞を伴はなかつた革命はなかつたと云つていゝかも知れない。それは總てが殆んど內部的に行はれた。心靈の問題が思想の問題に變つたのだ。この內部的の混亂が端なくあゝした倫常の錯誤を來たしたのだらうか。もつと深い根柢からあの惡魔的な傾向は湧き出たのだらうか。それにつけて思ひ起すのは、佛蘭西に全盛を極めた形式的な古典主義の思潮が十八世紀末の浪漫主義の思潮によつて置きかへられた當初にあつては、文學的作品の中に又文藝復興期に現はれたと同一の題材が頻りに取扱はれ

たことだ。古典主義から浪漫主義への革命も亦比較的內部的な革命の一つだつた。その共通な狀態が共通な結果を生んだのか。それともそれは單に暗合に過ぎないのか。

ビットリといふ僧侶は、貴族の出と思はしい品格の備はつた、背丈けの高い若い僧だつた。羅馬に來て、古羅馬人の面影を容易に尋ねあてかねてゐた私は、この人の姿を見て少しく飽くことが出來た。

○

今日も一日雨が降りくらした。

風は東にめぐつてシロッコは吹きやんだらしい。夕方になると冬時雨(しぐれ)ともいひたい程氣溫が低下して、物淋しい街路の樣がやゝ心細く見える。

見物が出來ないので壬生馬は朝から畫布(カンバス)に向つた。私はラスキンの「美術講話」を繙(ひもと)いた。「美術がその發達の高潮に赴く時には、民衆の倫理的傾向も美術と同方向に向上し高進してゐる時で、この併行的傾向が極度に達し、互ひの間にやゝ軒輊(けんち)するところが出來て、各〻が互ひから各〻自分を辯護し始めるが最後、美術の衰運が始まる」といふ言葉なぞは特に私の心に殘つた。

隣室に住む新聞記者だといふ人が、主婦と何か云ひ爭つた結果とかで、この雨の中を移轉し始めた。書物を讀みながら聞くともなしに聞いてゐると、怒氣を含んだ聲で口小言(くちこごと)を云ひながら、荷物をからげてゐるのが何となく私の心を牽いた。窓の外には寒い雨が依然としてしと〳〵と降つてゐる。私はラスキンを膝の上に置いた、而して引越し先きの家に、その人の荷物が雨に濡れそぼれて到着する樣子などを想像すると、幼い折に石板に徒ら(いたづら)書きをした時のやう……



Ancient relief
(Vatican Museum)

Oct. 4, '06

○

私は羅馬の滯在中二度も三度もヴァティカン宮殿を見物した。そこにはシスティーン・チャペルもある。ラオコーンもある。アポロ・ディ・ベルヴェデーレもある。圖書館にはダンテの聖劇の原稿もある。ラファエルのスタンツアには、彼の畢世の大作を集めたいくつもの大壁畫もある。然し私はこれらをどう書きあらはしていゝか判らない。私のやうなものが如何に綿密に觀察し批評しても、それは畢竟そこに恒久の生命を託する作品の存在を左右することの出來ないのを知る時、私の生命力がかゝる宏大もない壁の上を全部撫で廻してはゐないのを知る時、私はそれらのものに對して表面的な理智に捕はれた言說以外に何を云ひ得よう。そこには何といつても動かすことの出來ない仕事が嚴存してゐる。而して私は一體何を爲し果したか。物を云ふなら私も私の仕事をしてからのことだ。沈默を守らう。それが私のなし得る唯一の態度であらねばならぬ。思へば同じ人生を享けてこの世に生れ出て來てゐながら、私は遠い昔の人達が歩み去つたその足跡を踏んで歩くことすら出來ないのだ。口惜しい情けないことではないか。

○

朝ヴォルラ・ボルゲーゼ美術館に行つて見たが、修繕中で閉館してゐるために、ラファエルの「復活」も、チシアンの「聖愛と俗愛」も共に見ることが出來なかつた。で仕方なく、公園に改造されたこの貴族の大園苑を私達は所きらはず歩き廻つた。而して一歩毎に展開されて行く眺めの數々を飽くことなく鑑賞した。ボルゲーゼ博物館の整肅な二つの角塔を持つた建物の形もいゝ。或る廣場には美しい異教の殿堂が立つてゐる。或る木蔭には葛蘿

に被はれた淋しい廢墟もある。或る時には私達は木立を拔けて、思ひもかけない古い城壁の下に出た。或る時はゆるい坂を下つて行くと、澄み切つた水をたゝへた池のほとりにも來た。去年の落葉が吹きよせられて、そのままに草の生ひ茂つた淋しい一隅もあつた。近代的な設備の行きとゞいた廣い芝生の運動場もあつた。私は土地の空間が樹木や建物によつていかによく整理され得るものであるかを知ることが出來た。日本の上野公園を見るがいゝ。成程あすこにも樹木の間に所々可なり廣い空間が造られてある。然しその空間には嘗て建築物が建てられてゐたのだ。而して今はそれが無くなつたのだ。たゞそれだけの空間だ。だからそれは建築物が建てらるべき空間で、空間として殘さるべき空間ではないのだ。あすこによき空間を造るためには、よき造園師によつて新しく空間が改造されねばならぬ。然しながら日本人は公園なるものを設けておきながら、さういふことには無頓着なやうに見える。公園と無意味な空地とを同樣のものと考へてゐるのではないかとさへ思はれる。公園を設けるのなら公園を設けるがいゝのではないか。

　坊主松の美しい木立で縁取(ふちど)られた廣い芝生の上に、上衣を脫いで白いシャツの腕まくりをした青年達が、タムブレリーノを遊んでゐた。彈力の強さうな小さな白い球が、西班牙の踊子が持つタムブレロのやうな皮張りの圓い羽子板によつて打ち上げられると、秋の青空に眼もはるかに高く美しい弧を描いて、相手の羽子板の方に落ちて行く。靜かにそれを待ちかまへてゐる相手は、やがて上體をしなやかにふり曲げて、伸ばし切つた手をそのままに小氣味よく球を打ち上げる。ポーンと乾いた快い音が木立に響いて、白い球はまた青空高く彈丸のやうに飛ぶ。小春日のやうな靜かさの中を、青年のしなやかな體軀の美しい動作と、快い噪(はしや)いだ音と、球の描くすなほな弧線とが、復(また)なく優美な氣高い印象を創(つく)り出す。私達は思はず足を停(と)めて飽くことなくそれに眺め入つた。芝生のこゝかしこに、私達と同じ心でそれを見守つてゐるらしい美裝の女や少年少女の姿までが、それは一つの畫だ

つた。

○

或る夕方、私達はマッツォニといふ青年に案内されて、羅馬の郊外、タイバー河の川端にあるアックワ・ニ・チェトーザを見に行つた。

私は何處でも都會と田園とのつなぎ目が大好きだ。そこには都會の醇化(リファイメント)と田園の野趣とが趣きある交錯をなしてゐる。その感じは固(もと)より小さい。然しそこにはいつでも、自然の人間に對する親しみと、人間の自然に對する憧(あこが)れとが、涙ぐましいまでに感ぜられる。一體人と自然とは大抵の場合相納(い)れがたい仇敵であるのに、こゝでは自然の方からともなく、人の方からともなく、暖かい手を握手のために延ばし合つてゐる。その姿が私の心をなごやかにするのだ。

ヴォルラ・ボルゲーゼを圍む古城壁を東の方について廻ると、やがて私達は私の好きな風景の中に這入りこんで行つた。青い木立の背景の中に横顔を見せて、眞紅の上衣を着たフェダルマといふ美しい女の肖像畫を壬生馬は携へてゐた。それはこの郊外に近く住んでゐる人の彼の女友の肖像なのだ。やがて壬生馬はそのカンバスをとゞけて來るといつて、灌木の木立で圍まれた一軒の家の方に走つて行つた。マッツォニと私とが、言葉が通じないまゝに互ひに默つて四五丁を歩いてゐる中に壬生馬は早くも私達に追ひついて來た。もう私達が羅馬を去る日は近づいてゐるのだ。私に取つてはこの都會は假りの宿りに過ぎないけれども、二年近くを住み慣れた壬生馬に取つてはさすがに思ひ出の殘る所となつてゐる。發(た)つ前に片付けておかねばならぬ用事が數多くあるのを、彼は殘り惜しく一つ〳〵片付けて行かねばならなかつた。

私達は畑の中に走る道に出たり、木立の多い幾軒かの家の間を拔けたり、なだらかな坂を登つて又それを降つたり、風もなく靜かに暮れて行く殘陽の中をのどかに物語りながら歩いて行つた。少し喧し過ぎるけれども、かういふ逍遙にはマッツォニはいゝ役目をつとめた。この青年の見せる快活さは言葉を通り越して私にも感ぜられた。やがて私達はタイバー河畔に出た。それは羅馬の中を流れてゐるこの河とは全く趣きを違へてゐた。頑丈な堤防にせかれて、始終黄色く薄濁つて、のろ〳〵と流れて行くその水とは思はれなかつた。なだらかな丘陵の間をゆるく曲りくねつて靜かに澱み勝ちに流れる水の心持は靜かだ。アックワ・アチェトーザ……酸の水といふのは炭酸泉なのだらう。河の畔に古い石でたゝんだ水槽があつて、それから水晶のやうに淸い水が管を傳つて量多く河の中へと流れ落ちてゐた。

　私達がそこに行きついた時には、短い日脚が存分に傾いて、一日の勞働が終つた頃だつたので、近所の家々の女房や娘たちが水瓶を持つて水汲みに集まつて來てゐた。野良から歸つて來た若い男達も胸をはだけて汗を拭ひながら、小さなコップから飲んだりしてゐた。互ひに深い見知り越しの間のことなので、彼等は素朴な物腰で輕く挨拶をしたり靜かに話し合つたりしてゐた。音もなく流れて行く河水、平和な無邪氣な笑ひと話聲。芝居のしだしのやうな事々しい感情の見せびらかしは少しも見やられないのが快かつた。その人々の群の中には戀もあるだらう、嫉妬もあるのだらう、憎しみもあるのだらう。然しながらそれらが堰かれ溢れて人の眼に際立つて現はれるやうなことはない。謂はゞそれらの感情も日常の道を進んでゐるのだ。輕い夕燒けを殘して沈み果てた太陽、ひきしまるやうな夕暮の膚寒、何處からともなくさまよつて來て木立にからみつく香のある煙、厨からのかすかな物音、何といふ安靜な平和だらう。私達も村人と共に水口から輕い酸味を持つた水を掬つて飲んだ。一里近い散歩の後の喉は快く潤つた。

歸路についた時は夜になつてゐた。おそい月が昇つた。マッツォーニは折からの滿足で、伊太利人らしい昂奮をしてゐた。而して古城壁のあたりまで歸りついた時には、自分の昂奮をもてあますやうに、淡い月の光の下で、踊りながら聲を限りに歌つた。靜かな夜の空氣に彼の澄んだいゝ聲は高く響いた。犬が吠えつかうが、稀れに遇ふ通行人が笑はうが彼は一切頓着しなかつた。月の光の下に眞黑に古り切つた城門を這入るともうそこは羅馬の町だ。

私達は、感情を僞ることの出來ないマッツォーニに少しの嫉しさを感じながら別れを告げた。彼はなほ醉つた者のやうな足どりで私達から遠ざかつて行つた。

〇

古へから道路の女王と呼ばれ、今もその名を辱しめないヴィヤ・アッピヤの道沿ひの逍遙の一日も私には忘れがたい記憶の一つであるだらう。

それもよく晴れ亙つた秋の一日だつた。コンスタンティンの大凱旋門――それは羅馬帝國藝術の末流を哀れにも物語る建築の一つである。その門の此處彼處の裝飾に用ひられた石像は、諸方から掠奪的に集められた石像をそのまゝ按配してあるのだ――を經て行くと、モンテ・パラティノを右に見て、ヴィヤ・ディ・サン・グレゴリオといふ美しい並木道が人をヴィヤ・アッピヤの入口に導くであらう。私達は織るやうな通行人の群に紛れて、赤い表紙のベデカー案内記を手にしながら、長閑な歩みを西へ〳〵と向けて行つた。

町を離れて幾程もなく、左手には手廣い苗圃が見えて、道側の石壁には葡萄の蔓が蘿のやうに生ひ茂つて秋に染まつてゐた。もう私達は野の眺めの中にゐた。コンスタンティンの大凱旋門を出てから一哩も來ないのに、道



ビヤ・アッピヤの夕暮

路のすぐ右手にカルカルラの大浴場址が小山のやうに聳えてゐるのを見た。

○

石階にも石疊にも草は思ひのまゝに茂つてゐた。モザイクで美しく飾られてあつた石疊には、セメントの粘力が無くなつて、大理石の小さな碎片が小砂利のやうにばら／＼になつてゐる所もあつた。千六百の大理石造の浴槽を有すると稱せられるのでその規模の大きさは思ひやられるだらう。屋根は殘らず崩れ落ちてしまつたけれども、厚い大きな鉛管を含む漆喰の壁は、巍々として見る人を壓して立つてゐる。熱湯槽と蒸氣風呂とを兼ねたカルダリウムの圓堂から、假りに造つた階段を登つて壁の上に立つと、全浴場の鳥瞰圖は痛ましい廢墟となつて眺めやられる。その壁端に立つて見ると、私達はまるで峭崖に臨んだやうな眩暈を感ずる。浴場の後庭には、宏大もない衞舍と厩舍との址が、大きな傷口の乾痂のやうに横たはつてゐる。

かゝる廢址を見ると私達の心は奇妙にも寛大になる。人はこれを見るにつけて羅馬帝政末期の不倫と、壓制と、豪奢の活畫圖を見るやうに想ひ起すべき筈だ。「クオ・ヴァディス」に描かれたやうな血なまぐさい非人間的な幾多の悲劇が、私達の心を痛くすべき筈だ。然し氣候の故であつたか、天氣の故であつたか、それともその場合の私の心柄であつたか、兎に角私はそこに立つて、誰を責め、誰を憤るべき心も起らなかつた。カルカルラがその兄弟のゲッタを母のヂュリアの胸にあるまゝ刺し殺したことも、ゲッタに少しでも同情あるらしく見えるものは、王女でも賢人でも殺戮してその數實に二萬人の多きに及んだことも、アレキサンドリアに於ける大虐殺の慘らしさも、私には唯何の意味もなく思はれた。唯そこには大きな自然の前に小さな興廢の跡があるばかりだつた。靜かな物淋しい心を以て私は秋の日の下に立つた。向うに見える石疊の上を、番人がもう黑い服になつて、兩手を背中で

握り合せながら、俯向いて一つ所を行つたり來たりしてゐた。私はその豆のやうに小さく見える一人の人間の姿を何か不思議なものゝやうに眺めやつた。

〇

サン・セバスティヤノの門を出ると ヴィヤ・アッピヤはもう私達を誠の羅馬の郊外に導いて行く。古墳の夥しいアルモの小流を渡つて顧ると、羅馬の市街は一段高い丘の上に眺められて、こゝは既にカムパニヤ・ロマーナの一部分だ。古羅馬人が造つた大水道の殘址や、古い神殿の壞れたのなどが見渡されて、野は路傍の樹林の爲めに時時眼界から遮られる。

ドミネ・クオ・ヴァディス……ペテロが磔刑を遁れようと羅馬を拔け出して、夜に紛れてこの道を急いだ時、不圖基督に出遇つて「師よ何處に」と問ひ尋ねると「磔刑に遭ふ爲めに羅馬へ」と答へて消え失せたので、ペテロは卽座に悔悟してもと來た道に引き返した。その地點を記念して建てた寺だと傳へられる。この傳說は、何事につけてもいかめしい羅馬といふものを可憐に見せるが、寺はさして注意すべきものではない。その寶物なる基督の足跡を印したといふ石、それも私達は見る好奇心を持つてゐなかつた。

私達は空腹を感じた。而して一軒の百姓家に這入つた。そこは飮食店をも兼ねてゐたからだ。厚い漆喰で出來た頑丈なその家は、古くこそあれ一種の樣式を持つてゐて、二階の戸口から屋根下を壁に添うて斜めに設けた階段などの形は古雅だつた。私達は、廣庭に土を盛り上げて、その上にしつらへた四阿に行つて稍ゝ疲れた腰をおろした。ズボンの裾は眞白に砂埃でよごれてゐた。裾口の折り返した所を延ばして見ると、小石だの、細かい土だの、小さな蟲などがこぼれ落ちた。

四阿の四方には葛蘿が厚く絡つてゐた。而して蜜蜂や、蠅や、小さな甲蟲などが、睡たげな羽音をたてゝ飛び廻つてゐた。晝はやゝ過ぎてゐたらう。こゝまでは羅馬のドンも寺々の鐘も聞こえて來ない。埃の立つ往來も、シプレスの蔭に隱されてゐた。靜かだつた。

そこにこの家の娘らしい十八九の丈夫さうな、背丈けの高い人が、古い銀色の盆に食物を載せて運んで來た。パンの幾片と、野蜜と、新しい牛乳と、マカロニ。私達よりも先きに蜜蜂と蠅とが盆のまはりに集まつた。

その娘を私は美しいと思つた。彼女はこのあたりに嘗て姿を見せたことがないであらう二人の東洋人を、妙な好奇の眼でじろ〳〵と眺めやることもなく、深い所に情味を持つたやうな落ち付いた物腰で、默つて現はれて默つて行つてしまつた。それは羅馬の美しい彫刻を見るやうな印象を私に與へた。

壬生馬がカタコムベはこの邊かとその家の主人に聞くと、この邊にはカタコムベは何處にでもある。自分の畑の中にも、ついこの間小さなのを發掘した。見たければ案內しようかと云つた。私達はその勸めを避けてその家を出た。

實際羅馬の周圍には蜂の巢のやうに地下が掘られてあるといはれる。始めは基督敎徒が市民の眼を偷む爲めに、又彼等の墓を人知れず造るために、設けたのだらうけれども、後年には基督敎徒のみならず異敎徒も地下に墓塋を營むならはしになつたらしい。私達は、食事をした家から程もない所にあるサン・カリクスタスのカタコムベを訪れた。案內僧の後に跟いて、各〻手に一臺づゝの蠟燭たてを持つて、音もなく色もない地下室を長い間めぐり步いた。それは基督敎徒の堅忍不拔な信仰心を讃嘆させるよりも、殘虐不道な迫害者の心……從つて人間の心の根に植ゑつけられてゐる厭はしい醜い根性を見せつけられるやうな遺蹟だつた。私達は闇黑が齎らす不愉快な感じから息苦しさをさへ覺えた。而して濕氣と闇黑との永い彷徨から拔け出して、やゝ西に傾いた天日を仰ぎ見た

時には、眞に救ひ出されたやうな心持がした。

カタコムベに來て基督教徒の峻烈な信仰力と鋭い良心への從順とを觀たものは、又カステロ・サンタンジェロの牢獄とカムポ・ディ・フォオーレの廣場とを忘れてはならぬ。基督教徒が弱者として社會に存在してゐた時は、彼等は實に小羊よりも柔和な被迫害者であつた。然し一朝彼等が强者として社會の支配權を握るに至つた時には、世の所謂暴王と何等選ぶ所のない專制者だつたのだ。カムポ・ディ・フォオーレ……そこには今こそ平和な花の市場が立つのだけれども、法王廳が榮華を極めた頃には、そこで每日のやうに異端者が燒き殺されたのだ。現代に於て私達が心からの尊敬を捧げずにはゐられない良心の奉仕者なる雄々しい人道の戰士が屠られたのだ。又あのカステロ・サンタンジェロの牢獄……厚い冷たい石壁に圍まれて晝の光も螢火程さへ漏れぬ狹い監禁室、その壁の一隅に開かれた孔、何處からとも知らず投げ下される少許の食物が轉げ出して來る孔、そこに幾多の善人は、たゞ彼等が少しく基督教のドグマに背いたからといふ科で、情け容赦もなく投げこまれたのだ。舊教徒がかゝることをしたばかりではない。新教徒もカルヴヰニスト以來、基督の名によつて如何なる迫害を無辜の善人に見舞つたか……それは歷史が明かに知つてゐる事實だ。基督教徒は、强者の位置にさへおかれゝば何時でも再びかゝる專橫を振舞ふであらう。何故ならば彼等も亦主義の徒であるからである。主義の徒としては力のある限りその主義を他人に打ち込むのが何よりも大事なことだ。彼等の迫害はつまり主義への忠實を意味する。この立場から見ると佛國革命の際、ダントン、ロベスピールが行つたことに對しても、來るべき生產革命に於て社會主義者がそれ以外の人に對して振舞ふであらう迫害に對しても、基督教徒は一言の異議をも挾むべき餘地はあり得ない筈だ。それに異議を挾むことの出來るのは、基督教徒の中（若し强ひてさういふことが出來るなら）一人の基督があるばかりだらう。何故ならば基督のみが主義の人ではなかつたから、少くとも主義の人である以上に遙かに多く單

なる人であつたから。實際基督教徒と稱せられる人々の中でも、かの妄信（ファナティカル）的な迫害熱から解放されて、人類の大道を横道せずに進んだ人々は、實に基督教以上に基督を餘計持つた人達だつた。云ひかへれば、信者であるよりも多く人である人達であつた。何れの場合にも功過はあるだらう。或は何れの場合にも功過は相半ばするかも知れない。或は更に信者（主義者）たる時功多く、單に人たる時過ちが多いといふことになるかも知れない。然しながら私は後者を擇ぶ。

ふとした折りに總ての人の心に思ひもかけず顏を出す恐るべき惡魔よ。

○

和服を着て謁見をしろと法王廳から云つて來た。私達は永い間の交渉の結果が、かゝる大詰めになつたのに腹を立てた。ロッシ伯が色々と云ひなすにもかゝはらず、私はヴァティカン宮に出かけて行つて、好んで謁見を斷つてしまつた。和服を着るのを私達は恥ぢた譯ではない。和服を着て見參しろと云つた彼等の心を私達は恥ぢたのだ。

○

とう〳〵羅馬を去る時が來た。私は又しても壬生馬の心を思ひやつた。荷造りなどには無頓着な私のことゝて、同樣に無頓着な壬生馬も少し氣をもんで見えた。旅のプログラムも容易には出來なかつた。壬生馬はマッツォニを相手に旅費を便利な旅行用の小切手にすることや、借りたものを返したり、貸したものを受け取つたりする仕事に忙しかつた。而してその暇には大使館に行つて、そこに預けてあるトランクの整理などをした。その中からは一

別以來彼が描きためて置いた幾冊ものスケッチ帳が出て來たりした。そこには彼の心の旅路を髣髴するやうなものがあつた。藤村氏や漱石氏の作品などが、思ひ設けぬ旅客のやうに紙の堆積の中から現はれたりなどした。

羅馬の秋は今が闌はだ。

さらばよ羅馬よ。

〇

羅馬の名高い暑さも過ぎ去つては、却つて名殘惜しさの種となつて、朝夕は手足が冷え〳〵する位十分に秋が來た十月の末だつた、私達がこの永遠の都を去つて北伊太利の旅に上つたのは。葡萄の實は白いサファイヤのやうに、橄欖の實は卵形の石榴石のやうに熟してゐる頃だつた。

晝近い停車場の中は雜鬧を極めてゐた。伊太利特有な隱し立てのない――誇張されてさへ見える――表情が、總ての人の顏や手に描き出されて、私のやうな異邦人には演伎中の舞臺の上にあるやうな心地がした。抱擁、握手、接吻、私語、高笑の間を、赤帽が持てるだけの荷物を革紐で身のまはりにつり下げながら右往左往する。それ等の混雜を壓して機關車の響きが停車場をぴり〳〵と震ひ戰かす。

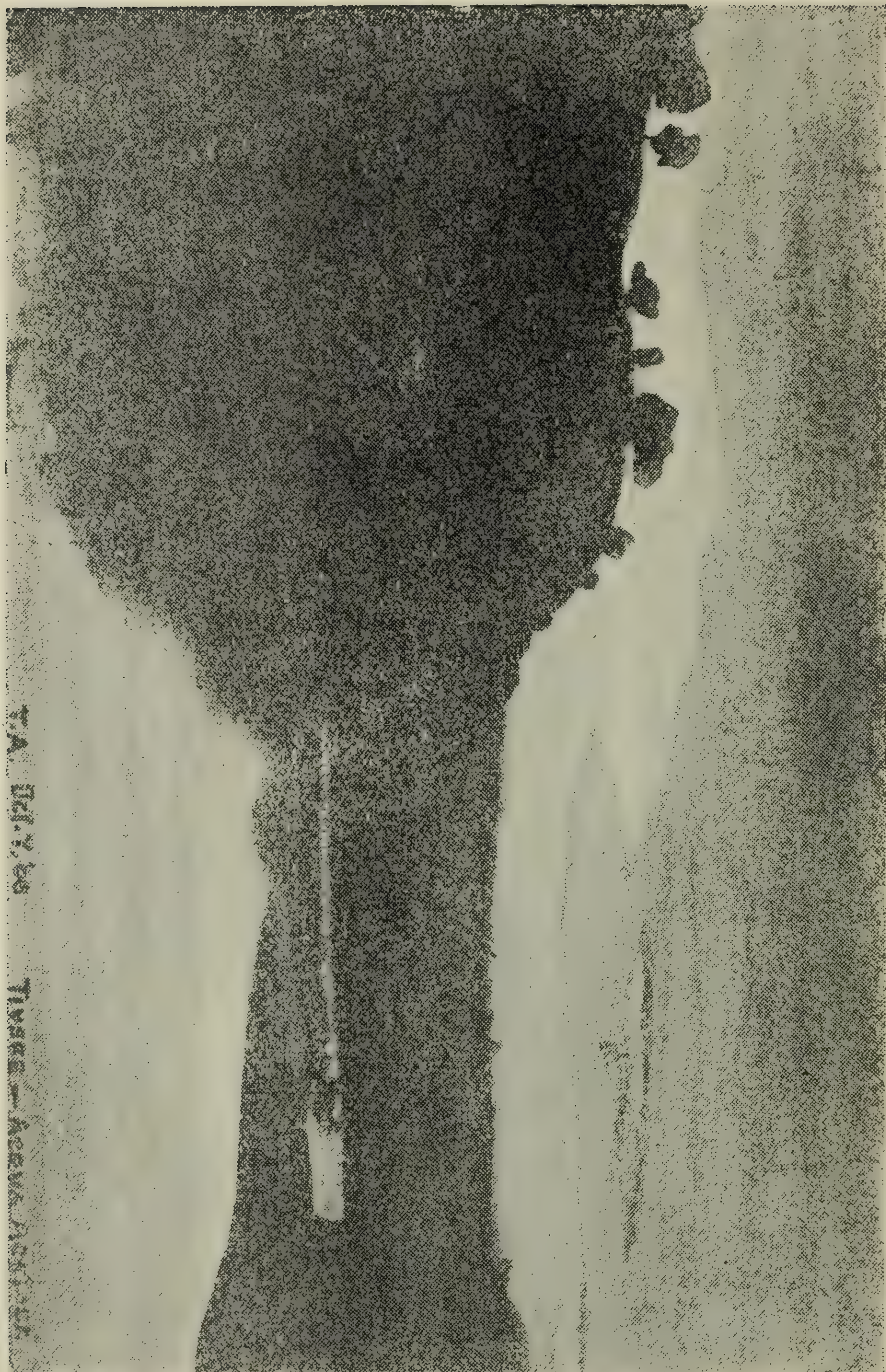
私達はわづかに腰をおろすだけの餘地を見付けて、座を取つた。ロッシ伯や、增井や、マッツォニが送りに來てゐた。壬生馬はマッツォニを松尾々々と呼んでゐた。マッツォニと云ふ本名を日本風に直してくれと自分から註文したのださうだ。彼は「道中御大切」と云ふ日本語を昨日以來諳誦してゐた。彼は剽輕なと思へば悒鬱な、悒鬱なと思へば剽輕な青年の一人だつた。

○

やがて羅馬も松尾も總ての雜鬧も私達の存在からはかけ離れてしまつて、タイバー河に沿うて北行する汽車の窓からは、羅馬の曠野が波立つやうに高低を增して、霜枯れた色も物淋しく、豐滿の相を持つた大草堆も飼料に切り取られて、その一面は斷崖のやうに削げてゐるのを見た。オルテからタイバー河の支流ネラに沿うて汽車が走つた。窓の外はいつの間にか秋雨に濡れそぼつ田園の景色になつてゐた。或る小さな停車場では、赤土の坂路を鷄が足をつまだてゝ、泥によごれまいとして歩いてゐた。みじめにしほたれたその羽根の形まで、この一羽の鷄は私達に親しいものだつた。又或る停車場では雨のために水嵩の增した筧の下で、水車が忙しくめぐつてゐた。そのこつとん〳〵と云ふ音は、私達の心をすぐ生れ故鄕にさらつて行つた。或る踏切の横木の上には小鳥のやうな子供が四五人ならんで腰かけてゐた。一人貴婦人らしい人が菓子の箱を窓から投げてやつた。箱の蓋がぱつと開いて、中から細く切つた色紙と菓子とが花火のやうにこぼれ出た。子供は一度に聲を擧げた。驚喜したその顏とその聲――疾走する汽車はすぐそれ等のものを私達から奪つてしまつたけれども、私達は伊太利にゐるのか、日本にゐるのかを區別する事が出來ない程親しみのある暖かい印象を、その瞬間の光景から受け取つた。都會では人の足は鋪道の上を歩く。田園では人の足は大地の上を歩く。

○

フオリーノで汽車を乘り換へてアッシジに着いたのは四時過ぎだつた。停車場から町まで行くのには電光形の坂路を十五六丁も登らねばならぬ。馬車は山の斜面にある葡萄園や橄欖畑の間を縫つて徐ろに登つて行つた。左



手にはサン・フランシスコの巨刹が故郷のやうに晴れ行く夕暮の空に聳えてゐた。私達の心は他愛もなく時代錯誤と幻覺とに捕へられて行つた。羅馬近郊に比べれば遙かに清潔で、石材よりも木材の割合多く使用された、古雅な家屋の連なりが狹い階段の多い道を挾んで、建つてゐる。そこを私達は靜かに登つて行つた。オテル・レオーネといふ近代的な設備のしてある旅館に足を踏み入れた時、私達の不思議な幻覺は甫めて破れた。

○

私達は旅裝を解く間もなく導者を傭つてすぐ近所のサンタ・キヤラの尼院に行つた。ひつそりと靜まつた町は清淨な鋪石に冷えて、西の空には澄み徹つた淡藍の中に新月がほのかに照らしてゐた。寺は荒削りの大理石で建て上げた初代ゴシックで、殊にロンバルデー型の單純な嚴肅な鐘塔が、すつきりと空間を切つて聳えてゐる樣は例へやうのないしめやかさだつた。表戸をくゞると院內は暗み亙つて、唯窓を通してさしこむ夕暮の光が白壁をおぼろに撫でゝゐるばかりだ。聖クララの教友の遺骨を拜ませるといふので、一つの龕の前に立つて待つてゐると、やがて白障の彼方で蠟燭の火がゆらいで、障子が開かれた。金襴に包まれた白髑髏の側に一人の尼が黑衣を着てうなだれて默つたまゝ立つてゐた。何處かで靜かに聖句を誦讀する聲がする。今の世の中にこんな境地があるかと思ふ程異つた光景だつた。私達は足を爪立てるやうに靜かにして寺を出た。

公園に沿うた道を斜に登つて行くと、ウムブリヤの平野が眼の下に展けて見えた。夕靄が低く立ちこめてゐた。やがて私達は古羅馬時代のアンフロシャターの遺跡に來て、鍵形に曲つた急坂を下るとこの町の堂母なるサン・ルフヒノの前に出た。クララが出家の決心をした時、在家の服裝で最後に詣でたのはこの寺であつたと傳へられてゐる。

彼女はその時十八の世にも麗しい乙女だつた。その日は永遠の戀人なる基督に嫁ぐ心持で、裝ひを凝らして座席についた。殊にその黄金色の髪は光のやうに暗い堂内を輝かした。數多き處女の中にもクララだけが處女のやうに會衆の注意を牽いた。儀式の一つとして僧正は教壇の前に集まる處女の一人々々に花束を渡した。クララだけは顏を伏せたまゝ動かなかつた。僧正はフランシス聖者からクララの兼ての望みを聞いてゐたから、この樣を見ると胸をつかれた。嫁ぐために父母の家の閾を出る處女の心を僧正はこの處女に感じた。而して自ら壇を下つて恭しく花束をクララの處まで持つて行つてやつた。クララは激しく泣いた。その夜クララは家を逃れてポルチウンクラにゐるフランシス聖者の許に走つた。暗い夜中の路上には、聖者から遣はされた弟子たちが炬火を持つて迎へに出てゐる。

私は眼を擧げて堂母の正面を見た。紋章を浮彫りにした石を處々に挾んだゞけの單純な面には三箇所に美しい薔薇窓が小鳥の眼のやうに鏤められてゐた。がらんとした石敷の廣場にはデュプレの作なるフランシス聖者の銅像が淋しく立つてゐた。參詣者の懷中をあてにする乞食ももうゐなかつた。

クララの住んだ家はこの堂母から手のとゞく程の近さにあつたのだ。この夕闇の中から一向の熱意に輝く美しい眼の少女が現はれ出はしないか。私達の心は時といふ墻壁を乘り越してこんな事をすら考へてゐた。

○

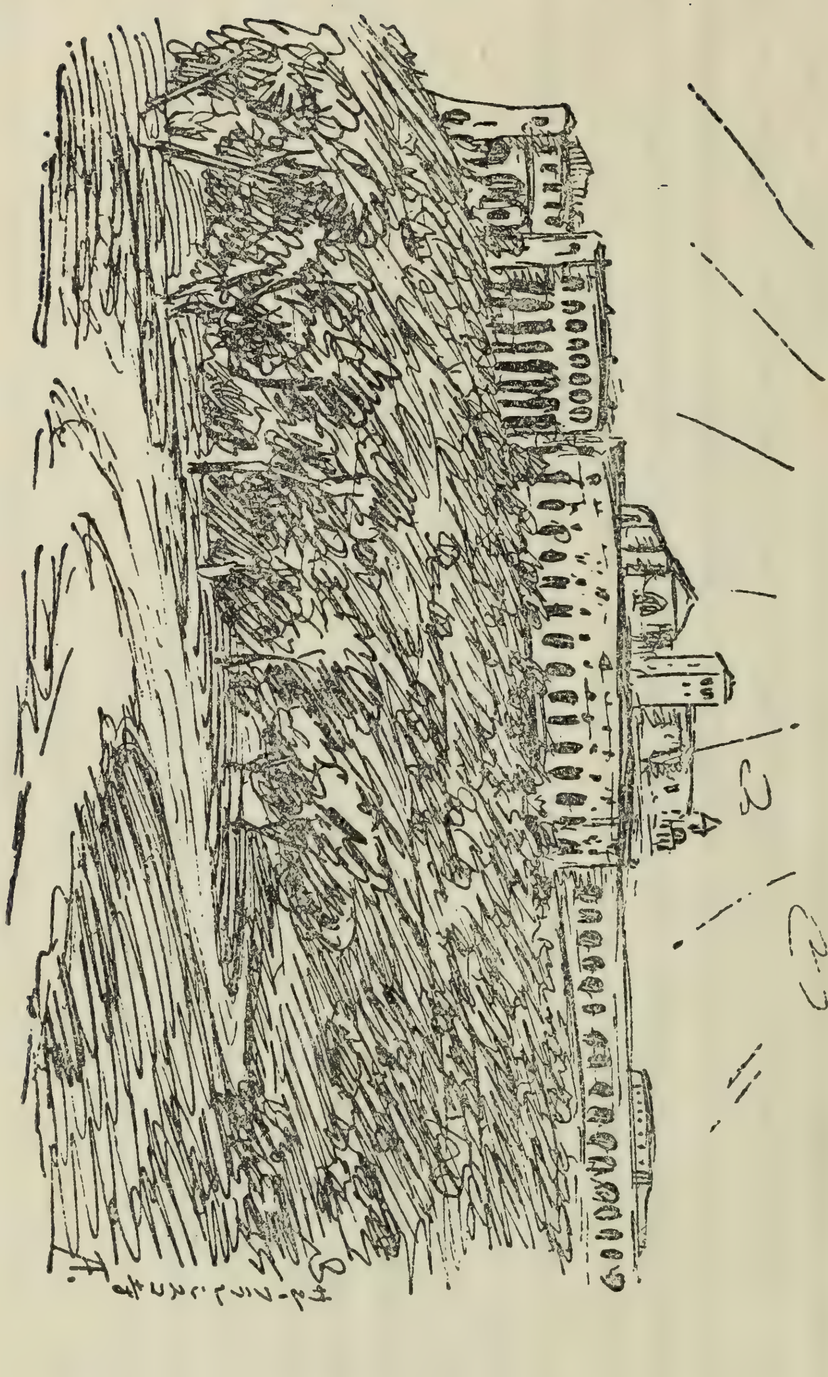
歸路テンピオ・ディ・ミネルバの前を通つた時、その正面を飾るコリンス風の柱列を見た。それはこの小さな町に於ける唯一の美しい古代羅馬の遺物と云つていゝ。ゲーテがこの町を見舞つた時、その鑑賞の眼を惜しまなかつたのはこの柱列だけで、他の遺蹟は見向きもしなかつたと傳へられてゐる。私はゲーテの心の峻烈さをこの一事

に見窮める事が出來る。それにしても彼と私とは、天稟の大小を問題外においても、何といふ相違だらう。ゲーテにはゲーテの行く道があり、私には私の行く道のあるのを私は心強く思つた。私は暗黑時代といはれた中世紀の中に、一つの力強い文化の萌芽の嚴存したのを知つてゐる。而してそれを私の心は尊み慈む。ゲーテの大名も私のこの心をどうする事も出來ないのだ。私は母の膝を雀躍してふみならす嬰兒のやうに、力強く凸凹の多いこのなつかしい町の鋪石をふんで旅宿に歸つた。

○

窓を押せば曉の光は天に滿ちてゐるけれども、眼の下の平野は朝霧に閉ぢられて紗の海のやうだ。たゞサンタ・マリヤ・デリィ・アンヂェリの尖塔だけが霞の上に現はれて、その屋頂の金の十字架が燦爛と輝くのが見渡された。十月四日の朝、フランシス聖者の遺骸をポルチウンクラからこの町に運んだその時の光景もこの通りであつたらう。

サバチエのいふ所によれば、フランシス在世當時のアッシジは、今とさしたる相違がない。人口は五千五百に足りない。スバスノと云ふ岡の額に巣くつた町で、海を拔く事千三百五十フヒート。後にはスビヤノ山の雄々しい頂きがペルヂアからボレトに至るウムブリヤの平野を踏まへて聳えてゐる。町は足爪立てゝ面前の眺めを貪りたいと屋根から屋根に延び上つた家並から成り立つてゐる。大抵の家は五六の小部屋を持つ簡素なもので、土地の名門といはれたフランシスの家も、恐らくそれらの一つと大した相違はなかつたらうとサバチエは考へてゐる。遠くから見るとサン・フランシスコのバジリカはこの小じんまりとした美しい町の半分を占領するかと思はれる程、大きく、重く、嚴めしく立つてゐる。道路や家屋に木材が割合に多く使用されてゐる事、淸潔な事、家壁を



なす石の色の樂しい薔薇色、無下に卑しからぬ路傍のマドンナやキリストの像。陶器を用ゐた裝飾、松、サイプラス、橄欖、葡萄、夥しい野花、總てを包み總てを照らす素晴らしい澄んだ青い空……。

○

この朝私達は先づサン・フランシスコの巨刹に詣つた。私は今こゝにその巨細を語るべき餘白を持たない。又何といつてその寺の與へる深い印象を表現していゝか判らない。この寺は聖者の示寂後二年（一二二八）、法王グレゴリ第九世がその聖別式を行つたのを記念して建てられた物だから、聖者の眞を語るべきものは却つてボルチウンクラや、クララ以下の尼僧の住んだダミアノ尼院にあるのだが、時代といふものは不思議なものだ。この伽藍は何と云つてもフランシスの肖像だ。それは積み重ねられた上下二つの寺院から成つてゐる。而して純粹のバジリカ型だ。何と云ふ重さだらう。而して何と云ふ純一さだらう。將棋の駒のやうな形をした東面には、大きな薔薇窓が一つと、天をさして何處までも昇らうとする鐘塔とがあるばかりだ。その單純な諧樂は先づ視る者を嚴肅な雰圍氣に誘ひ入れる。下の寺院に通ふ入口を這入ると、どんな澄み渡つた秋の日の光をも遮りとめる薄暗が立ち籠めてゐて、聖者の殯葬場の常燈明の光が遙の向うに小さく黃ろく見える許りだ。數多い圓天井を支へる柱の列は大森林の樹幹の樣に立ち連なつてゐる。その柱と圓天井の稜縁にかけて描かれた丹念な模樣は、神祕的な華やかさを靜かに看者の眼に送る。壁面にはゴシック藝術の源頭となつたチマブエ、ヂオット、ヂオチノなどの心血をそゝいだ壁畫が、八百年に近い古みを帶びて香煙の間に隱見する。フランシス派の三誓願を示す「貧窮」「清淨」「歸依」の有名な三幅對も亦こゝにある。ヂオットが單純な裝飾畫から超脫して繪畫に生命と動作を與へようとした努力が、誇張のない切羽つまつた誠實さを以て表はされてゐる。それよりも更に複雜混亂した私達の

心を不思議な力となつて脅かすものは、かの本原の素樸を如何なる修飾によつても傷つけなかつたチマブエの諸作である。チマブエは繪筆によつてフランシスを生かしたとさへ思はれる。

然しから備忘的に細部を記述する事が何の足しにならう。サイモンズはその伊太利紀行でこの寺に詣つた事を書いてゐる。彼も私達のやうに薄闇を通つて殯葬場の近くに來た。そこには幾人かの町の人や村の人がうづくまつて祈りをあげてゐるのを見た。彼は感慨に餘つて「素樸單純な心を惠まれた人々よ。その心をいつまでも破壞しないでくれ。而してお前方のその心が縱令ば一場の夢に過ぎなからうとも、その夢から覺めるよりは遙かにいいのだと云つてゐる。サイモンズはこの寺を訪れた人の心持を素直に告白してゐると云つていゝ。

○

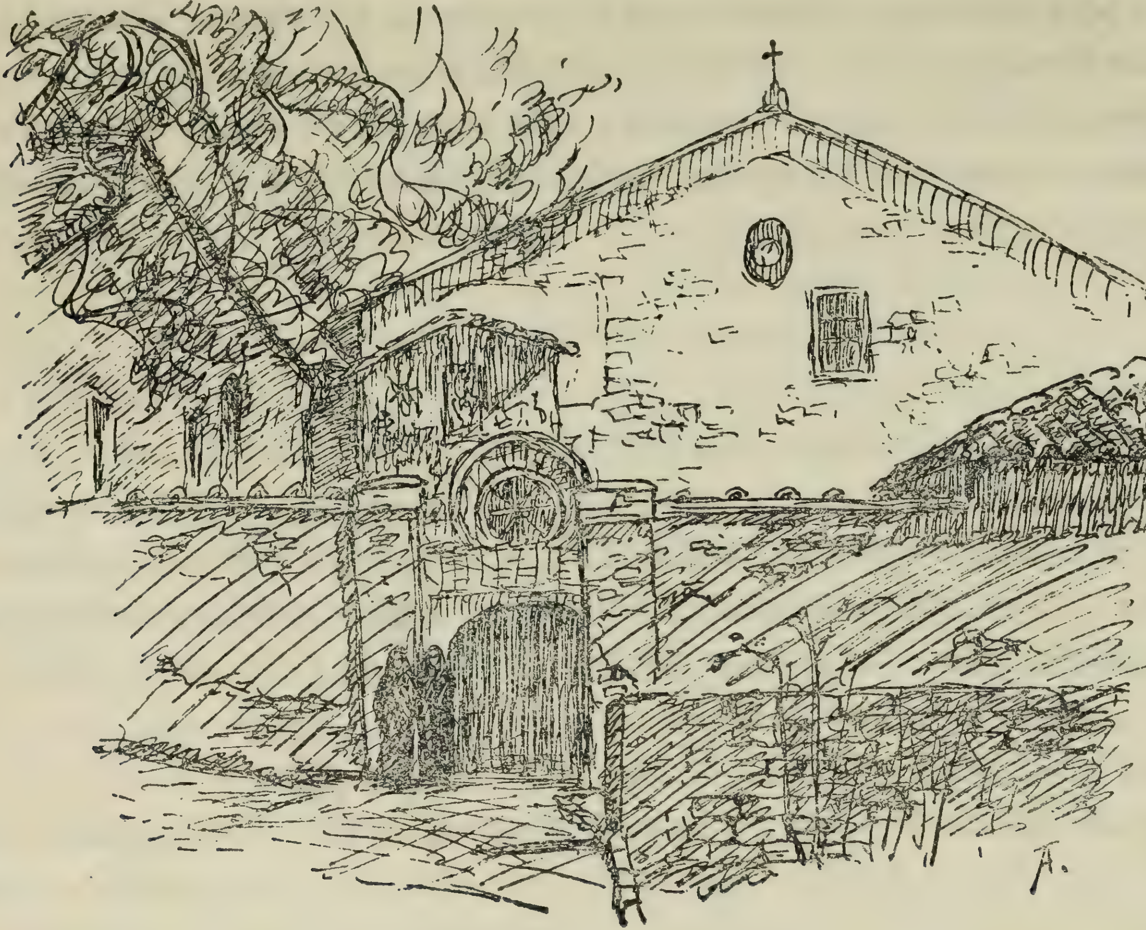
下の寺院の暗み渡つて、怪奇とさへ云へさうな神祕を籠めてゐるのに反して、上の寺院は明快そのものだ。高い二棟作りの天井は空氣を輕く思はせる。一側の窓から這入る光線は堂内の半面を幾條かの明暗の縞にする。割合に廣い壁面にはヂオットとその弟子達が描いた聖者の生涯を語る二十八の壁畫がある。畫は痛く損じてゐる。而して寺院全體の感じは明快ではあるが、何となく薄弱で貧相だ。下の寺院と上の寺院との相違の中にはダンテの「地獄篇」と「天國篇」とを較べて見た時のやうな憾みがある。それは然し比較の上の話だ。上下二寺院の構造設計は聖者の心の不思議な象徴といつていゝ。その心の一隅には年少の時代の放亂な生活をそのまゝ、奇蹟のやうに淨化した深刻な懺悔のうめき聲、他の一隅には野の百合の如く、あからさまな、こだはりのない、正しい愛の貪慾だ。

○

寺院に續いて岡の突角に、長く建ち列なつた僧院の跡がある。その廊下にたゝずんで下を見るとウムブリヤの平原は唯一目(ひとめ)だ。平原の霞はいつの間にか散つて、空氣は白く、日光は黄に見える。テッシノ河の水は秋に痩(や)せて、白い石の川原が綠野の間にゆる〳〵曲りくねつて横たはつてゐる。描いたやうな街道も眞白な絲となつて、蜘蛛手(くもで)に走つてゐる。點々と見え亙る農家の屋根や羊の柵などを數へて視力を遠ざけて行くと、モンテ・ファルコの連山まで何と云ふ大きな豐(ゆたか)な野の表情だらう。白雲の影を折々地に落して秋の日は惠深(めぐみぶか)い暖かな光を隈なく送つてよこした。この廣野を照らす日の光は又廊下に立つ私達をも照らした。廊下の壁や柱には、こゝを訪れた人の名などが彫(ほ)つてあつた。こゝは今伊太利の小學教師の子弟を教育する學校になつてゐる。黒い羅紗服をつけた無邪氣な少年が來て會食する食堂もあつた。白いテーブルかけの上には白い皿とパンとが置かれてゐた。秋の日は靜かにそこにも射(さ)しこんでゐた。

○

晝食後は驢馬に跨がつてセバシオ山に登つた。冷え〳〵する程の空氣は山の斜面にある日の光に暖められて、橄欖園の樹を動かし搖いだ。その度毎に銀のやうな裏葉が、黒ずんだその實と共にきら〳〵と輝いた。道で出遇ふ農民から丁寧な挨拶を受けながら、やがて私達はサンタ・マリヤ・デル・カセリに着いた。大きな針葉樹濶葉樹が鬱蒼と茂つた山峽に、乞食小屋のやうにこの僧院は建てられてあつた。フランシス聖者が時折り來ては默想に耽り、色々な奇蹟をも行つたと傳へられるのはこゝだ。聖者の苦行を學ばうと參籠(さんろう)する僧が四人居た。その外には



聖ダミアノ寺

寺男が二人ゐるばかりだ。私は閑靜なその境界を愛しはしたが、貧しさゝへもわざとらしい所謂名所風な心持を少しく厭つた。歸路には聖者によつて建立されて、クララを教長と仰ぐ尼院になつたサン・ダミアノ寺院を訪れた。何といふ素樸さ、何といふ清淨さ、胸毛に首を埋めた鳩のやうにこの寺は山の斜面に巣くつてゐた。

○

夜は同宿の英人と三人で公園の方まで散歩した。月は山に近く、蟲が鳴いてゐた。英人は快活に「もろ〳〵の天は神の榮光をあらはし、蒼穹はその御手のわざを示す。この日ことばをかの日につたへ、この夜知識をかの夜に送る」と朗誦した。遙かに西の方にはペルッヂャの町の灯がさやかに見やられた。「岡の上の市は隱れず」と英人は又聖書から句をひいてしやれた。

フランシスが一年の間囚はれの身になつてゐたのはあの町だ。この若い武士は他の捕虜のやうに號泣を事としなかつた。彼は大望に燃えた。「他年一日私が全世界に崇められるのを君達は見るだらう」と彼は豪語した。人々は彼を狂者ではないかと思つた。そのペルッヂャの町の灯がさやかに遠く見やられた。

○

戸を敲かれて眠を覺まし、蠟燭の灯で時計を見ると五時半だつた。曉の鐘が今日も深く立ち籠めた霧の中で渦まき鳴つた。珍らしいのは早く朝立ちする旅の情景だ。夜でもないのに灯して、顏を洗はうとすれば、瓶の水は痛く冷えてゐる。衣を更へ、荷造りなどする二人の影は、壁に不思議な幻を描く。食堂に降りて行くと、昨日から知合ひになつた英人がたつた一人、薄寒く食卓についてゐた。新しいのは惡いからといつて、一昨日あたり燒

いたかと思はれるパンを分けてくれた。それに香の高い蜂蜜を添へてそこ〳〵に朝餉を終つた。

それは馬の鼻息が白んで見える程冷える朝だつた。馬車は勢のいゝ乾いた音をたてゝ坂路を下つて行つた。同乘の英人の頬は殊に赤くなつて、過眼の光景を一つも見遁すまいといふやうに、活々と眼を四方にくばつた。「あすこに行くあの荷を頭に載せた婆さんは、私達よりも先きに眼を覺ましたに相違ない」。「この園の花を見給へ、何といふ美しさだ」。「是れが『アッシジの小さき花』だ」。「豚、豚、出て來る〳〵一匹、三匹、四匹」。「あの少女の追つて行く牝牛の睡さうな眼付よ」。さう云ふ風に、彼は何ものにも感興の聲を擧げた。

○

馬車は軈て停車場の傍にあるサンタ・マリヤ・アンヂェリに着いた。霧を分けて尖塔の十字架を照らす日の影が美しいなどと云ひ合ひながら寺内に這入つた。この夙さに巡禮は寺の内にも外にも群をなして徘徊してゐた。諸國を經めぐつて來たらしい旅やつれのしたその顏は、どれも素樸と誠實と迷信と庸愚との不思議な混淆を思はせた。その中には然し鋭敏な貪慳な顏もあつた。又精進に磨かれた尊い顏もあつた。

寺は十六世紀に三人の建築家によつてつぎ〳〵に建てられたもので、私には何の感興も起させぬ樣式だつた。唯その中心となつてゐるポルチウンクラこそは、フランシス聖者の汗と涙の結晶と云つていゝ。フランシスは神の宮を再興せよとの默示を受けて以來、力を盡して所在の廢寺を復興した。聖者の母が祈願を籠めて聖者を生んだと稱せられるこのポルチウンクラも、その一つだ。フランシスは不思議にこの小院に心が牽かれた。彼はその傍に庵室を結んで住んだ。その仲間も亦こゝに集まつた。この小さな地點から基督滅後最も基督に近い愛の泉が滾々として湧き出したのだ。

○

サバチエは第十三世紀の伊太利を二十代の青年に比した。「思ひ切つた放蕩、思ひ切つた淨念、盲目のやうな野心。本能から生れた善行、亂動而して理想。「醜小以外の惡は總てそこにあつた。而して中庸以外の善は總てそこにあつた」と。而してフランシスは實にこの時代の鬱勃たる若々しさの體現であつた。彼の生涯は華美と放逸と驕慢とを以てその幕を開いた。彼は生來の放膽と、自家の富と勢力とを利用してアッシジに於ける風流な青年の中心となつた。彼は彼の行く道に於ては誰にも負けまいとした。

然し偉大にして眞實なる心の悲しさよ。而して尊さよ。彼は遂に虚僞によつて心を生き畢せる事が出來なかつた。致命的な大病に罹つた後彼の眼の前で世界は逆行した。彼の心の中では絶大な價値顚倒が行はれた。清淨、貧窮、歸依。總てを捨てゝ彼はこの三つのものゝ體得者となつた。彼は中古の騎士が貴女を渇仰したやうに、基督滅後寡婦となつてゐた貧に事へた。彼の告白の條々に云ふ、

一、我が神わが總て。
二、我が衷に積まれたる祝福を思ふにあらゆる悲哀あらゆる苦痛親しむに堪へたり。
三、神の愛は人をして愛せしめずば已まず。
四、清からんとするものは世を捨てざるべからず。
五、神階を踏まんもの人衢にあるべけんや。
六、我を義とするは神の責むる所となるなり。我を責むるは神の義とする所となるなり。
七、試練を忍ぶは德を立つる道なり。

八、惡人に忠ならざるものは善人と謂ふべからず。

九、我「讃馬里亞」と云へば大空伏拜し、天使歡喜し、黃地榮樂し、惡鬼駭走すべし。

フランシス聖者の四十四年の一生は不純から純一に、純一から神性に。煩悶から信念に、信念から信仰に。犧牲から歡喜に、歡喜から喜捨に。惡から善に、善から美にまでの精進の一路であつた。腐敗に腐敗を重ねた羅馬法王廳下の惡教も、公衆の墮落と共に所在に起つた遁世厭人の悲觀教も等しく影をひそめた。一道の太陽の光線はよく四隅の闇を追ひ拂ふ。ポルチウンクラの周圍に藁小屋を建て連ねて住んだ聖者とその伴侶とは、勤勉と、快活と、無邪氣との別名だつた。夜があけると、彼等の或るものは癩病院に行つてその世話を見、或るものは町に出て狂人と罵られながら、心靈の糧と殘餉との物々交換をし、或るものはリヴオ・トルトの岩窟に行つて默想と祈禱とに沒頭した。而して夕方には銘々が何等かの收穫を贏ち得てポルチウンクラにいそ〳〵と歸つて來た。而して Mensa Domini（神の食卓）の周圍に集まつて質素な夕餉を涙にまで感謝して分ち味はつた。聖者は屢〻遁世の誘惑にかゝつたけれども、遂に奉事の生涯を改めなかつた。彼の傳道の足跡は、若し傳說を許すなら、ペルシャに迄及んだ。而して四十四年間の內發的な偉大な靈性の建設を成就して、千二百二十六年の十月二日の陽が山の西に沈み去つた時、苦痛なく、煩悶なく、靜かにポルチウンクラの傍らで神の懷ろに歸つた。敎友達がまだ生命が還る事もありはしないかと、その顏を見守つてゐる時、幾百の雲雀が庵室の藁屋根に群集まつて歌つたと傳へられてゐる。

○

私達はあまりに當面の生活を肯定する事に慣れ過ぎてゐる。視角をかへて物を見直す餘裕を持つてゐない。

第十三世紀の伊太利はフランシスカンの出現を以て、或は極端な反教的運動とし、或は時代逆行とし、或は見え透いた僞善の群とも罵つたらう。然し時間は石から金を擇り分ける。獨斷を個性に代へ、理性の武具に直觀の强みを與へ、社會生活に根本的な一つの解釋を寄與して歴史の進運に大きな一轉歩を促がした事を誰が拒み得よう。小さなアッシジの町、その一端にある小龕ポルチウンクラ、これこそは歴史を動かす槓杆の尊い支點の一つであるのだ。アッシジ、聖フランシス、聖クララ、さう數へて來ると、今でも美しい印象が頭に浮ぶ。私達の生涯がこの古蹟訪問の一事によつて變化に出遇ふ事が何時かは必ずあるだらうに。

○

寺を出ると平野の霧は跡形もなく晴れて、何處までも人の心を天心に吸ひ上げて行く。瑠璃色の空は山から山の果てに擴がつてゐた。ヴェネチヤで美しい月を見るだらうと語り合ひながら、私達は列車に投じた。汽車は肥沃な平和なウムブリヤの平野をヴェネチヤに向けて走り出した。

（一九一八年九月、讀賣新聞所載）

——第二卷　了——

昭和四年四月十五日印刷
昭和四年五月一日發行



非賣品

監輯者　有島生馬
　　　　里見弴
發行者　佐藤義亮

印刷所　富士印刷株式會社
製本所　植木製本所

發行所　東京市牛込區矢來町
（振替東京七九七七〇）
新潮社
電話牛込・八〇六番・八〇八番
八〇五番・八〇七番・八〇九番